上野原市埋蔵文化財調査報告書　第７集

狐原遺跡

町道造成等に伴う狐原Ⅰ遺跡、狐原Ⅱ遺跡における埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１５

上野原市教育委員会

狐原遺跡遠景　手前は相模川（桂川）

第Ⅰ次調査の航空写真

巻頭図版 2

縄文時代中期後半の石柱・石壇（6 号住居址）

古墳時代後期の竪穴住居址（25 号住居址）

序

上野原市は山梨県最東端に位置する自然豊かなまちです。平成 17 年に上野原町と秋山村が合併して誕生しましたが、歴史は古く、関東と中部地方の接点にあって昔から様々な地域の人々が交流し発展してきました。文化財も数多く残されています。

市教育委員会では文化財保護法に基づき、工事によって失われる埋蔵文化財を記録保存して後世に永く伝えるための遺跡発掘調査を実施しております。平成 6 年度から 8 年度には旧上野原町教育委員会が町道等造成工事に伴う発掘調査を狐原遺跡で実施しましたが、このたび、その成果をまとめた報告書が刊行の運びとなりました。

狐原遺跡は桂川を望む河岸段丘にあり、調査の結果、縄文時代から平安時代の複合遺跡が良好な状態で保存されていることが分かりました。石の祭壇を備えた縄文時代の竪穴住居や古代の倉庫と考えられる総柱建物など、時代によって様々な特徴を備えた建物の跡が多数見つかりました。遺物は土器・石器・金属製品など多種多様で、とくに平安時代の鉄製焼印は県内でも類例が少なく、その用途の解明は上野原市や山梨県の歴史を知るうえでも重要です。今は畑や野原が広がる静かな場所ですが、往時は多くの人々が集い、賑やかだったことと思います。

本書が歴史の証として多くの方々に活用され、埋蔵文化財や郷土史への理解が深まることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査や整理作業にあたってご指導、ご協力いただいた関係者、関係機関ならびに調査や整理にご参加いただいた地元の方々に厚くお礼申し上げます。

平成 27 年 3 月

上野原市教育委員会

教育長　和 田 正 樹

例　言

1．本書は山梨県上野原市新田に位置する狐原Ⅰ遺跡及び狐原Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。
2．本書では遺跡名を狐原（きつねはら）遺跡と総称する。
3．発掘調査は平成 6 年度から平成 8 年度に町道等造成工事に伴う事前調査として実施した。
4．発掘調査は旧上野原町教育委員会が実施した。出土品等の整理及び報告書作成は平成 17 年 2 月の町村合併まで旧上野原町教育委員会、以降は上野原市教育委員会が実施した。組織は次頁に記した。
5．発掘・整理作業の一部及び出土遺物の分析を次の専門機関に委託し、諸氏の協力をいただいた。
基準杭測量（上條測量株式会社）、遺跡・遺構の航空写真測量（アジア航測株式会社）、金属製品の保存処理（公益財団法人山梨文化財研究所）、小型石器の実測及びトレース図作成（株式会社アルカ）、出土遺物の自然科学分析（パリノ・サーヴェイ株式会社）、動物遺体の同定分析（山梨県立博物館　植月学）、土器に残された虫圧痕の同定分析（金城学院大学　森勇一）
6．本書の執筆・編集は小西直樹（社会教育担当）が行った。
7．発掘調査から本書作成で次の機関、諸氏のご教示・ご協力を賜った。記して感謝申し上げます。
山梨県教育委員会学術文化財課、山梨県埋蔵文化財センター、山梨県立博物館、古代甲斐国官衙研究会、斉藤孝正、平川　南、森　勇一、河野喜映、山本暉久、田尾正敏、鶴間正昭、末木　健、坂本美夫、小野正文、奈良泰史、杉本正文、保坂康夫、中山誠二、森原明廣、植月　学、平野　修、宮沢公雄、杉本悠樹、小俣　博（敬称略・順不同）
8．遺構の番号や名称は報告書の編集段階で見直し、多くを変更した。新旧の対照は本文中に記した。
9．調査成果はこれまで各種刊行物で報告されたが、本書と記述が異なれば本書で最終報告とする。
10．本書にかかわる出土品・記録図面等は、一括して上野原市教育委員会が保管している。

凡　例

1．本書に転載した地図は次のとおり。
第 1 図：平成 16 年、上野原市が国土地理院の承認を受けて調整した 2 万 5 千分の 1 地形図
第 2 図：平成 18 年、上野原市が国土地理院の承認を受けて調整した 2 千 5 百分の 1 地形図
2．遺構図版
（1）遺構の縮尺は 1/60、カマド 1/30 を基本とし、図版スケールに明記した。
（2）遺構図の「240」等の数値は標高、ピットの「－ 30」等の数値は確認面（床面）からの深さを示す。
3．遺物図版
（1）遺物の縮尺は図版スケールに明記した。
（2）土器の実測図には 4 分割の方法を用い、左半面に外面、右半面に内面及び断面形を表わした。中軸線が一点鎖線の場合は、180°回転させて復元実測したことを示している。
（3）土師器実測図の矢印は器面の砂粒の移動方向を示し、整形工具の使用方向を推定した。
（4）須恵器実測図の断面は黒色に塗りつぶした。
4．表
（1）表中の法量で（　）内は現存値を示す。
（2）色調の判別には、「新版標準土色帖」（日本色彩研究所色票監修　1988）を利用した。

調査組織

発掘調査

事務局　教育長　遠藤諦三　平成 6 年 10 月～平成 10 年 10 月
社会教育課長　中島修身　平成 7 年 3 月まで
久島　啓　平成 7 年 4 月～平成 8 年 9 月
水越辰巳　平成 8 年 10 月～平成 11 年 3 月
社会教育係長　片伊木卓男　平成 8 年 9 月まで
高橋武久　平成 8 年 10 月～平成 12 年 3 月（課長補佐）
担当者　社会教育係　小西直樹
参加者　会津　一、荒井　泉、安藤宇平、安藤光子、安藤猛夫、臼井正文、長田貞夫、長田伍一、落合金男、小俣仁男、小俣熊雄、小俣邦子、小俣時代、小俣文子、片伊木まち子、加藤文宣、亀本二良、上條笑子、上条良作、木口一男、古根村典子、志村昭二、新福百合子、杉本征男、杉本富子、杉本良江、鈴木義二、関口和男、太葉田孝一、築地文博、出羽和夫、富田　寔、富山敬子、中村克己、畠山朝雄、降矢　透、水越　透、山口美代子、山口琢美、渡辺　博（以上一般参加）、池ノ谷基樹、梅津浩平、大居敬子、大貫久美子、岡野由希、奥井雅貴、株本幸枝、神林啓介、北野左近、北　美幸、木寺未恵、工藤由貴子、高木伸明、中井優里、久野洋平、船場昌子、皆川　亮、宮武　亨（以上都留文科大学考古学研究会）

出土品等整理及び報告書作成

事務局　教育長　水上和男　平成 10 年 10 月～平成 12 年 10 月
水越偉成　平成 12 年 10 月～平成 17 年 3 月
網野清治　平成 17 年 2 月～平成 21 年 3 月
大神田光司　平成 21 年 6 月～平成 23 年 3 月
酒井信俊　平成 23 年 3 月～平成 26 年 6 月
和田正樹　平成 26 年 7 月～現職
社会教育課長（平成 20 年 4 月～平成 25 年 3 月は教育学習課長）
臼井和文　平成 12 年 4 月～平成 16 年 3 月
酒井信俊　平成 16 年 4 月～平成 17 年 2 月
小笠原徳喜　平成 17 年 2 月～平成 21 年 3 月
小佐野進　平成 21 年 4 月～平成 23 年 3 月
橋本茂治　平成 23 年 4 月～平成 25 年 3 月
安留俊介　平成 25 年 4 月～平成 26 年 3 月
上原千歳　平成 26 年 4 月～現職
社会教育担当リーダー（平成 16 年 3 月まで社会教育係長）
梅原秀雄　平成 12 年 4 月～平成 15 年 3 月
織田隆義　平成 15 年 4 月～平成 18 年 3 月
尾形　篤　平成 18 年 4 月～平成 20 年 3 月
尾形公芳　平成 20 年 4 月～平成 21 年 3 月
久島茂夫　平成 21 年 4 月～平成 23 年 3 月
佐藤利彦　平成 23 年 4 月～平成 26 年 3 月
小俣里美　平成 26 年 4 月～現職
担当者　社会教育担当（平成 16 年 3 月まで社会教育係）小西直樹
文化財主事　早勢加菜　平成 18 年 4 月～平成 21 年 3 月
参加者　古根村典子、小俣美鈴、上條文子、権藤みどり、築地文博、冨岡ます美、和智瑞江

目　次

序
例言
凡例
調査組織

第Ⅰ章　遺跡の位置と周辺の環境 …… 1
　第１節　遺跡の位置 …… 1
　第２節　周辺の遺跡 …… 1
第Ⅱ章　調査の経緯 …… 3
　第１節　調査に至る経緯と経過 …… 3
　第２節　調査の方法 …… 6
　第３節　遺跡の層序 …… 6
　第４節　試掘調査 …… 8
第Ⅲ章　調査の成果 …… 11
　第１節　縄文時代 …… 11
　（１）　竪穴住居址 …… 11
　（２）　敷石住居址 …… 59
　（３）　集石 …… 64
　（４）　土坑 …… 73
　（５）　焼土址 …… 102
　（６）　ピット群 …… 102
　（７）　屋外埋設土器 …… 102
　（８）　遺構外出土遺物 …… 106
　第２節　弥生時代後期から古墳時代前期 …… 141
　第３節　古墳時代後期から奈良・平安時代 …… 147
　（１）　竪穴住居址 …… 147
　（２）　掘立柱建物址 …… 230
　（３）　ピット …… 243
　（４）　土坑 …… 243
　（５）　竪穴状遺構 …… 259
　（６）　焼土址 …… 259
　（７）　土器集中部 …… 259
　（８）　硬化面 …… 259
　（９）　遺構外出土遺物 …… 262
第Ⅳ章　まとめ …… 292
付編１　狐原遺跡における自然科学分析 …… 302
付編２　狐原遺跡から出土した動物遺体 …… 318

挿図目次

第 1 図　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 2
第 2 図　遺跡範囲と調査区の位置 …… 4
第 3 図　調査区配置図 …… 5
第 4 図　基本土層図 …… 7
第 5 図　試掘坑配置図 …… 8
第 6 図　縄文時代遺構分布図 …… 10
第 7 図　5 号住居址、炉 …… 13
第 8 図　5 号住居址遺物分布図、出土遺物（1） …… 14
第 9 図　5 号住居址出土遺物（2） …… 15
第 10 図　6 号住居址 …… 16
第 11 図　6 号住居址　石柱・石壇・炉、埋甕 …… 17
第 12 図　6 号住居址遺物分布図、出土遺物（1） …… 18
第 13 図　6 号住居址出土遺物（2） …… 19
第 14 図　6 号住居址出土遺物（3） …… 20
第 15 図　6 号住居址出土遺物（4） …… 21
第 16 図　6 号住居址出土遺物（5） …… 22
第 17 図　6 号住居址出土遺物（6） …… 23
第 18 図　6 号住居址出土遺物（7） …… 24
第 19 図　7 号住居址 …… 26
第 20 図　7 号住居址　炉・埋甕、遺物分布図 …… 27
第 21 図　7 号住居址出土遺物（1） …… 28
第 22 図　7 号住居址出土遺物（2） …… 29
第 23 図　7 号住居址出土遺物（3） …… 30
第 24 図　7 号住居址出土遺物（4） …… 31
第 25 図　8 号住居址、埋甕 …… 33
第 26 図　8 号住居址遺物分布図、出土遺物（1） …… 34
第 27 図　8 号住居址出土遺物（2） …… 35
第 28 図　8 号住居址出土遺物（3） …… 36
第 29 図　8 号住居址出土遺物（4） …… 37
第 30 図　8 号住居址出土遺物（5） …… 38
第 31 図　8 号住居址出土遺物（6） …… 39
第 32 図　9 号住居址・出土遺物、10 号住居址 …… 41
第 33 図　11 号住居址・出土遺物 …… 42
第 34 図　17 号住居址 …… 45
第 35 図　17 号住居址覆土上層の礫 …… 46
第 36 図　17 号住居址炉、立石・埋甕 …… 47
第 37 図　17 号住居址　遺物分布図 …… 48
第 38 図　17 号住居址出土遺物（1） …… 49
第 39 図　17 号住居址出土遺物（2） …… 50
第 40 図　17 号住居址出土遺物（3） …… 51
第 41 図　17 号住居址出土遺物（4） …… 52
第 42 図　17 号住居址出土遺物（5） …… 53
第 43 図　17 号住居址出土遺物（6） …… 54
第 44 図　17 号住居址出土遺物（7） …… 55
第 45 図　17 号住居址出土遺物（8） …… 56
第 46 図　17 号住居址出土遺物（9） …… 57
第 47 図　17 号住居址出土遺物（10） …… 58
第 48 図　敷石住居址・炉 …… 60
第 49 図　敷石住居址炭化材出土状況、掘り方 …… 61
第 50 図　敷石住居址出土遺物（1） …… 62
第 51 図　敷石住居址出土遺物（2） …… 63
第 52 図　3 号集石、4 号集石 …… 74
第 53 図　5 号集石・出土遺物、6 号集石 …… 75
第 54 図　7 号集石 …… 76
第 55 図　8 ～ 10 号集石 …… 77
第 56 図　11 号集石、12 号集石・出土遺物 …… 78
第 57 図　13 号集石、14 号集石・出土遺物、15・16 号集石 …… 79
第 58 図　17 号集石、18 号集石、19 号集石 …… 80
第 59 図　20 号集石・出土遺物、21 号集石、22 号集石 …… 81
第 60 図　23 号集石、24 号集石・出土遺物、25 号集石 …… 82
第 61 図　26 号集石、27 号集石・出土遺物、31・32 号集石 …… 83
第 62 図　33 ～ 35 号集石 …… 84
第 63 図　36・37・39・40 号集石 …… 85
第 64 図　38 号集石 …… 86
第 65 図　41 号集石 …… 87
第 66 図　42 ～ 46 号集石 …… 88
第 67 図　47 号集石・出土遺物 …… 89
第 68 図　48 ～ 50 号集石 …… 90
第 69 図　51 号集石 …… 91
第 70 図　51 号集石　石接合図、出土遺物 …… 92
第 71 図　52 号集石、53 号集石・出土遺物 …… 93
第 72 図　54 号集石・出土遺物 …… 94
第 73 図　56 ～ 58 号集石 …… 95
第 74 図　56 ～ 58 号集石　接合図 …… 96
第 75 図　55 号集石、59 号集石 …… 97
第 76 図　60 号集石、61 号集石 …… 98
第 77 図　64 号集石 …… 99
第 78 図　62 号集石、65 号集石・出土遺物 …… 100
第 79 図　土坑、焼土址 …… 101
第 80 図　ピット群 …… 103
第 81 図　1 号埋設土器 …… 104
第 82 図　2 号埋設土器 …… 105
第 83 図　遺構外出土土器 …… 110
第 84 図　遺構外出土土器 …… 111
第 85 図　遺構外出土土器 …… 112
第 86 図　遺構外出土土器 …… 113
第 87 図　遺構外出土土器 …… 114
第 88 図　遺構外出土土器 …… 115
第 89 図　遺構外出土土器 …… 116

第 90 図　遺構外出土土器 …… 117
第 91 図　遺構外出土土器 …… 118
第 92 図　遺構外出土土器 …… 119
第 93 図　遺構外出土土器 …… 120
第 94 図　遺構外出土土器 …… 121
第 95 図　遺構外出土石器 …… 122
第 96 図　遺構外出土石器 …… 123
第 97 図　遺構外出土石器 …… 124
第 98 図　遺構外出土石器 …… 125
第 99 図　遺構外出土石器 …… 126
第 100 図　遺構外出土石器 …… 127
第 101 図　遺構外出土石器 …… 128
第 102 図　遺構外出土石器 …… 129
第 103 図　遺構外出土石器 …… 130
第 104 図　遺構外出土石器 …… 131
第 105 図　遺構外出土石器 …… 132
第 106 図　遺構外出土石器 …… 133
第 107 図　遺構外出土石器 …… 134
第 108 図　遺構外出土石器 …… 135
第 109 図　遺構外出土石器 …… 136
第 110 図　遺構外出土石器 …… 137
第 111 図　遺構外出土石器 …… 138
第 112 図　遺構外出土石器 …… 139
第 113 図　古墳時代前期遺構分布図 …… 140
第 114 図　20 号住居址、出土遺物 …… 142
第 115 図　34 号住居址、炉 …… 143
第 116 図　34 号住居址遺物分布図、出土遺物 … 144
第 117 図　古墳時代後期から奈良・平安時代遺構分布図 …… 145
第 118 図　1 号住居址、掘り方 …… 148
第 119 図　1 号住居址遺物分布図、出土遺物（1）…… 149
第 120 図　1 号住居址遺物分布図、出土遺物（2）…… 150
第 121 図　1 号住居址出土遺物（3）…… 151
第 122 図　2 号住居址、掘り方、出土遺物 …… 152
第 123 図　3 号住居址、カマド …… 154
第 124 図　3 号住居址出土遺物 …… 155
第 125 図　4 号住居址、出土遺物 …… 156
第 126 図　12 号住居址 …… 157
第 127 図　12 号住居址カマド …… 158
第 128 図　12 号住居址遺物分布図、出土遺物 … 159
第 129 図　13 号住居址、炭化材集中部 …… 161
第 130 図　13 号住居址掘り方 …… 162
第 131 図　13 号住居址遺物分布図、出土遺物（1）…… 163
第 132 図　13 号住居址出土遺物（2）…… 164
第 133 図　13 号住居址出土遺物（3）…… 165
第 134 図　13 号住居址出土遺物（4）…… 166
第 135 図　14 号住居址、遺物分布図 …… 168
第 136 図　14 号住居址カマド …… 169
第 137 図　14 号住居址出土遺物（1）…… 170
第 138 図　14 号住居址出土遺物（2）…… 171
第 139 図　15 号住居址 …… 172
第 140 図　15 号住居址遺物分布図、出土遺物（1）…… 173
第 141 図　15 号住居址出土遺物（2）…… 174
第 142 図　16 号住居址、遺物分布図、出土遺物　175
第 143 図　18 号住居址、遺物分布図、出土遺物　177
第 144 図　19 号住居址、出土遺物 …… 178
第 145 図　21 号住居址、遺物分布図 …… 179
第 146 図　21 号住居址カマド …… 180
第 147 図　21 号住居址出土遺物 …… 181
第 148 図　22 号住居址、遺物分布図 …… 183
第 149 図　22 号住居址カマド、出土遺物（1）‥ 184
第 150 図　22 号住居址出土遺物（2）…… 185
第 151 図　23 号住居址 …… 186
第 152 図　23 号住居址カマド …… 187
第 153 図　23 号住居址遺物分布図、出土遺物（1）…… 188
第 154 図　23 号住居址出土遺物（2）…… 189
第 155 図　23 号住居址出土遺物（3）…… 190
第 156 図　24 号住居址 …… 192
第 157 図　24 号住居址、遺物分布図、出土遺物 …… 193
第 158 図　25 号住居址 …… 194
第 159 図　25 号住居址覆土礫 …… 196
第 160 図　25 号住居址遺物分布図 …… 197
第 161 図　25 号住居址カマド …… 198
第 162 図　25 号住居址出土遺物（1）…… 199
第 163 図　25 号住居址出土遺物（2）…… 200
第 164 図　25 号住居址出土遺物（3）…… 201
第 165 図　26 号住居址、遺物分布図 …… 203
第 166 図　26 号住居址カマド …… 204
第 167 図　26 号住居址出土遺物 …… 205
第 168 図　27 号住居址 …… 206
第 169 図　27 号住居址遺物分布図、出土遺物（1）…… 208
第 170 図　27 号住居址出土遺物（2）…… 209
第 171 図　27 号住居址出土遺物（3）…… 210
第 172 図　28 号住居址、カマド …… 212
第 173 図　28 号住居址出土遺物 …… 213
第 174 図　29 号住居址、カマド、出土遺物 …… 214
第 175 図　30 号住居址 …… 215
第 176 図　30 号住居址カマド …… 217
第 177 図　30 号住居址遺物分布図 …… 218
第 178 図　30 号住居址出土遺物 …… 219
第 179 図　31 号住居址、遺物分布図 …… 221
第 180 図　31 号住居址カマド …… 222
第 181 図　31 号住居址出土遺物 …… 223
第 182 図　32 号住居址、掘り方 …… 224
第 183 図　32 号住居址カマド …… 225

第 184 図　32 号住居址遺物分布図、出土遺物（1）…… 226
第 185 図　32 号住居址出土遺物（2）…… 227
第 186 図　32 号住居址出土遺物（3）…… 228
第 187 図　33 号住居址、カマド …… 229
第 188 図　1 号掘立柱建物址 …… 232
第 189 図　2 号掘立柱建物址 …… 234
第 190 図　3 号掘立柱建物址 …… 235
第 191 図　4・5 号掘立柱建物址 …… 236
第 192 図　6 号掘立柱建物址 …… 237
第 193 図　7 号掘立柱建物址 …… 239
第 194 図　8 号掘立柱建物址 …… 240
第 195 図　9 号掘立柱建物址 …… 241
第 196 図　10 号掘立柱建物址、ピット（1）…… 242
第 197 図　ピット（2）…… 244
第 198 図　ピット（3）…… 246
第 199 図　土坑（1）…… 247
第 200 図　土坑（2）…… 248
第 201 図　土坑（3）…… 249
第 202 図　土坑（4）…… 250
第 203 図　土坑（5）…… 251
第 204 図　土坑（6）…… 252
第 205 図　土坑（7）…… 253
第 206 図　土坑（8）…… 254
第 207 図　土坑（9）…… 255
第 208 図　土坑（10）…… 256
第 209 図　土坑（11）…… 257
第 210 図　掘立柱建物址、土坑　出土遺物 …… 258
第 211 図　竪穴状遺構、焼土址、土器集中部 … 260
第 212 図　2 号土器集中部 …… 261
第 213 図　遺構外出土遺物（1）…… 263
第 214 図　遺構外出土遺物（2）…… 264
第 215 図　遺構外出土遺物（3）…… 265
第 216 図　遺構外出土遺物（4）…… 266
第 217 図　縄文時代集石分布図（下段）…… 293
第 218 図　狐原遺跡出土土器（古墳時代以降）集成図 …… 296
第 219 図　狐原遺跡出土土器（古墳時代以降）集成図 …… 297
第 220 図　竪穴住居址分布図 …… 299
第 221 図　焼印部材構成図 …… 300

表目次

第 1 表　試掘調査結果一覧表 …… 9
第 2 表　石器一覧表 …… 267
第 3 表　土坑一覧表 …… 275
第 4 表　出土遺物一覧表 …… 279

写真図版目次

巻頭図版 1　狐原遺跡遠景、第Ⅰ次調査の航空写真
巻頭図版 2　縄文時代中期の石柱・石壇（6 号住居址）、古墳時代後期の大型住居址（25 号住居址）
図版 1　狐原遺跡航空写真
図版 2　縄文時代住居址群、5 号住居址
図版 3　6 号住居址
図版 4　7 号住居址
図版 5　8 号・9 号住居址
図版 6　10 号・11 号住居址、17 号住居址調査区
図版 7　17 号住居址
図版 8　17 号住居址
図版 9　敷石住居址
図版 10　敷石住居址
図版 11　集石群検出状況、3 号・4 号・10 号集石
図版 12　11 号・12 号・13 号集石
図版 13　14 号・18 号・19 号集石
図版 14　21 号・23 号集石
図版 15　31 号・35 号・37 号集石
図版 16　38 号・40 号集石
図版 17　41 号・45 号・46 号集石
図版 18　47 号・49 号集石
図版 19　49 号・50 号・51 号集石
図版 20　54 号・56 号～ 58 号集石
図版 21　1 号・2 号・3 号・4 号土坑
図版 22　1 号・2 号ピット群、1 号・2 号埋設土器
図版 23　1 号・2 号住居址
図版 24　3 号・4 号・12 号住居址
図版 25　13 号住居址
図版 26　14 号住居址
図版 27　15 号・19 号・20 号住居址
図版 28　21 号・22 号住居址
図版 29　22 号・23 号・25 号・30 号住居址
図版 30　25 号住居址
図版 31　26 号・27 号・28 号住居址
図版 32　28 号・29 号・30 号住居址
図版 33　31 号住居址
図版 34　32 号住居址
図版 35　34 号住居址、1 号・2 号掘立柱建物址
図版 36　3 号・4 号・5 号掘立柱建物址
図版 37　6 号・7 号・9 号・10 号掘立柱建物址
図版 38　ピット群（P15 ～ P29）・43 号・44 号・56 号・57 号土坑

図版 39　69 号・73 号・79 号・87 号土坑、S-28 区周辺の土坑群
図版 40　115 号土坑、1 号竪穴状遺構・157 号土坑、硬化面
図版 41　5 号住居址土器・石器、6 号住居址土器
図版 42　6 号住居址土器・土製品
図版 43　6 号住居址石器、7 号住居址土器
図版 44　7 号住居址土器
図版 45　7 号住居址石器、8 号住居址土器
図版 46　8 号住居址土器
図版 47　8 号住居址石器、9 号・11 号住居址土器
図版 48　17 号住居址土器
図版 49　17 号住居址土器・土製品
図版 50　17 号住居址石器
図版 51　敷石住居址土器・石器
図版 52　集石土器・石器、1 号・2 号埋設土器
図版 53　縄文時代遺構外出土土器
図版 54　縄文時代遺構外出土土器
図版 55　縄文時代遺構外出土土器
図版 56　縄文時代遺構外出土土器
図版 57　縄文時代遺構外出土土器
図版 58　縄文時代遺構外出土土器・石器
図版 59　縄文時代遺構外出土石器
図版 60　縄文時代遺構外出土石器
図版 61　20 号・34 号・1 号～ 3 号住居址出土遺物
図版 62　12 号～ 15 号住居址出土遺物
図版 63　15 号～ 25 号住居址出土遺物
図版 64　25 号・26 号住居址出土遺物
図版 65　27 号～ 30 号住居址出土遺物
図版 66　30 号～ 32 号住居址出土遺物、遺構外出土鉄製品
図版 67　ワラジムシ圧痕土器

第Ⅰ章　遺跡の位置と周辺の環境

第1節　遺跡の位置（第1・2図）

狐原遺跡がある上野原市は山梨県東端に位置する。市域の大部分が壮年期の急峻な山地で占められ、相模川(山梨県内では桂川と呼ぶ)や支流沿いに河岸段丘地形が発達している。本市は地理的な要因から、産業や文化・通婚・日常生活全般において古くから関東地方西部との関係が強い。近世には江戸・甲府・信州を結ぶ甲州街道が整備され、相模川の水運とともに交通の要衝地として栄えた。

狐原遺跡は県境にあり、桂川北岸に張り出した河岸段丘に位置する。遺跡付近の段丘は4面に大別され、旧甲州街道や諏訪集落がある第4面の一部から下位の第3面全域に狐原Ⅱ遺跡、第2面全域に狐原Ⅰ遺跡が位置する。最下位の第1面は狭小で、紅梅神社が位置する。周囲は桂川に面して急崖となり、東対岸は神奈川県相模原市（旧津久井郡藤野町）である。今回の調査地点は第2面と3面にまたがり、標高は208 m～220 mである。

第2節　周辺の遺跡（第1図）

縄文時代では周辺の段丘上や丘陵裾部に多数の遺跡が分布する。早期では新井遺跡（27）で押型文土器1個体が採集され、中期後半では大堀Ⅱ遺跡（26)・関山遺跡（32）他で竪穴住居址や多数の土器・石器が発掘された。後期前半では鶴川対岸の松留館跡（14）で多数の土器が発掘された。

弥生時代では南大浜遺跡（18）で弥生時代中期の再葬墓1基が発掘されたが、遺跡は極めて少ない。

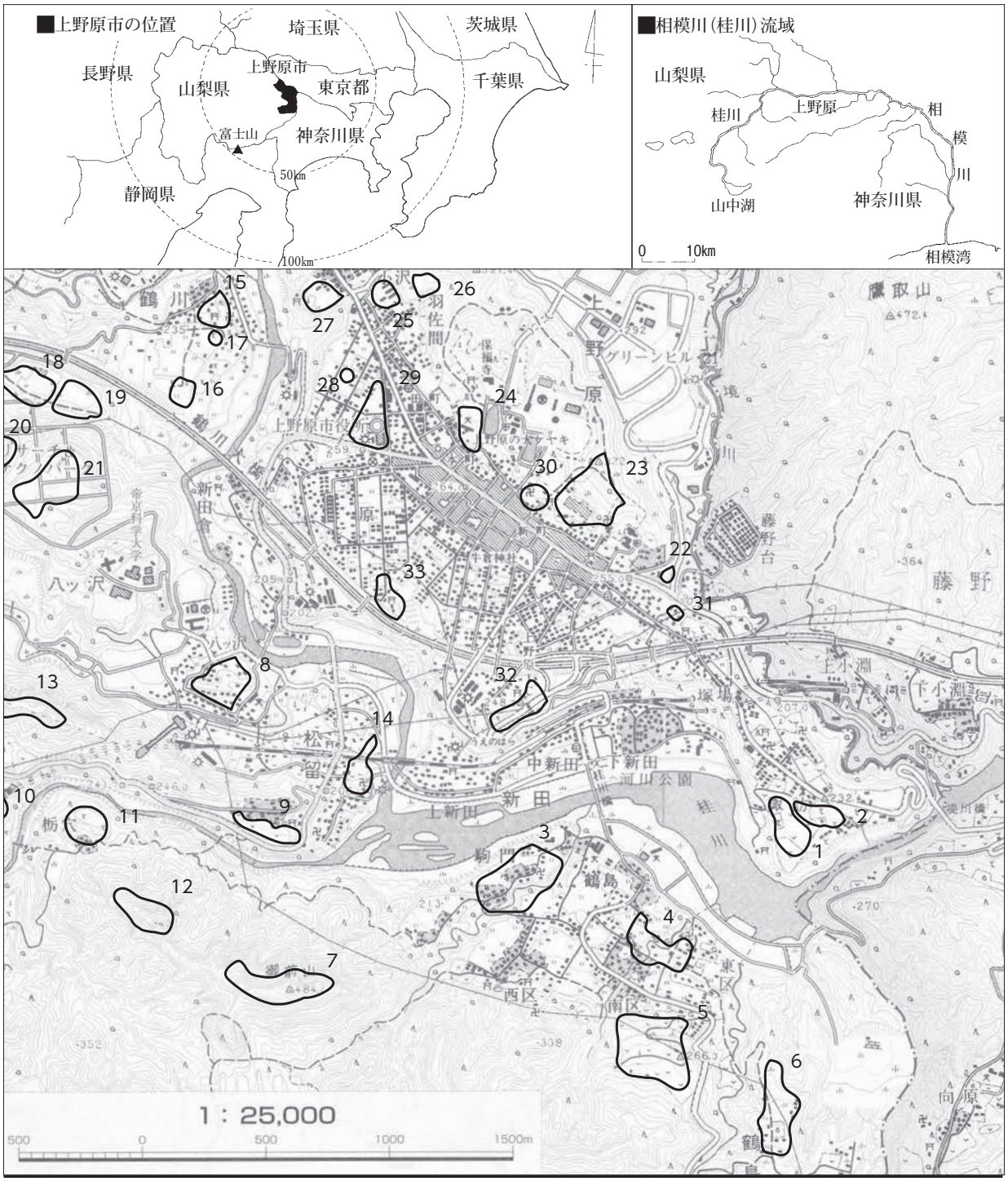
古墳時代では狐原遺跡北西の塚場古墳群（31）に数基の塚があったとされるが、宅地化されて詳細は不明である。ＪＲ上野原駅北東の斜面地では県道開設の際に横穴3基及び副葬品として「直刀大小数本及祝部土器数個」が発見されたが現存しないとの報告があり（仁科1935)、古墳時代の横穴墓を彷彿とさせる。詳細な発見地は不明だが、この報告は明治時代に新田字篠窪で行われた通称「こあげ道」開設工事の時を指している可能性が高く[(1)]、東京国立博物館には新田字篠窪で出土したと伝えられる直刀3本が所蔵されている。(山梨県1999)。一方､鶴川対岸の上野山古墳（17）では2基の塚が現存する。古墳時代後期の竪穴住居址は上野原小学校遺跡（24）や大間々遺跡（29）で発掘例がある。

奈良･平安時代では竪穴住居址の発掘例が増加し、大間々遺跡で竪穴住居址10軒･掘立柱建物址4棟･大型柱穴列等や銅製鈴具・鉄鏃等の遺物が出土した。古代、上野原市を含む山梨県東部地域は甲斐国都留郡に属し、桂川沿いに相模・古郡・福地・多良・賀美・征茂・都留郷が点在していたことが知られている。狐原遺跡がある新田・上野原地区は古郡(ふるごおり)郷に比定され、その郷名は都留郡衙の移転に伴う初期郡衙の遺称と考えられている。本遺跡の東対岸には相模国延喜式内社と呼ばれる石楯尾(いわたてお)神社がある。

中世の遺跡に内城館跡（33）がある。平安末期から鎌倉時代、八王子横山党から分かれた古郡氏が居館として造営したと伝えられる。その後は武田氏の北条攻めなどで活躍した加藤氏の居館となったが、天正10年（1582)、一族の滅亡で廃された。対岸の山稜には長峰砦・大倉砦・牧野砦などが分布し、造営時期や造営者は不明だが、相互が関連して国境を警備したと考えられている。

近世では旧甲州街道に諏訪番所（境川番所）が設けられた。相模川の水運は大正期まで利用され、材木や炭・木工品など市域の産物が筏流しや高瀬舟により河口の須賀浦（神奈川県平塚市）経由で江戸へ運ばれた。本遺跡近くの新田河岸は物資の中継地として賑わい、番所による川下げの検問も行われた。

註1　「こあげ道」の開設工事に伴って人骨や土器が出土したという古老の話を地元の小俣博さんからご教示いただいた。記録や伝承の整理が課題である。



1	狐原Ⅰ遺跡（縄文、古墳）	12	栃穴御前（中世）	23	根本山遺跡（縄文中・後）
2	狐原Ⅱ遺跡（縄文、弥生、古墳）	13	牧野砦（中世）	24	上野原小学校遺跡（縄文、奈良）
3	駒門遺跡（縄文、弥生）	14	松留館跡（縄文後、古墳、奈良、中世）	25	大堀Ⅰ遺跡（縄文中、平安）
4	東区遺跡（縄文中）	15	上野山Ⅰ遺跡（縄文後）	26	大堀Ⅱ遺跡（縄文早・中）
5	田代遺跡（縄文中）	16	上野山Ⅱ遺跡（縄文中、弥生）	27	新井遺跡（縄文早・中、平安）
6	黒ノ木遺跡（縄文中・後、平安）	17	上野山古墳（古墳）	28	寺畑遺跡（縄文）
7	鶴島御前山（中世）	18	南大浜遺跡（縄文中）	29	大間々遺跡（奈良・平安）
8	八ッ沢遺跡（縄文中）	19	大浜遺跡（縄文中・後、平安）	30	新町遺跡（縄文中）
9	松留遺跡（縄文後）	20	大椚Ⅰ遺跡（縄文中・後）	31	塚場古墳群（古墳）
10	牧野遺跡（縄文中、平安）	21	大椚Ⅱ遺跡（縄文早）	32	関山遺跡（縄文）
11	栃穴遺跡（縄文中）	22	桜ヶ丘遺跡（縄文、古墳）	33	内城館跡（中世）

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

第Ⅱ章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯と経過

山梨県北都留郡上野原町（現在の上野原市）は首都圏の通勤圏として都市化が進み、下水道の整備が大きな課題であった。町は昭和 51 年から単独公共下水道事業の計画策定を開始し、昭和 54 年に国の事業認可を受けて事業に着手した。同年から終末処理場用地として新田字狐原地内の公有地化を進め、昭和 58 年度までに用地面積の約 65％に当たる 17,737㎡の公有地化を達成した。しかし、その後は用地交渉の難航によって十数年間事業が停滞し、新たな方策が模索された。こうした中で、山梨県による県東部域の汚水を一括処理する桂川流域公共下水道事業計画が具体化し、平成５年から終末処理場建設事業が隣接の大月市で着手されることになった。こうした情勢の変化を踏まえ、町は下水道事業の早期実現を図るためにこれまでの計画を変更し、平成６年に桂川流域公共下水道事業へ参画することになった。

下水道事業の計画変更に伴い、町は取得済の下水道終末処理場用地を公共事業等の代替用地として活用することになり、平成６年、主管のまちづくり推進課が用地整備に伴う埋蔵文化財の取り扱いを上野原町教育委員会に照会した。広大な事業用地には狐原Ⅰ遺跡及び狐原Ⅱ遺跡の大半を含んでいた。両遺跡は昭和 48 年度の遺跡分布調査で発見されたもので、表面採集を行うと広範囲で縄文土器や土師器の破片を発見できた。このため、遺跡の詳細な遺存状況を確認するために試掘調査を行うことになった。

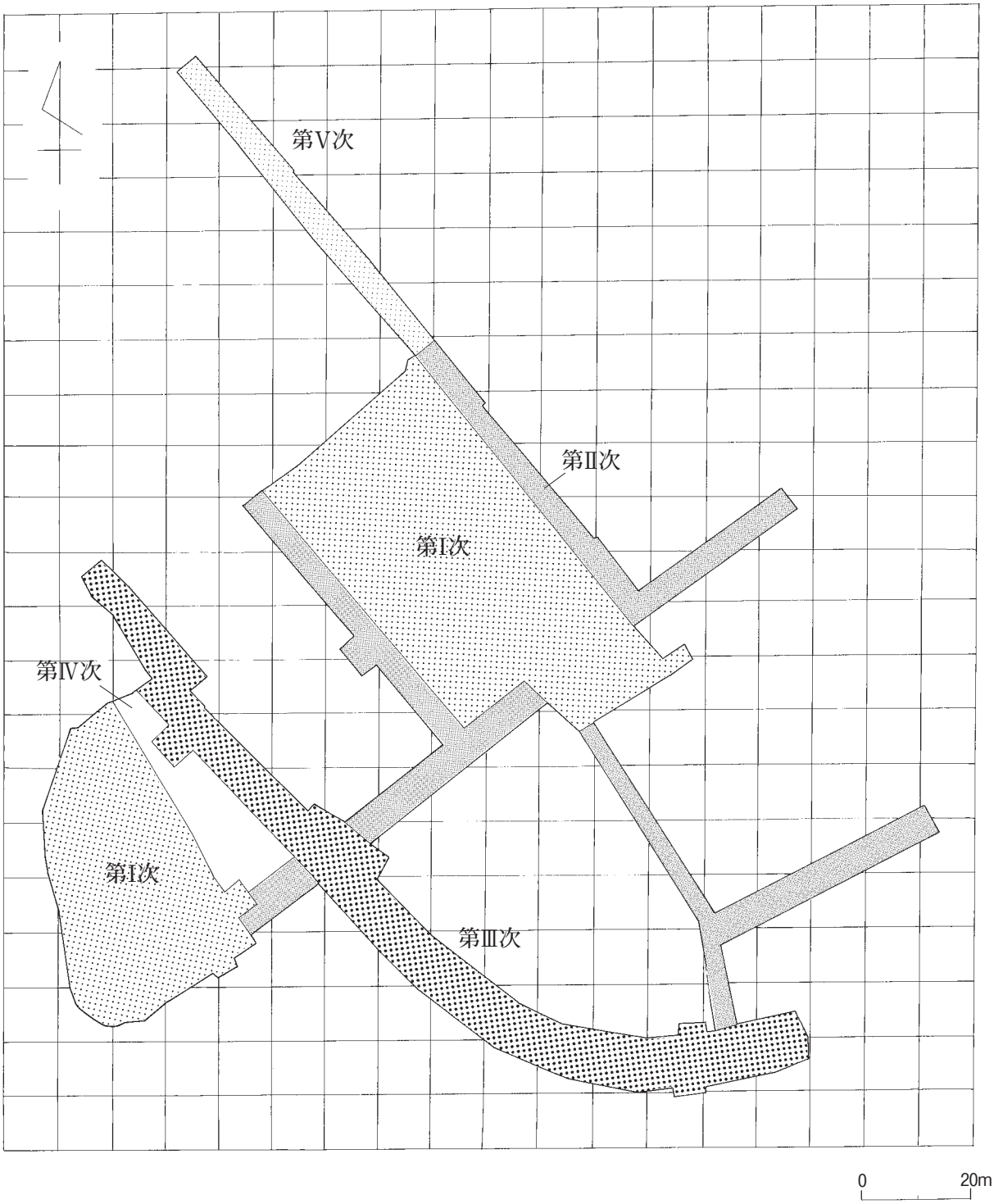
試掘調査は平成６年７月 20 日から８月 12 日まで町社会教育係が実施し、事業用地全面に試掘坑を設定した（第４節参照）。この結果、ほぼ全域で縄文時代から平安時代の遺構・遺物が発見されたため、山梨県教育委員会学術文化課（現在の学術文化財課）、まちづくり推進課下水道係・社会教育係（上野原町）で協議を行い、工事着手前に記録保存を目的とした発掘調査の必要性を確認した。

発掘調査は平成６年から平成９年まで社会教育係が実施し、工事計画に応じ次の経過で実施した。

調査名	遺跡名	調査期間	調査面積	調査目的
第Ⅰ次	狐原Ⅰ、狐原Ⅱ	平成６年 10 月 12 日～平成７年３月９日	3,000㎡	土地区画整理に伴う発掘調査
第Ⅱ次	狐原Ⅰ、狐原Ⅱ	平成７年５月 23 日～平成７年９月 29 日	1,500㎡	町道上新田諏訪支線新設に伴う発掘調査
第Ⅲ次	狐原Ⅰ、狐原Ⅱ	平成７年 10 月 12 日～平成８年３月 27 日	1,800㎡	町道上新田諏訪線新設に伴う発掘調査
第Ⅳ次	狐原Ⅰ	平成８年８月 20 日～平成８年 10 月 31 日	300㎡	土地区画整理に伴う発掘調査
第Ⅴ次	狐原Ⅱ	平成８年 12 月４日～平成９年２月 24 日	374㎡	町道上新田諏訪支線新設に伴う発掘調査

出土品等の整理作業は担当者１名と作業員数人による体制で平成 11 年度から開始し、遺物の水洗・注記・接合や土器の拓本・実測作業を行った。また、金属製品の保存処理や採取した土壌等の自然科学分析を専門機関に委託した。当初は平成 14 年度までに報告書を刊行する予定だったが、膨大な出土品と図面類の整理に手間取ったことや、他の遺跡調査と整理・報告書作成及び各種の業務が重なったこともあり作業は慢性的に遅延した。平成 19 年度から平成 20 年度に文化財主事１名を増員して縄文土器や石器の実測を行い、併せて小型石器の実測を専門機関に委託した。平成 21 年度から平成 23 年度は他遺跡の発掘調査報告書作成を優先し、平成 24 年度から狐原遺跡の作業を再開した。遺物実測と図面トレースは平成 25 年２月に終了し、その後は遺物写真撮影や原稿執筆及び報告書の編集を行った。この間の作業は平成 25 年国民文化祭やまなしの準備・運営や文化財整理施設の移転が重なったため断続的に進めた。平成 26 年７月に印刷製本を業者へ発注し、発掘調査終了から 18 年をかけて本報告書の発刊に至った。

第２図　遺跡範囲と調査区の位置



第Ⅰ次調査　平成6年(1994)10月12日～平成7年(1995)3月 9日
第Ⅱ次調査　平成7年(1995) 5月23日～ 9月29日
第Ⅲ次調査　平成7年(1995)10月12日～平成8年(1996)3月27日
第Ⅳ次調査　平成8年(1996) 8月20日～10月31日
第Ⅴ次調査　平成8年(1996)12月 4日～平成9年(1997)2月24日

第３図　調査区配置図

第２節　調査の方法

調査区全域に国家座標に基づく５ｍ方眼の区画（グリット）を設定した。調査は表土をバックホーで掘削した後、遺構・遺物を確認しながら人力で掘り下げた。掘り下げはローム層上面までとした。

遺構の名称には発見されたグリット名を付けたり、遺跡名のローマ数字を冠して番号を付けるなど統一性に欠けたため、報告書の編集段階で新たに遺構名を付け直した。

遺物は、遺構及び遺物集中範囲については原則として出土位置の平面や標高を計測して取り上げ、遺構外の場合は５ｍグリット単位で取り上げた。遺物包含層から出土した多量の礫は、集石構成礫を除いてグリット一括で取り上げ、水洗い後に石器の選別、被熱状況等の確認、重量計測、写真撮影を行った。礫はサンプル抽出後に現地へ埋め戻した。

住居カマドの内部や周辺の土壌はサンプル採取し、これを室内で乾燥させた後にバケツの水で静かに攪拌し、浮遊してくる炭化物等を採取した。この作業を同じ土で２度繰り返し、炭化物から微細な種子を選別した。種子同定は専門機関に委託した。

遺構や遺物の平面図は基本的に簡易遣り方や平板で実測したが、第Ⅰ次調査の住居址及び第Ⅱ・Ⅲ次の遺構については航空写真測量を行った。記録写真は35㎜モノクロ及びリバーサルフィルムで撮影し、必要に応じて６×７リバーサルフィルムを用いた。また、業務記録用に随時ビデオ撮影を行った。

第３節　遺跡の層序

調査地は南面傾斜の広い畑地であり、２段の段丘面からなる。下段の平坦地は土層が最も厚く、層序は比較的安定している。第Ⅱ層から第Ⅳ層への変化は漸移的で、下層ほど黒色が強く、スコリアの粒径が大きく含有量が多くなる。段丘縁辺では層厚が急に薄くなり、表土直下でハードローム層となる。以下に基本層序を示す。

第Ⅰ層　褐色土　　粘性弱く、締まりなし。

第Ⅱ層　暗褐色土　粘性やや強く、締まりなし。黒色スコリア（3㎜～5㎜）、黄褐色スコリア（1㎜～3㎜）多い。

第Ⅲ層　黒褐色土　粘性やや強く、締まり弱い。黒色スコリア（3㎜～5㎜）、黄褐色スコリア（1㎜）多い。土師器、須恵器を含む。

第Ⅳ層　黒褐色土　粘性やや強く、締まり弱い。黒色スコリア（1㎜～5㎜）非常に多い。黄褐色スコリア（1㎜以下）多い。

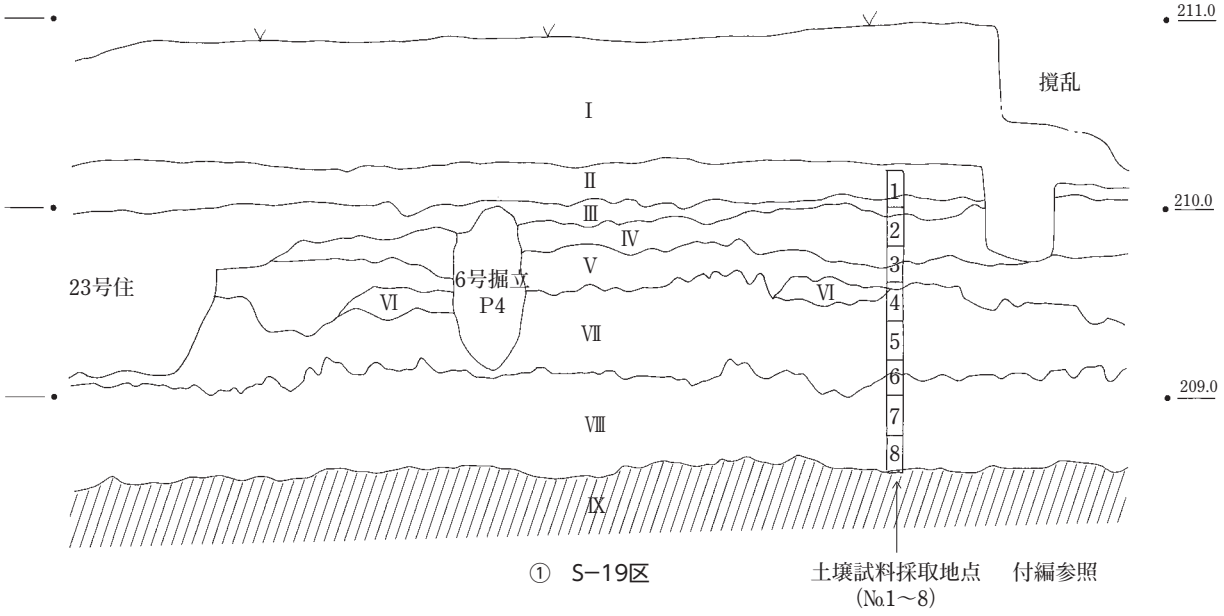
第Ⅴ層　黒褐色土　第Ⅳ層に似るが、黒色スコリアが疎らとなる。

第Ⅵ層　暗褐色土　締まり強い。黄・橙色スコリア（1㎜以下）多い。

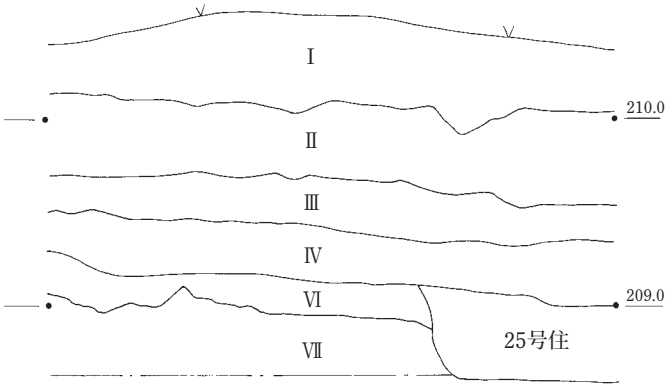
第Ⅶ層　黄褐色土　締まり強い。黄・橙色スコリア（2㎜以下）やや多い。縄文時代前期から後期の土器を含む。

第Ⅷ層　暗褐色土　締まり強い。橙色スコリア（1㎜～5㎜）やや多い。縄文時代早期から前期の土器を含む。

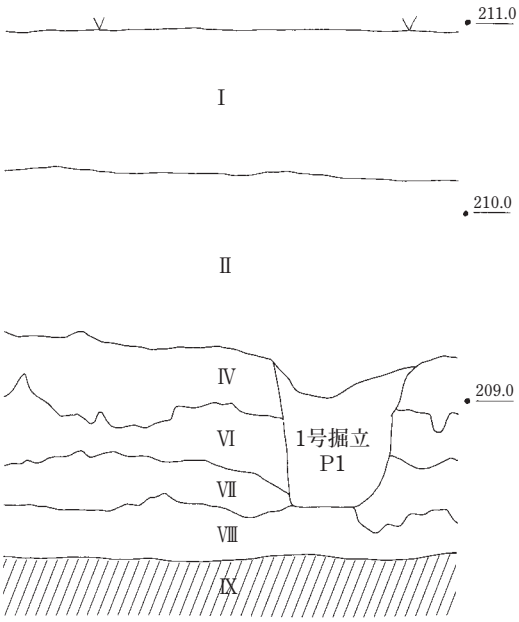
第Ⅸ層　褐色土　　ソフトローム



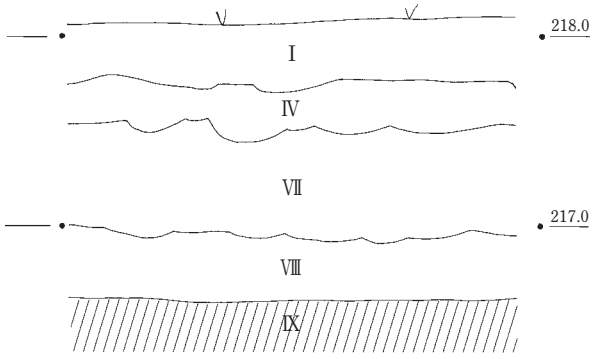
① S−19区　　土壌試料採取地点　付編参照
(№1～8)



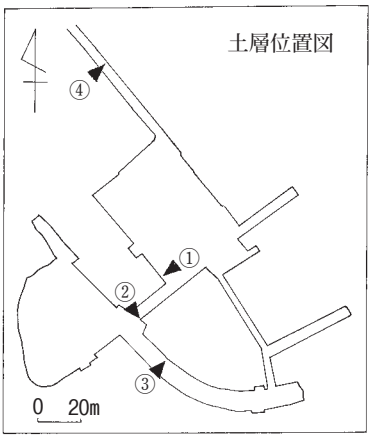
② W−23区



③ S−26区



④ Y−58区



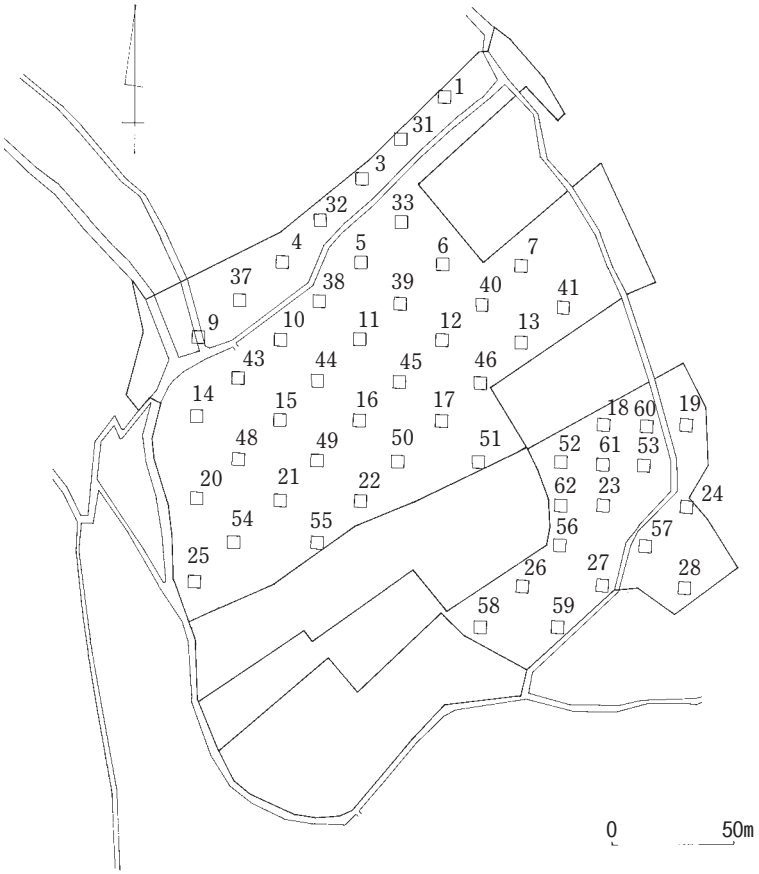
第４図　基本土層（1/40）

第４節　試掘調査

事業用地全面に国家座標による 50 ｍ方眼を組み、区画ごとに 2 ｍ四方の試掘坑を総数 52 個設定した。試掘総面積は調査対象面積 17,737㎡の約 1％に当たる 200㎡である。試掘坑の掘り下げは、遺構・遺物の確認を基本としてバックホーを併用し、遺構が存在しない場合はローム層上面まで掘り下げた。調査の結果、縄文土器、土師器、須恵器、石器（石鏃、石匙、打製石斧、磨石、礫器、石皿）が出土した。土器は細片が大半であった。

段丘上段では遺物が広範囲で出土し、遺構は住居址 1 軒、集石 2 基を確認した。その後の発掘調査で、住居は 7 号住居址（縄文時代中期後半）、13 トレンチの集石は 1 号住居址（古墳時代後期）に集積された編物石であることが分かった。

段丘下段では土層が厚く堆積し、最も深い場所でローム層まで 2.5 ｍを測る。土師器・須恵器の包含層である第Ⅱ層～第Ⅳ層の遺存状況も良好であった。遺物は広範囲かつ多量に出土し、45 トレンチで完形の須恵器坏が出土した。遺構は住居址 1 軒、配石 1 基、集石 1 基、焼土址 1 基、土坑 5 基を確認した。このうち、配石は 44 トレンチ第Ⅶ層下位で確認し、6 個の礫が面を揃えて配置されており縄文時代に推定される（写真下）。44 トレンチ第Ⅶ層上面で確認した土坑は柱穴状を呈し、古代掘立柱建物の一部であった可能性がある。後の発掘調査によって、集石は縄文時代の 4 号集石、22 トレンチの土坑は古代ピット（Ｐ 4）として調査した。試掘結果の詳細を第 1 表にまとめたが、出土層位は省略した。



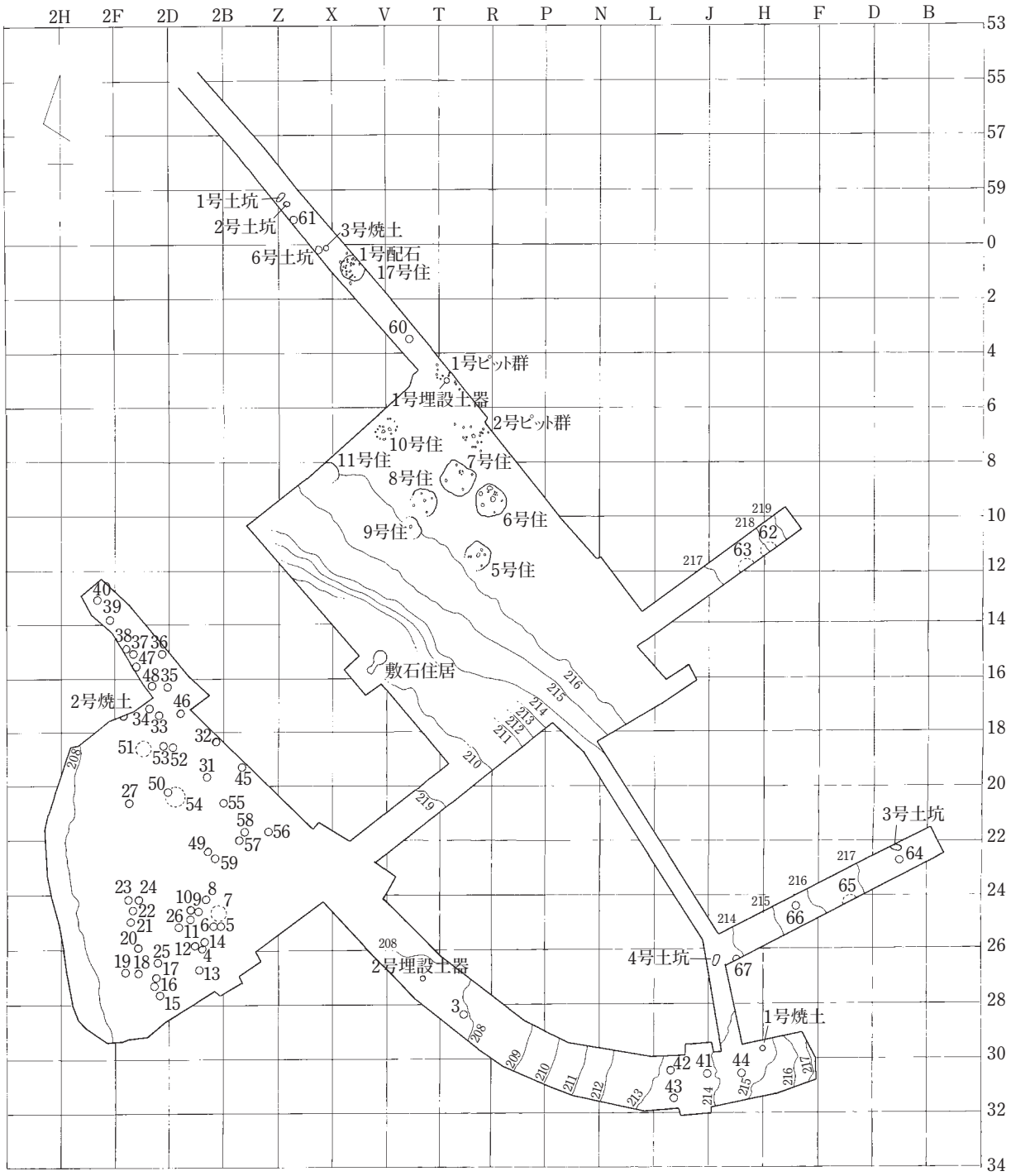
第５図　試掘坑配置図

44 トレンチ配石写真

試掘風景写真

第１表　試掘調査結果一覧表

トレンチ	遺構（種類・数）	遺物					備考
		縄文土器	土師器	須恵器	石器	礫	
1							
3			1				
4							
5		2					
6			1				
7			5		1		
9		3	2		5		
10	焼土址１	1	1				
11		1					
12			1				
13	集石１		23				発掘の結果、１号住居
14							
15			1		4		
16		1	29	3			
17		1	4	1	4		
18			3				
19					1		
20							
21			23	1			
22	土坑１		26				発掘の結果、古代ピット４
23							
24			1			1	
25							
26					1		
27							
28							
31		1	13		1		
32							
33	住居址１	多数					発掘の結果、７号住居
37		1	7			1	
38							
39							
40			2				
41							
43							
44	土坑１、配石１	5	8		2	1	
45			39	3			墨書土器「大」
46							
48		2			2		
49	土坑１		29	4			
50	住居址１	1	12		4		
51							
52			5		1	1	
53							
54	集石１	5	1		3		発掘の結果、４号集石
55	土坑１		43	3			
56					1		
57							
58							
59					1		
60							
61							
62	集石１						



第６図　縄文時代遺構分布図

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　縄文時代

竪穴住居址８軒、敷石住居址１軒、集石 62 基、土坑４基、焼土址２基、ピット群２ヶ所、屋外埋設土器２基が発見された。遺物は土器、土製品、石器が遺構内外から多数出土した。土器は縄文早期から後期までである。

(1) 竪穴住居址

段丘上段の縁辺にまとまって分布し、第Ⅶ層（暗褐色土）から第Ⅸ層上面（ローム層）で確認された。住居主軸は北東方向でほぼ揃う。大半の住居に石囲炉と埋甕が備えられ、炉の奥に石柱・石壇を設けた住居も発見された。遺物は覆土を中心に多く出土した。遺構の時期は縄文時代中期後半に該当する。

５号住居址（第７～９図、図版２・41）

第Ⅰ次調査で検出した。Ｒ－11 区に位置し、確認面は第Ⅸ層である。平面は円形で、東西 450㎝を測る。主軸方位Ｎ－ 35°－Ｅ。壁高は最高 20㎝を測るが、斜面下方に向けて低くなり南壁を失う。耕作による攪乱を受け、遺存状況は悪い。覆土は暗褐色土が主体である。

ピット６基が検出された。炉と奥壁の間に位置するピットは大きく、長軸 85㎝・深さ 65㎝を測る。他は長軸 55㎝～ 35㎝、深さ 20㎝前後である。周溝は幅 40㎝～ 20㎝、深さ 5㎝～ 10㎝である。

炉は平面不整方形の石囲炉だが、耕作溝による攪乱を受け、炉石の大半が失われている。掘り方は長軸 90㎝・短軸 80㎝、深さ 30㎝を測る。断面は椀状で、下部に焼土が堆積する。

遺物は覆土から床面にかけて分布する。土器（1～3）、磨製石斧（6）は奥壁ピット脇の床面で出土し、1の直下で黒曜石の楔形石器（8・9）や剥片がまとまって出土した。

出土土器

1は鉢形土器の大形破片で、Ｘ字状把手が付く。残存高 22㎝、推定胴部最大径 39㎝。頸部を隆帯で区画し、縦位の条線を施す。胎土に金雲母、黒雲母、石英、砂粒を含む。色調はにぶい褐色で、焼成は良い。2は壷形土器である。口径 8.3㎝、残存高 13㎝。無文口縁部の内外面と胴部内面は磨かれる。口縁下に鍔状隆帯が付く。胴部は縄文地で、2本単位の隆帯による渦巻文が配される。胎土に赤色粒子、砂粒、小石を含む。色調は赤褐色で、焼成は良い。3～5は深鉢の破片で、胴部を隆帯や沈線で縦位に区画する。地文は条線である。以上の土器は曽利Ⅱ～Ⅳ式期に該当する。

６号住居址（第 10 ～ 18 図、図版３・41 ～ 43）

第Ⅰ次調査で検出した。Ｑ－９区に位置し、確認面は第Ⅷ層である。平面は不整円形で、南端がわずかに張り出す。竪穴は長軸 600㎝・短軸 570㎝を測り、主軸方位Ｎ－ 30°－Ｅ。壁高は 40㎝～ 25㎝である。床面まで攪乱を受けた箇所があるが、遺存状況は比較的良い。覆土はスコリア質の土層が壁際を除き厚く堆積する。

主柱穴と考えられるピットは４基で、長軸 90㎝～ 45㎝、深さ 85㎝～ 60㎝を測る。周溝は幅 40㎝～ 10㎝、深さ 10㎝程度である。

炉は石囲炉であったと思われるが、炉石の大半が失われている。掘り方は平面不整楕円形で、長軸 110㎝・短軸 95㎝、深さ 30㎝を測る。断面はタライ状で、下部に焼土が堆積する。

石柱・石壇が炉と奥壁間の床面で検出された。平石（長さ 30㎝～ 20㎝）5 枚と小礫を直径 1 ｍ程度の環状に配置して石壇とし、中央部に長さ 60㎝の長大な石を据えて石柱とする。石柱は横倒れの状況で出土した。掘り方は平面不整円形で、奥壁側が一段深くなる。規模は長軸 75㎝・短軸 66㎝、最深 46㎝である。

埋甕（1）が竪穴南端で検出された。深鉢 1 個体がひとまわり大きな掘り方に正位で埋められ、底部を欠く。口縁部は床面よりわずかに低いレベルに位置し、2 枚の小礫で固定される。

遺物は覆土から床面に分布する。床面遺物には浅鉢（2）と深鉢の小片（26・48）、楔形石器（51）、小形磨石（62）がある。磨製石斧（61）は石柱・石壇の掘り方内で出土した。他は覆土出土で、土器・土偶･石器がある。土偶（50）は下半身の一部で、沈線文を側面と腰部に施す。現存高 6.8㎝、最大幅 5.0㎝。胎土に黒雲母、石英、砂粒を含む。色調はにぶい褐色で、焼成は良い。石器はチャート石核（52）、打製石斧（53 ～ 58）、礫器（59・60）、磨石（63・64）がある。

出土土器

1 は埋甕に用いられた深鉢で、底部を欠損する。口径 24.3㎝、残存高 25.7㎝。条線を地文とし、口唇部内面、頸部、胴部に粘土紐による隆帯を貼付する。胴部の粘土紐は 2 本単位で垂下し、渦巻文を構成する。胎土に微細な雲母、砂粒を含む。色調は暗褐色やにぶい褐色で、焼成は良い。

2 は浅鉢の大形破片で、炉の縁辺で出土した。推定口径 46㎝。頸部に平行沈線による長楕円区画を連ね、内部に短沈線を施す。胴部は横位沈線で区画し、条線を施す。貫通孔（直径 5㎜）が胴部 2 ヶ所に残る。胎土に雲母、石英、赤色粒子、砂粒を含む。色調は赤褐色やにぶい褐色で、焼成は良い。

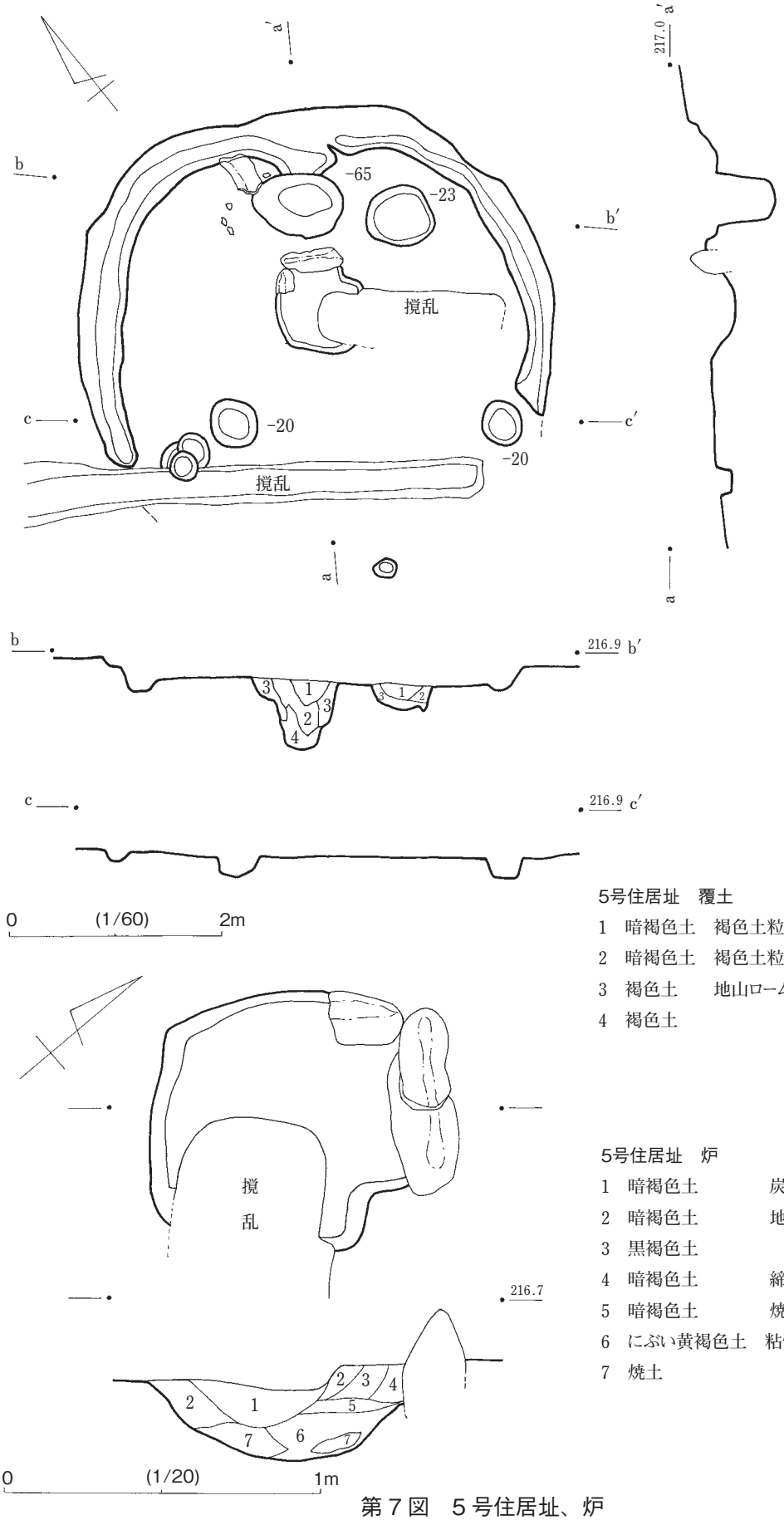
3 ～ 15、19 ～ 43 は条線地の土器である。深鉢は口縁部に幅広の沈線が巡り、胴部を隆帯や沈線で縦位に区画するものが多い。3、口唇部内面は肥厚し、磨かれる。胴部を隆帯と浅い沈線で曲線的に区画し、渦巻文を構成する。4、口縁部に指で強く押し引いたような幅広沈線を横位に施す。胴部は隆帯と浅い沈線による渦巻つなぎ弧文や懸垂文を配し、波状沈線文を加える。5・6 は胴部に隆帯によるＨ字状懸垂文を配し、一部が渦巻状となる。さらに波状沈線文（5）や 1 本単位の隆帯（6）を垂下する。7、胴部に沈線によるΠ字状区画を配す。地文は半裁竹管による条線を斜位に施す。8、外面全面を斜位の条線で埋める。9、口縁部を 2 本の横位沈線で区画し、短沈線で埋める。口縁下は隆帯が巡らされ、一部は渦巻状となる。胴部は沈線によるΠ字状区画内に綾杉状条線を施す。10、口縁部に幅広の横位沈線、胴部に櫛歯状条線を地文として波状沈線文を垂下する。内面にタール状付着物が残る。11 ～ 13 は、胴部を隆帯や沈線でΠ字状に区画し、内部に綾杉状条線や波状沈線文を垂下する。口縁部は幅広の沈線が巡り、11 は一端が渦巻状となる。この他に、埋甕（1）と同種で、渦巻や波状の粘土紐を貼付した一群（19 ～ 21）、胴部の区画沈線が口縁部まで及ぶ土器（29）、壷形土器（35 ～ 37）、半裁竹管による連弧文が巡る土器（38）がある。

44 ～ 48 は縄文地の土器である。44、3 本単位の隆帯を弧状に配した大形深鉢である。45、緩く括れた深鉢胴部に 2 本単位の刻みが加えられた隆帯が垂下する。46、胴上半部に沈線区画の文様帯を配した鉢形土器。47 は沈線でＵ字状など縦位区画した深鉢、48 は沈線を連弧状や渦巻状に配した深鉢である。

49 は薄手の土器で、沈線区画の磨消縄文を渦巻状に配す。外面は磨かれる。

18 は鉢形のミニチュア土器で、推定口径 9.9㎝、残存高 5.1㎝。無文で、内外面が磨かれる。

以上の土器は、49 が後期堀之内式に比定される他は曽利Ⅱ～Ⅳ式期に該当する。埋甕（1）は曽利ⅡあるいはⅢ式である。



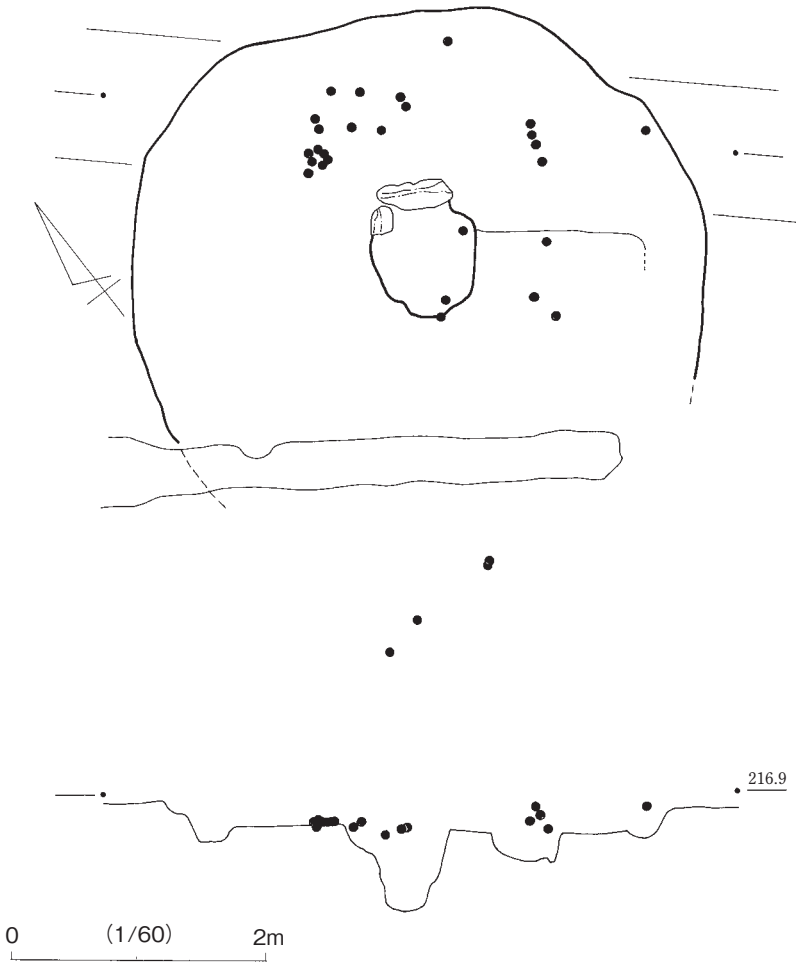
5号住居址　覆土

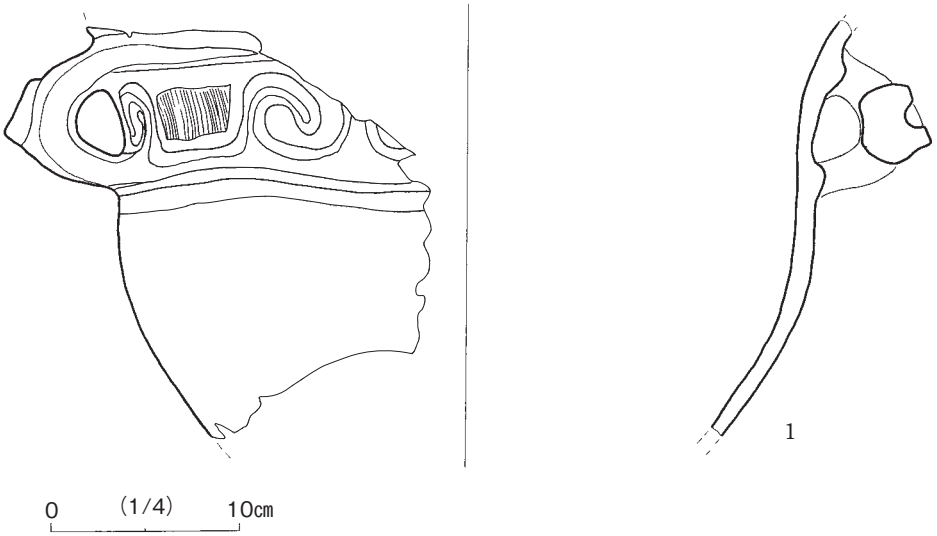
1　暗褐色土　褐色土粒やや多い。
2　暗褐色土　褐色土粒、地山ローム塊多い。
3　褐色土　　地山ローム塊含む。
4　褐色土

5号住居址　炉

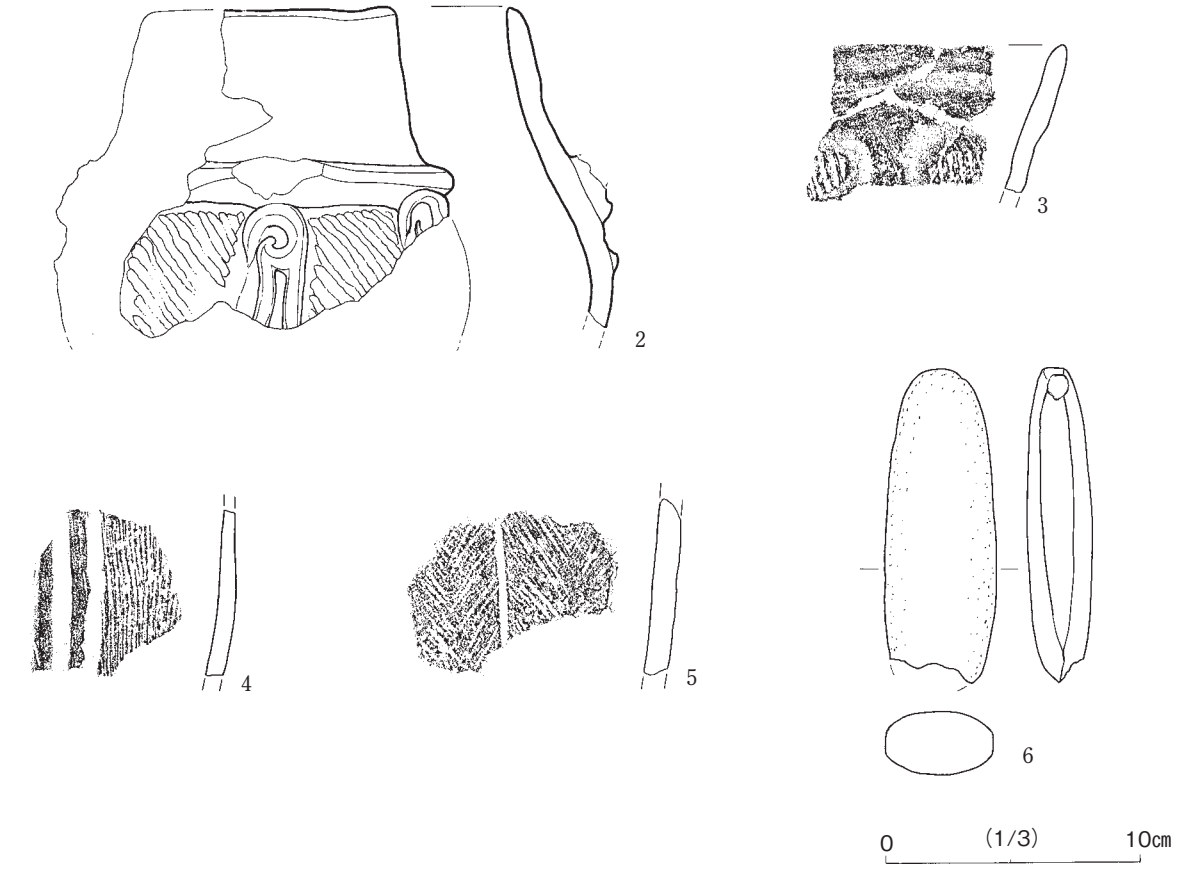
1　暗褐色土　　炭化粒含む。
2　暗褐色土　　地山ローム粒多い。
3　黒褐色土
4　暗褐色土　　締まり弱い。
5　暗褐色土　　焼土粒多い。
6　にぶい黄褐色土　粘性やや強い。
7　焼土

第７図　５号住居址、炉

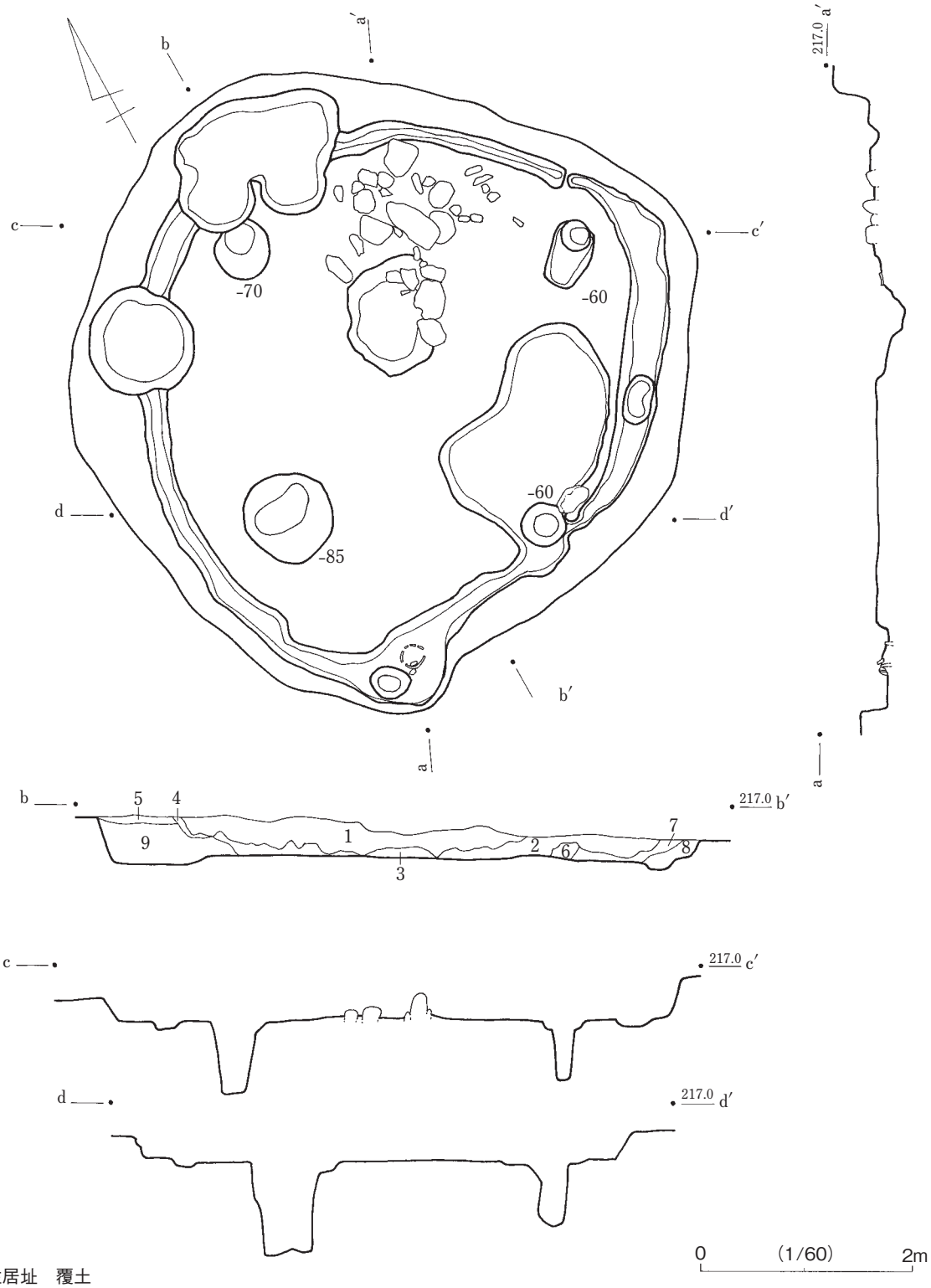




第８図　５号住居址遺物分布図、出土遺物（1）



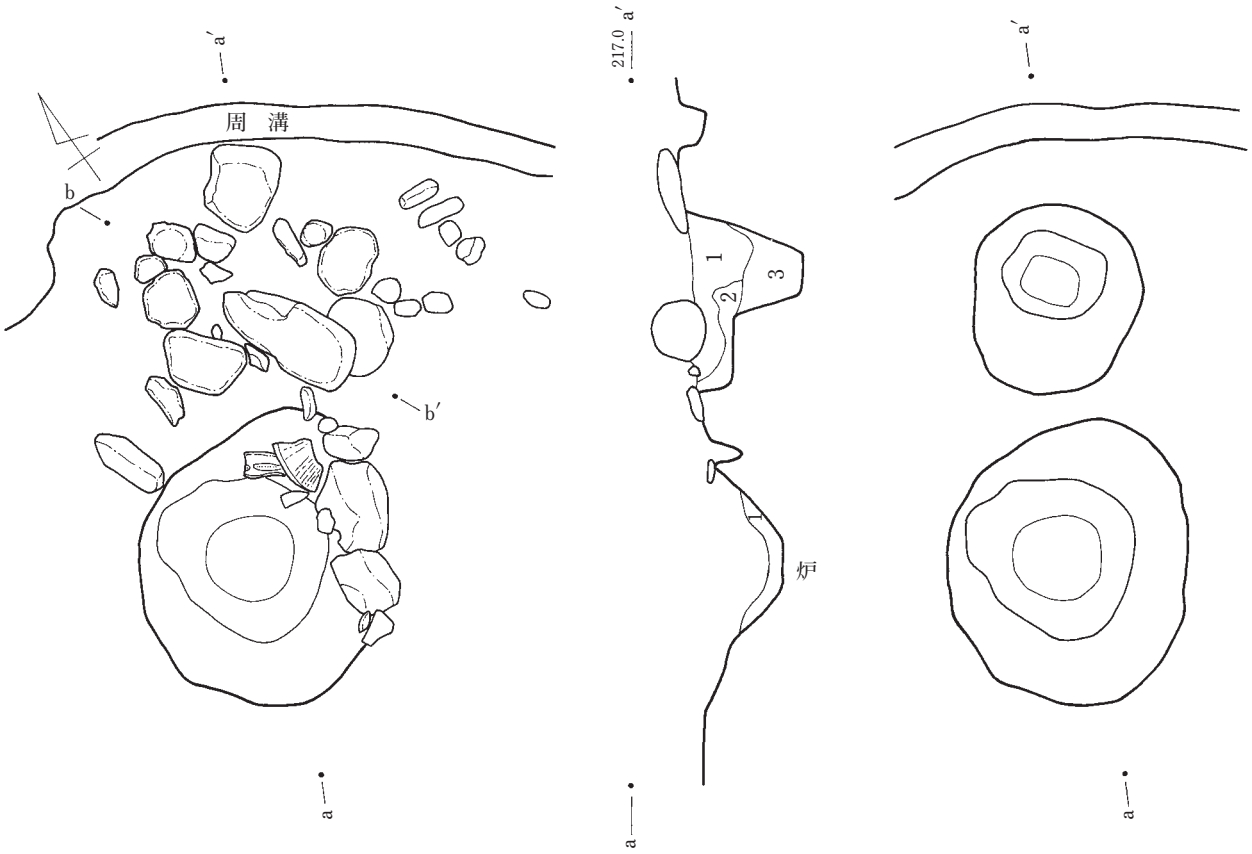
第９図　５号住居址出土遺物（2）



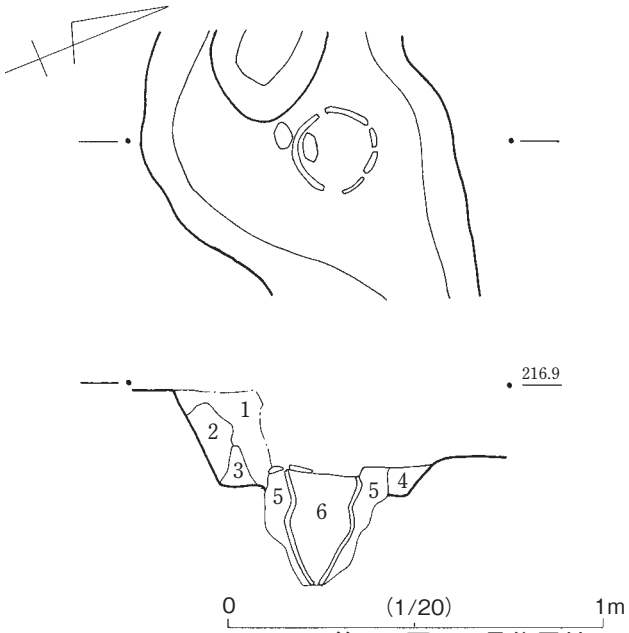
6号住居址　覆土

1　暗褐色土　　黒灰色スコリア(2㎜～5㎜)多い。橙色スコリア(1㎜～3㎜)、炭化粒やや多い。焼土粒(2㎜～5㎜)わずかに含む。
2　黄褐色土　　細粒の橙色スコリア多い。黒灰色スコリアやや多い。黒色土が斑状に混じる。
3　黄褐色土　　細粒の橙色スコリア、炭化粒多い。
4　暗黄褐色土　地山ローム土を斑状に含む。細粒の黒灰色スコリア多い。
5　暗黄褐色土　4に似るが、スコリア少ない。
6　地山ローム塊
7　暗褐色土　　橙色・黒灰色スコリア少量。
8　暗褐色土　　粗粒。
9　暗褐色土　　橙色スコリア、炭化粒含む。

第10図　6号住居址

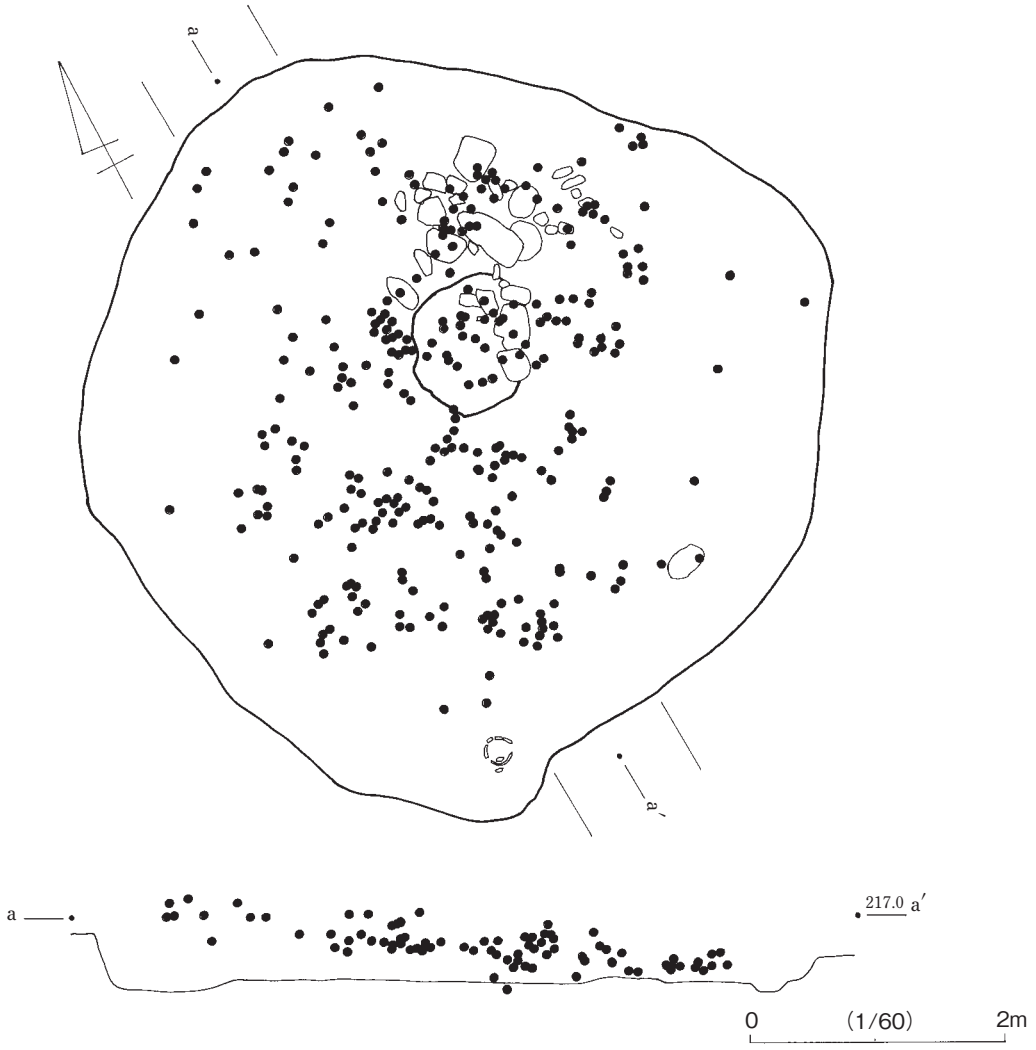


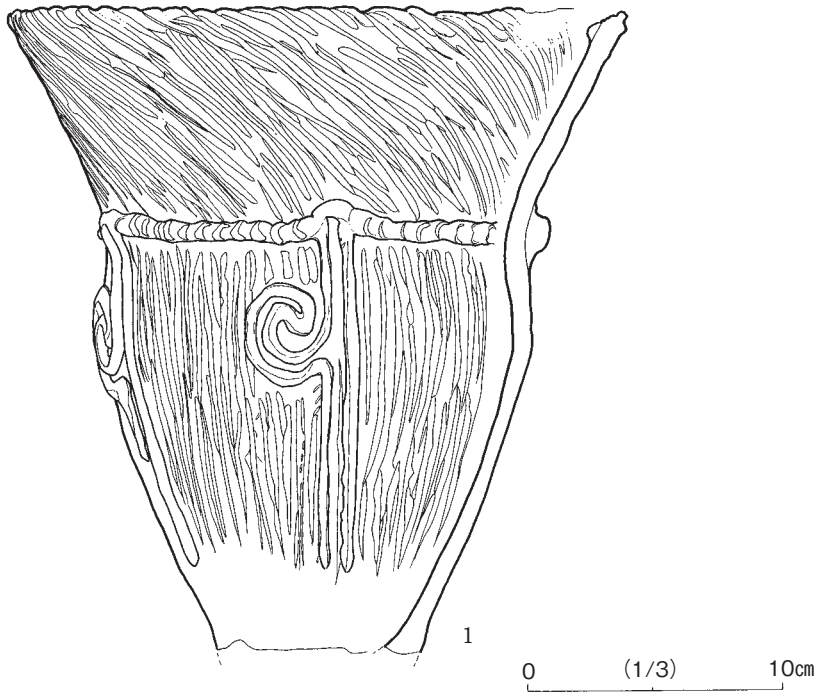
6号住居址　炉
1　焼土純層　粗粒。
6号住居址　石柱･石壇掘り方覆土
1　暗褐色土　　炭化粒含む。
2　にぶい黄褐色土
3　暗褐色土　　炭化粒をまばらに含む。



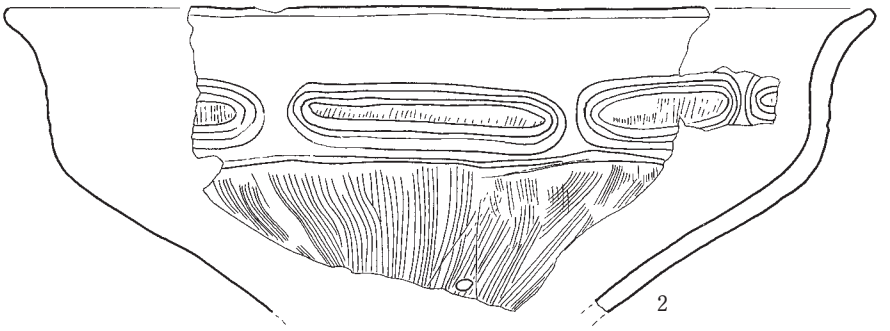
6号住居址　埋甕
1　暗黄褐色土
2　暗褐色土　　黄褐色土塊を含む。
3　地山ローム塊
4　暗褐色土　　周溝覆土。
5　暗褐色土　　埋甕掘り方覆土で､炭化粒多い。
6　暗褐色土　　埋甕覆土。

第 11 図　６号住居址　石柱・石壇・炉、埋甕

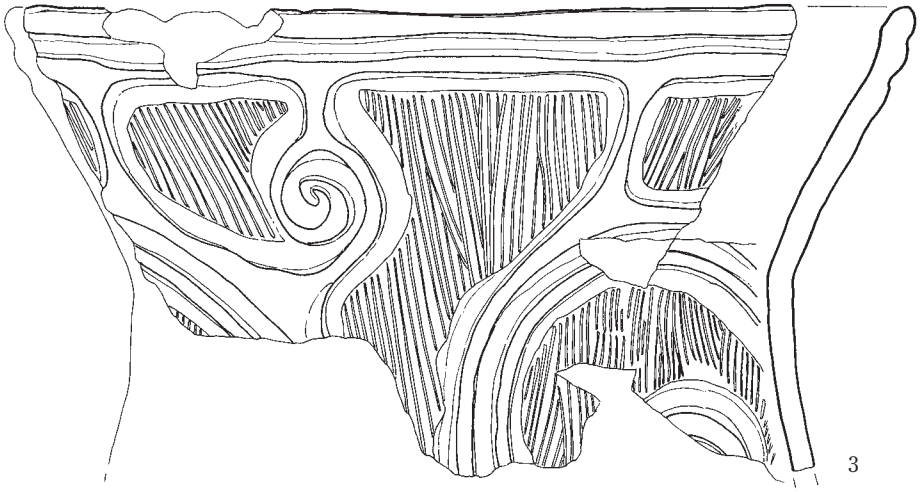


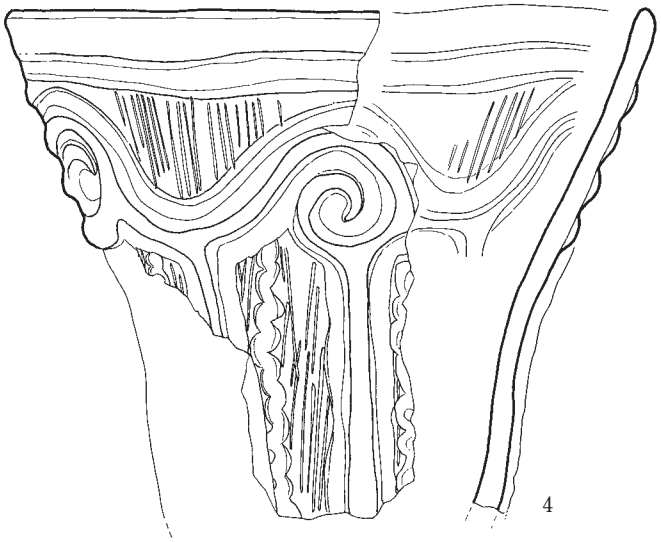


第 12 図　6 号住居址遺物分布図、出土遺物（1）



0 (1/4) 10cm

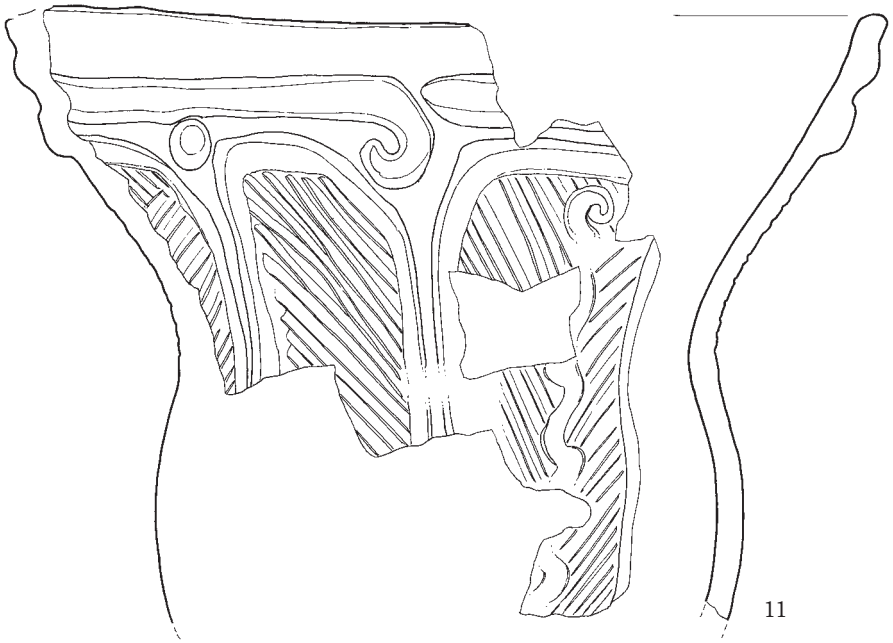


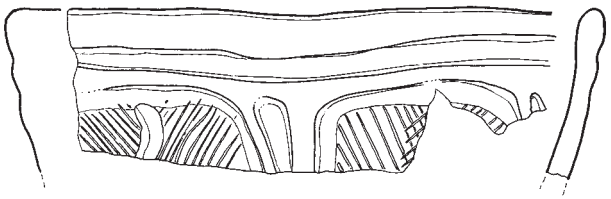


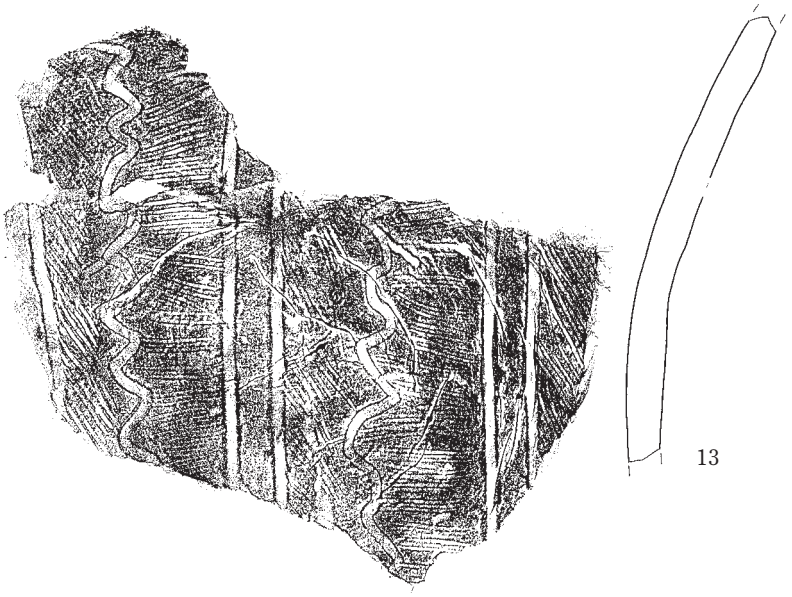
0 (1/3) 10cm

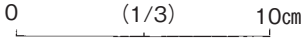
第 13 図　6 号住居址　出土遺物（2）

第 14 図　6 号住居址　出土遺物（3）

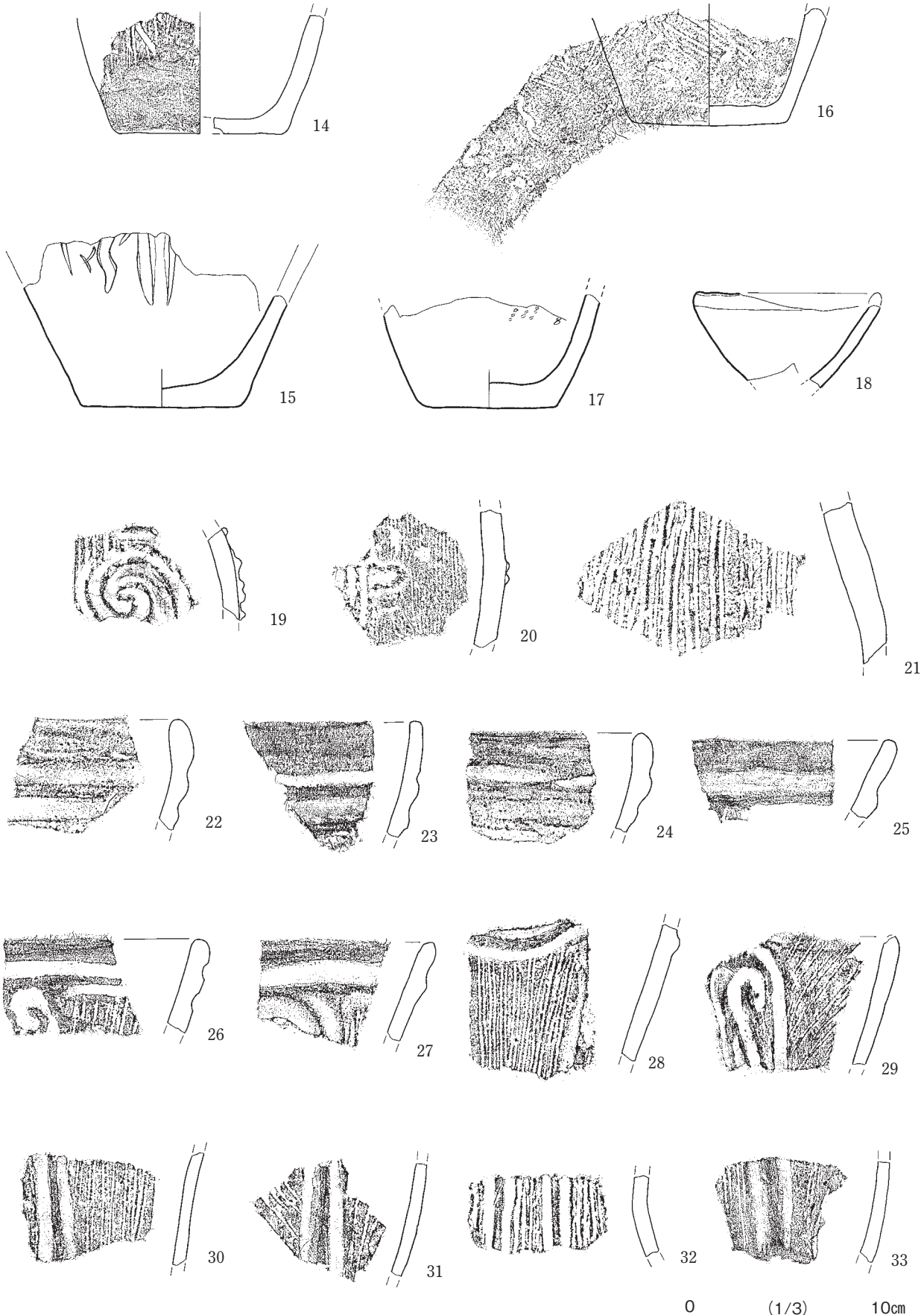




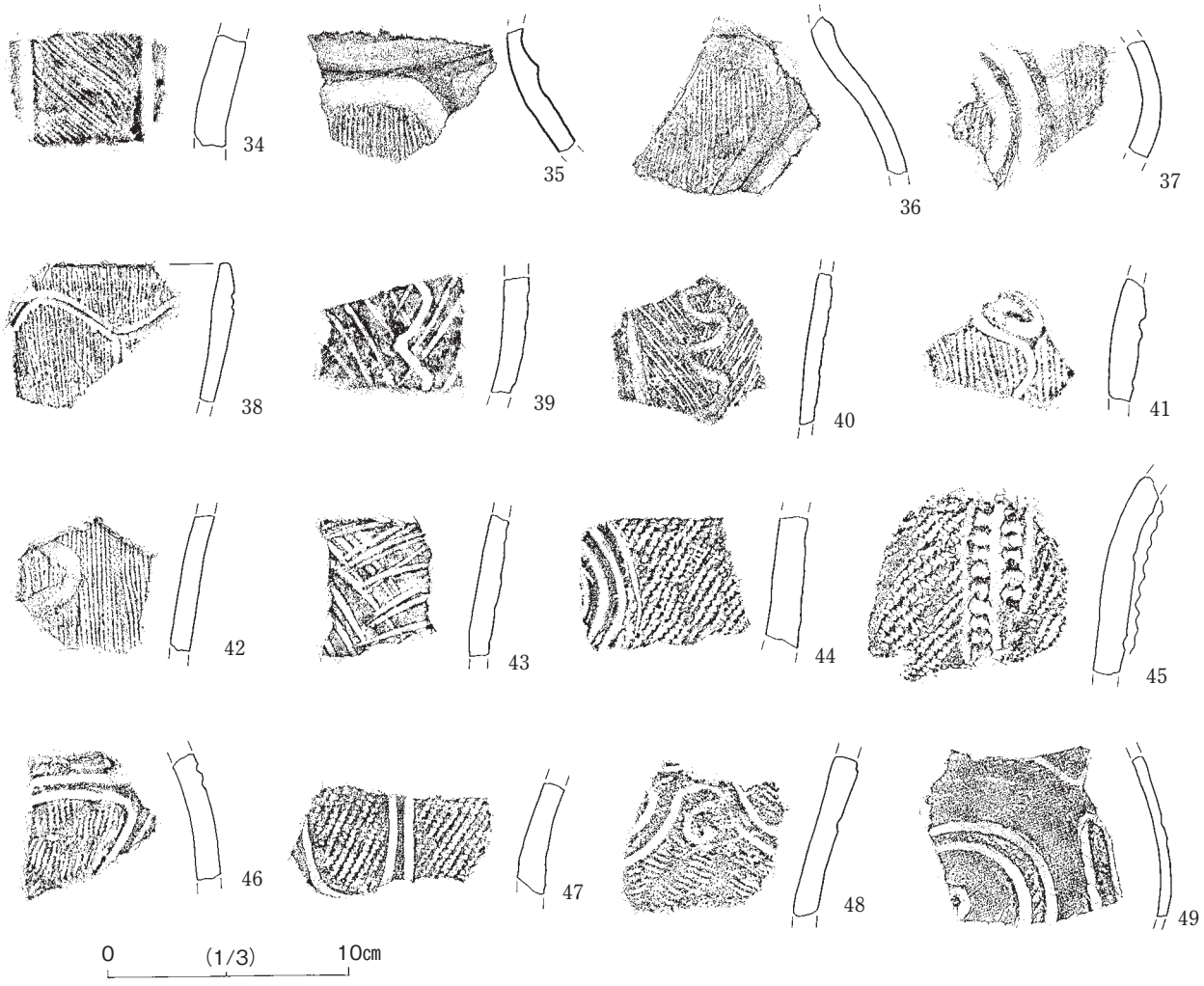




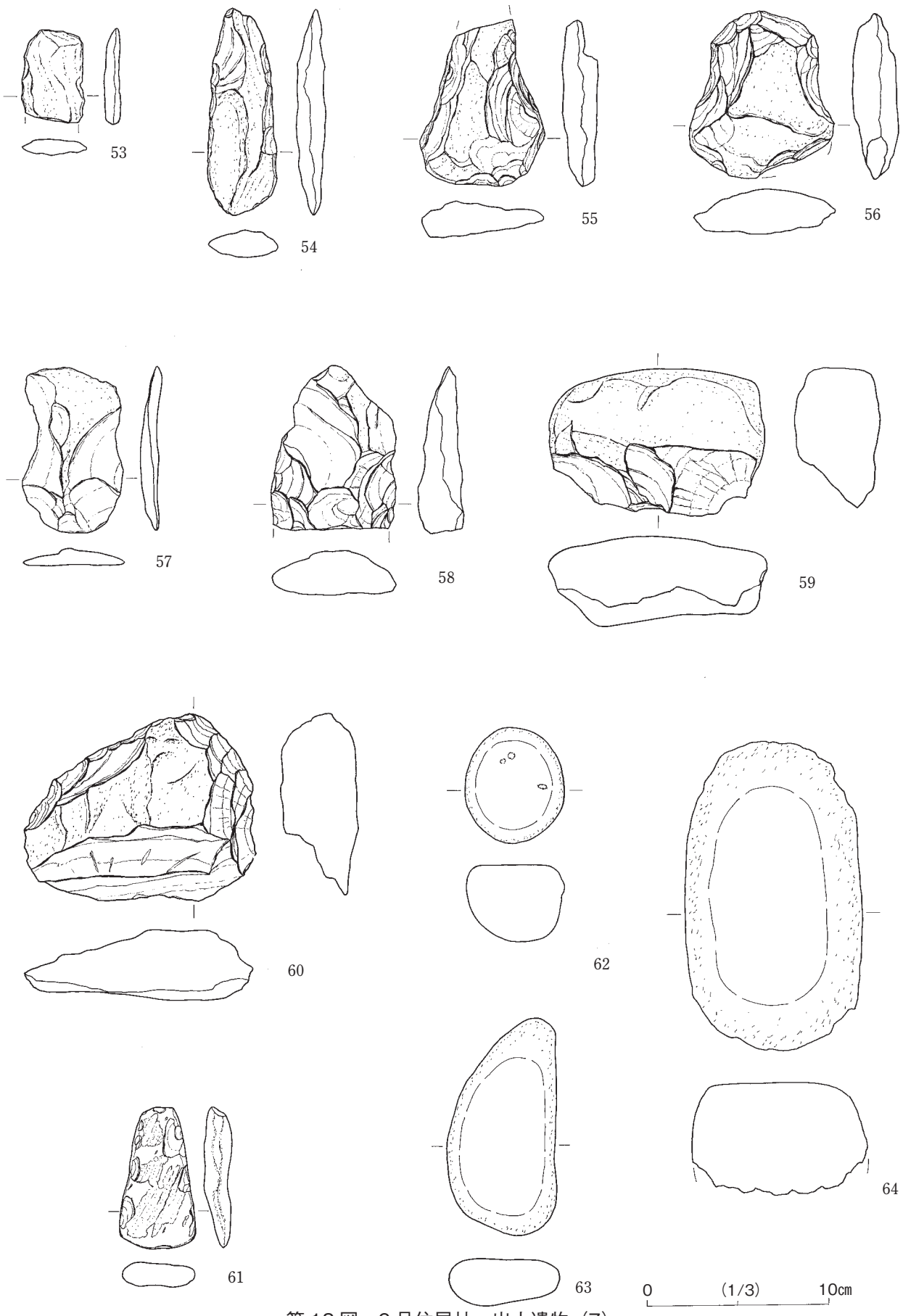
第15図　6号住居址　出土遺物（4）



第 16 図　6 号住居址　出土遺物（5）



第 17 図　6 号住居址　出土遺物（6）



第18図　6号住居址　出土遺物（7）

7号住居址（第19～24図、図版4・43～45）

第Ⅰ次調査で検出した。S－8区に位置し、確認面は第Ⅷ層である。平面は不整方形で、長軸570㎝を測る。主軸方位N－30°－E。壁高は35㎝前後である。耕作等による攪乱を受けるが、遺存状況は比較的良い。覆土は上層に黄褐色土、床面を暗褐色土が覆う。

ピットは主柱穴と考えられる4基が検出された。長軸40㎝～45㎝、深さ70㎝～55㎝を測る。周溝は北壁沿いを除いて検出され、幅50㎝～20㎝、深さ15㎝～10㎝である。

炉は石囲炉で、炉石が長方形(長軸100㎝･短軸80㎝)に配置される。炉の深さは20㎝で、底面は平坦で、下部に焼土が堆積する。

埋甕（1）が竪穴南端で検出され、深鉢1個体が正位で埋められる。

遺物は覆土から床面にかけて分布する。床面遺物に小形の深鉢（10）がある。他は覆土中の出土で、土器・石器が含まれる。石器は打製石斧（30～36)、礫器（37～39)、磨製石斧の未成品（40)、台石(41)、石錘（42）がある。

出土土器

1は埋甕に用いられた鉢形土器である。推定口径34㎝、器高28.5㎝。軟質で脆いため、取り上げ時に全体の1/2を失った。胴上半部に隆帯と沈線による区画を配し、内部に縄文を施す。胎土に金雲母、赤色粒子、砂粒を含む。色調はにぶい褐色で、焼成は不良である。

2は覆土下層でまとまって出土した深鉢である。2/3残存。口縁部に短沈線と平行沈線による連弧文、頸部に平行沈線と結節沈線、波状貼付文を巡らす。胴部は平行沈線による連弧文から波状沈線文を垂下する。地文は単節縄文である。沈線の施文具は半裁竹管で、連弧文と波状沈線文に細い竹管、短沈線と頸部の平行沈線に太い竹管を用いている。胎土に金雲母、石英を含む。色調は暗褐色で、焼成は良い。

3～5は頸部にX字状把手が付く大形の深鉢で、胴部に3本単位の隆帯を渦巻状に施す。地文は条線である。6･7は口縁部に重弧文を配し、波状の粘土紐を貼付する。8･9はX字状把手が付く鉢形土器で、胴上半部に隆帯区画の文様帯を配す。

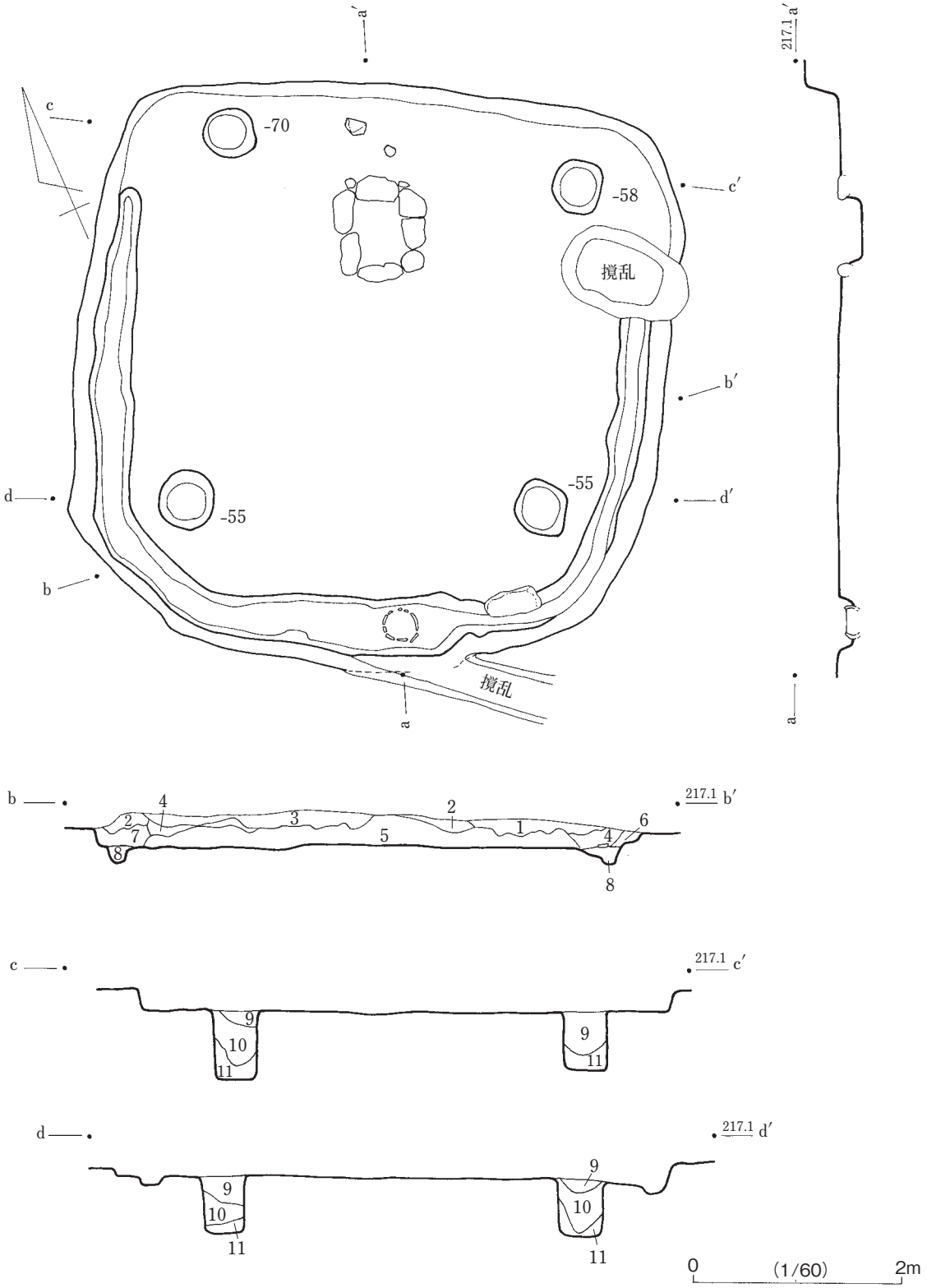
10～12は加曽利E式土器で、口縁部に隆帯による渦巻文を配した縄文地の深鉢である。10は床面上に散乱していた小形の深鉢で、胴下半部が欠損する。口径19㎝、現存高15㎝。頸部は無文で、指頭の押さえによる整形痕が外面に残る。胴部は平行沈線によって頸部と区画され、蕨手状の波状沈線文が垂下する。胎土に黒雲母、石英、赤色粒子、砂粒を含む。色調はにぶい褐色で、焼成は良い。

13～23は胴部に条線を施す深鉢である。13～15は無文口縁、16～18は口縁部に斜行条線を施した大形の深鉢で、頸部に隆帯が巡る。16は口縁部に粘土紐を重ねる。22・23は口縁部に半裁竹管による連弧文が巡る。

26・27は縄文地の深鉢で、胴部に平行沈線を垂下する。26は口縁部に列点文が巡る。

24・25、28・29は鉢形土器である。24・25は同一個体と思われ、胴上半部を2本単位の横位隆帯で区画し、内部に縄文と横位隆帯を施す。28・29は無文である。

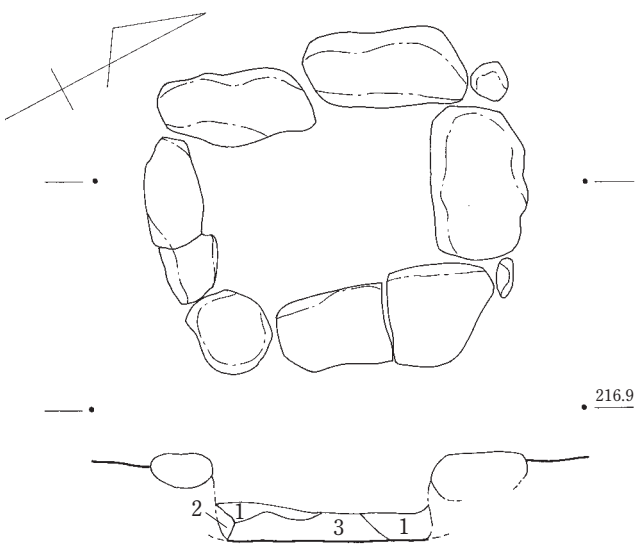
以上の土器は加曽利E 2式・曽利Ⅱ式期に該当する。

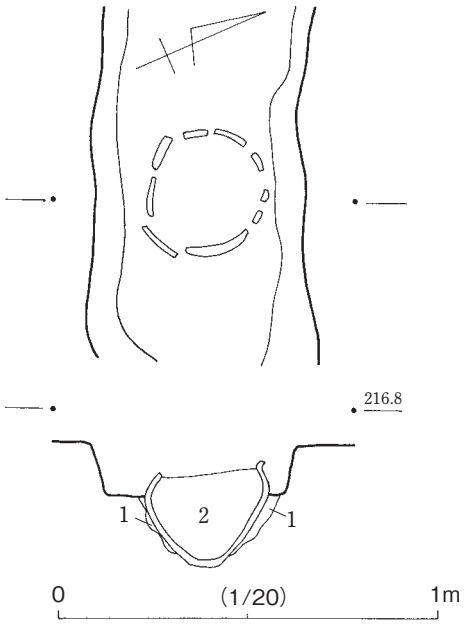


7号住居址　覆土
1　攪乱
2　黄褐色土　橙色スコリア、炭化粒含む。
3　暗褐色土　黄褐色土を斑状に含む。橙色スコリア、炭化粒含む。
4　黄褐色土　2に似るが、締まり弱い。
5　暗褐色土　大粒の橙色スコリア(2㎜～5㎜)、地山ローム塊(1㎝以下)、炭化粒含む。
6　暗褐色土　地山ローム塊(3㎝以下)含む。
7　暗褐色土
8　暗褐色土　橙色スコリア、地山ローム塊(3㎝以下)、炭化粒含む。

7号住居址　柱穴
9　暗褐色土　橙色スコリア、炭化粒多い。
10　暗褐色土　締まり弱い。大粒の橙色スコリア、炭化粒多い。
11　暗黄褐色土　粘性強い。

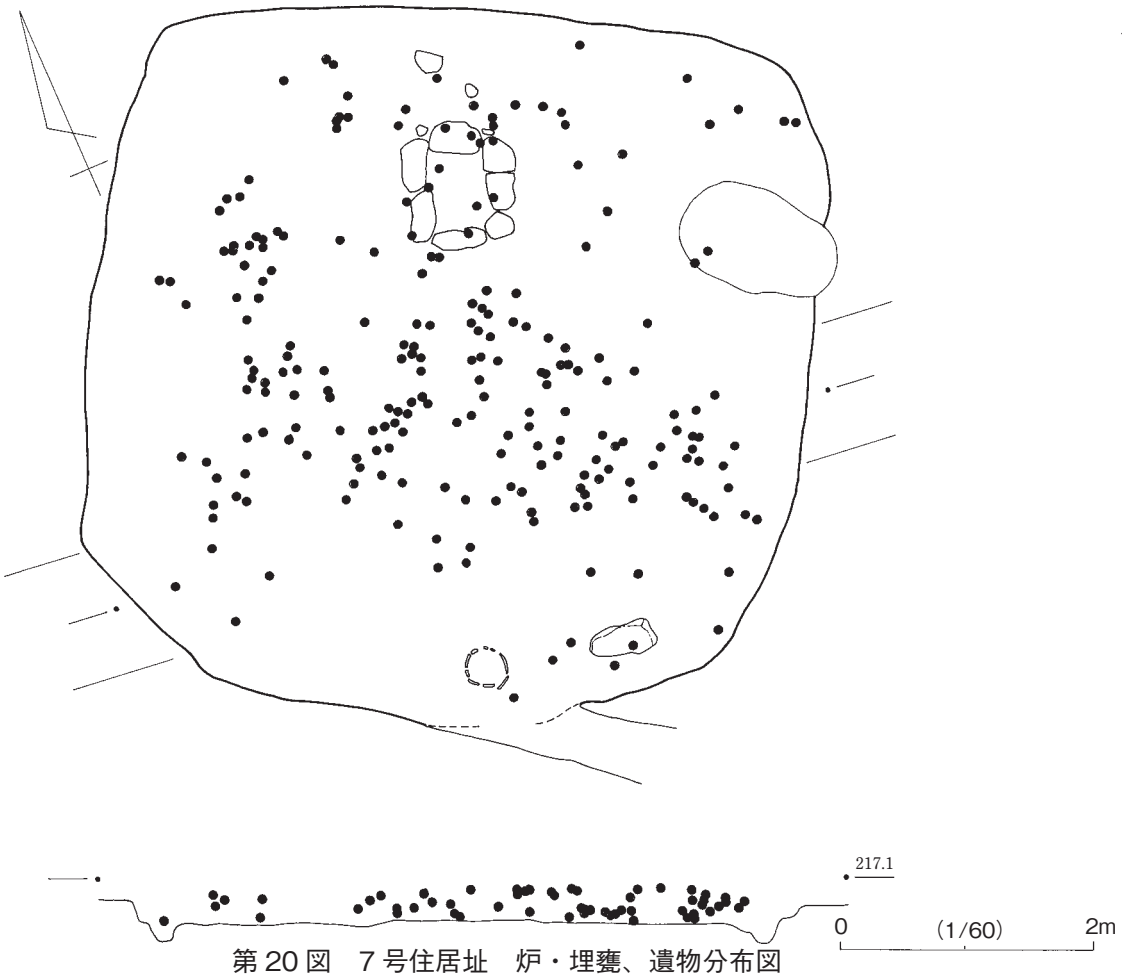
第19図　7号住居址



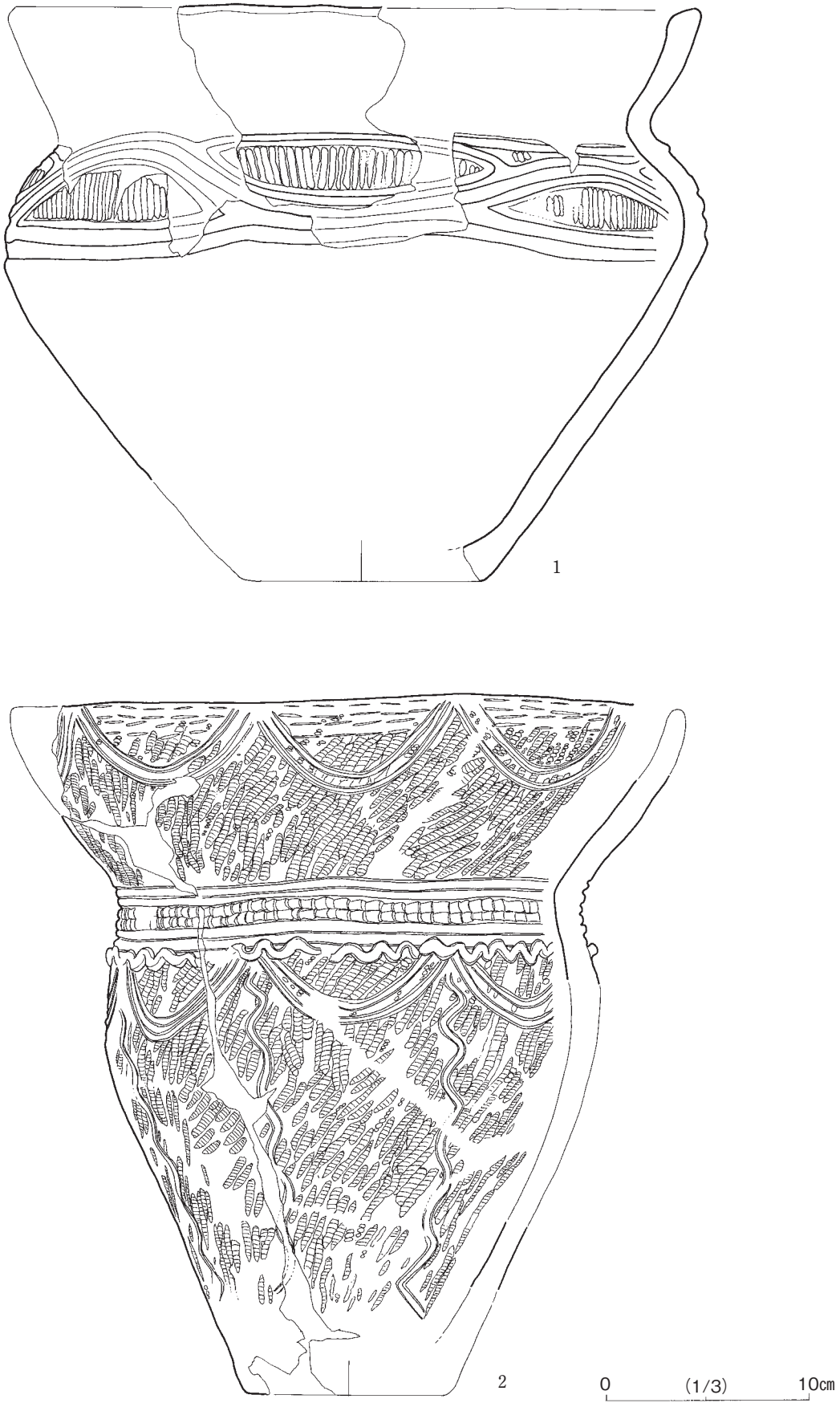


7号住居址　炉
1　暗褐色土　　橙色スコリア、焼土粒、炭化粒含む。
2　地山ローム塊
3　橙褐色土　　焼土粒多い。炭化粒、暗褐色土粒含む。

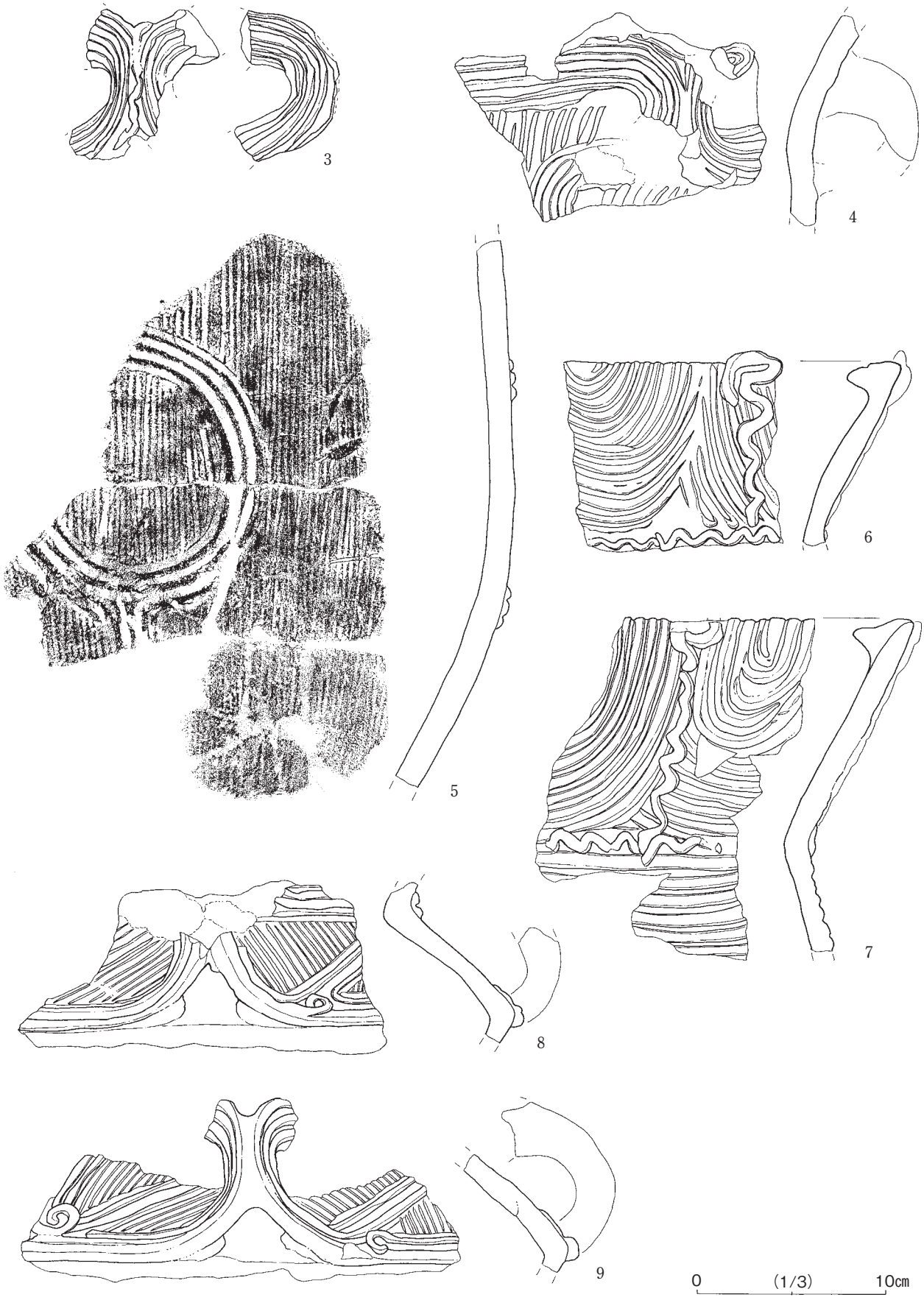
7号住居址　埋甕
1　暗褐色土　埋甕掘り方覆土で、炭化粒多い。
2　暗褐色土　埋甕覆土で、周溝覆土と同質。橙色スコリア
(1㎜～6㎜)多い。地山ローム塊(1㎜～5㎜)含む。



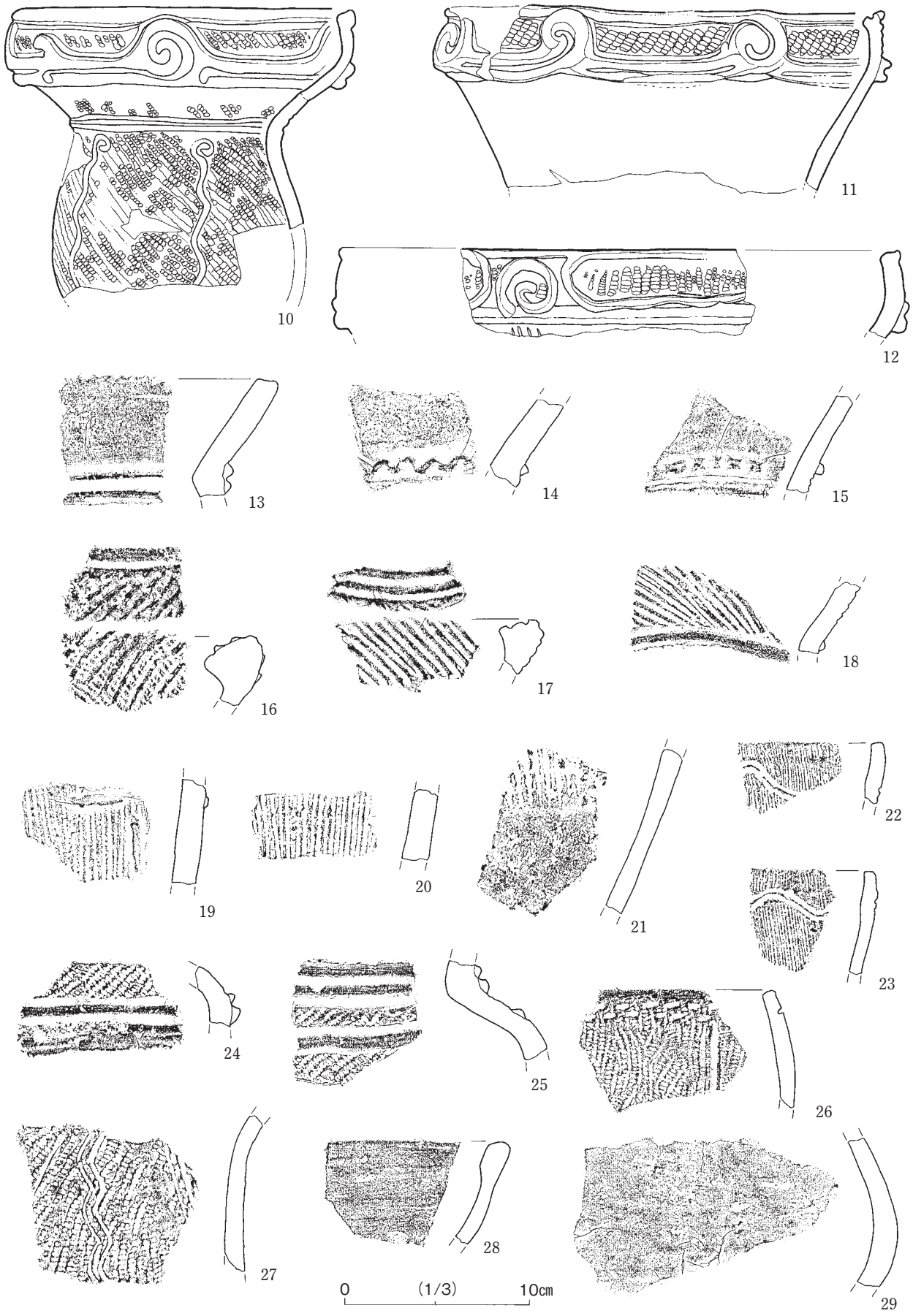
第20図　7号住居址　炉・埋甕、遺物分布図



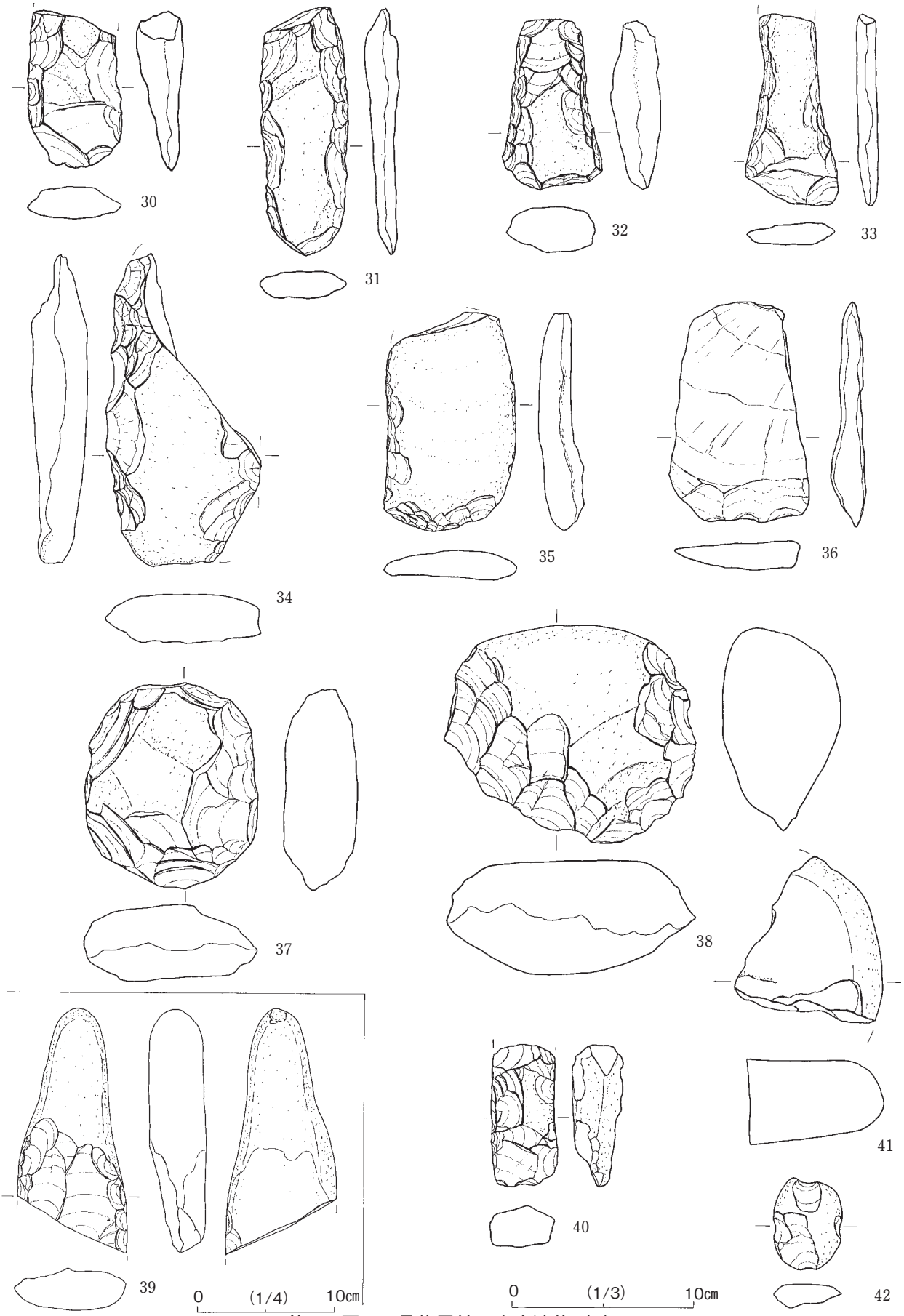
第 21 図　7 号住居址　出土遺物（1）



第 22 図　7 号住居址　出土遺物（2）



第 23 図　7 号住居址　出土遺物（3）



第 24 図　7 号住居址　出土遺物（4）

8号住居址（第25～31図、図版5・45～47）

第Ⅰ次調査で検出した。Ｔ－9区に位置し、確認面は第Ⅷ層である。平面は円形で、直径500㎝を測る。主軸方位Ｎ－35°－Ｅ。壁高は最高20㎝を測るが、斜面下方に向けて低くなり南壁を失う。攪乱を受け、遺存状況は悪い。覆土は暗褐色土が主体である。

ピットは主柱穴と考えられる4基が検出された。いずれも長軸45㎝、深さ70㎝を測る。周溝は北壁沿いに検出され、幅70㎝～20㎝、深さ10㎝である。

炉は石囲炉で、炉石が75㎝×60㎝の範囲に確認されたが配置は乱れていた。深さは20㎝である。

埋甕（1）が竪穴南端で検出され、深鉢1個体の胴部が正位で埋められる。

遺物は覆土から床面に分布する。床面遺物に深鉢（5・7）がある。他は覆土出土で、土器・石器が含まれる。石器は打製石斧（42）、横刃形石器（43）、敲石（44）、凹石（45）、磨石類（46･47）がある。

出土土器

1は埋甕に用いられた深鉢で、口縁と胴下半部を欠損する。胴部最大径23.3㎝、残存高12㎝。頸部や胴部に波状・渦巻状の粘土紐を貼付する。地文は縦位の条線である。胎土に雲母、砂粒を含む。色調は赤褐色やにぶい褐色で、焼成は良い。

2は大形深鉢の口縁部で、2/3が残存する。口径44㎝。覆土下層の炉の近くにまとまり、破片が周辺に飛散した状況で出土した。斜行条線を施し、頸部に刻みを加えた隆帯が巡る。胎土に雲母、石英、赤色粒子、砂粒を含む。色調はにぶい褐色で、焼成は良い。

3は口縁部に一対の耳状把手を持つ小形の深鉢である。口径20.5㎝、残存高20㎝。条線地に波状の粘土紐を貼付する。胎土に雲母、砂粒を含む。色調はにぶい褐色で、焼成は良い。

4は小形の深鉢で、覆土下層で潰れた状態で出土した。胴部のみ残存する。胴部を2本単位の縦位隆帯で4区画に分け、内部に綾杉状条線と2本単位の沈線を垂下する。内面にタール状付着物が残る。胎土に金雲母、石英、砂粒を含む。色調は赤褐色で、焼成は良い。

5は深鉢（2）とまとまって出土した。口径18.7㎝、残存高24.7㎝、底径8.3㎝。口縁部は緩く波状を呈し、波頂部は欠損する。口縁部は無文で、直下に隆帯を巡らして胴部と区画する。口唇部内面に隆帯を巡らす。胴部に2本単位の隆帯を縦・斜位に施し、端部は渦巻状となる。地文は綾杉状条線である。胎土に雲母、赤色粒子、砂粒、小石を含む。色調はにぶい褐色で、焼成は良い。

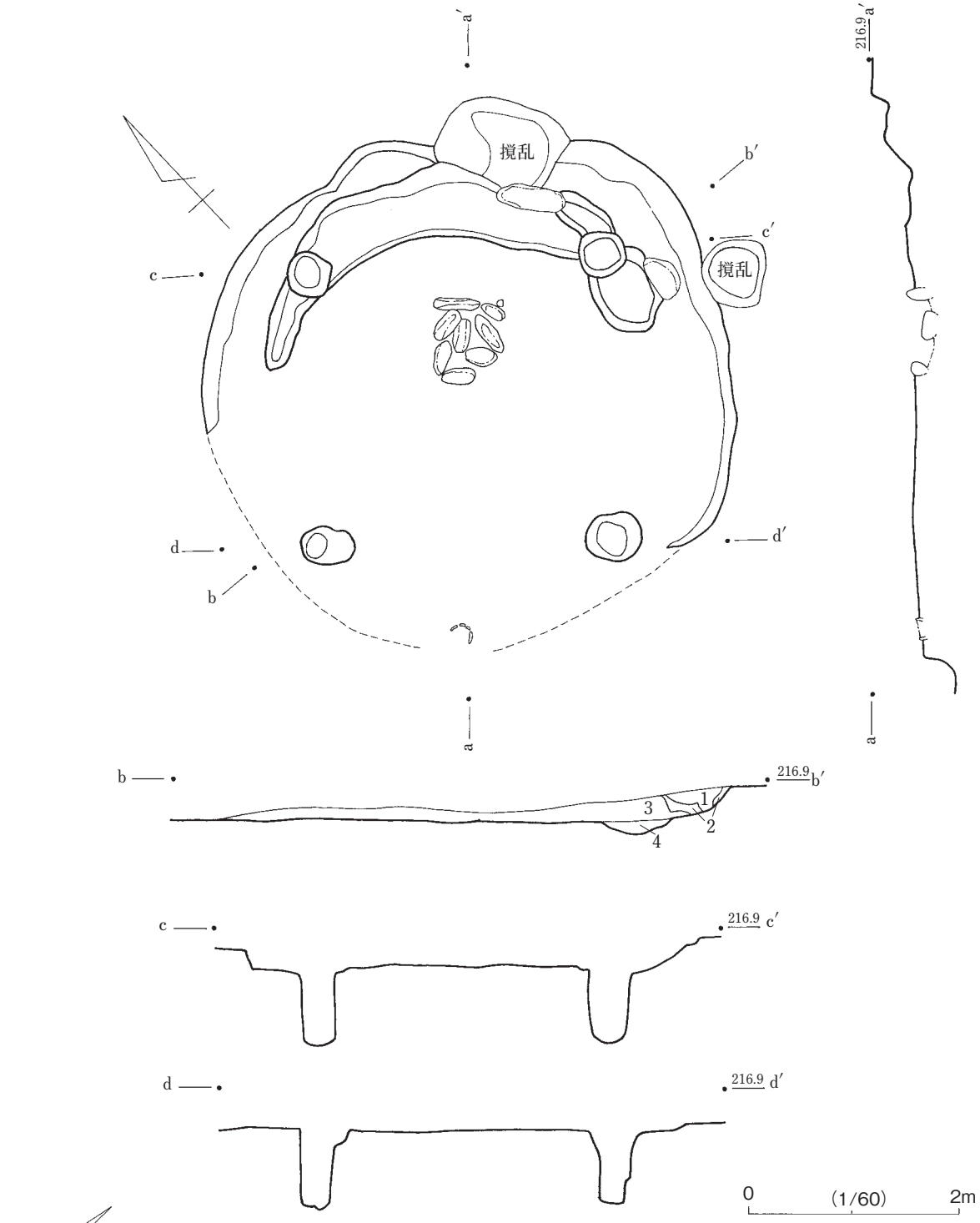
6～9は縄文地の深鉢である。6は覆土下層の炉の近くにまとまり、破片が周辺に飛散していた。口縁部は隆帯による渦巻つなぎ弧文で、胴部は3本単位の縦位沈線と2本単位の波状沈線を垂下する。地文は単節縄文。7は小形深鉢で、床面で潰れた状態で出土した。口縁から胴部1/2が残存する。推定口径13.3㎝、残存高12㎝。半裁竹管による連弧文や3本単位の縦位沈線を施す。地文は単節縄文である。

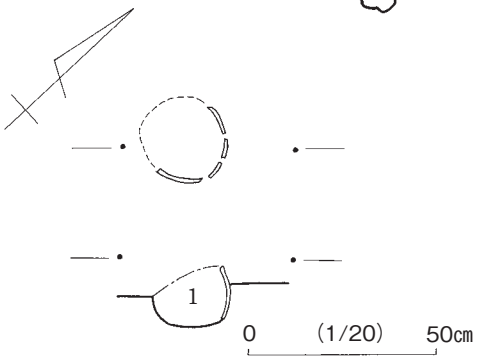
10～14は埋甕（1）と同種で、渦巻や波状の粘土紐を貼付する。

15～21は波状口縁の深鉢である。15～18は口縁部に沈線区画の文様帯を配し、胴部は縦位の平行沈線で区画し、綾杉状条線を施す。縦位沈線間には連続する刻みが加えられる。19～21は口縁部に隆帯による渦巻つなぎ弧文を配し、21は胴部の縄文地に沈線による連弧文や渦巻文を配す。

22・23は口縁部に渦巻つなぎ弧文を配し、22は縄文、23は撚糸文を地文とする。23は胴部に弧状の沈線文が見られる。24～26は口縁から胴上半部に平行沈線による連弧文を配し、撚糸文を地文とする。25は頸部に横位沈線が巡る。27～33は縄文地、34は胴部の条線地に3本単位の隆帯を配す。35～38は無文の深鉢底部で、37・38は木葉痕が見られる。39・40は鉢形土器、41は浅鉢である。

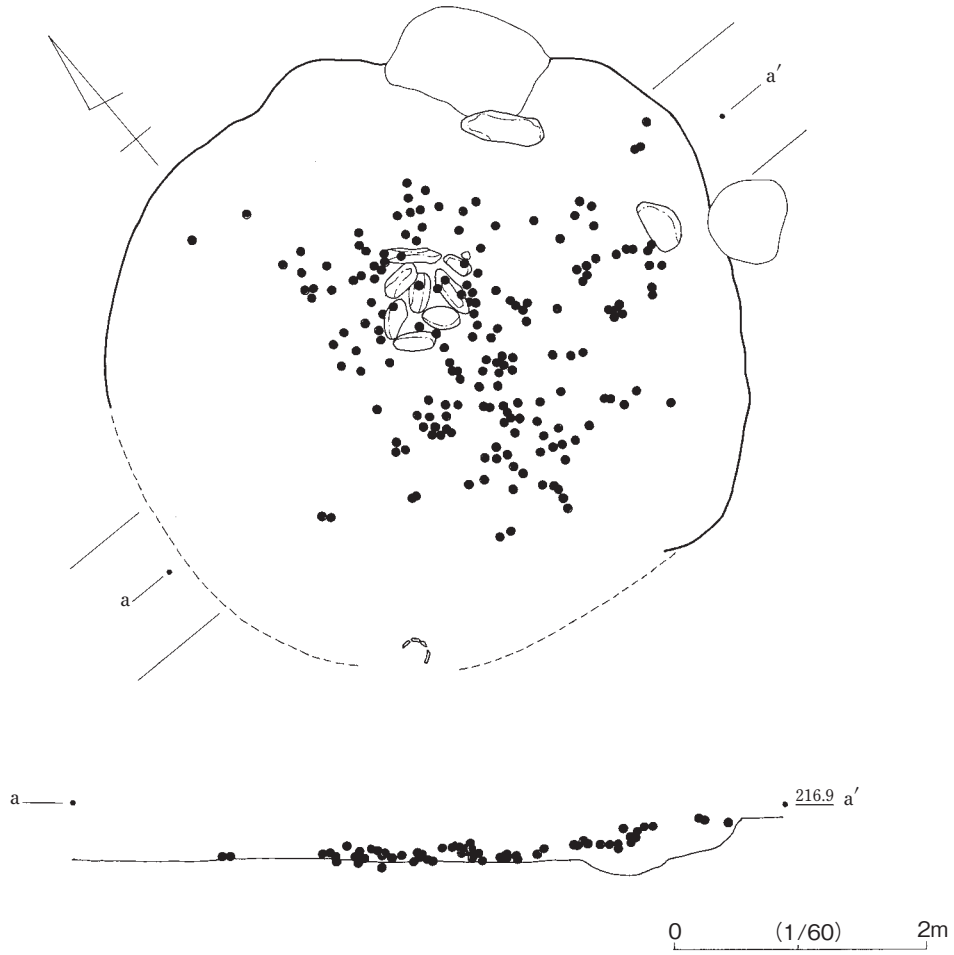
以上の土器は加曽利Ｅ2～Ｅ3式、曽利Ⅱ～Ⅳ式期に該当し、埋甕は曽利Ⅱあるいは Ⅲ式である。

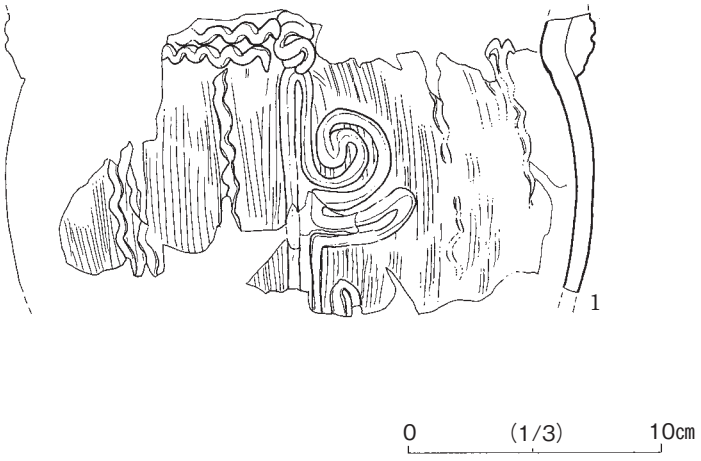




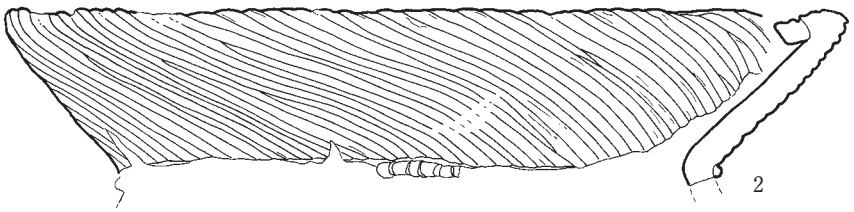
8号住居址　覆土
1　暗褐色土　橙色スコリア、炭化粒含む。
2　黄褐色土
3　暗褐色土　橙色スコリア、地山ローム塊(1cm～3cm)、炭化粒含む。
4　周溝覆土
8号住居址　埋甕
1　暗褐色土

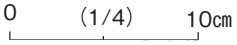
第 25 図　8 号住居址　埋甕

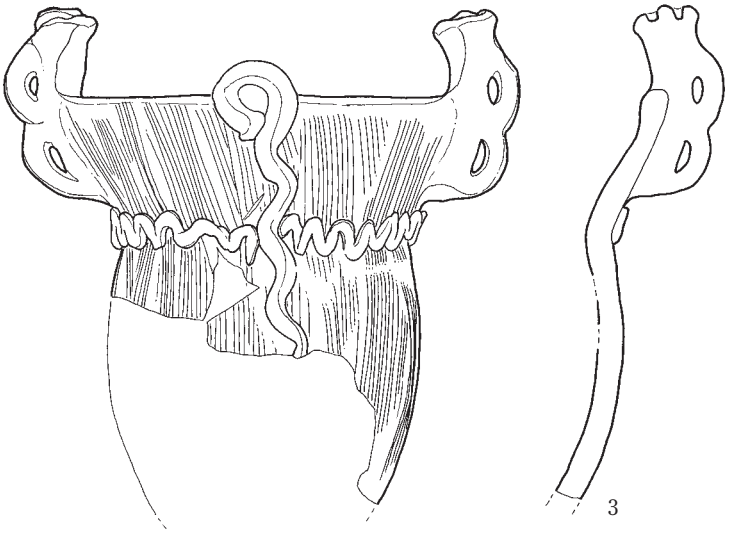


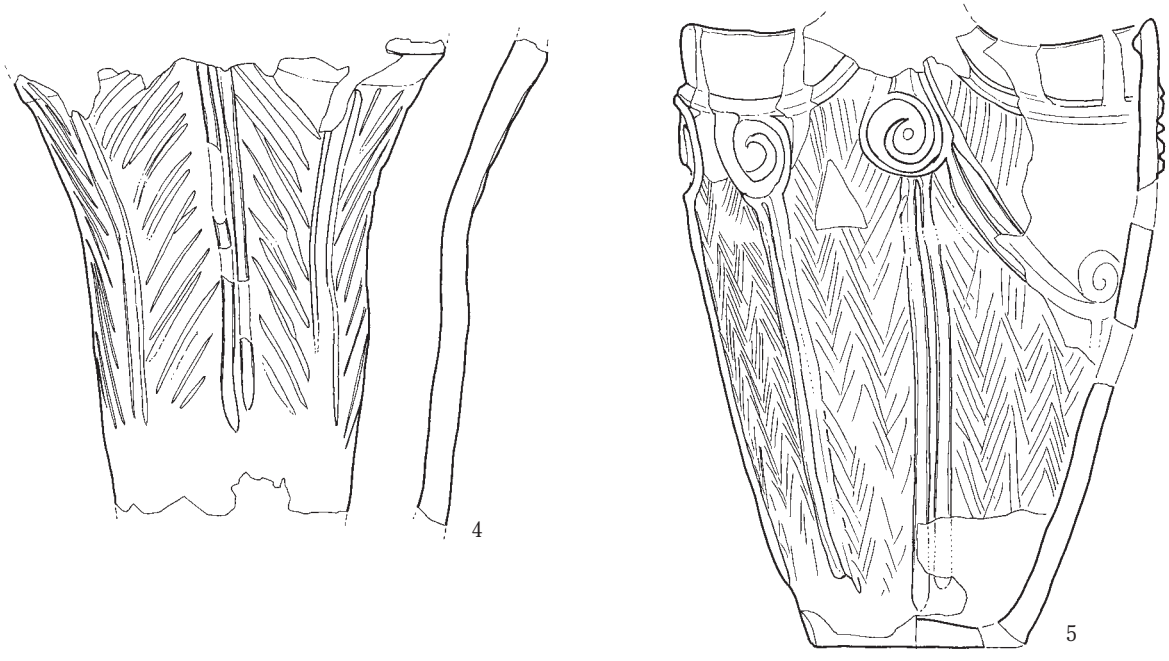


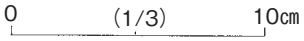
第 26 図　8 号住居址　遺物分布図、出土遺物（1）



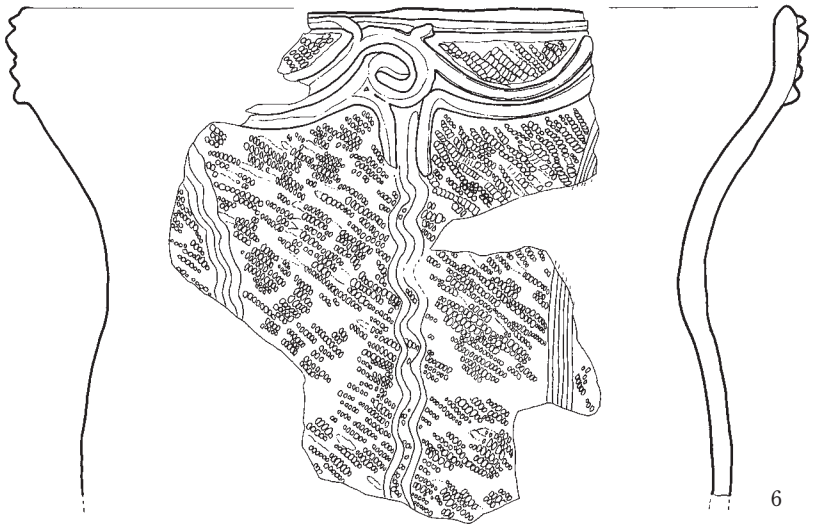




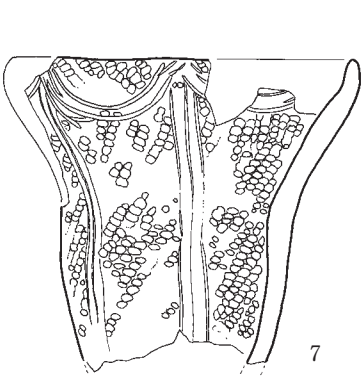


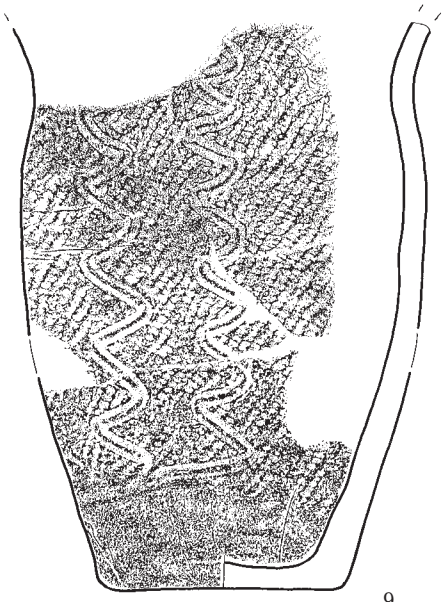


第 27 図　8 号住居址　出土遺物（2）



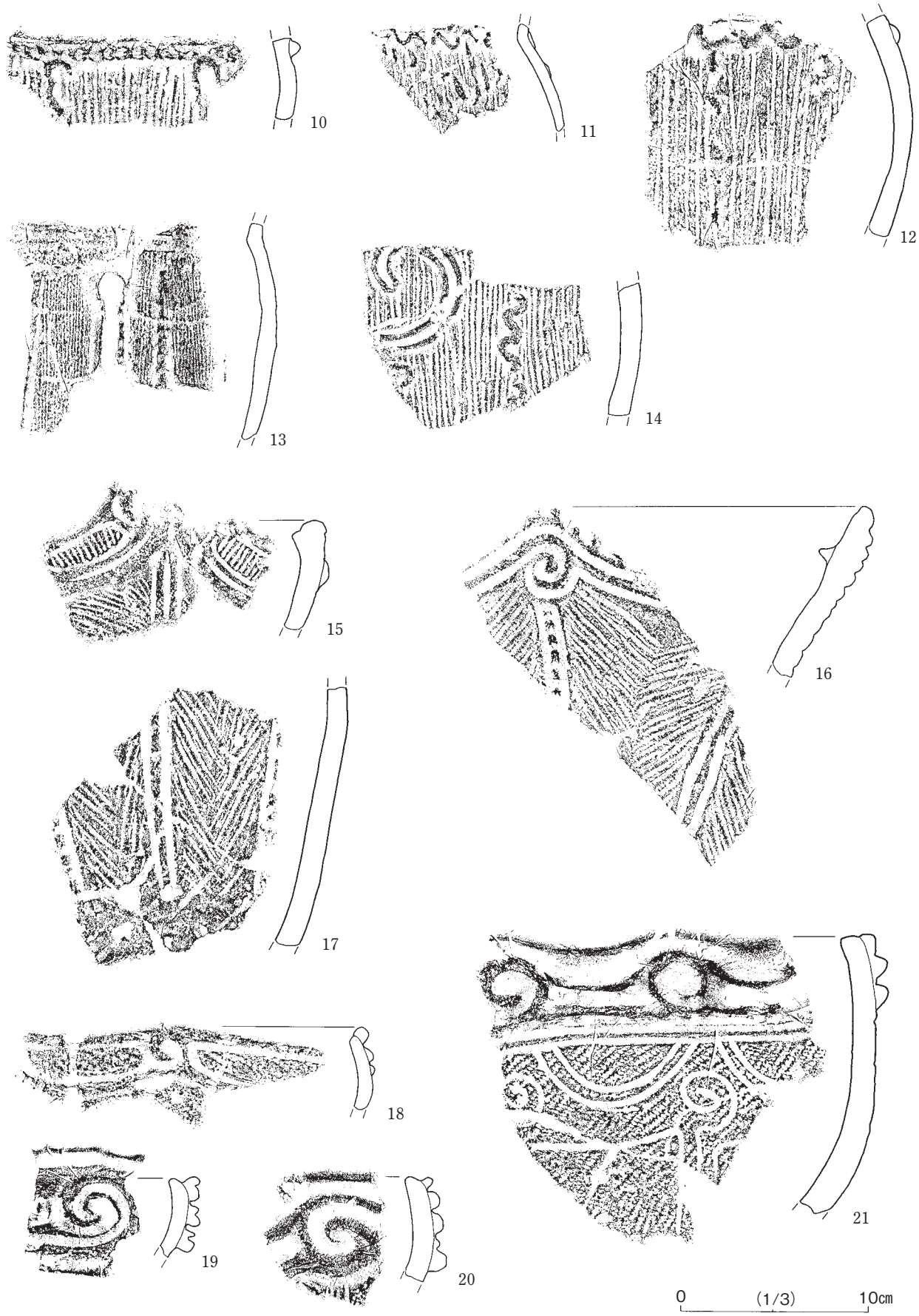
0 (1/4) 10cm



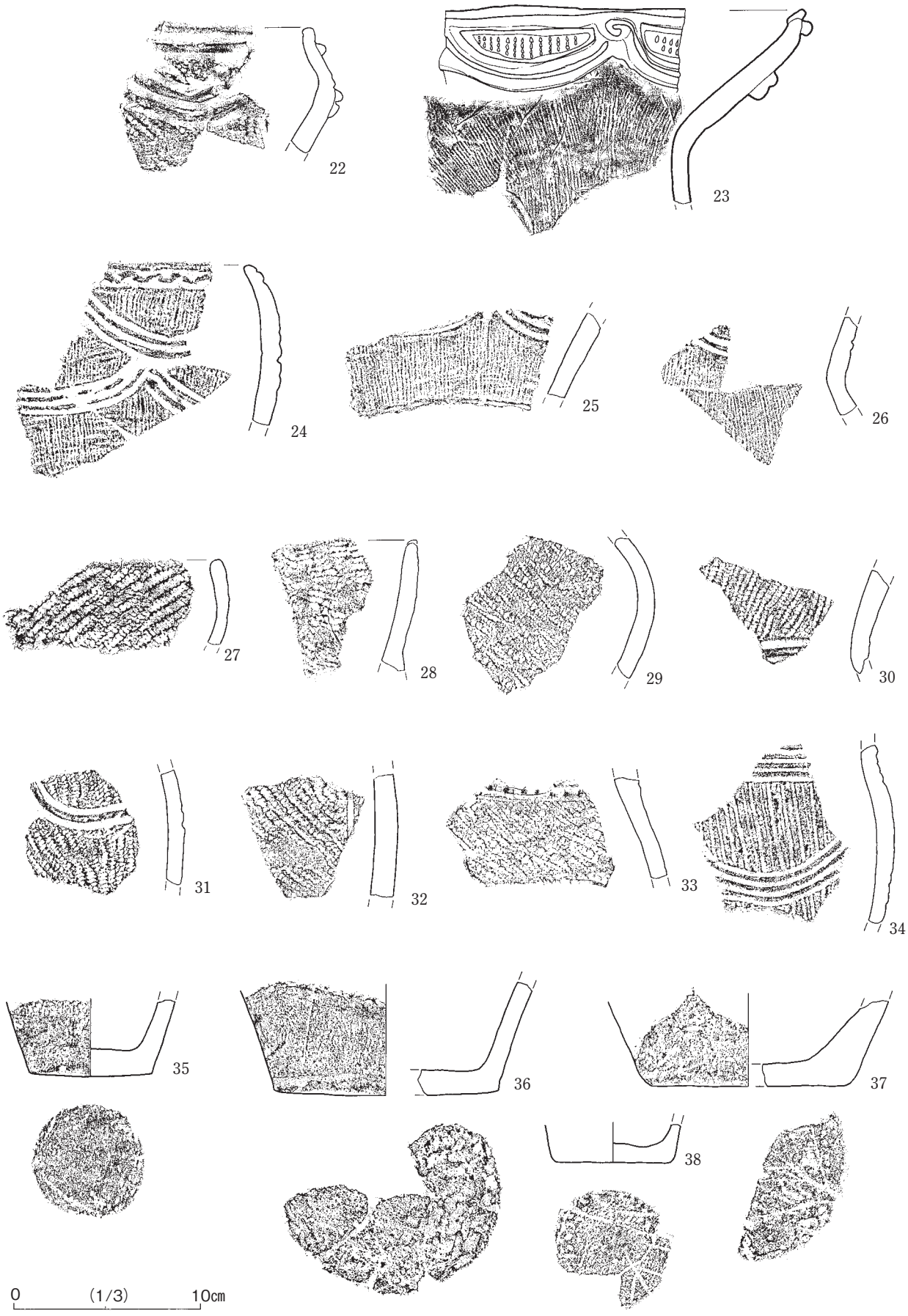


0 (1/3) 10cm

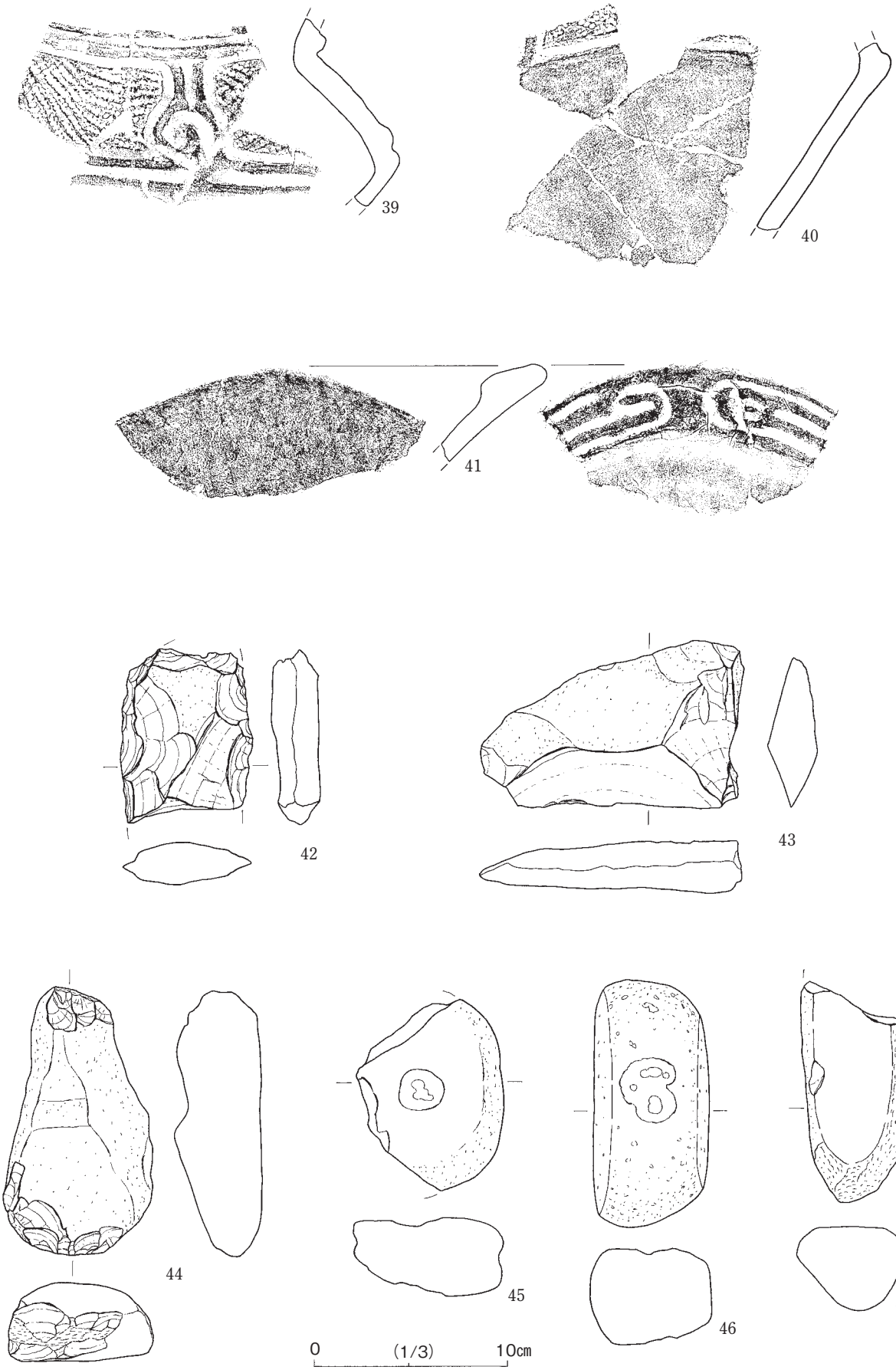
第 28 図　8 号住居址　出土遺物（3）



第 29 図　8 号住居址　出土遺物（4）



第 30 図　8 号住居址　出土遺物（5）



第 31 図　8 号住居址　出土遺物（6）

9 号住居址（第 32 図、図版 5・47）

第Ⅰ次調査で検出した。Ｔ・Ｕ－ 10 区に位置し、確認面は第Ⅸ層上面である。平面は円形基調で直径約 400㎝と推定されるが、斜面下方で壁を失い、耕作による攪乱を受けており遺存状況は悪い。壁高は最高 18㎝を測る。覆土は暗褐色土が主体である。

ピットや周溝は確認されなかった。炉は平面不整方形の石囲炉だが、炉石の大半が失われている。炉の掘り方は残存規模で長軸 80㎝・短軸 80㎝、深さ 25㎝を測る。

出土遺物はわずかである。1 は緩い波状口縁の深鉢である。波頂部に粘土紐を貼付し、結節縄文を施す。曽利式期に該当する。

10 号住居址（第 32 図、図版 6）

第Ⅰ次調査で検出した。Ｕ－ 6 区に位置し、確認面は表土直下の第Ⅸ層上面である。ピットが環状(直径約 2.5 ｍ）に配置され、中央部の北寄りに炉址と思われる掘り込みを伴う。環状ピットの東側にも 5 基のピットが弧状に配置される。ピットは概ね平面円形で、長軸 20㎝～ 40㎝、深さ 15㎝～ 46㎝を測る。炉址と思われる掘り込みは長軸 85㎝で、壁面の一部が焼土化している。出土遺物はない。

11 号住居址（第 33 図、図版 6・47）

第Ⅰ次調査で検出した。Ｘ－ 8 区に位置し、西側が未調査区にかかる。確認面は表土直下の第Ⅸ層上面である。竪穴の壁は失われ、遺存状況は悪い。平面は円形基調で、9 号住居址と同規模と推定される。

ピットは 7 基が検出された。炉と奥壁の間に位置するピットは大きく、長軸 58㎝・深さ 70㎝を測る。他は長軸 55㎝～ 28㎝、深さ 10㎝～ 55㎝である。明確な主柱穴は不明である。周溝は一部で確認され、幅 40㎝～ 20㎝、深さ 10㎝である。

炉は石囲炉と推定されるが、大きく攪乱を受けているため形状は不明確である。

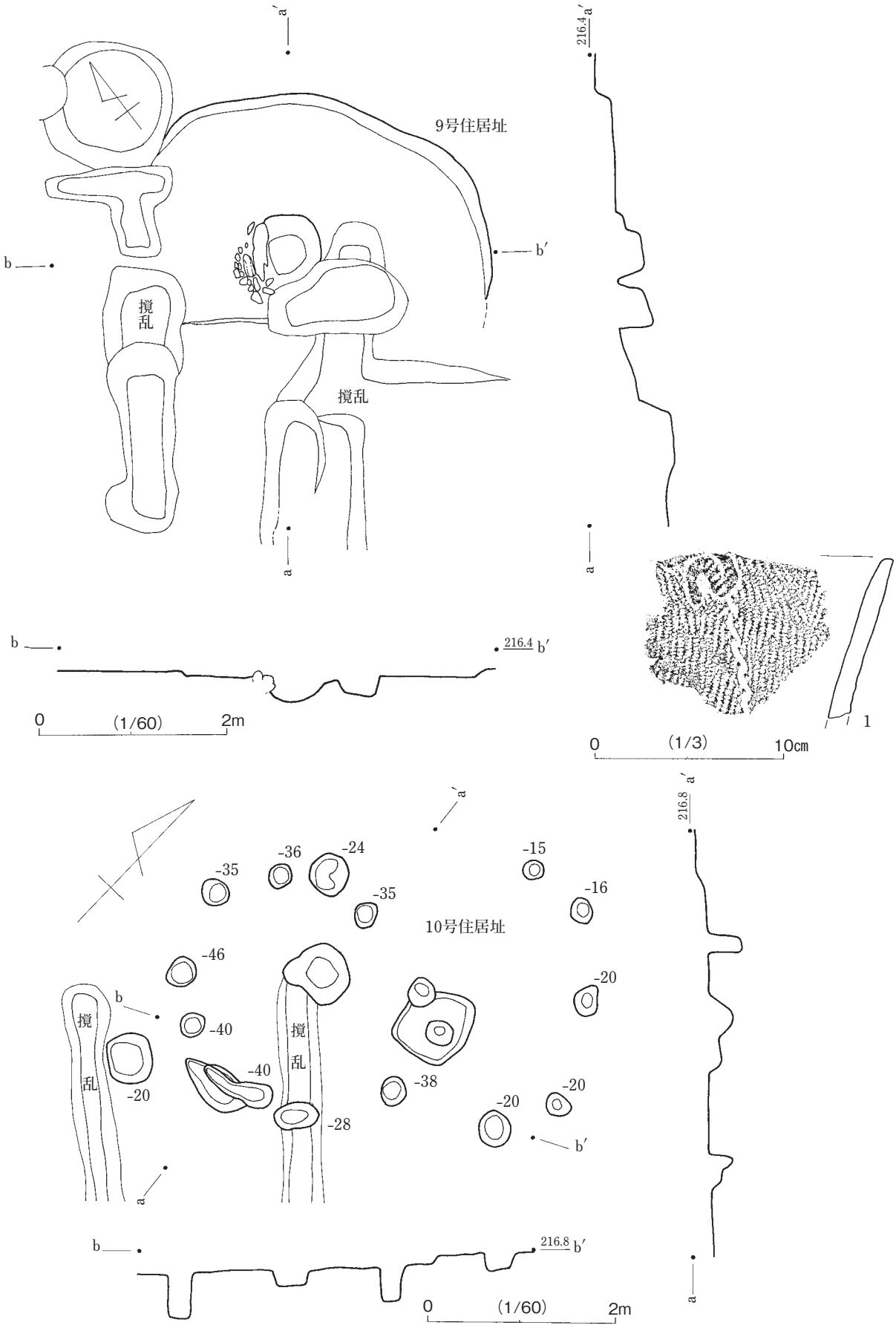
遺物は炉内から土器破片が少量出土した。

出土土器

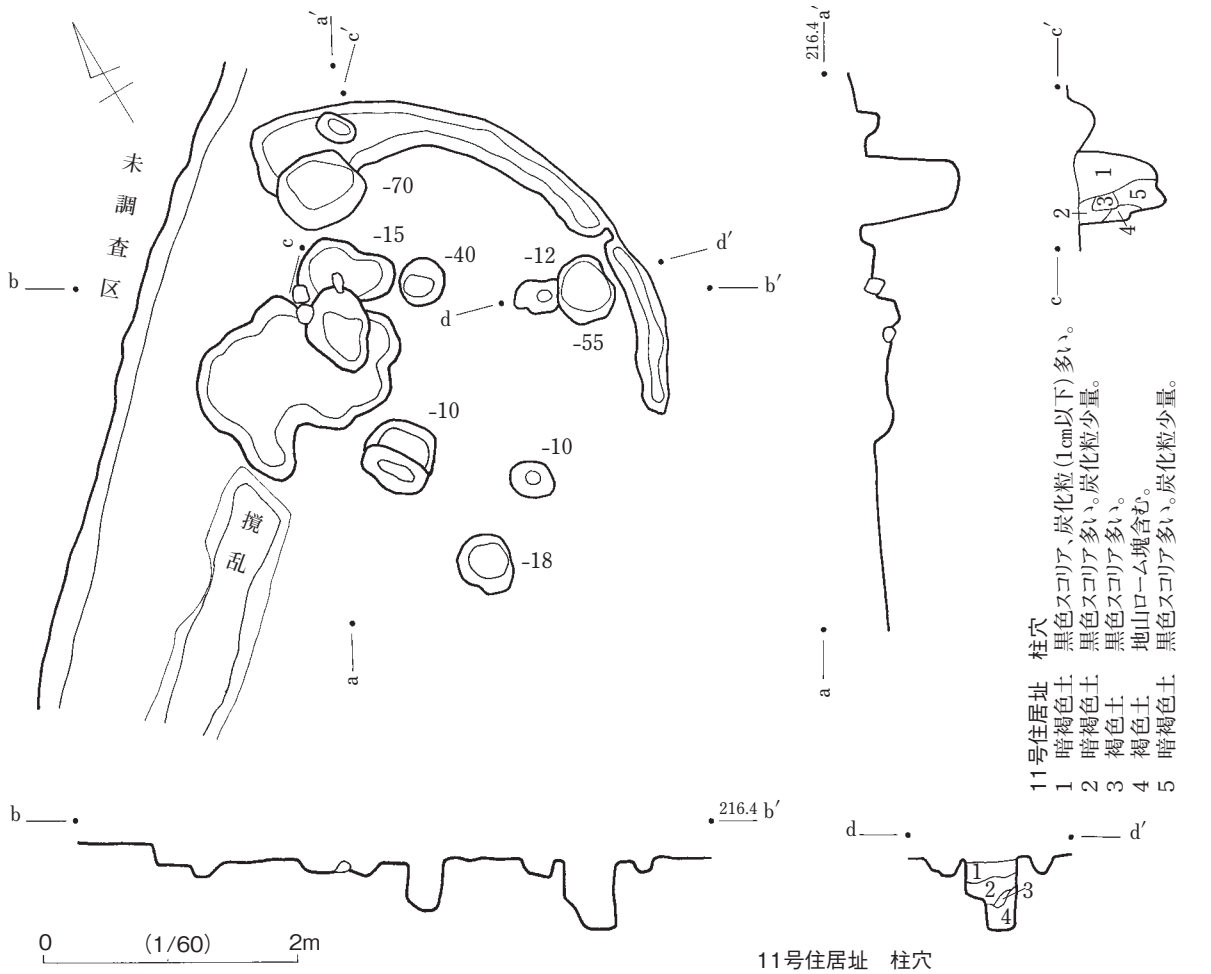
1 は口唇部に横位隆帯を貼付し、口縁部に連弧状の隆帯を巡らす。口縁部と胴部に単節縄文を施す。頸部は無文で、横位の擦痕が見られる。胎土に雲母、石英、砂粒を含む。色調は黒褐色で、焼成は良い。

2・3 は条線地の深鉢で、2 は胴部に波状の粘土紐を垂下し、3 は口縁部に半裁竹管による連続刺突文、連弧文を施す。4 は縄文地の深鉢底部である。

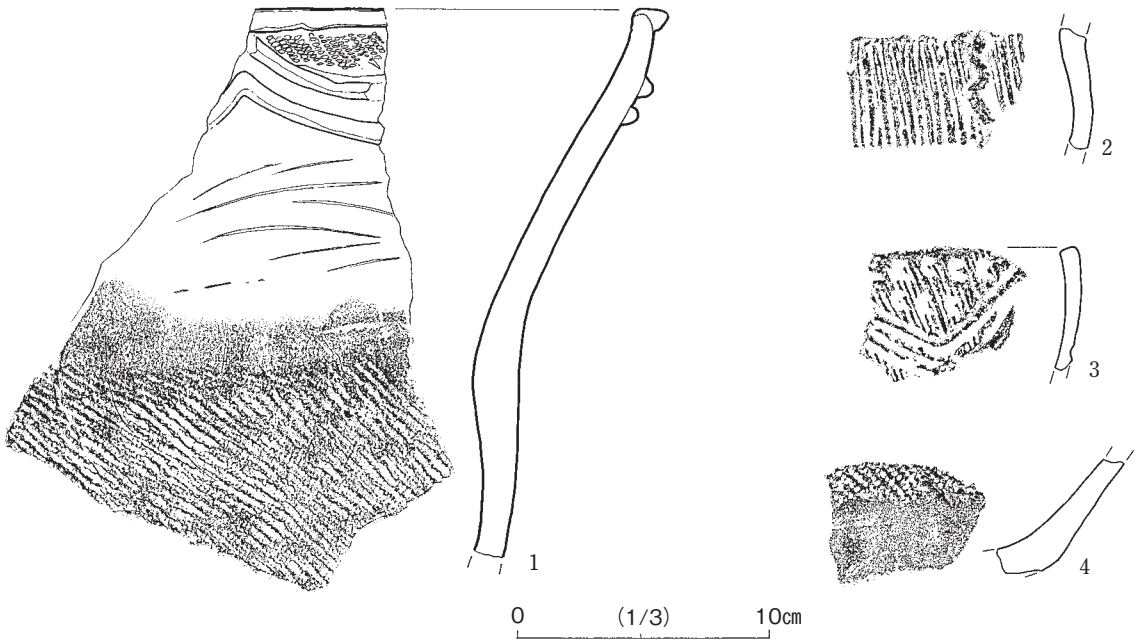
以上の土器は加曽利Ｅ 2 式・曽利Ⅱ～Ⅲ式期に該当する。



第 32 図　9 号住居址・出土遺物、10 号住居址



11号住居址　柱穴
1　暗褐色土　黒色スコリア多い。
2　褐色土　　黒色スコリアやや多い。炭化粒少量。
3　褐色土　　炭化粒少量。
4　褐色土　　炭化粒少量。



第 33 図　11 号住居址・出土遺物

17 号住居址（第 34 ～ 47 図、図版 6 ～ 8・48 ～ 50）

第Ⅴ次調査で検出した。W－ 0 区に位置し、北側が未調査区にかかる。確認面は第Ⅸ層上面だが、掘り込み面は土層観察から第Ⅷ層上面である。平面は円形基調で、東西 540㎝を測る。主軸方位N－ 30°－ E。壁高は 50㎝前後である。遺存状況は良い。覆土上層に大形礫（30㎝～ 80㎝大）26 個が分布し、一部に被熱痕が見られる。

主柱穴と考えられるピットは 3 基確認され、長軸 50㎝～ 60㎝、深さ 45㎝程度である。炉は石囲炉で、炉石が長方形（長軸 95㎝・短軸 70㎝）に配置される。炉の深さは 23㎝で、下部に焼土が堆積する。

埋甕（1・2）が竪穴南端で検出され、深鉢 2 個体が重ねて埋められていた。土器はいずれも正位で、胴下半部を欠く。埋甕近くに立石と思われる大形石 2 点が検出された。

遺物は覆土から床面に分布する。床面上の遺物に有孔鍔付土器（3）、焼成不良の器台（7）、凹石（99）がある。炉の周囲（覆土最下層）では焼成不良の土器群（4 ～ 6）や白色粘土塊がまとまって検出された。この他に覆土中で多量の土器や石器が出土した。土製円盤（47・48）は周縁打ち欠き整形である。47 は覆土下層の炉の近くで出土し、無文である。直径 4㎝、重さ 32.2 ｇ。48 は覆土上層で出土し、条線地である。直径 4.5㎝、重さ 27.5 ｇ。石器は石鏃（49・50）、石錐（58）、打製石斧（66 ～ 86）、礫器（87 ～ 89）、横刃形石器（90）、石匙（91）、スクレイパー（92・93）、凹石（100）、磨石類（94 ～ 98、101）、磨製石斧及び未成品（102 ～ 104）がある。また､黒曜石の剥片が覆土上層の大形礫に混じって多数出土した。

出土土器

1 は埋甕に用いられた深鉢である。埋甕（2）の外側に重ねられ､破片が住居覆土中に広く散在していた。胴上半の一部と胴下半部を欠損する。口径 30㎝､残存高 23.5㎝。口縁上端が内折し､内面に隆帯を巡らす。口縁部に重弧文、頸部から胴上部に横位の平行沈線文を配す。胴下部は単節縄文を地文に蕨手状の波状隆帯を垂下する。胎土に金･黒雲母、赤色粒子、石英、砂粒を含む。色調は赤褐色や暗褐色で、焼成は良い。

2 は埋甕に用いられた深鉢である。埋甕（1）の内側に重ねられ、胴上半部がほぼ完存する。口径 25㎝、残存高 16㎝。口縁部に粘土紐による横位の長方形区画を配す。頸部は無文で、胴部は横位の平行沈線から波状沈線文を垂下する。地文は単節縄文である。胎土に雲母、石英を含む。色調はにぶい褐色で、焼成は良い。

3・8 は有孔鍔付土器で、胴部が強く張る。3、床面上に正位で出土し、破片が住居覆土中に散在していた。底部の一部と口縁部を欠損する。胴部最大径 34.4㎝､残存高 24㎝､推定底径 11㎝。鍔の上端に沿って貫通孔（直径 5㎜）がある。胴中位に 2 本単位の隆帯を巡らし、大きな渦巻文を派生する。胴下半部は無文で、外面は煤ける。胎土に金・黒雲母、石英、砂粒を含む。色調はにぶい褐色や赤褐色で、焼成は良い。8、覆土中に散在していた。推定口径 20㎝、残存高 15㎝。鍔の上端に沿って貫通孔（直径 5㎜）がある。無文で、内外面の所々に赤彩が残る。胎土に金・黒雲母、石英、砂粒を含む。色調はにぶい赤褐色や暗褐色で、焼成は良い。

4 ～ 7 は焼成不良の土器群である。胎土は軟質で非常に脆く、赤色粒子や砂粒を含む。色調はにぶい黄橙色である。4・5 は覆土最下層の炉の近くで、それぞれまとまって出土した。取り上げ時に細かく崩れ、接合作業は困難であった。4 は深鉢で、推定口径 24㎝。口縁部は斜行条線地に粘土紐を重ねて格子目文とする。胴部は粘土紐による波状隆帯を垂下する。5 は鉢形土器で、推定される胴部最大径 40㎝、残存高 23㎝、底径 12.5㎝。胴上半部を隆帯で区画し、内部に斜位・渦巻状の隆帯や縦位の条線を施す。底部に貫通孔（直径 1.5㎝～ 2.0㎝）が 2 ヶ所見られる。6 は覆土最下層から上層にかけて散在していた。口縁部に隆帯による長方形区画や渦巻文、口縁直下に幅の狭い無文帯を配し、胴部に平行

沈線や波状沈線文を垂下する。地文は撚糸文である。7は器台形土器で、床面上で出土した。台の部分がほぼ完存する。残存高5㎝、底径13.3㎝。無文である。

9は深鉢である。覆土下層の炉の近くで、倒立状態で出土した。胴部から底部の一部が残存する。胴中位を横位沈線で区画し、内部に沈線による連弧文を配す。地文は縦位条線である。内外面は所々で黒く煤ける。

10は釣手土器である。器高17.2㎝。釣手はアーチ状で、頂部に杯状の把手が付く。釣手と鉢部の口縁に円形孔及び沈線や半隆起線による楕円文や円文を配す。

11・12は深鉢で、覆土中に散在していた。11は頸部に沈線弧文が巡る。いずれも胴部に3本単位の沈線を垂下し、12は2本単位の波状沈線文を加える。12の底面は黒く煤ける。

13は鉢形土器で、覆土中に広く散在していた。口縁から底部にかけて2/3が残存する。口径28㎝、器高27㎝、胴部最大径36.5㎝、底径10.5㎝。口縁は無文で、胴部に単節縄文が施される。

14～23は条線地の深鉢で、頸部や胴部に粘土紐の隆帯を貼付する。口縁部は重弧文である（14）。

24・25は縄文地に粘土紐を貼付する深鉢。26・27は深鉢口縁部で、縄文地の口縁部に連弧文（26）、無文地に連続刺突文（27）を配す。

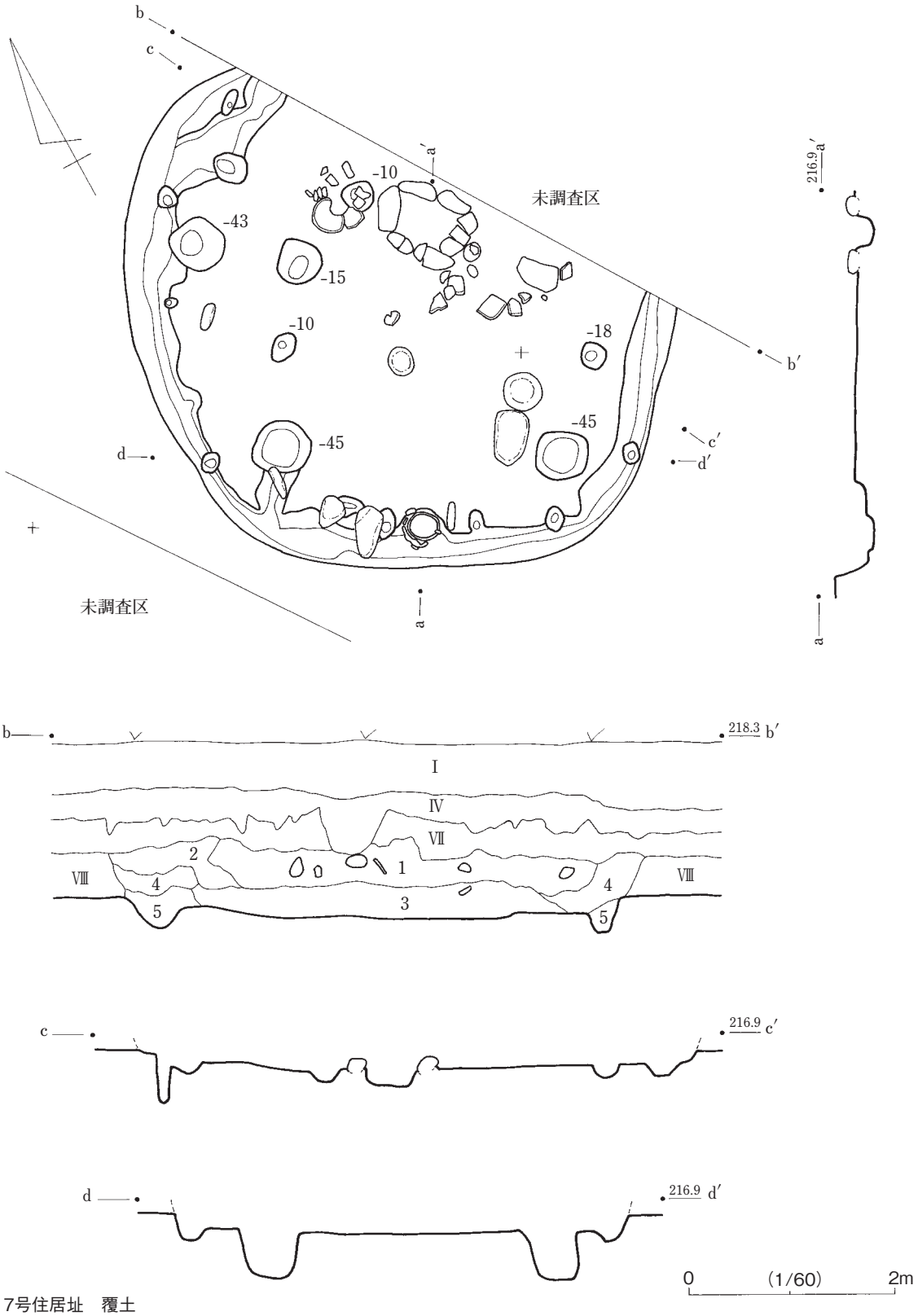
29～31は内湾口縁の深鉢で、無文口縁下に刻みを加えた隆帯を巡らす。胴部を沈線でΠ字状に区画し、内部は縄文を地文に波状沈線文を垂下する。

32・35～40・42～44は縄文、33・34は撚糸文を地文とした深鉢である。

41は鉢形土器、45は大形の深鉢底部で、底径13.7㎝である。

46は台付き土器の台部で、推定底径9㎝、残存高3.5㎝。一部に単節縄文が施され、隆帯が垂下する。

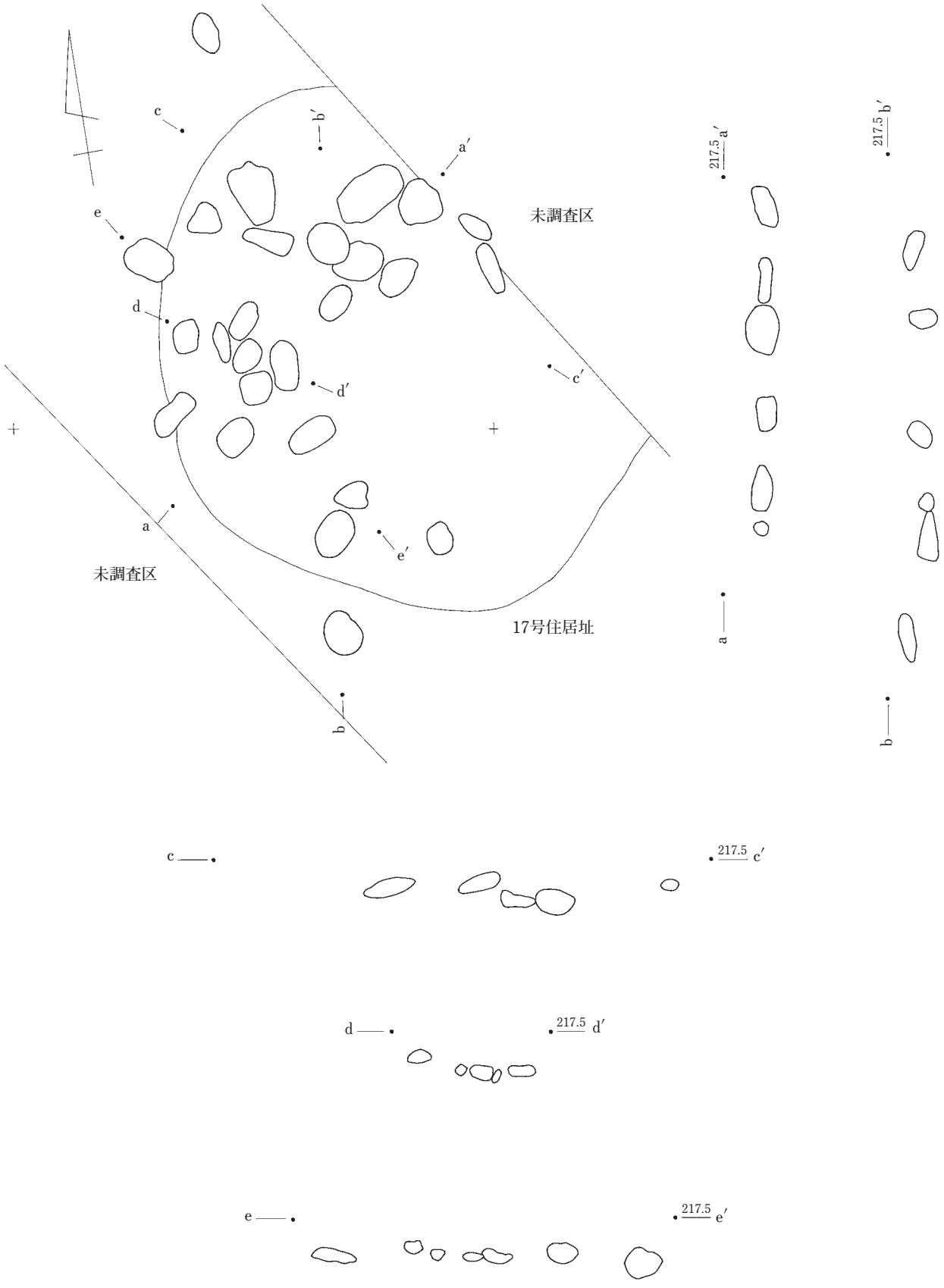
以上の土器は28が五領ヶ台式、他は加曽利Ｅ２～Ｅ３式、曽利Ⅱ～Ⅳ式期に該当する。埋甕（1）は曽利Ⅱ式、埋甕（2）は加曽利Ｅ２式である。



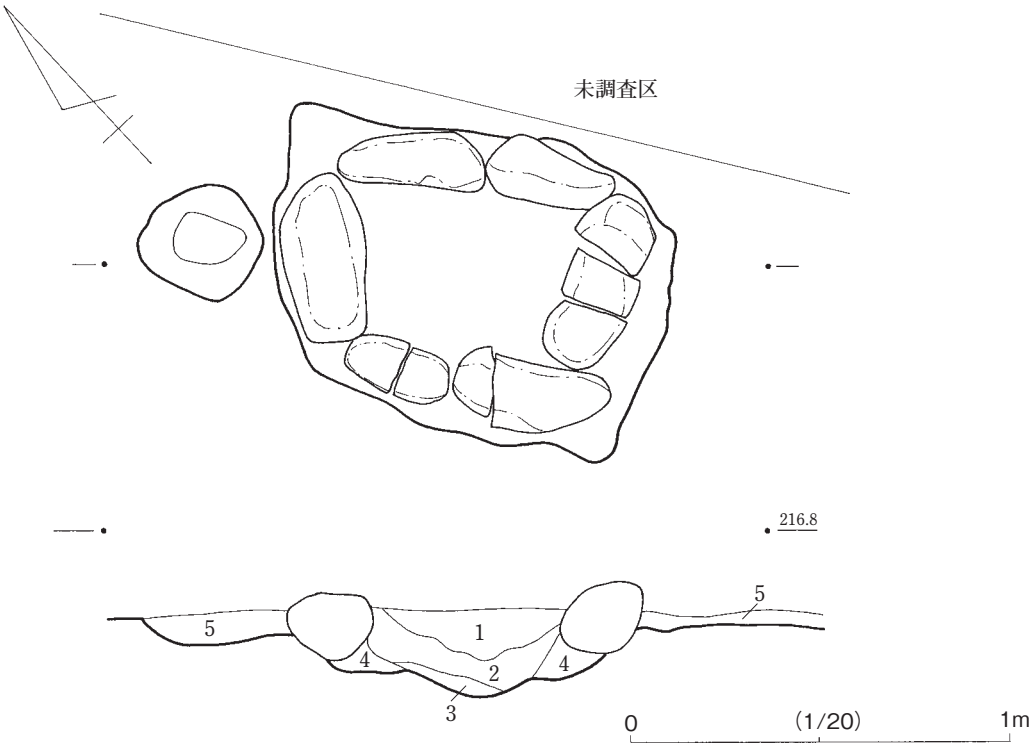
17号住居址　覆土

1　暗褐色土　粘性、締まり弱い。橙色スコリア・黒色スコリア（5㎜以下）少量。炭化粒やや多い。上位で褐色土（1㎝～3㎝）含む。
2　黄褐色土　1と同質だが、褐色土がやや多い。
3　黒褐色土　粘性弱く、締まりやや強い。橙色スコリア（8㎜以下）やや多い。黒色スコリア（5㎜以下）少量。炭化粒、焼土粒やや多い。
4　暗褐色土　粘性弱く、締まりやや強い。橙色スコリアやや多い。
5　褐色土　　粘性弱く、締まりやや強い。

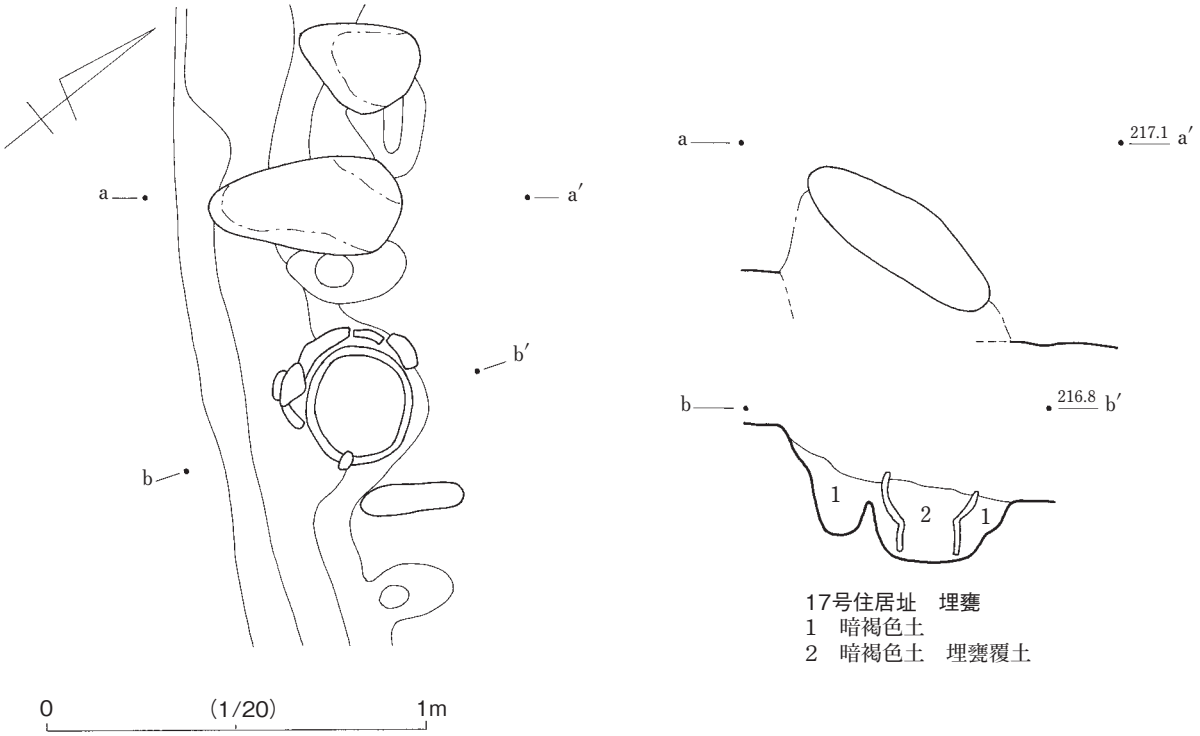
第 34 図　17 号住居址



第 35 図　17 号住居址　礫出土状況

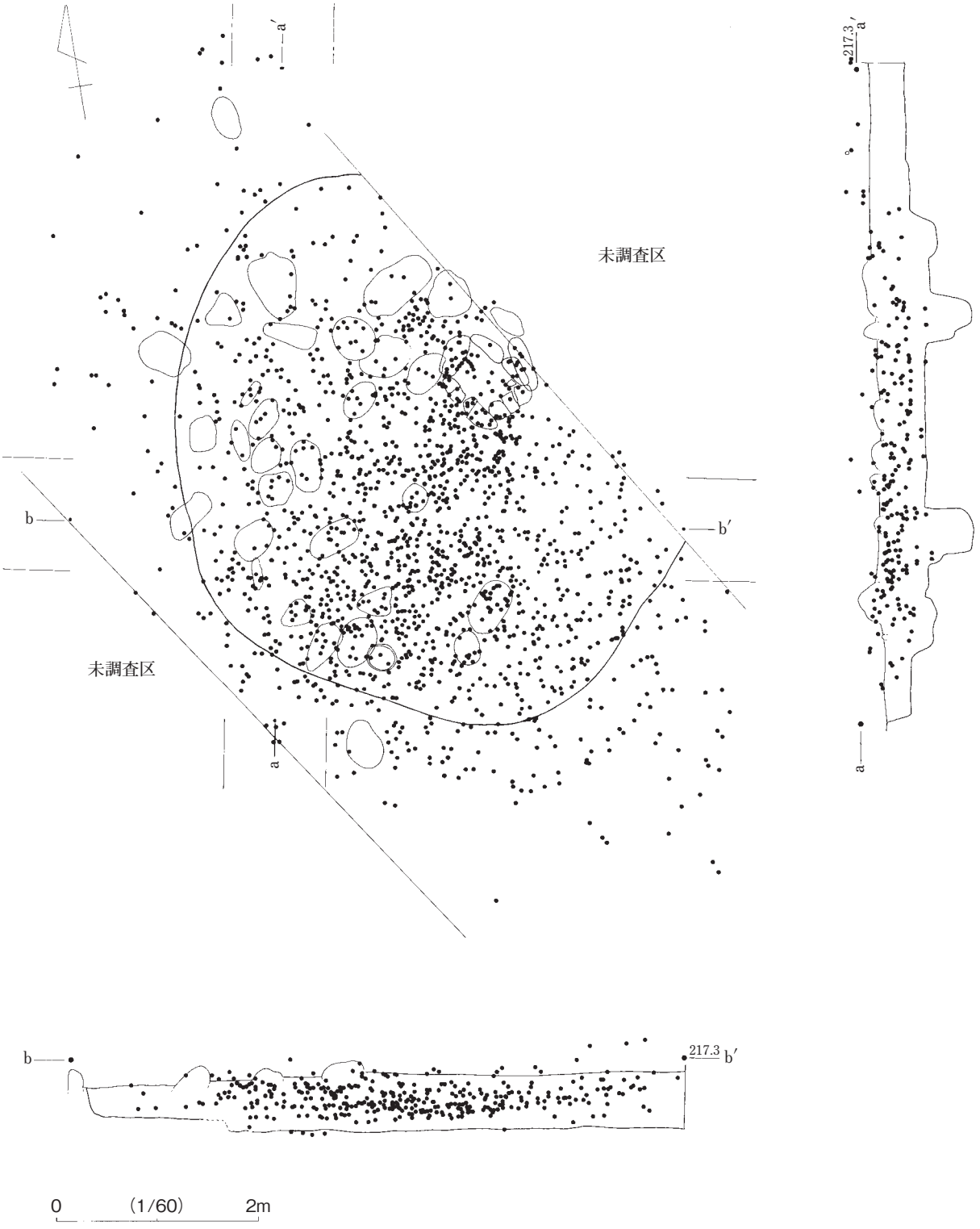


17号住居址　炉
1　暗褐色土　炭化粒、焼土粒やや多い。
2　褐色土　　炭化粒、焼土粒やや多い。
3　橙色土　　ガサガサの焼土。
4　暗褐色土　掘り方覆土で、炭化粒、地山ローム塊(1㎝)やや多い。
5　貼り床　　締まりやや強い。炭化粒多い。地山ローム塊(1㎝以下)やや多い。

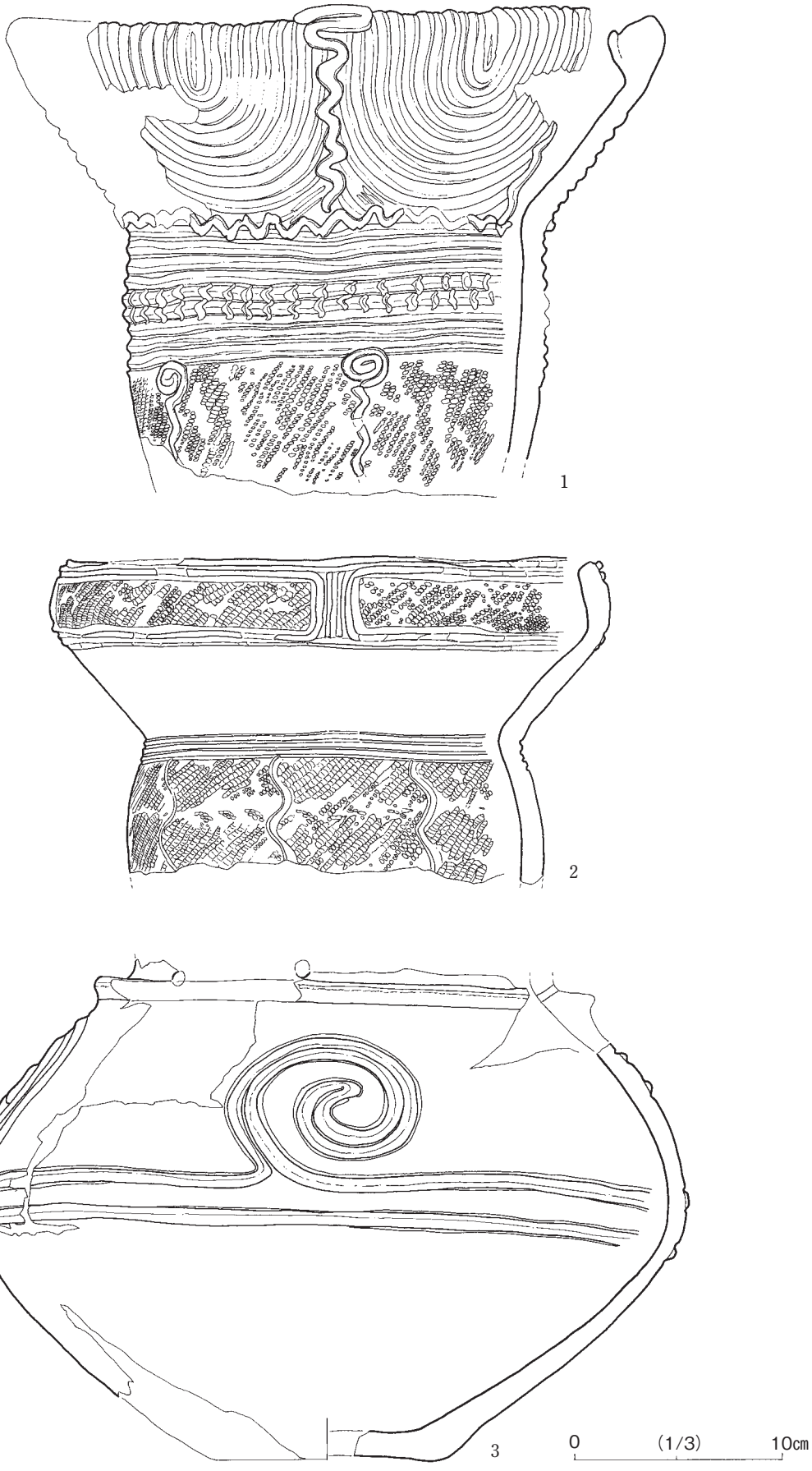


17号住居址　埋甕
1　暗褐色土
2　暗褐色土　埋甕覆土

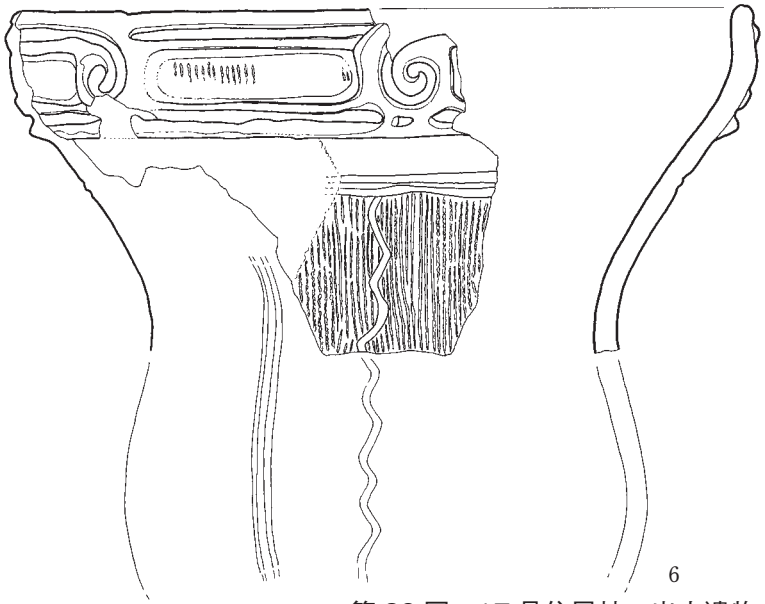
第 36 図　17 号住居址　炉、立石・埋甕

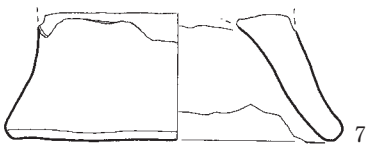


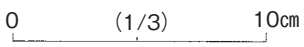
第 37 図　17 号住居址　遺物分布図



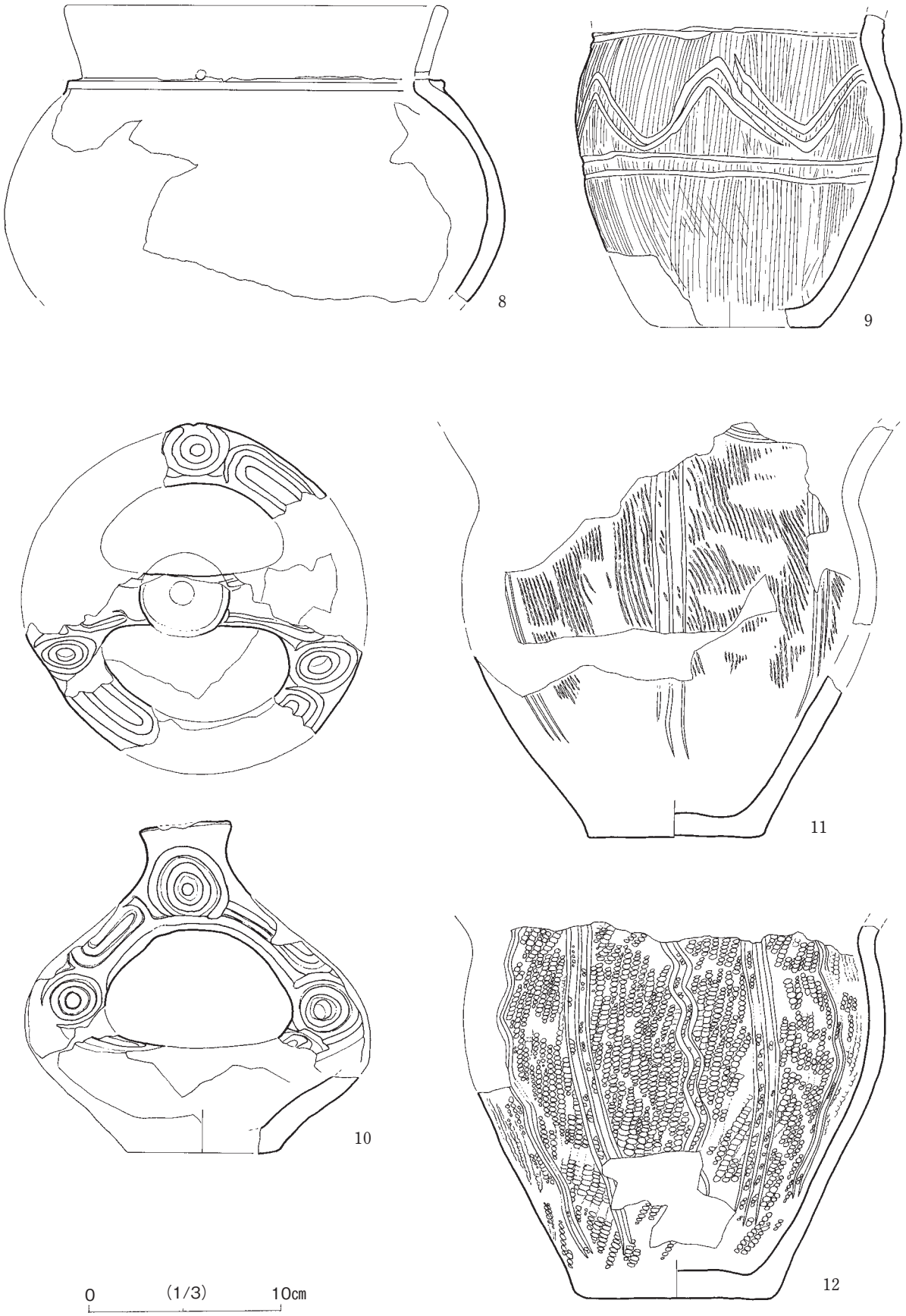
第 38 図　17 号住居址　出土遺物（1）





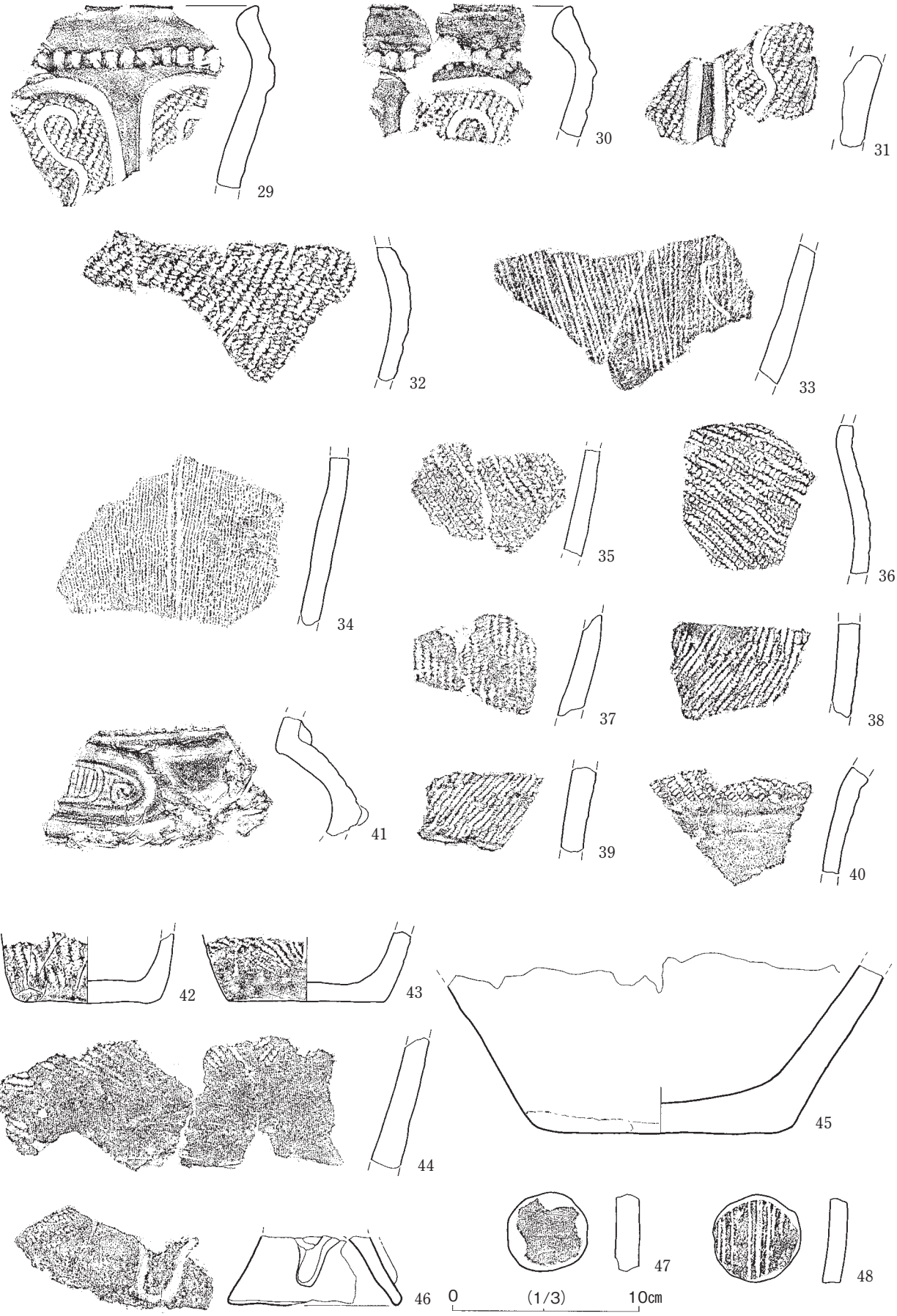


第 39 図　17 号住居址　出土遺物（2）



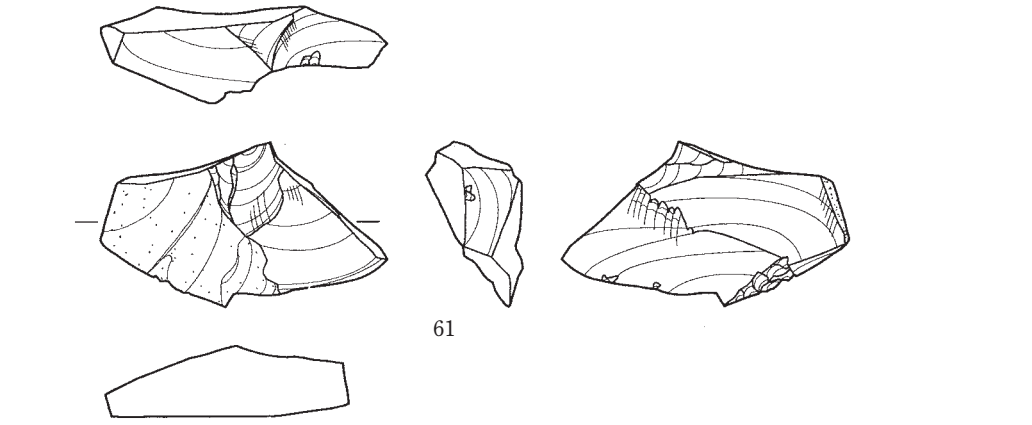
第 40 図　17 号住居址　出土遺物（3）

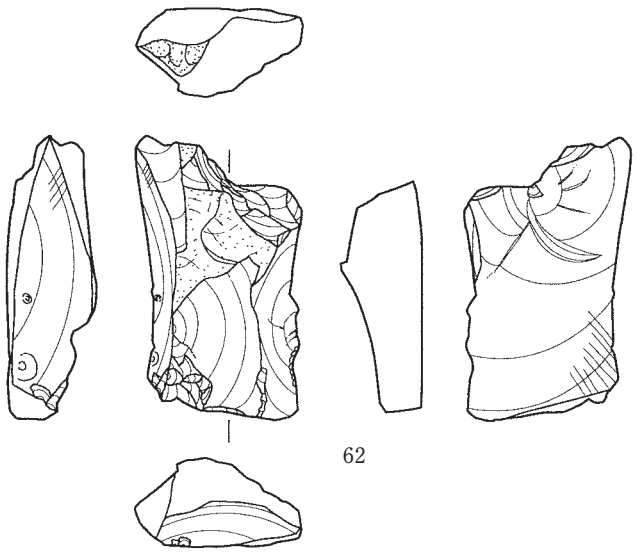
第 41 図　17 号住居址　出土遺物（4）

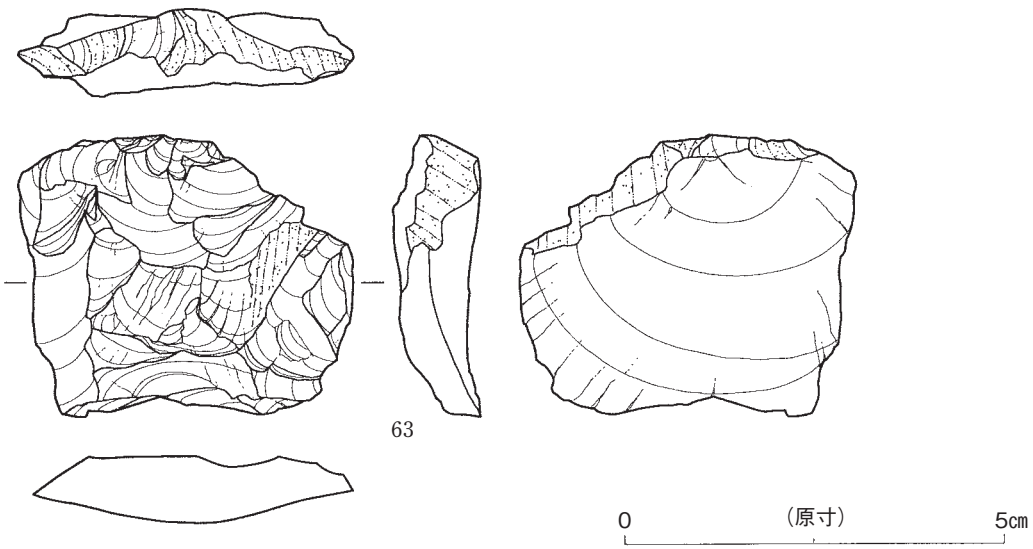


第 42 図　17 号住居址　出土遺物（5）

第 43 図　17 号住居址　出土遺物（6）

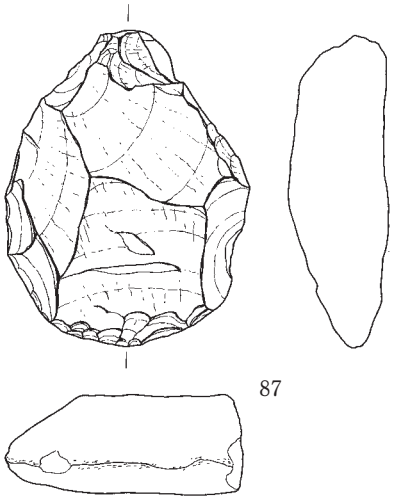


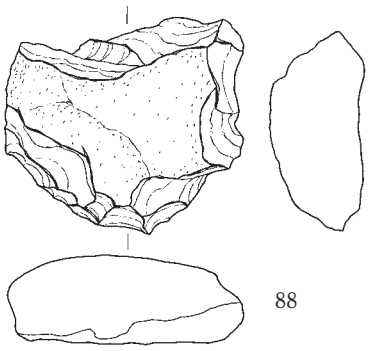


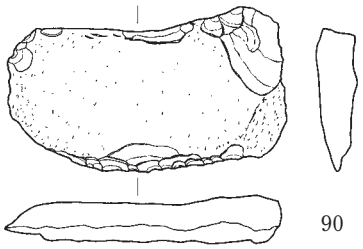


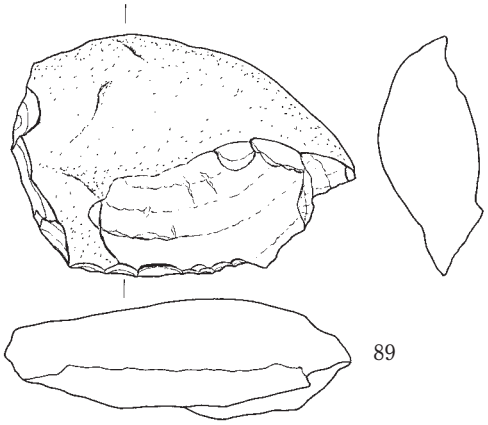
第 44 図　17 号住居址　出土遺物（7）

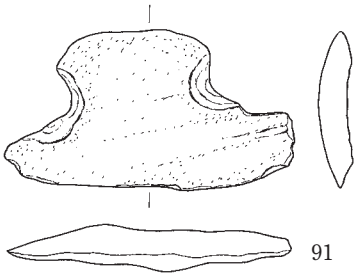
第 45 図　17 号住居址　出土遺物（8）

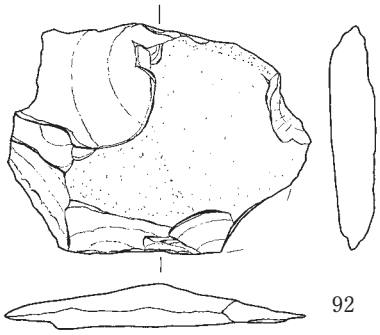


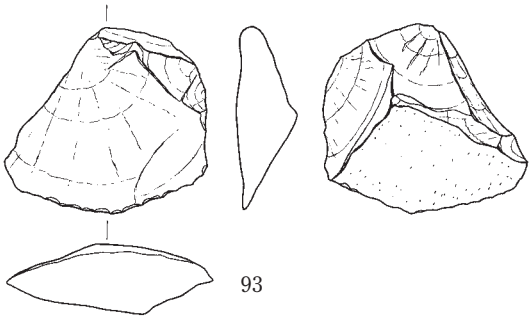






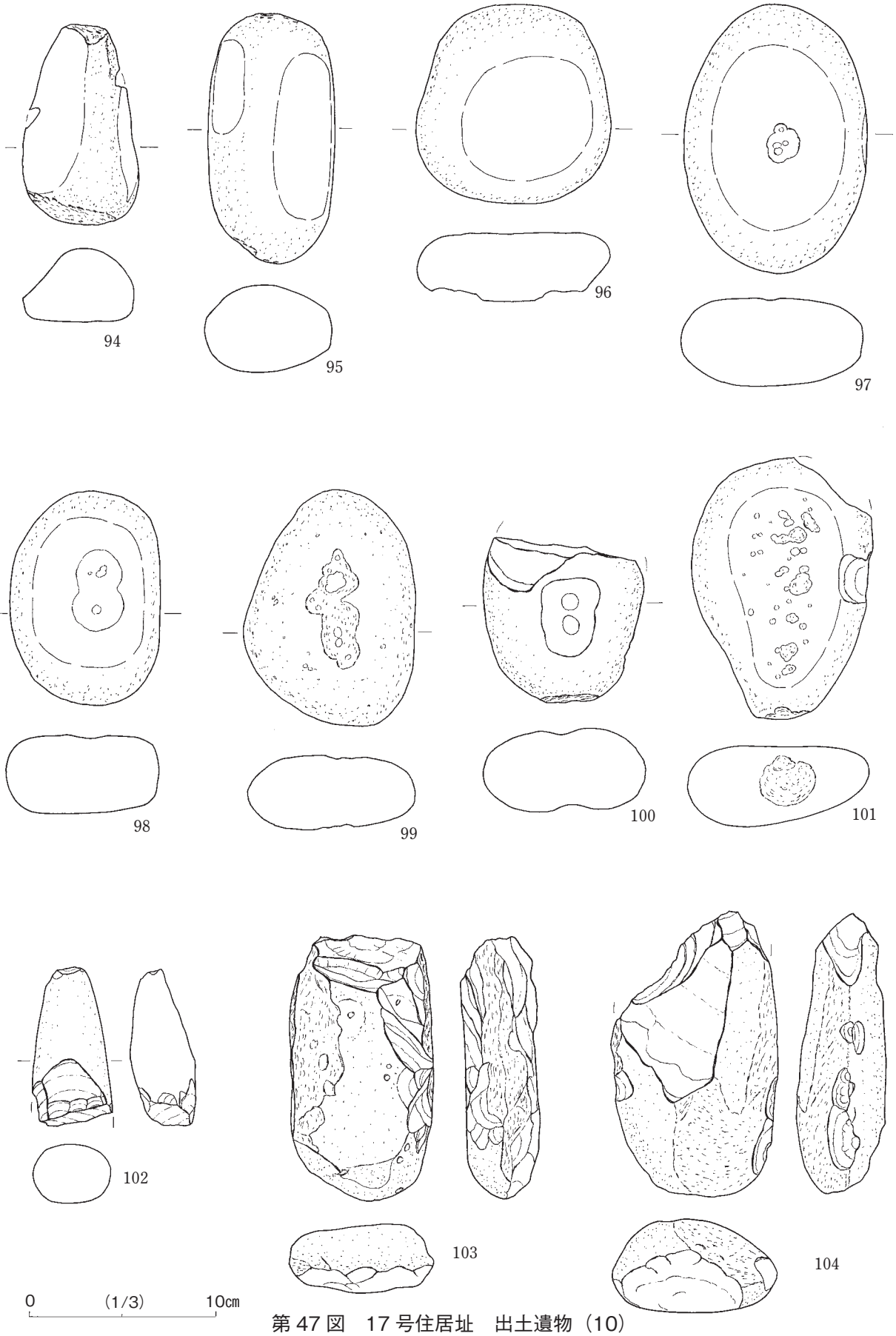






0 (1/3) 10cm

第 46 図　17 号住居址　出土遺物（9）



第 47 図　17 号住居址　出土遺物（10）

(2) 敷石住居址（第 48 ～ 51 図、図版 9・10・51）

第Ⅱ次調査で 1 軒検出した。Ⅴ－ 15 区に位置し、確認面は第Ⅷ層である。竪穴住居群とは立地する段丘面が異なるが、近い位置にある。

竪穴を伴う柄鏡形敷石住居で、攪乱により敷石の一部が失われているが、遺存状況は良い。竪穴は全長 560㎝である。主体部は平面円形で直径 295㎝を測り、南側に張出部を持つ。主軸方位Ｎ－ 40°－Ｅ。確認した壁高は敷石面まで 15㎝程度を測り、縁石の高さと同じである。

主体部の敷石は全面に施され、縁石が巡る。張出部の敷石は中軸線に沿って幅 50㎝の範囲で施され、末端に大形礫が階段状に配置され、左右に門柱状の立石が据えられる。敷石は張出部末端の竪穴外にも平面台形状に施され、周囲に礫が拡散している状況であった。敷石材は砂岩や閃緑岩が多い。

小ピットが張出部左右の竪穴外で確認されたが、深さ 5㎝と浅い。

石囲炉が主体部中央に位置する。炉石は他の敷石材と異なり、多孔質の溶岩礫を用いている。炉石 4 枚を方形（一辺 55㎝）に組む。炉の深さは 25㎝である。覆土は炭化粒や焼土粒を多く含み、下層で炭化種実（エノキグサ近似種）を検出した（付編 1 参照）。

遺構確認時、炉の南側から張出部の敷石上に多量の礫が集積されていた。礫は大小様々で、敷石材と異なる礫岩が大半を占める。敷石直上の覆土は炭化粒や焼土粒を多く含み、棒状の炭化材が主体部の敷石上面に散在していた。炭化材は樹種同定によりコナラ・クヌギなど多くの種類が認められ、一部は放射線炭素年代測定に暦年較正した結果で cal ＢＣ 3011 ～ 2876（cal ＢＰ 4,825 ～ 4,960）となった（付編 1 参照）。

敷石下の掘り方は、炉と張出部の間が 15㎝前後の深さで掘り込まれ、張出部には硬化面が見られた。埋甕は確認されなかった。

遺物は土器・石器がある。大形の打製石斧（20）が張出部外側の敷石上で、横刃形石器、石鏃未成品が覆土中で出土した。

遺構の時期は縄文時代中期末に位置付けられる。

出土土器

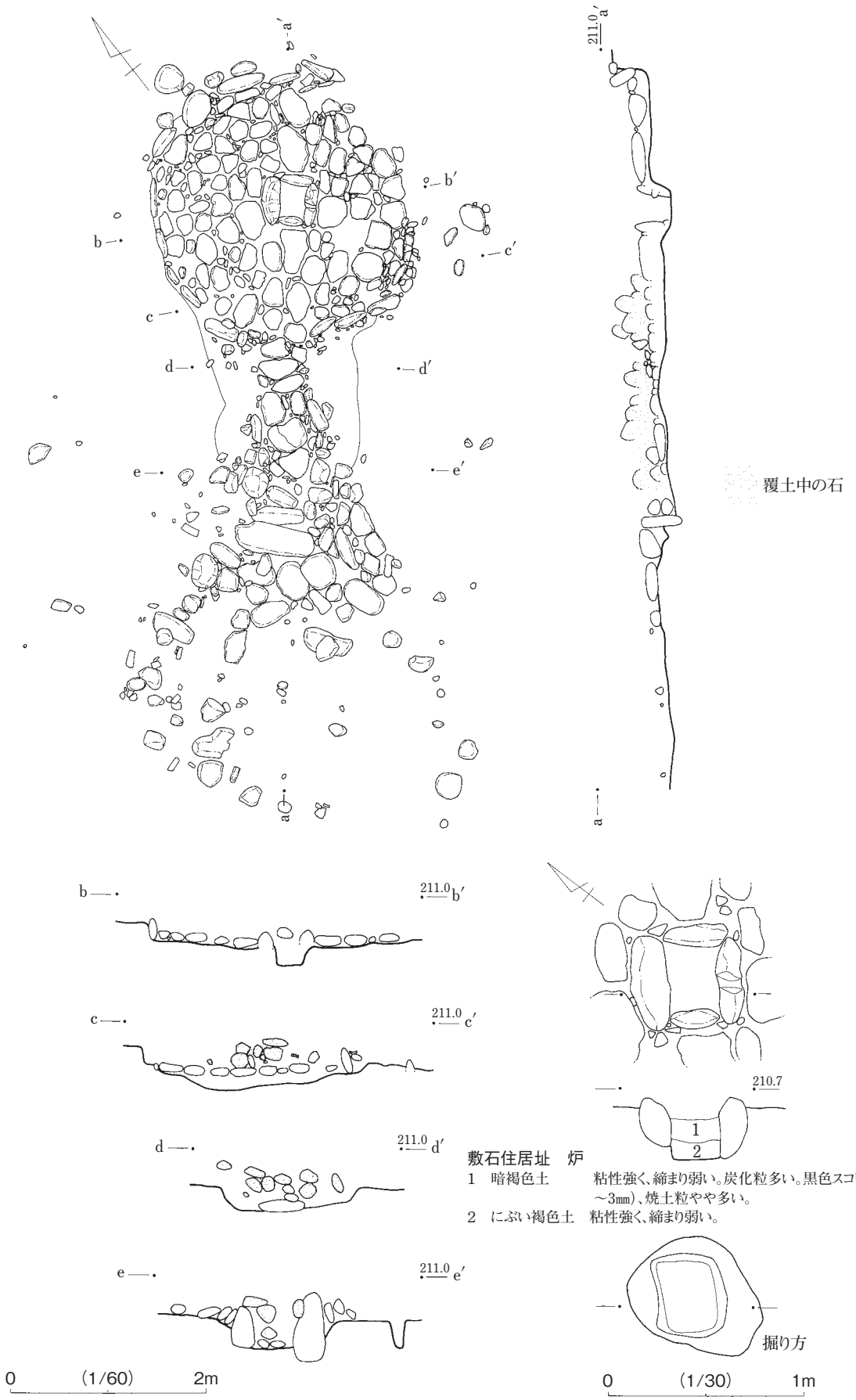
1 ～ 8 は微隆起線による区画文様を配した大形の深鉢である。主体部の壁際覆土、張出部覆土の礫中、張出部周辺の礫に混じって出土した。口縁部は緩く波状を呈し、無文口縁の下位を微隆起線で区画する(2)。胴部はＵ字形や縦位の短冊形に区画し、無節縄文を施す。外面は所々黒く煤ける。胎土に金雲母、石英、赤色粒子、砂粒を含む。色調は赤褐色で、焼成は良い。

9 ～ 13 は覆土中で出土した深鉢の小片である。9、頸部に横位の隆帯を巡らし、逆Ｕ字状の粘土紐を貼付する。胴部は条線地に弧状の隆帯を配す。10、胴部を隆帯で縦位に区画し、綾杉状条線を施す。11、縄文地の胴部を 3 本単位の沈線で縦位に区画する。12 ～ 13、波状口縁の深鉢で、沈線区画の縄文を施す。

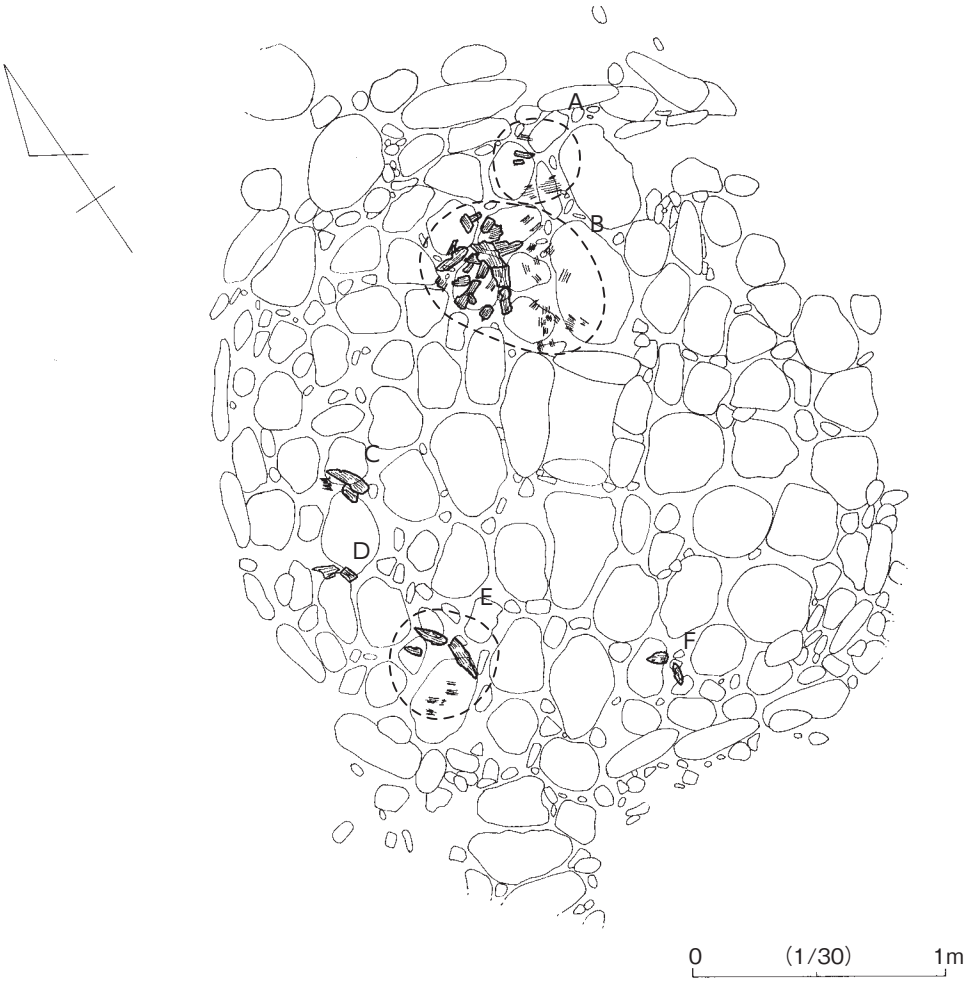
14 ～ 17 は沈線文を主とする深鉢である。14 は波状口縁に沈線と円形刺突文を巡らす。胴部の沈線文は逆Ｕ字状（15）、縦位の沈線間に斜位の沈線文（16）、縦位の波状沈線文（17）である。出土地点は張出部周辺の礫中（14）、張出部周辺の礫直下（15）、主体部の縁石間（16）、張出部の敷石間と覆土礫中（17）である。

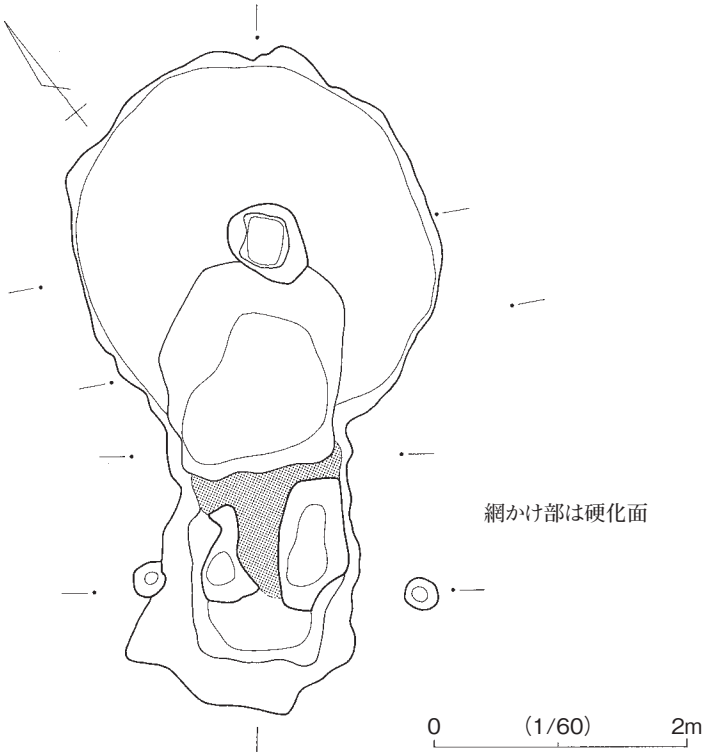
18 はミニチュア土器で、主体部奥の縁石間に伏せ置かれた状態で出土した。完形。口径 6.5㎝、器高 5.5㎝、底径 4.8㎝。無節縄文が粗く施される。胎土に砂粒を含む。色調はにぶい褐色で、焼成は良い。

以上の土器は、9 が曽利Ⅱ～Ⅲ式期、10･11 は曽利Ⅳ式期、他は加曽利Ｅ 4 式･曽利Ⅴ式期に該当する。

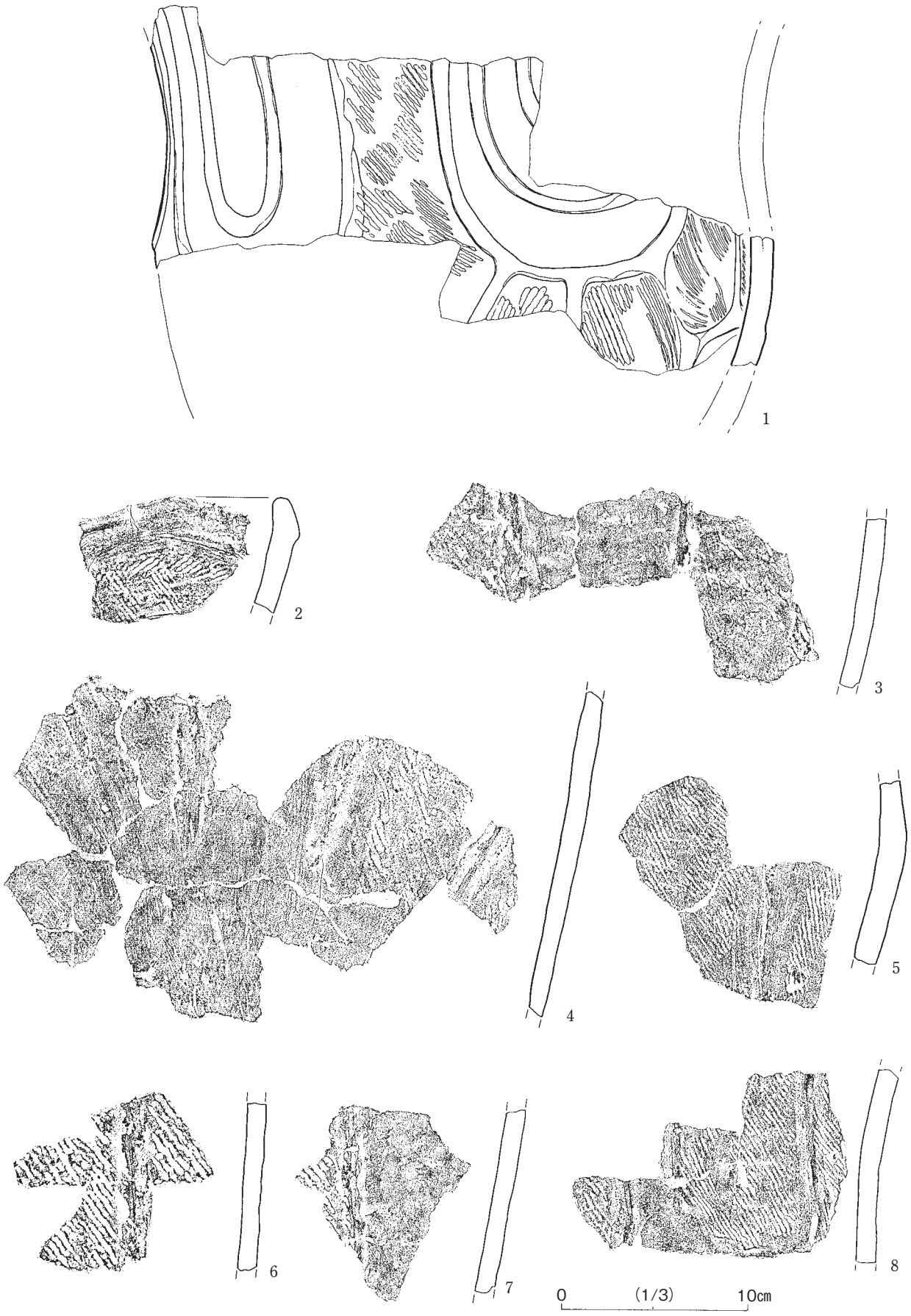

a
a′
b
b′
c
c′
d
d′
e
e′
211.0
覆土中の石
210.7
1
2
敷石住居址　炉
1　暗褐色土　粘性強く、締まり弱い。炭化粒多い。黒色スコリア（1㎜～3㎜）、焼土粒やや多い。
2　にぶい褐色土　粘性強く、締まり弱い。
掘り方
0　(1/60)　2m
0　(1/30)　1m

第 48 図　敷石住居址、炉

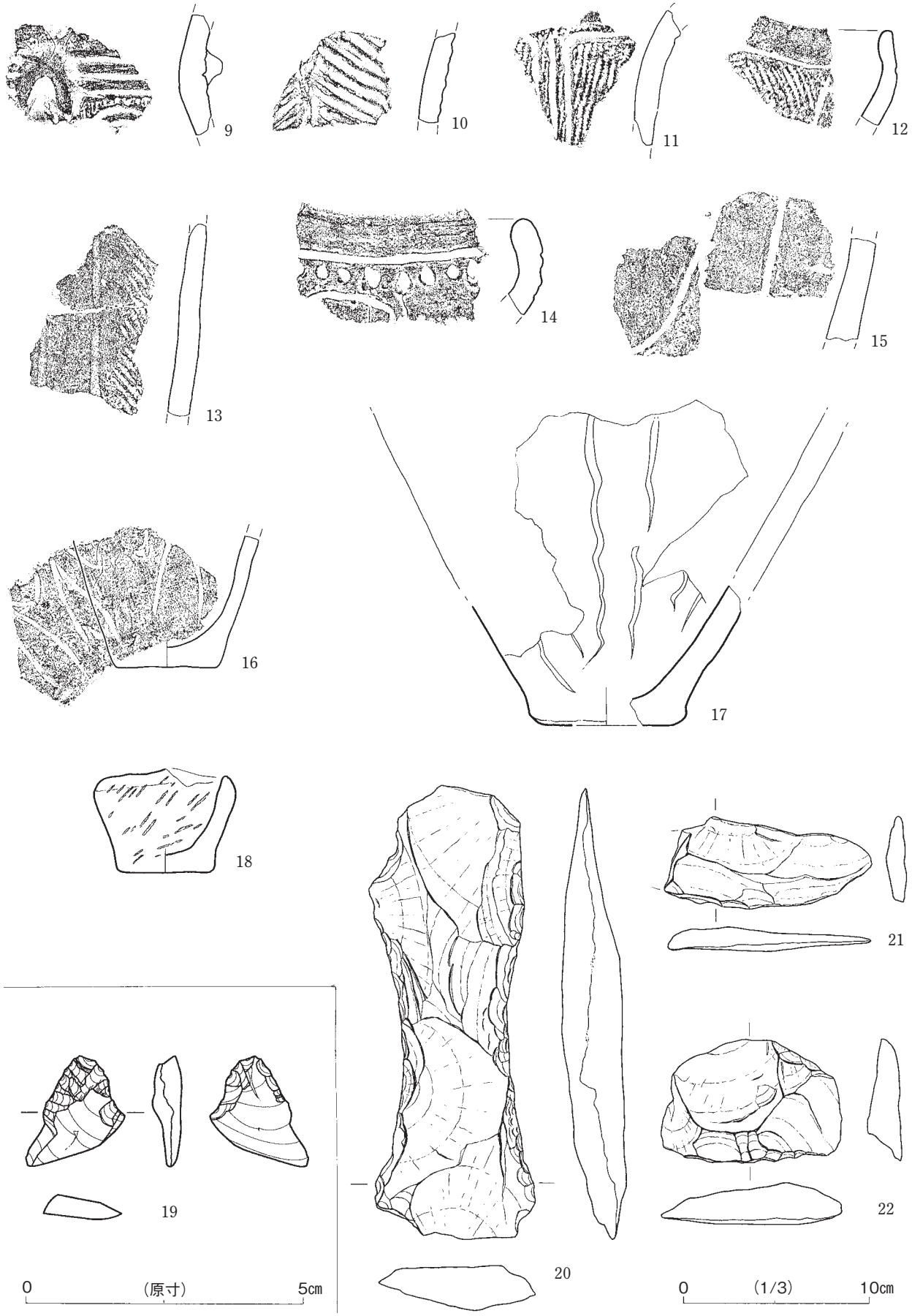




第 49 図　敷石住居址　炭化材出土状況、掘り方



第 50 図　敷石住居址　出土遺物（1）



第 51 図　敷石住居址　出土遺物（2）

(3) 集石

整理の過程で1号～2号、28号～30号集石を欠番とし、最終的に集石62基を報告する。

集石は段丘下段の平坦地及び上段の緩斜面地を中心に分布し、概ね第Ⅷ層（暗褐色土）で確認された。集石は掘り込みの有無や礫の集積状況で各種に分類可能である。下部構造を見ると、比較的大きな平石1枚を配置し、左右に大小の礫を並置するタイプ（3・10・12・14・33号）、平石などの礫を花弁状に配置するタイプ（4・13・18・19・23・47・49・51号）、これらのタイプが廃棄過程で形を崩したものと思われる37号集石がある。

礫は破損し、被熱したものが多い。被熱痕として赤化、吸炭、タール状付着物、表面の剥落が挙げられる。石材は概ね砂岩を主体とし、閃緑岩や溶岩などが少量混じる。出土遺物は全般に乏しく、わずかに出土した土器の細片や石器も周囲から混入した可能性がある。このため時期の判定は難しいが、確認土層中に含まれる土器から、縄文早期から中期中葉までの間で捉えられる。

3号集石（第52図、図版11）

第Ⅲ次調査で検出した。S－28区に位置し、確認面は第Ⅷ層下位である。比較的大きな礫5点が50㎝四方の範囲に検出された。掘り込みは確認できなかったが、礫の出土状況から掘り込みの存在が推定される。遺物はないが、周囲に早期押型文土器の破片が散在する。

4号集石（第52図、図版11）

第Ⅰ次調査で検出した。2B－25区に位置し、確認面は第Ⅷ層下位である。平面不整形の掘り込み（長軸80㎝・深さ18㎝）を伴う。比較的大きな礫4点を壁面に配置し、内部に多数の礫を集積する。大半の礫が破損し、吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量85.1kg、個数104点。遺物はない。

5号集石（第53図、図版52）

第Ⅰ次調査で検出した。2B－25区に位置し、確認面は第Ⅷ層下位である。平面不整円形の掘り込み（長軸135㎝・短軸115㎝、深さ20㎝）を伴う。多数の礫が掘り込み内に集積され、周囲に拡散する。大半の礫が破損し、被熱痕が見られた。吸炭やタール状付着物を残す礫もある。礫の総重量148.3kg、個数374点。土器が出土した（1･2）。深鉢胴部を隆帯で菱型や円形に区画する。隆帯上に綾杉状刺突文を加え、隆帯に沿って並行沈線・連続爪形文が施される。胎土に雲母、石英、砂粒を含む。色調はにぶい褐色で、焼成は良い。中期藤内式土器に比定される。土器は14号集石や周囲のグリット一括と接合する。

6号集石（第53図）

第Ⅰ次調査で検出した。5号集石に隣接し、確認面は第Ⅷ層下位である。礫が140㎝×130㎝の範囲に集中し、礫下に最深10㎝の浅い掘り込みが検出された。大半の礫が破損し、吸炭などの被熱痕が見られた。礫の総重量58.3kg、個数113点。遺物はない。

7号集石（第54図）

第Ⅰ次調査で検出した。2B－24区に位置し、確認面は第Ⅷ層下位である。礫が350㎝×250㎝の範囲に同レベルで分布し、とくに80㎝×60㎝の範囲に密集する。掘り込みは見られない。大半の礫が破損し、吸炭などの被熱痕が見られた。礫の総重量110.3kg、個数301点。遺物はない。

8 号集石（第 55 図）

第Ⅰ次調査で検出した。2 Ｂ－ 24 区に位置する。確認面は第Ⅷ層中で、周囲の集石群に比べ 40㎝程度上位にある。26 号土坑に一部を切られる。礫が 130㎝四方の範囲に集中する。礫分布に最大 30㎝の高低差が見られるが、掘り込みは確認できなかった。大半の礫が破損し、吸炭などの被熱痕が見られた。礫の総重量 49.9kg、個数 45 点。遺物はない。

9 号集石（第 55 図）

第Ⅰ次調査で検出した。2 Ｃ－ 24 区に位置し、確認面は第Ⅷ層下位である。礫が 90㎝四方の範囲に集中する。掘り込みは見られない。大半の礫が破損し、吸炭やあばた状の剥落など被熱痕が見られた。礫の総重量 8.3kg、個数 28 点。遺物はない。

10 号集石（第 55 図、図版 11）

第Ⅰ次調査で検出した。2 Ｃ－ 24 区に位置し、確認面は第Ⅷ層下位である。礫が 100㎝× 90㎝の範囲に集積され、下部の礫は大きな平石を中心に平面「コ」字状に配置される。掘り込みは確認できなかったが、礫の出土状況から掘り込みの存在が推定される。大半の礫が破損し、吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量 87.1kg、個数 120 点。遺物はない。

11 号集石（第 56 図、図版 12）

第Ⅰ次調査で検出した。2 Ｃ－ 24 区に位置し、確認面は第Ⅷ層下位である。平面不整円形の掘り込みを伴う。掘り込みは直径 100㎝、深さ 15㎝である。礫は掘り込み内に集積され、一部が周囲に分布する。大半の礫が破損し、被熱痕が見られた。吸炭やタール状付着物を残す礫もある。礫の総重量 95.4kg、個数 327 点。

12 号集石（第 56 図、図版 12・52）

第Ⅰ次調査で検出した。2 Ｃ－ 25 区に位置し、確認面は第Ⅷ層下位である。大きな平石が斜めに入り、左右に礫が直立して並置される。周囲に小礫が散在する。掘り込みは確認できなかった。大半の礫が破損し、吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量 52.2kg、個数 33 点。土器 1 点が出土した（1）。縄文が施される。胎土に金・黒雲母、石英を含む。色調はにぶい褐色で、焼成は良い。

13 号集石（第 57 図、図版 12・52）

第Ⅰ次調査で検出した。2 Ｃ－ 26 区に位置し、確認面は第Ⅷ層下位である。礫が 70㎝四方の範囲に集積される。下部は大小の平石 2 枚が据えられ、左右に礫が斜めに配置される。掘り込みは確認できなかった。大半の礫が破損し、吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量 36.6kg、個数 26 点。土器 1 点が出土した（1）。深鉢胴部で、沈線による縦位区画に縄文を施す。胎土に雲母、赤色粒子、砂粒、小石を含む。色調はにぶい褐色で、焼成は良い。

14 号集石（第 57 図、図版 13・52）

第Ⅰ次調査で検出した。2 Ｂ－ 25 区に位置し、確認面は第Ⅷ層下位である。大きな平石の左右に礫が配置され、周囲に小礫が散在する。掘り込みは確認できなかった。大半の礫が破損し、吸炭など被

熱痕が見られた。礫の総重量 16.7kg、個数 16 点。土器 3 点が出土した（1 ～ 3）。1 は無文口縁の深鉢で、胴部に縦位の集合沈線や横位刻みを施す。胎土に砂粒を含む。色調は赤褐色で、焼成は良い。2 は深鉢胴部を隆帯で三角形に区画する。隆帯に沿って並行沈線が施される。胎土に雲母、石英、砂粒を含む。色調はにぶい褐色で、焼成は良い。3 は鉢形土器で、内面に横位の連続刺突文が巡る。胎土に金雲母、赤色粒子を含む。色調はにぶい褐色で、焼成は良い。

15 号集石（第 57 図）

第Ⅰ次調査で検出した。2 Ｄ－ 27 区に位置し、確認面は第Ⅷ層下位である。平面不整形の掘り込みを伴う。掘り込みは長軸 120㎝・短軸 105㎝、深さ 20㎝である。礫は掘り込み内に集積される。大半の礫が破損し、被熱痕が見られた。吸炭やタール状付着物を残す礫もある。礫の総重量 53.0kg、個数 67 点。覆土は炭化粒や焼土粒を多く含む暗褐色土である。遺物はない。

16 号集石（第 57 図）

第Ⅰ次調査で検出した。2 Ｄ－ 27 区に位置し、確認面は第Ⅷ層下位である。3 枚の平石が 50㎝四方の範囲にまとまって検出された。礫は吸炭など被熱痕が見られる。礫の総重量 13.0kg。遺物はない。

17 号集石（第 58 図）

第Ⅰ次調査で検出した。16 号集石に隣接し、確認面は第Ⅷ層下位である。平面不整円形の掘り込みを伴う。掘り込みは直径 80㎝、深さ 10㎝である。礫は掘り込み内に集積される。大半の礫が破損し、吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量 28.9kg、個数 42 点。遺物はない。

18 号集石（第 58 図、図版 13）

第Ⅰ次調査で検出した。2 Ｅ－ 26 区に位置し、確認面は第Ⅷ層下位である。平石や小礫が長軸 70㎝・短軸 50㎝の範囲に花弁状に配置され、内部に礫が集積される。大半の礫が破損し、吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量 41.8kg、個数 22 点。遺物はない。

19 号集石（第 58 図、図版 13）

第Ⅰ次調査で検出した。2 Ｅ－ 26 区に位置し、確認面は第Ⅷ層下位である。平石が 35㎝四方の範囲に花弁状に配置され、内部に礫が集積される。半数の礫に破損、吸炭などの被熱痕が見られた。礫の総重量 12.3kg、個数 22 点。遺物はない。

20 号集石（第 59 図、図版 52）

第Ⅰ次調査で検出した。2 Ｅ－ 25 区に位置し、確認面は第Ⅷ層下位である。平面円形の掘り込みを伴う。掘り込みは長軸 65㎝・短軸 60㎝、深さ 18㎝である。礫は掘り込みの壁面に沿うように集積される。6 割の礫が破損し、大半の礫に吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量 23.2kg、個数 25 点。覆土は炭化粒を多く含む。土器 4 点が出土した（1 ～ 4）。いずれも深鉢胴部の破片である。1・2 は半裁竹管の背を用いた沈線文が施される。胎土に微細な雲母、砂粒を含む。色調はにぶい褐色で、焼成は良い。3 は縦位の沈線区画に斜行条線が施される。4 は緩く括れた胴部に縄文を施す。

21 号集石（第 59 図、図版 14）

第Ⅰ次調査で検出した。2 Ｅ－ 24 区に位置し、確認面は第Ⅷ層下位である。平面不整楕円形の掘り込みを伴う。掘り込みは長軸 70㎝・短軸 50㎝、深さ 10㎝である。礫は掘り込み内に集積され、片側に偏在する。大半の礫が破損し、吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量 23.8kg、個数 35 点。遺物はない。

22 号集石（第 59 図）

第Ⅰ次調査で検出した。2 Ｅ－ 24 区に位置し、確認面は第Ⅷ層下位である。平面不整楕円形の掘り込みを伴う。掘り込みは長軸 65㎝・短軸 58㎝、深さ 15㎝である。礫は掘り込み内に集積される。大半の礫が破損し、吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量 55.1kg、個数 177 点。遺物はない。

23 号集石（第 60 図、図版 14）

第Ⅰ次調査で検出した。2 Ｅ－ 24 区に位置し、確認面は第Ⅷ層下位である。平面不整楕円形の掘り込み（長軸 70㎝程度、深さ 20㎝）を伴う。壁面に平石が花弁状に配置され、内部に礫が集積される。半数の礫が破損し、大半の礫に吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量 59.1kg、個数 44 点。遺物はない。

24 号集石（第 60 図、図版 52）

第Ⅰ次調査で検出した。2 Ｅ－ 24 区に位置し、確認面は第Ⅷ層下位である。礫が 40㎝四方の範囲に集積される。礫の総重量 24.2kg、個数 17 点。7 割の礫が破損し、半数の礫に吸炭など被熱痕が見られた。土器 4 点が出土した（1 ～ 4）。1・2 は沈線文や刺突文を施した深鉢で、早期の田戸下層式に該当する。3 は擦痕状の条痕文を施した深鉢で、早期後半の条痕文系土器に該当する。4 は分厚い深鉢で、縄文を施す。前期諸磯式に該当する。

25 号集石（第 60 図）

第Ⅰ次調査で検出した。2 Ｄ－ 26 区に位置し、確認面は第Ⅷ層下位である。比較的大きい礫 9 点が、2 ｍ四方の範囲に同レベルで散在する。掘り込みは見られない。破損礫は 2 点で、吸炭など被熱痕が見られる礫は 4 点であった。礫の総重量 29.9kg。遺物はない。

26 号集石（第 61 図）

第Ⅰ次調査で検出した。2 Ｃ－ 25 区に位置し、確認面は第Ⅷ層下位である。礫 5 点がまとまって検出され、このうち比較的大きい礫 3 点は重なった状態であった。掘り込みは確認できなかった。破損礫は 1 点で、吸炭など被熱痕が見られる礫は 4 点であった。礫の総重量 16.5kg。遺物はない。

27 号集石（第 61 図、図版 52）

第Ⅰ次調査で検出した。2 Ｅ－ 20 区に位置し、確認面は第Ⅷ層下位である。礫が 70㎝× 40㎝の範囲に集中する。礫分布に最大 20㎝の高低差が見られるが、掘り込みは確認できなかった。大半の礫が破損し、4 割の礫に吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量 8.2kg、個数 26 点。土器 3 点が出土した（1 ～ 3）。1 は横位の山形押型文を施す深鉢で。胎土に細粒の金雲母を含む。色調は赤褐色で、焼成は良い。2 は爪形文、3 は縄文を施す深鉢で、前期諸磯式に該当する。

31 号集石（第 61 図、図版 15）

第Ⅲ次調査で検出した。旧名称はⅠ－ 31 号集石である。2 Ｂ－ 19 区に位置し、確認面は第Ⅷ層である。平面円形の掘り込み（直径 130㎝、深さ 30㎝）を伴う。礫は掘り込み内に集積される。大半の礫が破損し、吸炭やタール状付着物など被熱痕が見られた。礫の総重量 211.5kg、個数 232 点。遺物はない。

32 号集石（第 61 図）

第Ⅲ次調査で検出した。旧名称はⅠ－ 32 号集石である。2 Ｂ－ 18 区に位置し、確認面は第Ⅷ層である。平面不整円形の掘り込み（直径 90㎝、深さ 20㎝）を伴う。礫は掘り込み内に集積される。大半の礫が破損し、吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量 78.7kg、個数 81 点。遺物はない。

33 号集石（第 62 図）

第Ⅲ次調査で検出した。旧名称はⅠ－ 33 号集石である。2 Ｄ－ 17 区に位置し、確認面は第Ⅷ層である。平面不整形の掘り込み（長軸 100㎝・短軸 70㎝、最深 8㎝）を伴う。礫は掘り込み内に集積され、北西隅で平石 3 枚が平面「コ」字状に配置されていた。大半の礫が破損し、吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量 22.6kg、個数 27 点。遺物はない。

34 号集石（第 62 図）

第Ⅲ次調査で検出した。旧名称はⅠ－ 34 号集石である。2 Ｄ－ 17 区に位置し、確認面は第Ⅷ層である。礫が 60㎝四方の範囲に集積される。掘り込みは確認できなかった。大半の礫が破損し、吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量 13.4kg、個数 63 点。遺物はない。

35 号集石（第 62 図、図版 15）

第Ⅲ次調査で検出した。旧名称はⅠ－ 35 号集石である。2 Ｄ－ 16 区に位置し、確認面は第Ⅷ層である。平面不整形の掘り込み（長軸 110㎝・短軸 100㎝、最深 20㎝）を伴う。礫は掘り込み内に集積され、周囲に拡散していた。大半の礫が破損し、吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量 129.3kg、個数 124 点。遺物はない。

36 号集石（第 63 図）

第Ⅲ次調査で検出した。旧名称はⅠ－ 36 号集石である。2 Ｄ－ 15 区に位置し、確認面は第Ⅷ層である。礫 14 点が 2 ｍ×１ｍの範囲に同レベルで散在する。掘り込みは見られない。破損礫は 4 点で、すべての礫に吸炭など被熱痕が見られる。礫の総重量 18.0kg。遺物はない。

37 号集石（第 63 図、図版 15）

第Ⅲ次調査で検出した。旧名称はⅠ－ 37 号集石である。2 Ｅ－ 15 区に位置し、確認面は第Ⅷ層である。比較的大きい礫が直径 50㎝の範囲内に集積される。掘り込みは確認できなかったが、礫が落ち込むように出土したことから掘り込みの存在が推定される。大半の礫が破損し、吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量 44.0kg、個数 13 点。遺物はない。

38 号集石（第 64 図、図版 16）

第Ⅲ次調査で検出した。旧名称はⅠ－ 38 号集石である。2 Ｅ－ 15 区に位置し、確認面は第Ⅷ層である。平面不整円形の掘り込み（直径 150㎝、最深 40㎝）を伴う。礫は掘り込み内に集積され、一部が周囲に拡散していた。大半の礫が破損し、吸炭やタール状付着物など被熱痕が見られた。礫の総重量 179.4 ㎏、個数 314 点。覆土は 3 層で、下層は炭化材や焼土粒を多く含む。遺物はない。

39 号集石（第 63 図）

第Ⅲ次調査で検出した。旧名称はⅠ－ 39 号集石である。2 Ｆ－ 14 区に位置し、確認面は第Ⅷ層である。礫が 150㎝× 120㎝の範囲に集中する。深さ 10㎝程度の掘り込みを伴うが、周囲を掘り下げてしまい、掘り込みの規模等は不明確である。大半の礫が破損し、吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量 12.0㎏、個数 55 点。遺物はない。

40 号集石（第 63 図、図版 16）

第Ⅲ次調査で検出した。旧名称はⅠ－ 40 号集石である。2 Ｆ－ 13 区に位置し、確認面は第Ⅷ層である。礫が 70㎝× 50㎝の範囲に集中する。掘り込みは見られない。大半の礫が破損し、吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量 11.1㎏、個数 20 点。遺物はない。

41 号集石（第 65 図、図版 17）

第Ⅲ次調査で検出した。旧名称はⅠ－ 41 号集石である。Ｊ－ 30 区に位置し、確認面は第Ⅷ層下位である。礫が 100㎝× 90㎝の範囲に集積され、斜面下方を中心に周囲 4 ｍ四方の範囲に拡散していた。掘り込みは見られない。大半の礫が破損し、吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量 120.6㎏、個数 298 点。遺物はない。

42 号集石（第 66 図）

第Ⅲ次調査で検出した。旧名称はⅠ－ 42 号集石である。Ｋ－ 30 区に位置し、確認面は第Ⅷ層下位である。礫が 120㎝× 100㎝の範囲に集中する。掘り込みは見られない。大半の礫が破損し、吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量 20.7㎏、個数 25 点。遺物はない。

43 号集石（第 66 図）

第Ⅲ次調査で検出した。旧名称はⅠ－ 43 号集石である。Ｊ－ 30 区に位置し、確認面は第Ⅷ層下位である。礫が 120㎝四方の範囲に集中する。掘り込みは見られない。大半の礫が破損し、吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量 16.2㎏、個数 33 点。遺物はない。

44 号集石（第 66 図）

第Ⅲ次調査で検出した。旧名称はⅠ－ 44 号集石である。Ｈ－ 30 区に位置し、確認面は第Ⅷ層下位である。礫が 100㎝四方の範囲に集中し、一部が周囲に拡散する。掘り込みは見られない。礫は半数が破損し、大半に吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量 18.7㎏、個数 57 点。遺物はない。

45 号集石（第 66 図、図版 17）

第Ⅲ次調査で検出した。旧名称はⅠ－ 45 号集石である。2 Ａ－ 19 区に位置し、確認面は第Ⅷ層である。礫が 70㎝× 60㎝の範囲で環状に分布し、周囲に礫が散在する。掘り込みは確認できなかったが、礫の出土状況から掘り込みの存在が推定される。大半の礫が破損し、吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量 20.6㎏、個数 52 点。遺物はない。

46 号集石（第 66 図、図版 17）

第Ⅲ次調査で検出した。旧名称はⅠ－ 46 号集石である。2 Ｃ－ 17 区に位置し、確認面は第Ⅷ層である。礫 16 点が 40㎝四方の範囲に集中する。掘り込みは確認できなかったが、礫が落ち込むように出土したことから掘り込みの存在が推定される。隣接して小ピット（直径 18㎝・深さ 20㎝）が検出され、内部から礫 1 点が出土した。ピット内も含め大半の礫が破損し、吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量 13.6㎏。遺物はない。

47 号集石（第 67 図、図版 18・52）

第Ⅲ次調査で検出した。旧名称はⅠ－ 47 号集石である。2 Ｅ－ 15 区に位置し、確認面は第Ⅷ層である。礫は平面円形の掘り込み及び西側に続く帯状範囲（120㎝× 50㎝）に集中し、周囲に拡散する。掘り込みは直径約 100㎝・最深 20㎝で、平石が壁面に沿って花弁状に配置され、内部に礫が集積される。帯状に分布する礫は 15㎝前後の大きさでほぼ揃う。半数の礫が破損するが、花弁状配置の礫や帯状分布の礫に破損は見られない。吸炭やタール状付着物など被熱痕がある礫は、帯状分布の礫を除く大半に見られる。礫の総重量 220.8㎏、個数 151 点。出土土器（1）は不鮮明な縄文が見られ、胎土に砂粒を含む。色調はにぶい褐色で、焼成は良い。前期諸磯式と思われる。

48 号集石（第 68 図）

第Ⅲ次調査で検出した。旧名称はⅠ－ 48 号集石である。2 Ｄ－ 16 区に位置し、確認面は第Ⅷ層である。比較的大きい平石 2 枚を中心に 150㎝四方の範囲に破損礫が散在する。大半の礫に吸炭など被熱痕が見られる。礫の総重量 26.5㎏、個数 17 点。遺物はない。

49 号集石（第 68 図、図版 18・19）

第Ⅳ次調査で検出した。旧名称はⅠ－ 49 号集石である。2 Ｂ－ 22 区に位置する。確認面は第Ⅶ層で、周囲の集石群より約 30㎝上位に位置する。平面不整円形の掘り込み（長軸 110㎝・短軸 90㎝、深さ 45㎝）を伴う。礫は掘り込み内に集積され、下部には底石を中心に比較大きい平石が花弁状に配置される。大半の礫が破損し、吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量 173.7㎏、個数 128 点。遺物はない。

50 号集石（第 68 図、図版 19）

第Ⅳ次調査で検出した。旧名称はⅠ－ 50 号集石である。2 Ｄ－ 20 区に位置し、確認面は第Ⅷ層である。礫が 50㎝四方の範囲に集積され、周囲に散在する。集積部の礫は二重に重ねられ、上面は比較的大きく破損がない礫 4 点からなり、直下に破損礫を含む小形礫 9 点が集められる。掘り込みは見られない。大半の礫に吸炭など被熱痕が見られた。遺物はない。

51 号集石（第 69 ～ 70 図、図版 19・52）

第Ⅳ次調査で検出した。旧名称はⅠ－ 51 号集石である。2 Ｄ－ 18 区に位置し、確認面は第Ⅷ層である。平面不整円形の掘り込み 3 基を伴う。掘り込みは並列し、このうち中央に位置する掘り込みが大きく、長軸 65㎝・短軸 60㎝、深さ 15㎝を測る。礫は中央の掘り込み内と周囲 3 ｍ四方に集積され、掘り込み内は壁に沿って大小の礫が花弁状に配置される。大半の礫が破損し、吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量 167.8kg、個数 364 点。土器 1 点、打製石斧 1 点が出土した（1・2）。1 は平行沈線間に斜位の短沈線を加えた深鉢で、前期諸磯式に該当する。

52 号集石（第 71 図）

第Ⅳ次調査で検出した。旧名称はⅠ－ 52 号集石である。2 Ｃ－ 18 区に位置し、確認面は第Ⅷ層である。平面円形の掘り込み（直径 60㎝、深さ 10㎝）を伴う。礫は掘り込み及び東側に 50㎝離れた 70㎝× 50㎝の範囲に集積される。大半の礫が破損し、吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量 11.2kg、個数 48 点。遺物はない。

53 号集石（第 71 図、図版 52）

第Ⅳ次調査で検出した。旧名称はⅠ－ 53 号集石である。2 Ｄ－ 18 区に位置し、確認面は第Ⅷ層である。礫が 3 ｍ× 1 ｍの範囲に集中し、この中で 3 ケ所にまとまる。掘り込みは見られない。大半の礫が破損し、吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量 32.4kg、個数 73 点。土器 2 点が出土した（1・2）。1 は弧状や縦位の平行沈線文、2 は平行沈線間に短沈線を加えた深鉢で、いずれも前期諸磯式に該当する。

54 号集石（第 72 図、図版 20・52）

第Ⅳ次調査で検出した。旧名称はⅠ－ 54 号集石である。2 Ｃ－ 20 区に位置し、確認面は第Ⅷ層である。礫が 3 ｍ× 2 ｍの範囲に集中する。掘り込みは見られない。大半の礫が破損し、吸炭やタール状付着物など被熱痕が見られた。礫の総重量 70.8kg、個数 175 点。土器 2 点が出土した（1・2）。1 は平行沈線文を施し、胎土に白色粒子を多く含む。色調は暗褐色で、焼成はやや悪い。2 は縄文を施す深鉢で、内面は平滑だが剥落が目立つ。色調はにぶい黄橙色で、焼成は良い。いずれも前期諸磯式に該当する。

55 号集石（第 75 図）

第Ⅳ次調査で検出した。旧名称はⅠ－ 55 号集石である。2 Ｂ－ 20 区に位置し、確認面は第Ⅷ層である。礫が 70㎝四方の範囲に集中し、周囲に散在する。掘り込みは見られない。大半の礫が破損し、吸炭やタール状付着物など被熱痕が見られた。礫の総重量 7.5kg、個数 70 点。遺物はない。

56 号集石（第 73 ～ 74 図、図版 20）

第Ⅳ次調査で検出した。旧名称はⅠ－ 56 号集石である。2 Ａ－ 21 区に位置し、58 号集石に隣接する。確認面は第Ⅷ層である。平面不整円形の掘り込み（長軸 70㎝・短軸 65㎝、深さ 10㎝）を伴う。礫は掘り込み内に集積され、周囲に拡散する。大半の礫が破損し、吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量 57.4kg、個数 173 点。遺物はない。

57 号集石（第 73 ～ 74 図、図版 20）

第Ⅳ次調査で検出した。旧名称はⅠ－ 57 号集石である。2 Ａ－ 21・22 区に位置し、58 号集石に隣接する。確認面は第Ⅷ層である。多数の礫が 150㎝四方の範囲に集積され、掘り込みは見られない。大半の礫が破損し、吸炭やタール状付着物などが見られた。礫の総重量 71.9㎏、個数 162 点。遺物はない。

58 号集石（第 73 ～ 74 図、図版 20）

第Ⅳ次調査で検出した。旧名称はⅠ－ 58 号集石である。2 Ａ－ 21 区に位置し、56 号・57 号集石に隣接する。確認面は第Ⅷ層である。平面不整円形の掘り込み（直径約 110㎝、深さ 10㎝）を伴う。多数の礫が掘り込み内に集積され、周囲に拡散する。大半の礫が破損し、吸炭やタール状付着物など被熱痕が見られた。礫の総重量 101.1㎏、個数 408 点。遺物はない。

59 号集石（第 75 図）

第Ⅳ次調査で検出した。旧名称はⅠ－ 59 号集石である。2 Ｂ－ 22 区に位置し、確認面は第Ⅷ層である。礫が 3 ｍ× 2 ｍの範囲に集中する。掘り込みは見られない。大半の礫が破損し、吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量 14.3㎏、個数 37 点。遺物はない。

60 号集石（第 76 図）

第Ⅴ次調査で検出した。旧名称はＵ－ 3 区集石である。Ｕ－ 3 区に位置する。平面不整円形の掘り込みを伴う。掘り込みは直径 120㎝、深さ 30㎝で、礫は掘り込み内に集積される。遺物はない。

61 号集石（第 76 図）

第Ⅴ次調査で検出した。、旧名称はＹ－ 59 区集石である。Ｙ－ 59 区に位置する。南側が未調査区にかかる。掘り込みは直径 150㎝程度で、深さ 40㎝である。多数の礫が掘り込み内に集積され、周囲に拡散する。覆土は 2 層で、下層は炭化粒を多く含む。遺物はない。

62 号集石（第 78 図）

第Ⅱ次調査で検出した。旧名称はＨ－ 10 区集石である。Ｈ－ 10 区に位置する。一部は未調査区にかかる。礫が 2 ｍ× 1 ｍの範囲に集中する。掘り込みは見られない。大半の礫が破損し、吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量 53.1㎏、個数 218 点。遺物はない。

63 号集石（図版 46）

第Ⅱ次調査で検出した。旧名称はＨ－ 11 区集石である。Ｈ－ 11 区に位置する。一部は未調査区にかかる。礫が 2 ｍ× 1 ｍの範囲に集中する。掘り込みは見られない。大半の礫が破損し、吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量 72.7㎏、個数 175 点。遺物はない。

64 号集石（第 77 図）

第Ⅱ次調査で検出した。旧名称はＣ－ 22 区集石である。Ｃ－ 22 区に位置し、確認面は第Ⅷ層中である。平面不整円形の掘り込み（長軸 90㎝・短軸 80㎝、深さ 14㎝）を伴う。多数の礫が掘り込み内に集積され、斜面下方に拡散する。大半の礫が破損し、吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量 114.1㎏、個数

239 点。遺物はないが、周囲に早期条痕文土器が散在する。

65 号集石（第 78 図、図版 52）

第Ⅱ次調査で検出した。旧名称はＥ－ 24 区集石である。Ｅ－ 24 区に位置し、確認面は第Ⅷ層中である。一部は未調査区にかかる。礫が 3 ｍ×２ｍの範囲に集中する。掘り込みは見られない。大半の礫が破損し、吸炭やタール状付着物など被熱痕が見られた。礫の総重量 19.2kg、個数 52 点。打製石斧、横刃形石器が出土した（1・2）。周囲に早期条痕文土器が散在する。

66 号集石

第Ⅱ次調査で検出した。旧名称はＧ－ 24 区集石である。Ｇ－ 24 区に位置し、確認面は第Ⅷ層中である。礫が 1 ｍ四方の範囲に集中する。掘り込みは見られない。半数の礫が破損し、7 割の礫に吸炭など被熱痕が見られた。礫の接合はない。礫の総重量 11.4kg、個数 15 点。周囲に早期条痕文土器が散在する。

67 号集石

第Ⅱ次調査で検出した。旧名称はＩ－ 26 区集石である。Ｉ－ 26 区に位置する。一部が未調査区にかかる。礫が直径 150㎝の範囲に集中し、周囲に散在する。掘り込みは見られない。大半の礫が破損し、吸炭など被熱痕が見られた。礫の総重量 21.5kg、個数 48 点。

(4) 土坑

段丘上段の第Ⅷ層（暗褐色土）中で 4 基検出し、いずれも落し穴に分類される。出土遺物はなく、時期は不明である。

1 号土坑（第 79 図、図版 21）

第Ⅴ次調査で検出した。Ｙ－ 59 区に位置する。平面は長楕円形で、長軸 190㎝・短軸 85㎝、深さ 70㎝である。主軸方位Ｎ－ 30°－Ｅ。底面は平坦で、ピット 1 基を伴う。

2 号土坑（第 79 図、図版 21）

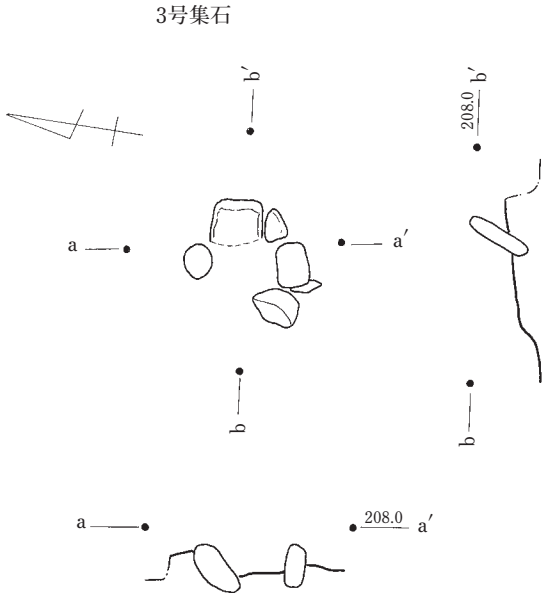
第Ⅴ次調査で検出した。1 号土坑に隣接する。平面は楕円形で、長軸 120㎝・短軸 85㎝、深さ 70㎝である。主軸方位Ｎ－ 40°－Ｗ。底面は中央に向かって傾斜し、ピット 1 基を伴う。

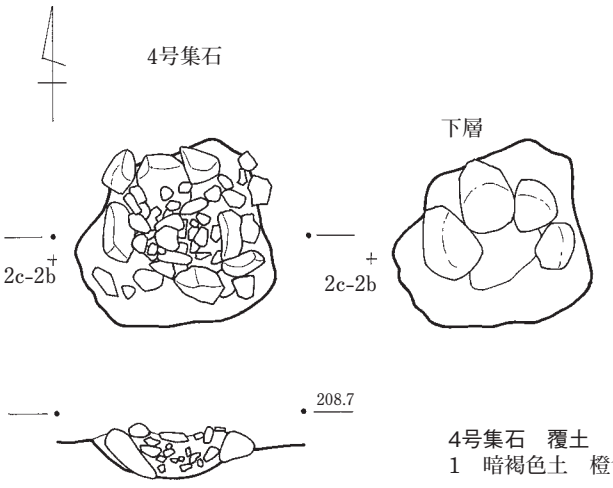
3 号土坑（第 79 図、図版 21）

第Ⅱ次調査で検出した。Ｃ－ 22 区に位置し、一部が未調査区にかかる。掘り込み面は土層観察から第Ⅷ層上面である。平面は長楕円形で、検出規模は長軸 150㎝・短軸 70㎝、深さ 140㎝である。主軸方位Ｎ－ 60°－Ｗ。底面は平坦で、ピット 1 基を伴う。

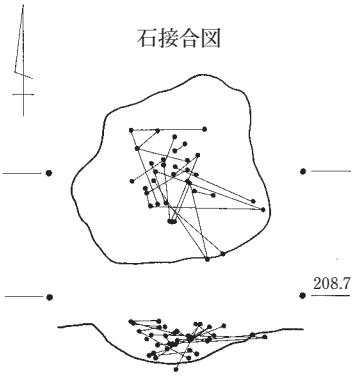
4 号土坑（第 79 図、図版 21）

第Ⅱ次調査で検出した。Ｉ－ 26 区に位置する。上端の平面は長楕円形で、長軸 195㎝・短軸 90㎝、深さは 65㎝である。主軸方位Ｎ－ 22°－Ｅ。底面は平坦で、ピット 1 基を伴う。



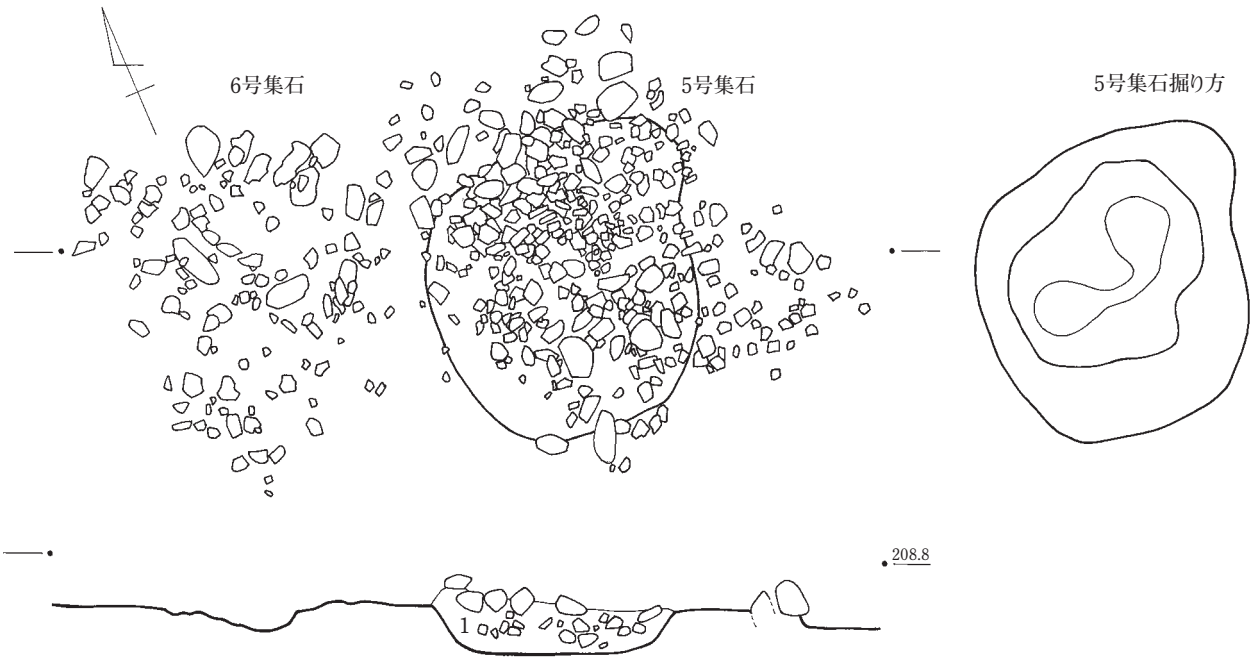


4号集石　覆土
1　暗褐色土　橙色スコリア少量。

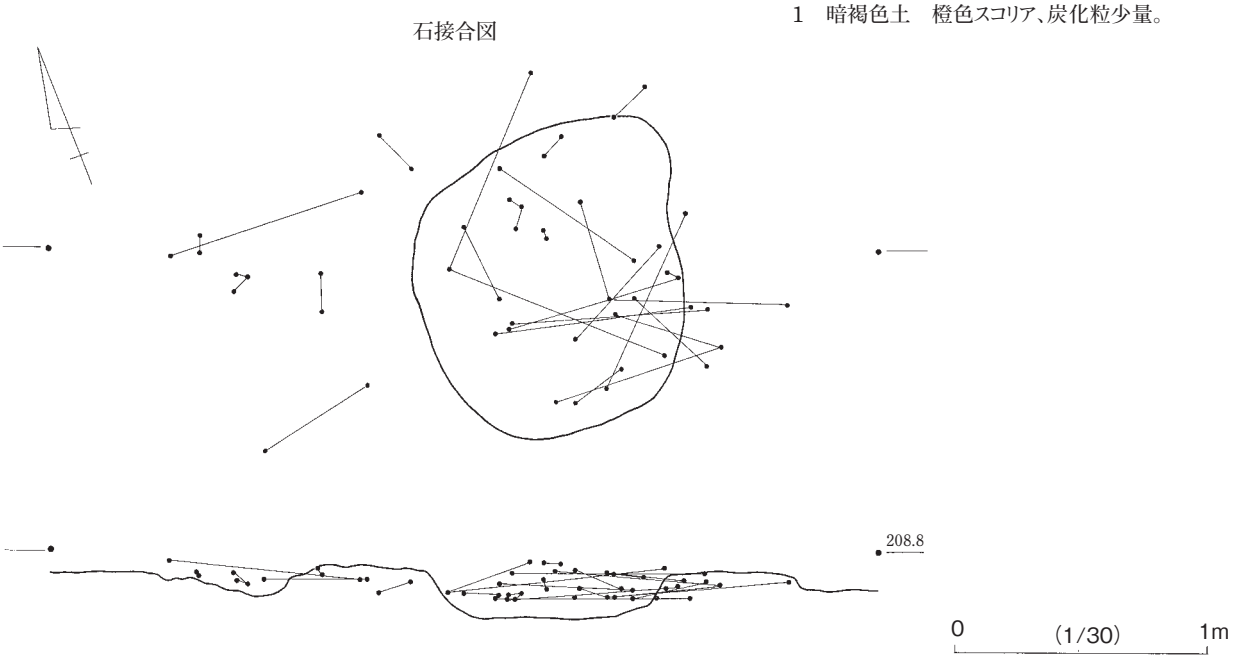


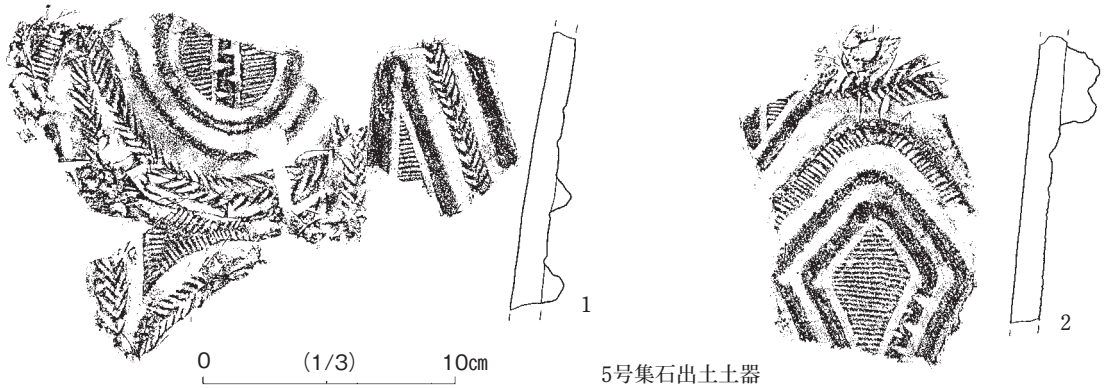
0　(1/30)　1m

第 52 図　3 号集石、4 号集石



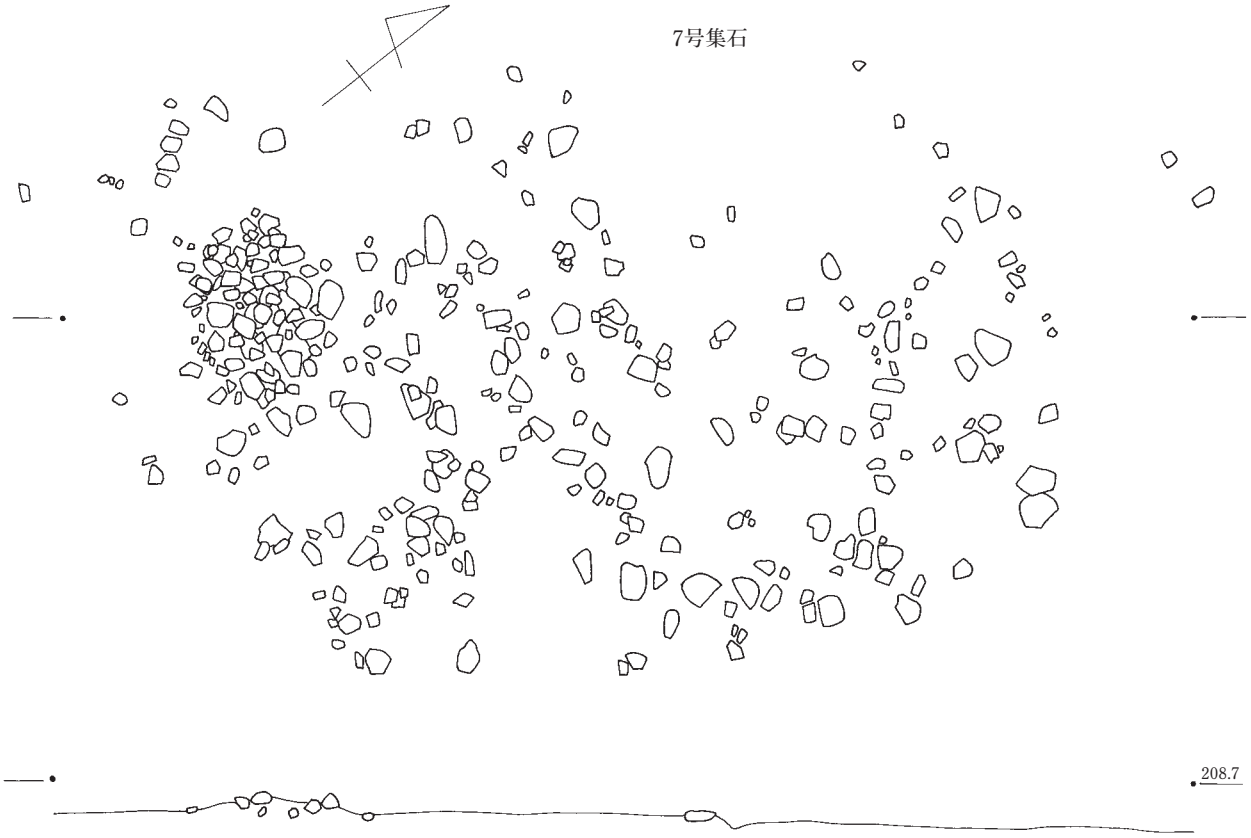
5号集石　覆土
1　暗褐色土　橙色スコリア、炭化粒少量。



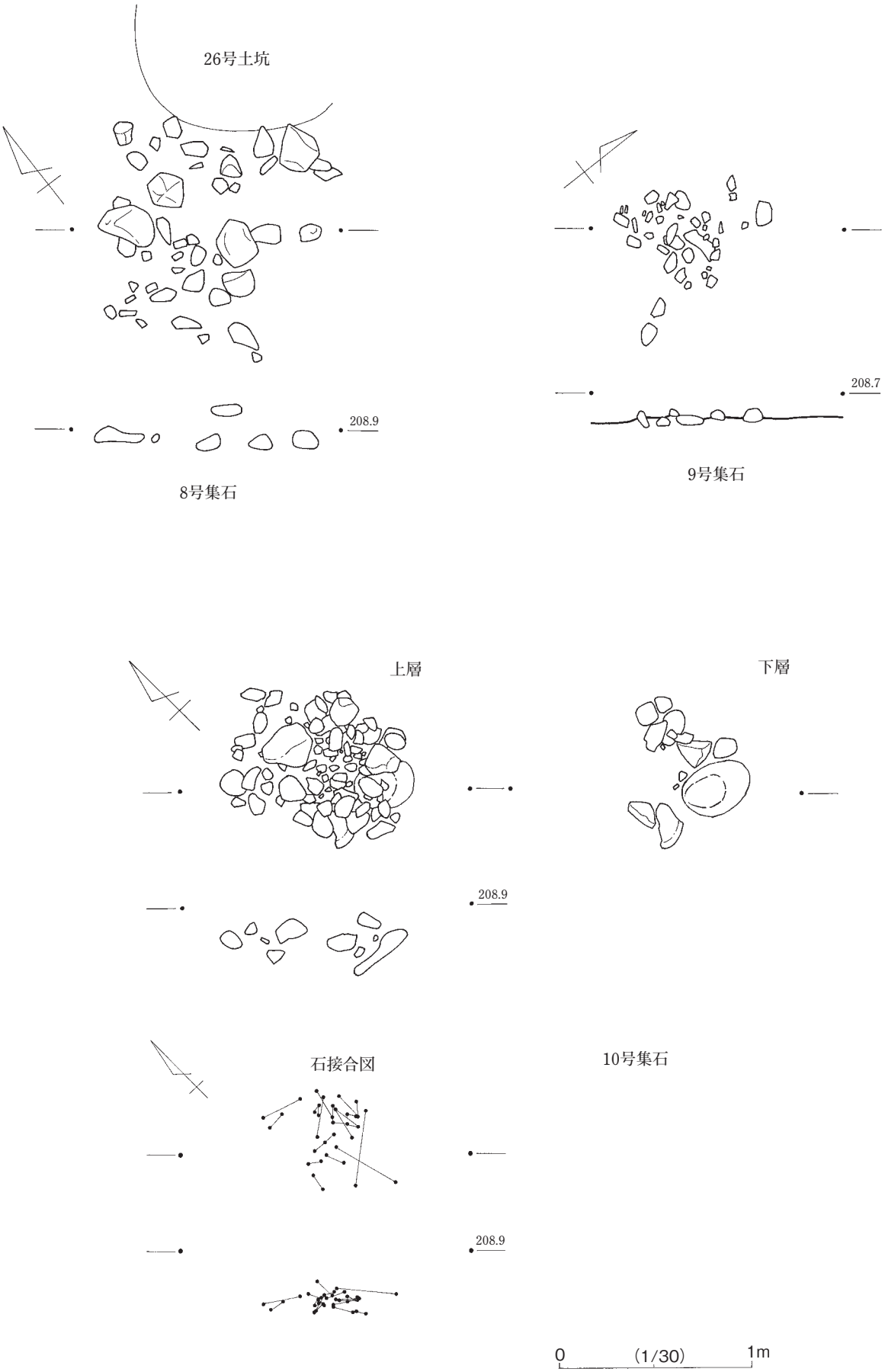


5号集石出土土器

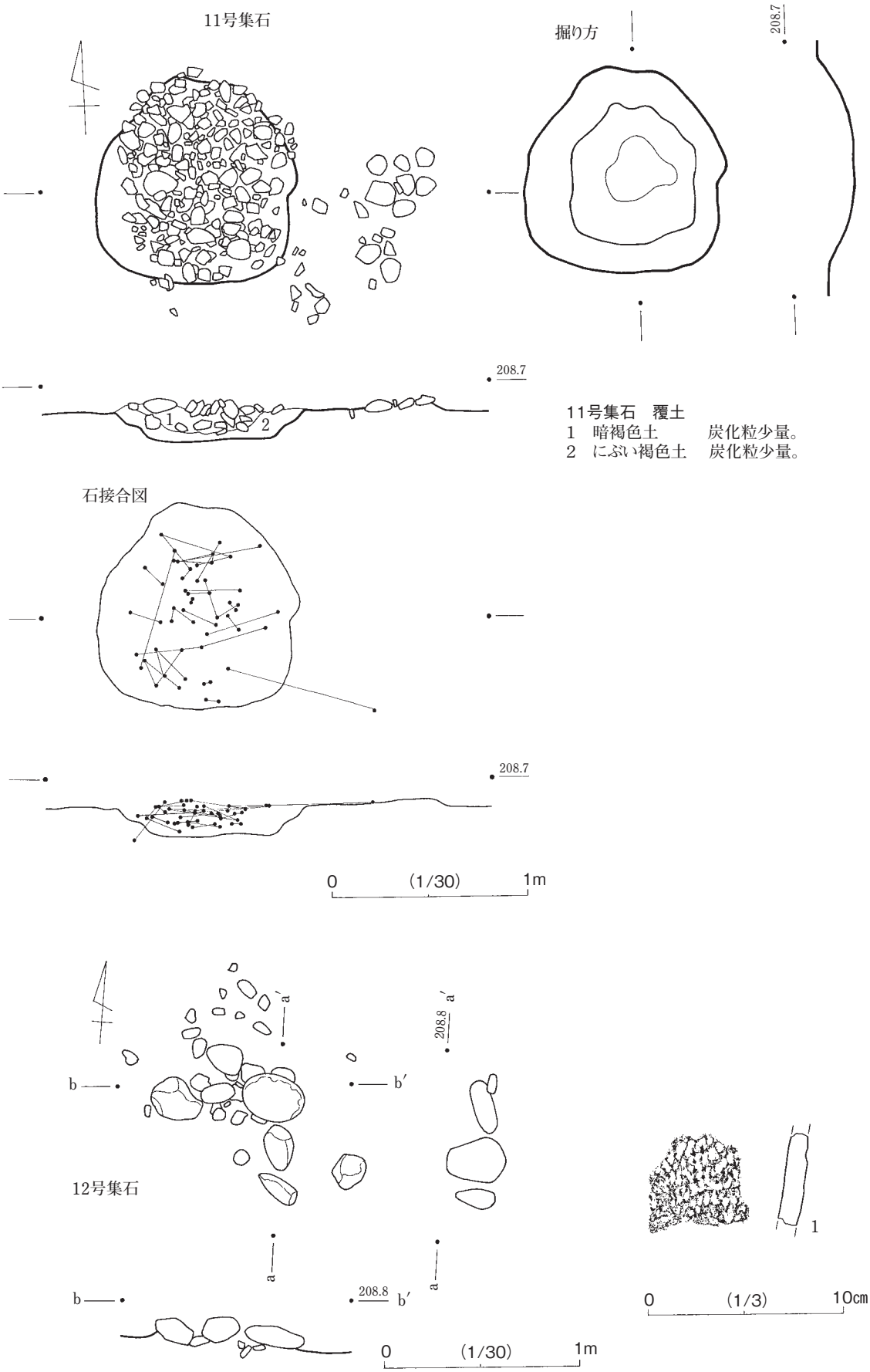
第 53 図　5 号集石・出土遺物、6 号集石



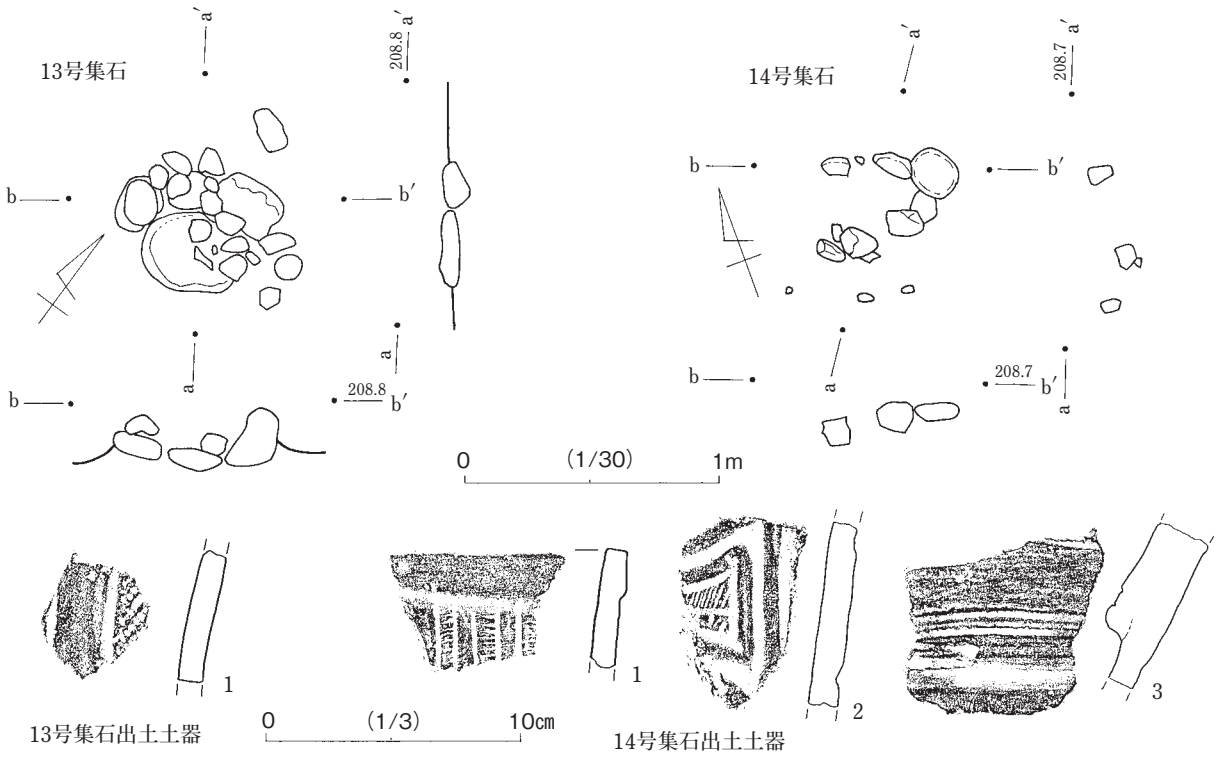
第 54 図　7 号集石

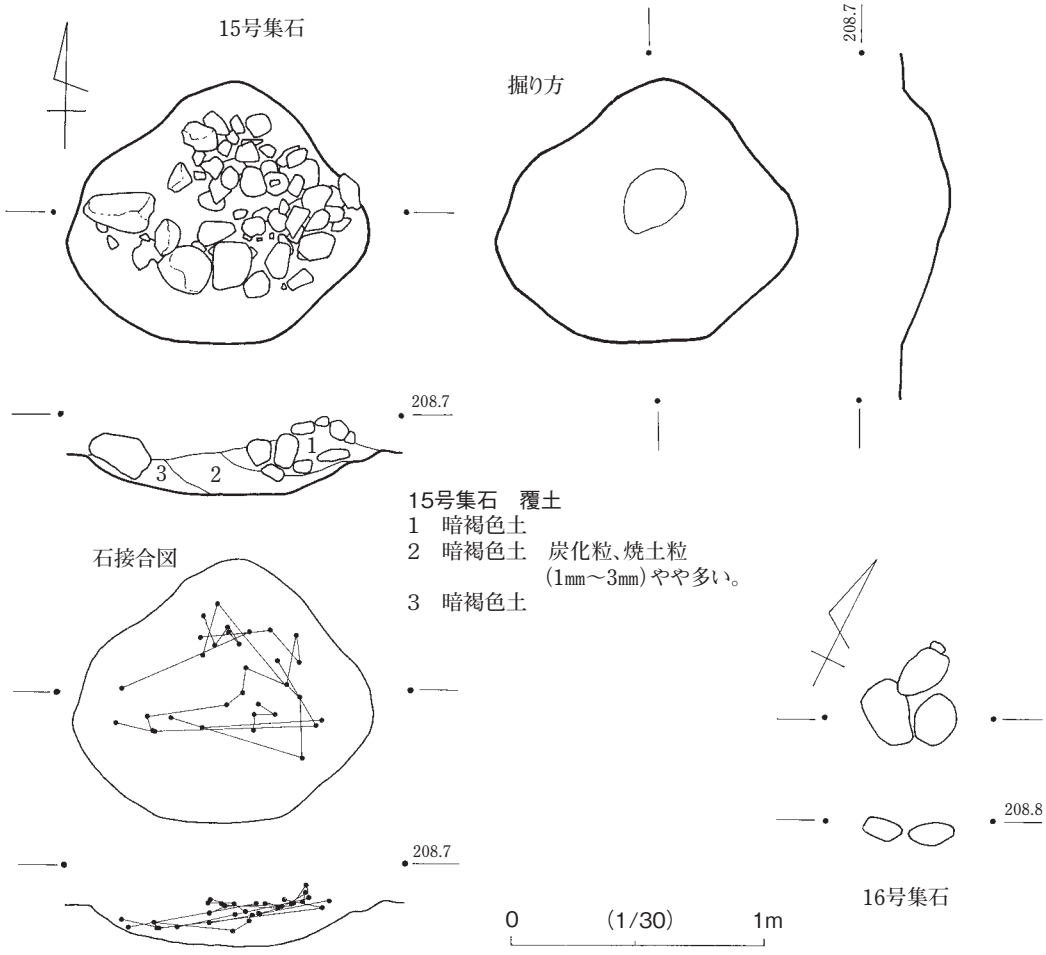


第 55 図　8 号集石、9 号集石、10 号集石

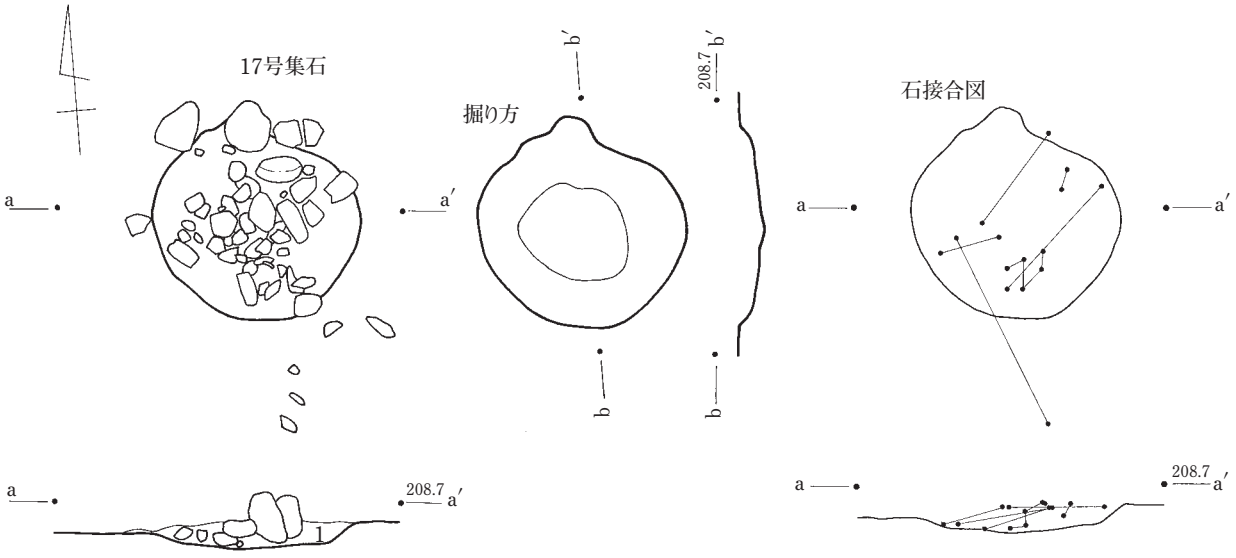


第 56 図　11 号集石、12 号集石・出土遺物

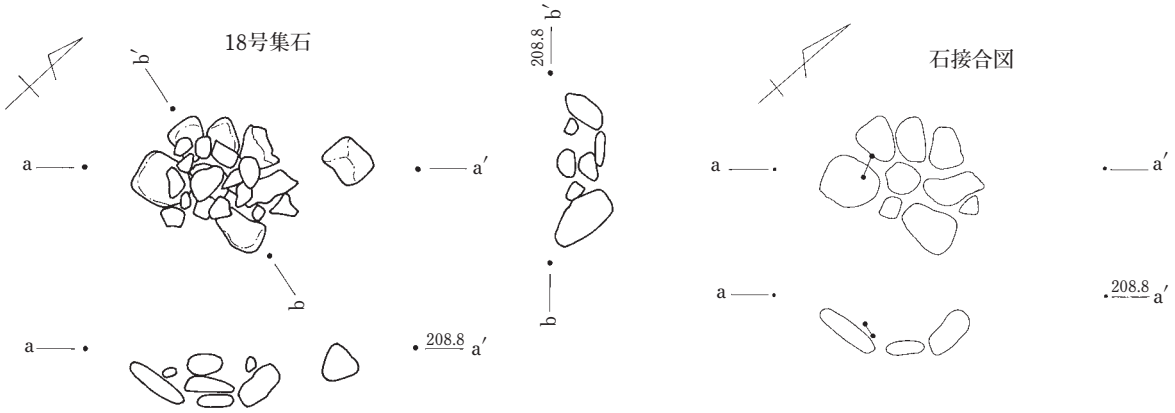


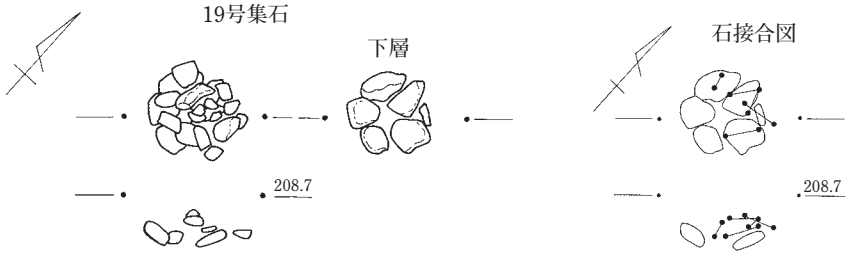


第 57 図　13 号集石、14 号集石・出土遺物　15 号集石、16 号集石



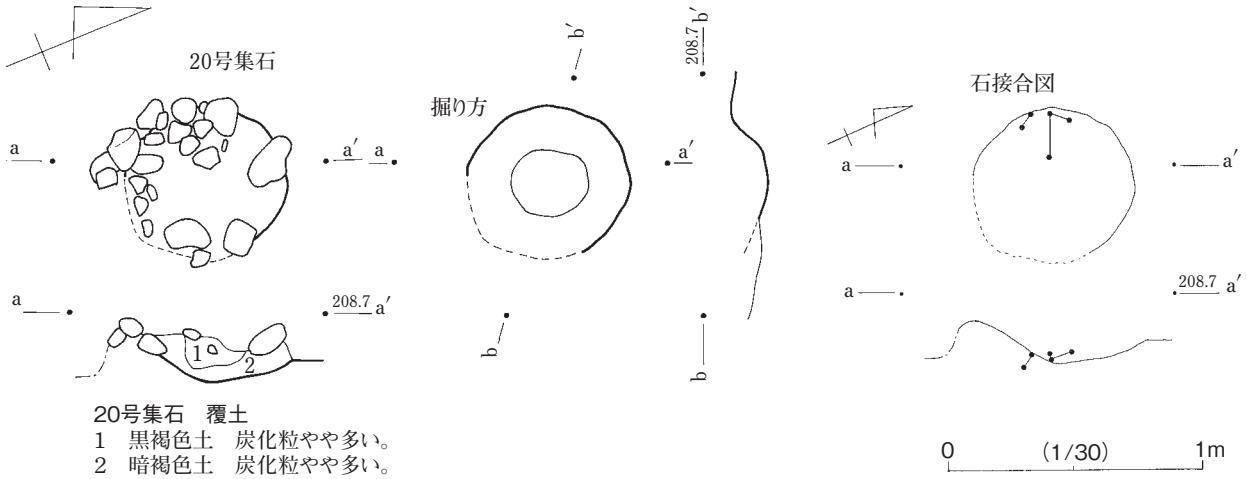
17号集石　覆土
1　暗褐色土　地山ソフトローム塊(1cm)含む。



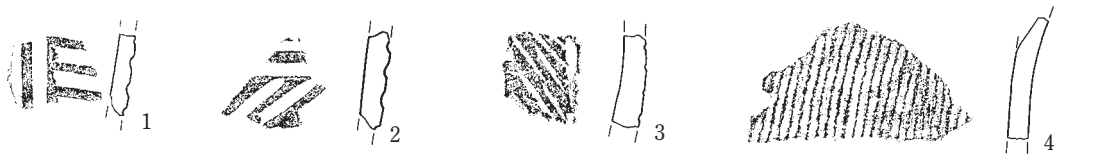


0　(1/30)　1m

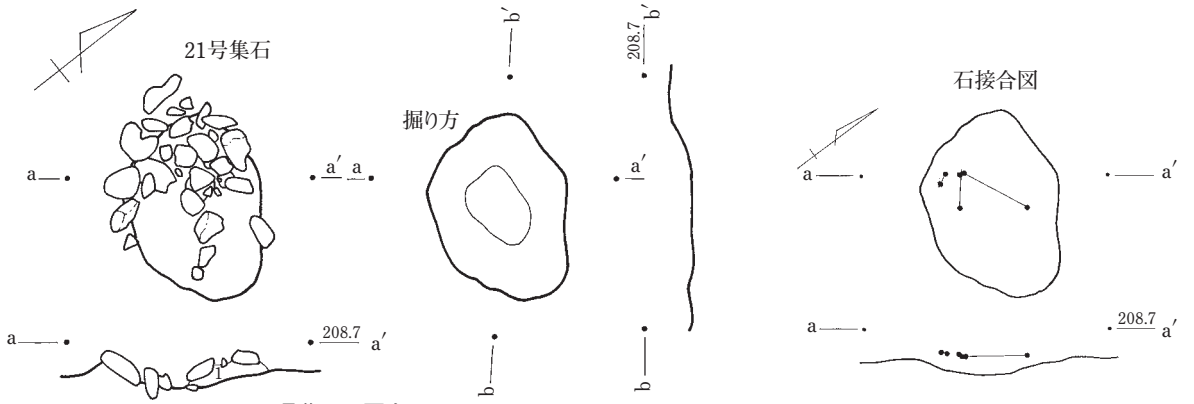
第 58 図　17 号集石、18 号集石、19 号集石



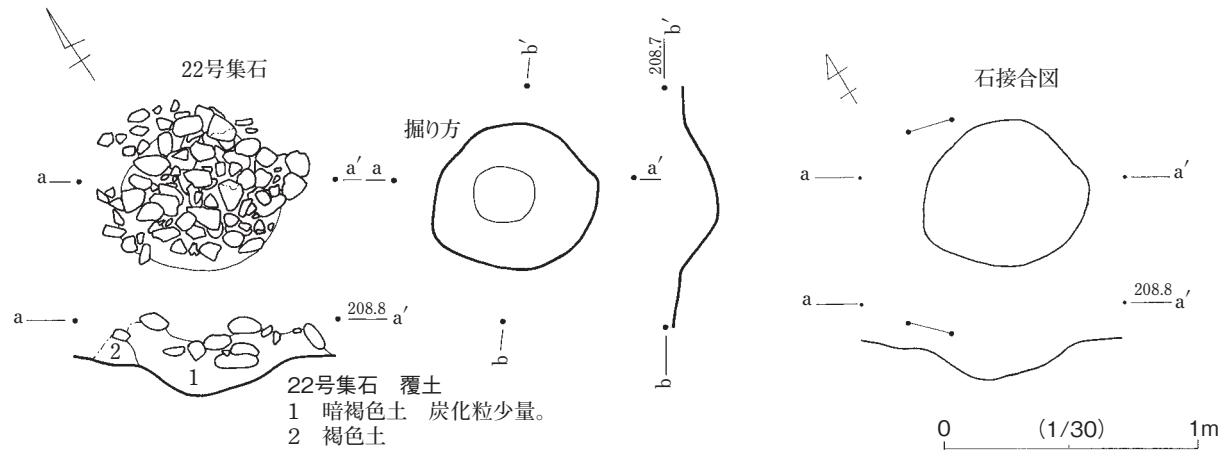
20号集石　覆土
1　黒褐色土　炭化粒やや多い。
2　暗褐色土　炭化粒やや多い。



20号集石出土土器

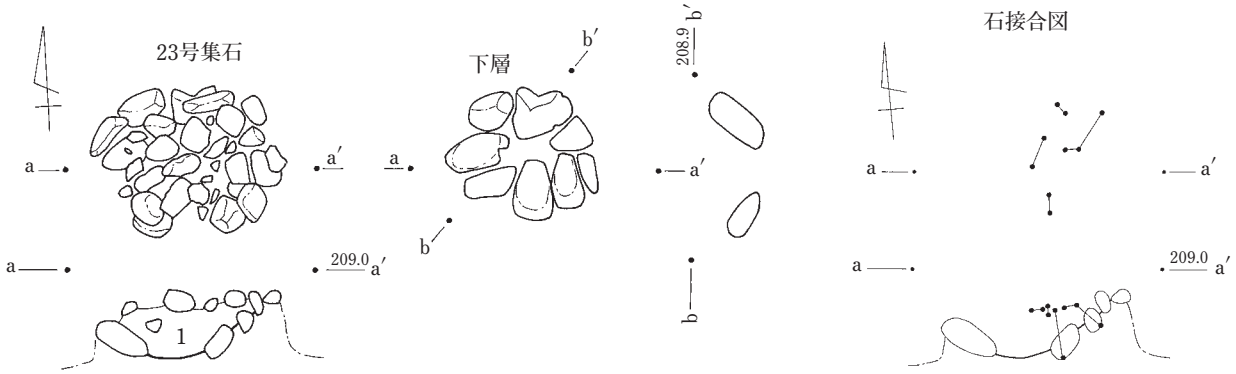


21号集石　覆土
1　暗褐色土

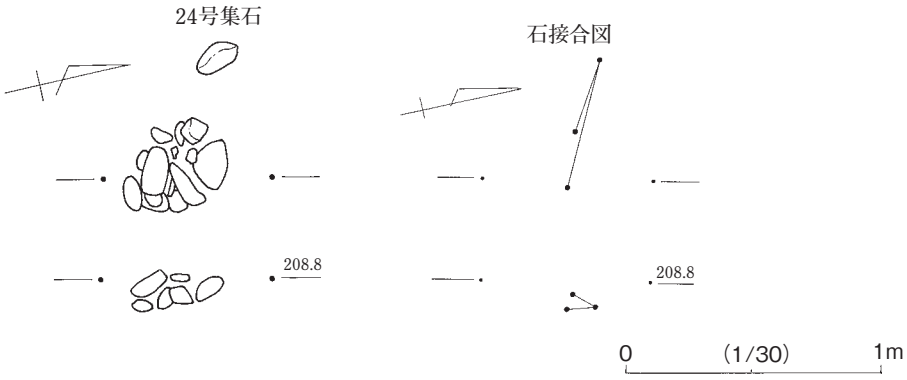


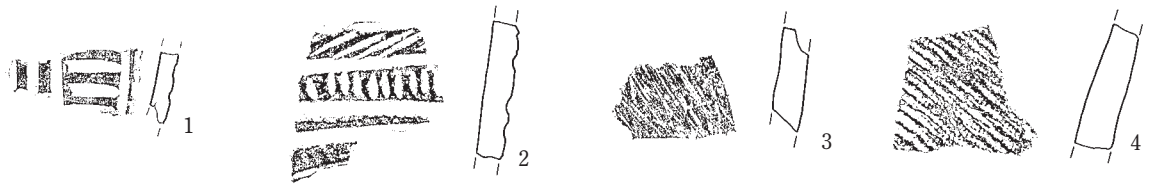
22号集石　覆土
1　暗褐色土　炭化粒少量。
2　褐色土

第 59 図　20 号集石・出土遺物、21 号集石、22 号集石

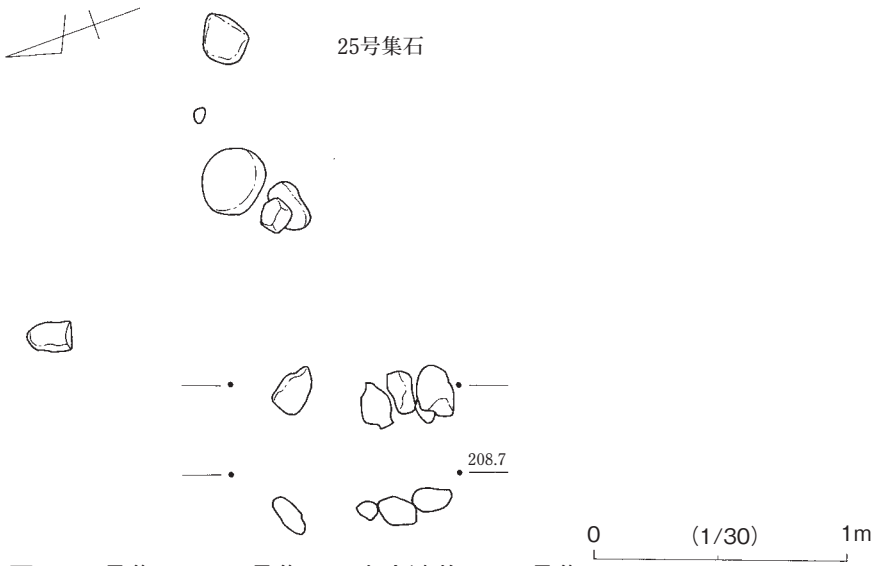


23号集石　覆土
1　暗褐色土　炭化粒少量。

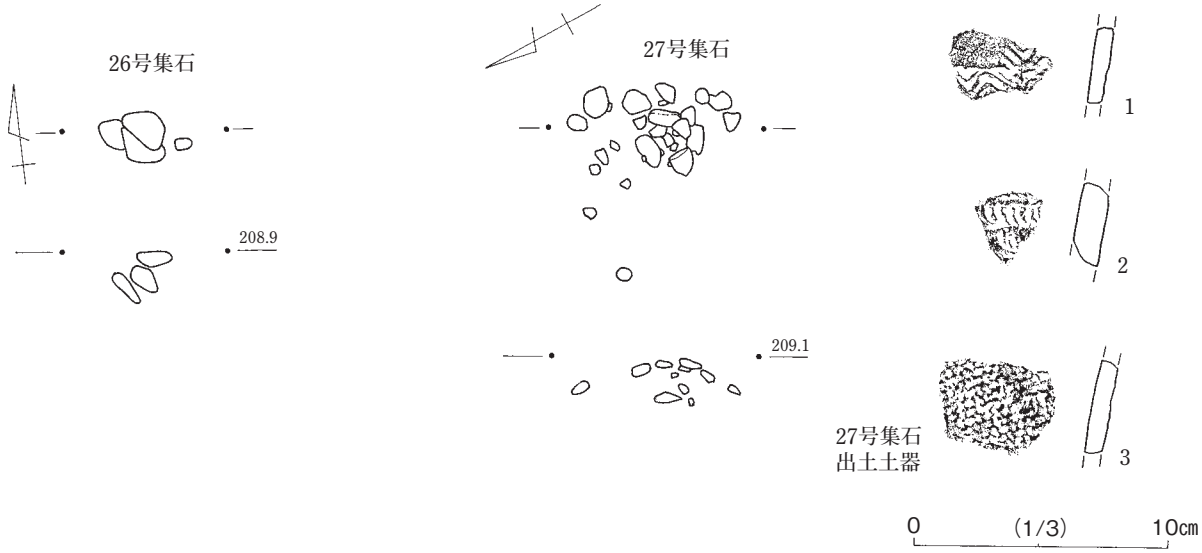


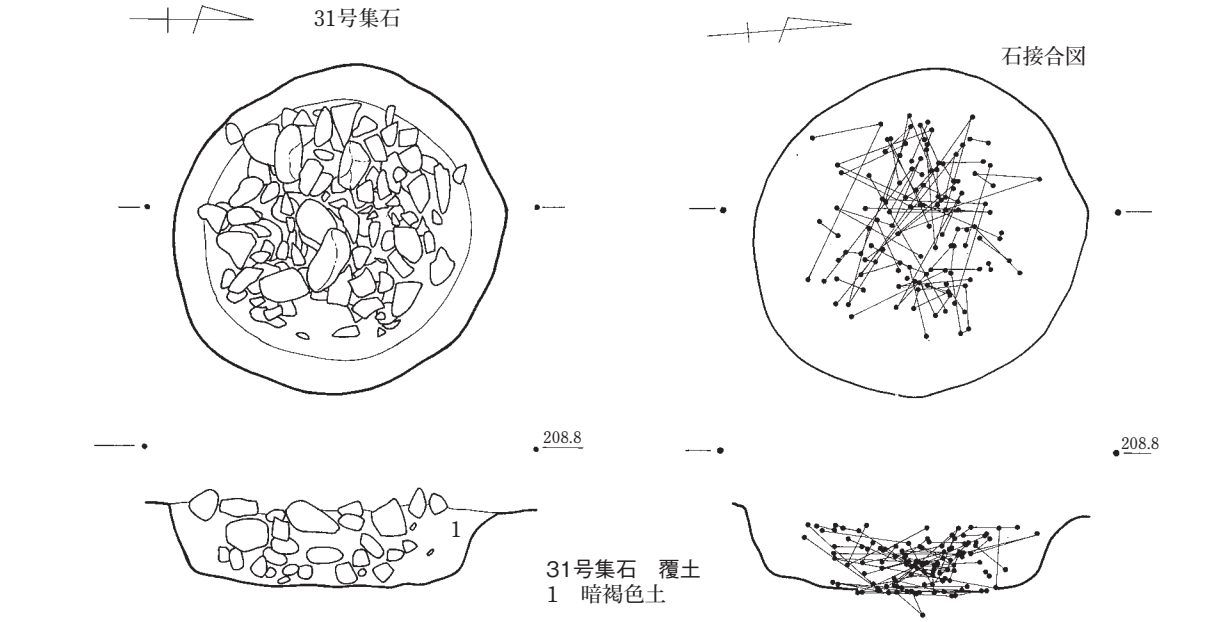


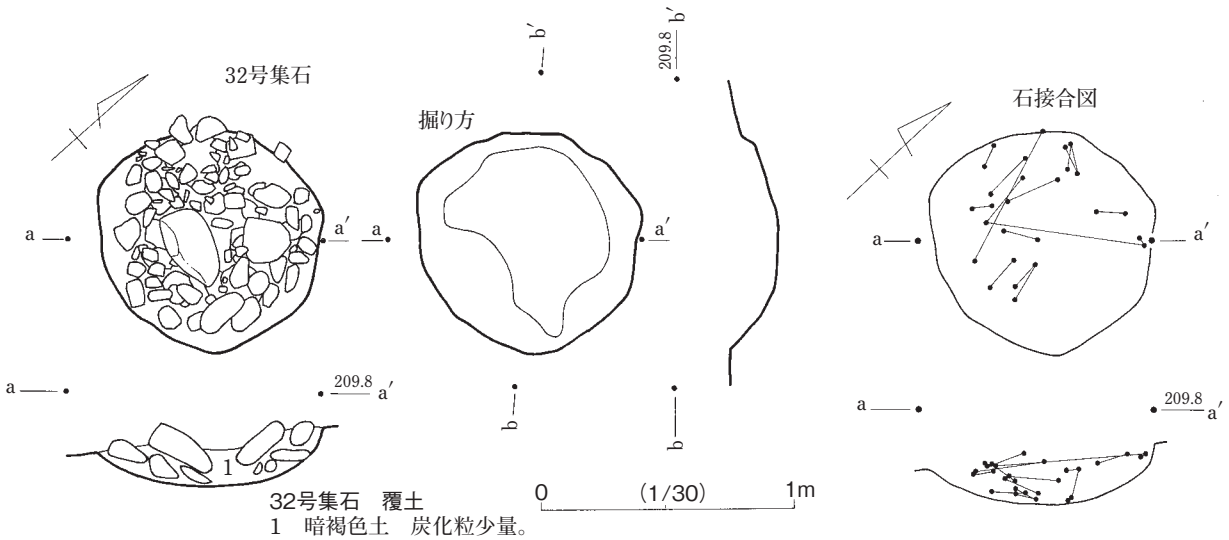
24号集石出土土器



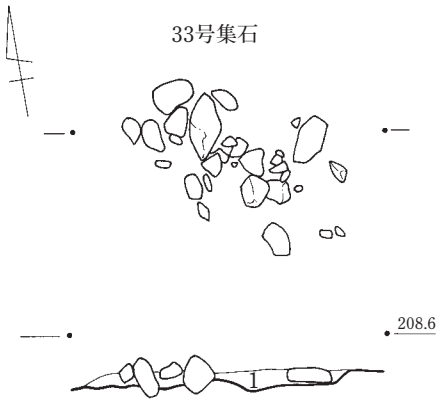
第 60 図　23 号集石、24 号集石・出土遺物、25 号集石



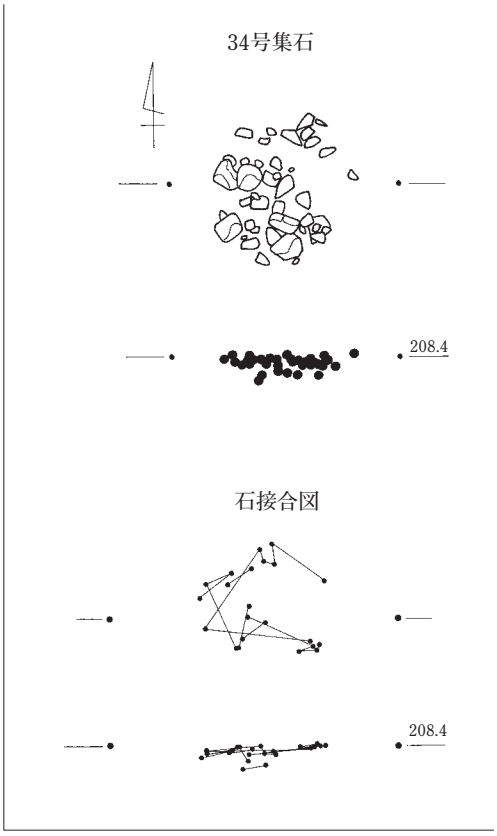


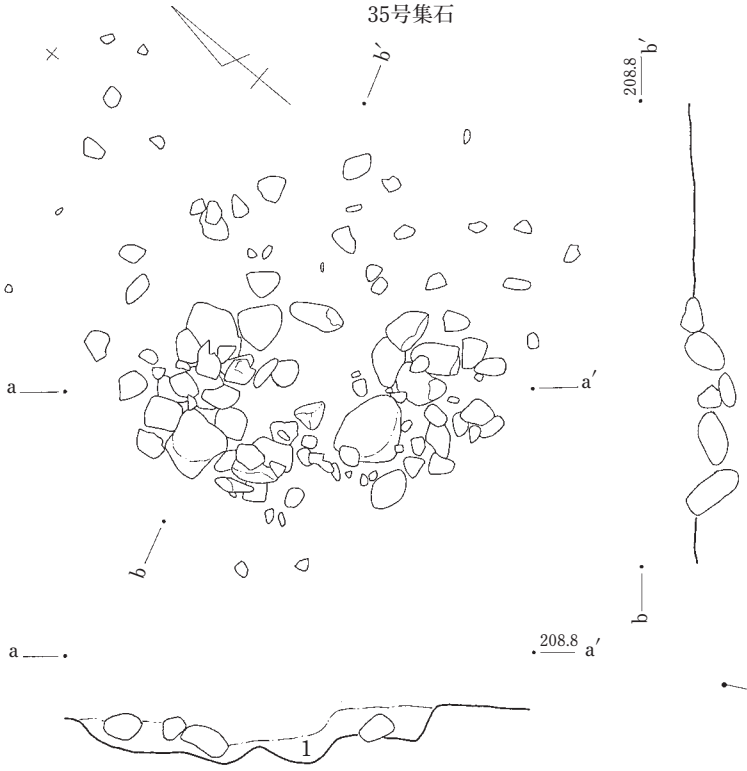


第 61 図　26 号集石、27 号集石　出土遺物、31 号集石、32 号集石



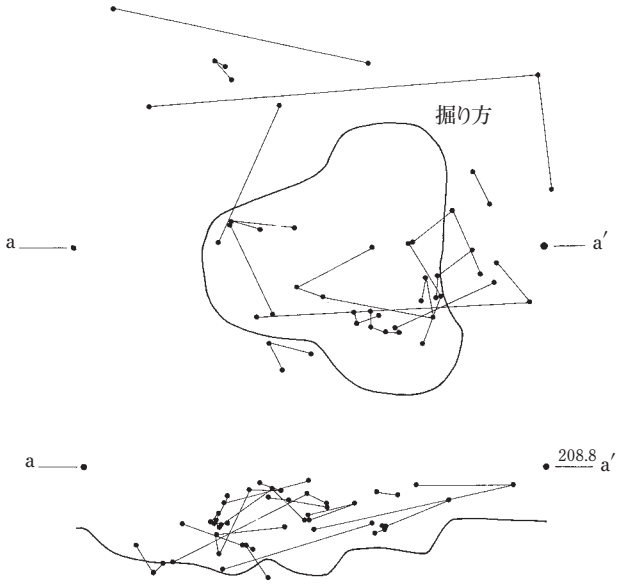
33号集石　覆土
1　暗褐色土　橙色スコリアやや多い。





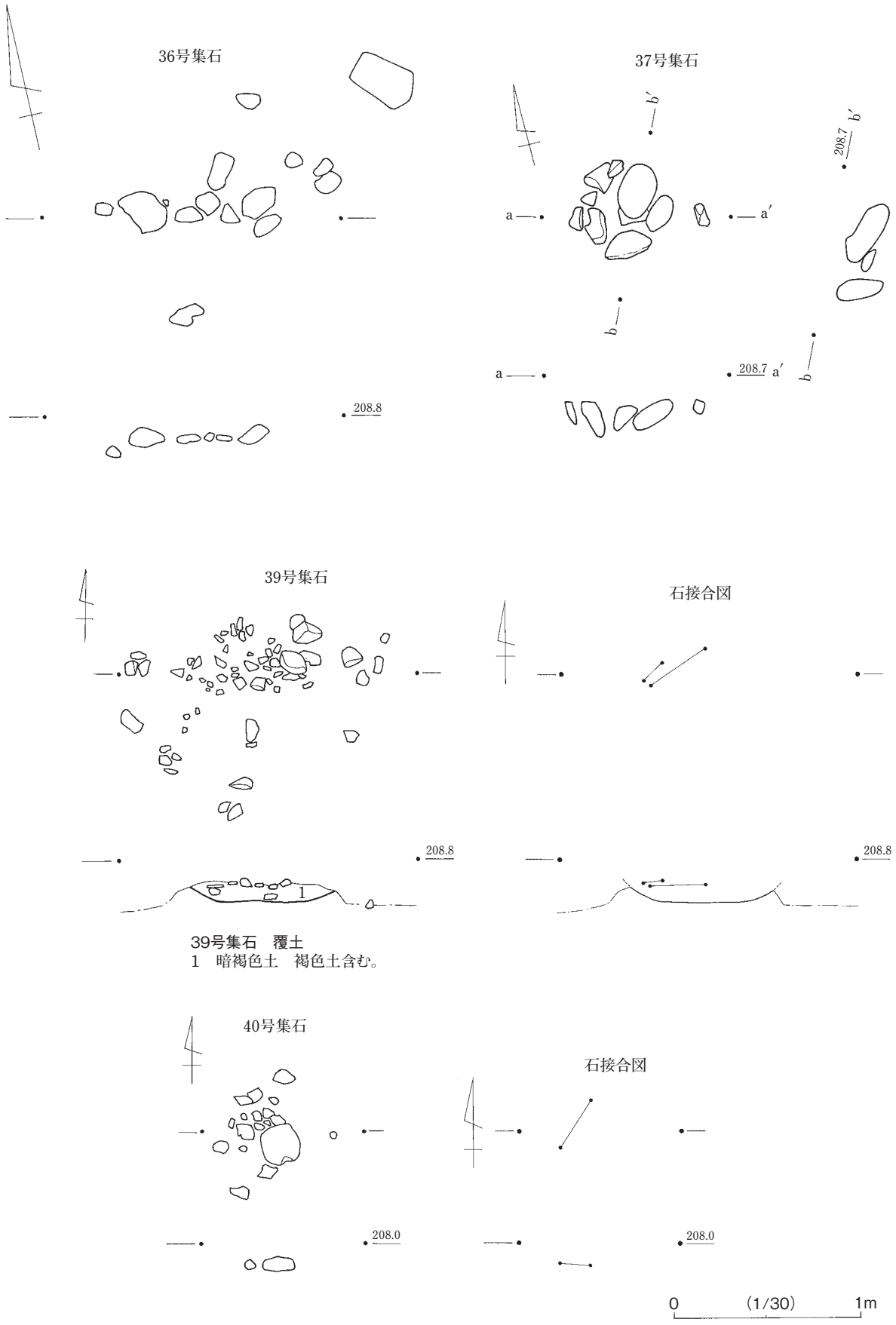
35号集石　覆土
1　暗褐色土　炭化粒少量。

石接合図



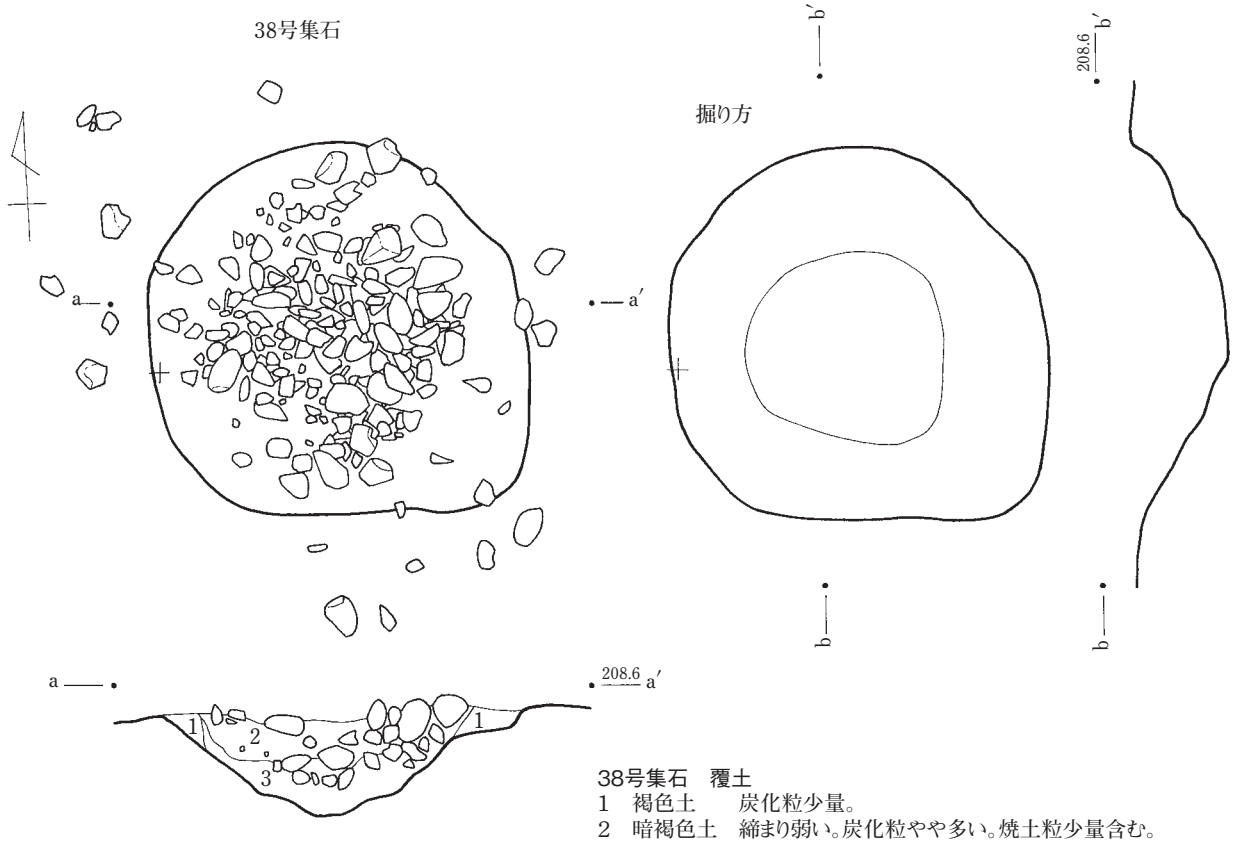
0　(1/30)　1m

第 62 図　33 号集石、34 号集石、35 号集石

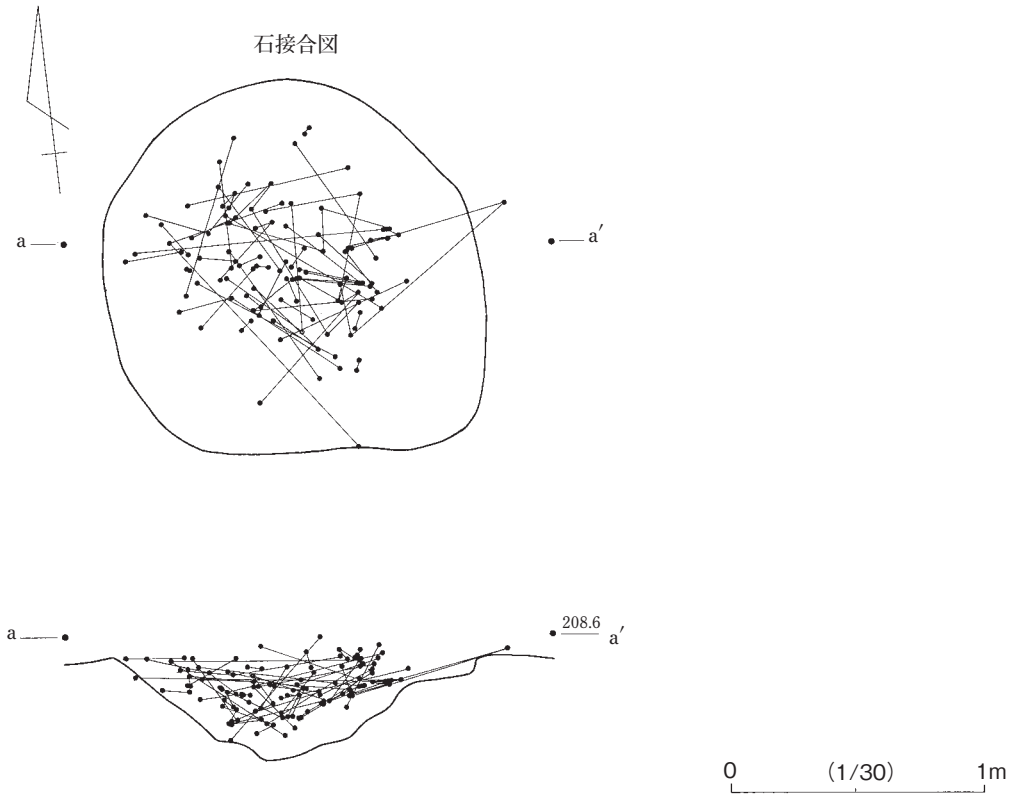


39号集石　覆土
1　暗褐色土　褐色土含む。

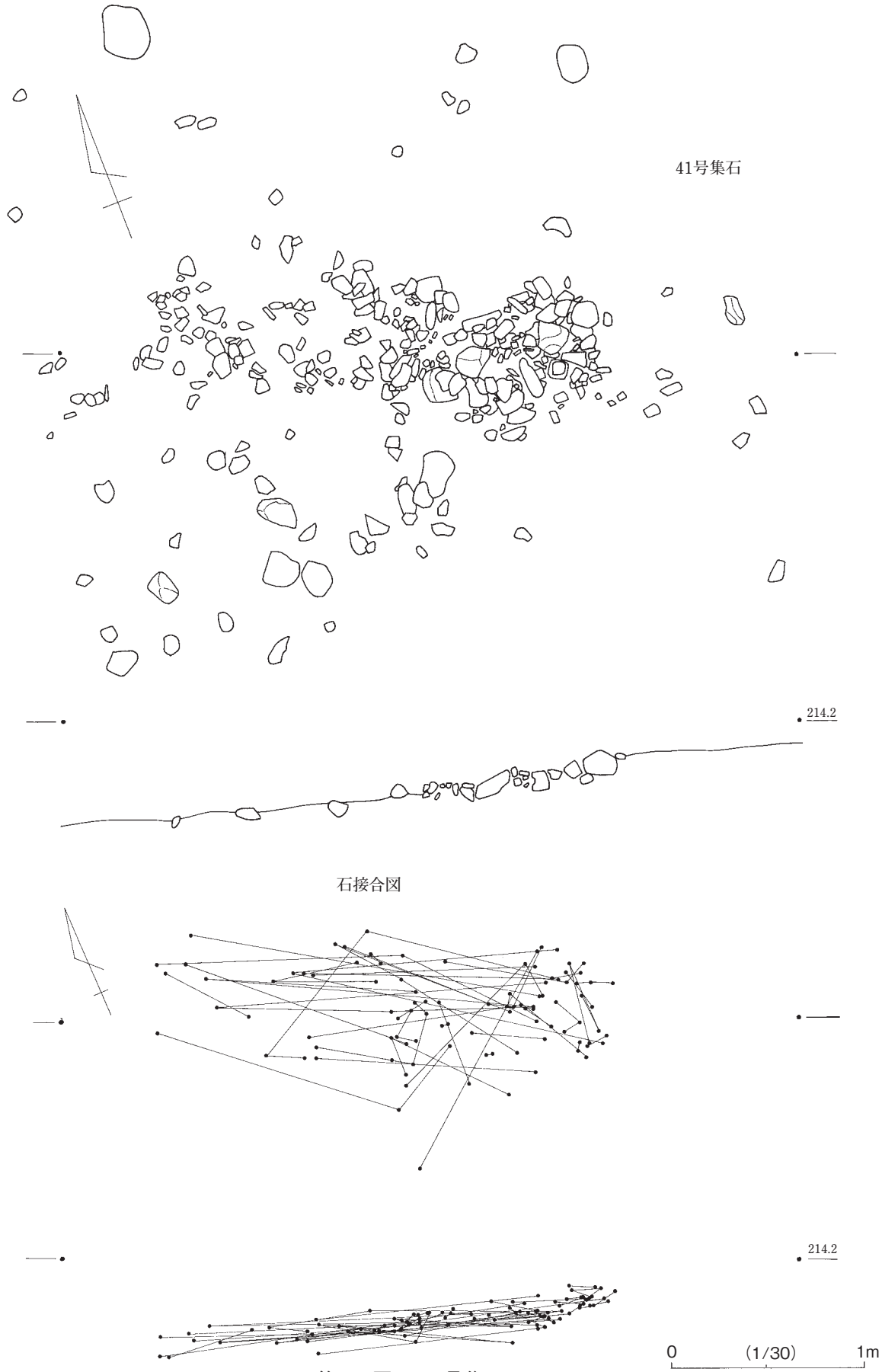
第 63 図　36 号集石、37 号集石、39 号集石、40 号集石



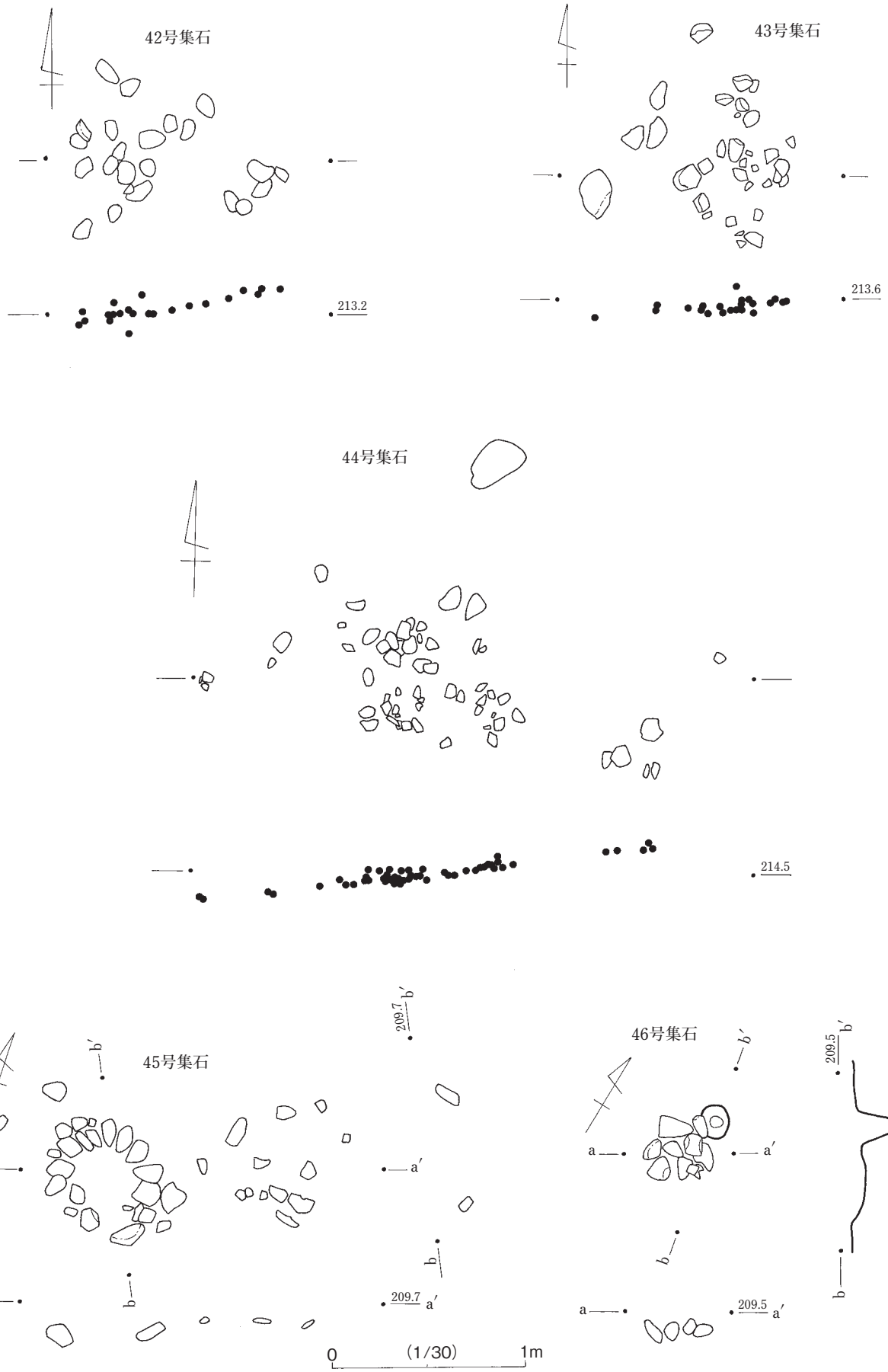
38号集石　覆土
1　褐色土　　炭化粒少量。
2　暗褐色土　締まり弱い。炭化粒やや多い。焼土粒少量含む。
3　暗褐色土　締まり強い。炭化粒、炭化材(1㎝)多い。焼土粒やや多い。



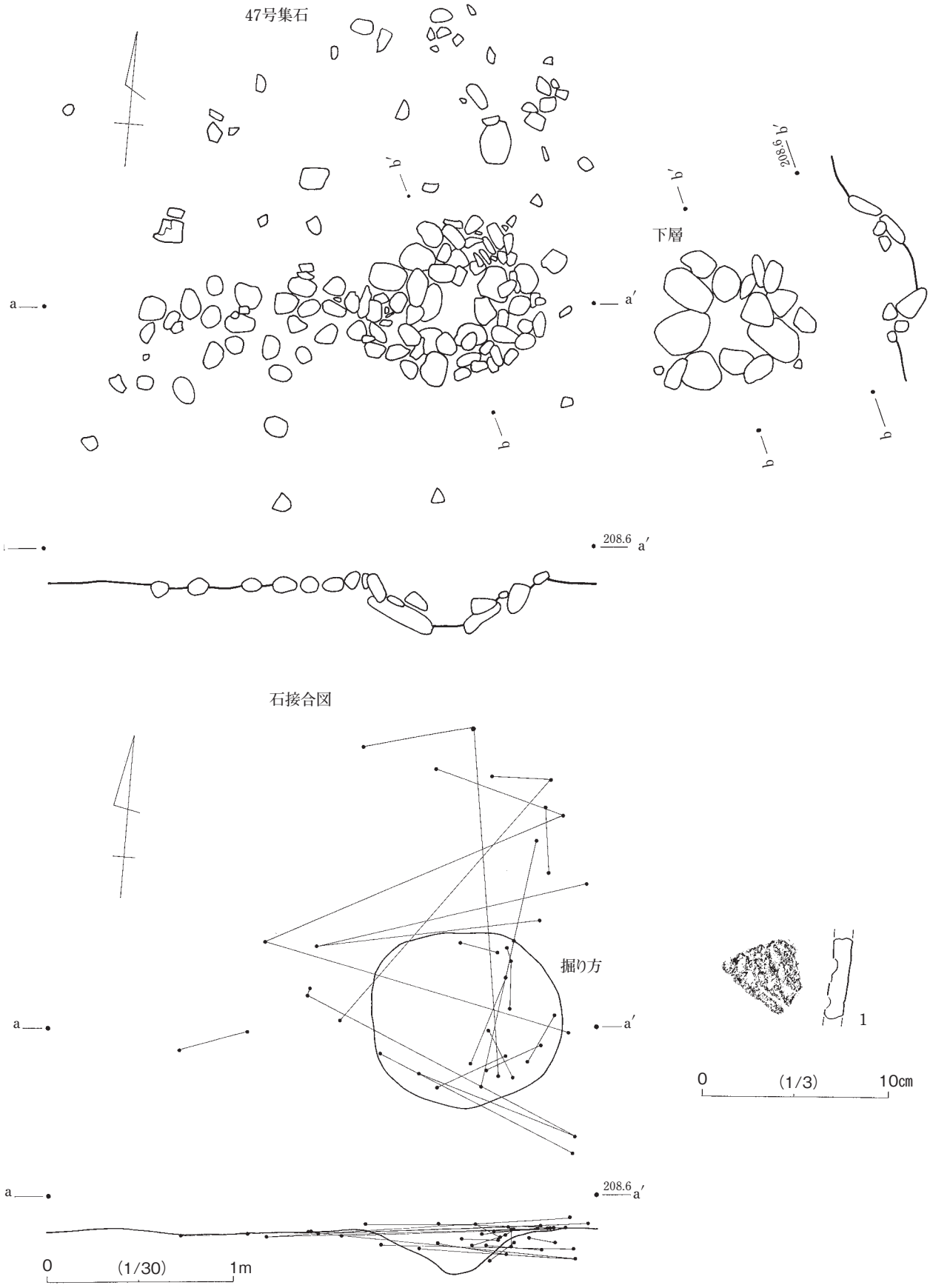
第 64 図　38 号集石



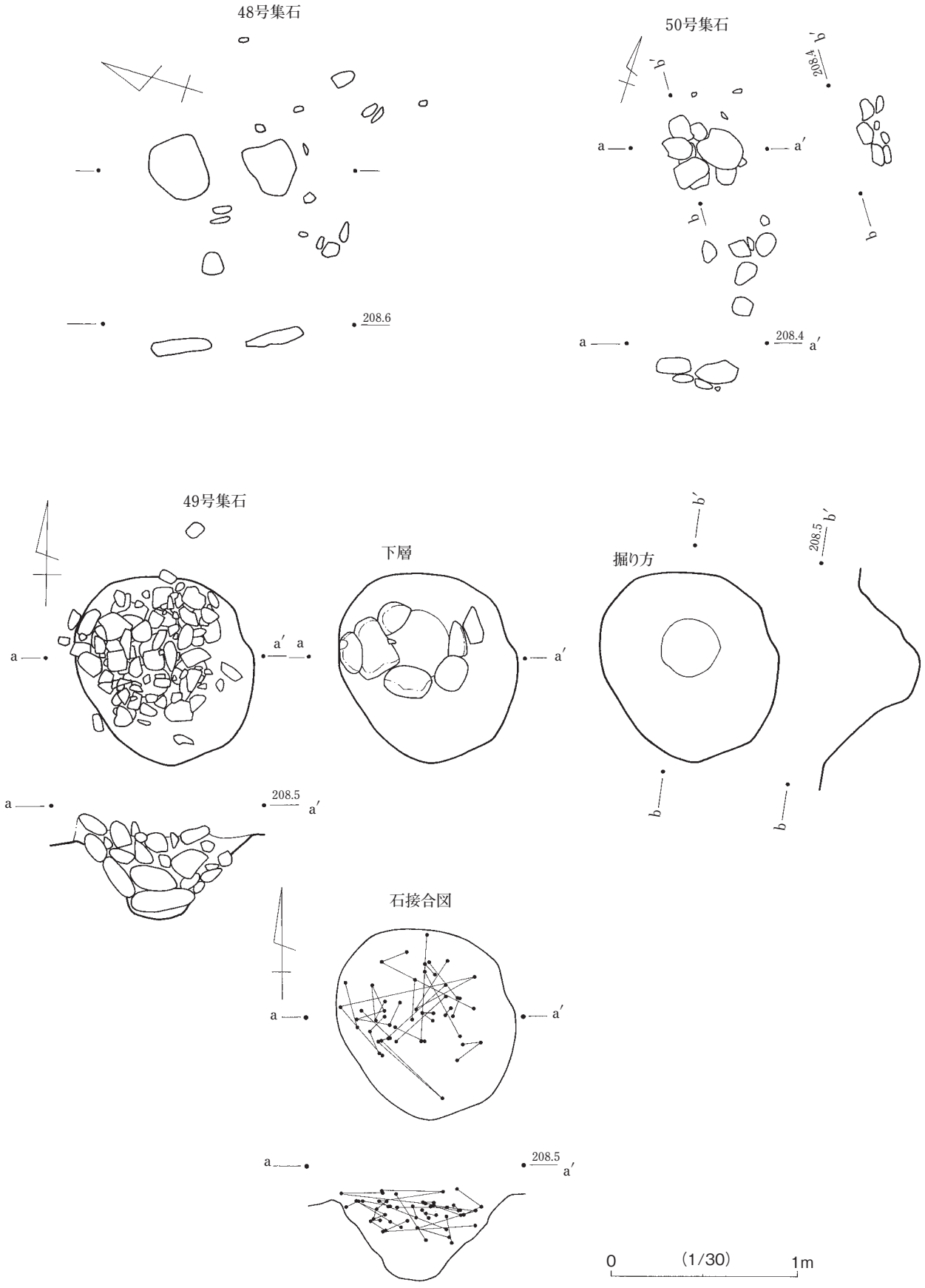
第 65 図　41 号集石



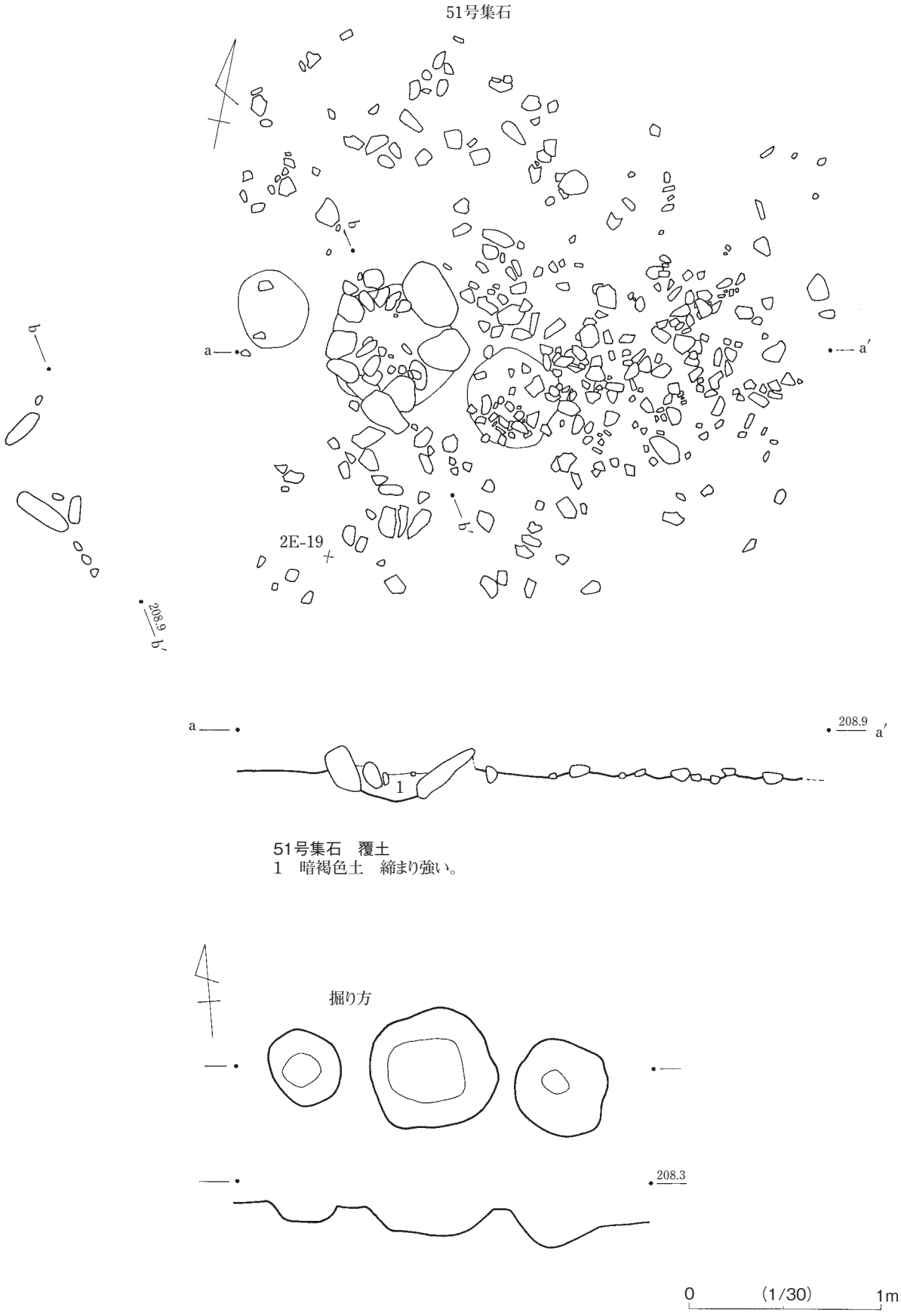
第 66 図　42 号集石、43 号集石、44 号集石、45 号集石、46 号集石



第 67 図　47 号集石・出土遺物

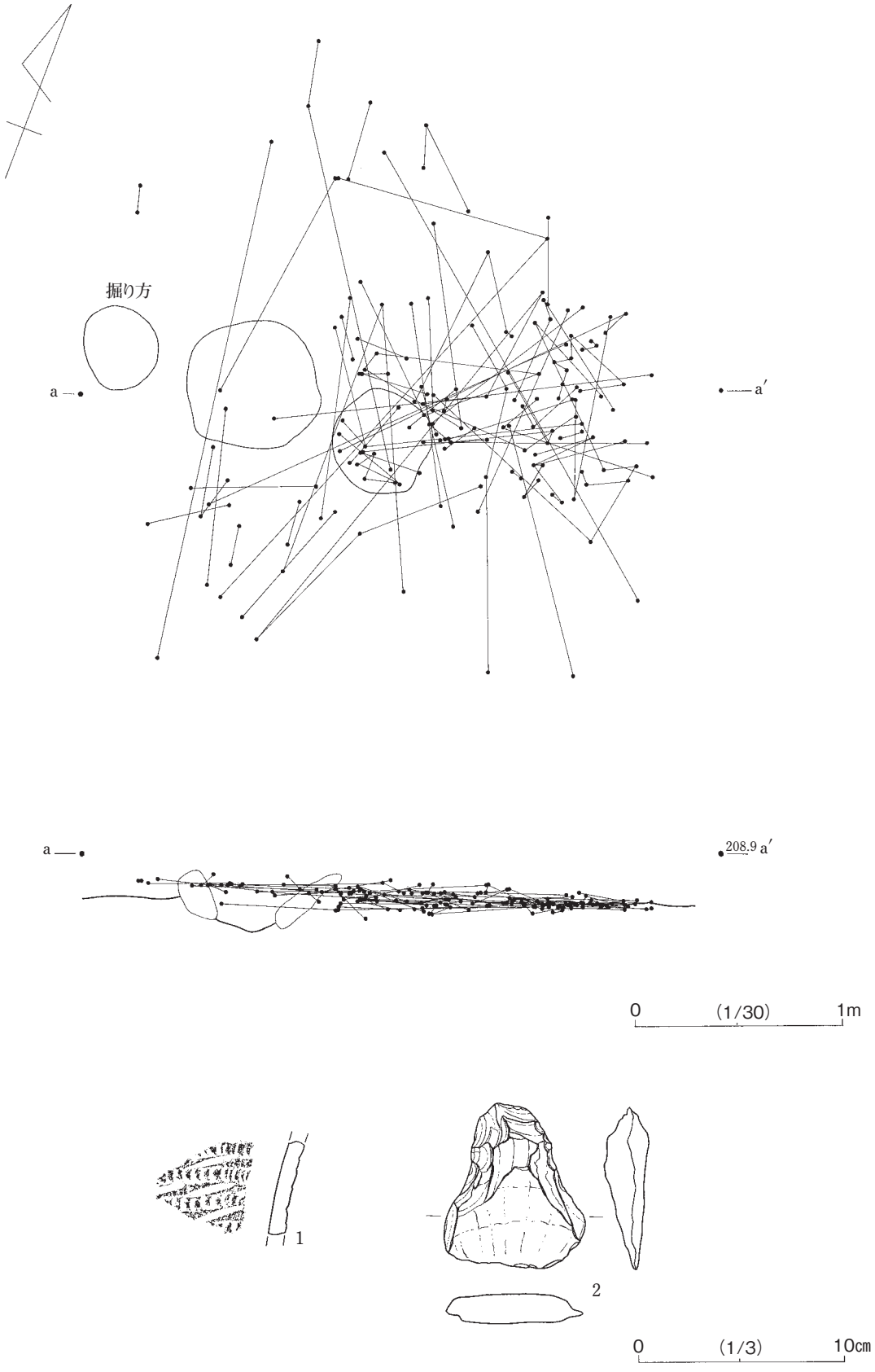


第 68 図　48 号集石、49 号集石、50 号集石

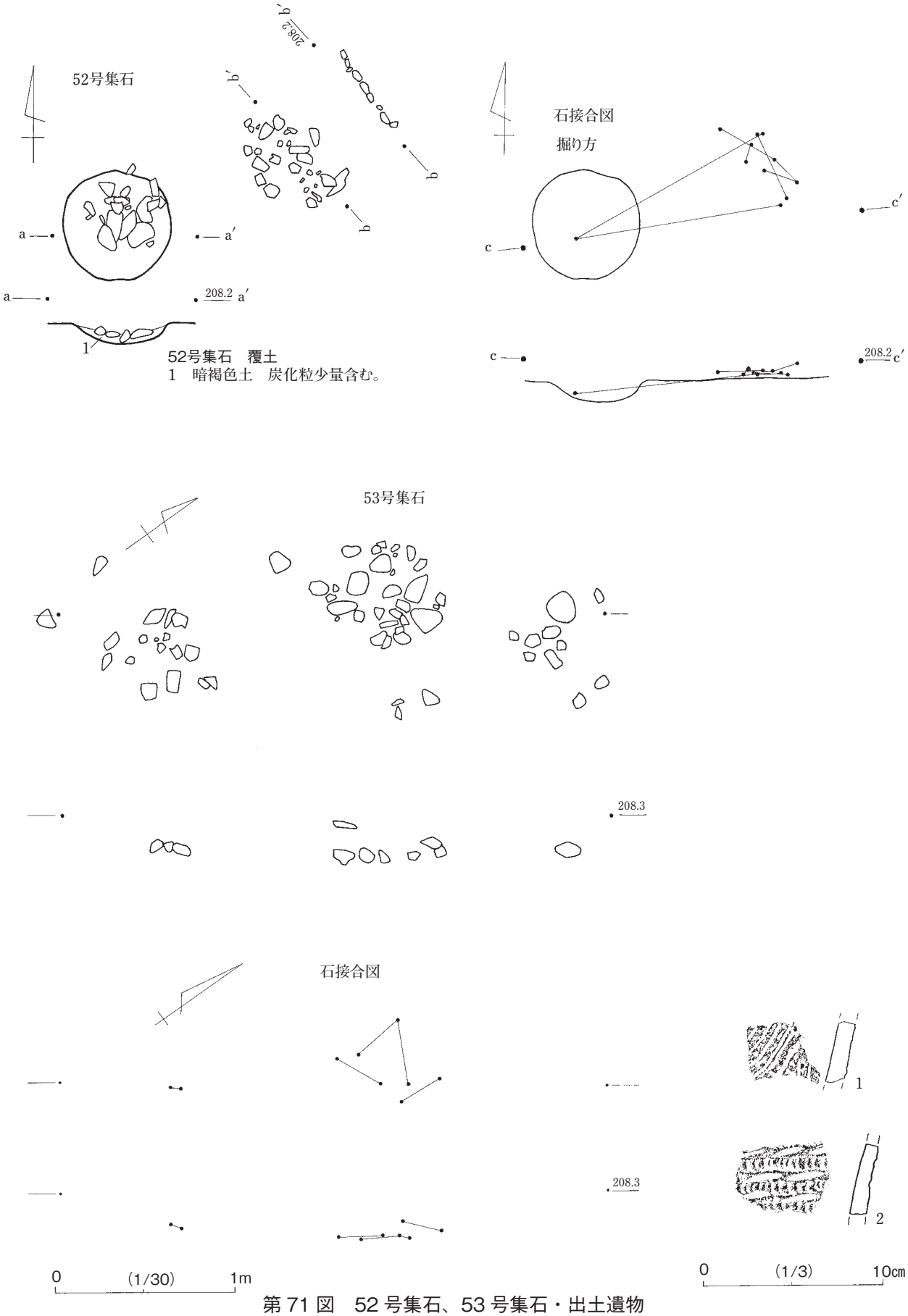


51号集石　覆土
1　暗褐色土　締まり強い。

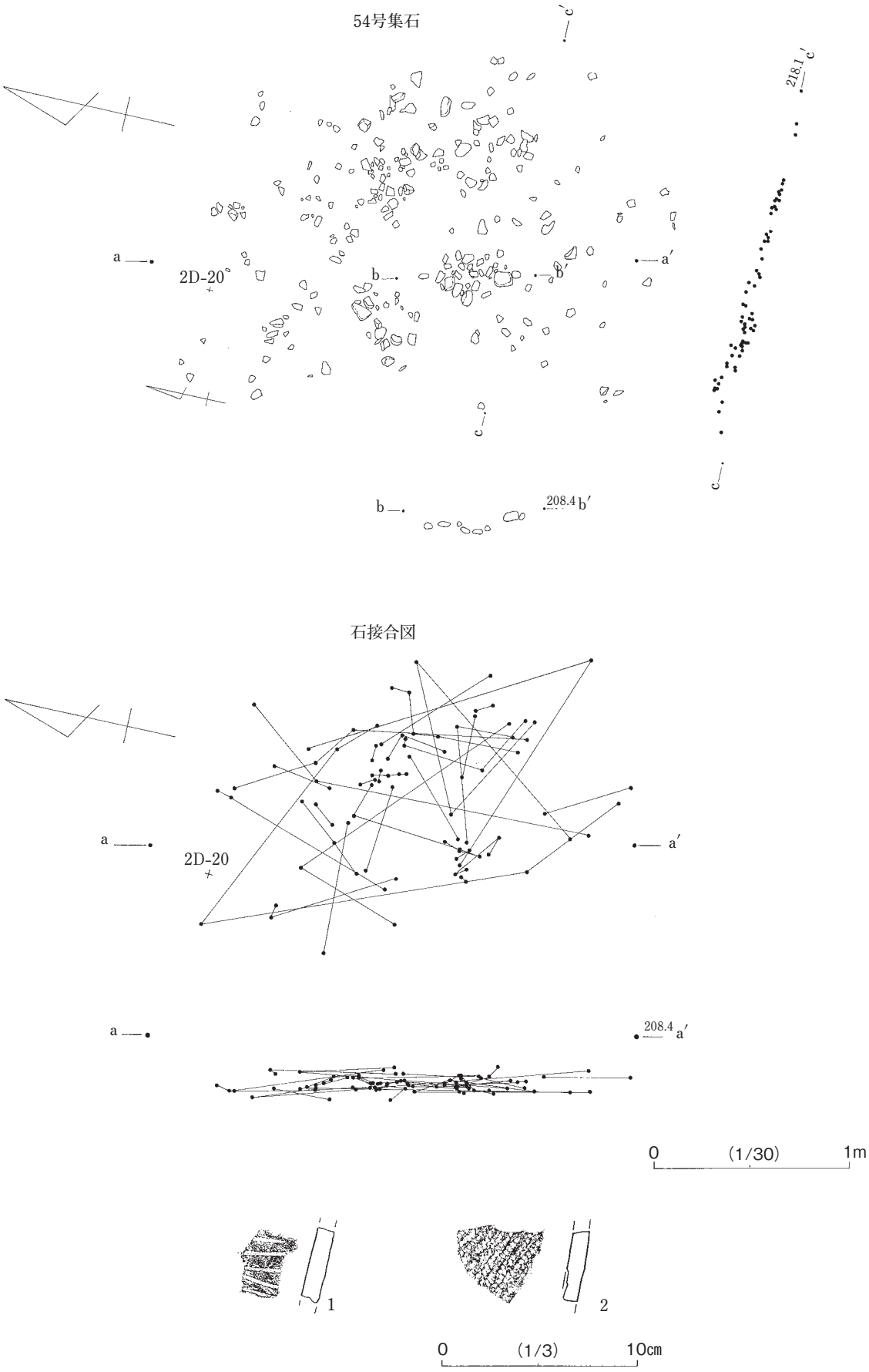
第69図　51号集石



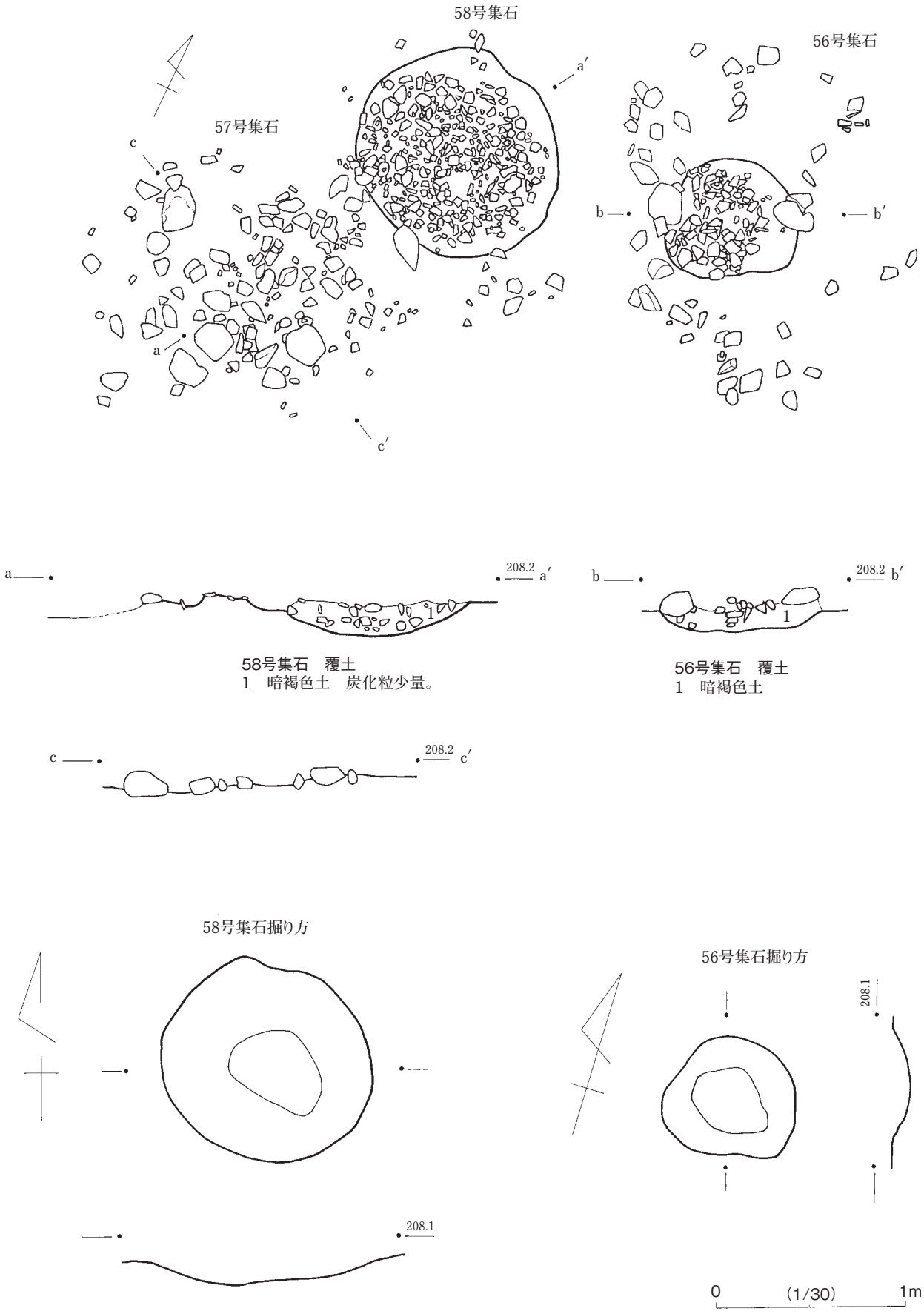
第 70 図　51 号集石　石接合図、出土遺物



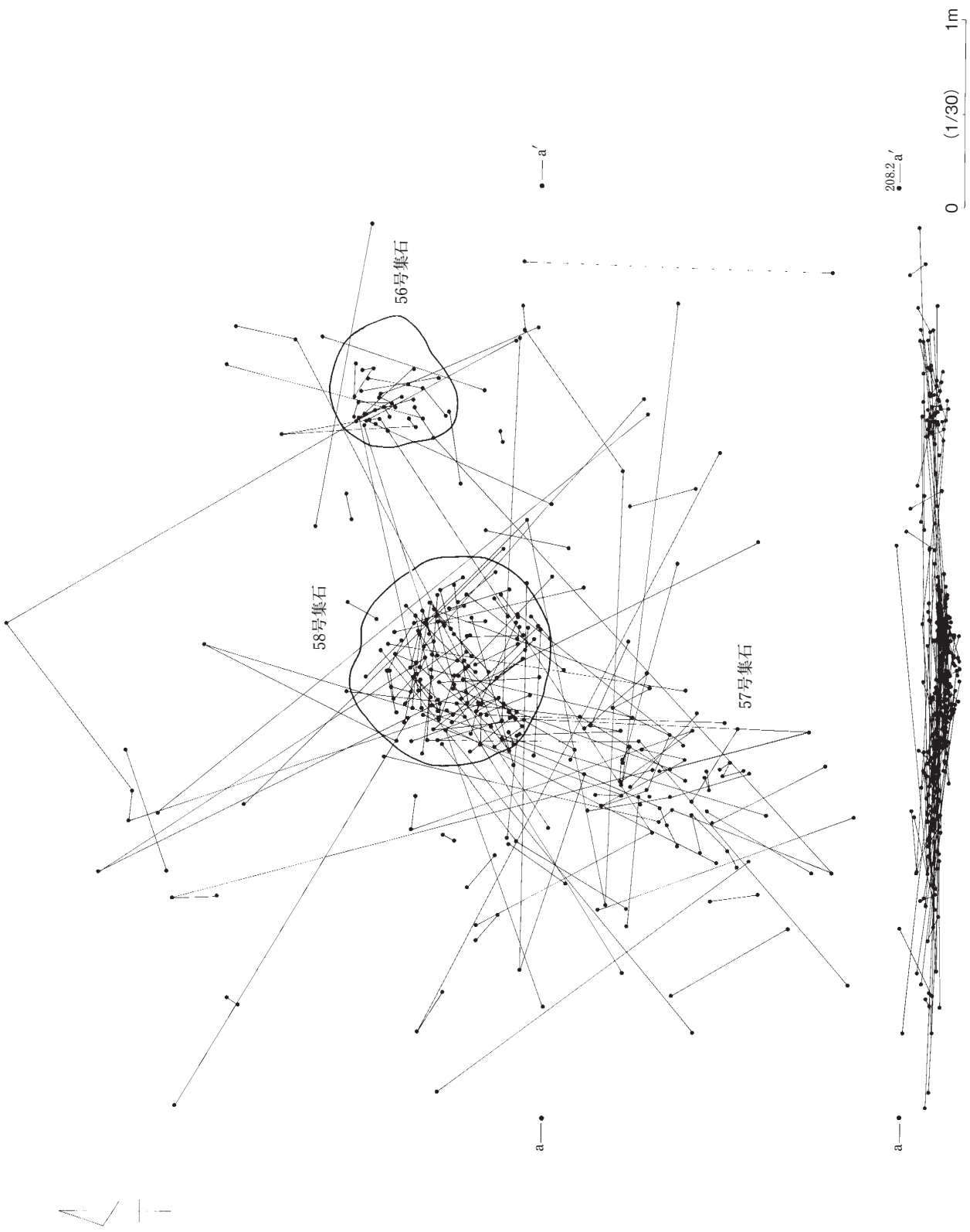
第 71 図　52 号集石、53 号集石・出土遺物



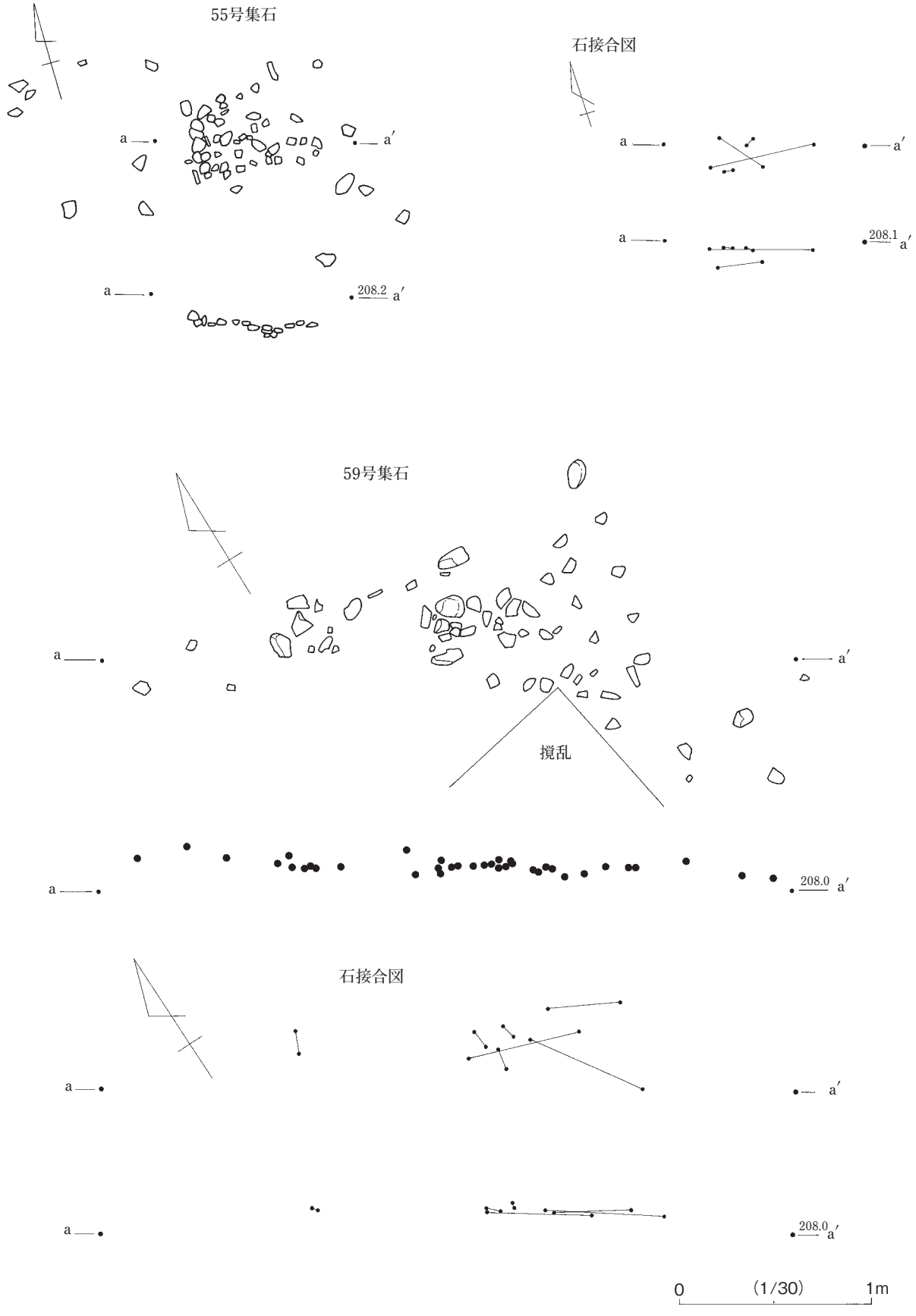
第 72 図　54 号集石・出土遺物



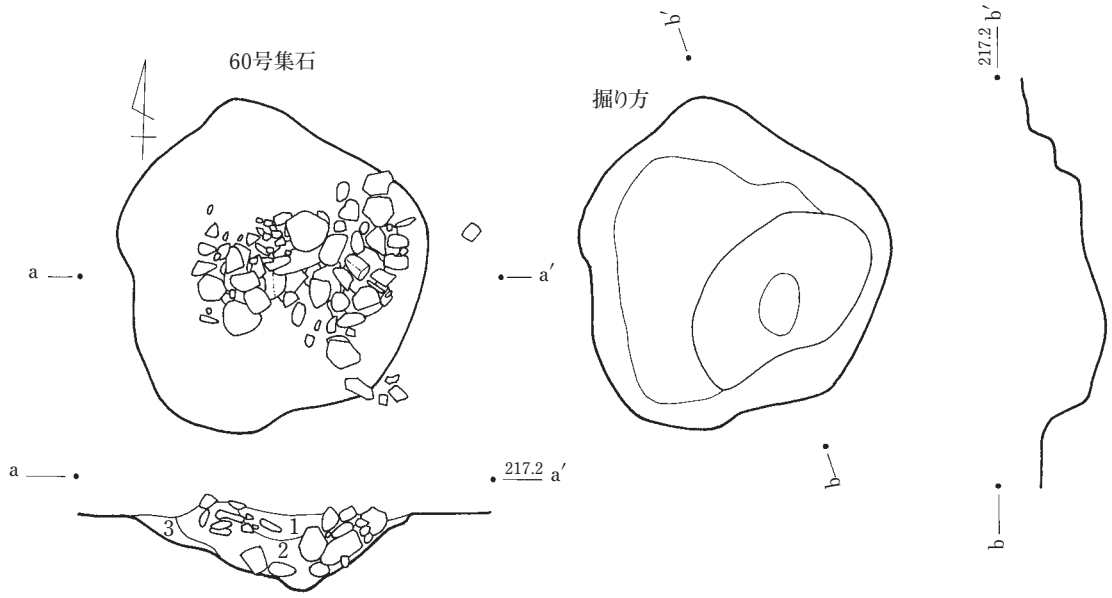
第 73 図　56 号集石、57 号集石、58 号集石



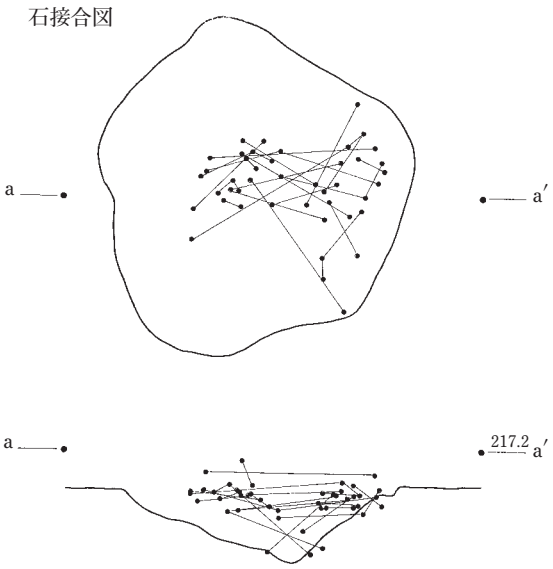
第 74 図　56 号集石・57 号集石・58 号集石　接合図

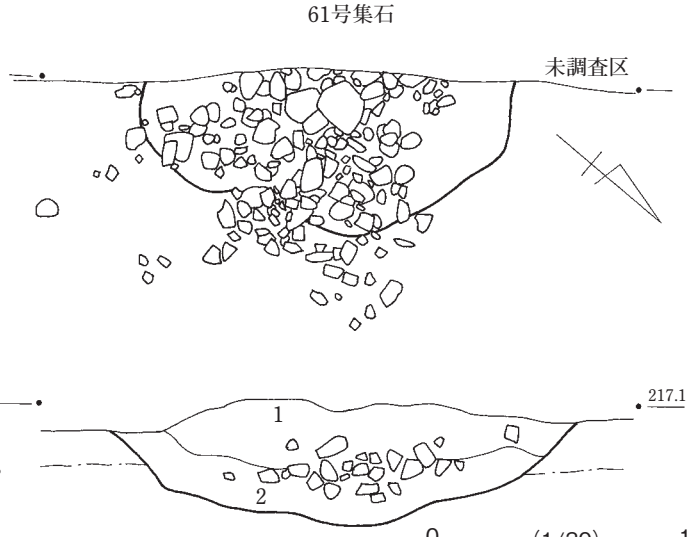


第 75 図　55 号集石、59 号集石

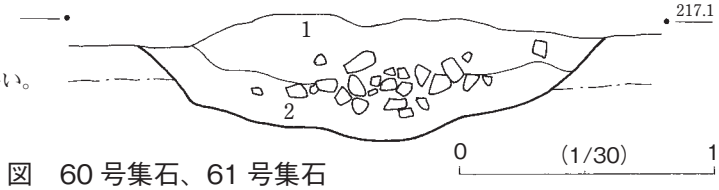


60号集石　覆土
1　暗褐色土
2　黒褐色土
3　褐色土



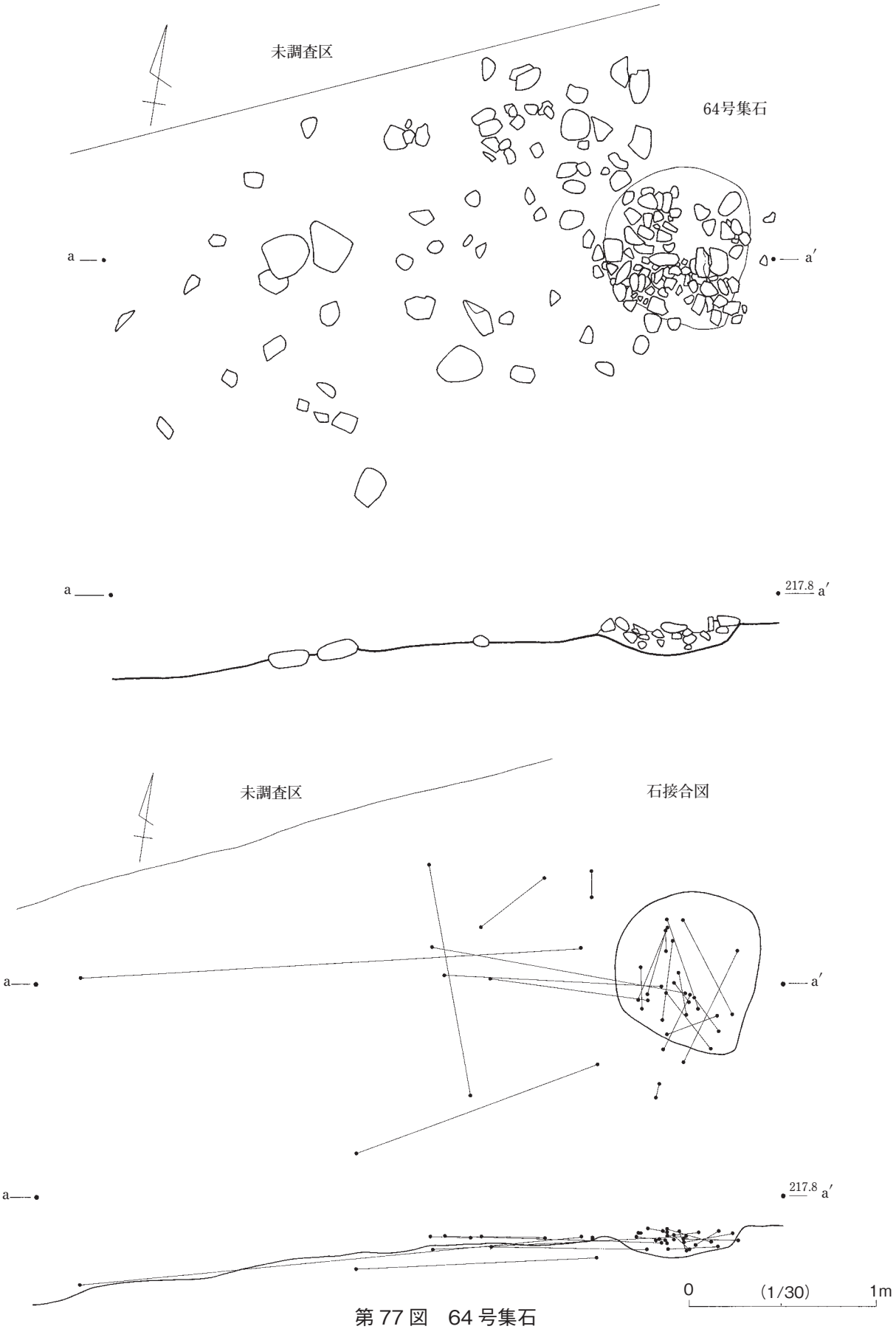


61号集石　覆土
1　暗褐色土　炭化粒少量含む。
2　暗褐色土　締まりやや強い。炭化粒やや多い。

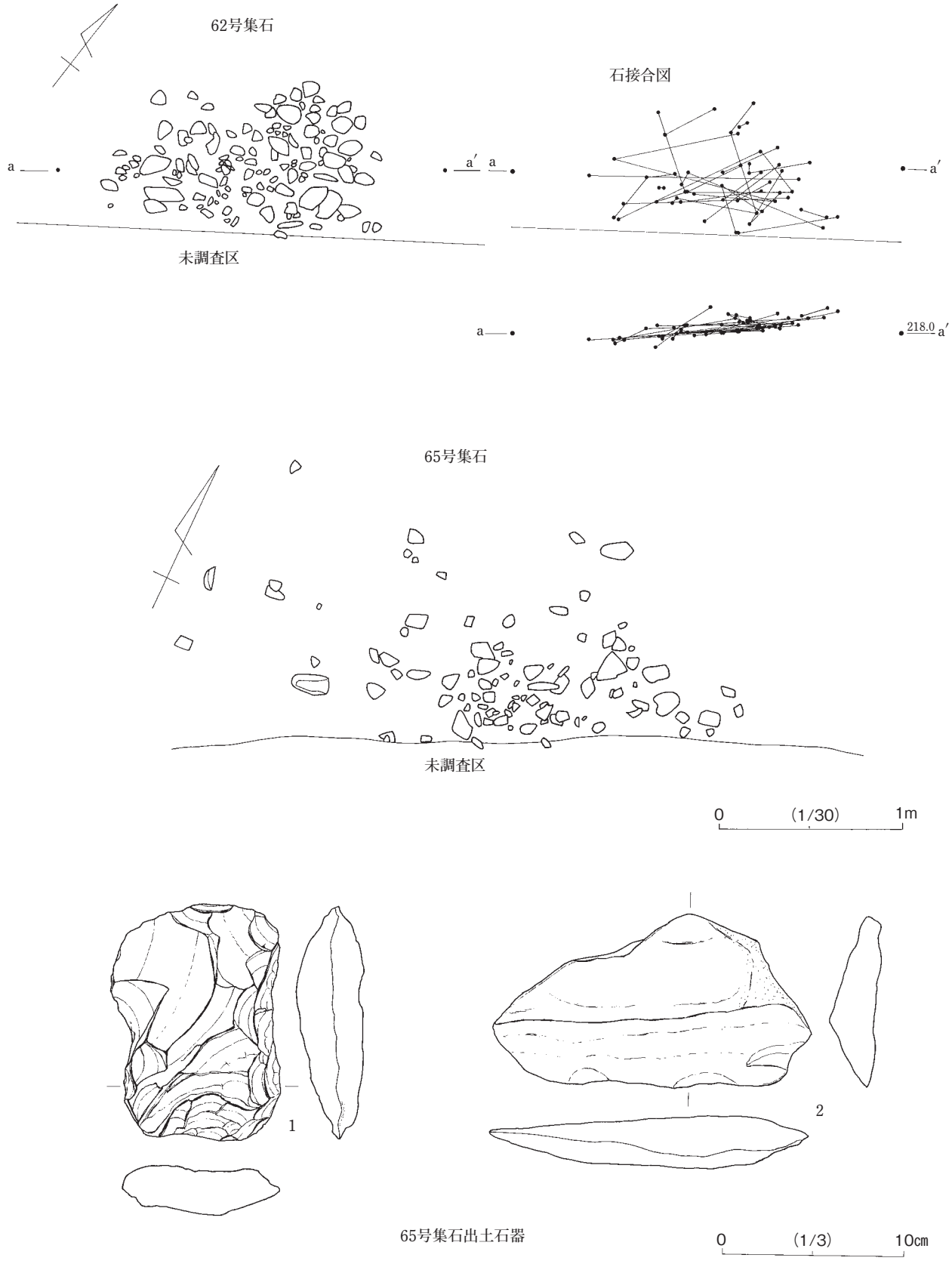


0　(1/30)　1m

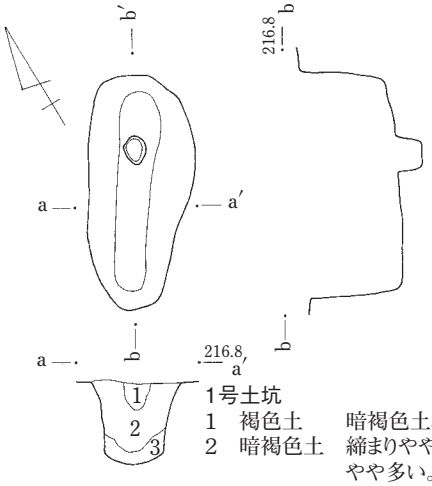
第 76 図　60 号集石、61 号集石



第 77 図　64 号集石

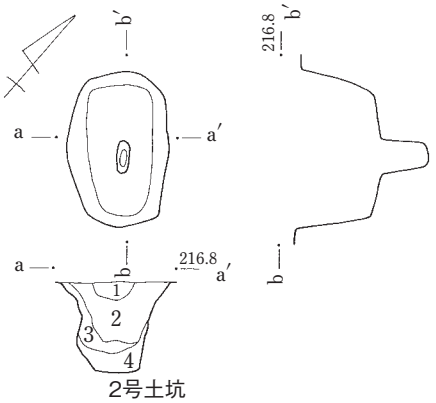


第 78 図　62 号集石、65 号集石・出土遺物



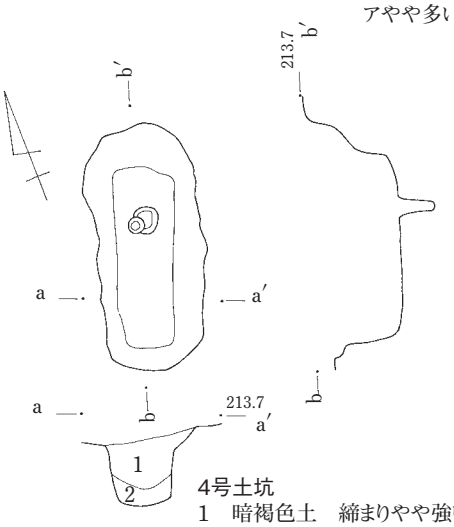
1号土坑

1　褐色土　　暗褐色土塊が混じる。
2　暗褐色土　締まりやや強い。橙色スコリアやや多い。
3　暗褐色土　締まり弱く、粘性強い。橙色スコリアやや多い。地山ローム粒子多い。



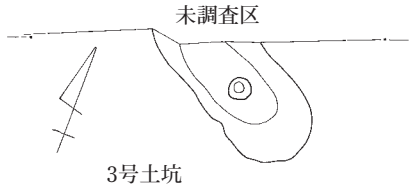
2号土坑

1　褐色土　　暗褐色土塊が混じる。
2　暗褐色土　締まりやや強い。橙色スコリアやや多い。
3　暗褐色土　2に地山ローム粒子わずかに含む。
4　暗褐色土　締まり弱く、粘性強い。橙色スコリアやや多い。地山ローム粒子多い。

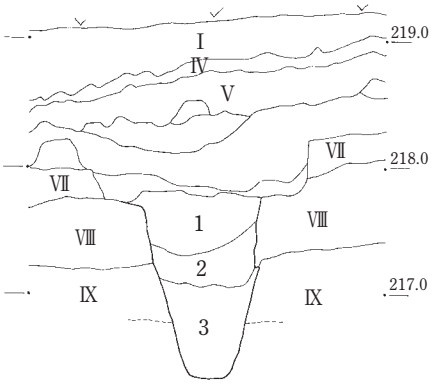


4号土坑

1　暗褐色土　締まりやや強い。橙色スコリア含む。炭化粒、石まばらに含む。
2　暗褐色土　締まり弱く、粘性強い。橙色スコリア含む。地山ローム塊やや多い。



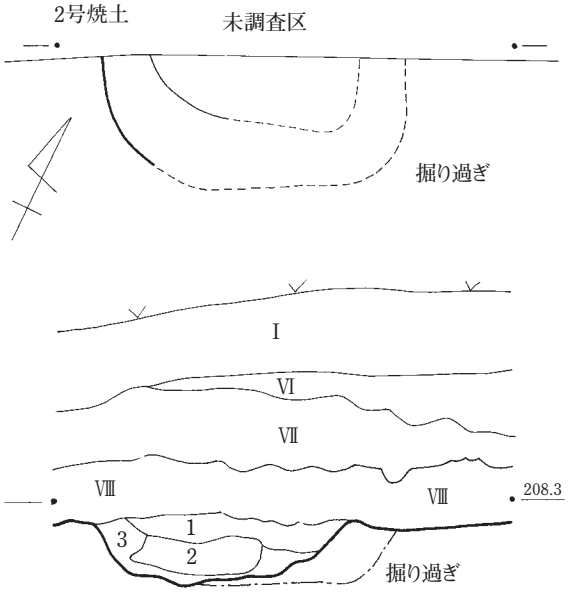
3号土坑



0　(1/60)　2m

3号土坑

1　暗褐色土　粘性・締まりやや強い。橙色スコリア(1㎜～5㎜)多い。炭化粒(3㎜以下)やや多い。地山ソフトローム塊(2㎝～3㎝)少量含む。
2　暗褐色土　粘性やや強く、締まり弱い。橙色スコリア(1㎜～5㎜)多い。炭化粒(2㎜以下)少量含む。
3　暗褐色土　粘性強く、締まり弱い。橙色スコリア(1㎜～5㎜)やや多い。地山ソフトローム塊(1㎝～3㎝)多い。



2号焼土

1　暗褐色土　焼土粒やや多い。
2　橙色土　　3に焼土粒・塊を多く含む。
3　褐色土　　焼土粒少量。

0　(1/30)　1m

第79図　土坑、焼土址

(5) 焼土址

第Ⅷ層（暗褐色土）中で2基が検出され、周囲に集石が分布する。1号焼土は第Ⅱ次調査で検出し、Ｈ－29区に位置する。2号焼土（第79図）は第Ⅱ次調査で検出し、2Ｅ－17区に位置する。大半が未調査区にかかり、検出長100㎝・深さ30㎝である。焼土が覆土下層に堆積する。いずれも出土遺物はなく、時期は不明である。

(6) ピット群

ピット群2ヵ所が段丘上段の住居分布範囲で検出された。確認面は第Ⅷ層下位（暗褐色土）である。出土遺物はなく、時期は不明である。

1号ピット群（第80図、図版22）

第Ⅱ次調査で検出した。Ｓ－4区でピット16基がまとまって検出された。ピット分布範囲は12号住居址に切られ、1号埋設土器が位置する。ピットは平面円形を基調とし、長軸20㎝～55㎝、深さは10㎝～15㎝である。遺物はない。

2号ピット群（第80図、図版22）

第Ⅱ次調査で検出した。Ｒ－7区でピット18基がまとまって検出された。ピットは平面円形を基調とし、長軸25㎝～70㎝、深さは10㎝～40㎝である。遺物はない。

(7) 屋外埋設土器

1号埋設土器（第81図、図版22・52）

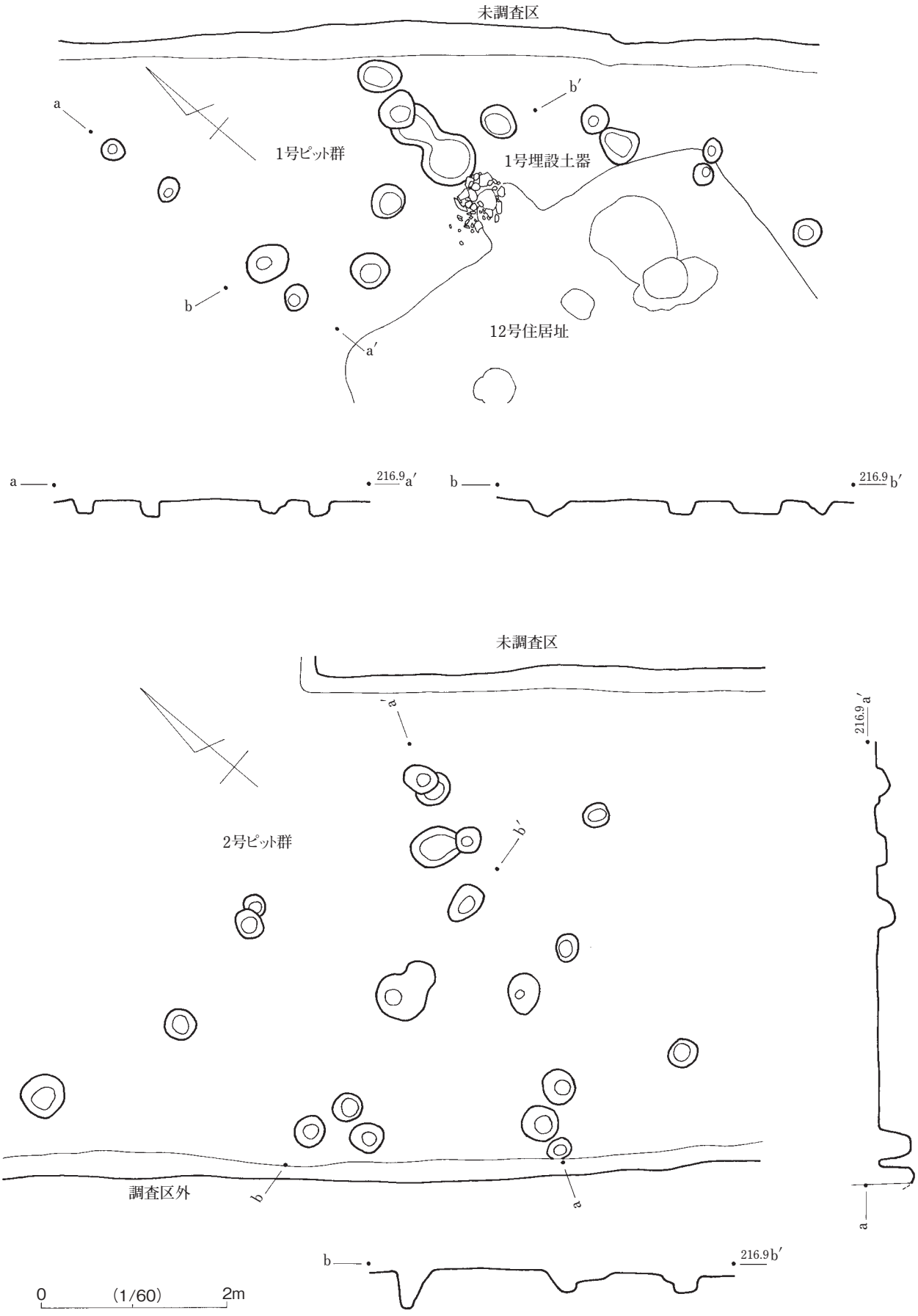
Ｓ－5区、1号ピット群の範囲で検出した。旧名称はＳ－5区土器集中部。確認面は第Ⅷ層で、一部が12号住居址に切られる。深鉢2個体の大きな破片と礫9点が、70㎝×50㎝の範囲で重ねられる。礫の大きさは拳大から25㎝である。掘り方は不明確であった。時期は縄文時代中期後葉に位置付けられる。

1、大形の深鉢で、破片の一部が6号・12号住居址に飛散する。2/3が残存する。推定口径45㎝、器高51㎝、底径12㎝。口縁上端の内面に隆帯を巡らす。口縁部は斜行条線、頸部は横位の平行沈線に逆Ｕ字状の粘土紐を貼付する。胴部は縦位の条線である。胎土に金雲母、石英、砂粒を含む。色調はにぶい褐色や赤褐色で、焼成は良い。曽利Ⅲ式に比定される。

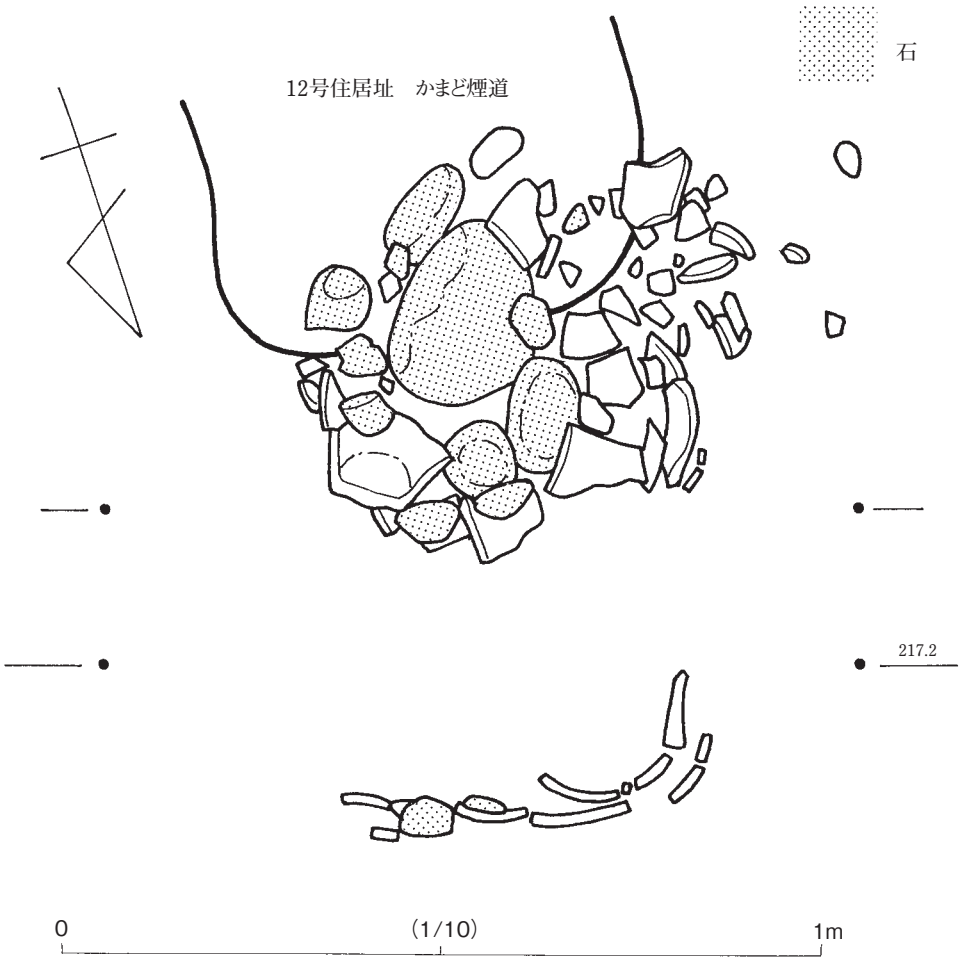
2、小形の深鉢で、破片の一部が12号住居址に飛散する。胴の一部と底部を欠損する。口径18.5㎝、器高25.5㎝。口縁部に指で強く押し引いたような幅広沈線を巡らす。胴部を縦位の隆帯で6区画に分け、綾杉状条線を施す。内外面は所々で黒く煤ける。胎土に金・黒雲母、石英、赤色粒子、砂粒、小石を含む。色調はにぶい褐色で、焼成は良い。曽利Ⅳ～Ⅴ式に比定される。

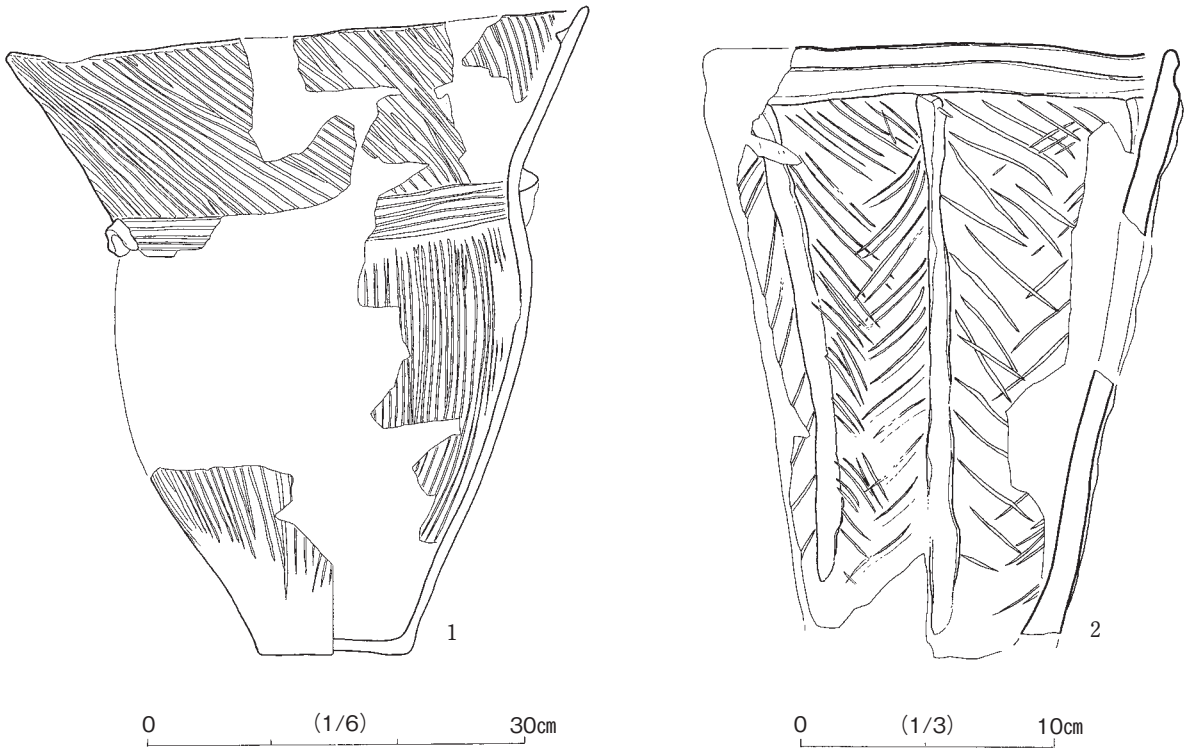
2号埋設土器（第82図、図版22・52）

Ｔ－27区で検出した。旧名称はＴ－27区埋甕。深鉢1個体が第Ⅶ層中に正位で埋められる。土器は胴下半部が欠損し、口縁部は周囲に散っている状況であった。土器内の土は炭化粒を含み、締まって固い。掘り方は不明確であった。土器は推定口径23㎝、残存高19.5㎝である。口縁部に細い沈線を巡らし、胴部は沈線によるΠ字状区画に粗雑な「八」の字文を施す。胎土に金雲母、石英、赤色粒子、砂粒を含む。色調はにぶい褐色で、焼成は良い。曽利Ⅴ式に比定される。

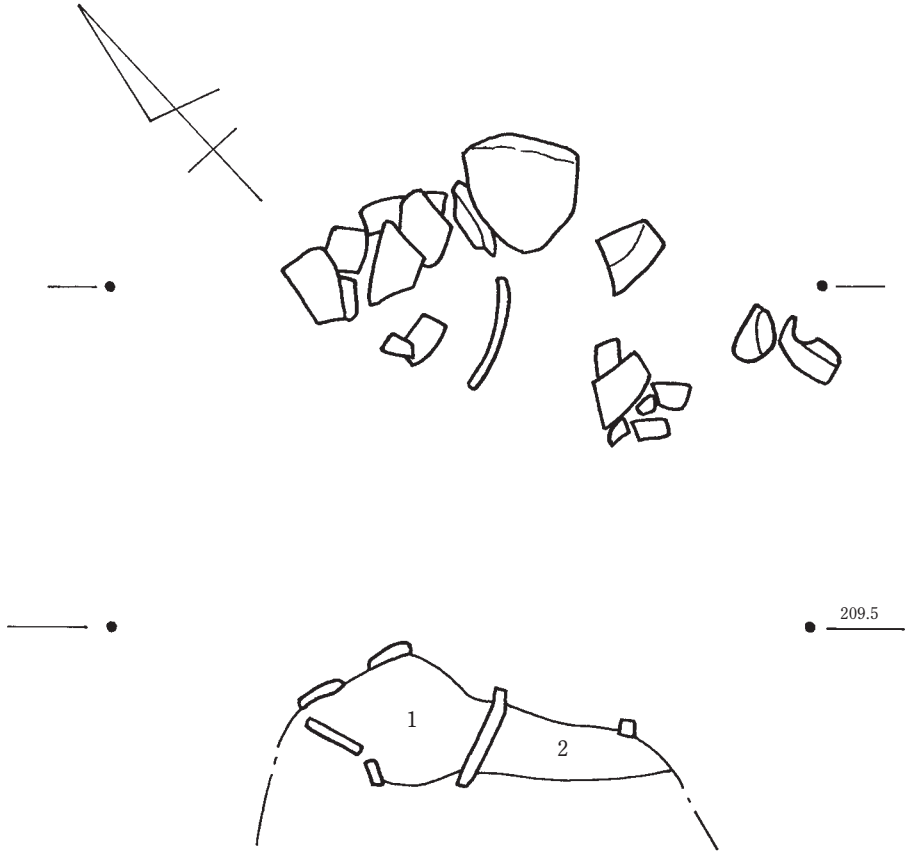

未調査区
a
b′
1号ピット群
1号埋設土器
b
a′
12号住居址
a
216.9a′
b
216.9b′
未調査区
a
2号ピット群
b′
調査区外
b
a
216.9a′
a
b
216.9b′
0
(1/60)
2m

第 80 図　ピット群



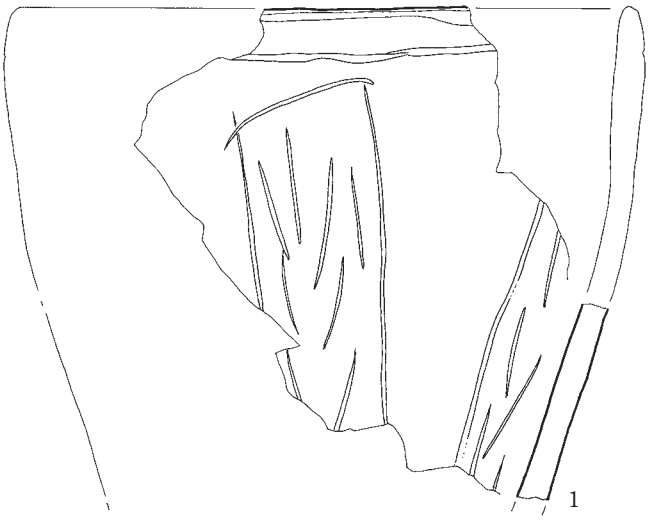


第 81 図　1 号埋設土器・出土遺物



2号埋設土器
1　暗褐色土　締まりやや強い。炭化粒やや多い。
2　暗褐色土

0　(1/10)　1m



0　(1/3)　10cm

第 82 図　２号埋設土器・出土遺物

(8) 遺構外出土遺物

出土土器

第Ⅰ群　縄文時代早期中葉　押型文系土器を一括した（1・2）。（第 83 図、図版 53）

楕円押型文が横位に施される。楕円文は 1 が比較的大粒で立体感があり、2 は小粒で扁平である。胎土は石英や砂粒（1）、細粒の金雲母（2）を含む。色調はにぶい褐色（1）、赤褐色（2）で、焼成は良い。2 は硬質である。出土地点は、1、22 号住居址覆土、2、Ｓ－ 28 区。

第Ⅱ群　縄文時代早期中葉　沈線文系土器を一括した（3 ～ 22）。（第 83・84 図、図版 53）

第 1 類　太沈線による平行沈線文を施した深鉢（3 ～ 14）。口縁は波状（3 ～ 5）と平縁（6）があり、いずれも口唇部は外研ぎ状となる。3 ～ 5、7・8 は縦位の刺突文が加わる。胎土に雲母、砂粒を含む。色調はにぶい褐色あるいは赤褐色が多く、焼成は良い。出土地点はＺ－ 24 区、2 Ｃ－ 21・24・25・27 区、2 Ｄ－ 20 区である。

第 2 類　細沈線による 2 本単位の平行沈線文を施した深鉢（15・16）。胎土に砂粒、小石を含む。色調はにぶい褐色や赤褐色で、焼成は良い。出土地点は、15、2 Ｄ－ 17 区、16、2 Ｃ－ 18 区。

第 3 類　三角状工具の押引きで沈線文を施した深鉢（17）。胎土に雲母、石英、砂粒を含む。色調は暗褐色で、焼成は良い。2 Ａ－ 21 区出土。

第 4 類　口縁から胴上半部に沈線文や刺突文を施した深鉢（18 ～ 23）。

18 ～ 21、太沈線による平行沈線間に横位の刺突文を施す。緩い波状口縁で、口唇部は尖り気味である。胎土に繊維、雲母、石英、砂粒を含む。色調はにぶい褐色や暗褐色で、焼成は良い。2 Ｄ－ 16･17 区出土。

22、横位の刺突文に沿って押引きによる沈線文を山形に施す。胎土に雲母、砂粒、小石を含む。色調はにぶい褐色で、焼成は良い。2 Ｄ－ 25 区出土。

23、横・斜位の太沈線間に刺突文を施す。底部は尖底である。外面に条痕文が疎らに施される。胎土に繊維、雲母、砂粒を含む。色調はにぶい褐色で、焼成は良い。2 Ｂ－ 21 区出土。

以上のうち、第 1・2 類は田戸下層式、第 3・4 類は田戸上層式期に比定される。

第Ⅲ群　縄文時代早期後半　条痕文系土器を一括した（24 ～ 46）。（第 84・85 図、図版 53・54）

第 1 類　胴上半部に縦・斜位の細沈線を施し、下端に縦位の刺突文を巡らした深鉢（24）。擦痕状の条痕文を内外面に施す。胎土に繊維、石英、砂粒を含む。色調は暗褐色で、焼成はやや悪い。Ｅ－ 24・25 区出土。

第 2 類　三角状工具の押引きで沈線文を施す深鉢（25）。擦痕状の条痕文を外面に施す。胎土に砂粒を含む。色調は暗褐色で、焼成は良い。

第 3 類　綾杉状の沈線文を施した深鉢（26）。条痕文は内面に施される。胎土に繊維、石英、砂粒を含む。色調は暗褐色で、焼成はやや悪い。Ｆ－ 25 区出土。

第 4 類　条痕文を内外面に施した深鉢（27 ～ 29）。胎土に繊維、雲母、砂粒を含む。色調は褐色やにぶい褐色で、焼成はやや悪い。出土地点は、Ｄ・Ｅ－ 23 区、Ｅ－ 24・25 区。

第 5 類　斜交条痕文を外面に施した深鉢（30）。内面は無文である。胎土に繊維痕は見られない。色調は暗褐色で、焼成はやや悪い。2 Ｂ－ 20・21 区出土。

第 6 類　口唇部上面に刺突文を加えた深鉢（31）。擦痕状の条痕文を内外面に施す。胎土に繊維、砂粒、1㎜以下の白色針状物質を含む。色調は暗褐色で、焼成はやや悪い。

第７類　深鉢の分厚い尖底部（32・33）。縦位の条痕文が外面に施される。胎土に微量の繊維、砂粒を含む。色調はにぶい褐色で、焼成はやや悪い。２Ｃ・２Ｄ－27区出土。

第８類　沈線文により幾何学的モチーフを描き、文様の交点に円形竹管文を加えた深鉢（34～46）。口唇部上面に刻みを連続して加える。条痕文を外面下半と内面に施す。胎土に微量の繊維、雲母、石英、砂粒を含む。色調はにぶい褐色や暗褐色で、焼成はやや悪い。Ｄ・Ｅ－23～25区出土。

以上のうち、第１～３類は子母口式期、第８類は鵜ヶ島台式に比定される。

第Ⅳ群　縄文時代前期前半、胎土に繊維を含み縄文等を施す土器を一括した（47～64）。（第86図、図版54・55）

第１類　無節縄文を施す深鉢（47～56）。口縁から胴上部に縦・斜位の粘土紐を疎らに貼付する。胎土に繊維、砂粒を含む。色調は黒灰色で、焼成はやや悪い。出土地点はＺ－25区、２Ａ－22区、２Ｂ－22・26区。

第２類　絡条体圧痕文を施す深鉢（57・58）。胎土に繊維を多く含む。色調はにぶい褐色や黒灰色で、焼成はやや悪い。Ｏ－31区出土。

第３類　多段のループ文と単節縄文を施す深鉢で、内面は平滑である（59～64）。59は平行沈線間に細かな刻みを加えた文様帯を持つ。64は上げ底の底部である。胎土に繊維を多く含む。色調はにぶい黄橙色で、焼成はやや悪い。出土地点は２Ａ－21区、２Ｂ－19～21区。

以上の土器は関山式から黒浜式に比定される。

第Ⅴ群　縄文時代前期後半の土器を一括した（65～141）。（第87～90図、図版55・56）

第１類　竹管文系土器

65～77は深鉢で、口縁部の下位から胴上部にかけて平行沈線による文様帯を配し、上下を横位の平行沈線で区画するものと思われる。区画内は木葉文（65～67、69～73）、連弧文（68）、弧文（76・77）が描かれる。胴下部に縄文を施すが、76・77は縄文地に沈線文が配される。いずれも胎土に砂粒を多く含む。色調はにぶい黄橙色を呈するものが多い。焼成は良いが、器面の剥落するものが目立つ。出土地点はＺ－22・23区、２Ａ－21～23区、２Ｂ－20・23区。

78～81は口縁部の下位から胴部にかけて平行沈線文を施した深鉢である。沈線は擦痕状で、横・斜位に施される。78は地文に粗い縄文を施す。いずれも内面は口縁部を中心に平滑である。胎土に砂粒を含む。色調は暗褐色や褐色で、焼成は良い。２Ａ・２Ｂ－19～21区出土。

82～100は平行沈線と爪形文で文様が描かれた深鉢である。口縁下位から胴上部にかけて文様帯を配し、上下を横位の平行沈線で区画する。区画内は鋸歯状文と弧文が組み合わされる。胴下部に縄文が施されるが、89・90は縄文地に沈線文が配される。86・98・99は口唇部外面や平行沈線間に斜位の刻みや短沈線が連続して加えられる。大半の土器は胎土に金雲母が目立ち、色調は赤褐色や暗褐色であるが、86・87・98・99は金雲母が含まれず、色調は灰白色や褐灰色である。焼成はいずれも良い。２Ｃ・２Ｄ－18～20区出土。

101～104は同一個体と思われる深鉢で、器厚は6㎜と比較的薄い。口縁部は無文で、胴上部に平行沈線による多段の波状文、胴下部に縄文を施す。胎土に金雲母が多い。色調は赤褐色や暗褐色で、焼成は良い。２Ｃ・２Ｄ－15区出土。

105～111は縄文地の深鉢で、口縁から胴上部に縦・横位の平行沈線を肋骨文状に配する。胎土は金

雲母を多く含む。色調は暗褐色や褐色で、焼成は良い。出土地点は105・109・110がⅤ－21区、他は2Ｃ－23区である。

第2類　縄文を主とする土器

112～129は同一個体と思われる深鉢で、外反口縁から緩くくびれ、胴部が膨らむ器形となる。外面全てに単節縄文が施される。内面は口縁から胴上部にかけて平滑である。胎土に砂粒を多く含む。色調は暗褐色や赤褐色で、焼成は良い。Ｚ－23区でまとまって出土した。

130～133は胴部に細かな単節縄文を施した深鉢で、器形や胎土、色調、焼成は上記の深鉢に類似する。出土地点は2Ａ－21区、2Ｂ－22・23区、2Ｄ－20・21区。

134～141は口縁から底部にかけて緩くすぼまる深鉢である。器厚は10㎜で、第2類の中では厚い。無節縄文を口縁から胴上部に施し、下部は無文である。胎土に砂粒が多い。色調は暗褐色や赤褐色で、焼成は良い。出土地点はＺ－25区、2Ｂ－26区。

以上のうち、第1類の木葉文や肋骨状文を配した土器は諸磯a式新段階からb式、第2類は諸磯a式、他は諸磯b式に比定される。

第Ⅵ群　縄文時代中期中葉の土器を一括した（142～170）。（第91・92図、図版57）

第1類　隆帯に沿ってペン先状工具の連続刺突による角押文を施す（142・143）。142は鉢形土器で、胴上部に文様帯を配する。隆帯の交点に円形の突起が付く。143は浅鉢で、口縁内面に文様帯を配し、口唇部外面に縦位の刻みを加える。円形の貫通孔（直径1㎝）が残る。胎土は金雲母を多く含む。色調はにぶい黄橙色（142）、にぶい褐色（143）で、焼成は良い。出土地点は、142、2Ｂ－20区、143、2Ｃ－23区。

第2類　隆帯に沿って連続爪形文や波状沈線文を施す深鉢（144～146）。胎土に砂粒を多く含む。色調はにぶい褐色や赤褐色で、焼成は良い。出土地点は2Ｃ－20区、2Ｄ－18・19区。

第3類　隆帯によって文様が構成される各種の深鉢で、隆帯上に連続する刻みや綾杉状の刻みを加えた土器が多い。148～150は同一個体と思われ、肥厚口縁の上端に渦巻隆帯による突起が付く。153～157は隆帯による区画内に交互刺突文、三叉文、縦位の集合沈線文を施す。159～162、164～169は縦位の縄文を地文に施す土器で、164は口縁上端に大形の把手が付く。168は横位の無文帯が巡る。170の顔面把手も本類に含まれる。胎土は金雲母、砂粒を含むものが多い。色調は赤褐色や暗褐色で、焼成は良い。出土地点は2Ｂ－19区、2Ｃ－15・20・22～26区、2Ｄ－15・20・25・26区。

以上のうち、第1類は新道式期、第2類は藤内式期、第3類は藤内式から井戸尻式期に該当する。

第Ⅶ群　縄文時代中期後半の土器を一括した（171～201）。（第93・94図、図版58）

第1類　キャリパー口縁の深鉢（171～177）。口縁は重弧文（171）、無文（172）で、胴部は条線地（174～177）と縄文地（173）がある。出土地点は171、2Ｂ－22区、172、Ｏ－29区、173・177、Ⅴ－2区、174、Ｒ－6区、175、2Ｄ－17区、176、86号土抗。

第2類　小波状口縁の鉢形土器で、口縁部の隆帯区画内に縄文を施す（178）。縦位の隆帯は突起状となり、円形の窪みが加えられる。1号集石の周囲で出土した。

第3類　口縁部の区画内に条線を施す深鉢（179・180）。Ｒ－6・7区出土。

第4類　胴部に隆帯により大きく弧を描く深鉢（181）。条線地である。Ｒ－7区出土。

第5類　胴部の沈線区画内に綾杉状の条線を施す深鉢（182～184）。出土地点は182、段丘上段、

183、2 E－19 区、184、 T－5 区。

第 6 類　胴部の沈線区画内に「八」字文を施す深鉢（185）。R－7 区出土。

第 7 類　渦巻文を持つ土器（186・187）。186 は鉢形土器、187 はキャリパー形の深鉢で、頸部に無文帯を持つ。いずれも隆帯区画内に縦位の撚糸文を施す。内面は平滑である。出土地点は、186、Q－8 区、187、2 D－17 区。

第 8 類　口縁部を楕円状に区画し、胴部に磨消縄文帯を配した深鉢（188 ～ 193）。R－6・7 区出土。

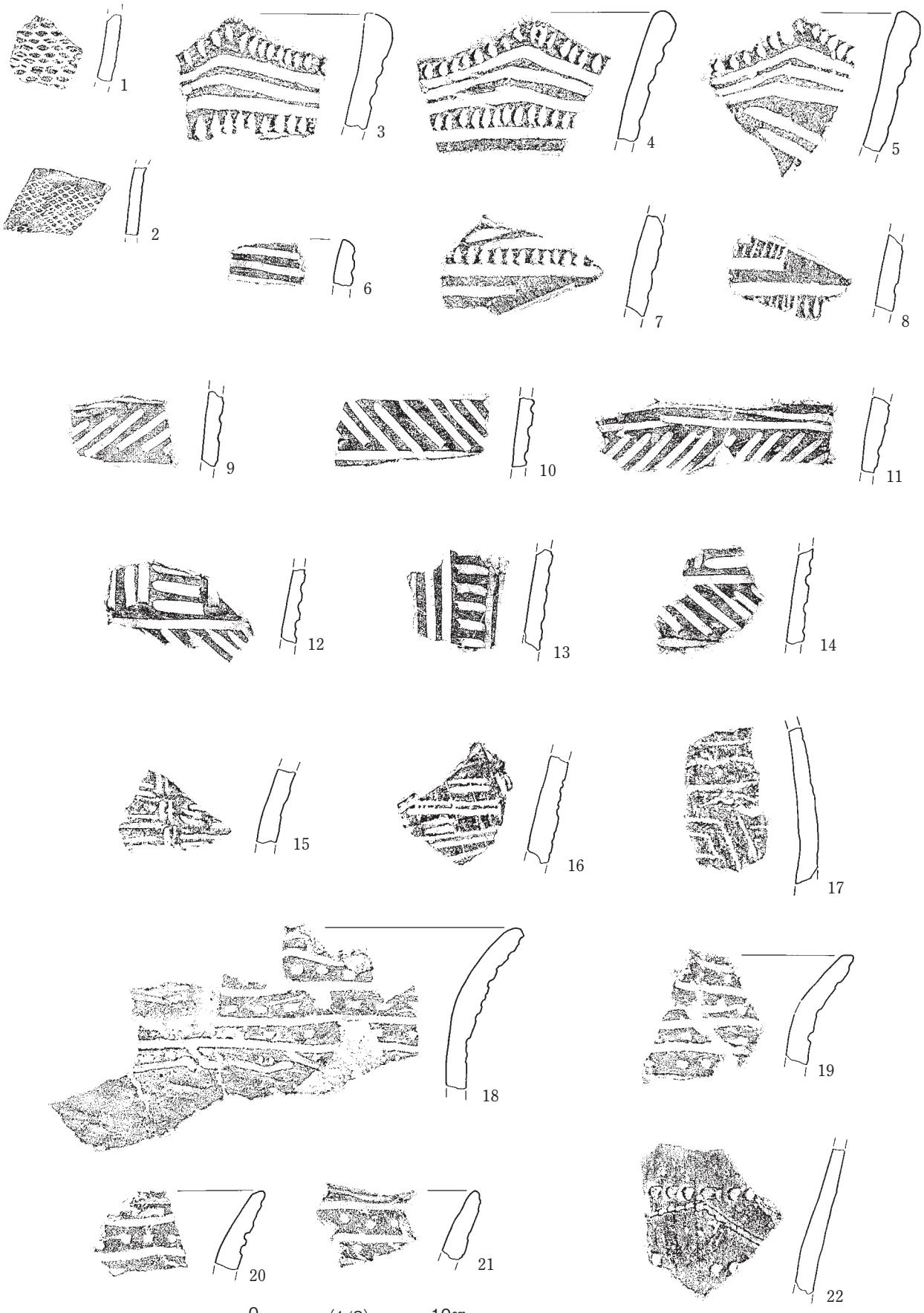
第 9 類　胴部の縄文地に弧状の並行沈線を施す深鉢（194）。R－6 区出土。

第 10 類　口縁部に波状隆帯と刺突文を横位に巡らす深鉢（195）。胴部は縄文地で、鋸歯状沈線を縦位に施す。U－3 区出土。

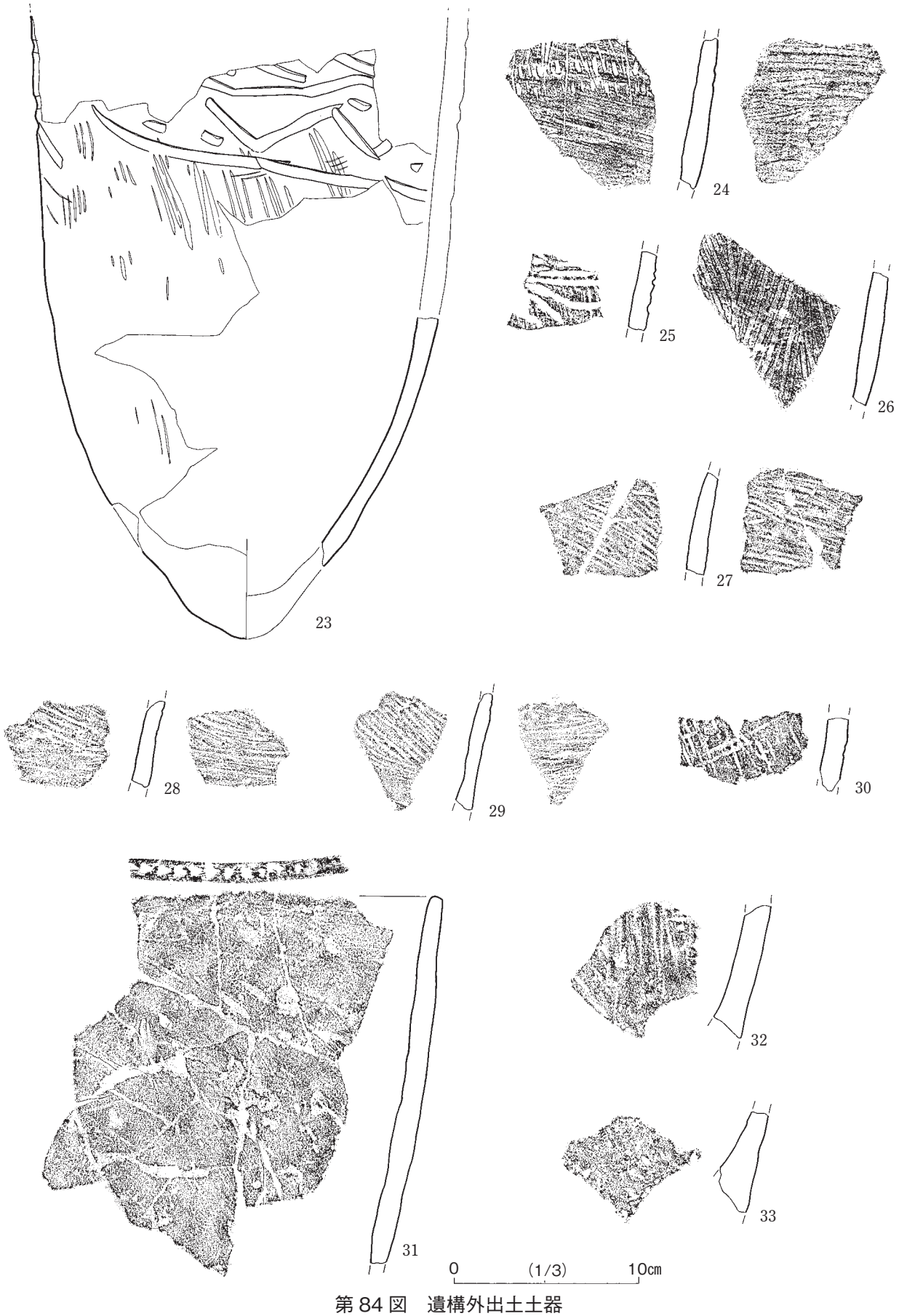
第 11 類　微隆起線による逆U字形の区画を配した深鉢（196 ～ 199）。区画内に縄文が施される。出土地点は、196、2 A－26 区、197、 Z－25 区、198、段丘下段、199、2 E－14 区。

第 12 類　沈線区画の深鉢（200・201）。出土地点は、200、2 C・2 D－15 区、201、U－17 区。

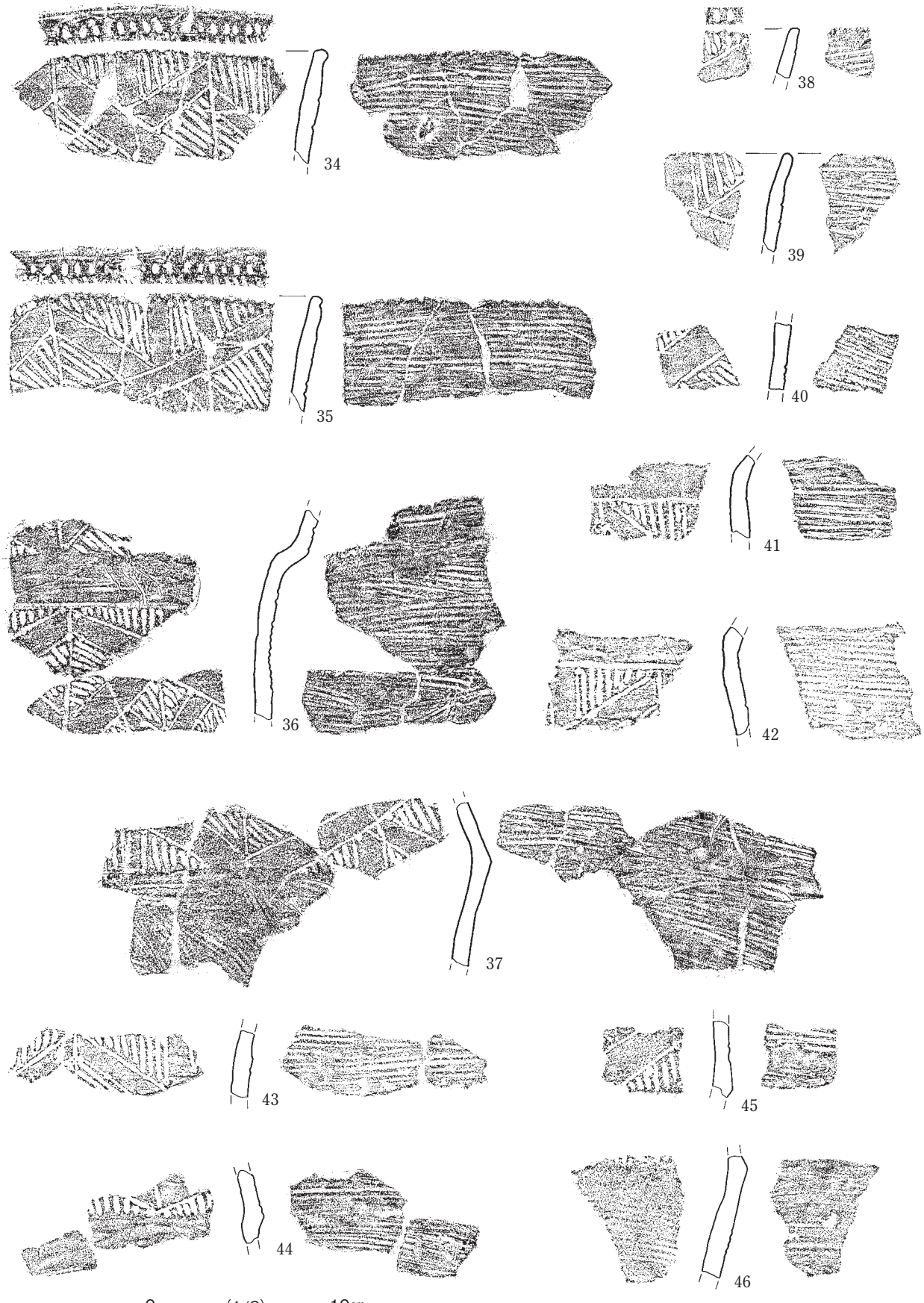
以上のうち、第 1 類は曽利Ⅱ～Ⅲ式、第 2 類は曽利Ⅲ式、第 3 類から第 5 類は曽利Ⅳ式、第 6 類は曽利Ⅴ式に比定され、第 7 類は加曽利Ｅ 2 式からＥ 3 式、第 8 類から第 10 類は加曽利Ｅ 3 式、第 11・12 類は加曽利Ｅ 4 式に比定される。



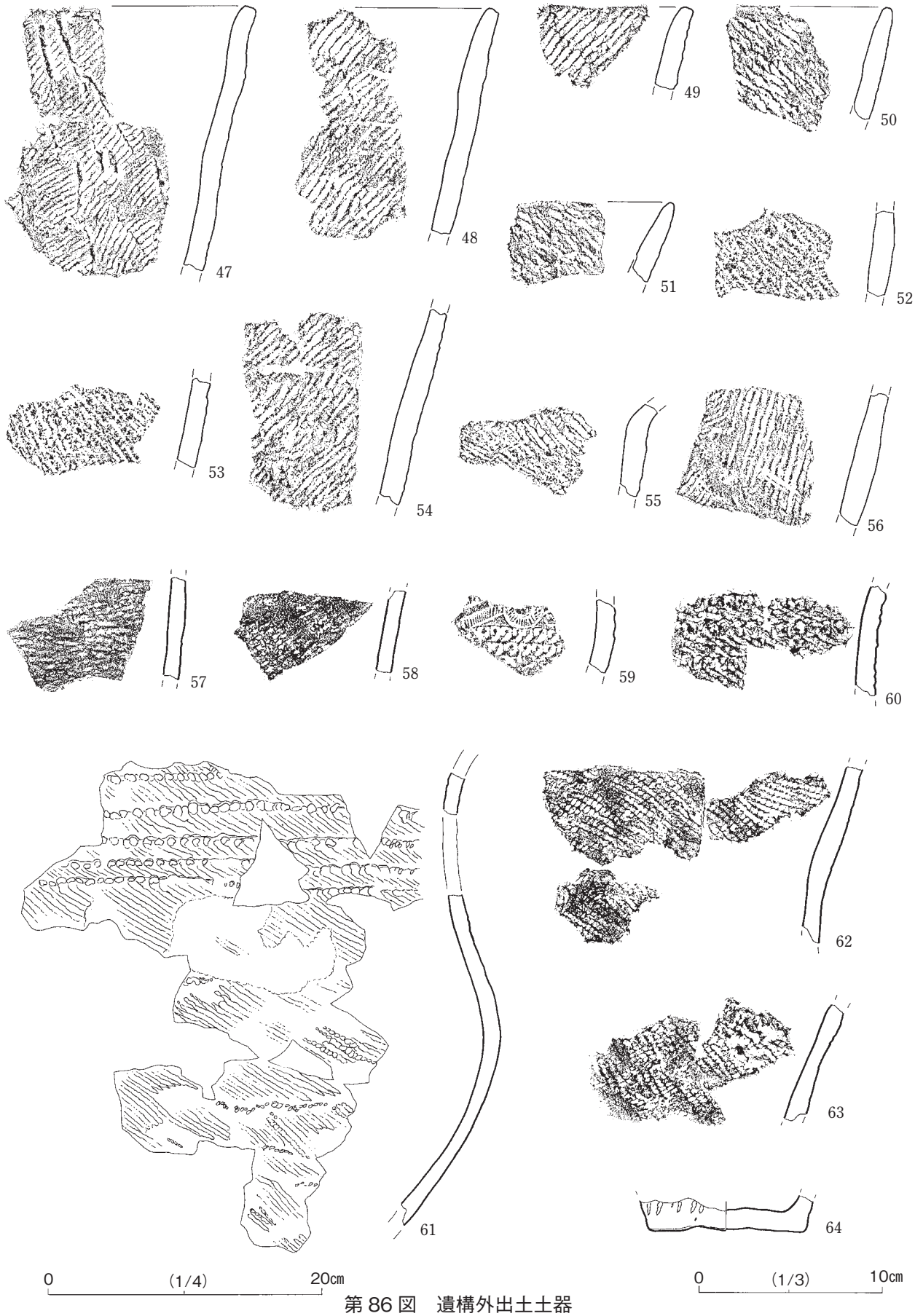
第 83 図　遺構外出土土器



第 84 図　遺構外出土土器

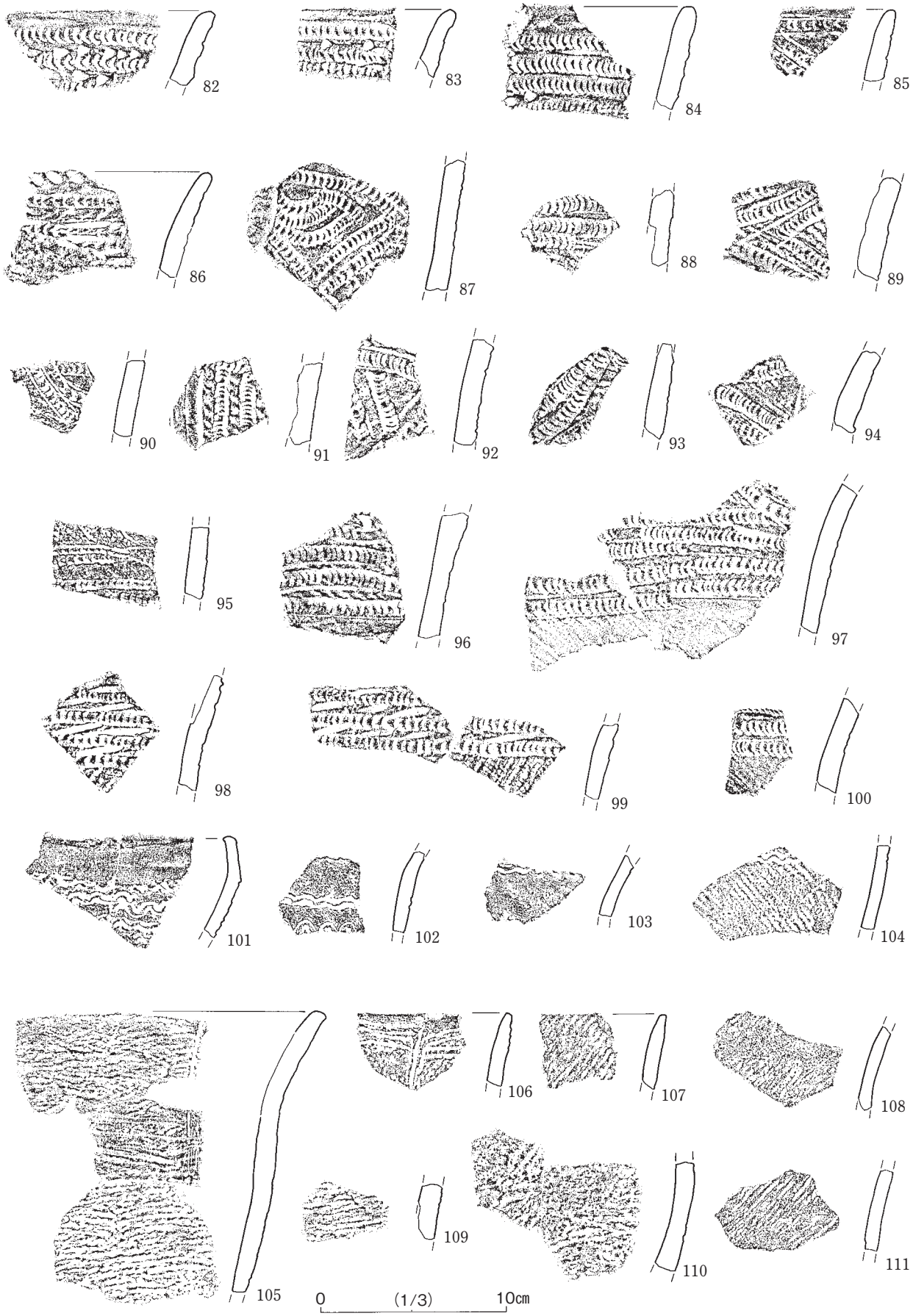


第 85 図　遺構外出土土器

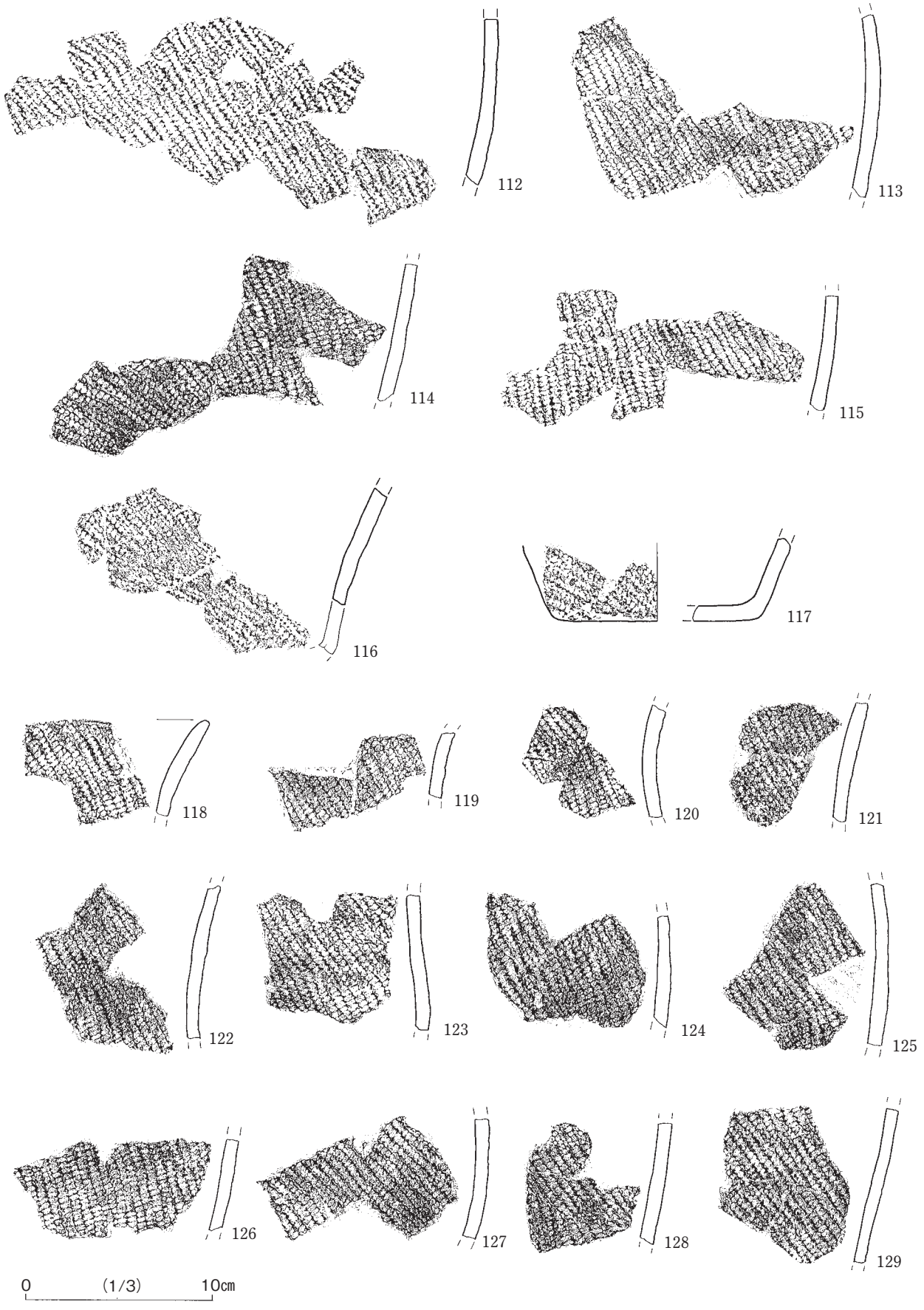


第 86 図　遺構外出土土器

第 87 図　遺構外出土土器

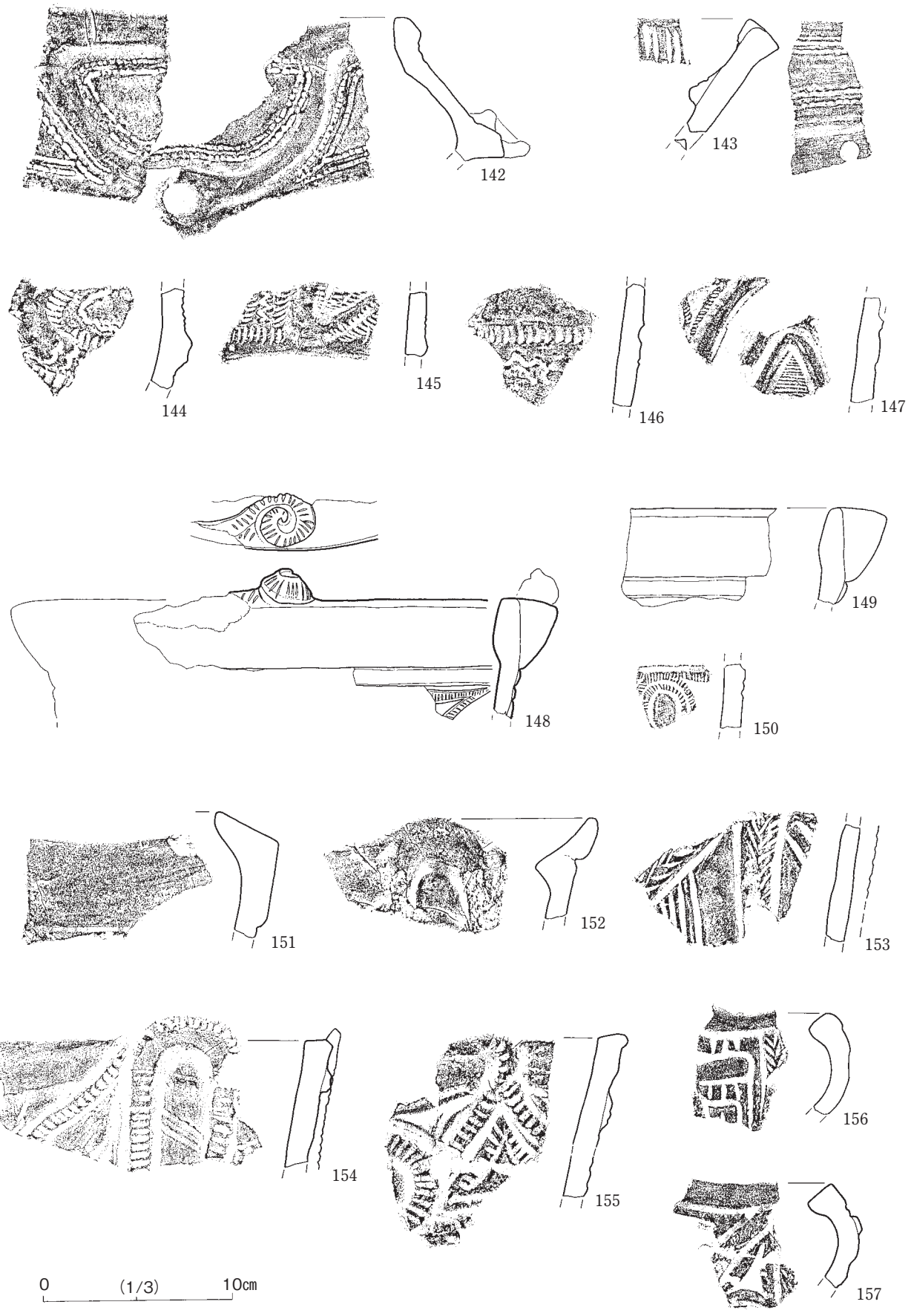


第 88 図　遺構外出土土器

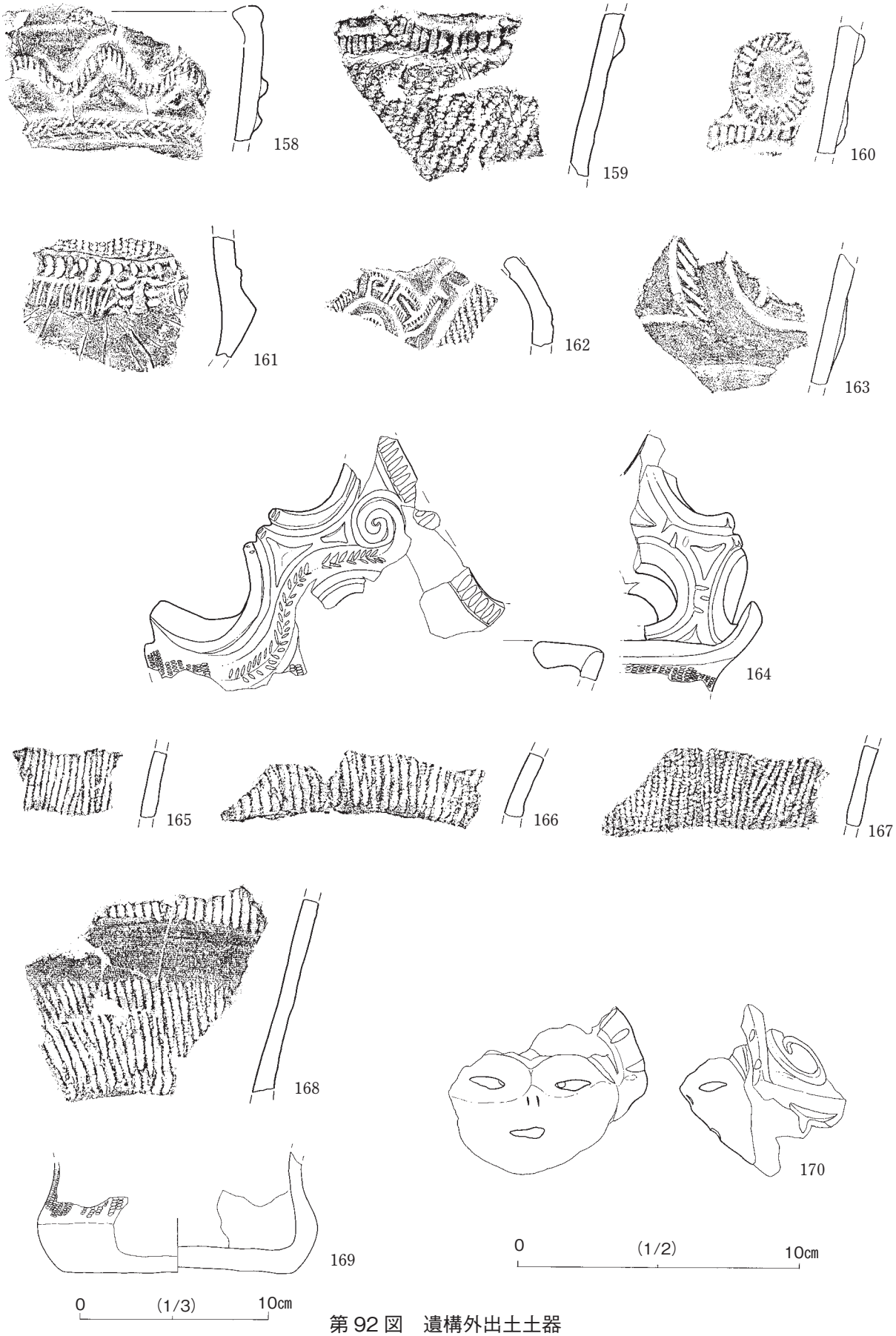


第 89 図　遺構外出土土器

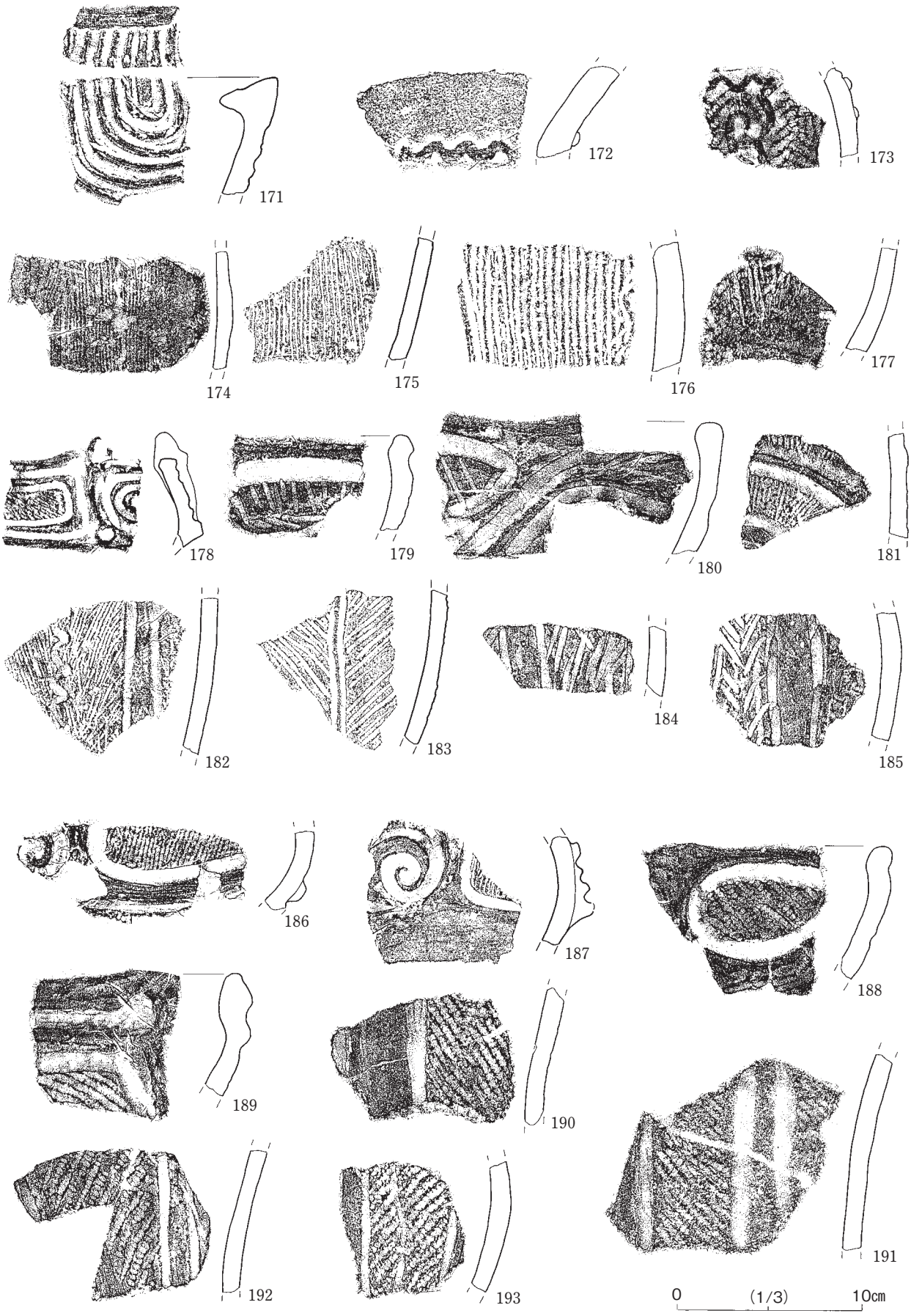
第 90 図　遺構外出土土器



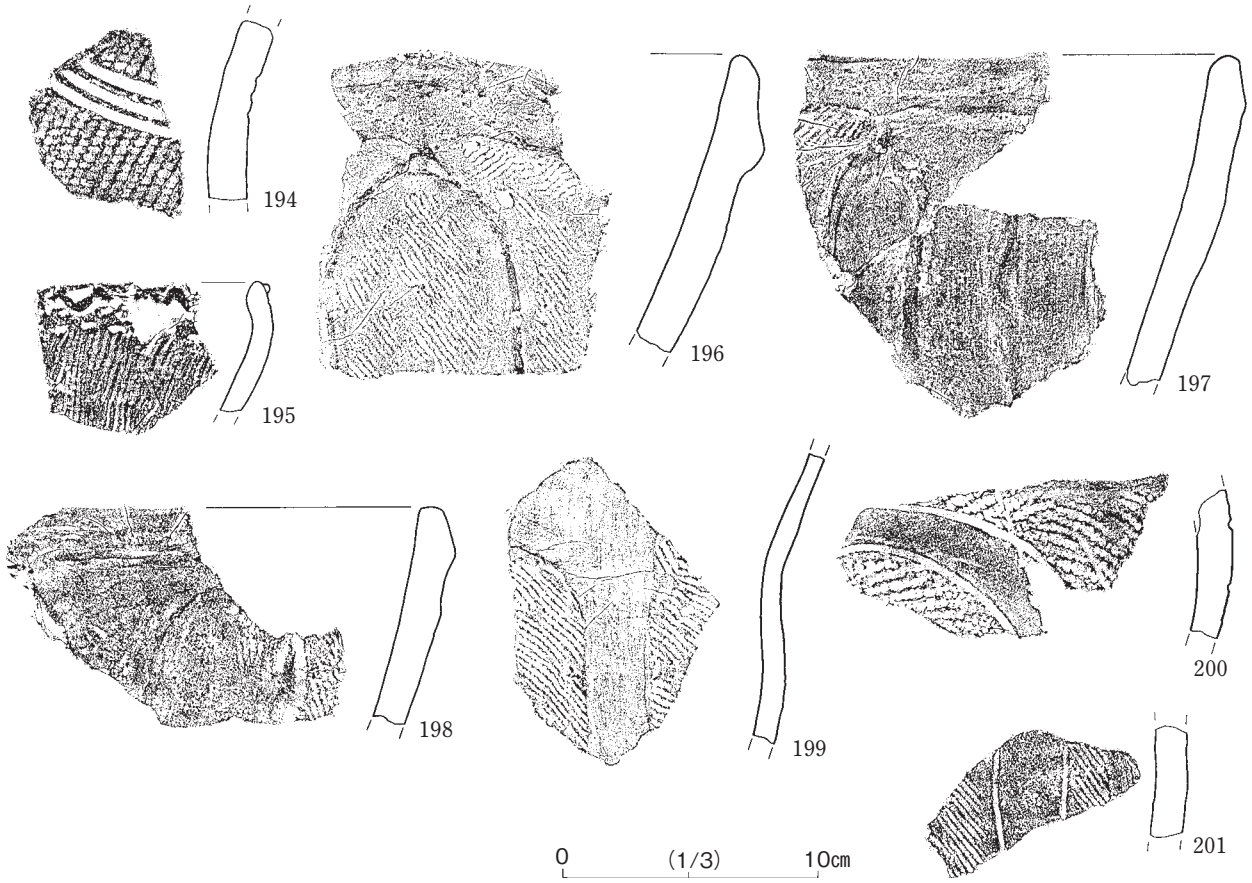
第 91 図　遺構外出土土器



第 92 図　遺構外出土土器



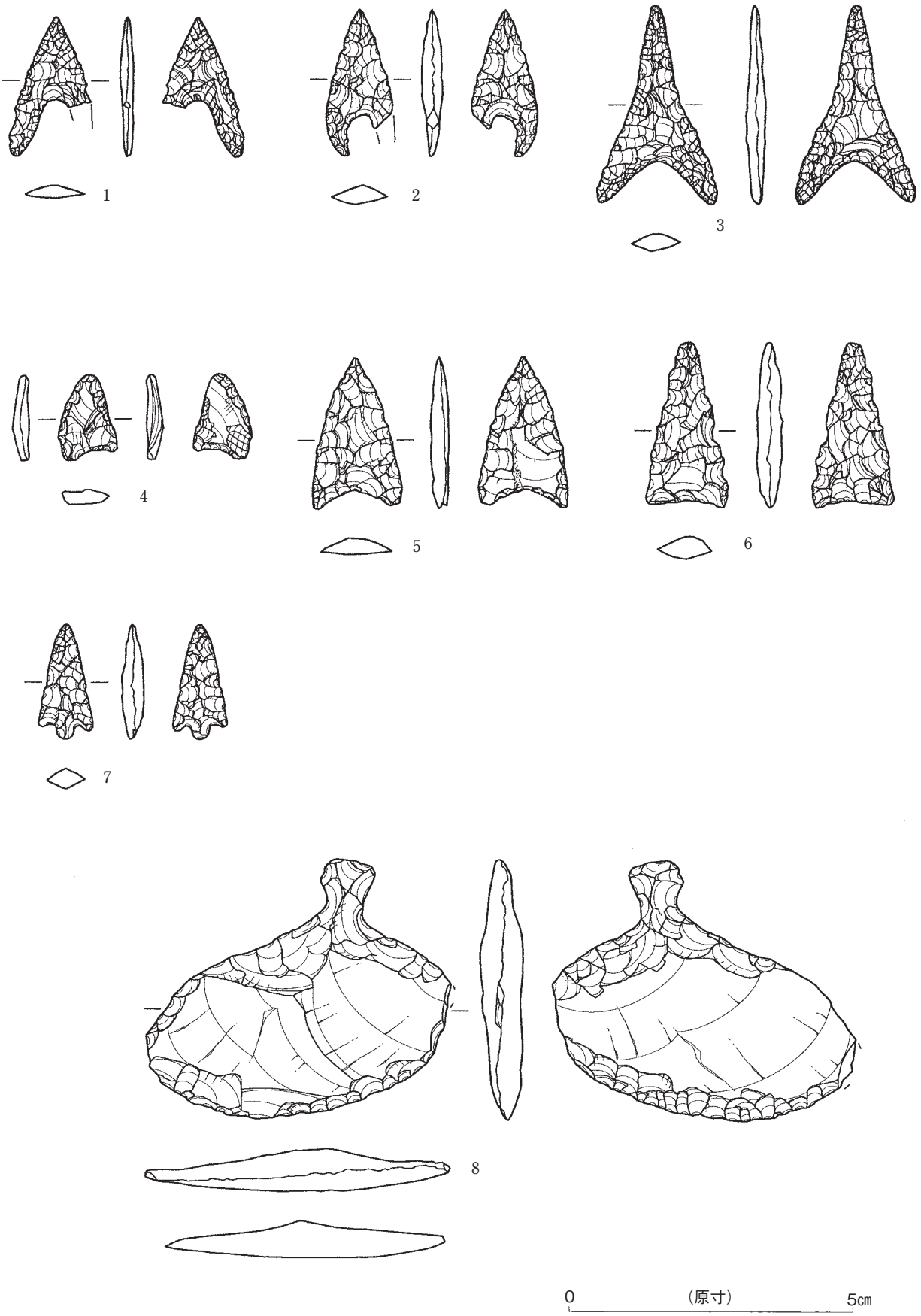
第 93 図　遺構外出土土器



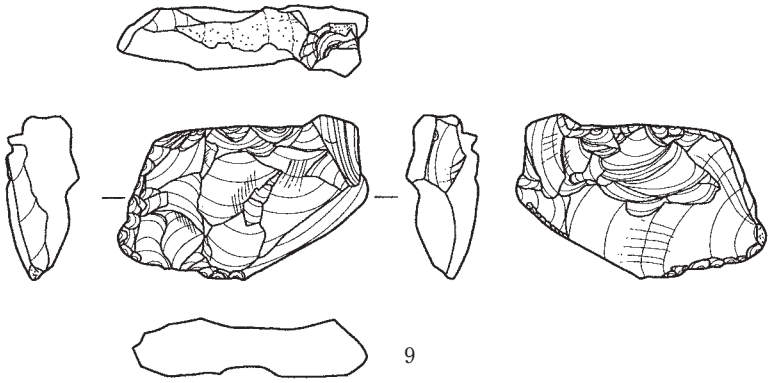
第 94 図　遺構外出土土器

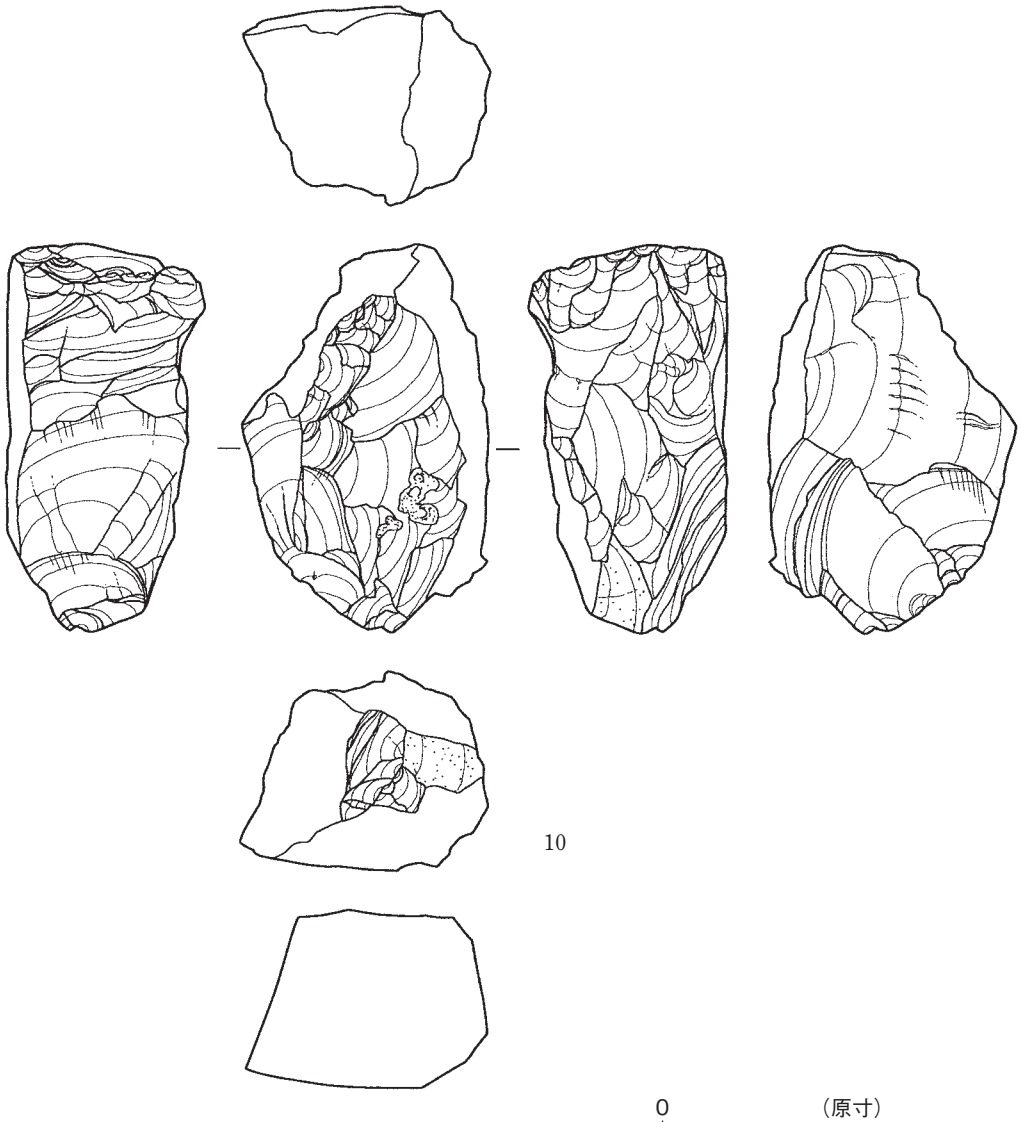
出土石器（第 95 ～ 112 図、図版 58 ～ 60）

石器 169 点を報告する。出土分布は縄文時代の遺構分布と概ね重なるが、とくに下段の集石付近に多い。出土層位は大半が第Ⅶ層から第Ⅷ層で、縄文土器と同様の分布である。石器の中では打製石斧や磨石類が多く出土した。詳細は第 2 表（石器観察表）にまとめた。

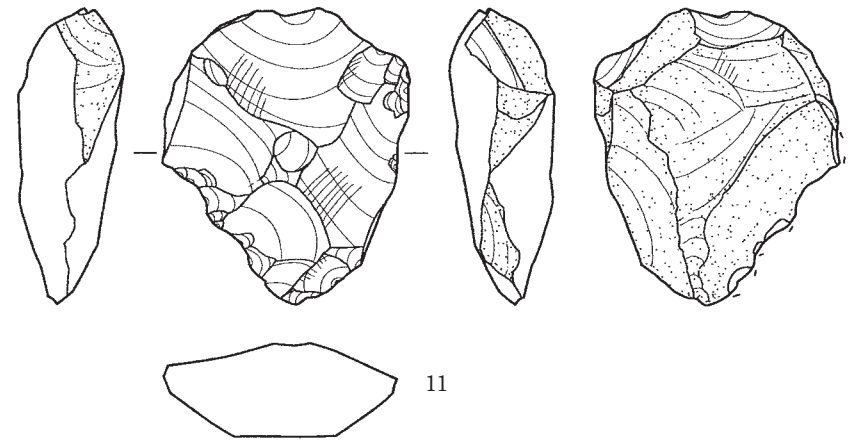


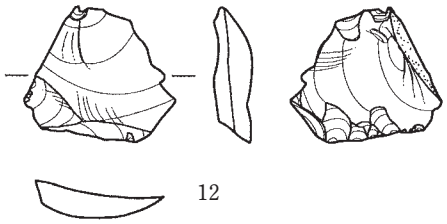
第 95 図　遺構外出土石器

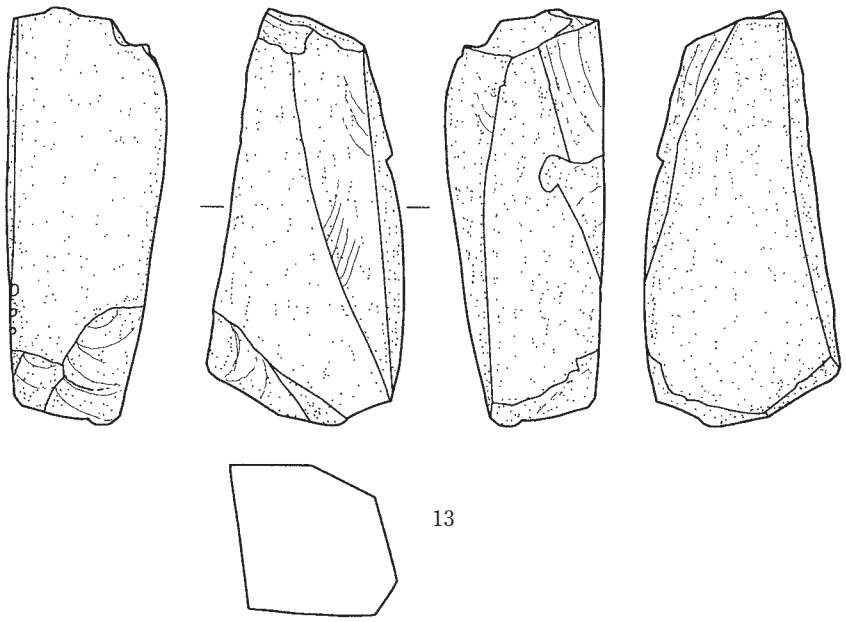


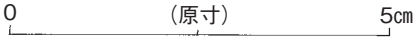


第 96 図　遺構外出土石器

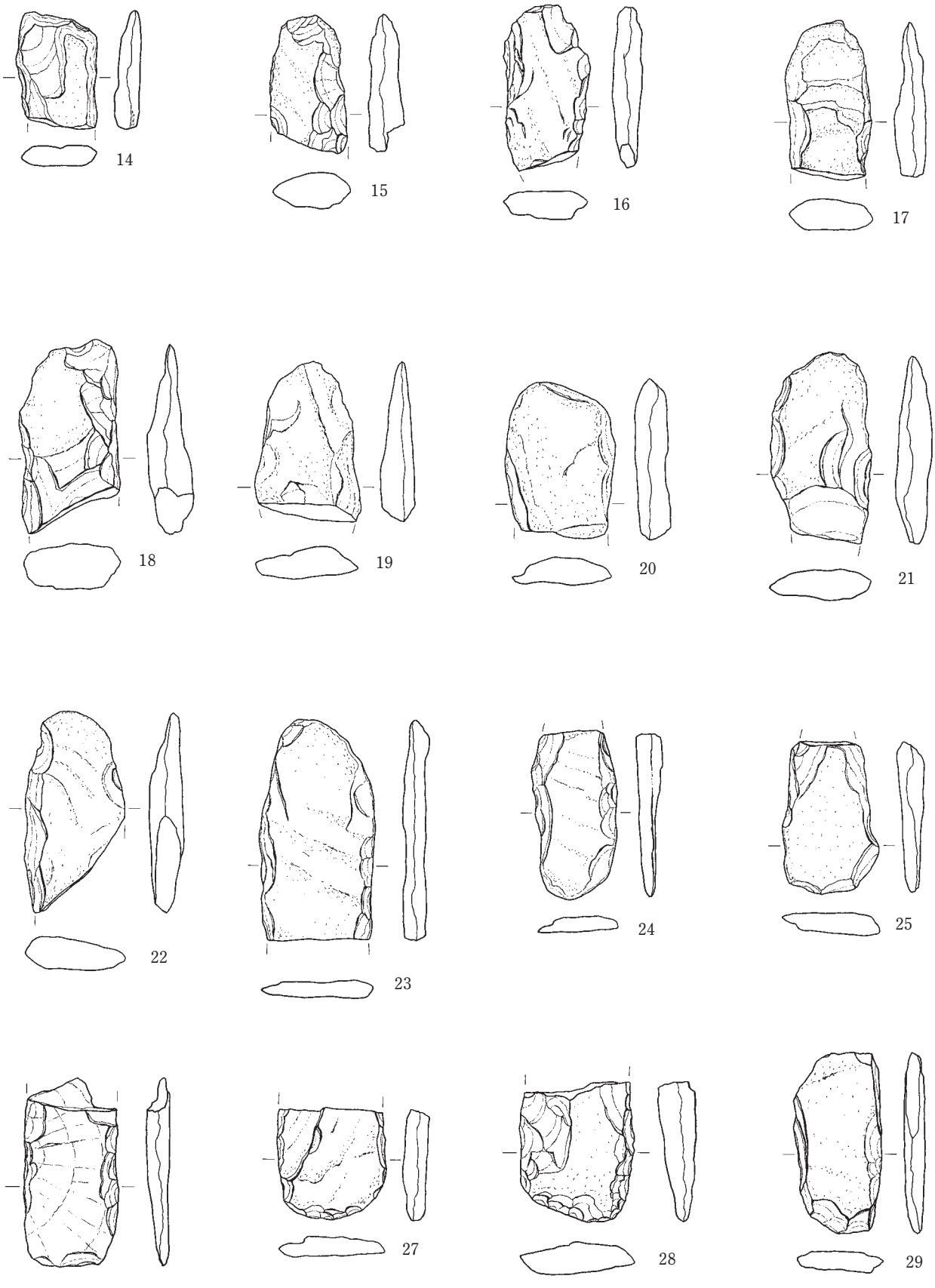




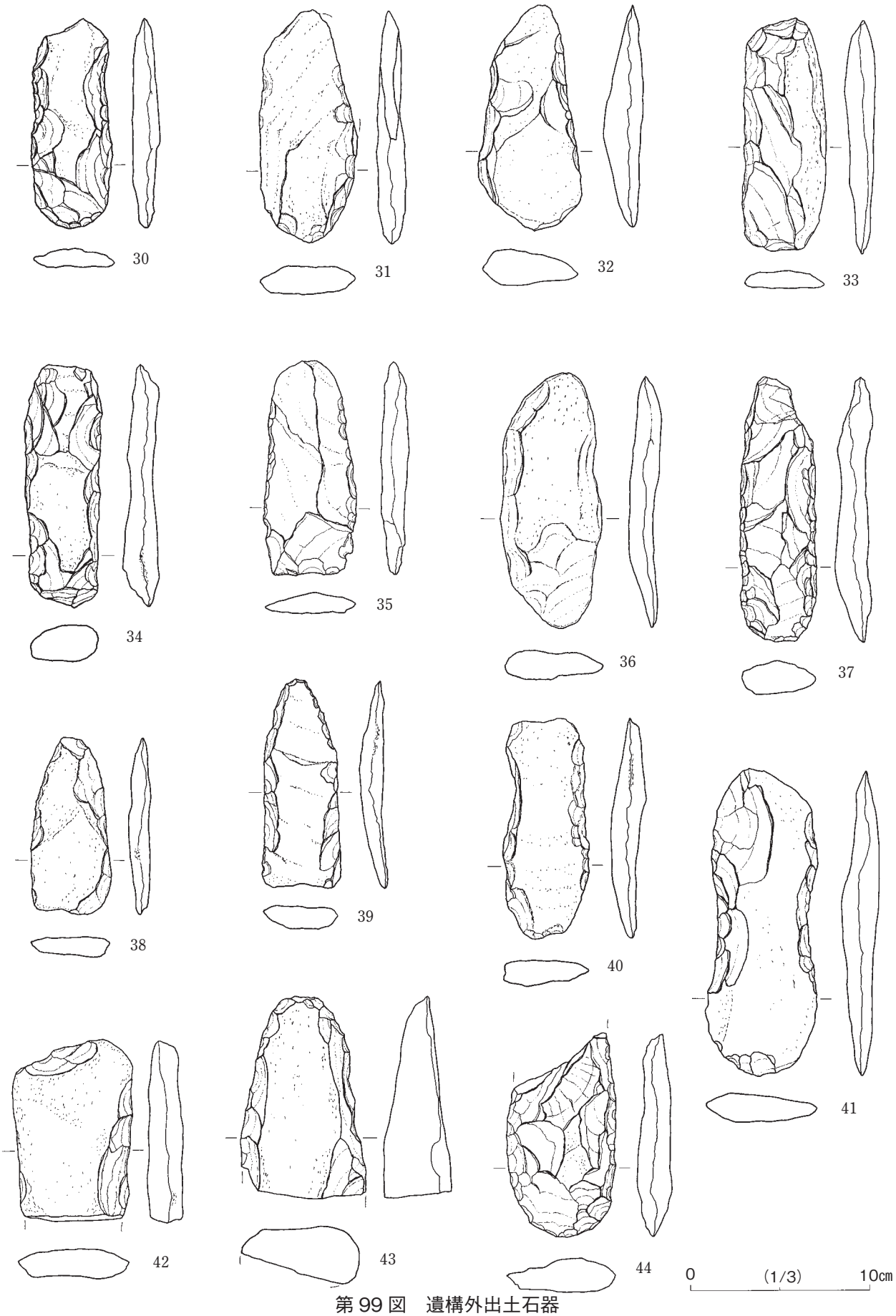




第 97 図　遺構外出土石器

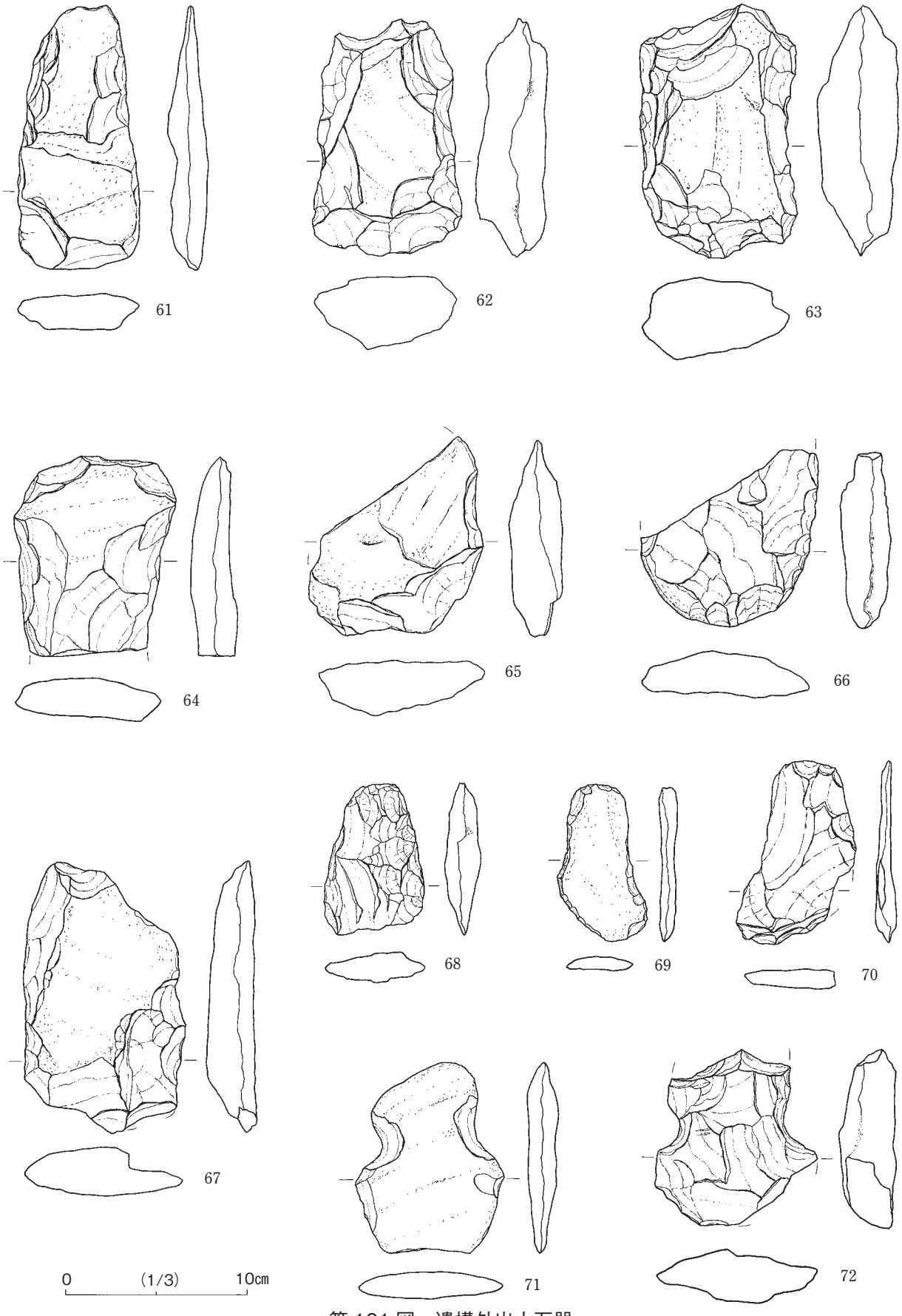


第 98 図　遺構外出土石器

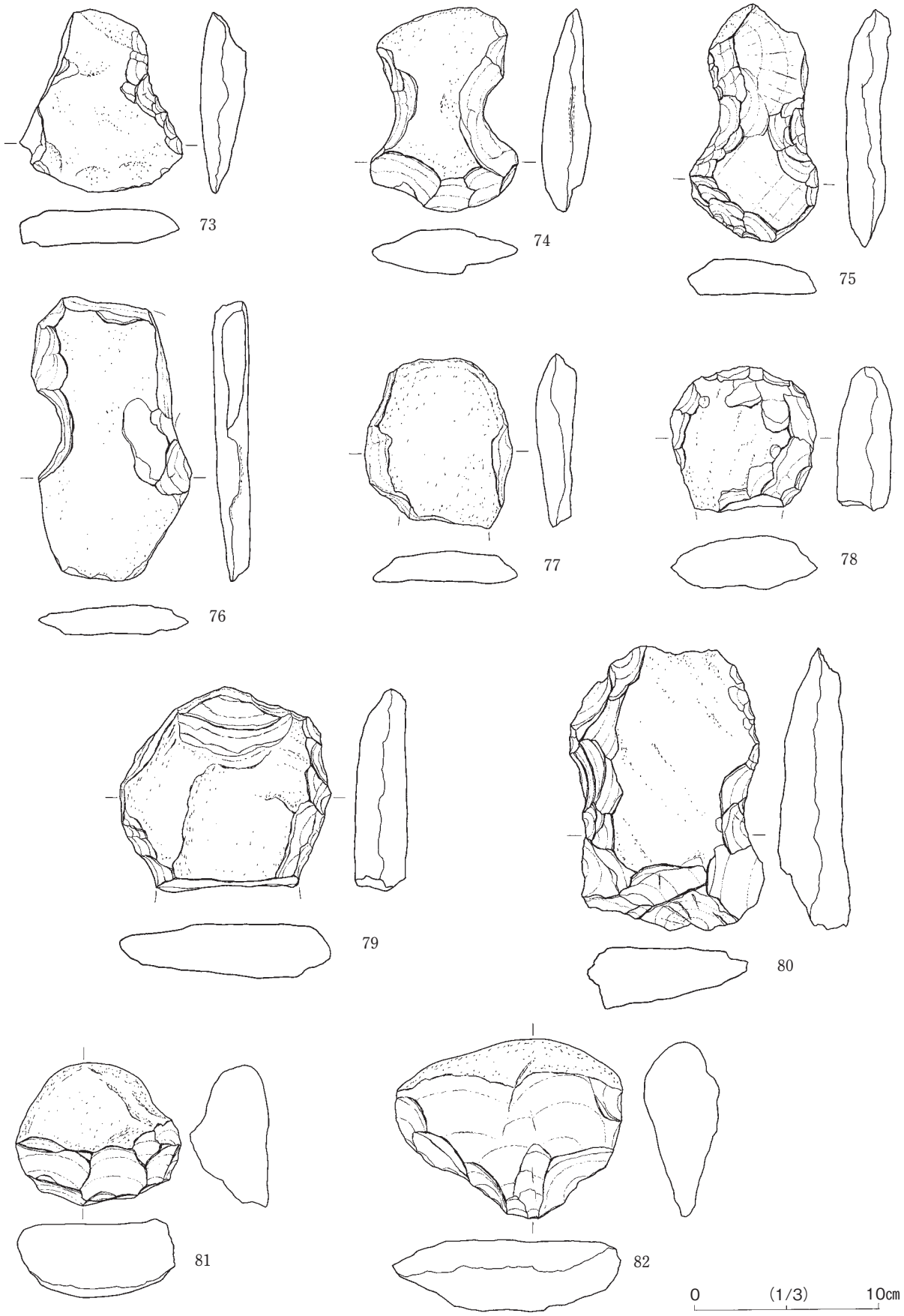


第 99 図　遺構外出土石器

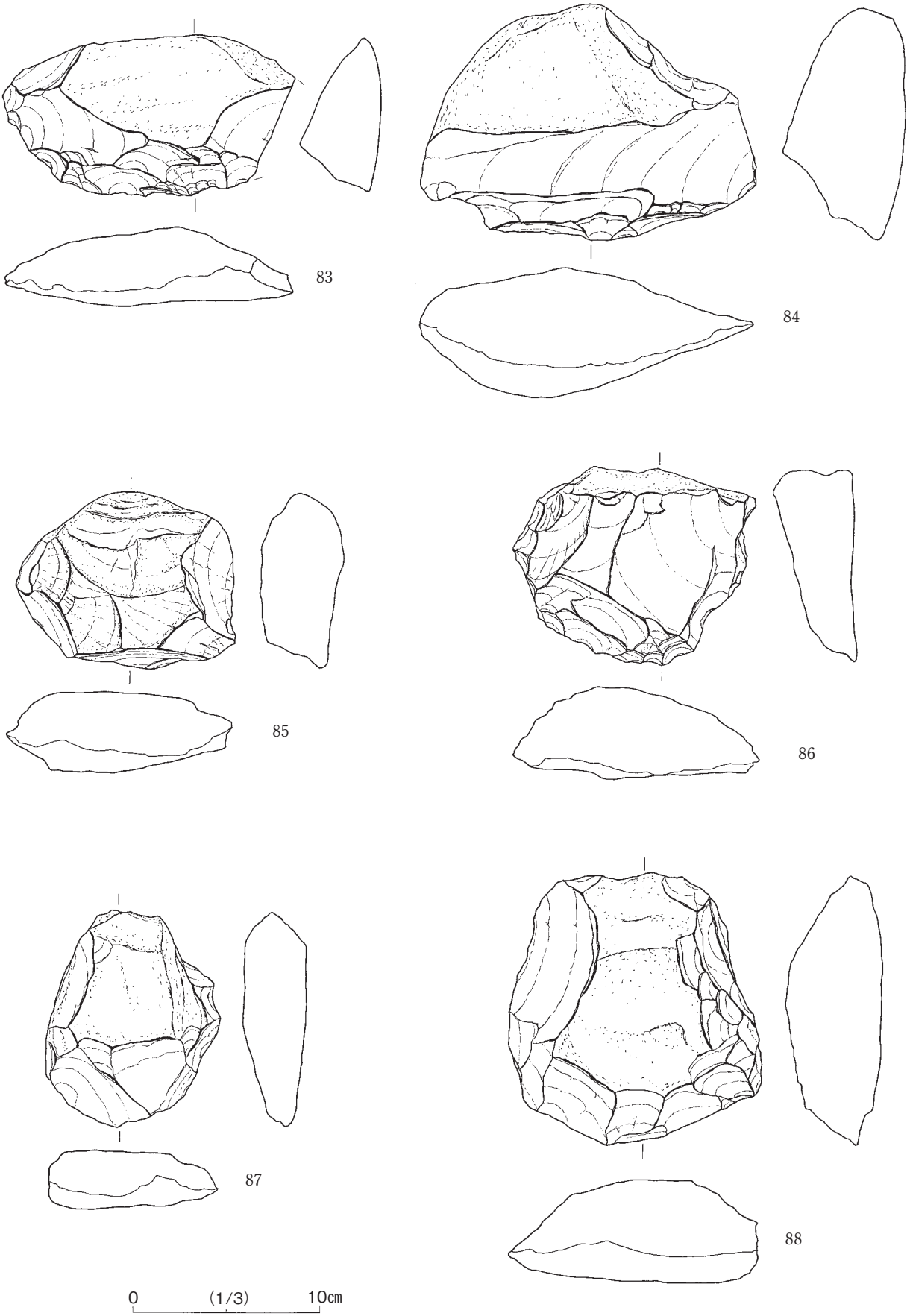
第 100 図　遺構外出土石器



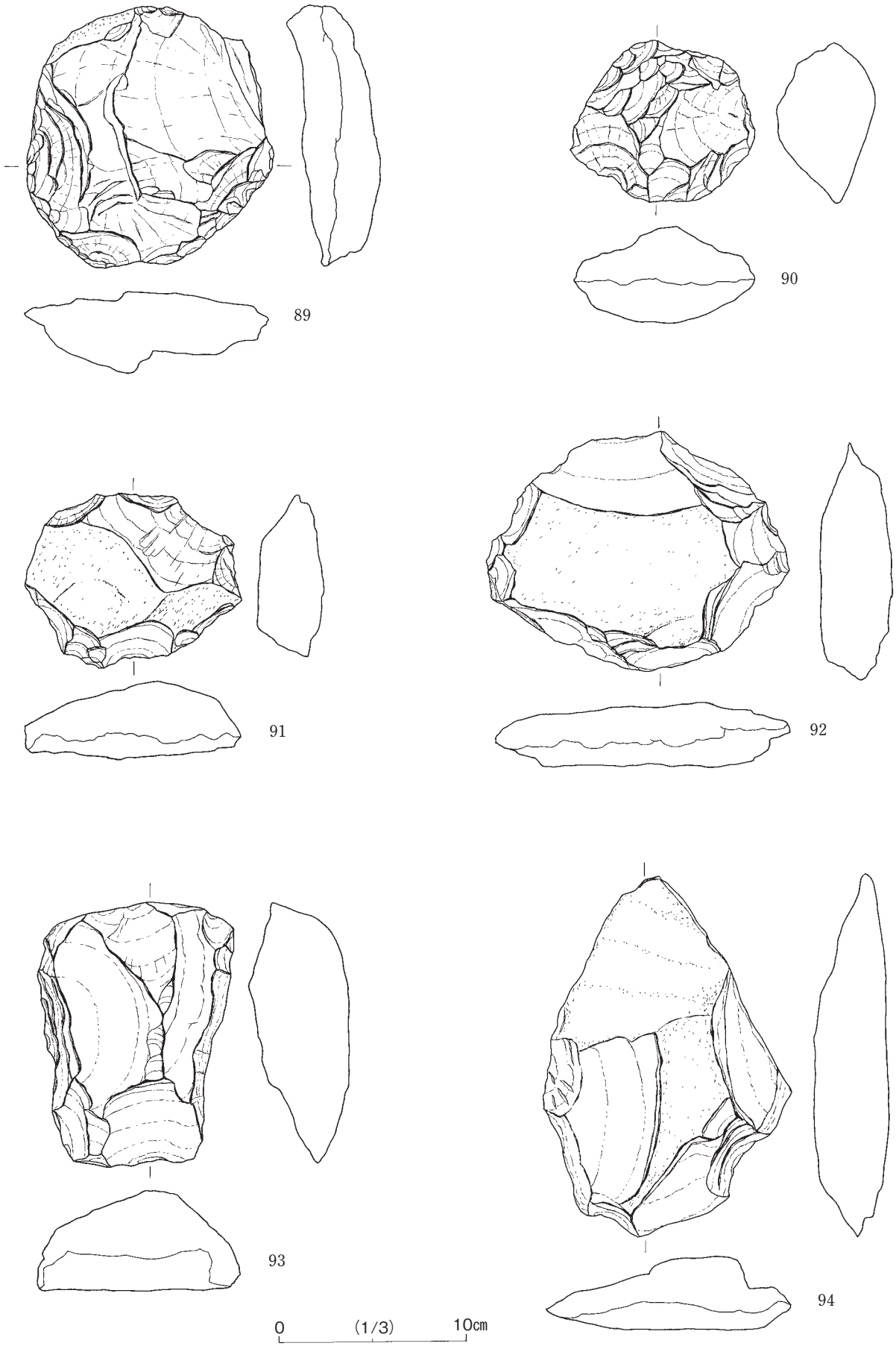
第 101 図　遺構外出土石器



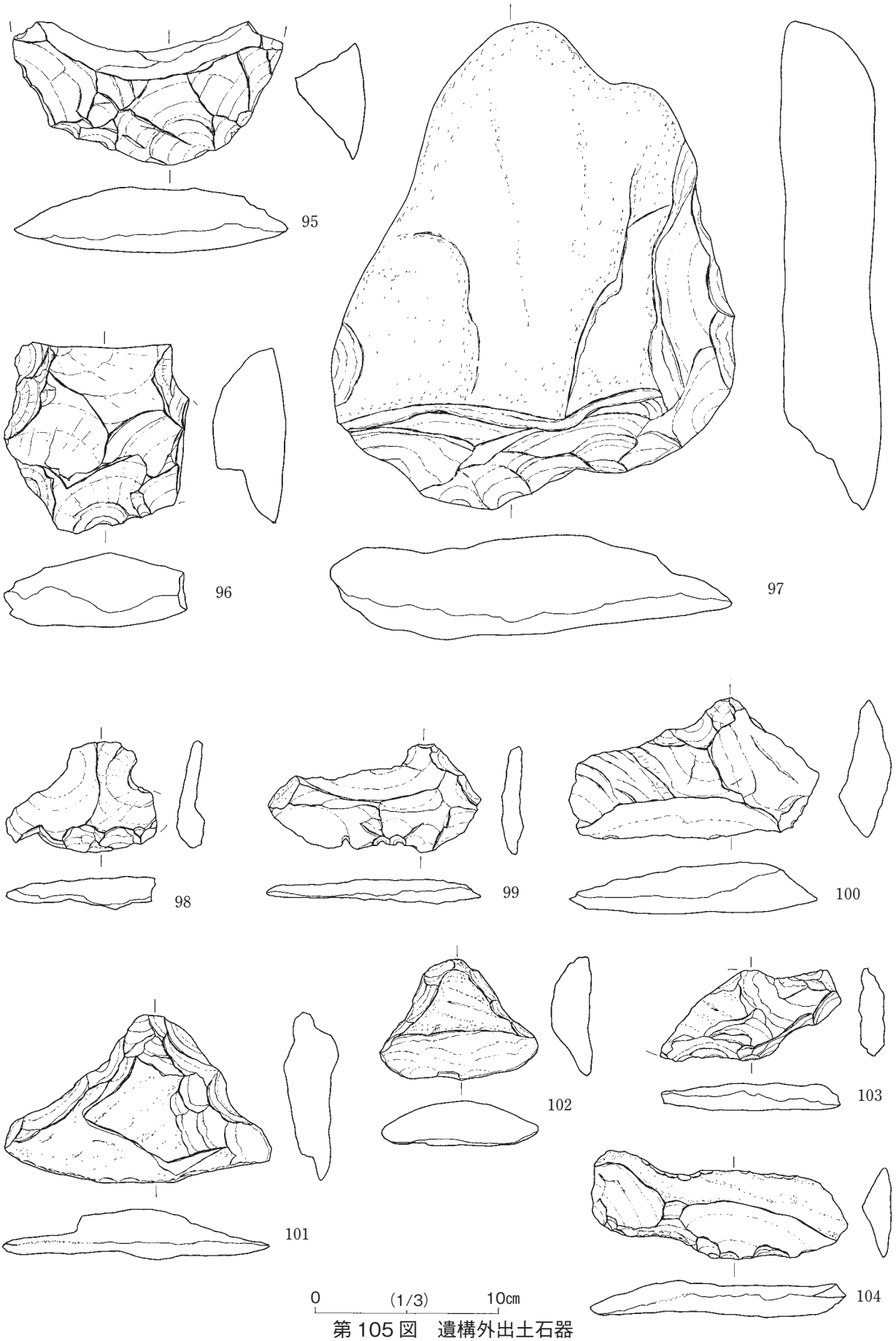
第 102 図　遺構外出土石器



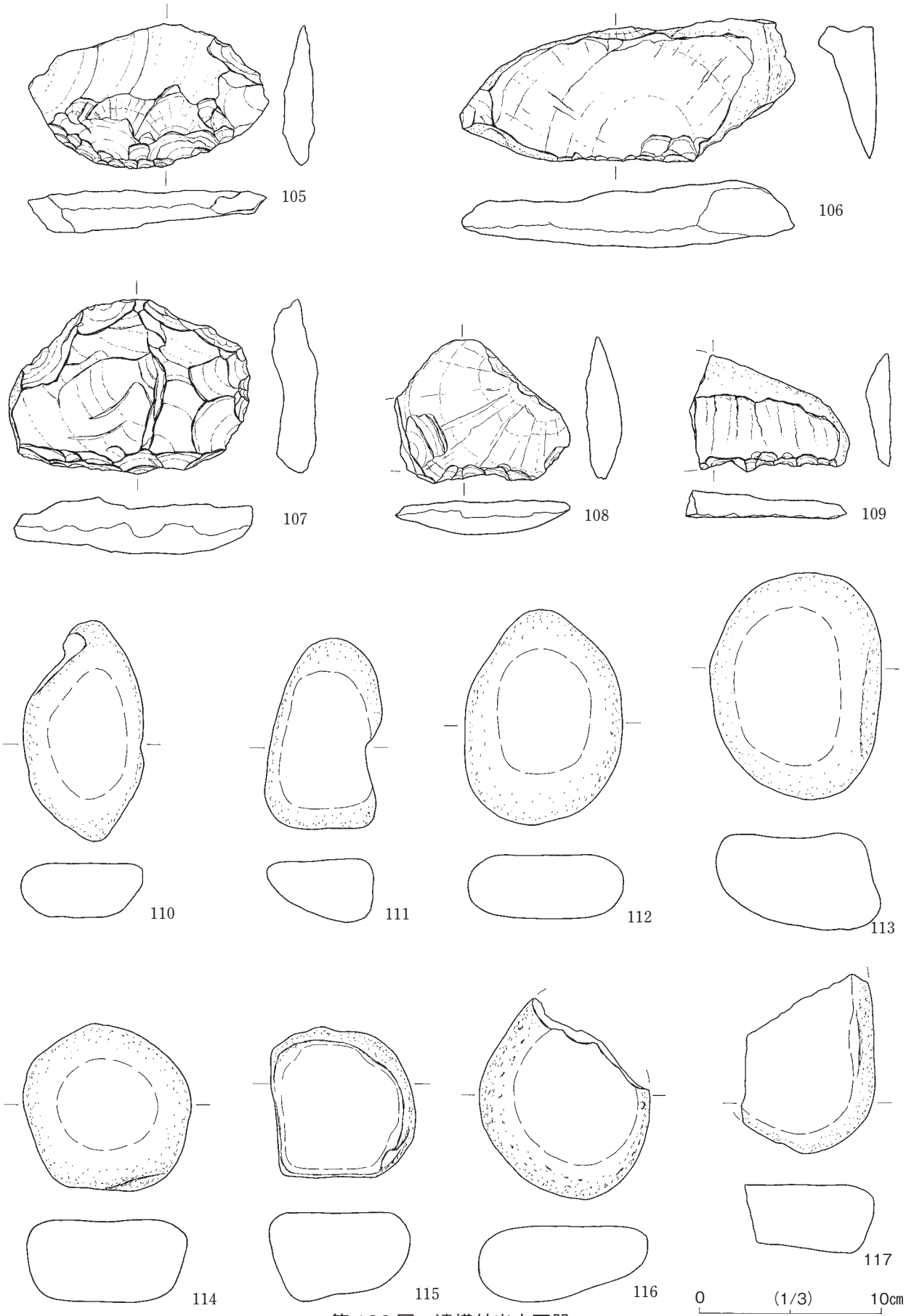
第 103 図　遺構外出土石器



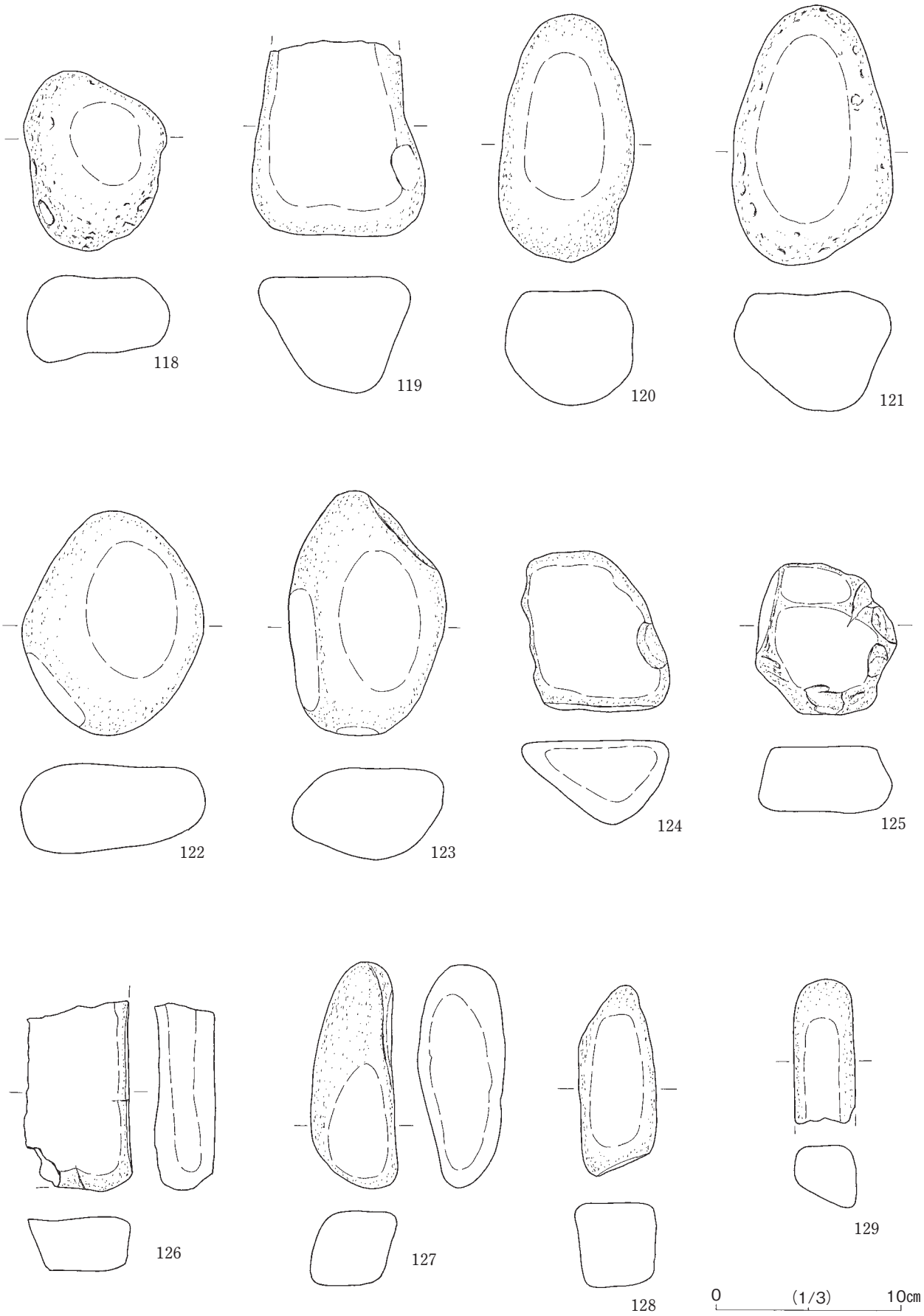
第 104 図　遺構外出土石器



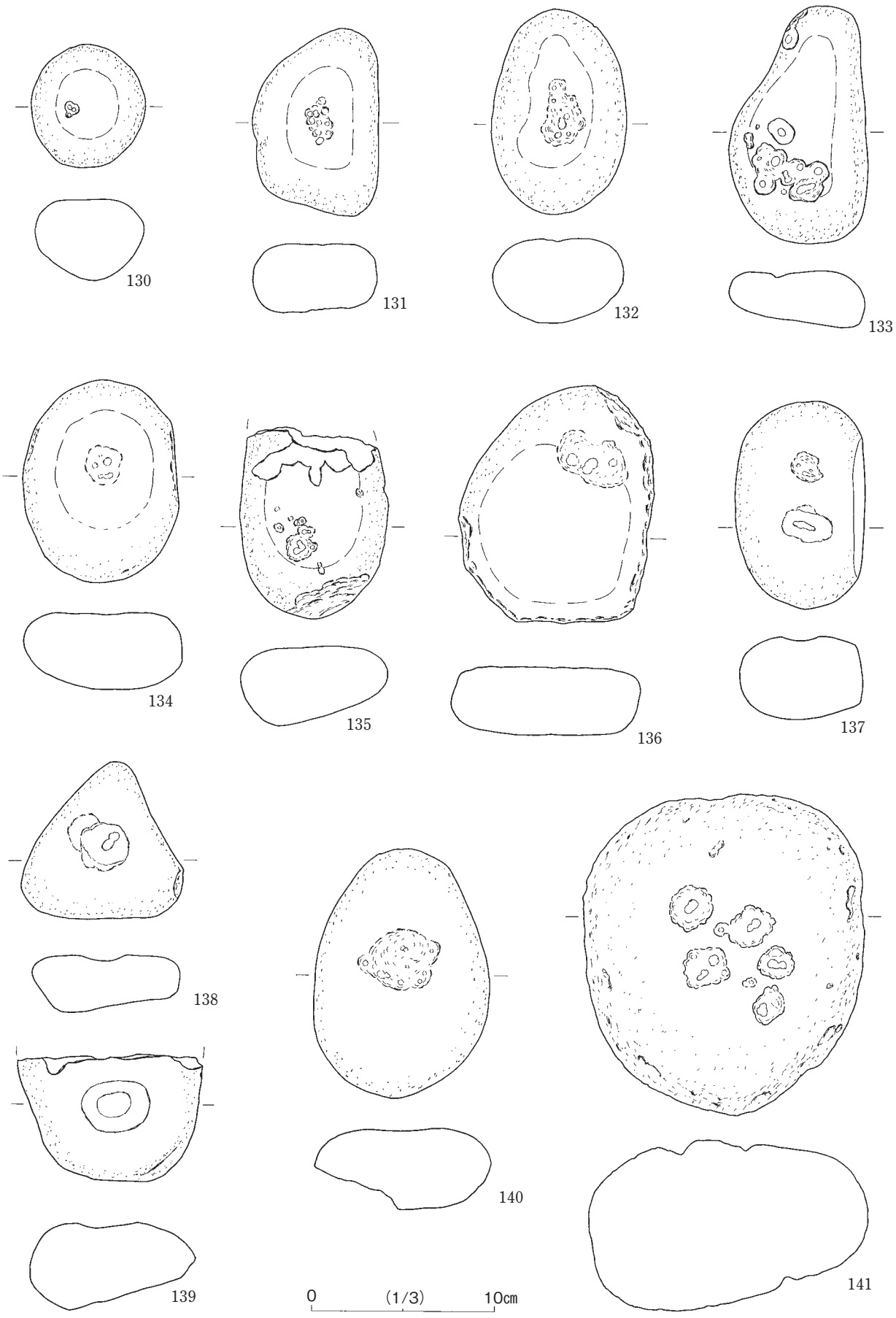
第 105 図　遺構外出土石器



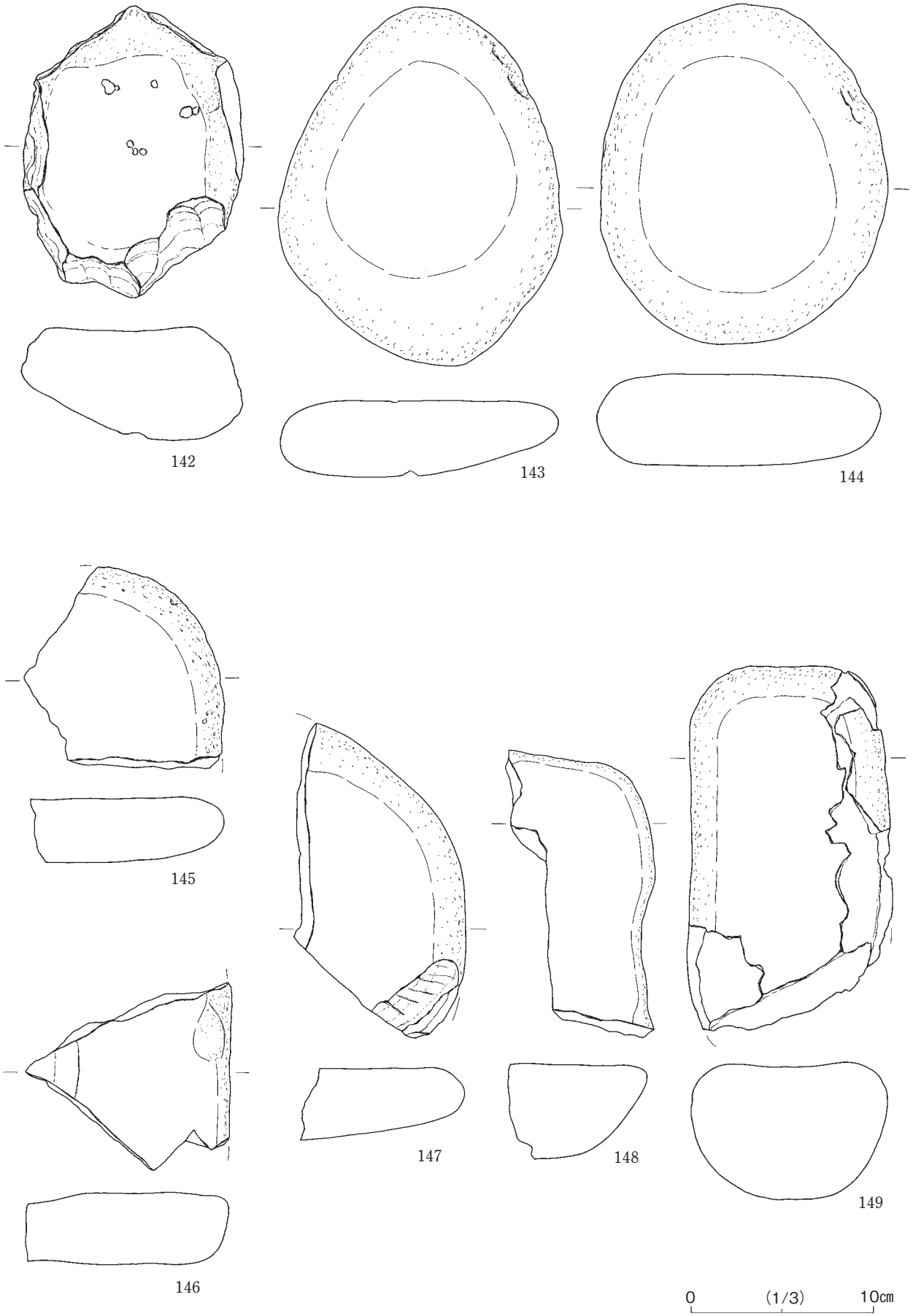
第 106 図　遺構外出土石器



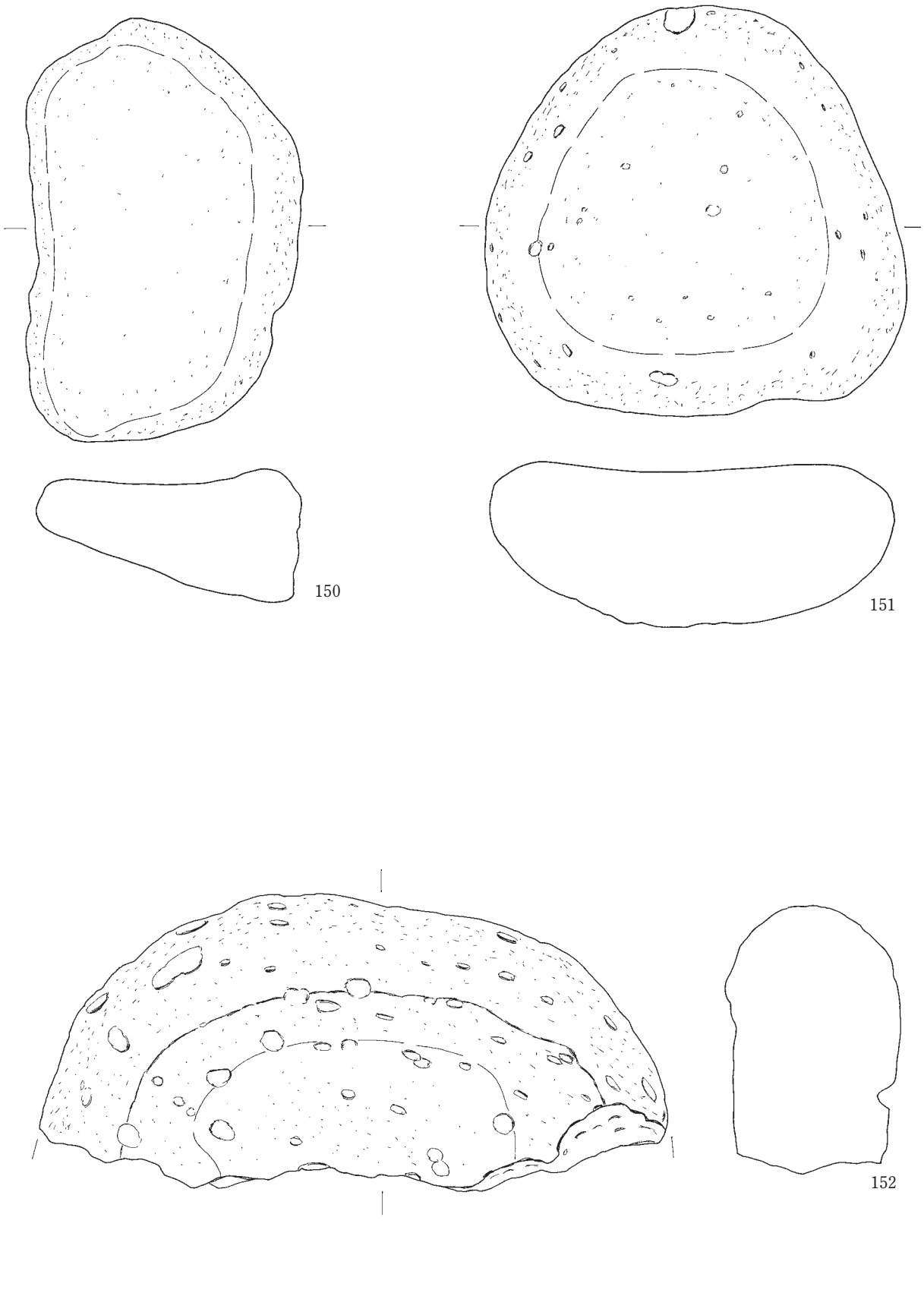
第 107 図　遺構外出土石器



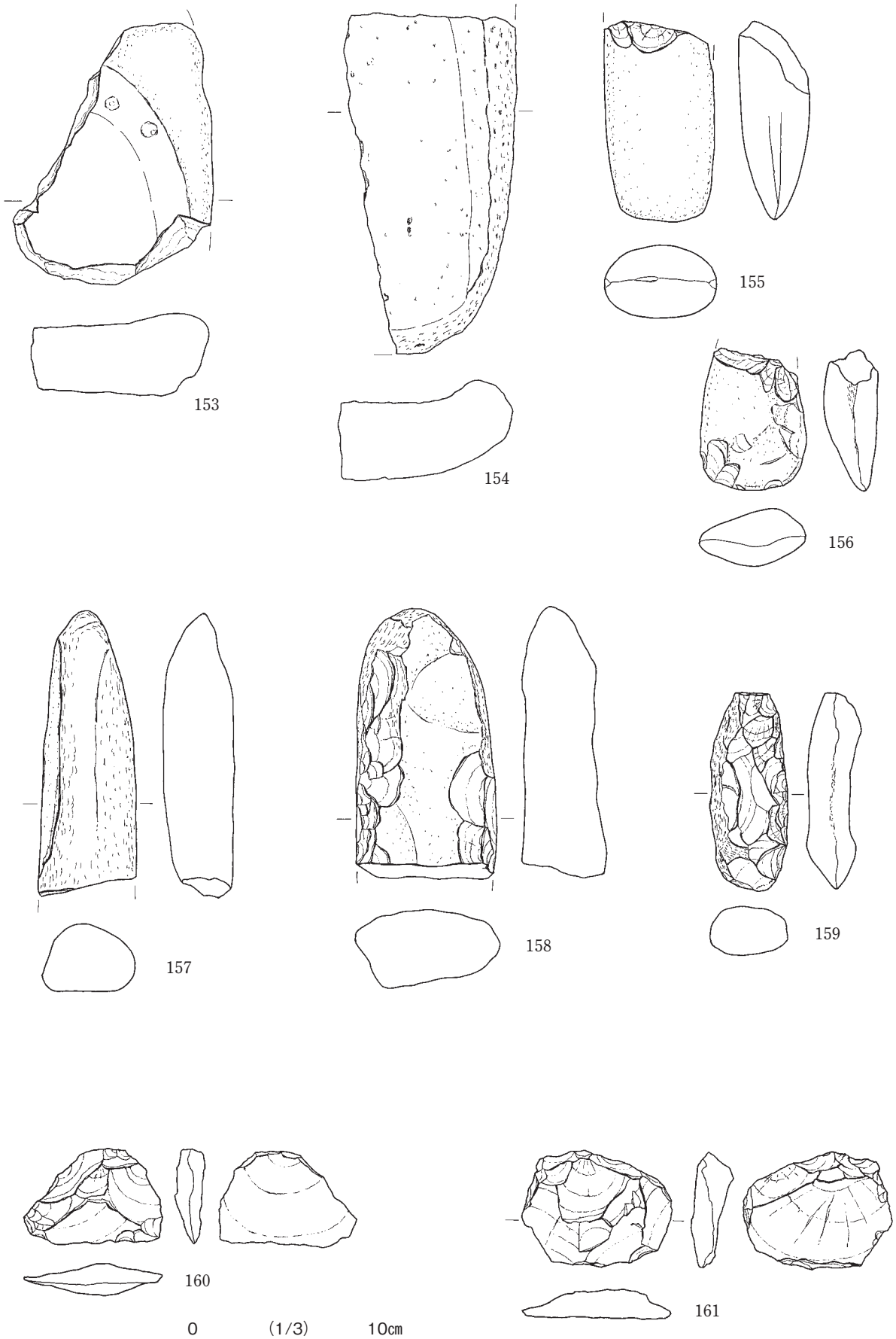
第 108 図　遺構外出土石器



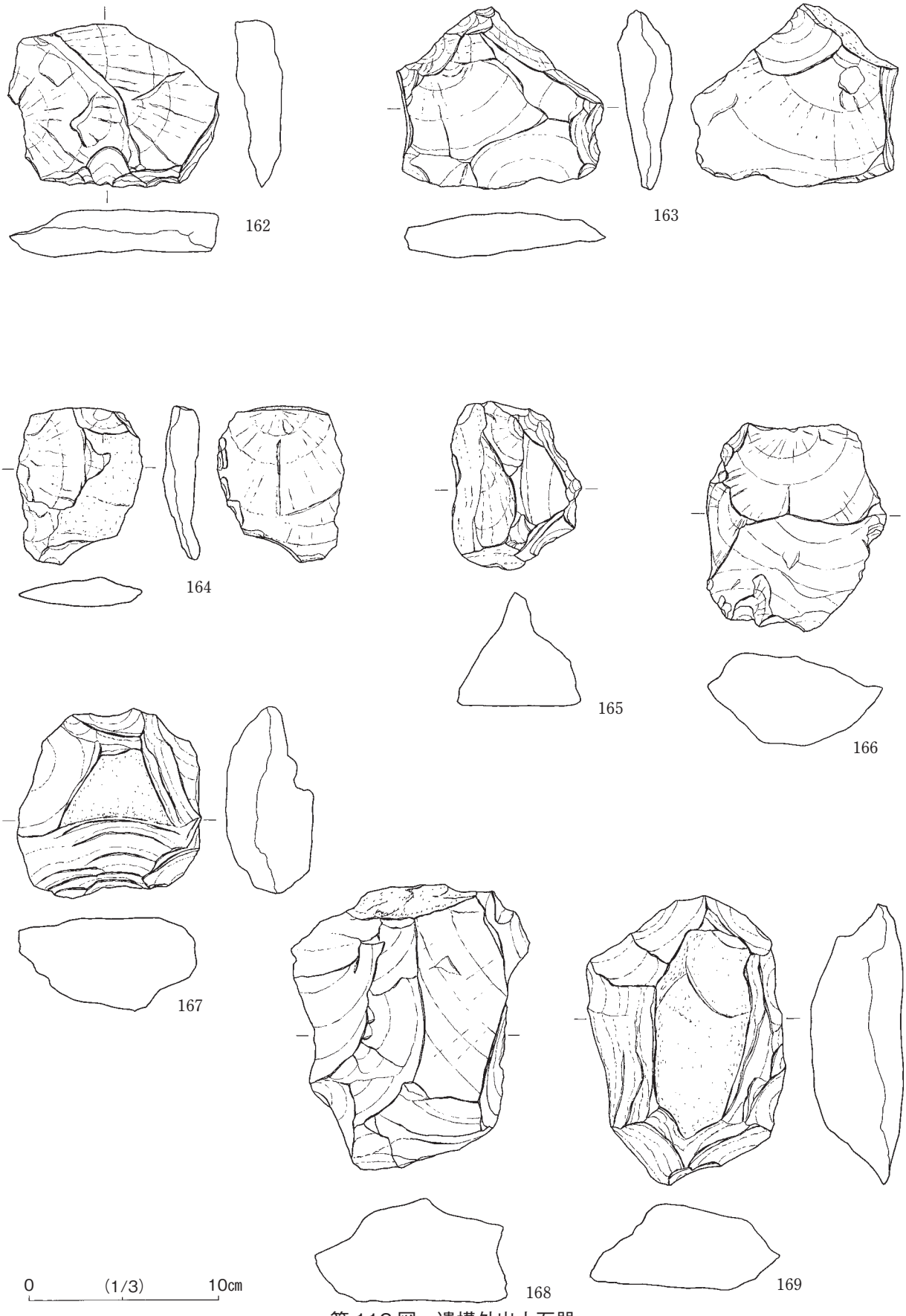
第 109 図　遺構外出土石器



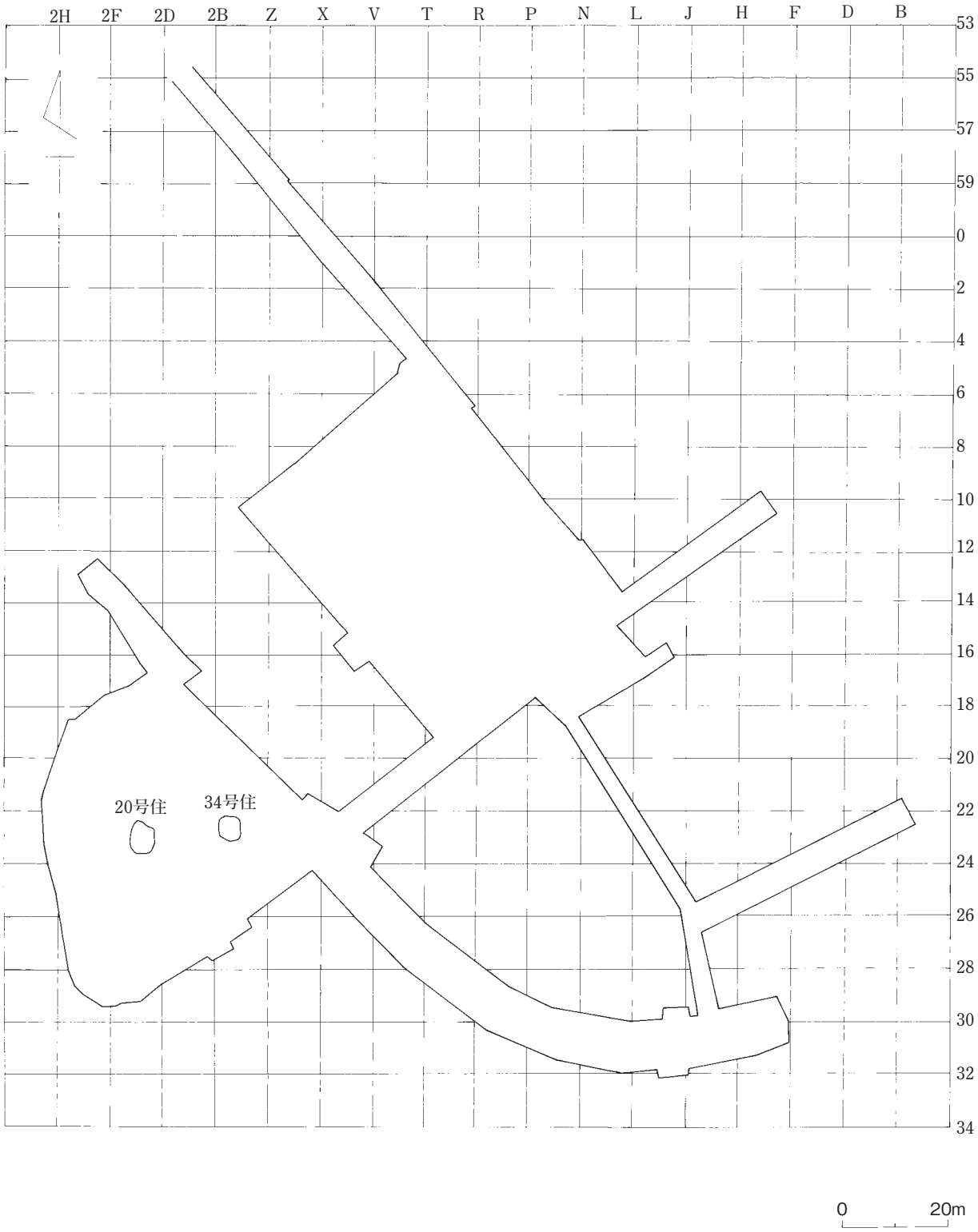
第 110 図　遺構外出土石器



第 111 図　遺構外出土石器



第 112 図　遺構外出土石器



第113図　古墳時代前期　遺構分布図

第２節　弥生時代後期から古墳時代前期

竪穴住居址２軒が段丘下段の平坦地で発見された。該期の遺構は上野原市で初例となる。遺物は土器・石器が遺構内で出土したが少数である。

竪穴住居址

20 号住居址（第 114 図、図版 27・61）

第Ⅰ次調査で検出し、旧名称はⅠ－２号住居址である。

２Ｄ－ 22 区・23 区に位置し、確認面は第Ⅶ層上面である。19 号住居址、２号・20 号土坑及び耕作溝で攪乱を受け、北壁と南壁を除霜作業時に掘り過ぎているが、平面は隅丸方形を基調にすると思われる。竪穴は長軸 550㎝・短軸 470㎝を測り、主軸は南北方向に揃う。壁高は 40㎝～ 45㎝である。遺存状況は悪い。硬化面や貼り床は認められなかった。覆土は暗褐色土を主体とする。

ピット 13 基が検出されたが、主柱穴は不明である。ピットは直径 25㎝～ 40㎝で、深さはＰ 12 が 90㎝と最も深く、次いでＰ３・Ｐ６が 38㎝～ 39㎝、他は 10㎝前後～ 26㎝を測る。炉は未確認だが、19 号住居と重複する範囲にあった可能性も考えられる。周溝はない。

遺物は南東隅の床面で壺口縁部（1）、高坏（2）が出土した。高坏は正位で、脚の一部を欠く。

時期は遺物から古墳時代前期と考えられる。

34 号住居址（第 115 ～ 116 図、図版 35・61）

第Ⅳ次調査で検出し、旧名称はⅠ－ 16 号住居址である。

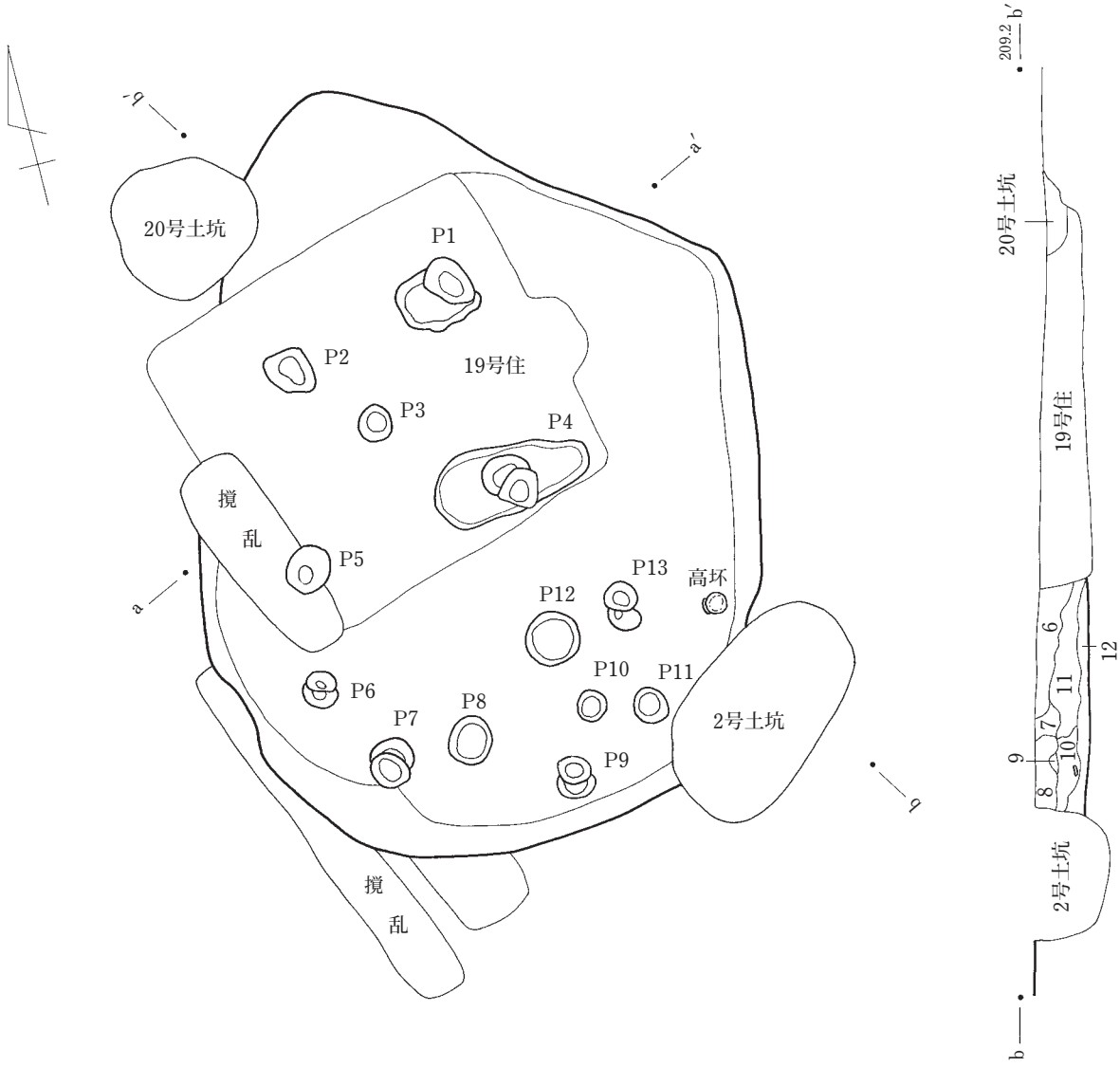
２Ａ－ 22 区に位置し、確認面は第Ⅶ層上面である。平面は隅丸方形で、長軸 470㎝・短軸 440㎝を測る。主軸は南北方向に揃い、壁高は 35㎝～ 40㎝である。一部を 43 号土坑で切られるが、遺存状況は良い。床は中央部に硬化面が認められ、壁際は南側の一部を除き軟弱であった。貼り床が北側の一部に認められた。覆土は暗褐色土が主体で、黒色スコリアを多く含む黒褐色土が壁際から複層して流入する。

ピット６基が検出された。Ｐ１・２・３・６は主柱穴と考えられ、直径はＰ１が 50㎝、他は 25㎝程度、深さは 60㎝～ 80㎝を測る。いずれも上部にひとまわり大きな掘り方が認められた。Ｐ５は直径 20㎝・深さ 30㎝で、斜位に掘り込まれ、梯子穴と考えられる。Ｐ４は平面が一辺 35㎝の不整方形で、深さ 14㎝を測る。周溝はない。

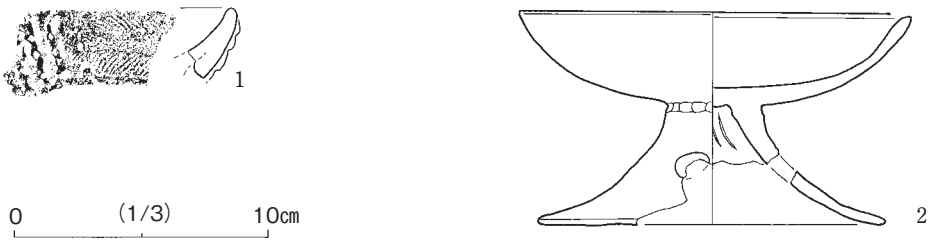
炉は平面不整円形の地床炉で、直径 48㎝・深さ 5㎝を測る。断面は皿状で、固く焼土化した火床面を持つ。炉内で礫２点が検出され、うち１点は細長く、底面が真っ赤に焼けていた。

遺物は小型鉢（1）・丸底壺（2）、石槌（3）、大小の台石（長さ 38㎝と 10㎝）があり、２が壁際の覆土、他は床面で出土した。また、床面で炭化種実を検出したが、遺存状況が悪く同定不能であった（付編１参照）。

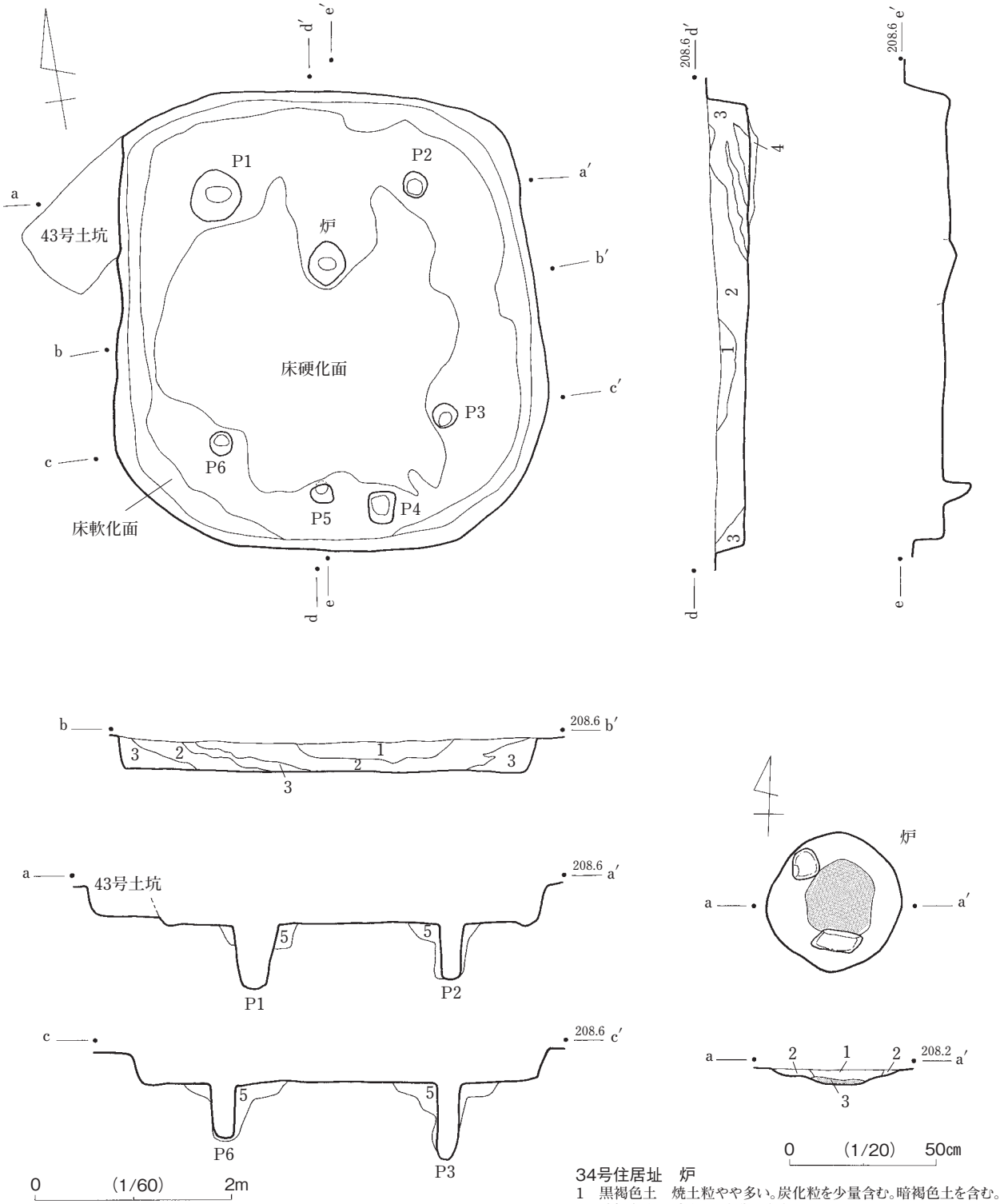
時期は遺物から古墳時代前期と考えられる。



20号住居址　覆土
1　暗褐色土
2　褐色土
3～4　暗褐色土
5　にぶい黄褐色土
6～7　暗褐色土　地山の褐色ローム粒多い。
8　暗褐色土
9　黒褐色土
10～11 褐色土
12　黒褐色土　地山の褐色ローム粒多い。



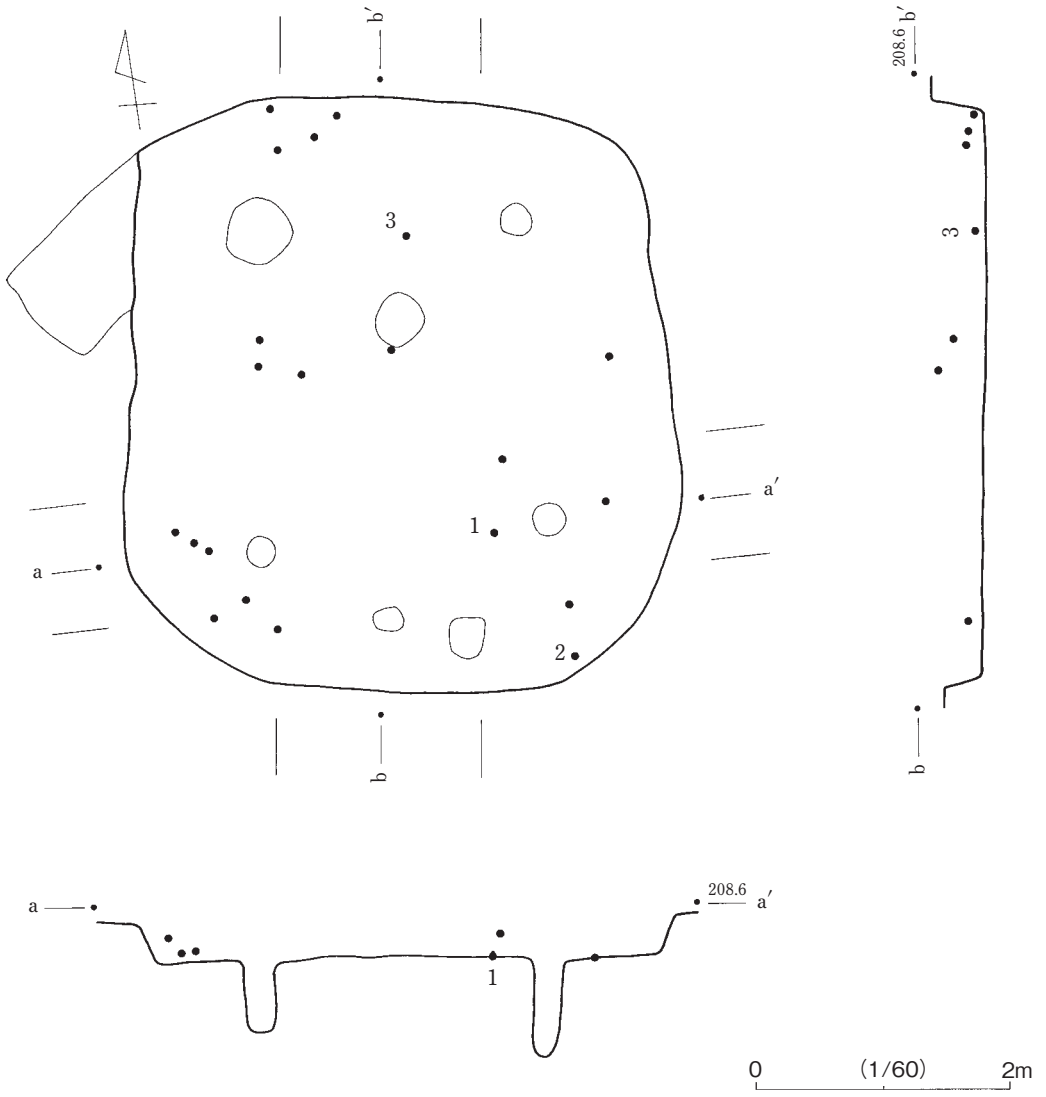
第 114 図　20 号住居址、出土遺物



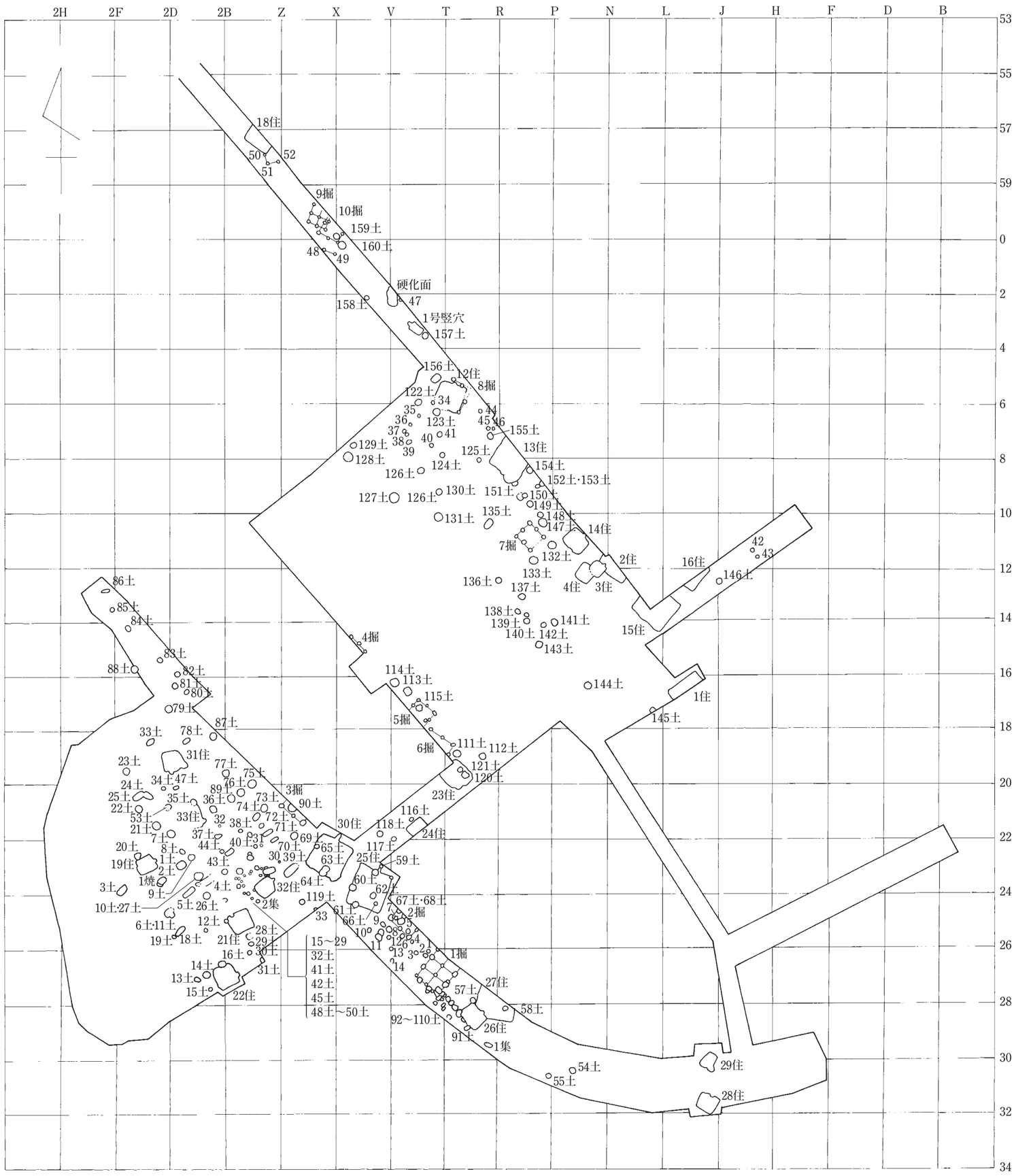
34号住居址　覆土
1　黒褐色土　粘性、締まり弱い。黒色スコリアやや多い。暗褐色土多い。
2　暗褐色土　粘性、締まり弱い。黒色スコリアやや多い。
3　黒褐色土　粘性、締まり弱い。黒色スコリアやや多い。暗褐色土含む。
4　暗褐色土　粘性、締まり弱い。黒色スコリア多い。地山の褐色ローム塊を含む。貼り床。
5　暗褐色土　締まりやや強い。地山の硬質ローム塊多い。掘り方覆土。

34号住居址　炉
1　黒褐色土　焼土粒やや多い。炭化粒を少量含む。暗褐色土を含む。
2　暗褐色土　焼土粒、炭化粒を含む。
3　焼土　硬質の焼土塊多い。

第115図　34号住居址、炉



第 116 図　34 号住居址　遺物分布図、出土遺物



住：竪穴住居址
掘：掘立柱建物址
土：土坑
焼：焼土址
集：土器集中部
数字のみはピット

第 117 図　古墳時代後期から奈良・平安時代遺構分布図

第３節　古墳時代後期から奈良・平安時代

竪穴住居址 24 軒、掘立柱建物址 10 棟、土坑 149 基、ピット 52 基、竪穴状遺構１基、焼土址１基、土器集中部２ヶ所、硬化面１ヶ所が発見された。遺構は調査区のほぼ全域に分布するが、段丘東側は希薄となる。遺物は土師器と須恵器が多く、一部に「大」の墨書土器や転用硯が見られる。他に灰釉陶器、緑釉陶器、石製品（砥石、台石、紡錘車、編物石、支脚）、金属製品（銅製飾金具、鉄製刀子･鉄鏃･釘･「山」焼印・鎖状の連結金具など）、鉄滓が遺構内外から出土した。なお、本書における甲斐型土器の年代観は『甲斐型土器－その編年と年代－』山梨県考古学協会 1992 に拠り、須恵器は湖西窯編年（後藤 1998）と南多摩窯跡群編年（服部他 2011）を援用した。

(1) 竪穴住居址

カマドを伴う、あるいはカマドを伴う可能性がある竪穴を住居として扱った。竪穴はすべて平面方形を基調とする。古墳時代後期から奈良時代と考えられる住居は北カマドで、竪穴規模は一辺の長さが６ｍ～７ｍに及ぶ大形から一辺３ｍ～５ｍ代の中形が多い。また、カマドを通る住居主軸が北北東から北東方向で概ね一致する。平安時代の住居は一辺４ｍ代の中形から２ｍ前後の小形まであり、カマド位置や主軸方位が不揃いとなる傾向が認められる。

１号住居址（第 118 ～ 121 図、図版 23・61）

第Ⅰ次調査で検出した。J･K－16 区に位置し、大半が未調査区にかかる。確認面は第Ⅸ層上面である。平面は方形と考えられ、北西壁は 620㎝を測る。主軸方位Ｎ－ 60°－Ｅ。壁高は 40㎝である。遺存状況は良い。全般に貼り床が施される。掘り方は竪穴中央部を島状に残して掘り込まれる。覆土は黒色スコリアを多く含む黒褐色土や暗褐色土が堆積する。

主柱穴２基を確認した。Ｐ１は長軸 110㎝、深さ 65㎝、Ｐ２は長軸 85㎝、深さ 60㎝を測る。周溝やカマドは未確認だが、Ｐ１東側の床面に焼土や白色粘土が堆積していた。

遺物は覆土下層から床面に分布する。土師器は半球形の坏（1）、長胴甕（2 ～ 4）、胴張甕（5）、高坏の脚部（6）、甕を転用した鉢（7）があり、すべて外面ヘラ削り調整である。この他、床面上でいわゆる編物石と呼ばれる細長い自然石（8 ～ 23）が西隅にまとまり、Ｐ１に接して大形の平石が出土した。

時期は遺物から古墳時代後期（7 世紀）と考えられる。

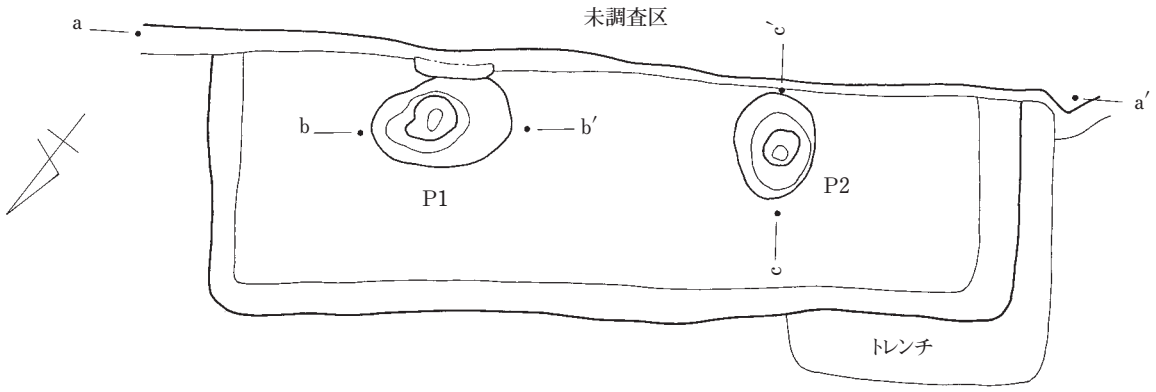
２号住居址（第 122 図、図版 23・61）

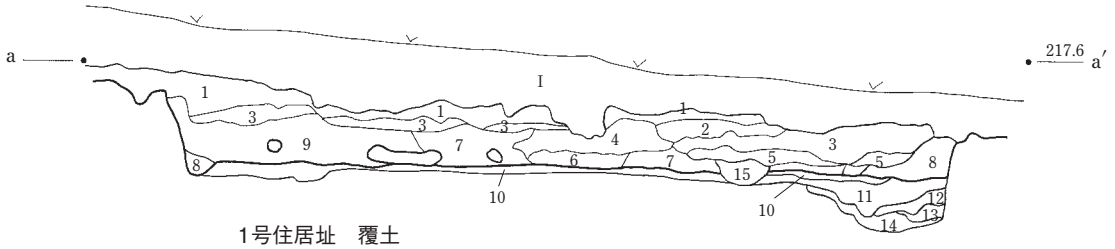
第Ⅱ次調査で検出した。Ｍ－ 11・12 区に位置する。大半が未調査区にかかり、西壁を３号住居址で切られる。確認面は第Ⅶ層上面である。平面は方形と考えられ、南壁 560㎝を測る。主軸方位Ｎ－ 35°－Ｅ。壁高は 40㎝～ 50㎝である。遺存状況は良い。床は第Ⅸ層中に構築され、掘り方は竪穴中央部を島状に残して掘り込まれる。覆土は記録がないため不明である。

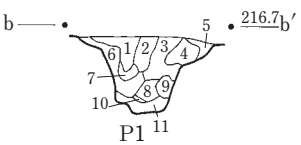
主柱穴３基（直径約 50㎝、深さ 31㎝～ 41㎝）を確認した。周溝やカマドは未確認である。

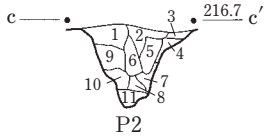
遺物は覆土から床面に分布し、土器に 14 号・16 号住居址と接合関係が認められる（5・6）。土師器は半球形の坏（1・2）、赤彩盤状坏（3）、胴部下位を横に削る長胴甕（4）がある。須恵器は擬宝珠状つまみでかえりが付く坏蓋（5）と口径約 13㎝の無台坏身（6）がある。須恵器は東海地方からの搬入品と思われ、湖西窯編年第Ⅲ期第３小期に相当する。この他、扁平な鉄製品の断片（7）がある。

時期は遺物から古墳時代後期（7 世紀後半）と考えられる。







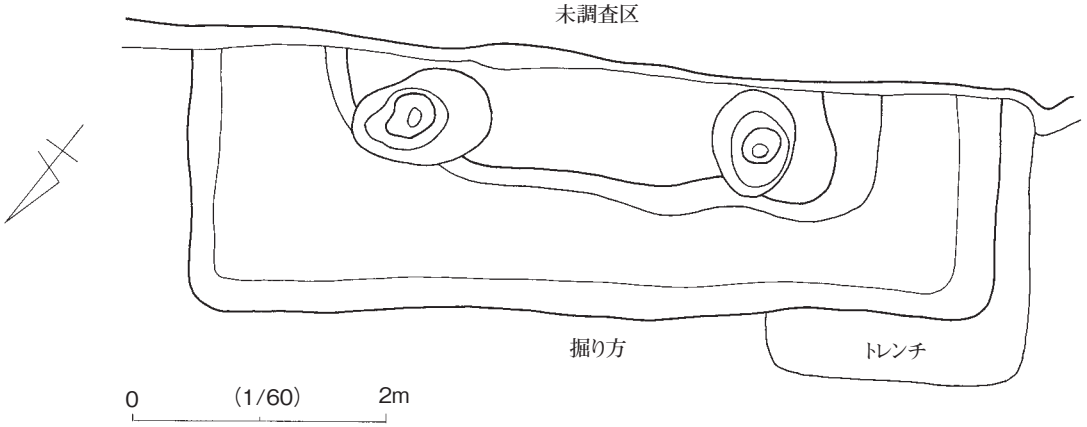


0 (1/60) 2m

1号住居址　覆土
1　黒褐色土　第3層に比べ色調明るく、黒色スコリア少ない。
2　暗褐色土　黒色スコリア、褐色土粒を含む。
3　黒褐色土　黒色スコリア多い。基本第Ⅳ層由来。
4～7　暗褐色土
8　暗褐色土　地山の軟質ローム粒を含む。黒色スコリアやや多い。
9　黒褐色土　黒色スコリア(5㎜以下)多い。焼土粒やや多い。
10　褐色土　締まり強い。貼り床。
11　暗褐色土　地山の硬質ローム塊(1㎝～10㎝)多い。
12　黒褐色土　地山の硬質ローム塊(1㎝～10㎝)多い。
13　暗褐色土　地山の硬質ローム塊(1㎝～10㎝)多い。
14　褐色土　地山ローム塊非常に多い。
15　攪乱

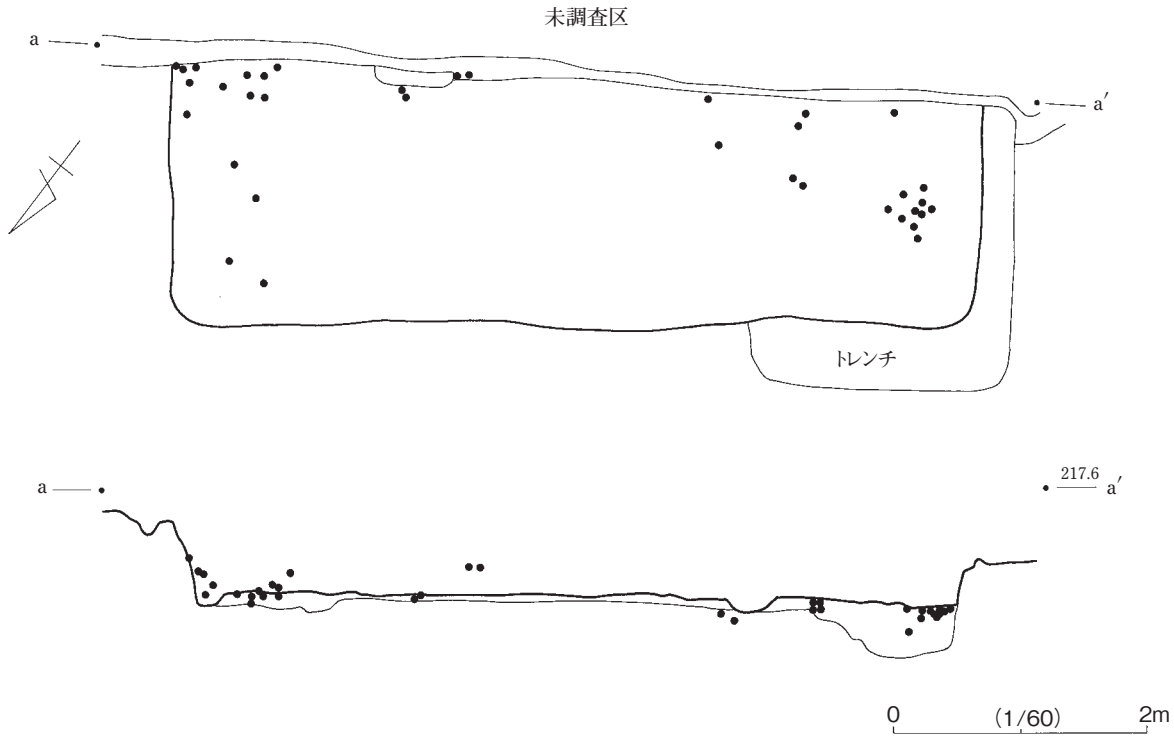
1号住居址　P1
1　黒褐色土
2　褐色土　地山ローム塊多い。
3　褐色土　地山ローム塊やや多い。
4　褐色土　地山ローム塊多い。
5　暗褐色土
6～8　褐色土
9　地山ローム塊
10　褐色土　地山ローム塊多い。
11　暗褐色土

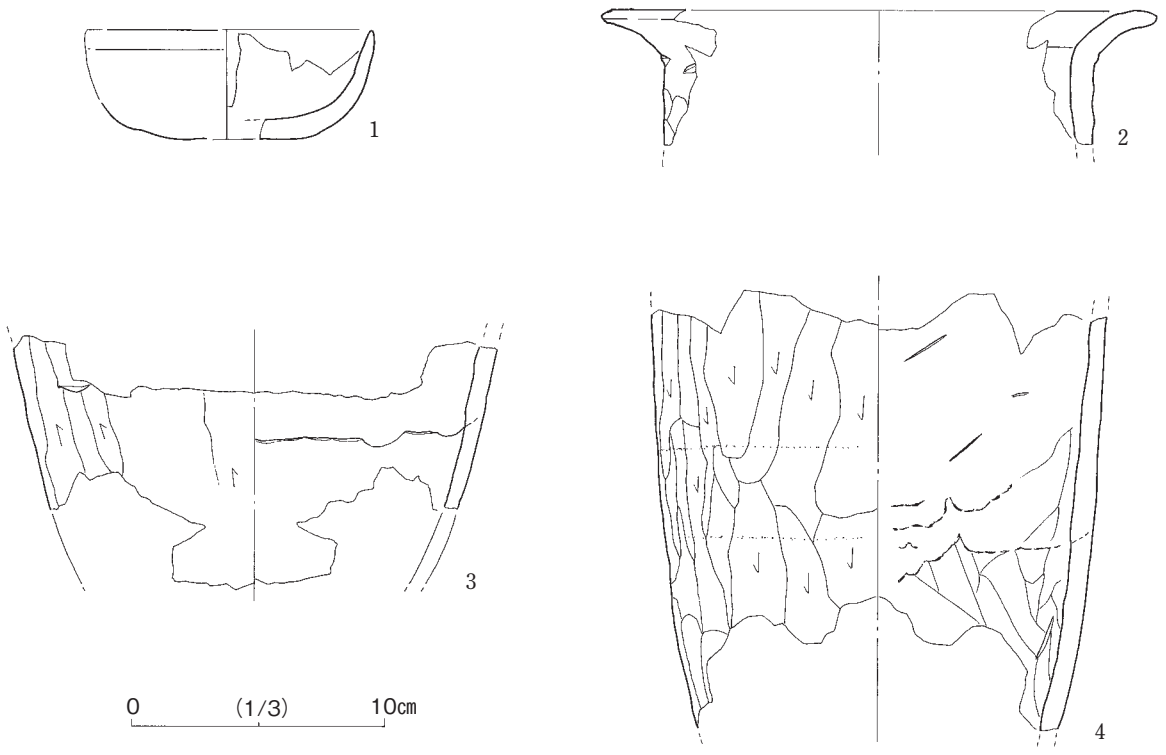
1号住居址　P2
1　褐色土　地山ローム塊(1㎝～2㎝)、炭化粒を含む。
2　暗褐色土　締まりやや強い。　地山ローム粒を含む。
3　黒褐色土　地山ローム粒多い。
4　褐色土　地山ローム粒多い。
5　褐色土　非常に締まり強い。橙色スコリアを極少量含む。
6　暗褐色土　締まり弱い。地山ローム粒を含む。
7　褐色土　地山ローム塊多い。
8～9　褐色土
10　褐色土　地山ローム塊多い。
11　褐色土



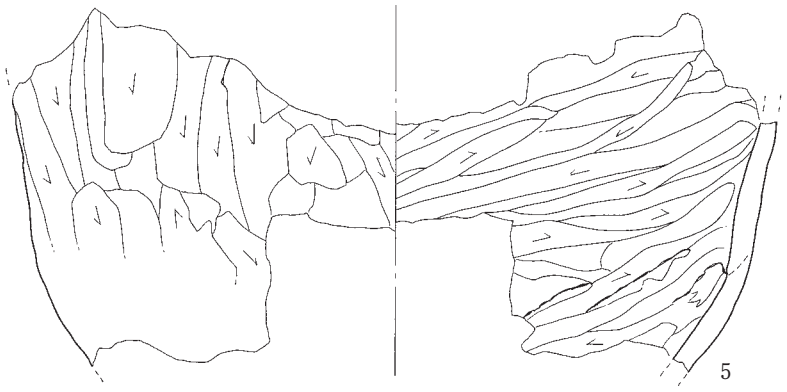
0 (1/60) 2m

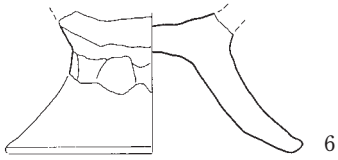
第 118 図　1 号住居址、掘り方

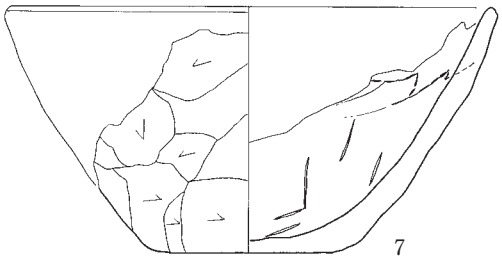


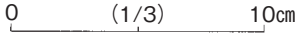


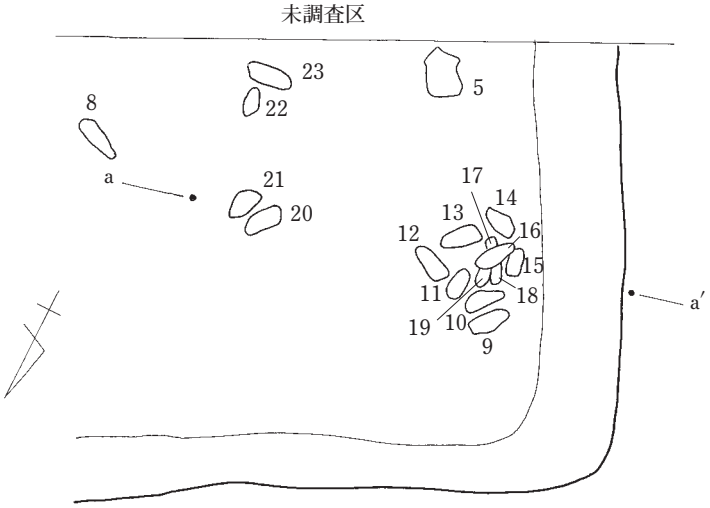
第 119 図　1 号住居址　遺物分布図、出土遺物（1）

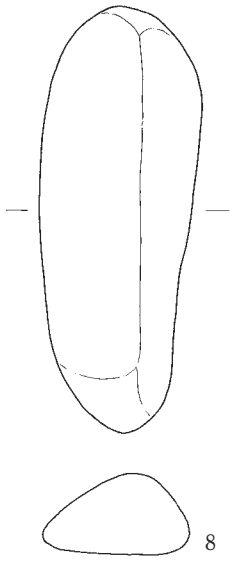


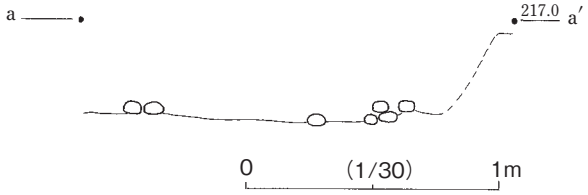


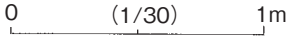


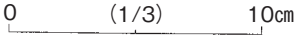




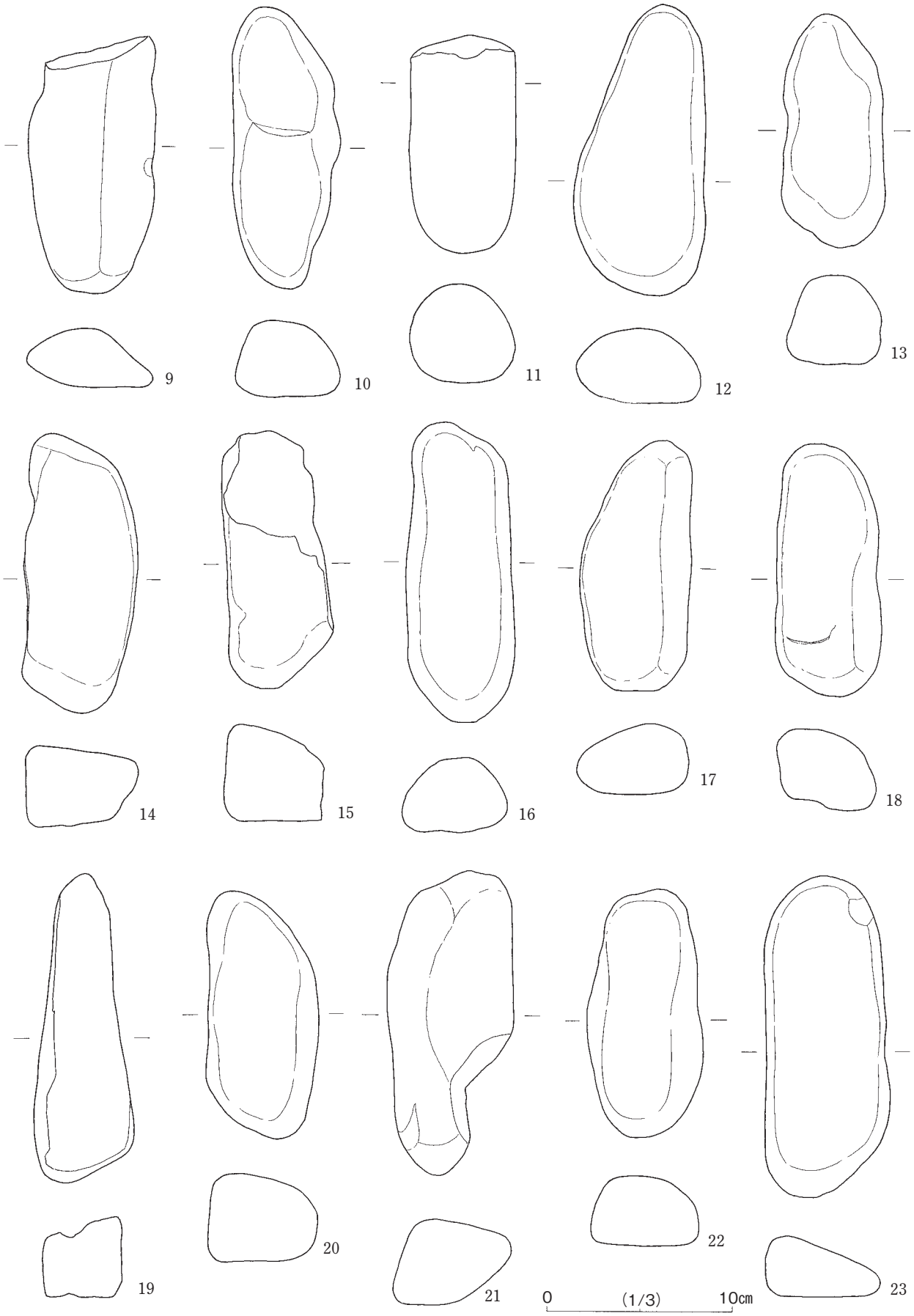




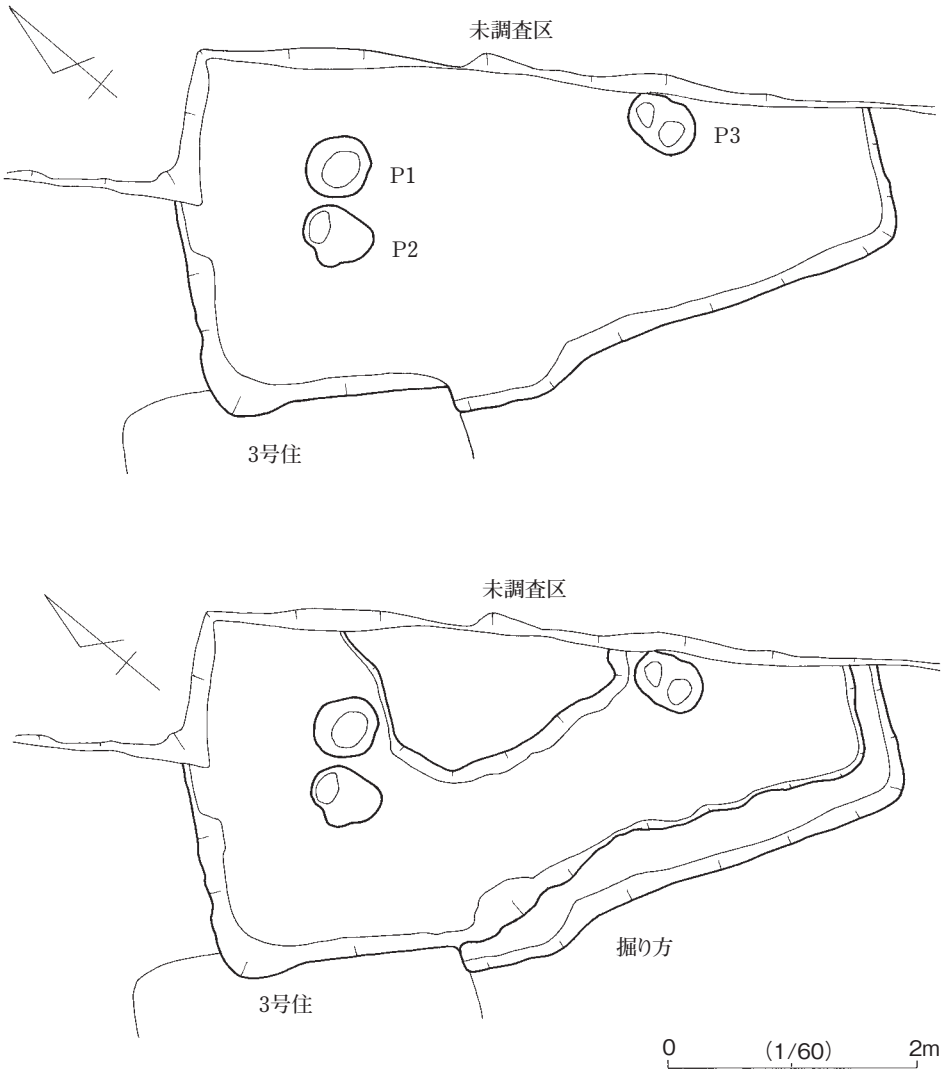




第 120 図　1 号住居址　遺物分布図、出土遺物（2）



第 121 図　1 号住居址　出土遺物（3）



第 122 図　２号住居址、掘り方、出土遺物

3 号住居址（第 123 ～ 124 図、図版 24・61）

第Ⅰ次調査で検出した。Ｎ－ 11・12 区に位置し、2 号・4 号住居址を切って構築される。確認面は第Ⅶ層上面である。平面は一辺 270㎝の方形で、カマドを持つ。主軸方位は 2 号・4 号住居址と同一で、壁高 50㎝である。遺存状況はやや悪い。床は第Ⅸ層中に構築され、貼り床は確認されなかった。覆土は暗褐色土が主体である。

柱穴はない。周溝はカマド部分と南西側の一部を除き検出した。西側の幅は 15㎝～ 20㎝、東側～南側の幅は最大 85㎝で、いずれも深さは 5㎝程度である。

カマドは北東壁にある。焚き口から煙道部先端まで 115㎝、両袖部の最大幅 100㎝、焚き口の幅は 20㎝である。袖部は白色粘土を含む暗褐色土が使われる。煙道部は壁を 40㎝掘り込み、火床部は床面を 15㎝掘り込む。カマド覆土中で炭化材（ヤマグワ）や炭化種実（コムギ）が検出された（付編 1 参照）。

遺物は覆土中で出土し、土器の一部に 2 号・4 号住居址と接合関係が認められる（4・5）。土師器は扁平に近い丸底坏（1）、内面に放射状暗文を施した坏（2・3）、外面ヘラ削りの鉢（4・5）、ナデ調整の長胴甕（6）がある。4・5 は 7 世紀代に位置付けられ、覆土中の混入であろう。石器は砥石（7）や礫全面に敲打痕が残る石槌（8）がある。

時期は遺物から奈良時代（8 世紀前半から中頃）と考えられる。

4 号住居址（第 125 図、図版 24）

第Ⅰ次調査で検出した。Ｎ－ 12 区に位置し、3 号住居址に切られる。確認面は第Ⅶ層上面である。平面は一辺 320㎝の方形である。主軸方位は 2 号・3 号住居址と同一で、壁は最高 50㎝を測る。南西側は確認が遅れて床面近くまで掘り過ぎ、遺存状況は悪い。床は第Ⅸ層中に構築され、貼り床は確認されなかった。覆土は暗褐色土が主体である。

周溝状の掘り込みが北西壁から南西壁の一部に沿って検出され、幅 50㎝前後・深さ 5㎝を測る。柱穴やカマドは未確認だが、3 号住居址と重なる北東側の床面に最大幅 100㎝・深さ 10㎝程度の掘り込みがあり、これがカマドの掘り方であった可能性が考えられる。

遺物は覆土中の出土である。土師器の稜が付く丸底坏（1）、赤彩盤状坏（2）は 8 世紀前半、ヘラ磨きの胴張甕（3）は 7 世紀代のものであろう。

時期は奈良時代（8 世紀前半）で捉えられる。

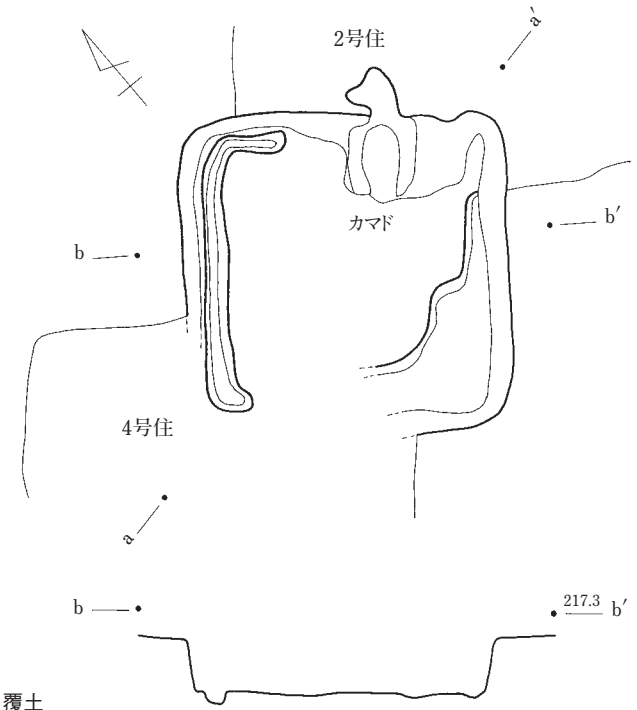
12 号住居址（第 126 ～ 128 図、図版 24・62）

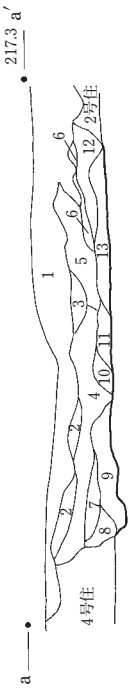
第Ⅱ次調査で検出した。Ｓ・Ｔ－ 5 区に位置し、8 号掘立柱建物址と重複する。確認面は第Ⅶ層上面である。平面は一辺 500㎝の方形で、カマドを持つ。主軸方位Ｎ－ 22°－Ｅ。壁高は 50㎝～ 60㎝である。他の遺構や耕作溝で攪乱を受け、遺存状況はやや悪い。床は第Ⅸ層中に構築され、全般に貼り床が施される。覆土は暗褐色土が主体である。

主柱穴は 4 基（直径 60㎝～ 70㎝、深さ 30㎝～ 55㎝）で、周溝はない。カマドは北壁中央にある。焚き口から煙道部先端まで 130㎝を測る。煙道部は壁を 50㎝掘り込み、火床部は床面を 10㎝掘り込んで構築される。袖部は締まりの強い褐色土が使われる。

遺物は覆土中に分布し、土師器の丸底坏（1・2）、ヘラ削りの甕（3・4）がある。打製石斧（5）や端部に加工痕を持つ石器（6）は縄文時代の混入と思われる。

時期は遺物から古墳時代後期（7 世紀）と考えられる。

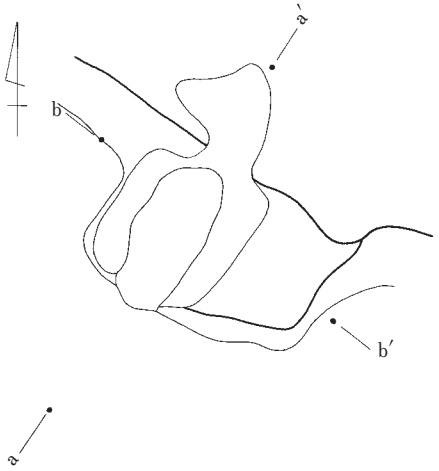


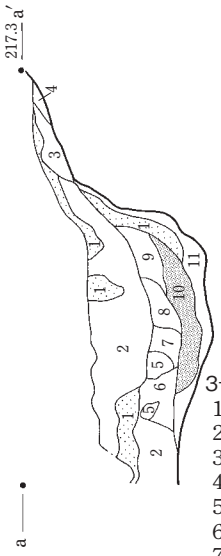


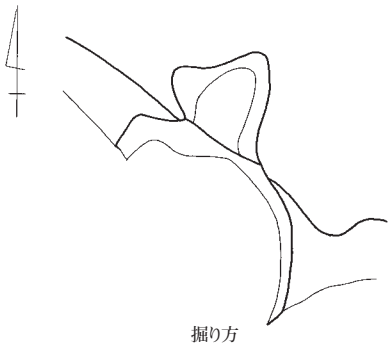
0 (1/60) 2m

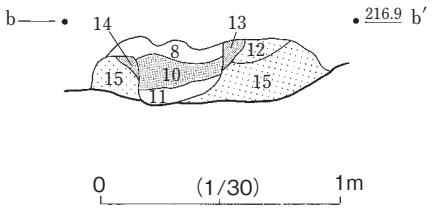
3号住居址　覆土

1　暗褐色土　焼土粒、白色土粒(0.8㎜以下)極少量含む。黒色スコリアやや多い。
2　暗褐色土　焼土粒、炭化粒、黄白色土粒、橙色スコリアやや多い。
3　暗褐色土　白色土粒･塊(0.1㎜～3㎝)やや多い。焼土粒、炭化粒、黒色･橙色スコリア、地山ローム粒を含む。
4　暗褐色土　黒色味強い。焼土粒、炭化粒、黄白色土粒、橙色スコリア、地山ローム粒･塊(2㎜～1.5㎝)やや多い。
5　暗褐色土　第11層に似るが、焼土粒(0.1㎜～0.8㎜)やや多く、焼土塊(3㎝)も含む。細粒の白色土粒、地山ローム塊、黒色スコリアを含む。
6　黒褐色土　黒色スコリア多い。基本第Ⅳ層由来。
7　暗褐色土　褐色味強い。地山ローム塊多い。
8　暗褐色土　地山ローム塊、黒色スコリアやや多い。
9　褐色土　地山ローム塊(1㎜～5㎝)多い。暗褐色土塊(0.5㎝～1.5㎝)、橙色スコリアやや多い。
10　褐色土
11　暗褐色土　白色土(0.1㎝～3㎝)やや多い。
12　暗褐色土　黒色スコリア、地山ローム塊を含む。焼土粒少量。
13　暗褐色土　焼土粒、白色土多い。







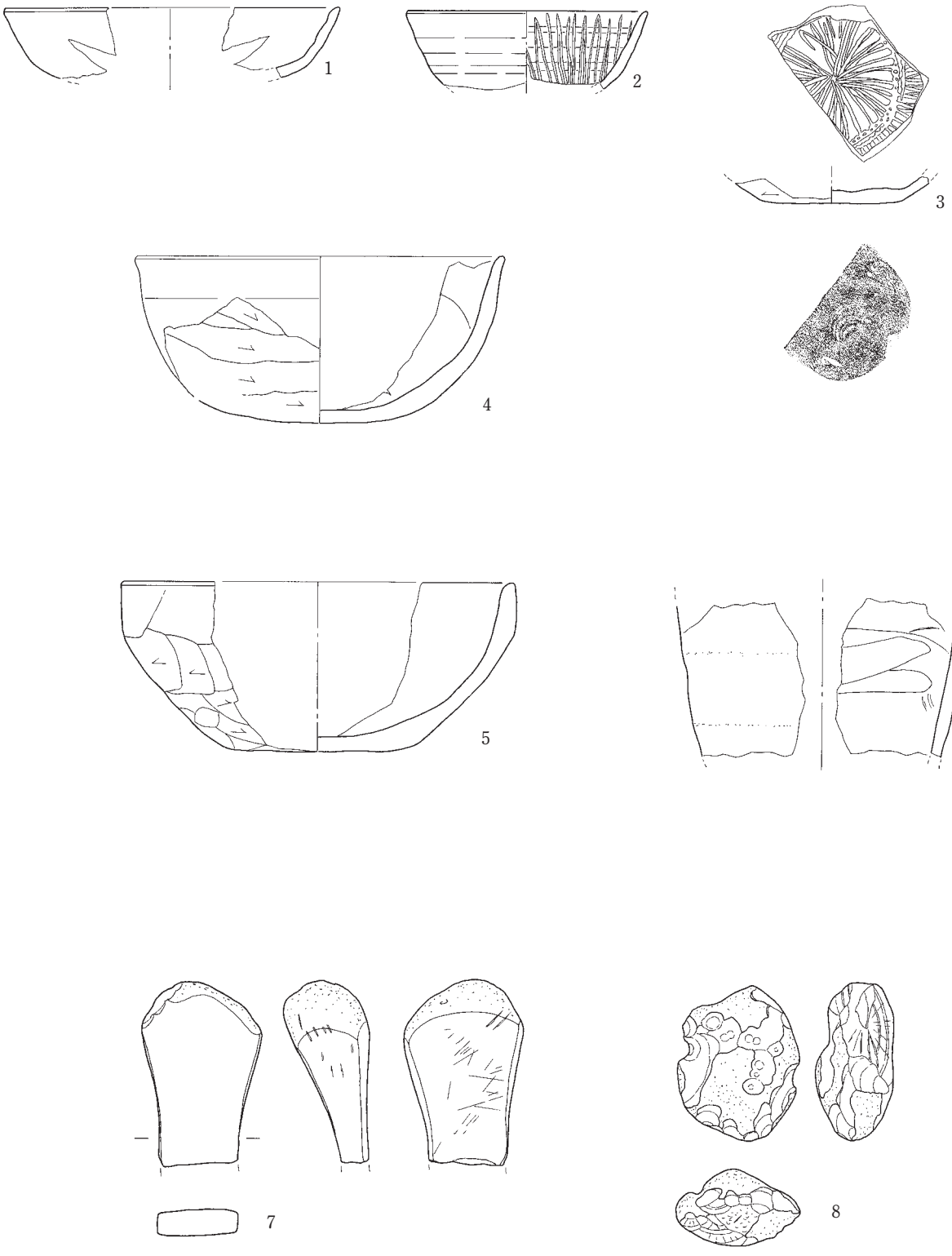


0 (1/30) 1m

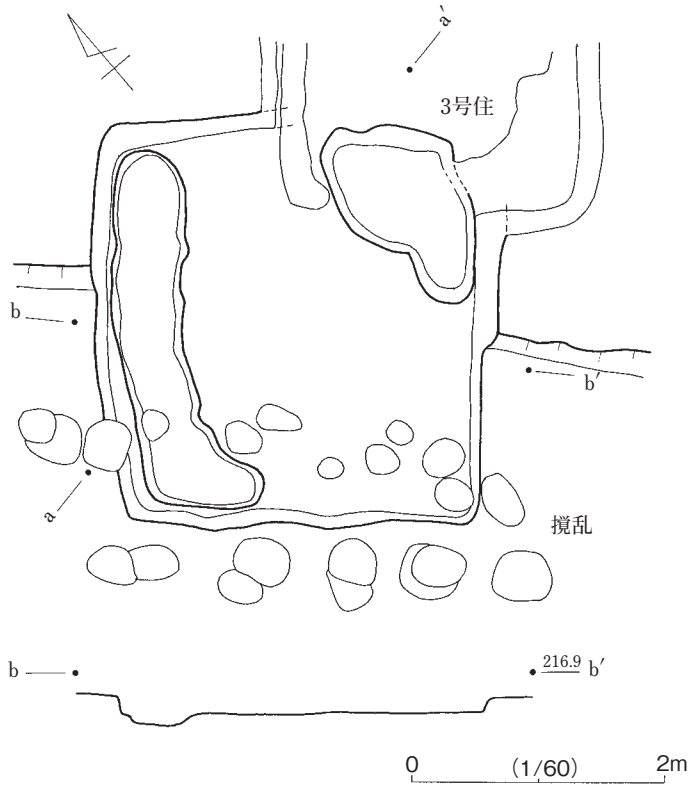
3号住居址　カマド

1　白色粘土を多量に含む。
2　暗褐色土　住居覆土第5層に相当。
3　白色粘土塊
4　暗褐色土
5　焼土塊
6　暗褐色土
7　暗褐色土　焼土塊多い。焼土粒、炭化粒、黄白色土粒を含む。
8　暗褐色土　焼土塊多い。焼土粒、炭化粒、黄白色土粒を含む。
9　暗褐色土　焼土粒、黄白色土粒を含む。
10　橙赤色土　火床の焼土層。焼土塊(5㎝以下)炭化材(1㎝以下)多い。
11　暗褐色土　締まりやや強い。焼土粒を少量含む。
12　暗褐色土　黄白色土、焼土粒多い。炭化粒を含む。袖部。
13　焼土塊　第12層が被熱、焼土化。
14　焼土塊　第15層が被熱、焼土化。
15　暗褐色土　黒色スコリア、白色土粒を含む。袖部。

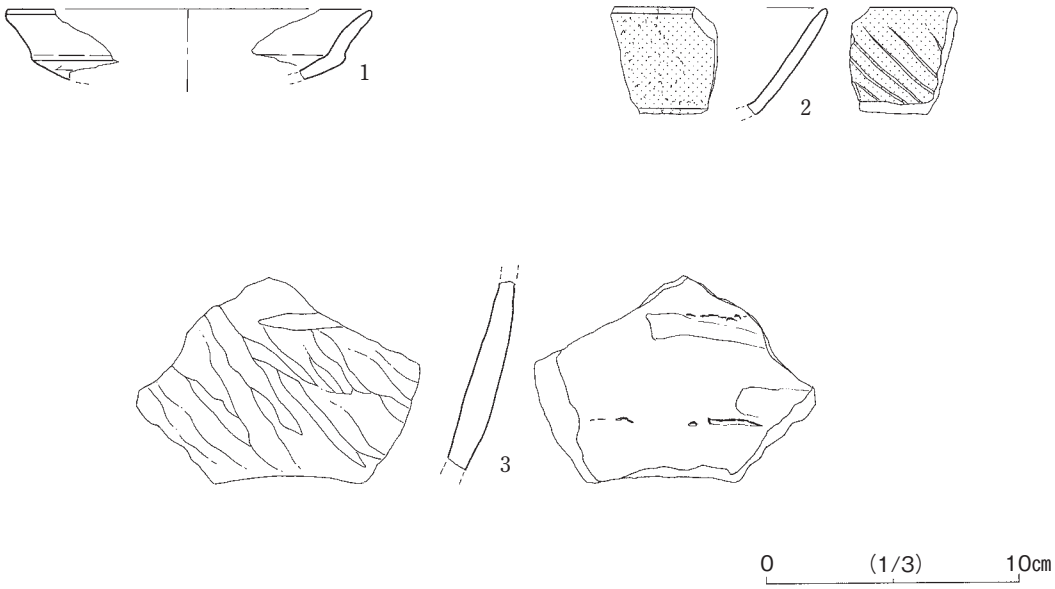
第123図　3号住居址、カマド



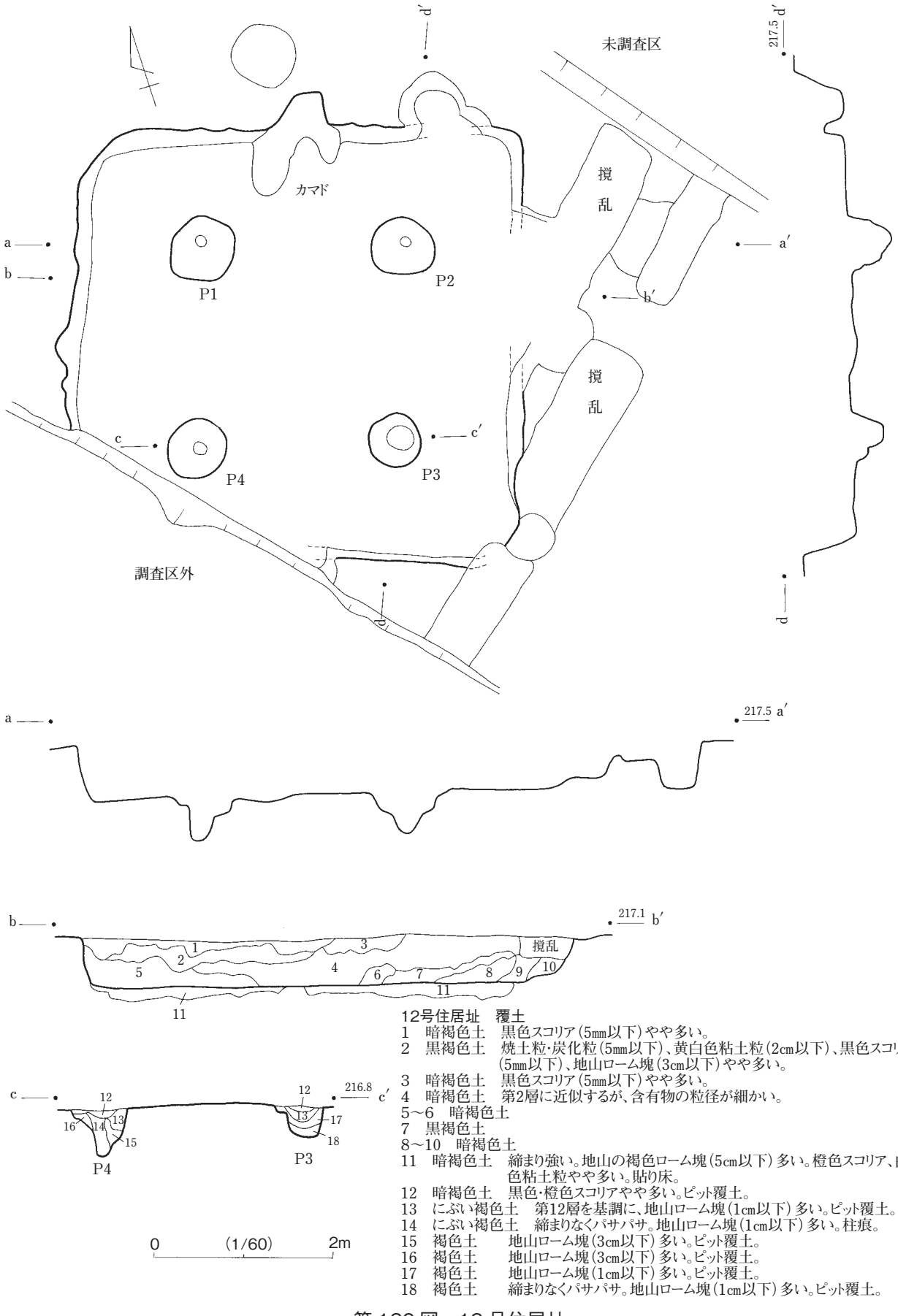
第 124 図　3 号住居址　出土遺物



4号住居址　覆土
1　褐色土
2　暗褐色土　黒色スコリア、地山ローム粒(1.5㎝以下)を含む。
3　暗褐色土
4　暗褐色土
5　暗褐色土　黒褐色土、地山ロームを斑状に多く含む。
6　褐色土　　ローム質で、焼土粒を少量含む。
7　暗褐色土　黄褐色土粒多い。周溝覆土。



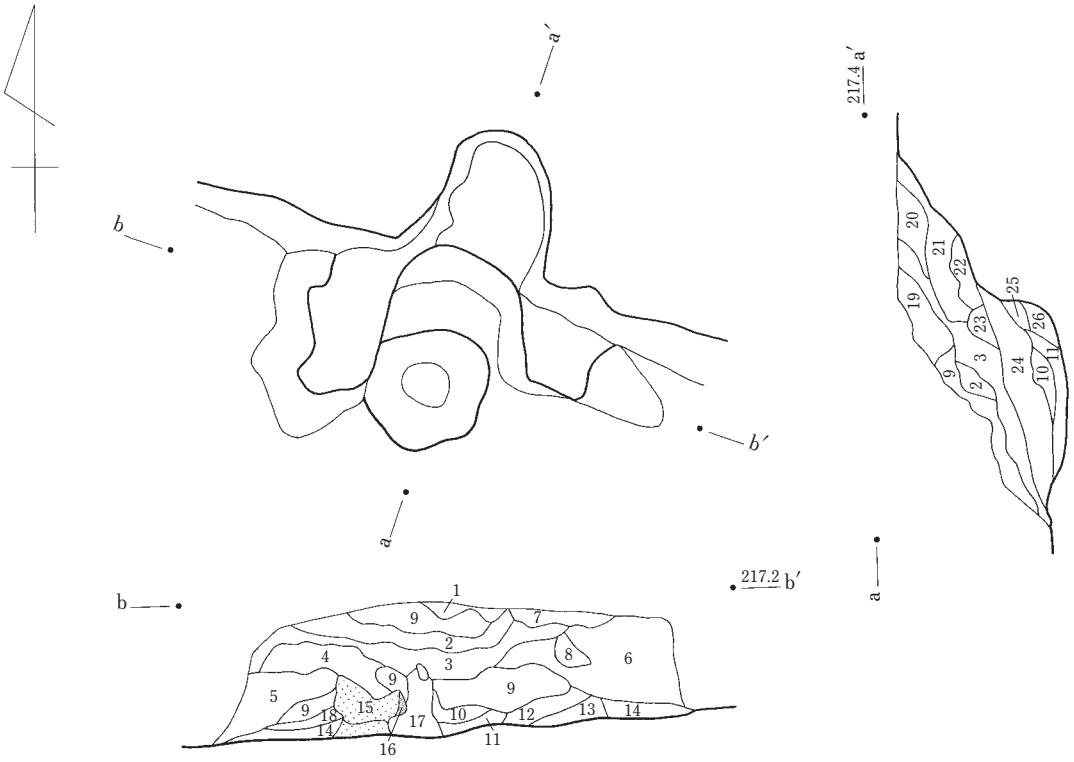
第 125 図　4 号住居址、出土遺物



12号住居址　覆土

1　暗褐色土　黒色スコリア(5㎜以下)やや多い。
2　黒褐色土　焼土粒･炭化粒(5㎜以下)、黄白色粘土粒(2㎝以下)、黒色スコリア(5㎜以下)、地山ローム塊(3㎝以下)やや多い。
3　暗褐色土　黒色スコリア(5㎜以下)やや多い。
4　暗褐色土　第2層に近似するが、含有物の粒径が細かい。
5～6　暗褐色土
7　黒褐色土
8～10　暗褐色土
11　暗褐色土　締まり強い。地山の褐色ローム塊(5㎝以下)多い。橙色スコリア、白色粘土粒やや多い。貼り床。
12　暗褐色土　黒色･橙色スコリアやや多い。ピット覆土。
13　にぶい褐色土　第12層を基調に、地山ローム塊(1㎝以下)多い。ピット覆土。
14　にぶい褐色土　締まりなくパサパサ。地山ローム塊(1㎝以下)多い。柱痕。
15　褐色土　地山ローム塊(3㎝以下)多い。ピット覆土。
16　褐色土　地山ローム塊(3㎝以下)多い。ピット覆土。
17　褐色土　地山ローム塊(1㎝以下)多い。ピット覆土。
18　褐色土　締まりなくパサパサ。地山ローム塊(1㎝以下)多い。ピット覆土。

第126図　12号住居址

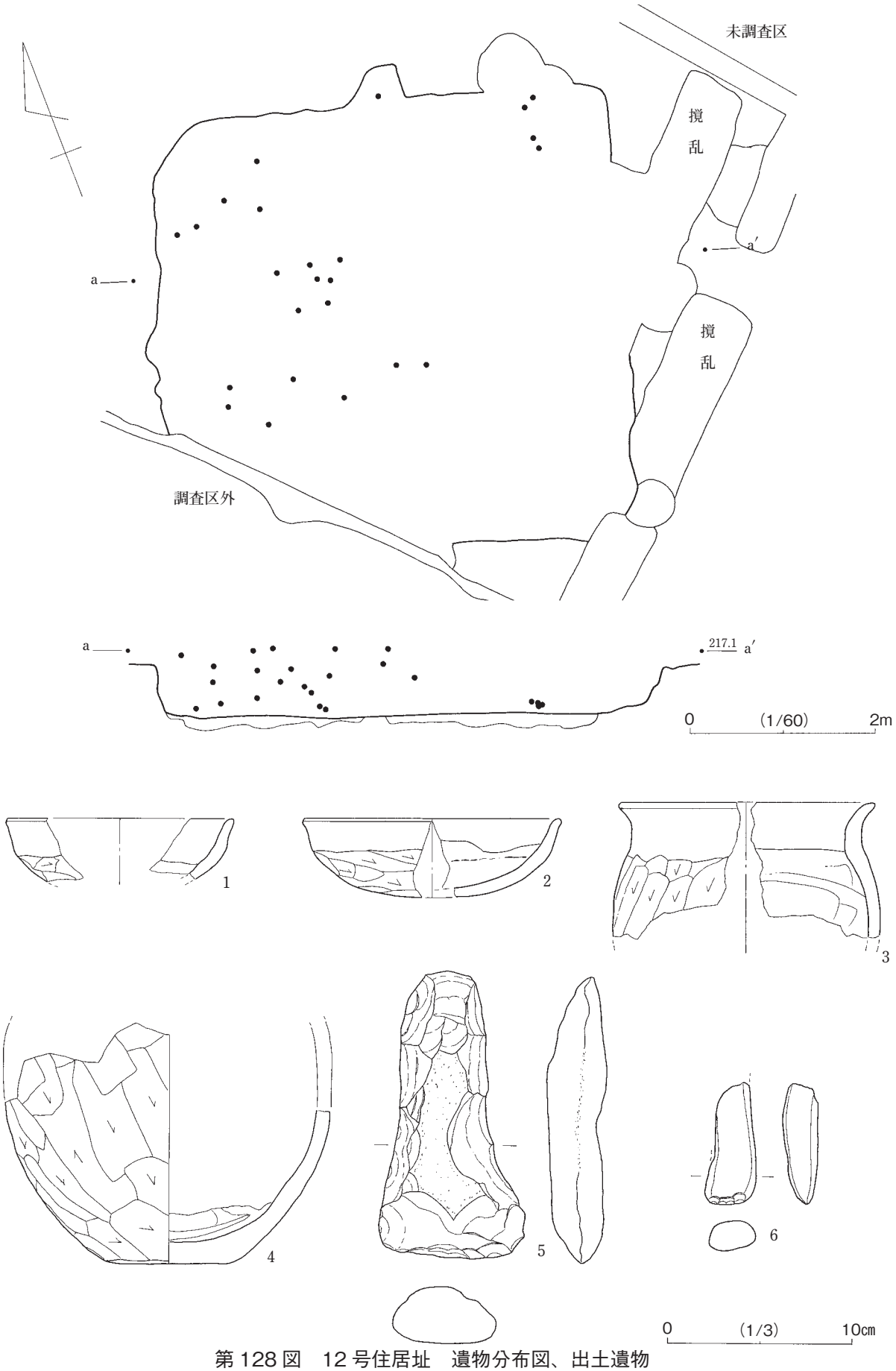


0 (1/30) 1m

12号住居址　カマド

1　暗褐色土　黄色土塊(1㎜～1㎝)多い。黒色スコリア(5㎜以下)やや多い。焼土粒、炭化粒、橙色スコリアを少量含む。
2　黒褐色土　黄色土塊(1㎝以下)、黒色スコリア(5㎜以下)多い。焼土粒・塊(5㎜以下)を少量含む。
3　暗褐色土　黄色土粒・塊(5㎜以下)、黒色スコリアやや多い。
4　暗褐色土　黄色土塊(1㎝以下)多い。黒色スコリアやや多い。
5　暗褐色土　黄色土粒(1㎜)を少量含む。黒色スコリアやや多い。
6　暗褐色土　黄色土粒・塊(1㎝以下)を少量含む。黒色スコリアやや多い。
7　にぶい黄褐色土　暗褐色土中に黄色土粒・塊(1㎝以下)が多く混じる。焼土粒(5㎜以下)、黒色スコリアやや多い。
8　にぶい黄褐色土
9　黄色土塊
10　にぶい黄褐色土　焼土塊(1㎝以下)やや多い。
11　にぶい黄褐色土　黒色味あり。焼土塊(1㎝以下)・黄色土塊多い。
12　暗褐色土　焼土塊(1㎝以下)・黄色土塊多い。
13　暗褐色土　締まりやや強い。
14　暗褐色土　締まりやや強い。地山の褐色ローム塊(1㎝以下)やや多い。
15　褐色土　締まり強い。
16　焼土塊　第15層が被熱、焼土化。
17　暗褐色土　焼土塊、黄色土塊(1㎝以下)多い。
18　にぶい黄褐色土　暗褐色土、黄色土粒、焼土粒(5㎜～1㎝)多い。
19　にぶい黄褐色土　黄色土粒・塊(2㎝以下)、焼土粒多い。
20　暗褐色土　黄色土粒・塊(1㎝以下)多い。焼土粒を少量含む。
21　黄色土と暗褐色土の混合層。
22　にぶい黄褐色土　焼土粒、暗褐色土を含む。
23　暗褐色土　黄色土粒・塊(1㎝以下)、焼土粒を少量含む。
24　にぶい褐色土　黄色土中に焼土粒(1㎝以下)多く含む。
25　暗褐色土　焼土粒(2㎜以下)、黄色土粒多い。
26　暗褐色土　黒色味強い。焼土塊(3㎝以下)、黄色土塊多い。

第127図　12号住居址　カマド



第 128 図　12 号住居址　遺物分布図、出土遺物

13 号住居址（第 129 ～ 134 図、図版 25・62）

第Ⅱ次調査で検出した。Q・R － 7・8 区に位置し、北東側が未調査区にかかる。151 号土坑と重複する。確認面は第Ⅶ層上面だが、掘り込み面は土層観察から第Ⅳ層上面である。平面は方形と考えられ、南西壁は 600㎝を測る。主軸方位Ｎ － 40° － Ｅ。壁は検出高 50㎝～ 60㎝だが、土層観察から最高 90㎝を測る。遺存状況は良い。床は地山ローム層（第Ⅸ層）に構築され、硬化面が竪穴中央部から南西壁際に広がる。貼り床は溝状の掘り方範囲に施される。覆土は暗褐色土が主体で、上面を黒褐色土が覆う。

床面上に焼土や炭化材が散在し、とくに茅状炭化材が南西壁際直下の床面で 70㎝× 40㎝の範囲に集中していた。この炭化材は一方向に揃って薄く広がり、上面に交差する形で同様の炭化材が散在する。炭化材はイネ科タケ亜科に同定され、放射線炭素年代測定に暦年較正した結果で cal ＡＤ 596 ～ 658 となった（付編 1 参照）。

主柱穴と考えられるピットは 2 基で、Ｐ 1 は長軸 120㎝・短軸 75㎝・深さ 50㎝、Ｐ 2 は長軸 110㎝・短軸 50㎝・深さ 45㎝である。いずれも柱痕と考えられる土層を確認し、幅はＰ 1 が 10㎝、Ｐ 2 が 30㎝である。周溝やカマドは未確認だが、北東側の床面で黄白色粘土が検出されたことから未調査部分にカマドがあるものと思われる。

遺物は覆土中に多量に分布し、竪穴の埋没過程で遺棄されたものと考えられる。床面遺物はない。

土師器は稜が付く丸底坏（1・2）、平底に近い坏（3・4）、内外面ヘラ磨きの赤彩坏（5）、内外面に赤彩を施した盤状坏（6 ～ 16）、ヘラ削り調整の甕（22 ～ 33）、ナデ調整の甕（34・35）がある。

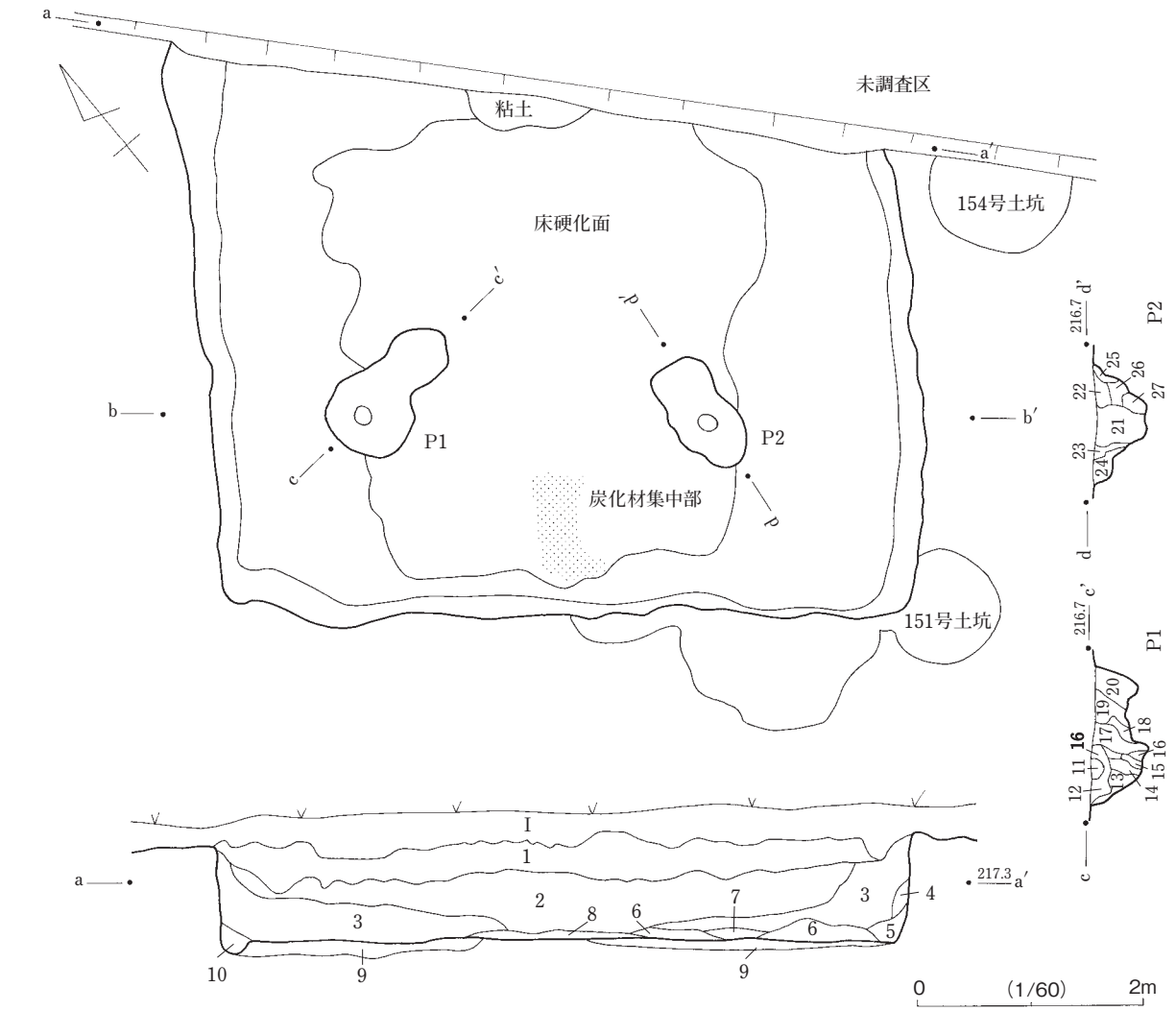
1・2 は器高が低く、後述の赤彩盤状坏に伴うものであろう。4 は相模型坏で、大きい口径（15㎝）や体部削り幅が狭い特徴から成立期（8 世紀第 2 四半期）のものに比定される。6 ～ 16 は南武蔵地域を主に分布する赤彩盤状坏で、口唇部内面の沈線や底部手持ちヘラ削り整形、内面に暗文を施すものが含まれる等の特徴がある。盤状坏の口径は 15㎝台と 13㎝台に大別され、時期は概ね先の相模型坏と同じか、大型のものは若干古く位置付けられる。これら奈良時代の土器の他、体部ヘラ削りによる半球形の坏や口縁が外反する丸底坏など古墳時代後期に位置付けられる細片も出土している。

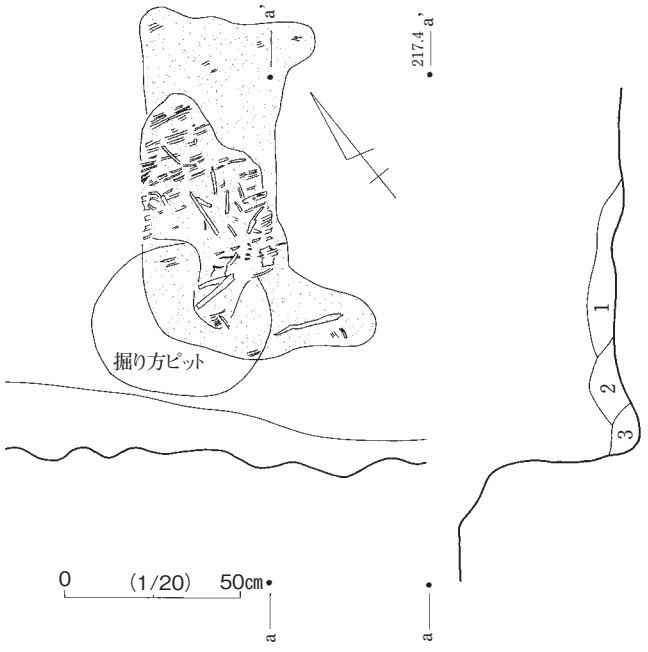
土師器甕は多数の破片が出土した。ヘラ削り調整の甕では比較的硬質で 8 世紀代に位置付けられるものが多いようだが、胴張甕（31・32）や小型甕（33）は古墳時代後期のものであろう。ナデ調整の甕では相模型や堀之内原タイプと呼ばれる在地土器に相当する甕（34・35）が出土している。

須恵器は坏蓋（17・18）、坏（20）、底部が突出する高台付坏（19・21）があり、いずれも湖西窯編年第Ⅳ期第 1 小期に相当する。

鉄製品では覆土中の土器に混じって鏃身五角形の鉄鏃（37）が出土した。石製品ではいわゆる編物石が覆土中に広く散在していた。石斧未成品（36）は縄文時代の混入遺物であろう。

遺物は古墳時代後期から奈良時代まで幅広く出土しているが、主体を占める 8 世紀代の土器群は覆土中にまとめて遺棄されたものと考えられる。一辺 6 ｍを超える他の大形住居址が古墳時代後期に位置付けられることを考慮して、本住居の時期を古墳時代後期（7 世紀）に推定したい。この年代観は炭化材の年代測定値と矛盾しない。

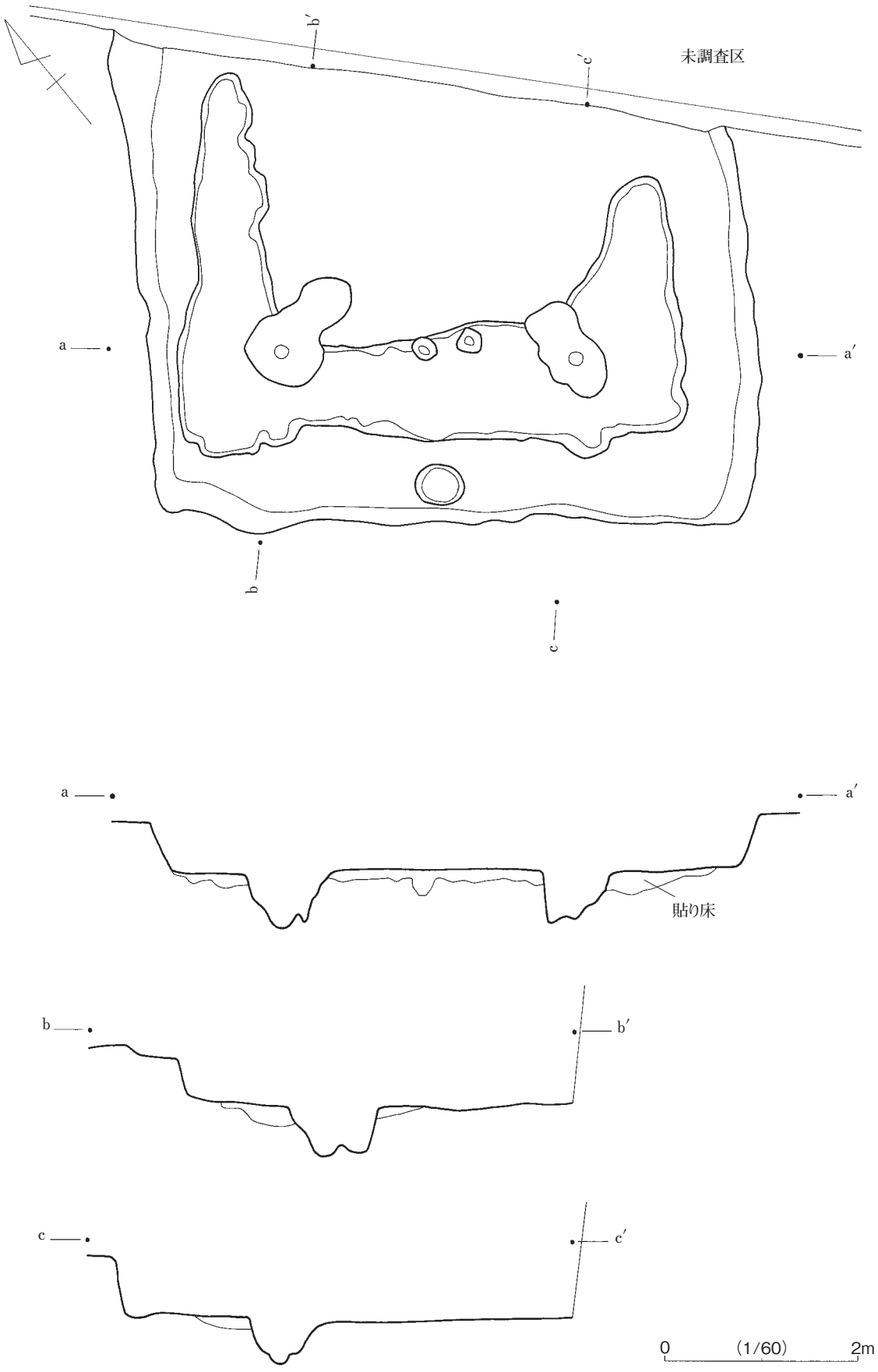




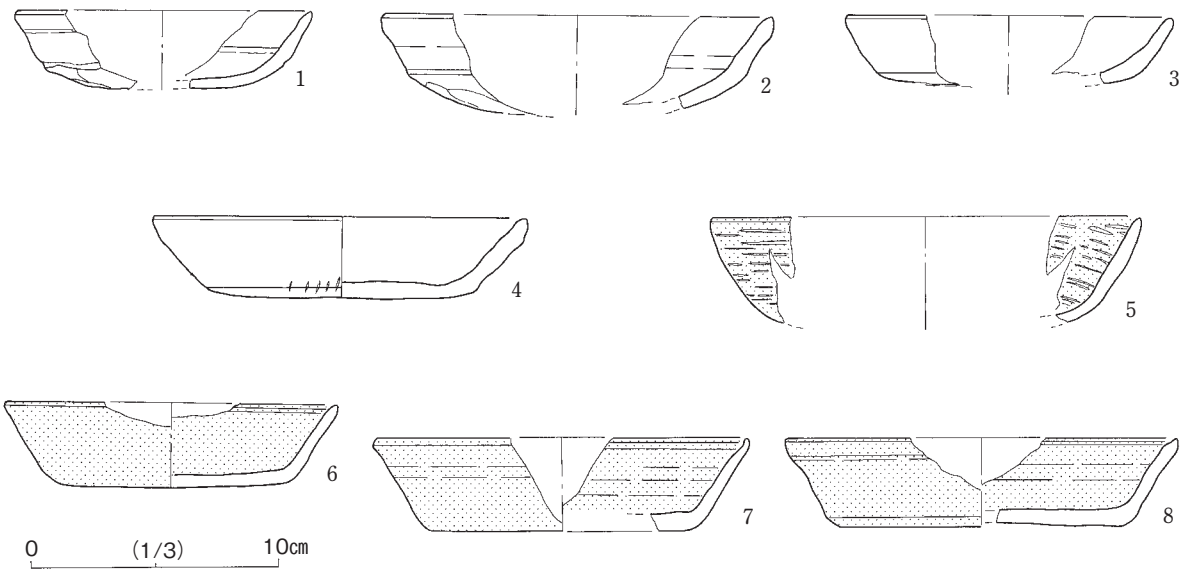
13号住居址　覆土
1　黒褐色土　黒色スコリアやや多い。焼土粒・炭化粒(3㎜以下)、橙色スコリア、地山の褐色ローム塊(2㎝以下)を少量含む。
2　暗褐色土　焼土粒・炭化粒(5㎜以下)やや多い。黒色・橙色スコリアを少量含む。
3　暗褐色土　焼土粒・炭化粒(5㎜以下)、黒褐色土(1㎜～5㎜)を少量含む。黒色・橙色スコリアやや多い。
4　にぶい褐色土　黒色・橙色スコリアを少量含む。
5　暗褐色土　焼土粒・炭化粒(2㎜以下)、黒褐色土(1㎜～5㎜)を少量含む。黒色・橙色スコリアやや多い。
6　暗褐色土　第3層に似るが、焼土粒・炭化粒、橙色スコリア多い。
7　黒褐色土　褐色土(5㎜以下)、黒色・橙色スコリアやや多い。炭化粒を少量含む。
8　暗褐色土　黄白色土粒、焼土粒やや多い。
9　にぶい褐色土　締まり強い。暗褐色土と地山ローム塊の混合層。貼り床
10　暗褐色土　黒色スコリアやや多い。地山ローム粒多い。
11　暗褐色土　締まりなくパサパサ。黒色スコリア(5㎜以下)やや多い。地山の硬質ローム塊(5㎜以下)を少量含む。P1覆土
12　にぶい黄褐色土　地山ローム塊(3㎝以下)非常に多い。P1覆土
13　暗褐色土　締まりやや強い。地山ローム塊(5㎜以下)を少量含む。P1覆土
14　暗褐色土　締まりなくサラサラ。P1柱痕
15　暗褐色土　粘性、締まり強い。地山ローム塊(1㎝以下)を含む。P1覆土
16　地山硬質ローム塊　P1覆土
17　暗褐色土　地山ローム粒・塊(2㎝以下)多い。P1覆土
18　にぶい黄褐色土　P1覆土
19　暗褐色土　第17層に似るが、締まり強い。P1覆土
20　にぶい黄褐色土　P1覆土
21　暗褐色土　締まりなくパサパサ。地山の硬質ローム塊(1㎝以下)、黒色スコリア多い。P2柱痕
22　暗褐色土　地山の硬質ローム塊(3㎝以下)多い。P2覆土
23　暗褐色土　第22層に似るが、締まり強い。P2覆土
24　暗褐色土　地山ローム塊(2㎝以下)やや多い。P2覆土
25　黄褐色土　地山ローム塊。P2覆土
26　暗褐色土　地山ローム塊(2㎝以下)やや多い。P2覆土
27　にぶい黄褐色土　地山ローム塊(3㎝以下)多い。P2覆土

炭化材集中部
1　炭化材多い。　2　炭化材、焼土粒多い。　3　褐色土　地山ローム塊多い。

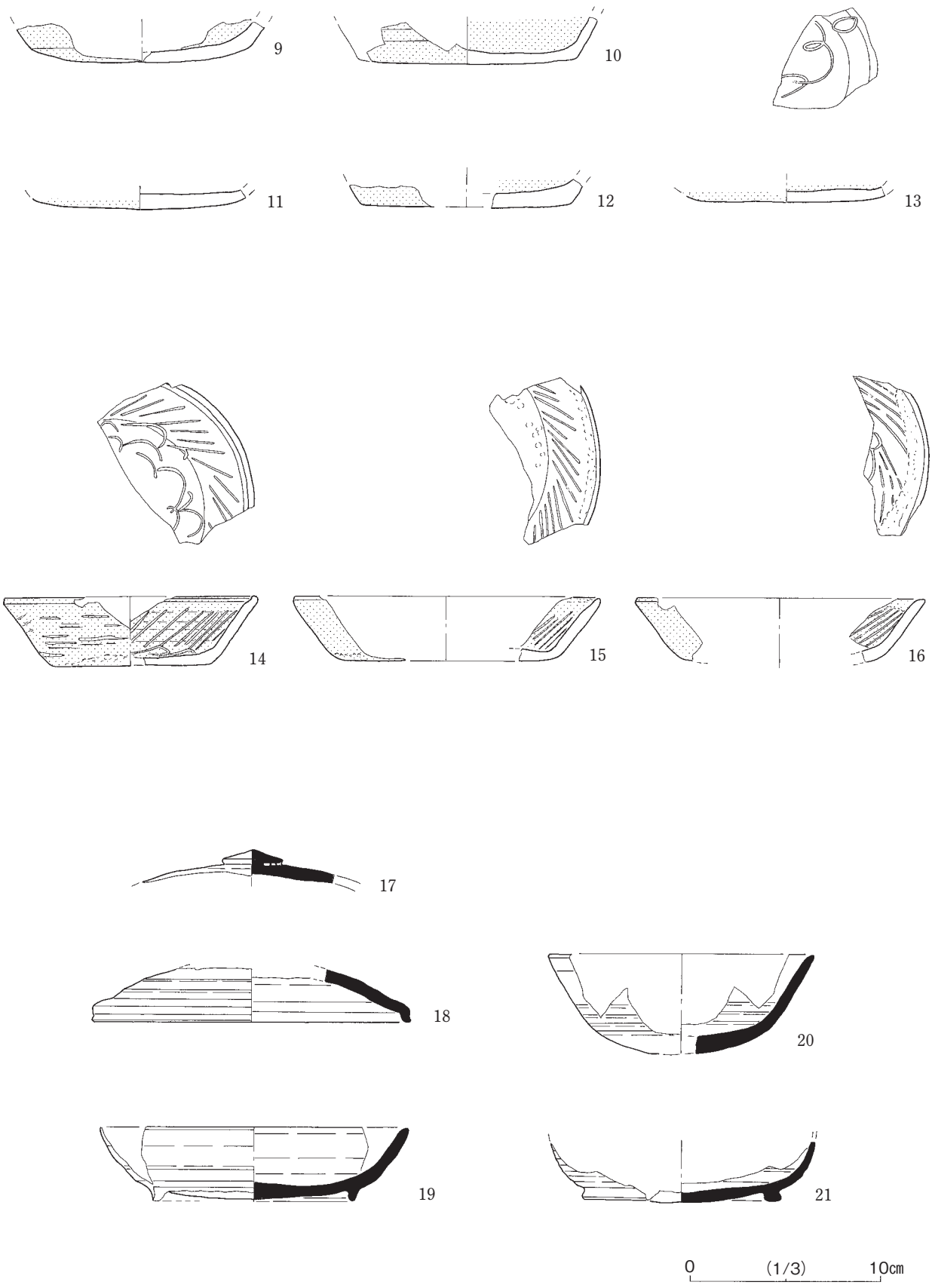
第129図　13号住居址、炭化材集中部



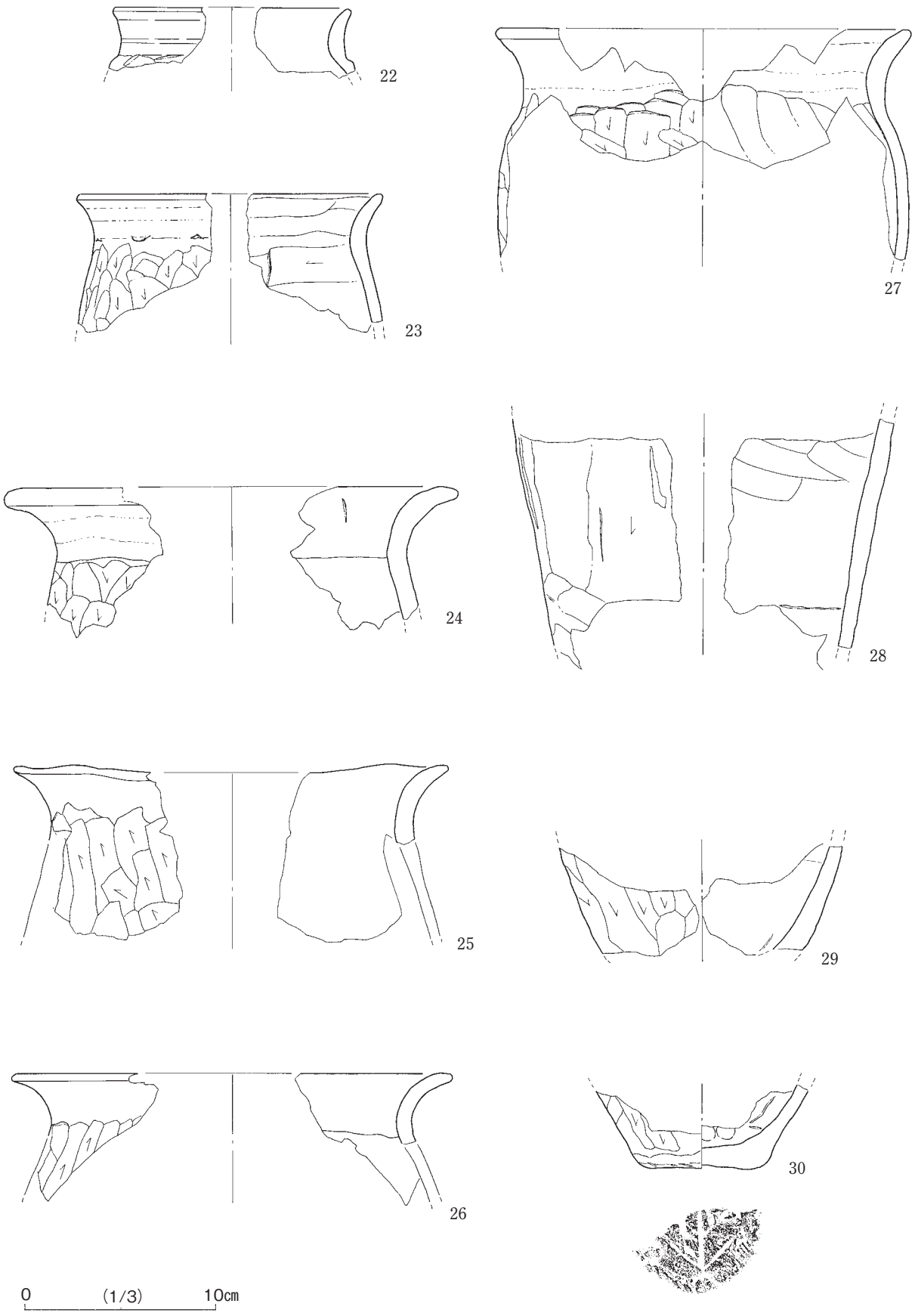
第 130 図　13 号住居址　掘り方



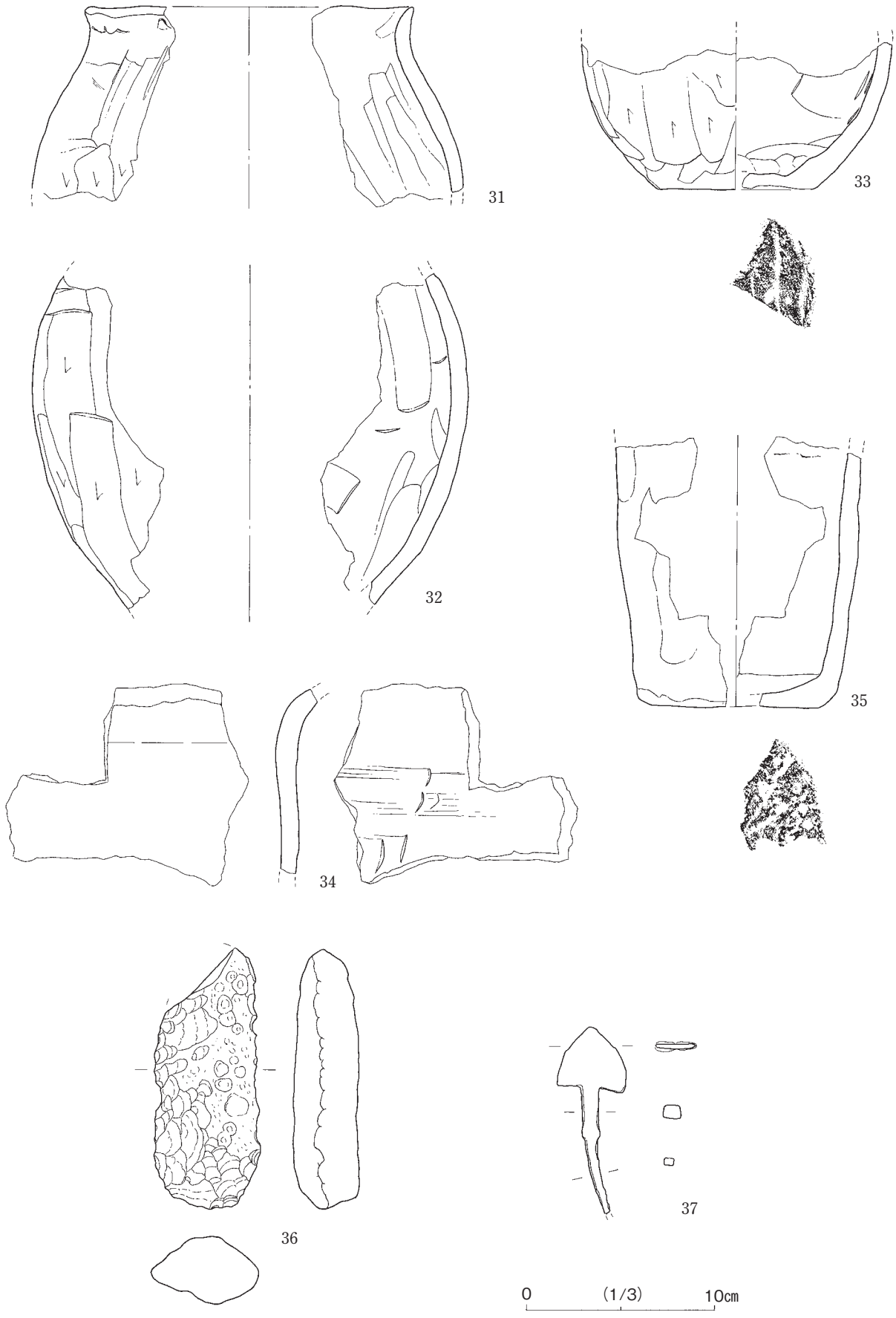
第 131 図　13 号住居址　遺物分布図、出土遺物（1）



第 132 図　13 号住居址　出土遺物（2）



第 133 図　13 号住居址　出土遺物（3）



第 134 図　13 号住居址　出土遺物（4）

14 号住居址（第 135 ～ 138 図、図版 26・62）

第Ⅱ次調査で検出した。O－11 区に位置し、確認面は第Ⅶ層上面である。平面は方形で、長軸 400㎝・短軸 350㎝である。カマドを持つ。主軸方位N－46°－E。壁高 65㎝である。遺存状況は良い。床は第Ⅸ層中に構築される。覆土は暗褐色土が主体で、焼土や炭化粒を多く含む層が床面を最厚 5㎝で覆う。

ピットは竪穴中央部で 2 基（長軸 80㎝・深さ 30㎝程度）、南西壁際で 1 基（長軸 45㎝・深さ 20㎝）を検出した。周溝はカマド部分を除いて全周し、幅約 25㎝・深さ 10㎝である。周溝の覆土中から炭化種実を 10 点ほど検出したが、遺存状況が悪く同定不能であった（付編 1 参照）。

カマドは北東壁の中央にある。両袖部の最大幅 150㎝で、袖部は黄色土が使われる。煙道部は壁を 110㎝掘り込み、火床部は床面を 5㎝掘り込んで構築される。

土坑 2 基がカマドの左右で検出された。A は平面が不整円形で長軸 100㎝・深さ 8㎝、B は平面が不整楕円形で長軸 70㎝・深さ 10㎝である。いずれも壁はなだらかで、内部に黄白色粘土を含む。

遺物は覆土から床面に分布する。土師器は盤状坏（1 ～ 3）、内外面ヘラ磨きの坏（4）、ヘラ削りの甕（8・13・14）、ナデ調整の相模型甕（5 ～ 7、9 ～ 12）がある。盤状坏は底部回転ヘラ削りで、体部下半が磨かれる。4 は甲斐型坏の最古形に位置付けられる。石製紡錘車（15・16）はカマド左側の床面で出土し、表面に鋸歯状（15）や十字、菱形状（16）の線刻が認められる。編物石が覆土中に散在する。

時期は遺物から奈良時代（8 世紀中頃）と考えられる。

15 号住居址（第 139 ～ 141 図、図版 27・62・63）

第Ⅱ次調査で検出した。K・L－13、L－14 区に位置し、北側が未調査区にかかる。確認面は第Ⅶ層上面だが、掘り込み面は土層観察から第Ⅳ層上面である。平面は方形と考えられ、南東壁 650㎝、南西壁 680㎝である。主軸方位N－40°－E。壁は検出高 50㎝だが、土層観察から最高 70㎝を測る。遺存状況は良い。床は第Ⅸ層中に構築され、硬化面が中央部で 2 面（覆土第 6 層上面及び下面）確認された。覆土は暗褐色土中に第Ⅳ層由来の黒褐色土が流入する。

主柱穴 3 基（長軸 65 ～ 75㎝・深さ約 50㎝）を確認し、P 1 で柱痕と考えられる土層（幅 15㎝～ 20㎝）が見られた。周溝やカマドは未確認である。

遺物は覆土から床面に分布する。土師器は半球形の坏（1）、大形の埦（2）、外面ヘラ削り後に磨きを加えた球胴甕（4・5）、ヘラ削りの甕（6・7）、高坏脚部（8）がある。5 は床面出土で、25 号住居址と接合関係を持つ。須恵器は高台付坏（3）がある。編物石が床面や覆土中に散在する。

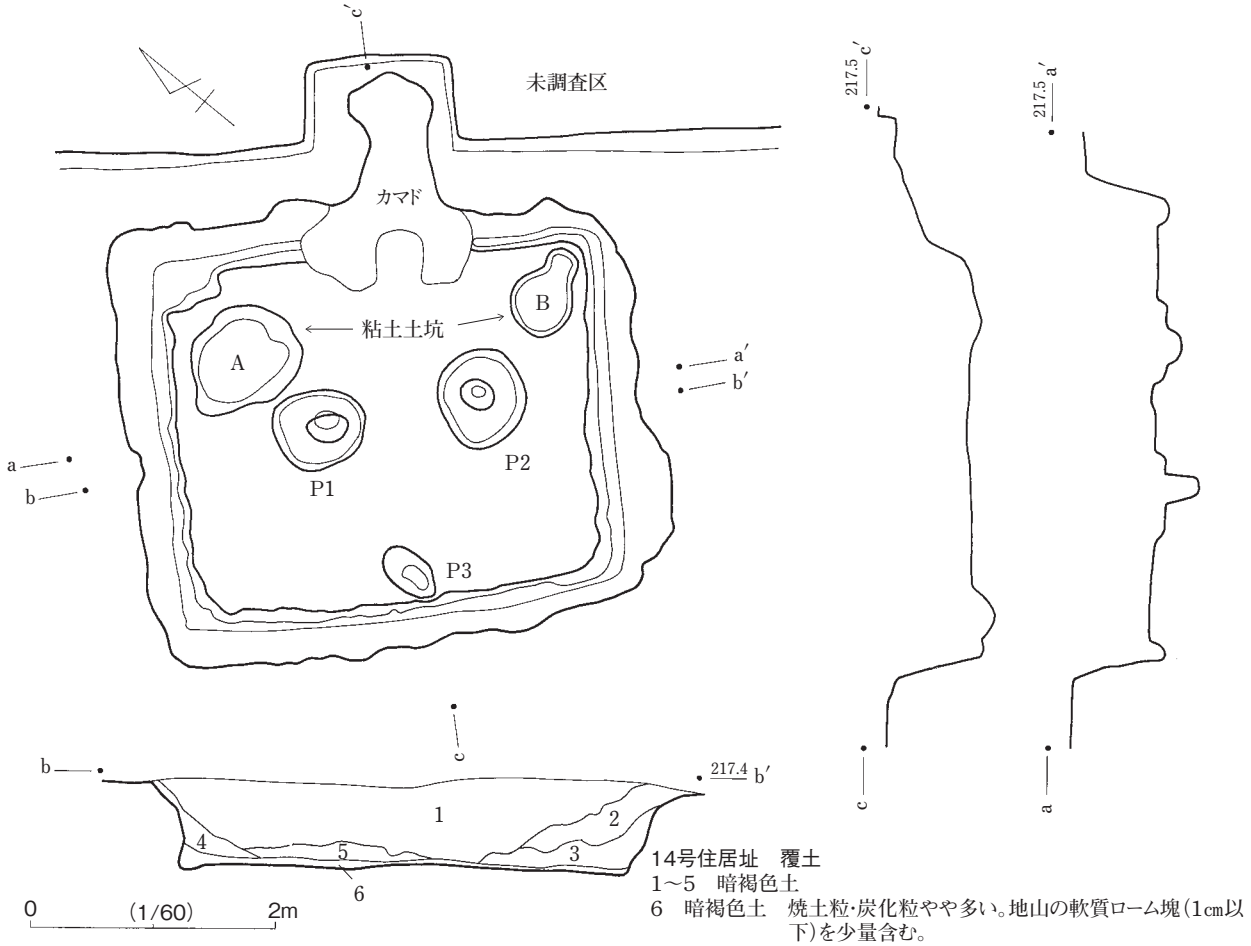
時期は遺物から古墳時代後期と考えられる。

16 号住居址（第 142 図、図版 63）

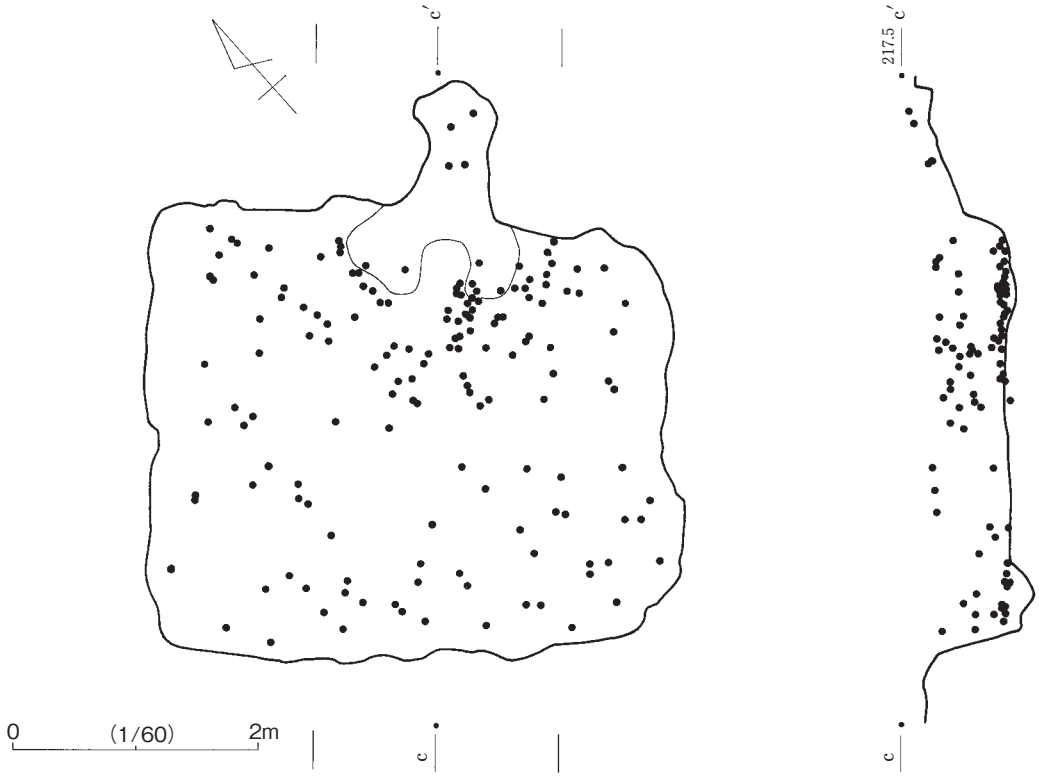
第Ⅱ次調査で検出した。J－12 区に位置し、大半が未調査区にかかる。確認面は第Ⅶ層上面だが、掘り込み面は土層観察から第Ⅳ層上面である。平面は方形と考えられ、南東壁 510㎝である。遺存状況は良い。主軸方位は 15 号住居址とほぼ同一である。壁は土層観察から最高 90㎝を測る。床は第Ⅸ層中に構築され、貼り床が施される。覆土は暗褐色土中に第Ⅳ層由来の黒褐色土が流入する。柱穴・周溝・カマドは未確認である。

遺物は覆土から床面にかけて分布する。土師器は長胴甕（1・2・4）、甑の底部（3）がある。遺物は概ね 7 世紀代に位置付けられるが、2 は 7 世紀末から 8 世紀前半に比定される。

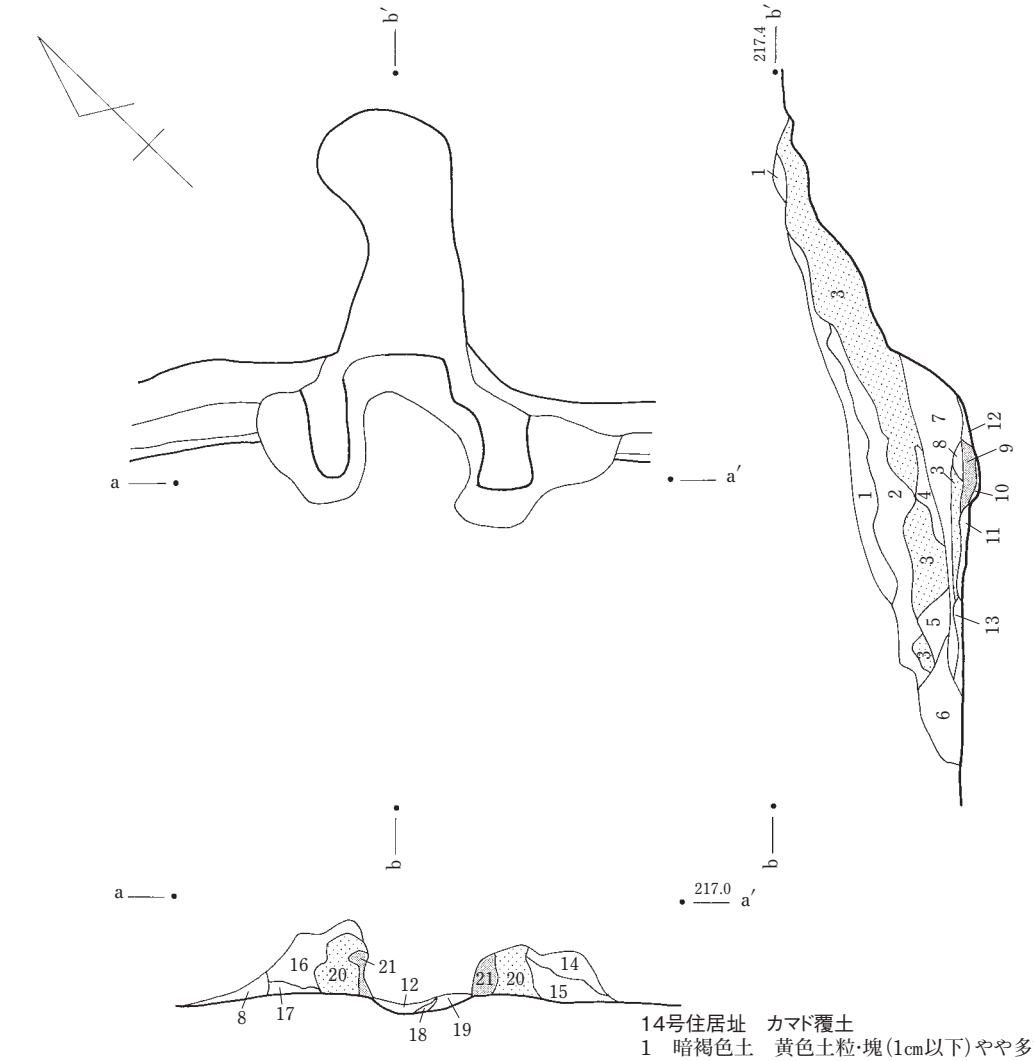
時期は遺物から古墳時代後期（7 世紀）と考えられる。

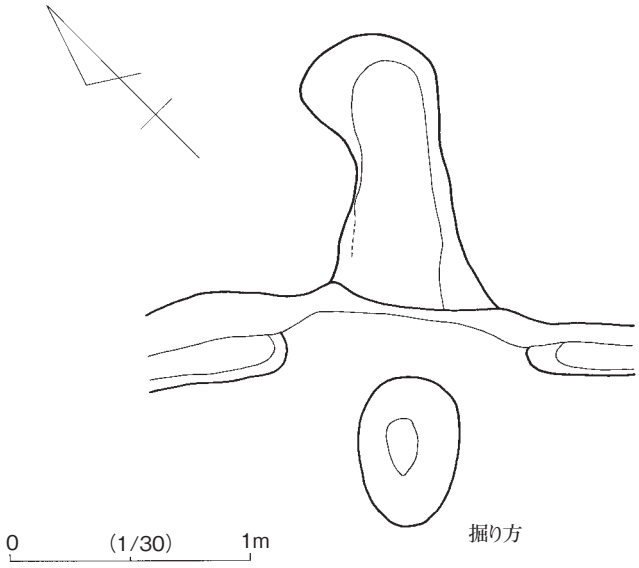


14号住居址　覆土
1～5　暗褐色土
6　暗褐色土　焼土粒･炭化粒やや多い。地山の軟質ローム塊(1㎝以下)を少量含む。



第135図　14号住居址、遺物分布図

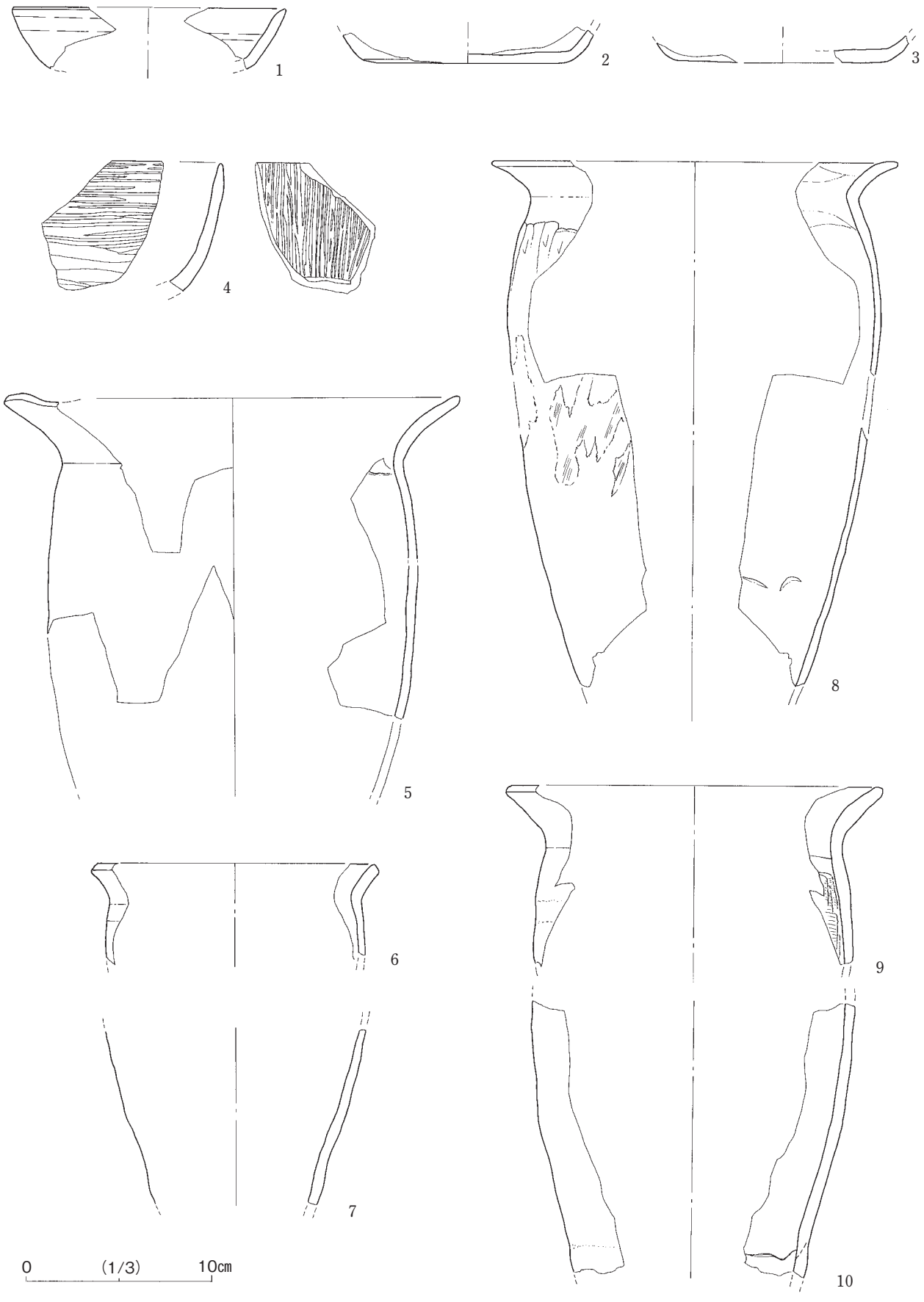




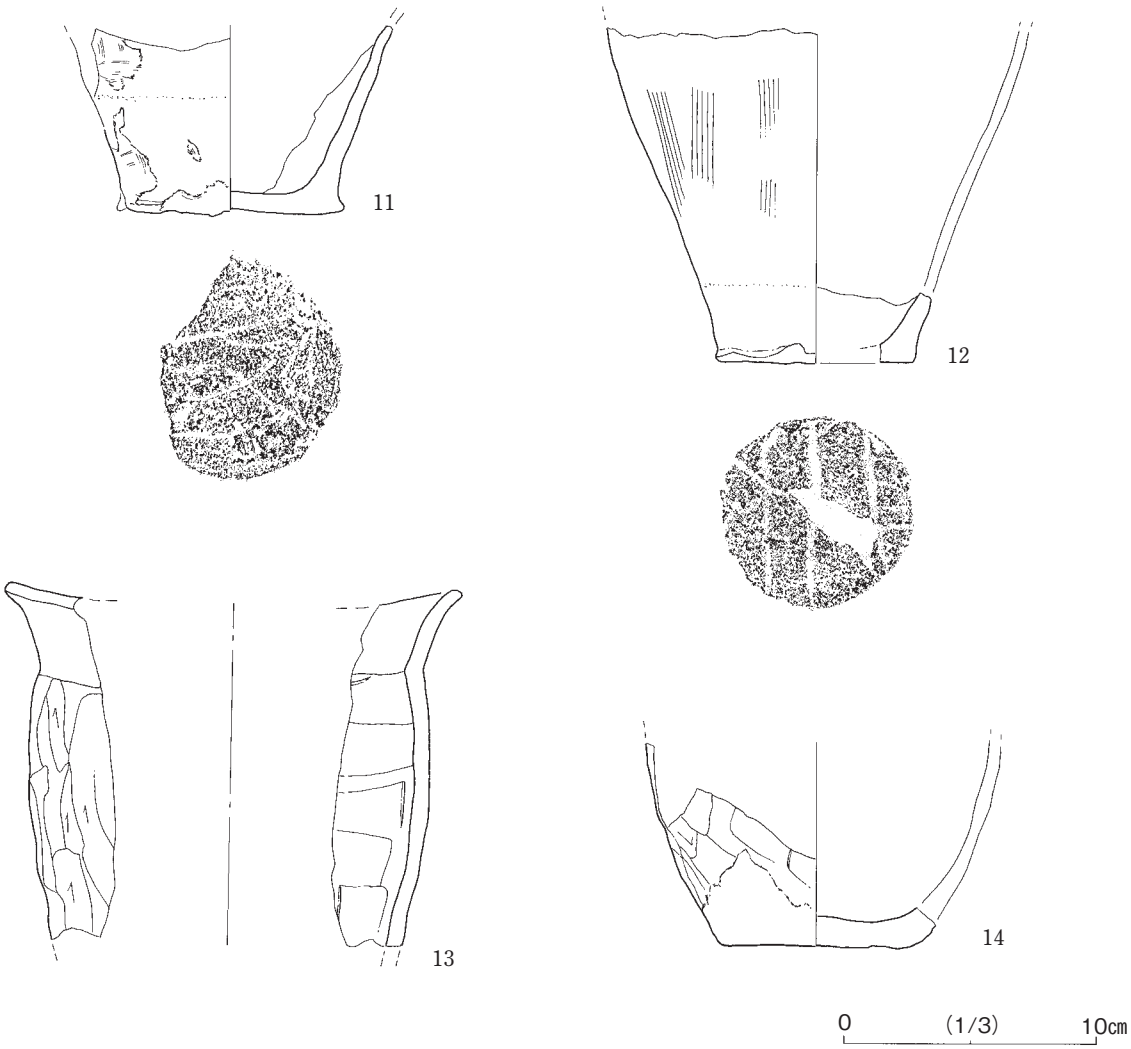
14号住居址　カマド覆土

1　暗褐色土　黄色土粒･塊(1cm以下)やや多い。焼土粒(1mm)を少量含む。
2　暗褐色土　黄色土塊(1cm～5cm)多い。焼土粒･炭化粒(3mm以下)やや多い。
3　黄色土　カマド構築土の崩落層
4　暗褐色土　黄色土粒･塊(1cm以下)多い。焼土粒を少量含む。
5　暗褐色土　黒色味強い。締まり強い。
6　暗褐色土　締まり弱い。黄色土粒･塊(1cm以下)、焼土粒･炭化粒を少量含む。
7　暗褐色土　粘性強く、締まりない。黄色土粒を少量含む。
8　にぶい黄褐色土　焼土粒(1cm以下)、黄白色土粒多い。炭化粒(5mm以下)やや多い。
9　橙色土　火床の焼土層。粒子粗く、ガサガサ。
10　にぶい褐色土　粒子粗く、ガサガサ。
11　暗褐色土
12　にぶい褐色土　焼土粒、黄白色土粒多い。炭化粒やや多い。
13　暗褐色土　締まりやや強い。焼土粒(5mm以下)、黄白色土粒(1.5cm以下)多い。炭化粒(5mm以下)やや多い。
14　暗褐色土　黄色土粒、焼土粒(1mm)やや多い。
15　にぶい黄褐色土　焼土粒、暗褐色土塊(2cm以下)やや多い。黄色土粒多い。
16　暗褐色土　黄色土塊(4cm以下)多い。焼土粒やや多い。
17　にぶい黄褐色土　第15層に似るが、焼土粒･炭化粒(5mm以下)多い。
18　暗褐色灰層
19　にぶい褐色土　焼土粒、黄白色土粒、暗褐色土多い。
20　黄色土　袖部
21　橙色土　第20層が被熱、焼土化。

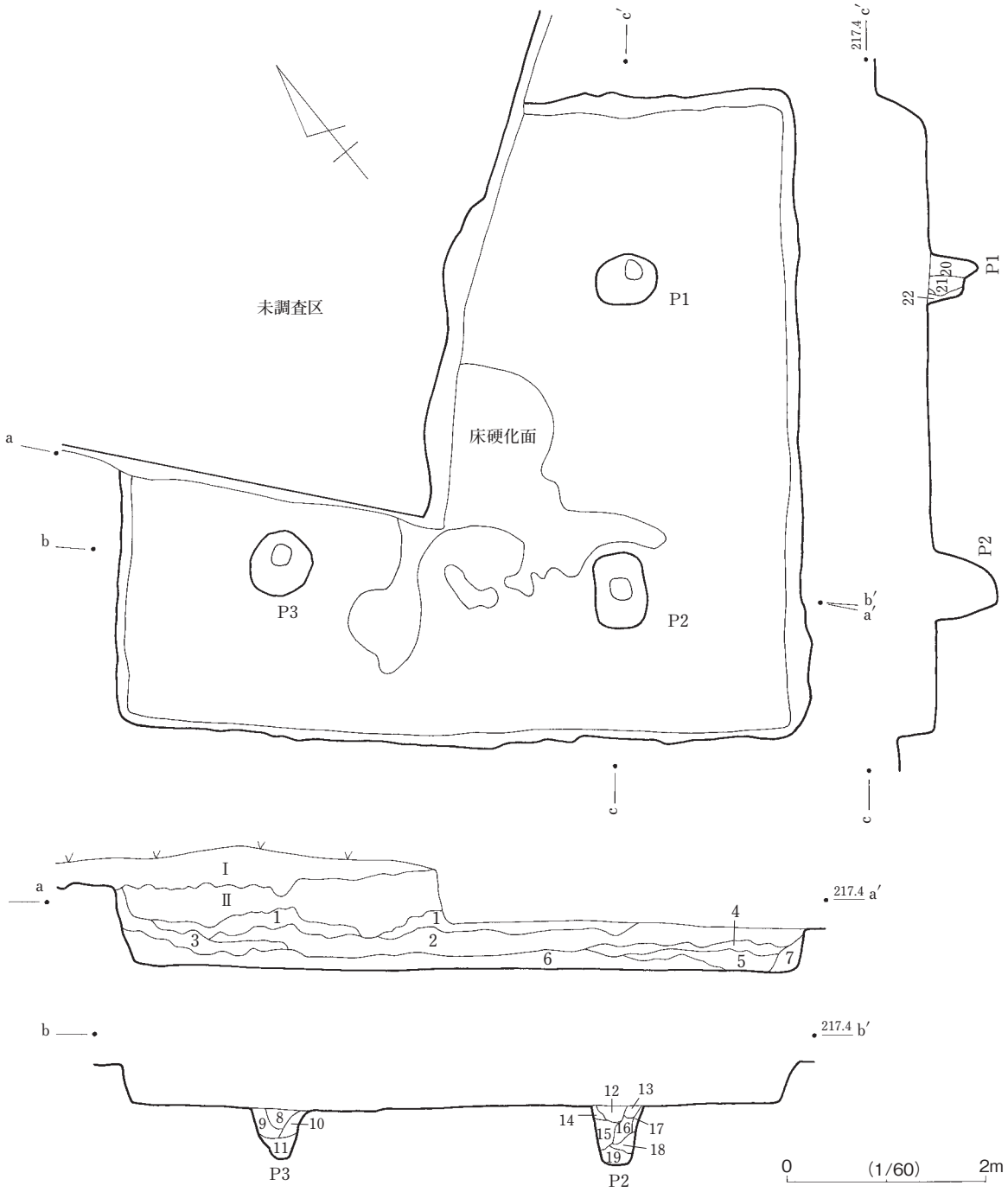
第136図　14号住居址　カマド



第 137 図　14 号住居址　出土遺物（1）



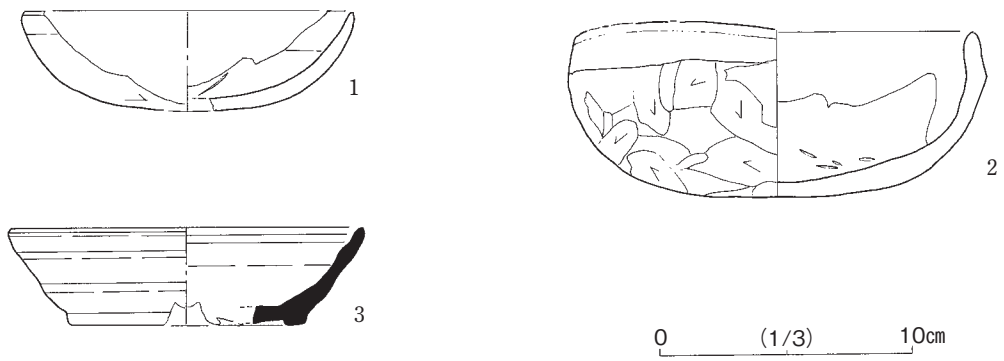
第 138 図　14 号住居址　出土遺物（2）



15号住居址　覆土

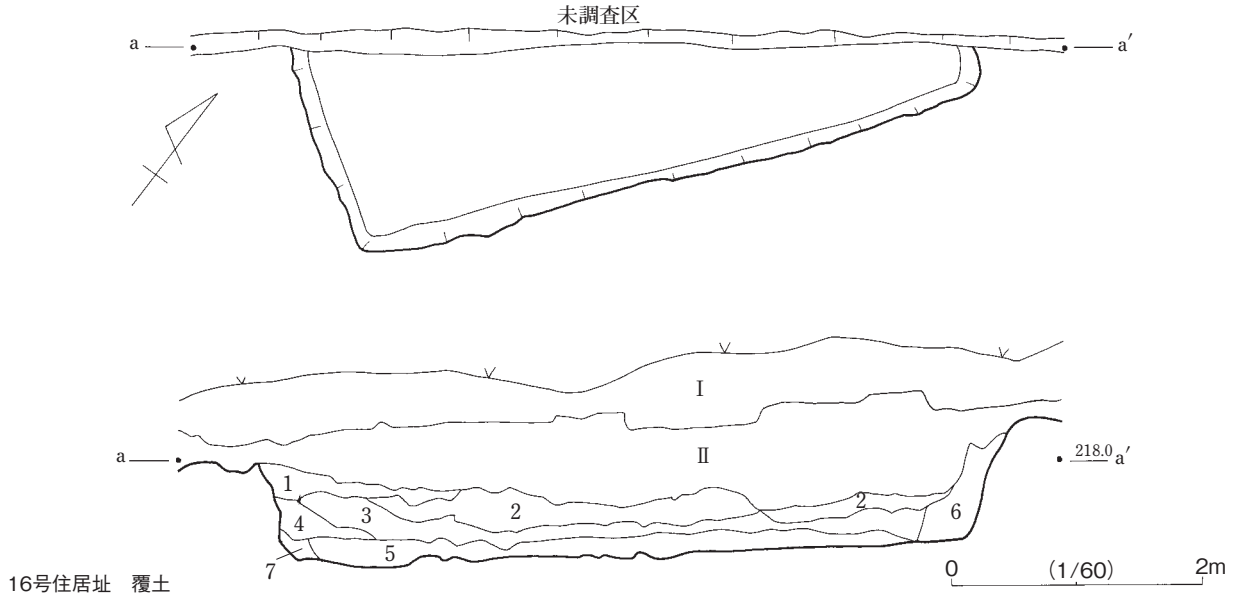
1　黒褐色土　粘性、締まり弱い。黒色スコリア多い。基本第Ⅳ層由来。
2　にぶい褐色土　粘性、締まり弱い。黒褐色土(1㎜～5㎜)を少量含む。
3　黒褐色土　粘性、締まり弱い。黒色スコリア多い。基本第Ⅳ層由来。
4　暗褐色土　粘性、締まり弱い。黒褐色土塊(1㎝以下)を含む。黒色スコリアを少量含む。
5　褐色土　粘性、締まりやや強い。地山ローム塊(1.5㎝以下)多い。
6　暗褐色土　本層上面の所々に地山ロームが薄く層状に入る。
7　褐色土
8～10　暗褐色土　締まり弱く、粘性やや強い。地山ローム塊多い。P3覆土。
11　褐色土　地山ローム塊多い。P3覆土。
12　暗褐色土　粘性強く、締まりやや強い。地山ローム塊(3㎝以下)多い。P2覆土。
13～14　褐色土　粘性、締まり強い。P2覆土。
15　褐色土　粘性強く、締まり弱い。地山ローム塊(1㎝以下)やや多い。P2覆土。
16　暗褐色土　粘性強く、締まり弱い。地山ローム塊(3㎝以下)多い。P2覆土。
17　褐色土　粘性強く、締まり弱い。P2覆土。
18　褐色土　粘性、締まり強い。P2覆土。
19　褐色土　粘性強く、締まり弱い。地山ローム塊(3㎝以下)やや多い。P2覆土。
20　暗褐色土　粘性やや強く、締まり弱い。地山ローム塊(0.5㎝～1㎝)を少量含む。P1柱痕。
21　にぶい褐色土　粘性やや強く、締まり弱い。地山ローム塊(0.5㎝～2㎝)やや多い。P1覆土。
22　にぶい褐色土　第21層に似るが、色調がやや暗い。P1覆土。

第139図　15号住居址



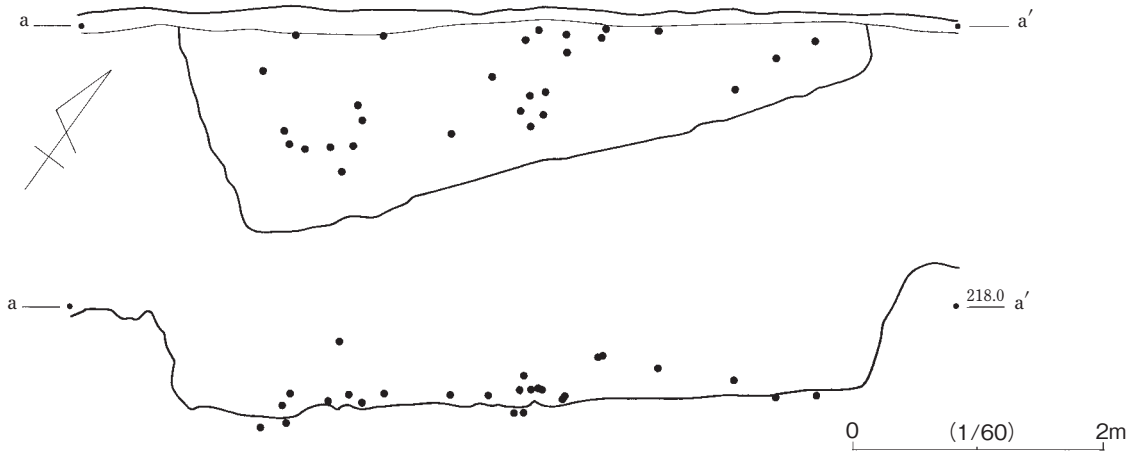
第 140 図　15 号住居址　遺物分布図、出土遺物（1）

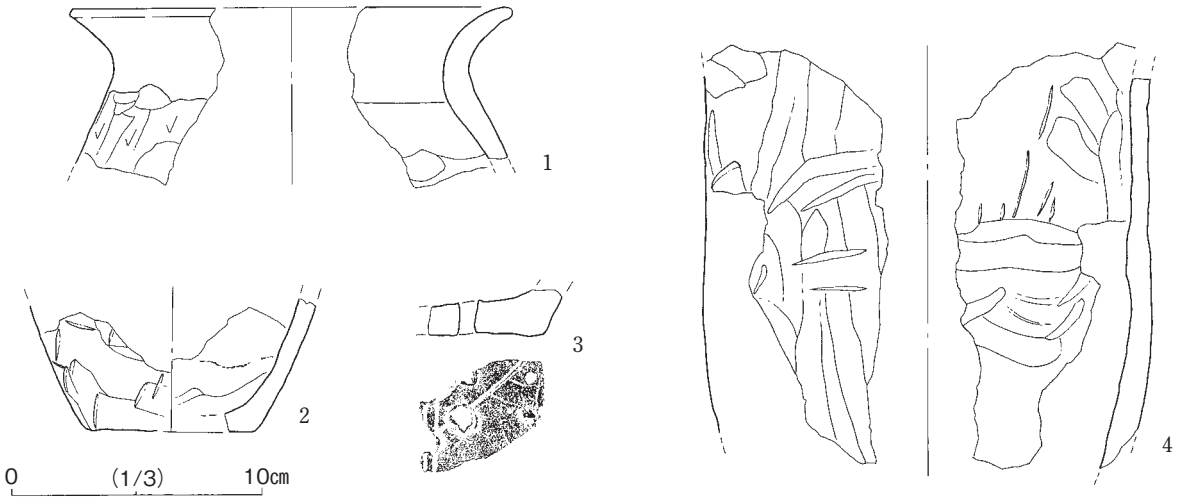
第 141 図　15 号住居址　出土遺物（2）



16号住居址　覆土

1　暗褐色土　粘性弱く、締まりやや強い。黒色・橙色スコリア（1㎜～3㎜）やや多い。
2　暗褐色土　粘性、締まり弱い。黒色スコリア（1㎜～6㎜）・橙色スコリア（1㎜～3㎜）多い。基本第Ⅳ層由来。
3　暗褐色土　粘性、締まり弱い。黒色スコリア（1㎜～6㎜）やや多い。橙色スコリア（1㎜～3㎜）、焼土粒を少量含む。褐色土粒・塊（1㎝～3㎝）極少量含む。
4　黒褐色土　粘性、締まり弱い。黒色スコリア（1㎜～6㎜）多い。橙色スコリア（1㎜）を少量含む。基本第Ⅳ層由来。
5　暗褐色土　粘性弱く、締まりやや強い。褐色土塊（5㎝以下）多い。貼り床。
6　暗褐色土　粘性、締まり弱い。黒色スコリア（1㎜～6㎜）多い。橙色スコリア（1㎜）やや多い。
7　暗褐色土





第142図　16号住居址、遺物分布図、出土遺物

18 号住居址（第 143 図）

第Ⅴ次調査で検出した。Z･2 A－57 区に位置し、大半が未調査区にかかる。50 号ピットと重複する。確認面は第Ⅶ層中だが、掘り込み面は土層観察から第Ⅳ層上面である。平面は方形と考えられ、南西壁 520㎝である。遺存状況は良い。主軸方位Ｎ－ 45°－Ｅ。壁は検出高 50㎝だが、土層観察から最高 90㎝を測る。床は第Ⅸ層中に構築され、硬化面が南西壁際から竪穴中央部にかけて検出された。覆土は暗褐色土中に第Ⅳ層由来の黒褐色土が流入する。

明瞭な柱穴は不明だが、南西壁際で小ピット 1 基が検出された（Ｐ 1)。直径 30㎝・深さ 25㎝である。この他に浅い掘り込みが 3 ヵ所で検出された。周溝は北西壁から南西壁沿いに検出され、幅 25㎝・深さ 10 ～ 15㎝である。カマドは未確認である。

遺物は覆土下層から床面にかけて分布し、地元で山石と呼ばれる礫岩（拳大から最大 45㎝）が多数混在する。土師器は底部回転ヘラ削りの盤状坏（1)、ナデ調整の相模型甕（2）がある。

時期は遺物から奈良時代（8 世紀中頃）と考えられる。

19 号住居址（第 144 図、図版 27・63）

第Ⅰ次調査で検出し、旧名称はⅠ－ 1 号住居址である。

2 D・2 E－ 22 区に位置し、20 号住居址を切って構築される。平面方形で、東壁の一部がわずかに張り出す。竪穴は長軸 300㎝、短軸 290㎝を測る。主軸方位Ｎ－ 34°－ W。壁高 45㎝である。耕作溝で攪乱を受け、遺存状況はやや悪い。床に硬化面や貼り床は認められなかった。覆土は暗褐色土を主体とする。

柱穴、周溝はない。カマドは未確認だが、東壁張り出し部の前面に黄褐色粘土や礫が散在していたことから、この付近にカマドがあった可能性が考えられる。

遺物はごく少量で、土師器の半球形の坏（1）がある。坏は口径 14.2㎝で底部が欠損しており、高坏の可能性もある。時期は遺物から古墳時代後期（7 世紀）と考えられる。

21 号住居址（第 145 ～ 147 図、図版 28）

第Ⅰ次調査で検出し、旧名称はⅠ－ 3 号住居址である。

2 A－ 24･25 区に位置し、17 号土坑と重複する。確認面は第Ⅶ層上面である。平面は方形で、北壁 420㎝、東・西壁 370㎝、南壁 350㎝を測る。カマドを北壁に持つ。主軸方位Ｎ－ 34°－ W。壁高 40㎝。遺存状況は良い。床の硬化面や貼り床は確認されなかった。覆土は暗褐色土を主体とする。

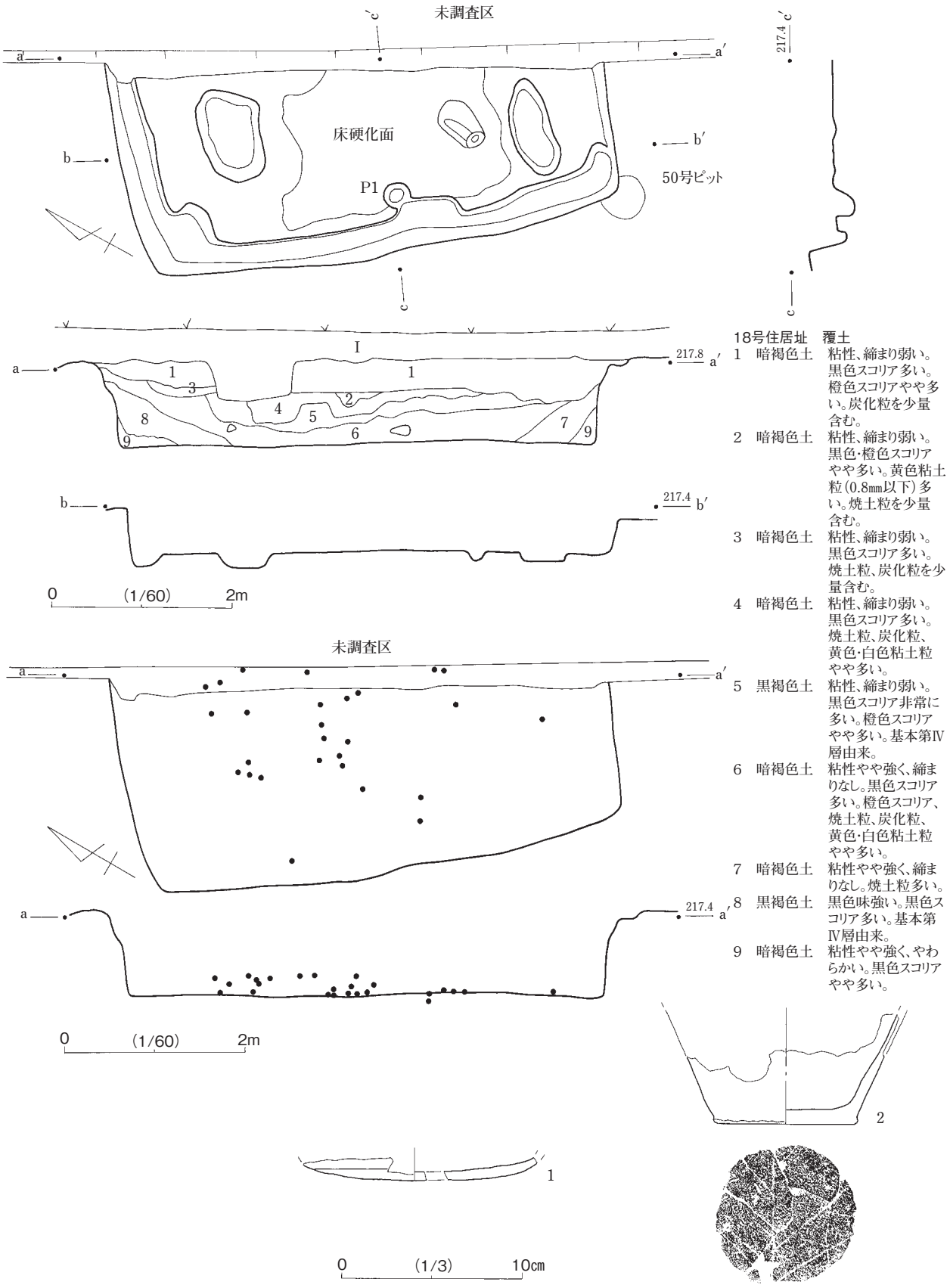
南壁沿いで小ピット 1 基や浅い掘り込みが検出されたが、明瞭な柱穴・周溝は確認できなかった。

カマドは北壁の西寄りにあり、天井石と袖石が遺存する。焚き口から煙道部先端まで 130㎝を測る。両袖部の最大幅 95㎝、焚き口の幅は 30㎝である。袖部は礫や黄白色土が使われる。煙道部は壁を 55㎝掘り込み、火床部は床面を 10㎝掘り込んで構築される。

土坑は竪穴中央部で 1 基を検出した。平面不整円形で直径 140㎝、深さ 10㎝である。壁はなだらかで、内部に小石混じりの白色粘土を含む。

遺物は覆土から床面にかけて分布する。土師器は甲斐型甕（5・6）で甲斐Ⅺ期に比定される。須恵器は口縁端部が屈折する坏蓋（1・2)、坏（3)、平底の鉢（4)、大形の甕（7・8)、瓶（9）があり、概ね南多摩窯御殿山 25 号窯式あるいは御殿山 5 号窯式に比定される。1 は 32 号住居址と接合する。他に灰釉陶器の長頸瓶（10 ～ 11)、鉄滓（12）が出土した。

時期は遺物から平安時代（9 世紀末から 10 世紀前半）と考えられる。



18号住居址　覆土

1　暗褐色土　粘性、締まり弱い。黒色スコリア多い。橙色スコリアやや多い。炭化粒を少量含む。

2　暗褐色土　粘性、締まり弱い。黒色・橙色スコリアやや多い。黄色粘土粒(0.8㎜以下)多い。焼土粒を少量含む。

3　暗褐色土　粘性、締まり弱い。黒色スコリア多い。焼土粒、炭化粒を少量含む。

4　暗褐色土　粘性、締まり弱い。黒色スコリア多い。焼土粒、炭化粒、黄色・白色粘土粒やや多い。

5　黒褐色土　粘性、締まり弱い。黒色スコリア非常に多い。橙色スコリアやや多い。基本第Ⅳ層由来。

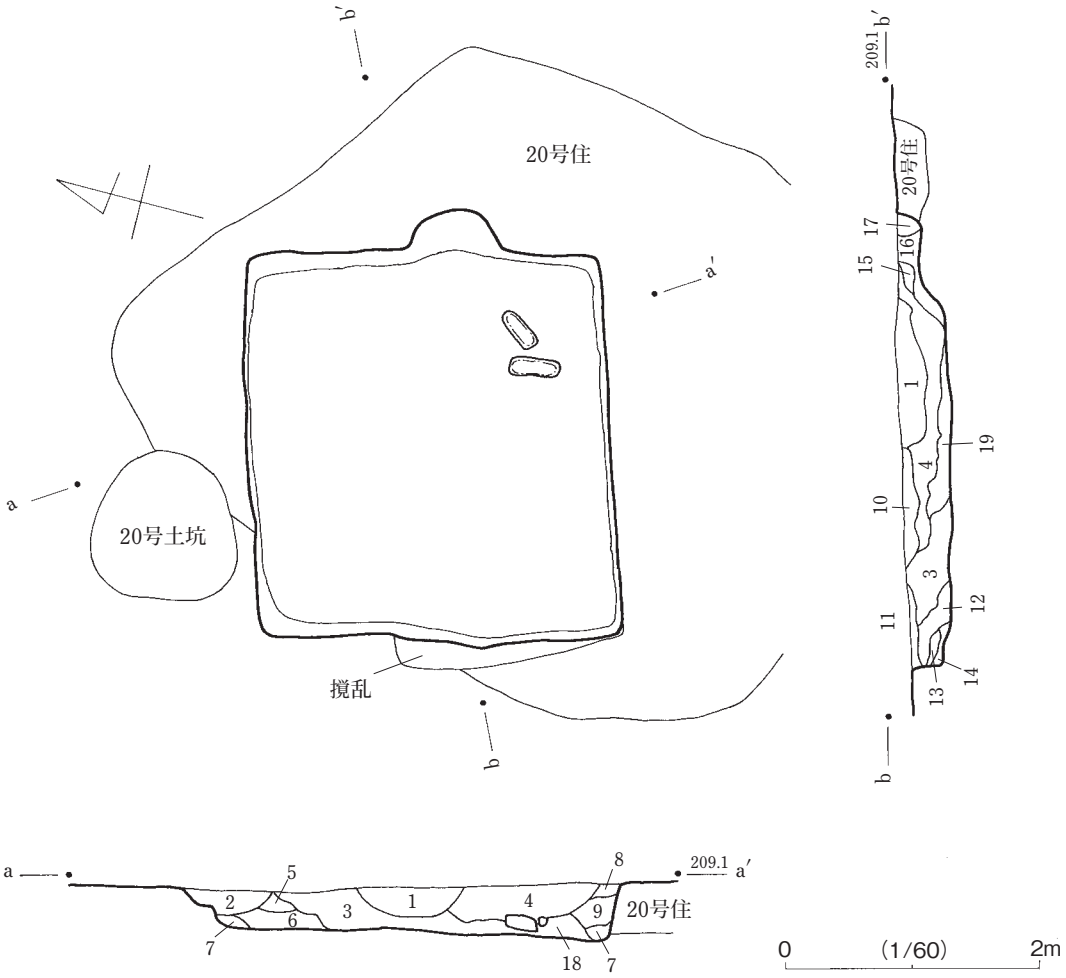
6　暗褐色土　粘性やや強く、締まりなし。黒色スコリア多い。橙色スコリア、焼土粒、炭化粒、黄色・白色粘土粒やや多い。

7　暗褐色土　粘性やや強く、締まりなし。焼土粒多い。

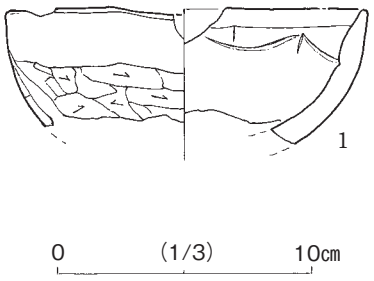
8　黒褐色土　黒色味強い。黒色スコリア多い。基本第Ⅳ層由来。

9　暗褐色土　粘性やや強く、やわらかい。黒色スコリアやや多い。

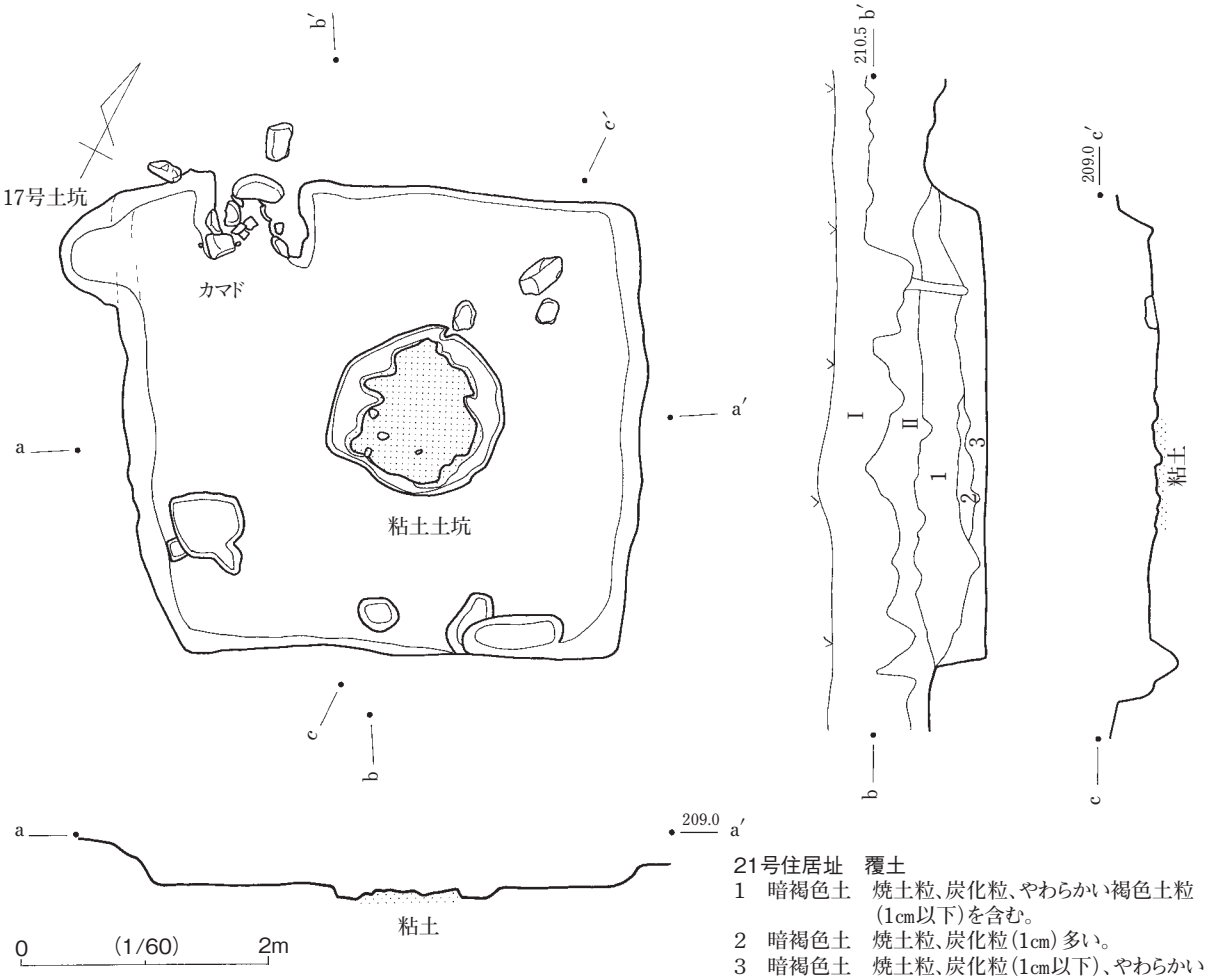
第143図　18号住居址、遺物分布図、出土遺物



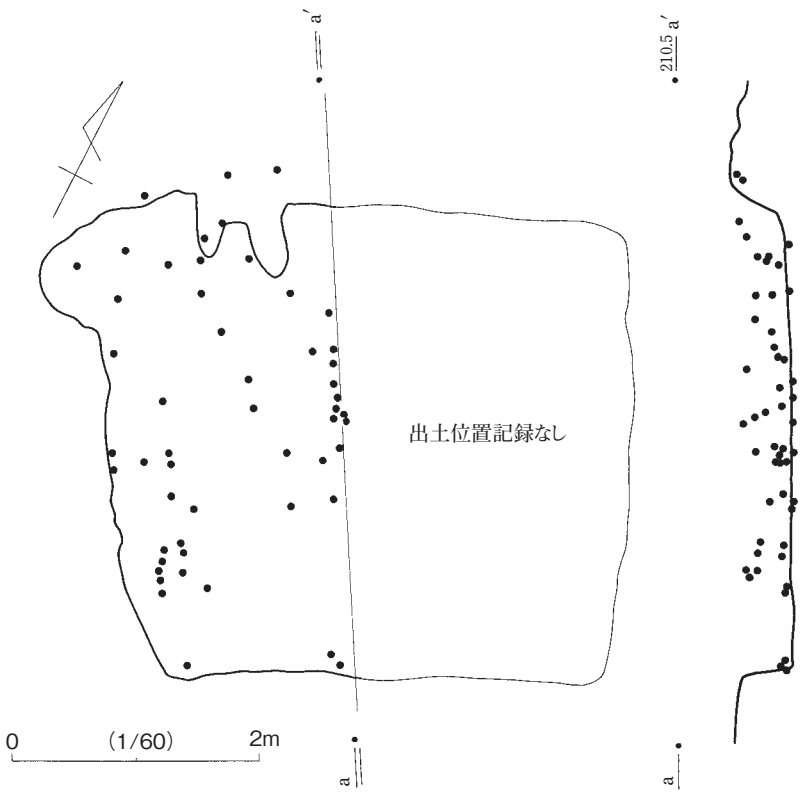
19号住居址　覆土
1　黒褐色土　黒色スコリア(1㎜～5㎜)を含む。
2　黒褐色土
3～4　暗褐色土
5　黒褐色土
6　褐色土
7　褐色土　　黄褐色粘土を含む。
8～9　暗褐色土
10　黒褐色土
11　暗褐色土
12　褐色土
13　暗褐色土
14　黄褐色土
15　黒褐色土
16　褐色土
17　黒褐色土
18　褐色土　　焼土粒、炭化粒多い。黄褐色粘土を含む。



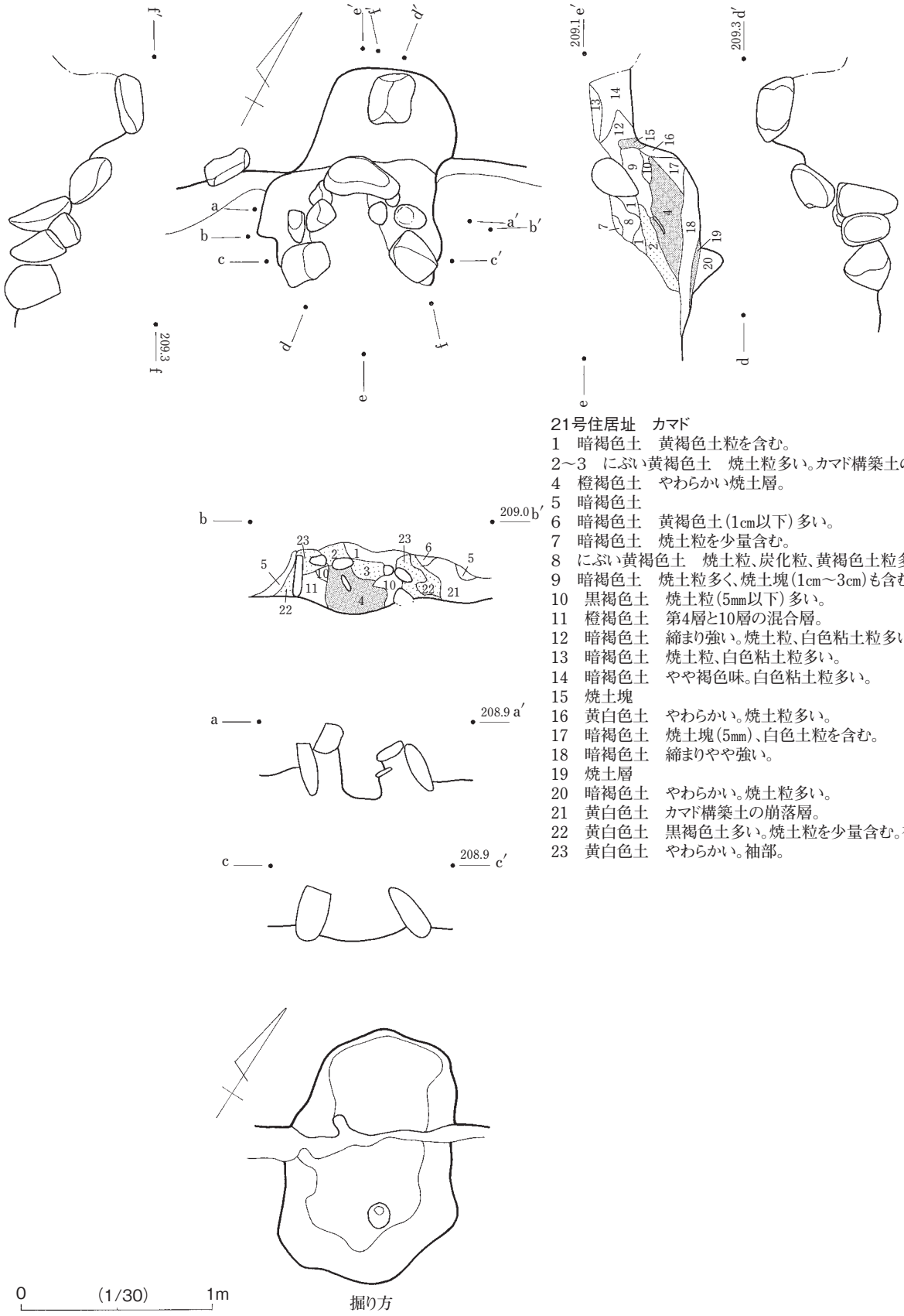
第 144 図　19 号住居址、出土遺物



21号住居址　覆土
1　暗褐色土　焼土粒、炭化粒、やわらかい褐色土粒(1cm以下)を含む。
2　暗褐色土　焼土粒、炭化粒(1cm)多い。
3　暗褐色土　焼土粒、炭化粒(1cm以下)、やわらかい褐色土粒やや多い。

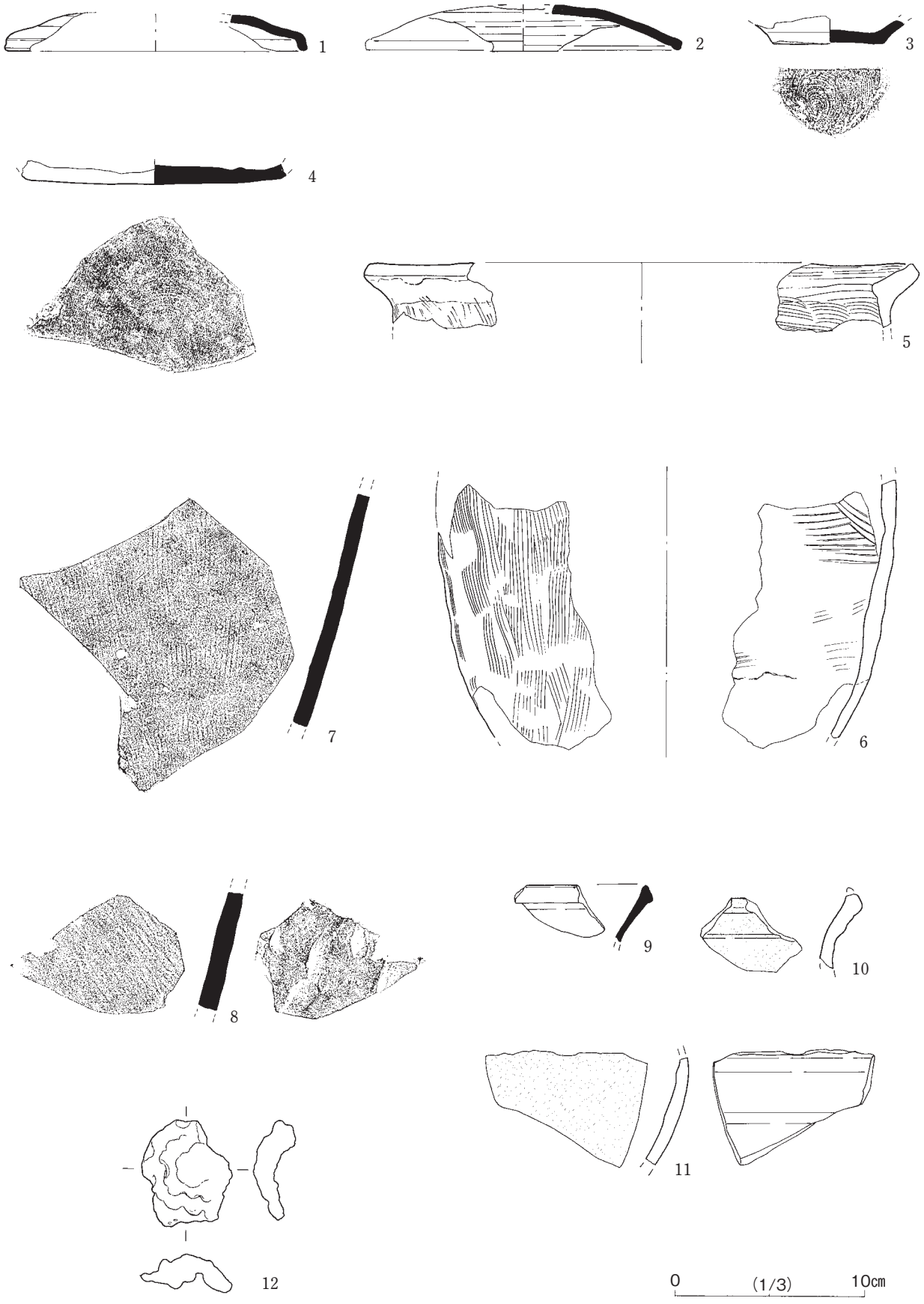


第145図　21号住居址、遺物分布図



21号住居址　カマド
1　暗褐色土　黄褐色土粒を含む。
2～3　にぶい黄褐色土　焼土粒多い。カマド構築土の崩落層。
4　橙褐色土　やわらかい焼土層。
5　暗褐色土
6　暗褐色土　黄褐色土(1cm以下)多い。
7　暗褐色土　焼土粒を少量含む。
8　にぶい黄褐色土　焼土粒、炭化粒、黄褐色土粒多い。
9　暗褐色土　焼土粒多く、焼土塊(1cm～3cm)も含む。
10　黒褐色土　焼土粒(5mm以下)多い。
11　橙褐色土　第4層と10層の混合層。
12　暗褐色土　締まり強い。焼土粒、白色粘土粒多い。
13　暗褐色土　焼土粒、白色粘土粒多い。
14　暗褐色土　やや褐色味。白色粘土粒多い。
15　焼土塊
16　黄白色土　やわらかい。焼土粒多い。
17　暗褐色土　焼土塊(5mm)、白色土粒を含む。
18　暗褐色土　締まりやや強い。
19　焼土層
20　暗褐色土　やわらかい。焼土粒多い。
21　黄白色土　カマド構築土の崩落層。
22　黄白色土　黒褐色土多い。焼土粒を少量含む。袖部。
23　黄白色土　やわらかい。袖部。

第146図　21号住居址　カマド



第 147 図　21 号住居址　出土遺物

22 号住居址（第 148 ～ 150 図、図版 28・29・63）

第Ⅰ次調査で検出し、旧名称はⅠ－ 4 号住居址である。

2 A・2 B－ 26・27 区に位置し、16 号土坑と重複する。確認面は第Ⅶ層上面である。平面は方形で、カマドを持つ。竪穴は一辺 400㎝、主軸方位Ｎ－ 60°－Ｅ。壁高 50㎝である。遺存状況は良い。床に硬化面や貼り床は確認されなかった。覆土は黒褐色土を主体とする。

ピット 1 基が竪穴の北西隅で検出され、直径 20㎝・深さ 23㎝である。周溝は南東壁沿いで検出され、幅 25㎝・深さ 30㎝である。

カマドは北東壁の東寄りにあり、袖石が遺存する。両袖部の最大幅 150㎝で、袖部は礫や白色粘土が使われる。煙道部は壁を 50㎝掘り込み、火床部は床面を 10㎝掘り込んで構築される。石製支脚 1 点が火床部で検出され、直立する石の上端に甕底部（13）と須恵器坏（4）が二重に伏せられていた。

遺物は覆土から床面に分布する。土師器は甲斐型坏（1 ～ 3）、甲斐型甕（12 ～ 15）、ヘラ削りの甕（16）がある。甲斐型土器は甲斐Ⅺ期に比定される。16 は胴張りで、底部は台状となる。須恵器は坏（4 ～ 9）、高台付瓶（10）、甕（17）があり、大半は南多摩窯御殿山 5 号窯式に比定される。9 は 19 号住居址と接合する。灰釉陶器に高台付埦（11）がある。埦は口縁内外面に施釉され、底部に回転糸切り痕が残ることから猿投窯の折戸 53 号窯式に比定される。鉄滓（18）が出土した。

時期は遺物から平安時代（10 世紀前半）と考えられる。

23 号住居址（第 151 ～ 155 図、図版 29・63）

第Ⅱ次調査で検出し、旧名称はⅠ－ 5 号住居址である。

Ｓ－ 19 区に位置し、北西壁が未調査区にかかる。120・121 号土坑によって床面まで攪乱され、遺存状況はやや悪い。確認面は第Ⅴ層だが、掘り込み面は土層観察から第Ⅳ層上面である。平面は方形で、カマドを持つ。竪穴は一辺 450㎝、主軸方位Ｎ－ 40°－Ｗ。壁高 60㎝である。床は第Ⅶ層中に構築され、全般に貼り床が施される。覆土は暗褐色土を主体とする。柱穴はなく、周溝は未確認である。

カマドは南東壁の南寄りにあり、袖石が遺存する。焚き口から煙道部先端まで 130㎝、両袖部の最大幅 170㎝、焚き口の幅 60㎝である。袖部は礫、黄白色粘土、暗褐色土が使われる。煙道部は壁をわずかに掘り込み、火床部は床面を 10㎝掘り込み構築される。石製支脚 1 点が火床端で直立して検出された。

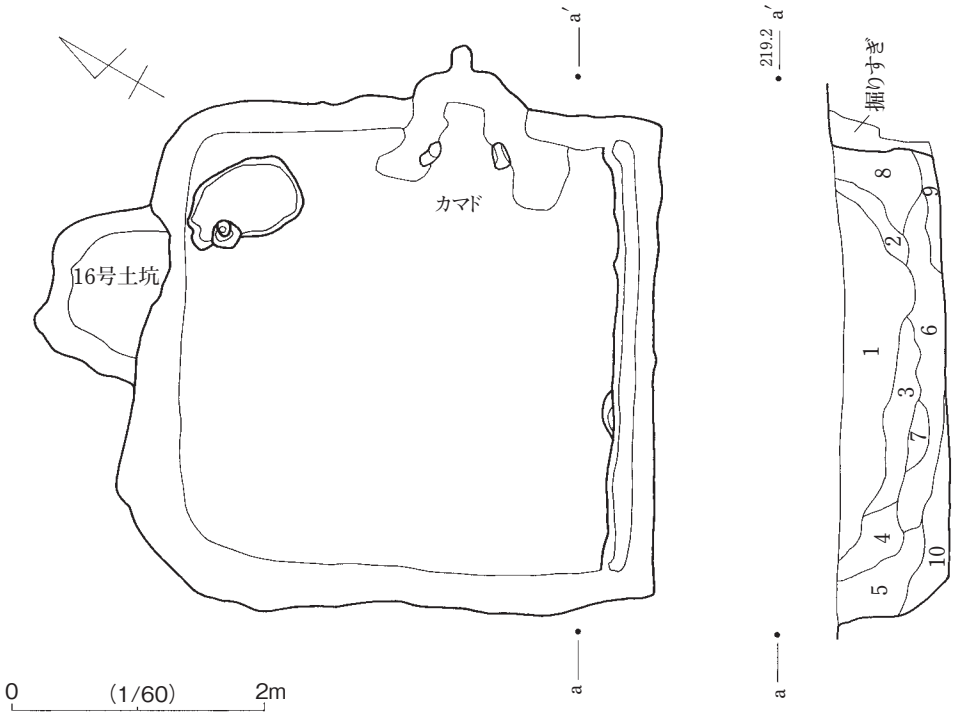
土坑は竪穴の中央部で 1 基を検出した。一部を掘り過ぎたが、平面は不整円形で直径 110㎝、深さ約 20㎝である。内部に黄白色粘土を含み、上面は固く焼土化している。

遺物は覆土から床面に分布する。土師器は体部に指頭押圧を残す南武蔵型坏（1）、甲斐型の甕（7 ～ 10）・羽釜（11）・置きカマド（12）、武蔵型甕（13・14）、台付甕（15）がある。10・13 はカマド火床面でまとまって出土した。甲斐型土器は甲斐Ⅹ期からⅪ期に比定される。武蔵型甕は胴部を横・縦方向にヘラ削りし、器厚は 5㎜前後である。このうち 13 は、頸部から口縁部が「く」の字状に屈曲するなどの特徴から、武蔵型甕が主体となる埼玉県中堀遺跡の分類（田中・末木 1997）で土師器甕Ａⅲ型に相当するものと思われ、10 世紀第 1 四半期を中心とする時期に位置付けられる。

須恵器は坏蓋（2）、坏（3）、南多摩窯御殿山 5 号窯式の高台付埦（4）、甕（16 ～ 18）がある。18 は内面が滑らかに研磨され、割れ口に赤色付着物が見られるため朱墨の転用硯と思われる。灰釉陶器の高台付皿（5）は体部内外面の施釉で底部回転糸切り痕が残り、猿投窯の折戸 53 号窯式 2 型式に比定される。

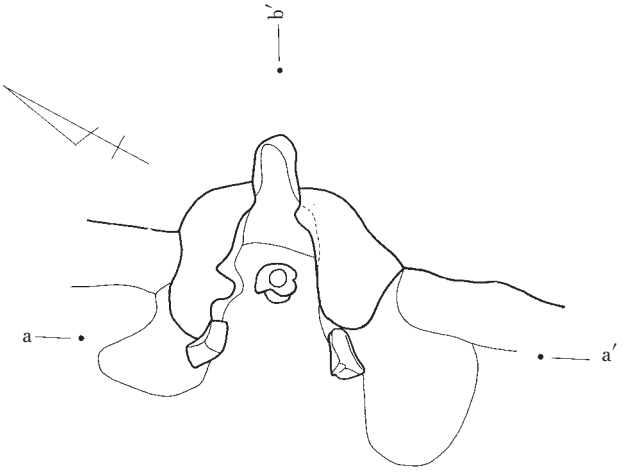
この他、緑釉陶器埦（6）、砥石（19）、鉄釘（20）、鎹状の鉄製品（21）、鉄滓（22）が出土した。

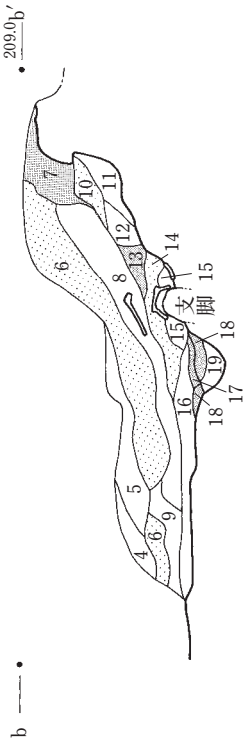
時期は遺物から平安時代（10 世紀前半）と考えられる。



22号住居址　覆土
1　黒褐色土　黒色スコリア(0.6㎜以下)多い。
2　黒褐色土　褐色土やや多い。
3　黒褐色土　黒色味強い。黒色スコリア(0.6㎜以下)多い。
4　黒褐色土
5　黒褐色土　黒色味強い。
6～8　黒褐色土
9～10　黒褐色土　黒色スコリアを少量含む。

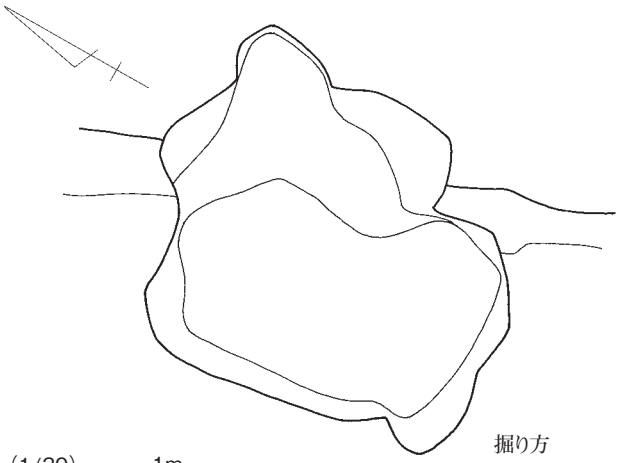
第 148 図　22 号住居址、遺物分布図



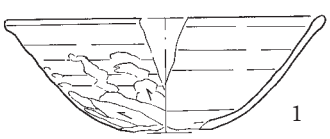


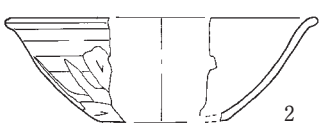
22号住居址　カマド

1　暗褐色土　黒色スコリア、焼土粒、白色土粒を含む。
2　暗褐色土　焼土塊(1cm)を含む。
3　褐色土　焼土粒、黒褐色土(1cm以下)を少量含む。
4　暗褐色土
5　暗褐色土　焼土粒、炭化粒を含む。
6　にぶい黄褐色土　白色粘土多い。焼土粒、炭化粒を含む。カマド構築土の崩落層。
7　焼土塊
8　暗褐色土　焼土粒やや多い。褐色土粒、白色土粒を含む。
9　暗褐色土　白色粘土粒を含む。
10　黄白色土　暗褐色土が混じる。
11　暗褐色土　焼土粒多い。黄色土粒を含む。
12　暗褐色土　粘性なく、ボソボソ。焼土粒(1mm～5mm)多い。
13　橙色土　焼土塊多い。
14　白色粘土
15　暗褐色土　締まりなし。焼土粒、白色粘土粒多い。
16　暗褐色土　締まりやや強い。焼土粒を少量含む。
17　橙色土　粘性がある焼土。
18　焼土塊
19　暗褐色土　砂質で締まりない。
20　白色粘土　袖部。



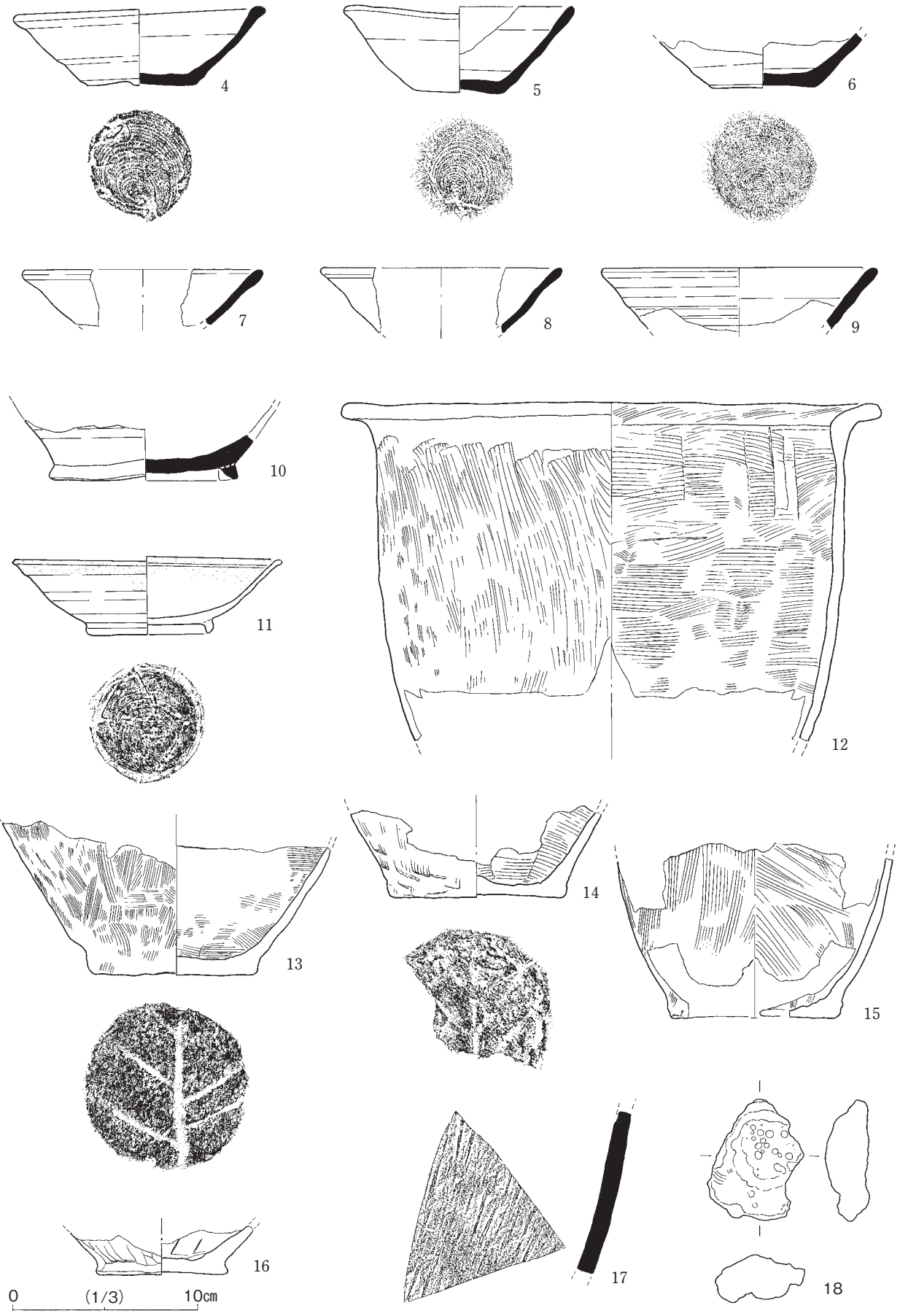
0　(1/30)　1m



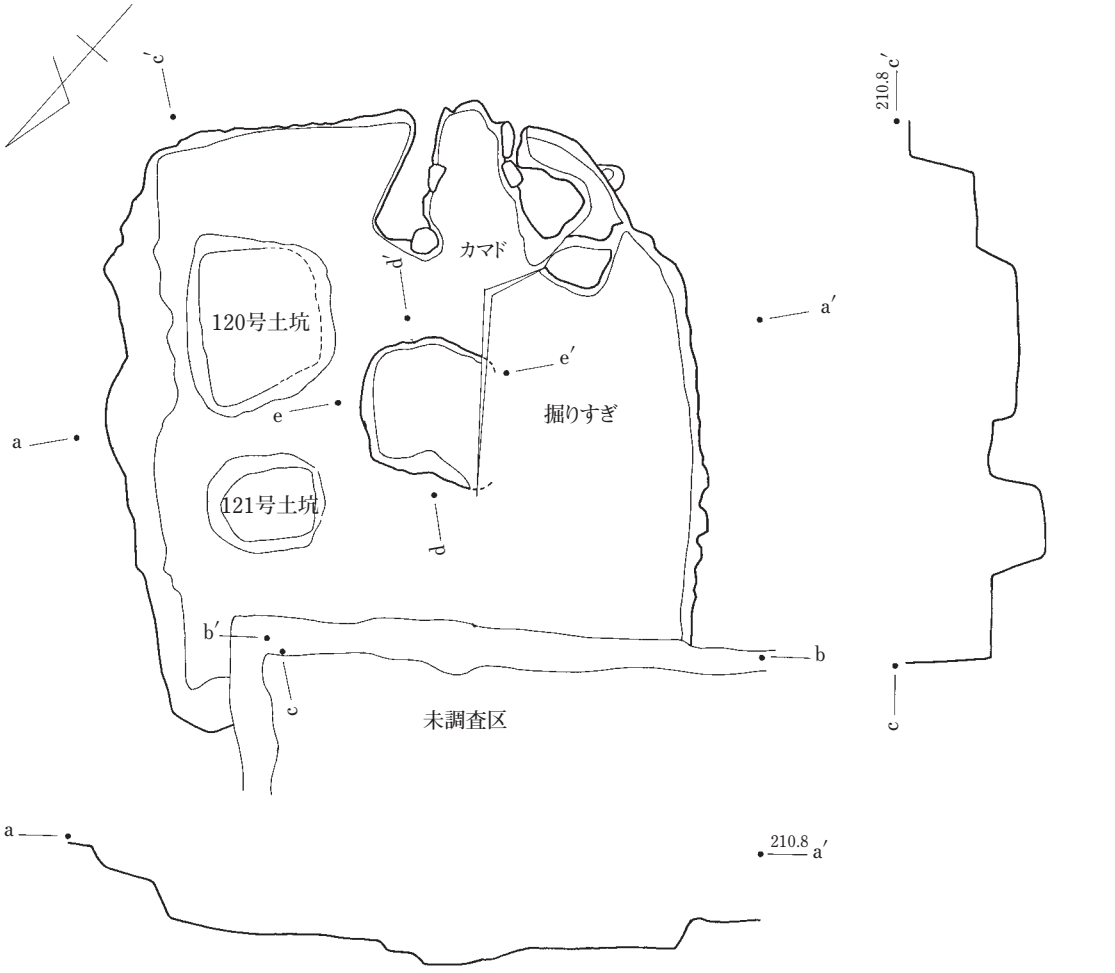


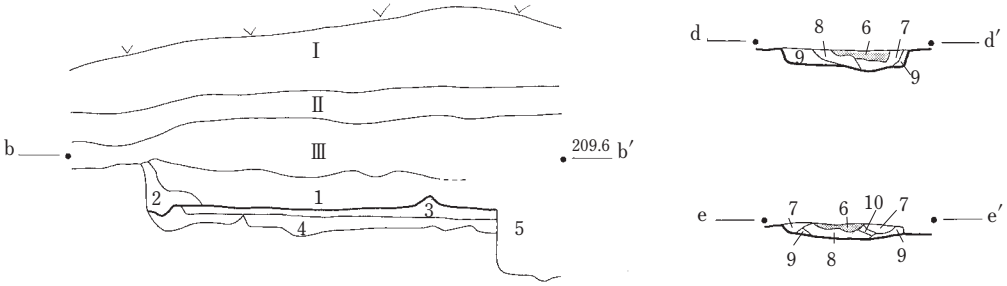
0　(1/3)　10cm

第149図　22号住居址　カマド、出土遺物（1）



第 150 図　22 号住居址　出土遺物（2）

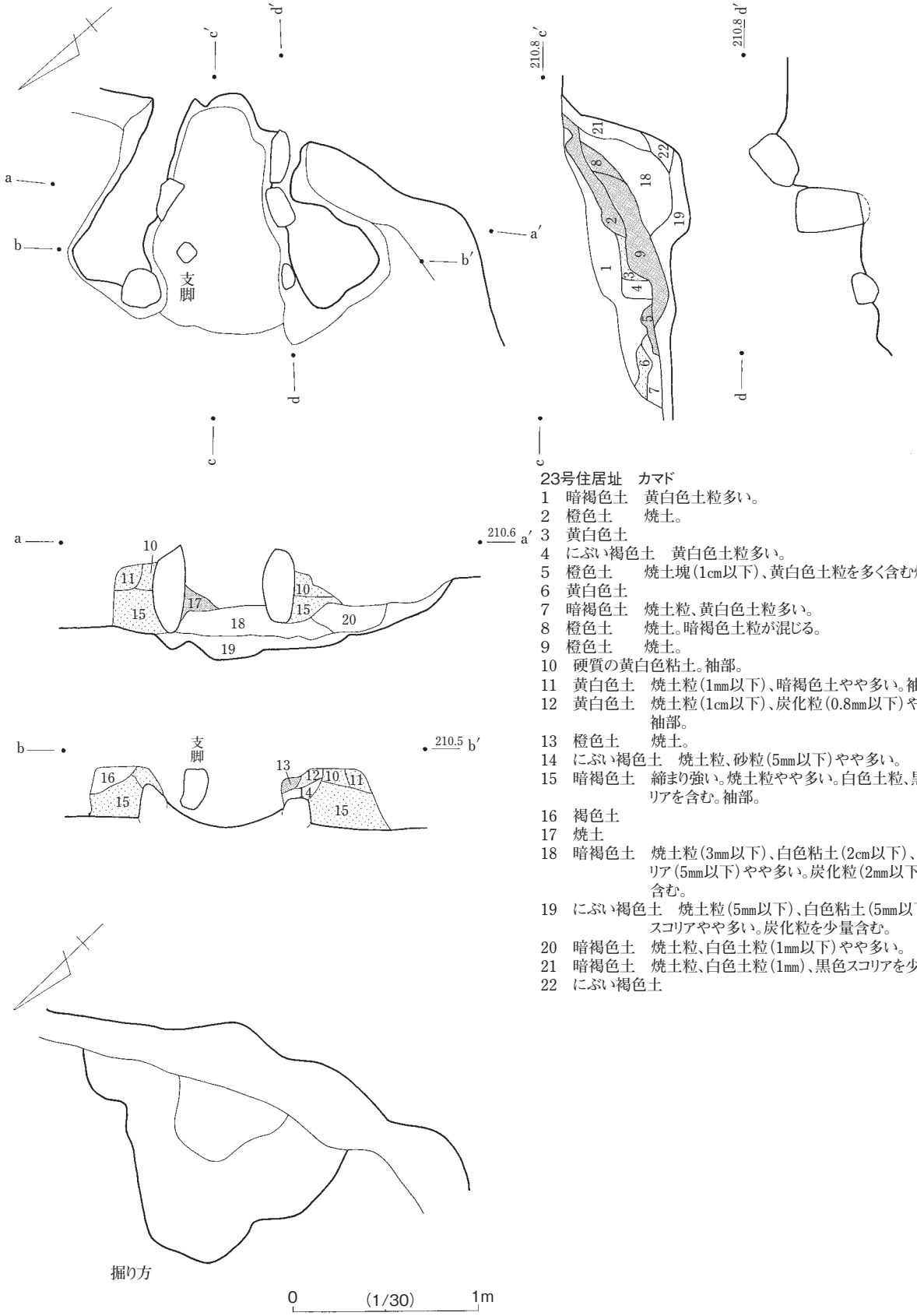




23号住居址　覆土

1　暗褐色土　粘性、締まり弱い。焼土粒、炭化粒、黄白色粘土粒、黒色スコリアやや多い。
2　暗褐色土　第1層に似るが、締まりなし。
3　にぶい褐色土　締まり強い。焼土粒、炭化粒、黄白色粘土粒、黒色スコリアやや多い。貼り床。
4　暗褐色土　粘性弱く、締まりやや強い。焼土粒、炭化粒、黄白色粘土粒、黒色スコリア、地山の褐色ローム塊を含む。
5　暗褐色土　粘性、締まり弱い。焼土粒、炭化粒、黄白色粘土粒、黒色スコリアやや多い。攪乱。
6　橙色土　やや硬質の焼土層。
7　にぶい褐色土　粘性弱く、締まりやや強い。黄白色土(1㎝～3㎝)多い。焼土粒、炭化粒(5㎜以下)やや多い。
8　暗褐色土　粘性弱く、締まりやや強い。焼土粒を極少量含む。
9　にぶい褐色土　粘性弱く、締まりやや強い。焼土粒を極少量含む。
10　にぶい褐色土　粘性弱く、締まりやや強い。焼土粒(1㎝以下)多い。黄白色土粒(5㎜以下)やや多い。

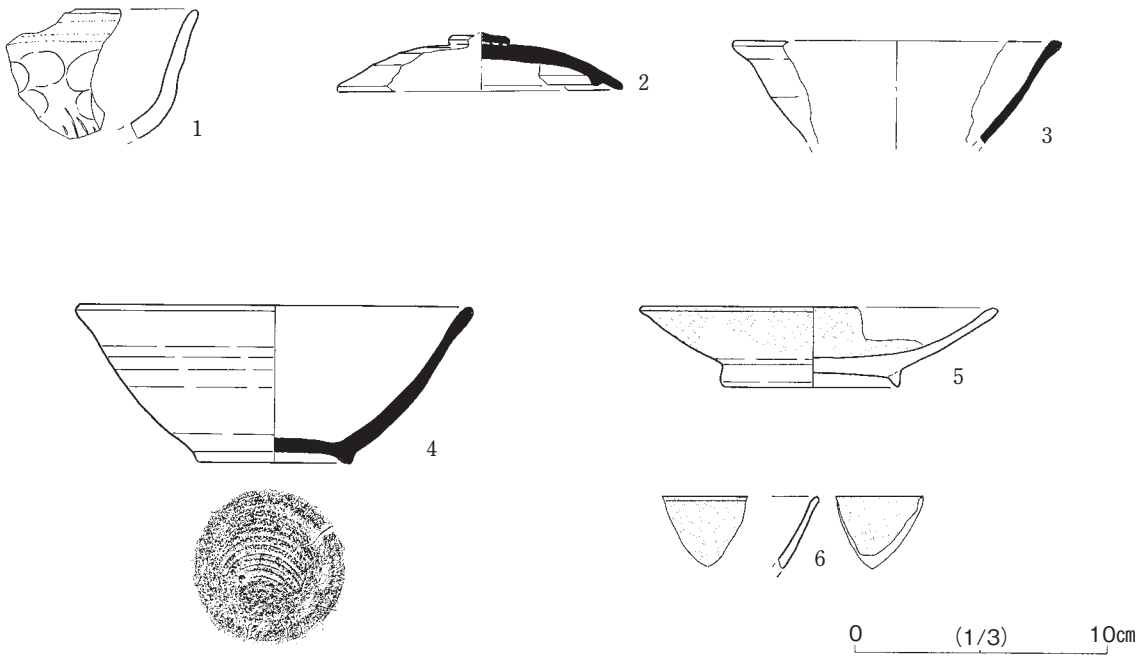
第151図　23号住居址



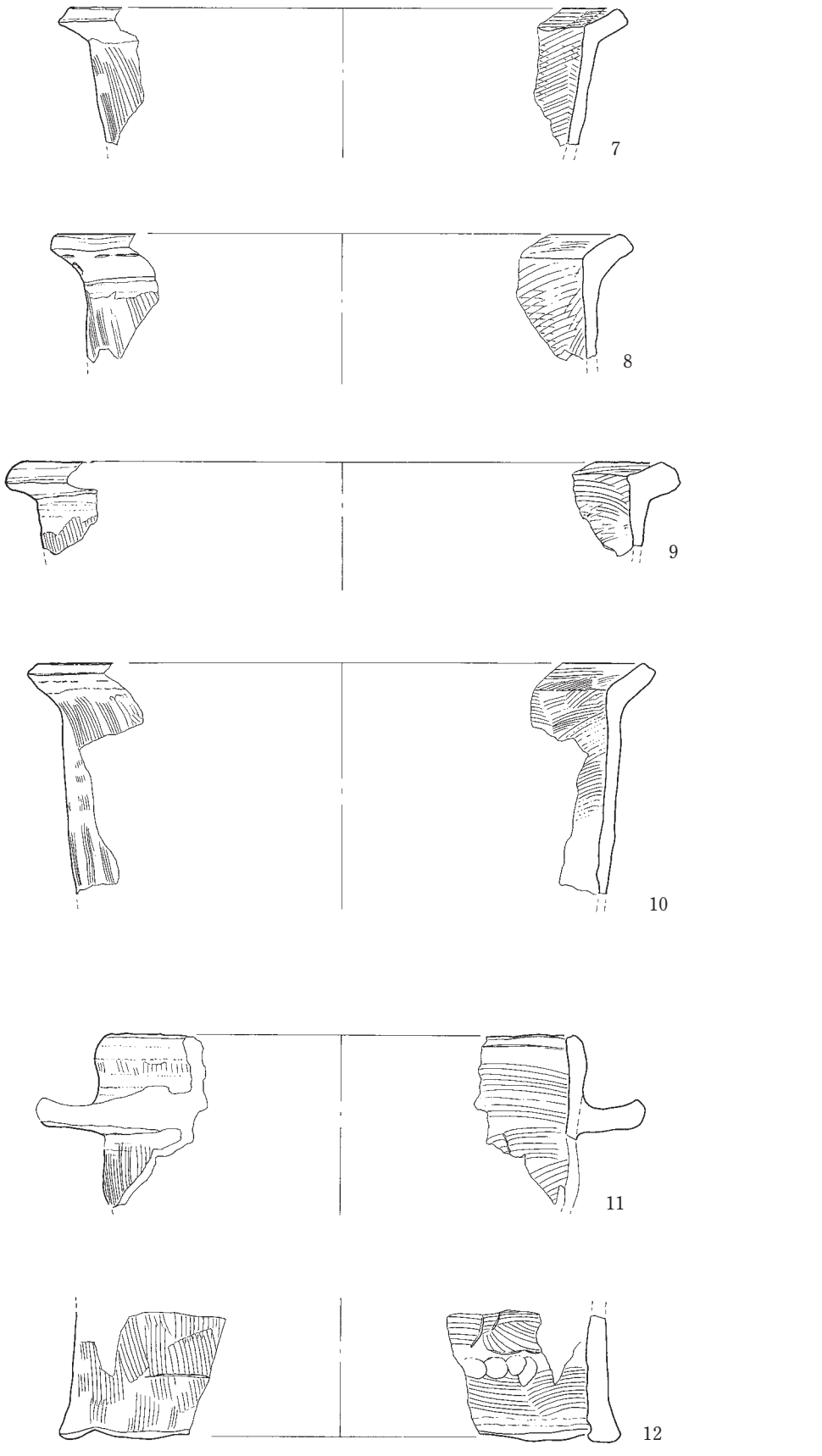
23号住居址　カマド

1　暗褐色土　黄白色土粒多い。
2　橙色土　焼土。
3　黄白色土
4　にぶい褐色土　黄白色土粒多い。
5　橙色土　焼土塊(1cm以下)、黄白色土粒を多く含む焼土層。
6　黄白色土
7　暗褐色土　焼土粒、黄白色土粒多い。
8　橙色土　焼土。暗褐色土粒が混じる。
9　橙色土　焼土。
10　硬質の黄白色粘土。袖部。
11　黄白色土　焼土粒(1mm以下)、暗褐色土やや多い。袖部。
12　黄白色土　焼土粒(1cm以下)、炭化粒(0.8mm以下)やや多い。袖部。
13　橙色土　焼土。
14　にぶい褐色土　焼土粒、砂粒(5mm以下)やや多い。
15　暗褐色土　締まり強い。焼土粒やや多い。白色土粒、黒色スコリアを含む。袖部。
16　褐色土
17　焼土
18　暗褐色土　焼土粒(3mm以下)、白色粘土(2cm以下)、黒色スコリア(5mm以下)やや多い。炭化粒(2mm以下)を少量含む。
19　にぶい褐色土　焼土粒(5mm以下)、白色粘土(5mm以下)、黒色スコリアやや多い。炭化粒を少量含む。
20　暗褐色土　焼土粒、白色土粒(1mm以下)やや多い。
21　暗褐色土　焼土粒、白色土粒(1mm)、黒色スコリアを少量含む。
22　にぶい褐色土

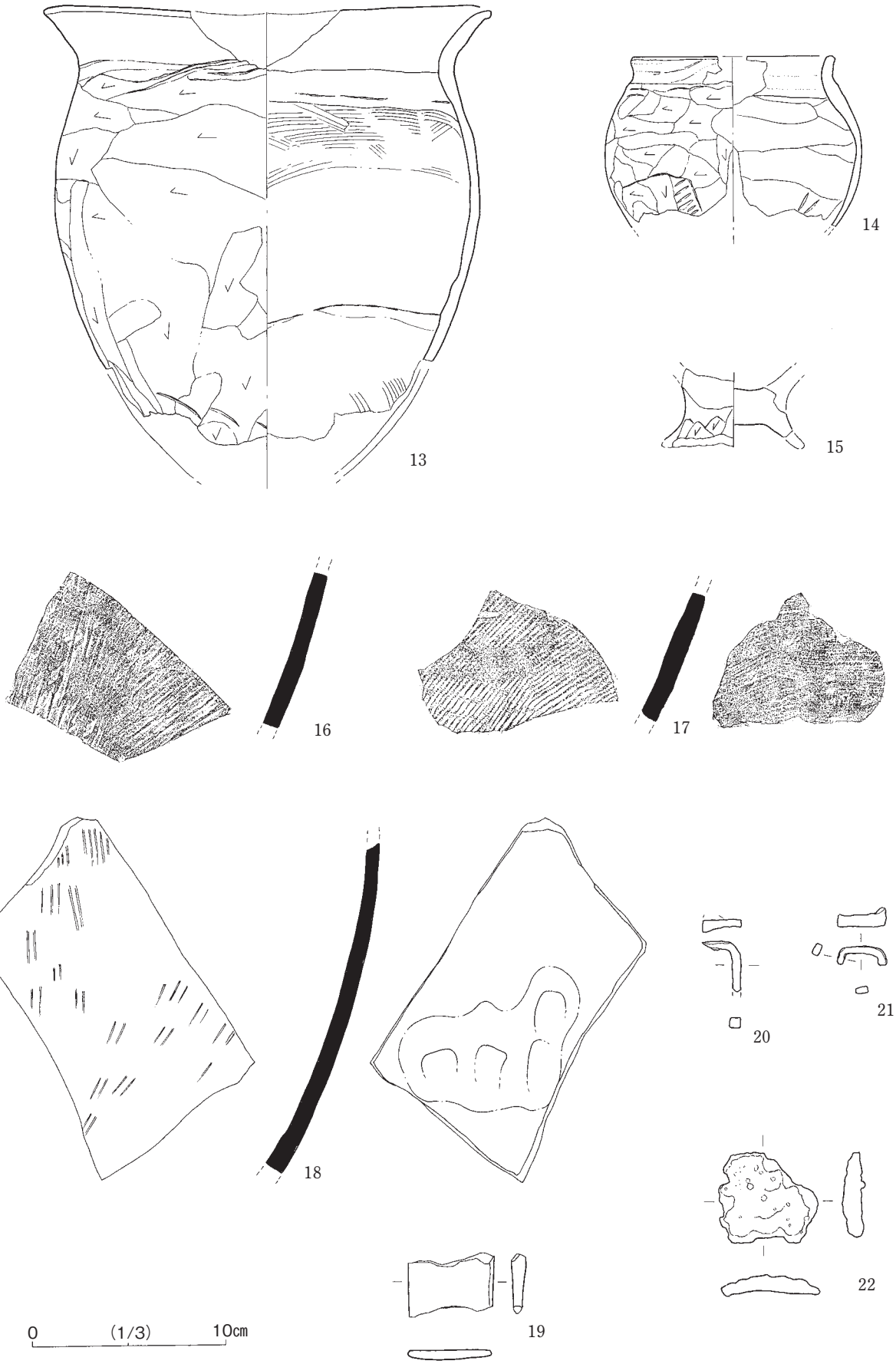
第152図　23号住居址　カマド



第 153 図　23 号住居址　遺物分布図、出土遺物（1）



第 154 図　23 号住居址　出土遺物（2）



第 155 図　23 号住居址　出土遺物（3）

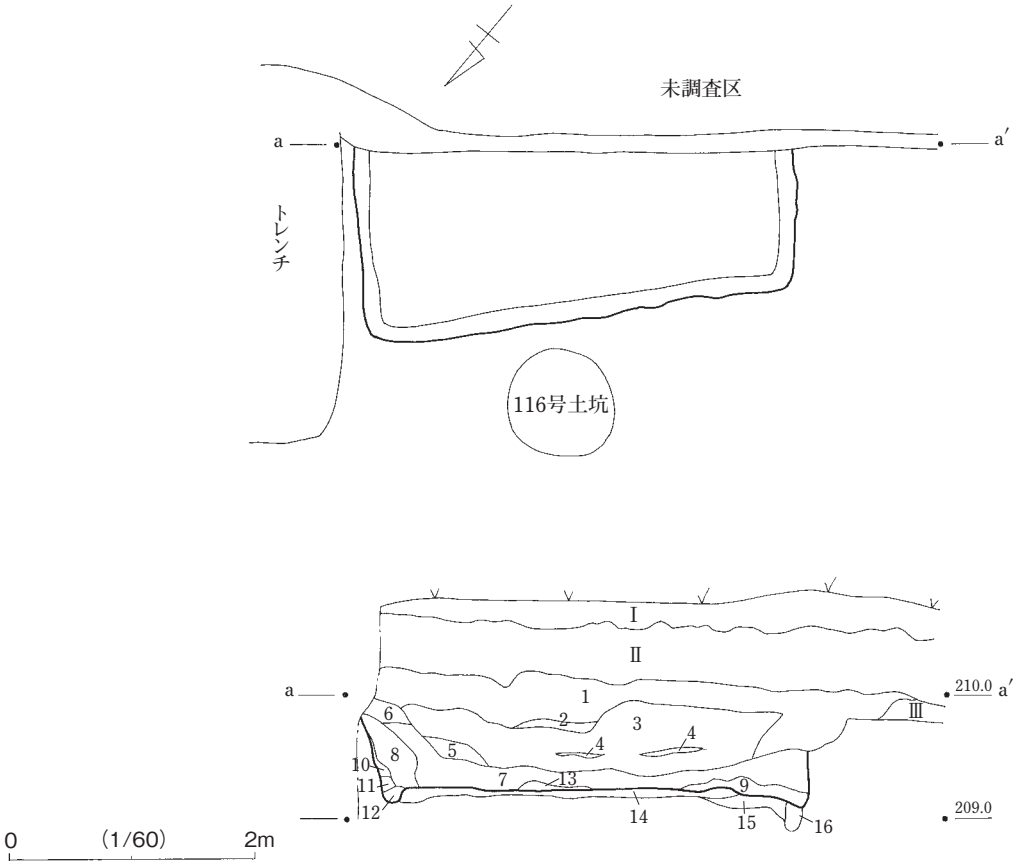
24 号住居址（第 156 ～ 157 図、図版 63）

第Ⅱ次調査で検出し、旧名称はⅠ－ 6 号住居址である。

Ｔ・Ｕ－ 21 区に位置し、大半が未調査区にかかる。確認面は第Ⅴ層だが、掘り込み面は土層観察から第Ⅳ層上面である。平面は方形と考えられ、北西壁 350㎝、北西軸方位Ｎ－ 42°－Ｅ。壁高 60㎝である。遺存状況は良い。床は第Ⅶ～Ⅷ層中に構築され、全般に貼り床が施される。覆土は粘土質の暗褐色土が厚く堆積する。柱穴やカマドは未確認である。周溝は土層断面から確認できた。

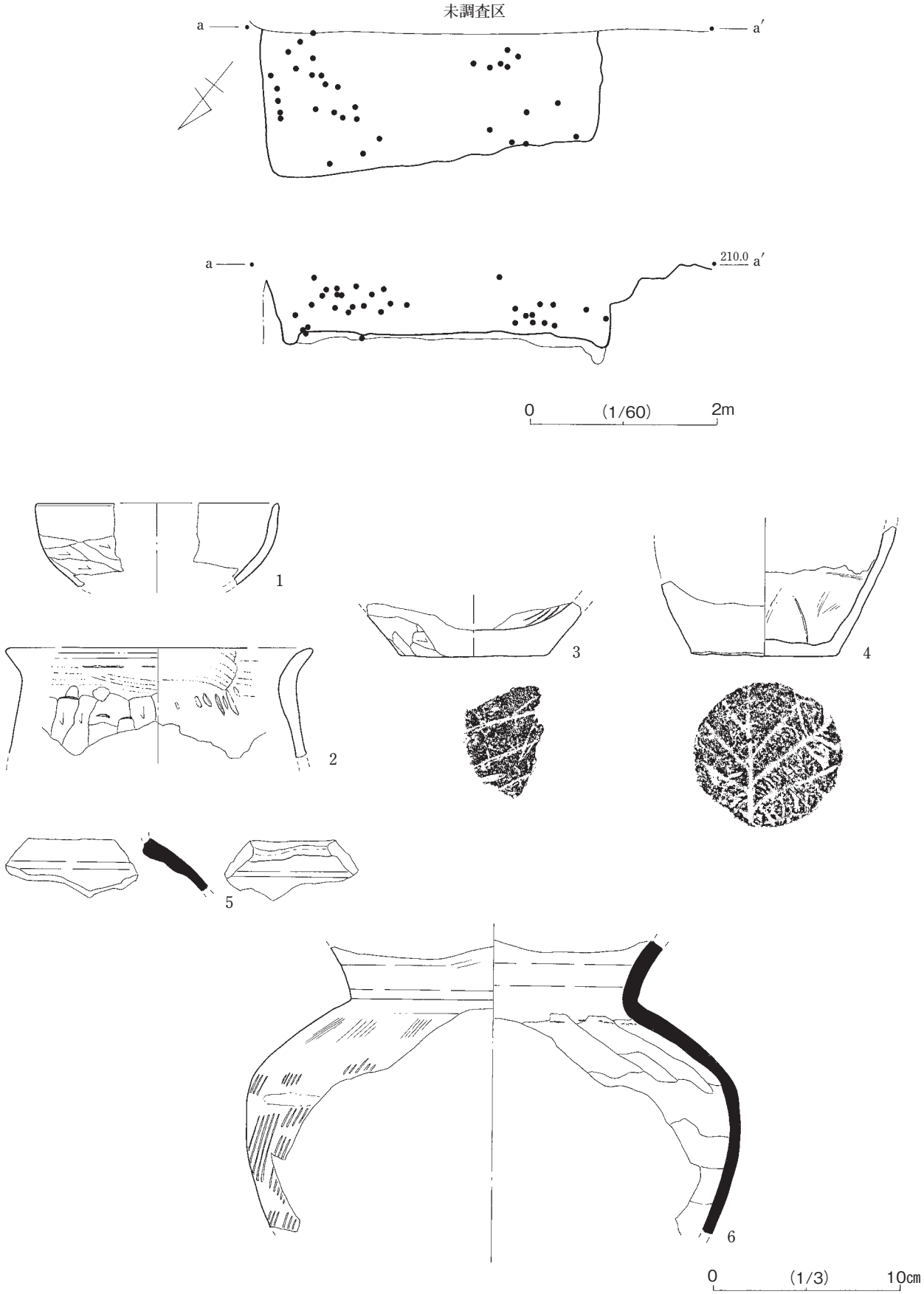
遺物は覆土中に分布する。土師器は半球形の坏（1)、ヘラ削りの甕（2・3)、相模型甕（4)、須恵器は長頸瓶（5）や酸化焔焼成の甕（6）がある。1 ～ 3 は 7 世紀代、4 は 8 世紀代に位置付けられる。

遺構の規模や主軸方位、構造、覆土が 26 号住居址に類似することから、時期を奈良時代（8 世紀前半）に推定しておきたい。



24号住居址　覆土
1　暗褐色土　粘性強い。基本第Ⅱ層由来。
2　暗褐色土　黒色スコリア（1㎜～3㎜）多い。
3　暗褐色土　粘性強く、締まり弱い。炭化粒、黒色・橙色スコリアを極少量含む。
4　暗褐色土　やわらかい。褐色土粒（1㎜以下）を含む。
5　暗褐色土　黒色スコリアやや多い。
6　暗褐色土　粘性、締まり弱い。黒色スコリア（1㎝以下）、炭化粒（3㎜以下）やや多い。
7　暗褐色土　粘性やや強く、締まりなし。黒色・橙色スコリアやや多い。炭化粒やや多く、炭化材（1㎝）目立つ。焼土粒（3㎜以下）を少量含む。
8　暗褐色土　黒色味強い。粘性、締まり弱い。黒色スコリア多い。橙色スコリアやや多い。褐色土（1㎝以下）を少量含む。
9　暗褐色土　褐色味強い。粘性、締まり弱い。焼土粒やや多い。
10　褐色土　粘性やや強く、締まりなし。暗褐色土混じる。
11　暗褐色土　粘性やや強く、締まりなし。黒色スコリアやや多い。炭化粒を極少量、褐色土を少量含む。
12　にぶい褐色土　粘性、締まり弱い。焼土粒、白色土粒（5㎜以下）やや多い。
13　暗褐色土　第9層に似るが、焼土粒少ない。
14　にぶい褐色土　粘性弱く、締まりやや強い。橙色スコリアを少量含む。貼り床。
15　暗褐色土
16　暗褐色土　褐色味強い。粘性やや強く、締まりなし。

第 156 図　24 号住居址



第 157 図　24 号住居址　遺物分布図、出土遺物

25 号住居址（第 4 図・第 158 ～ 164 図、図版 29・30・63・64）

第Ⅲ次調査で検出し、旧名称はⅠ－ 7 号住居址である。

Ⅴ･Ｗ－ 23･24 区に位置し､59 ～ 62･66 号土坑に切られる。確認･掘り込み面ともに第Ⅴ層上面である。平面は方形で、カマドを持つ。竪穴は一辺 700㎝で、遺跡内では 27 号住居址と並び最大規模の住居である。主軸方位Ｎ－ 25°－Ｅ。壁高 50㎝である。遺存状況は良い。床は第Ⅶ層中に構築され、硬化面が竪穴中央部で確認された。全般に貼り床が施される。掘り方は竪穴中央部を残して掘り込む。

覆土は暗褐色土を主体とし、第Ⅳ層由来の黒褐色土が流入する。カマド前面の覆土下層から床面にかけて礫岩（拳大から 50㎝大）がまとまって検出され（第 159 図)、竪穴の埋没過程で遺棄されたものと思われる [(1)]。覆土中で炭化種実（モモ）1 点を検出した（付編 1 参照)。

主柱穴 4 基（Ｐ 1・2・4・5）は直径 40㎝～ 60㎝、深さ 35㎝～ 75㎝で、Ｐ 3・6 は直径 25㎝～ 40㎝、深さ 10㎝～ 20㎝である。周溝はカマド部分と北西・南東隅付近を除いて検出され、幅 20㎝、深さ 10㎝～ 20㎝である。

カマドは北東壁の中央にあり、天井石や煙道の側石、袖石が遺存する。焚き口から煙道部先端まで約 170㎝、両袖部の最大幅 110㎝である。煙道部は壁を 90㎝掘り込む。袖部は礫、暗褐色土、黄白色粘土が使われる。火床部は床面を 20㎝掘り込んで構築される。カマド火床面で炭化材(モミ属)や炭化種実(トチノキなど)、中・小型獣のものと見られる多数の骨片を検出した（付編 1・2 参照)。

土坑はカマド右側の貼り床直下で 1 基を検出した。平面は不整円形で、直径 70㎝、深さ約 13㎝である。内部に白色粘土を含む。

遺物は覆土から床面に分布する。土器の一部に他遺構との接合関係が認められ、4・12・16・20 は 30 号住居址と、覆土中の土器は 15 号住居址 5 と接合する。

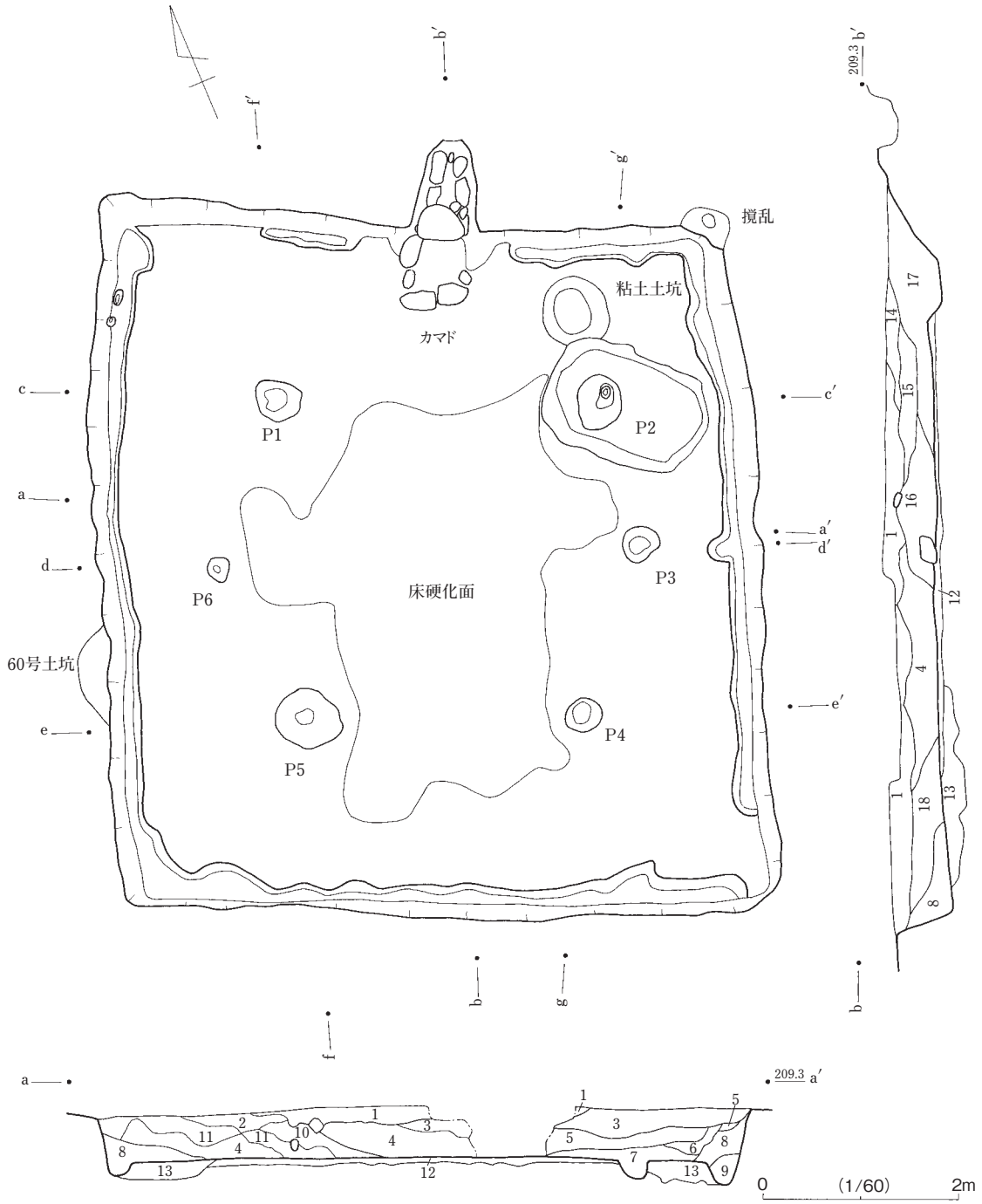
土師器は坏（1 ～ 9)、鉢（21・22・28)、長胴甕（23 ～ 26)、胴張甕（27）がある。坏は半球形（1 ～ 5)、口縁が外反する丸底坏（6・7)、小型で浅い坏（8・9）がある。9 は赤彩した比企型坏で、口縁の屈曲が緩やかなことから比企型坏の最終段階に位置付けられる。長胴甕(23)はカマド火床でまとまって出土した。26 は胴部下半を横削りする。

須恵器は坏蓋（10 ～ 13)、坏（14 ～ 20)、甕（29・30）がある。坏蓋と坏は、素地の気泡が膨張した灰色の不良品（10・13、15 ～ 18）と緻密な胎土で灰白色の良品（11・12・19・20）に分けられる。不良品は擬宝珠状つまみでかえりが付く坏蓋（口径 12.0㎝）と半球形の坏身（口径 10.5㎝～ 11㎝）からなり､湖西窯編年第Ⅲ期第 2 小期に相当する。良品は擬宝珠状つまみでかえりが付く坏蓋(口径 13.8㎝)とかえりがないものがあり、坏身（口径 13.3㎝）は平底気味である。良品は東海地方からの搬入品と思われ、湖西窯編年第Ⅲ期第 3 小期に相当する。

この他、床面に鉄製刀子（31・32）が出土し、編物石が広く散在していた。

時期は遺物から古墳時代後期（7 世紀後半）と考えられる。

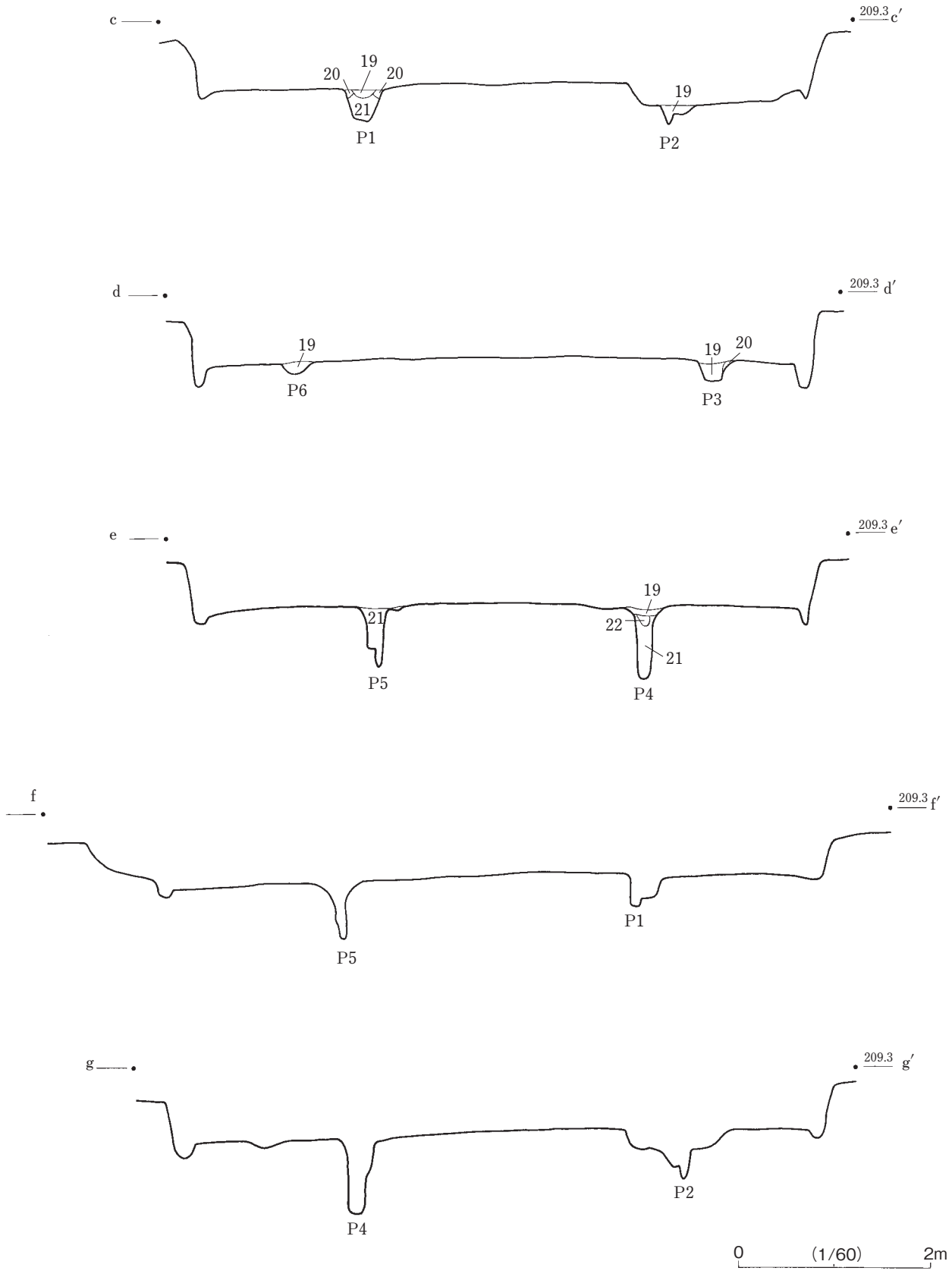
註 1　脱稿後、同様の事例として奈良時代の焼失住居内に礫溜り状の礫堆積を含む事例を知った（中川他 2014)。報告書では周辺の類例と併せた検討により、屋根上に配された礫が崩落した可能性を指摘しており興味深い。中川真人他 2014『小倉原西遺跡』相模原市埋蔵文化財調査報告 45　相模原市教育委員会



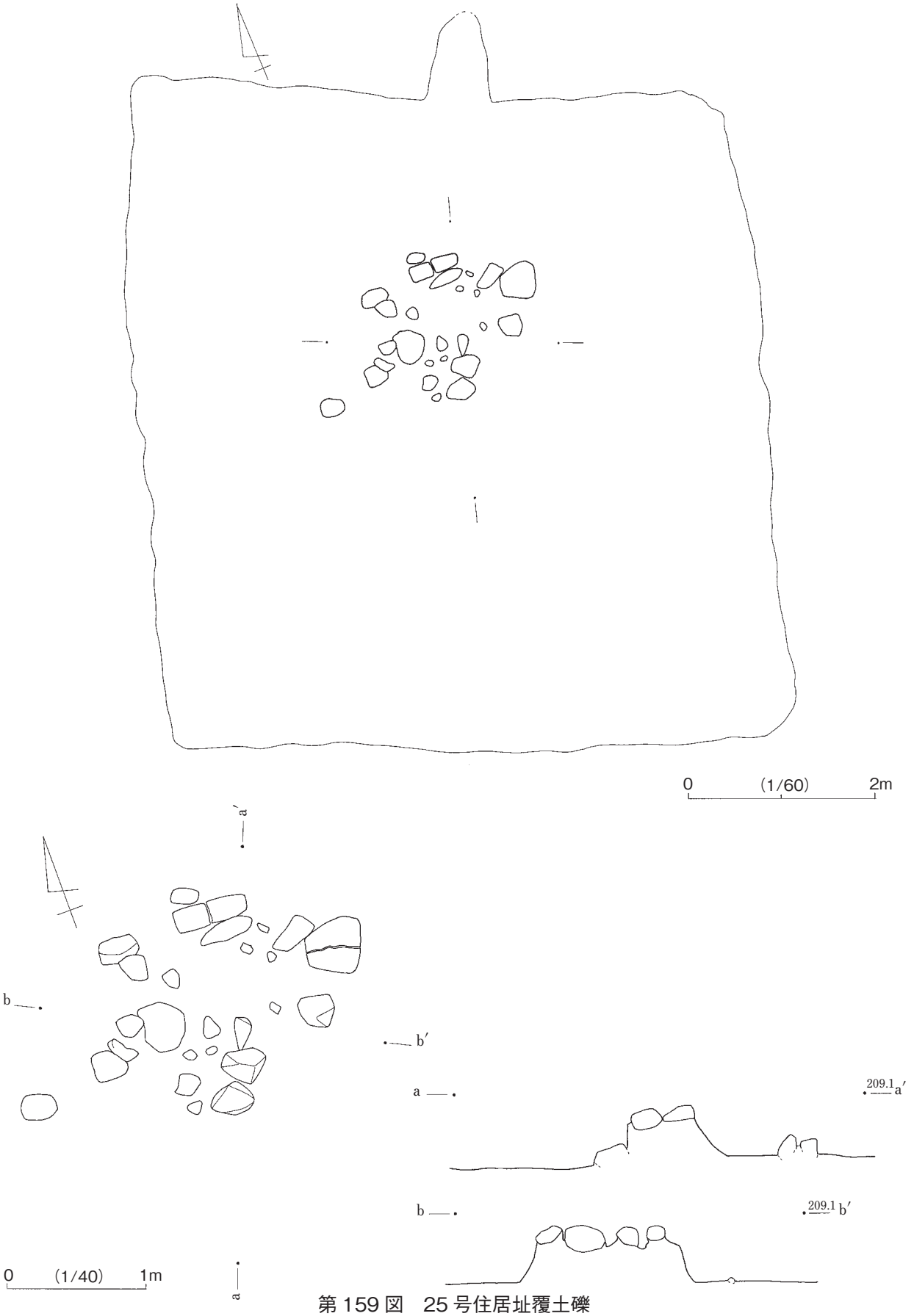
25号住居址　覆土

1　暗褐色土　焼土粒、炭化粒を少量含む。黒色・橙色スコリアやや多い。
2　暗褐色土　第1層に似るが、締まり弱い。
3　暗褐色土　焼土粒、炭化粒、白色土粒、黒色・橙色スコリアやや多い。褐色土、黒褐色土(5㎜～2㎝)を含む。
4　暗褐色土　焼土、白色土(1㎝)を少量含む。
5　黒褐色土　褐色土(2㎝以下)多い。焼土粒、炭化粒を含む。黒色スコリアやや多い。基本第Ⅳ層由来。
6　暗褐色土　黒褐色土(1㎝～3㎝)を含む。
7　暗褐色土　褐色土(3㎝以下)、黒色スコリア多い。炭化粒やや多い。
8　暗褐色土　締まりなし。炭化粒、黒褐色土、褐色土、黒色スコリアを少量含む。
9　暗褐色土　第8層を基調とし、褐色土塊多い。
10　暗褐色土　褐色味強い。
11　暗褐色土　褐色土、黒色スコリア多い。黒褐色土やや多い。
12　暗褐色土　締まり強い。貼り床。
13　暗褐色土　地山ローム塊多い。
14　暗褐色土　第1層に似るが、焼土粒多い。
15　暗褐色土　焼土、白色土多い。褐色土やや多い。黒褐色土を少量含む。
16　暗褐色土　焼土・白色土(1㎝)を少量含む。
17　カマド覆土
18　暗褐色土　褐色味強い。
19　暗褐色土　褐色土多い。ピット覆土。
20　褐色土　ピット覆土。
21　暗褐色土　締まりなくパサパサ。ピット覆土。
22　暗褐色土　締まりなくパサパサ。褐色土多い。ピット覆土。

第158図　25号住居址

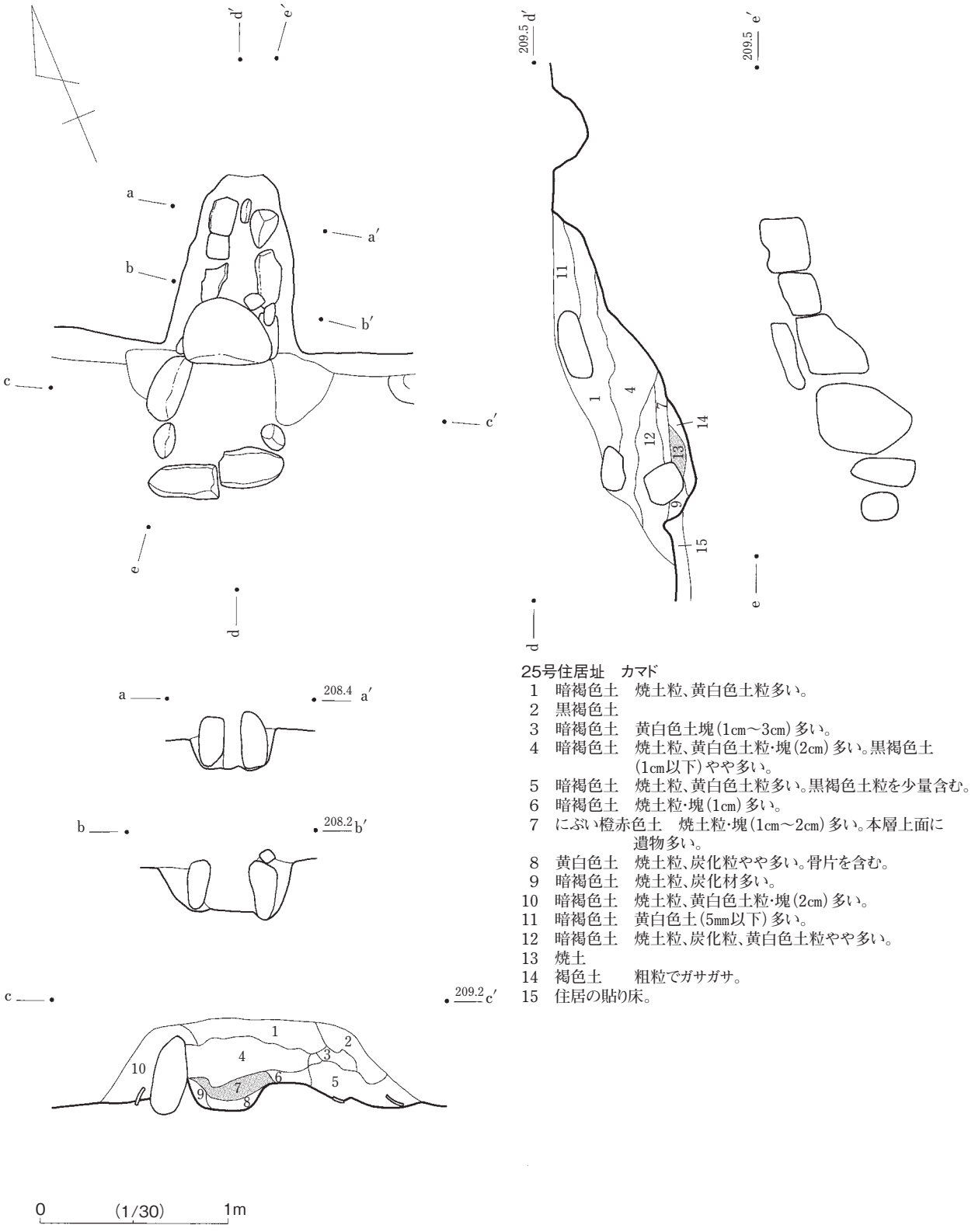


第 158 － 1 図　25 号住居址



第 159 図　25 号住居址覆土礫

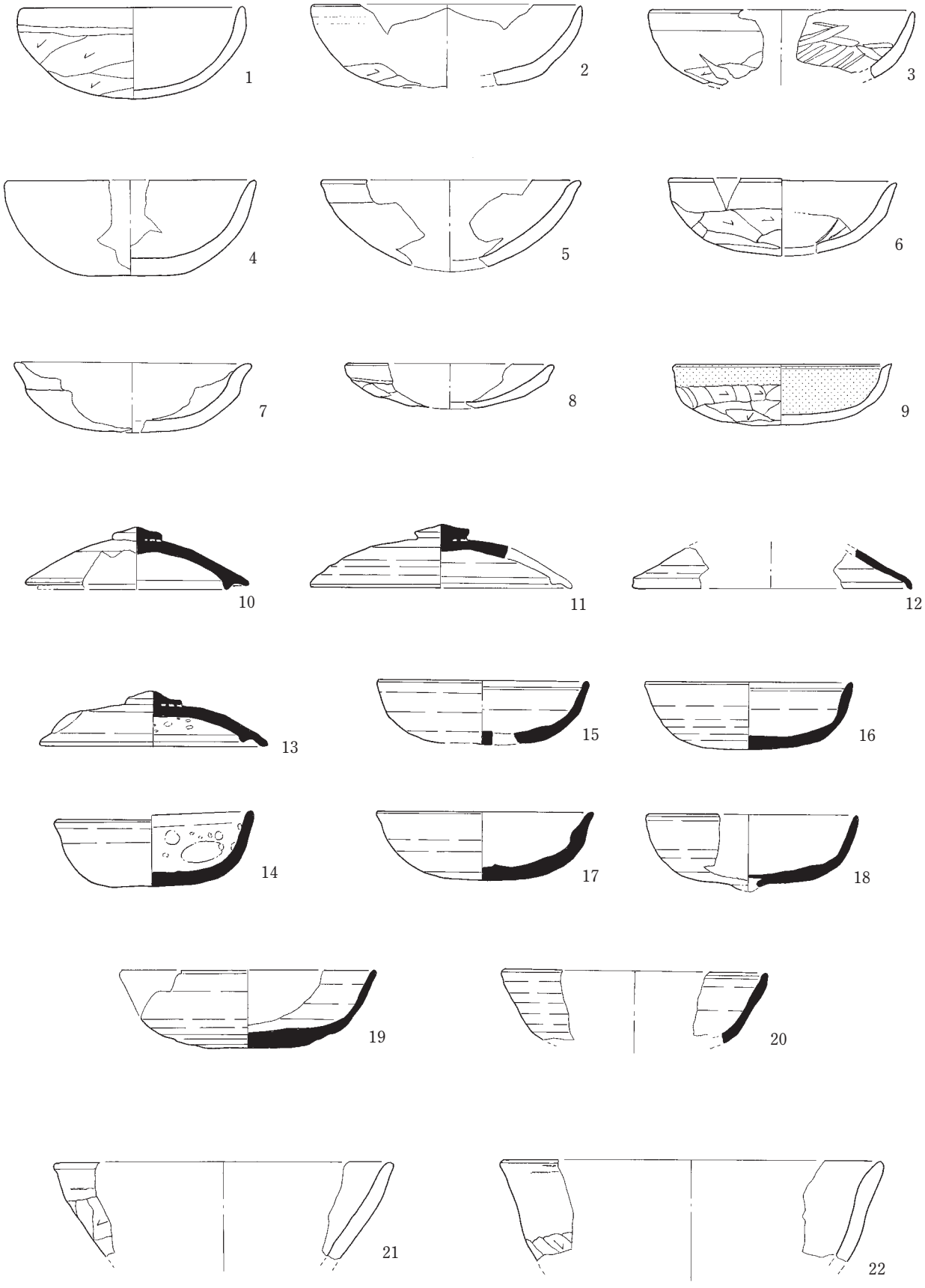
第 160 図　25 号住居址　遺物分布図



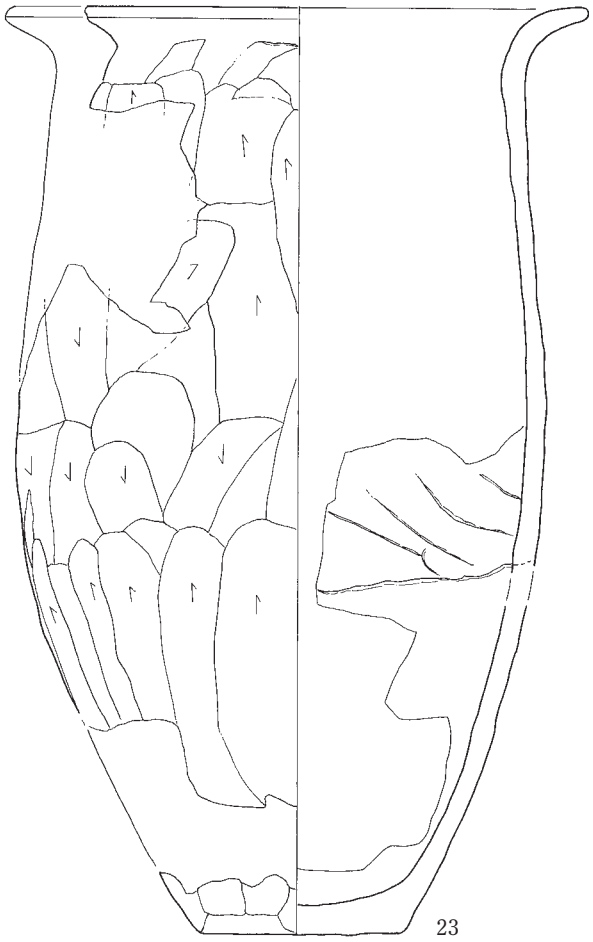
25号住居址　カマド

1　暗褐色土　焼土粒、黄白色土粒多い。
2　黒褐色土
3　暗褐色土　黄白色土塊(1cm～3cm)多い。
4　暗褐色土　焼土粒、黄白色土粒･塊(2cm)多い。黒褐色土(1cm以下)やや多い。
5　暗褐色土　焼土粒、黄白色土粒多い。黒褐色土粒を少量含む。
6　暗褐色土　焼土粒･塊(1cm)多い。
7　にぶい橙赤色土　焼土粒･塊(1cm～2cm)多い。本層上面に遺物多い。
8　黄白色土　焼土粒、炭化粒やや多い。骨片を含む。
9　暗褐色土　焼土粒、炭化材多い。
10　暗褐色土　焼土粒、黄白色土粒･塊(2cm)多い。
11　暗褐色土　黄白色土(5mm以下)多い。
12　暗褐色土　焼土粒、炭化粒、黄白色土粒やや多い。
13　焼土
14　褐色土　粗粒でガサガサ。
15　住居の貼り床。

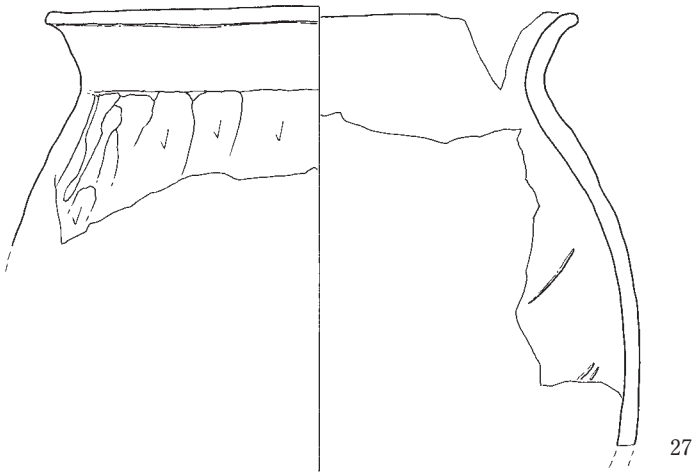
第161図　25号住居址　カマド

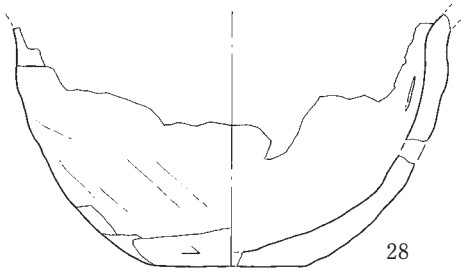


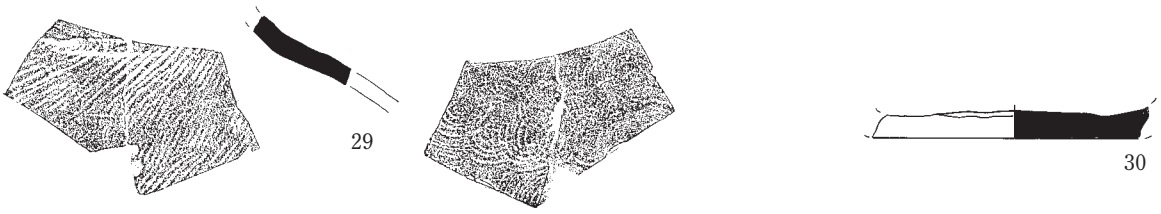
第 162 図　25 号住居址　出土遺物（1）



第 163 図　25 号住居址　出土遺物（2）







0 (1/3) 10cm

第 164 図　25 号住居址　出土遺物（3）

26 号住居址（第 165 ～ 167 図、図版 31・64）

第Ⅲ次調査で検出し、旧名称はⅠ－ 8 号住居址である。

Ｒ・Ｓ－ 28 区に位置し、27 号住居址を切って構築され、92・93 号土坑に切られる。確認面は第Ⅳ層上面である。平面は方形で、カマドを持つ。竪穴は長軸 420㎝・短軸 340㎝、主軸方位Ｎ－ 46°－Ｅ。壁高 65㎝である。遺存状況は良い。全般に貼り床が施される。覆土は暗褐色土を主体とし、上層は粘土質で覆われる。焼土層が壁際から床面にかけて分布する。

柱穴はない。周溝はカマド部分を除き全周し、幅 15㎝～ 30㎝、深さ 15㎝～ 25㎝である。

カマドは北東壁の東寄りにある。白色粘土を使った天井の一部と袖部が遺存する。煙道部は壁を 170㎝掘り込み、火床部は床面を 10㎝掘り込んで構築される。土坑はカマドの前面で 1 基を検出した。平面は不整円形で、直径 120㎝、深さは 20㎝～ 30㎝である。壁はなだらかで、内部に白色粘土を含む。

遺物は主に覆土中で出土した。土師器甕（3 ～ 10）、須恵器の坏蓋（1）、高台付坏（2）、甕（11）がある。土師器甕の大半はナデ調整の相模型甕で占められるが、3 は堀之内原タイプと呼ばれる在地土器に相当する。須恵器の坏蓋は退化したかえりが付くことから、7 世紀末から 8 世紀初頭に位置付けられる。4・7・8 はカマド煙道の底面で出土したが、他は覆土中に流入したものと考えられる。

時期は遺物から奈良時代（8 世紀前半）と考えられる。

27 号住居址（第 168 ～ 171 図、図版 31・65）

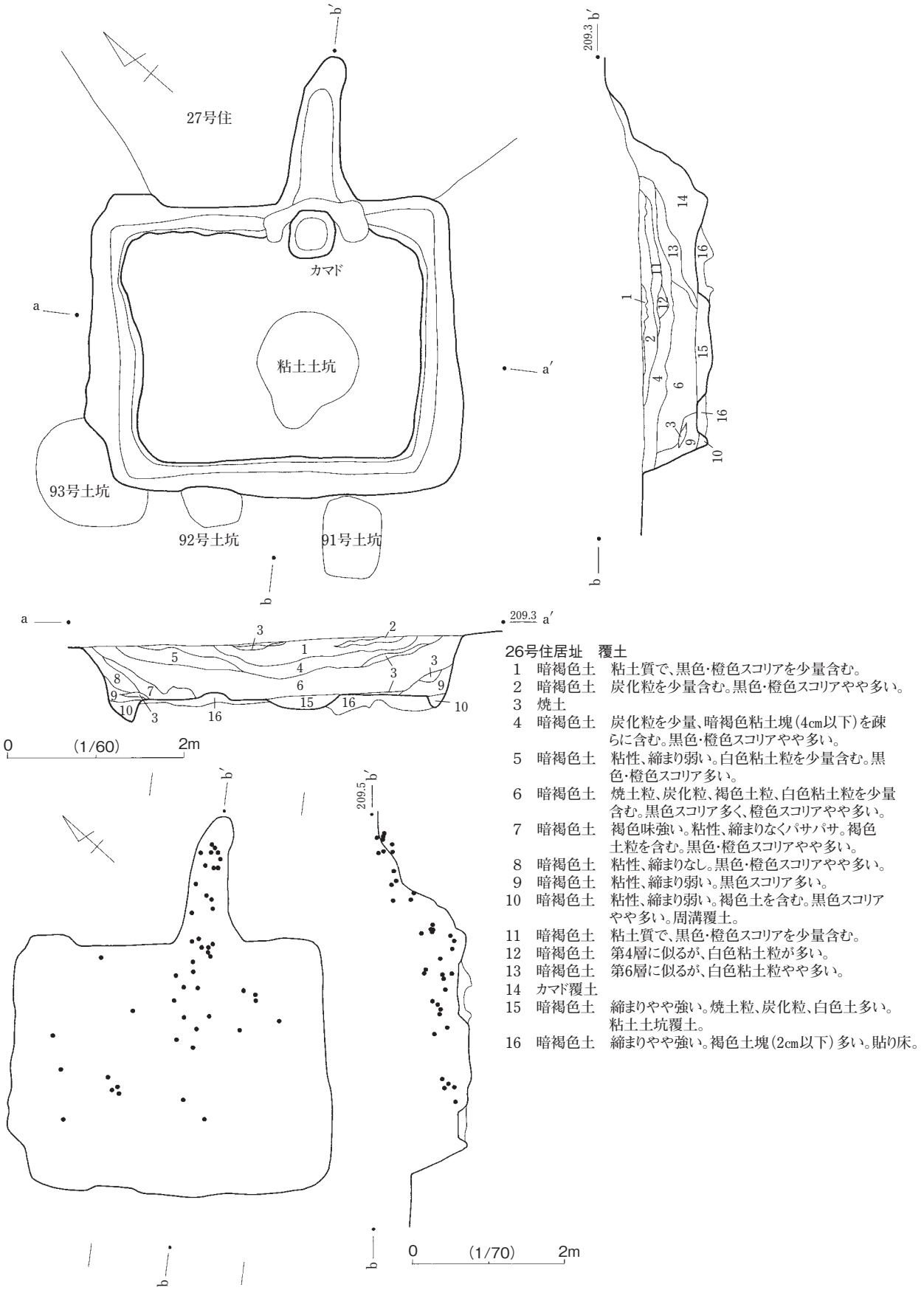
第Ⅲ次調査で検出し、旧名称はⅠ－ 9 号住居址である。

Ｑ・Ｒ－ 27・28 区に位置し、北半部が未調査区にかかる。26 号住居址、58 号土坑に切られる。確認面は第Ⅶ層上面だが、掘り込み面は土層観察から第Ⅳ層上面である。平面は方形と考えられる。東西 700㎝を測り、遺跡内の住居では 25 号住居址と並び最大規模である。主軸方位Ｎ－ 15°－Ｅ。壁高 60㎝である。遺存状況は比較的良い。床は第Ⅶ層中に構築され、全般に貼り床が施される。覆土は暗褐色土を主体とし、第Ⅳ層由来の黒褐色土が壁際から床面にかけて分布する。

主柱穴と考えられるピット 3 基（Ｐ 1 ～Ｐ 3）は、長軸 100㎝～ 130㎝、深さ 80㎝～ 90㎝を測る。Ｐ 4・Ｐ 5 は主柱穴に近接し、直径 40㎝、深さ 25㎝～ 35㎝を測る。Ｐ 4 で柱痕と考えられる土層（幅 15㎝）を確認し、脆い礫と多数の炭化材及び炭化種実（モモ）や微細な白色繊維の塊が含まれる。同様の白色繊維は 31 号住居址カマド火床部でも検出され、分析の結果ではススキやタケの灰に由来する可能性が指摘されている（付編 1 参照）。Ｐ 6・Ｐ 7 は南壁際に位置し、Ｐ 6 の直径 50㎝、Ｐ 7 の長軸 30㎝、深さはいずれも約 10㎝である。周溝は幅 20㎝～ 25㎝、深さ 10㎝である。カマドは未確認である。

遺物は主として覆土中に分布し、土器の一部に 1 号土器集中部と接合関係が認められる（3・5・11）。土師器は椀（5）、小形甕（6）、胴張甕（7）、長胴甕（8 ～ 13）がある。他に体部ヘラ削りの半球形の坏や口縁が外反する丸底坏の細片が出土している。5 は床面焼土中の出土で、内外面が煤けている。6・7 は南壁際の覆土下層で出土し、7 は胴部がヘラ磨きされる。長胴甕は最大径が口縁部にあり、比較的硬質なものや下半部を斜位に削るものが含まれる。須恵器は、かえりが付く坏蓋（1）、坏（2・3）、底部が突出する高台付坏（4）、甕（14・15）、瓶（16・17）がある。1 は湖西窯編年第Ⅲ期第 3 小期、4 は第Ⅳ期に相当する。銅製の飾り金具（18）は覆土下層で出土した。円形金具（直径 2.2㎝）の外面に列点状の細かな刻みが加えられ、中心を鋲が貫く。鋲の一端に方形の座金が付く。この他、編物石が覆土下層から床面に広く散在する。

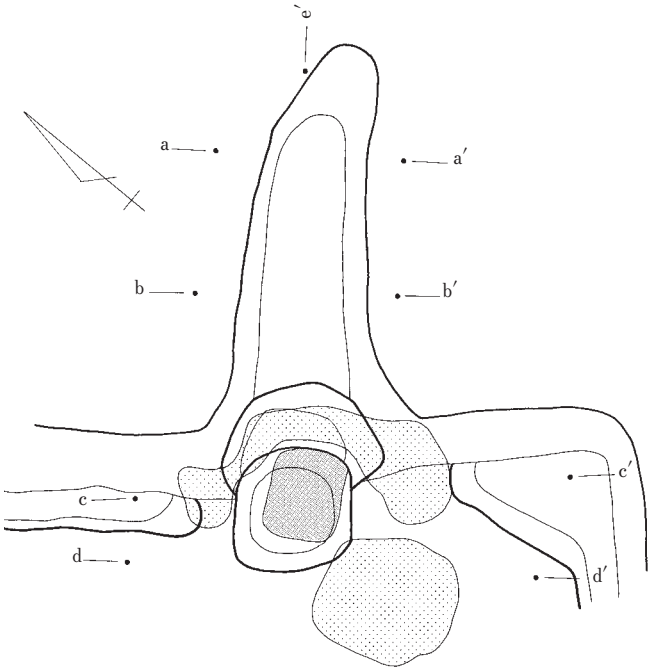
住居の時期は古墳時代後期（7 世紀）で捉えられる。

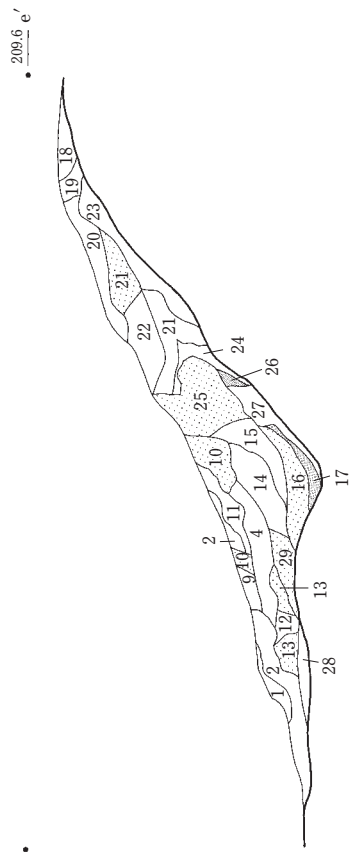


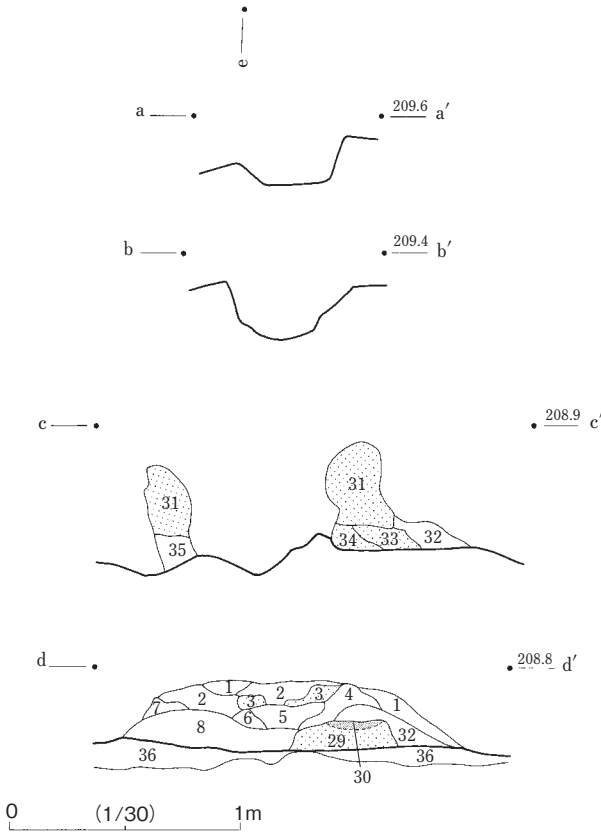
26号住居址　覆土

1　暗褐色土　粘土質で、黒色・橙色スコリアを少量含む。
2　暗褐色土　炭化粒を少量含む。黒色・橙色スコリアやや多い。
3　焼土
4　暗褐色土　炭化粒を少量、暗褐色粘土塊（4㎝以下）を疎らに含む。黒色・橙色スコリアやや多い。
5　暗褐色土　粘性、締まり弱い。白色粘土粒を少量含む。黒色・橙色スコリア多い。
6　暗褐色土　焼土粒、炭化粒、褐色土粒、白色粘土粒を少量含む。黒色スコリア多く、橙色スコリアやや多い。
7　暗褐色土　褐色味強い。粘性、締まりなくパサパサ。褐色土粒を含む。黒色・橙色スコリアやや多い。
8　暗褐色土　粘性、締まりなし。黒色・橙色スコリアやや多い。
9　暗褐色土　粘性、締まり弱い。黒色スコリア多い。
10　暗褐色土　粘性、締まり弱い。褐色土を含む。黒色スコリアやや多い。周溝覆土。
11　暗褐色土　粘土質で、黒色・橙色スコリアを少量含む。
12　暗褐色土　第4層に似るが、白色粘土粒が多い。
13　暗褐色土　第6層に似るが、白色粘土粒やや多い。
14　カマド覆土
15　暗褐色土　締まりやや強い。焼土粒、炭化粒、白色土多い。粘土土坑覆土。
16　暗褐色土　締まりやや強い。褐色土塊（2㎝以下）多い。貼り床。

第 165 図　26 号住居址、遺物分布図



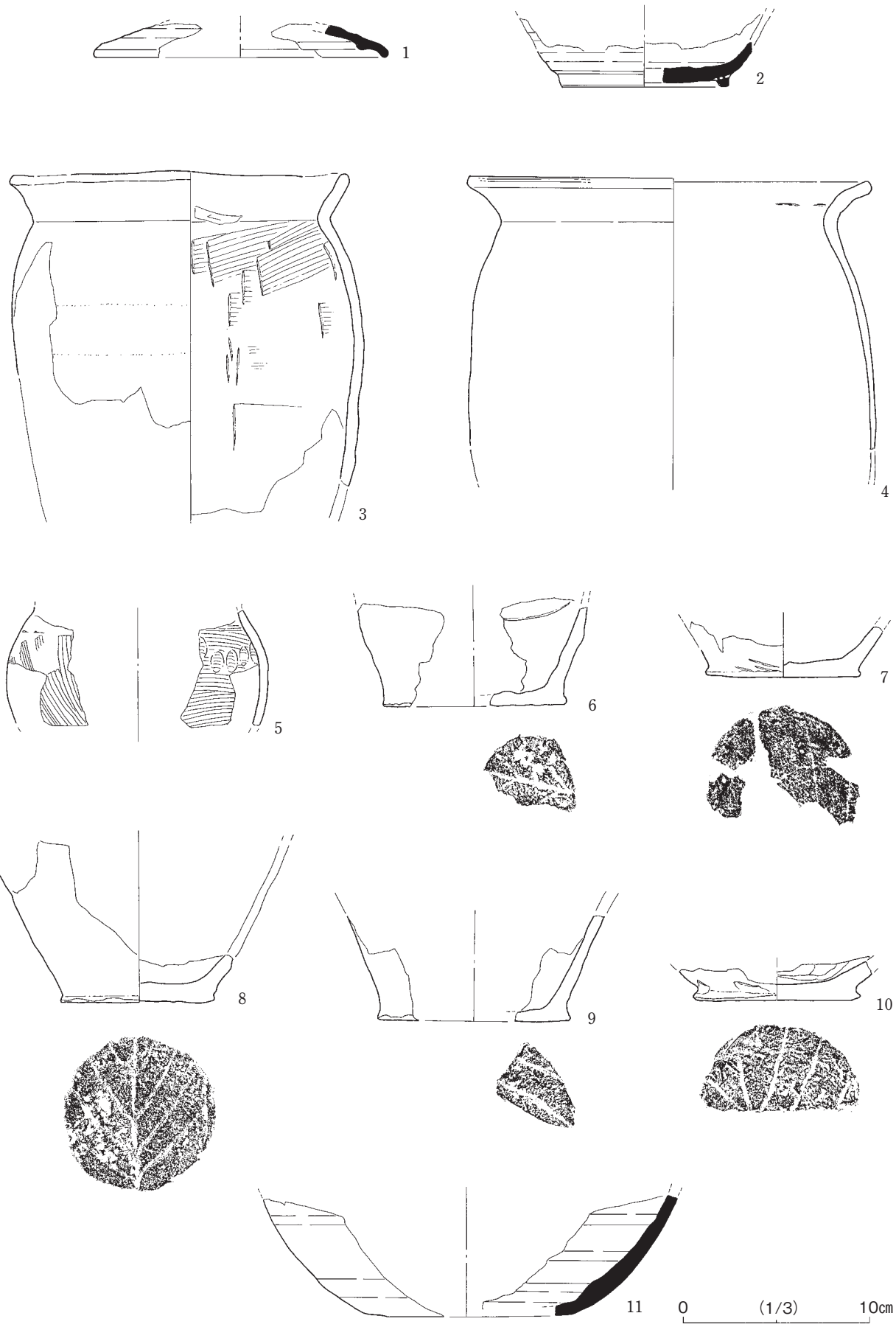




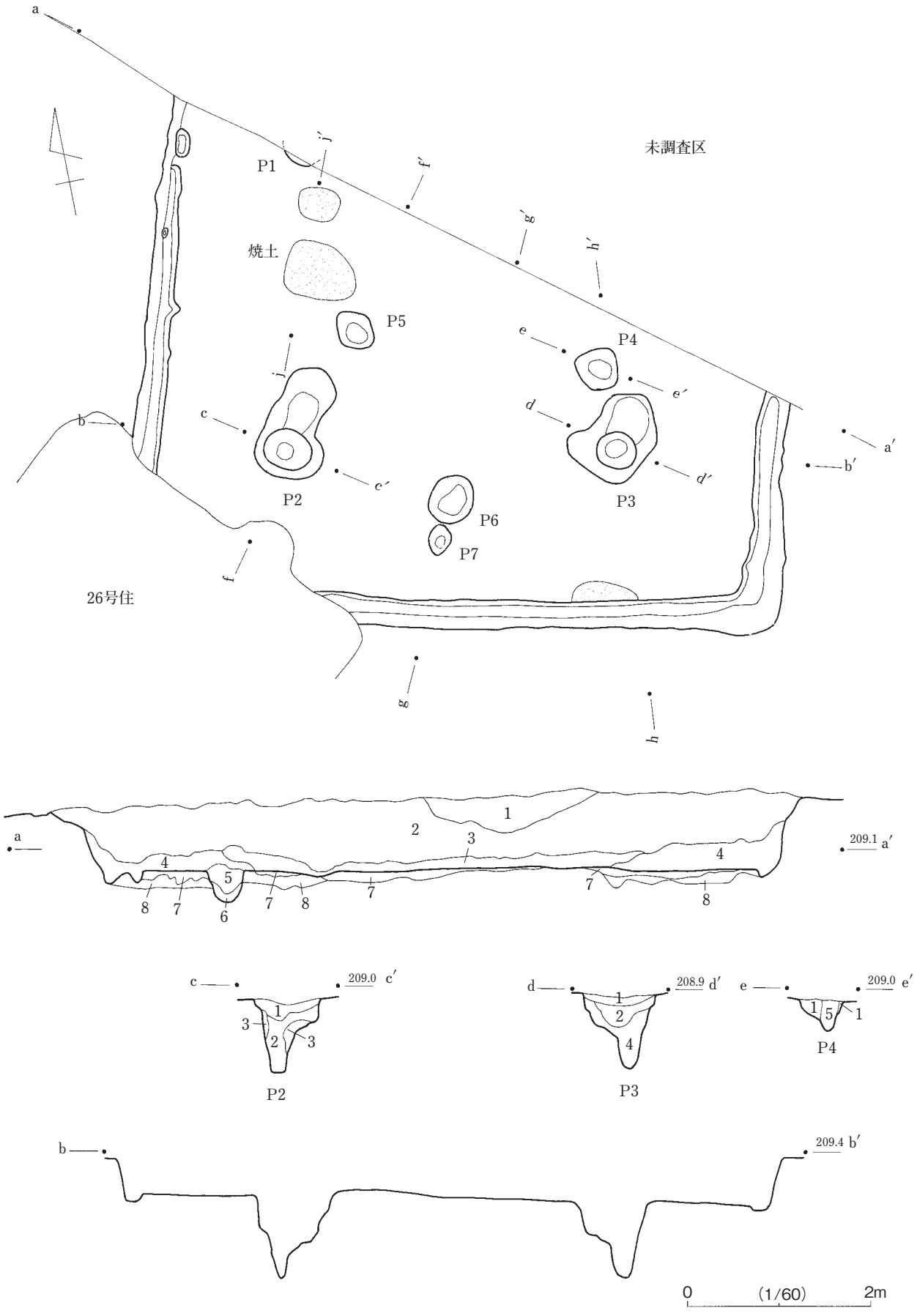
26号住居址　カマド

1　暗褐色土　焼土粒、白色土粒を少量含む。黒色スコリアを含む。
2　暗褐色土　焼土粒、白色土粒多い。
3　白色粘土塊
4　暗褐色土　焼土粒、白色土粒を少量含む。
5　暗褐色土　焼土粒、白色土粒、褐色土粒やや多い。
6　褐色土　締まり弱い。
7　暗褐色土　焼土粒(1㎜)やや多い。
8　暗褐色土　白色粘土多い。土器片多い。
9　暗褐色土　焼土粒、白色土粒やや多い。
10　白色粘土塊
11　暗褐色土　白色土粒多い。
12　暗褐色土　焼土粒・白色土粒(5㎜～6㎜)多い。
13　暗褐色土　黄白色土塊(2㎝～5㎝)多い。
14　暗褐色土　焼土やや多い。黄白色土粒、褐色土(1㎝)を含む。
15　暗褐色土　焼土(1㎝以下)、白色土(2㎝以下)多い。
16　黄白色土　焼土粒、黒褐色土多い。炭化粒、炭化材(1㎝)やや多い。
17　焼土純層
18　暗褐色土　焼土粒、黒色スコリアを少量含む。
19　暗褐色土　締まりなくパサパサ。白色土粒やや多い。
20　暗褐色土　白色土粒、黒色スコリアやや多い。
21　白色土　焼土粒、炭化粒やや多い。黒褐色土、暗褐色土が多く混じる。
22　暗褐色土　第21層に似るが、白色土がやや少ない。
23　暗褐色土　黒色味強い。白色土粒、黒色スコリアやや多い。
24　暗褐色土　焼土粒、炭化粒、白色土やや多い。
25　白色土　暗褐色土(2㎝以下)やや多く混じる。
26　橙色土　白色土がわずかに焼土化。
27　暗褐色土　焼土粒、白色土粒多い。黒色スコリアやや多い。
28　褐色土　締まりやや強い。
29　黄白色土　袖部
30　焼土　第29層が被熱、焼土化。
31　白色土　黒褐色土(1㎝以下)を少量含む。袖部。
32　暗褐色土　焼土、白色土塊(1㎝～2㎝)やや多い。
33　褐色土　締まり強い。白色土粒を極少量含む。袖部。
34　暗褐色土　締まり強い。第33層が混じる。袖部。
35　暗褐色土　締まり弱い。白色土粒を少量含む。黒色スコリア多い。
36　暗褐色土　貼り床

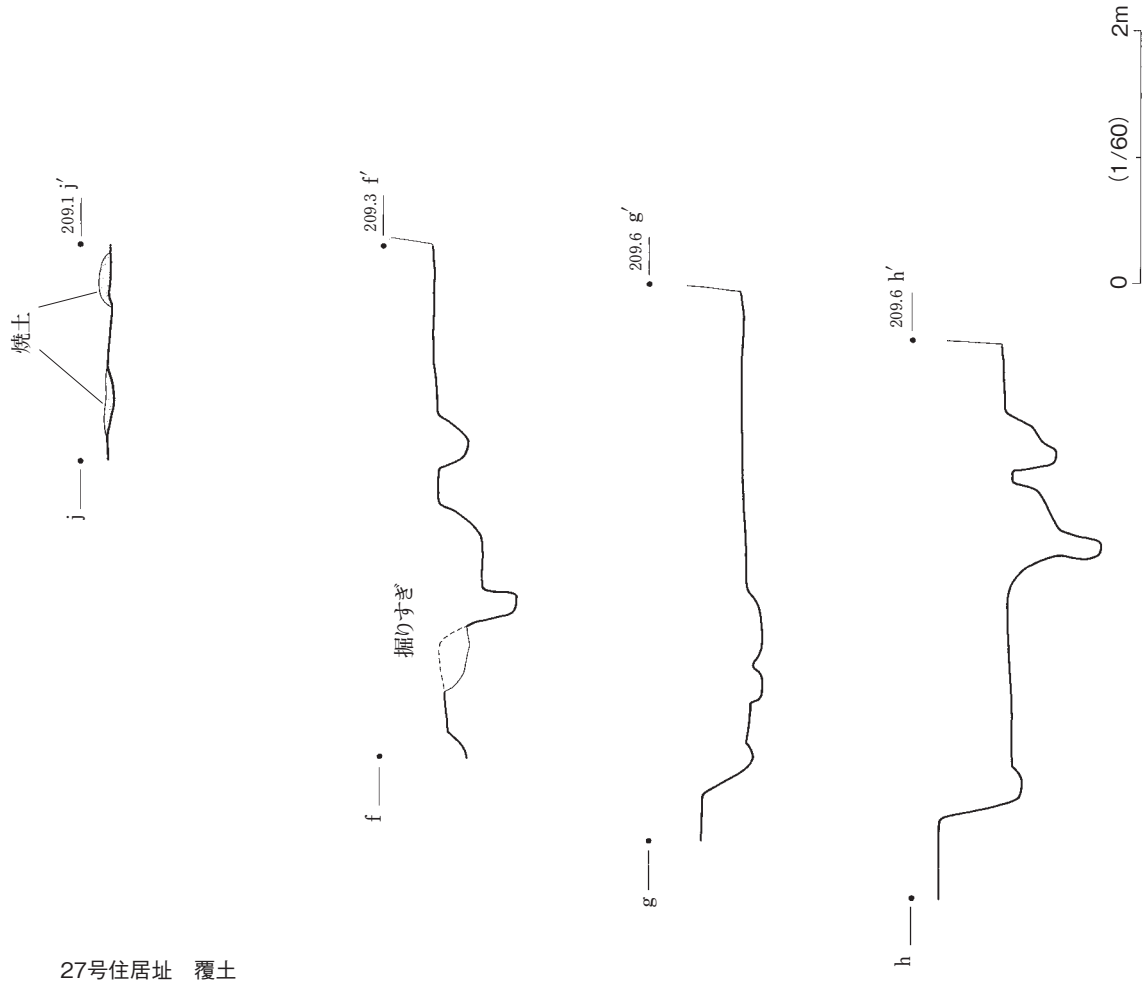
第166図　26号住居址　カマド



第 167 図　26 号住居址　出土遺物



第 168 図　27 号住居址

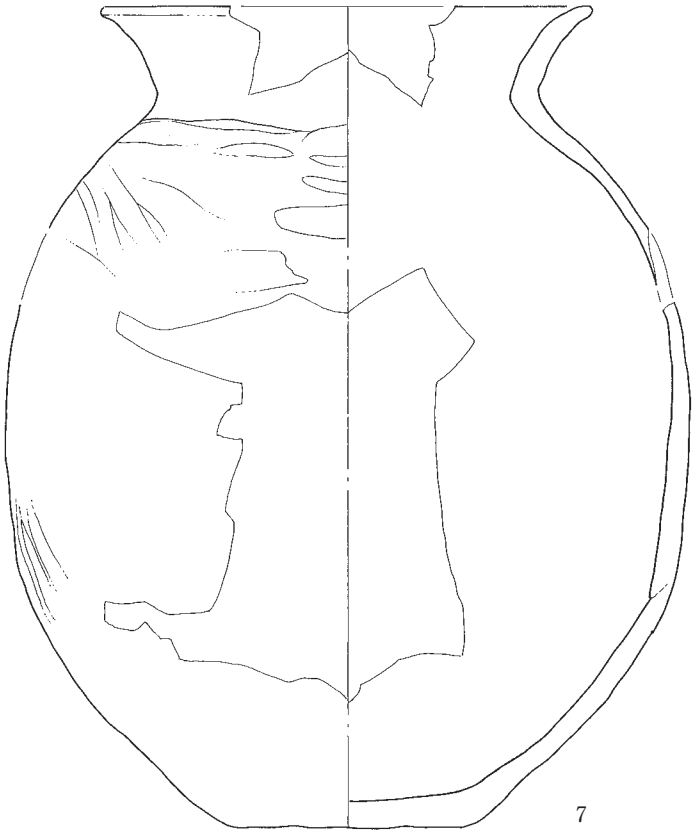


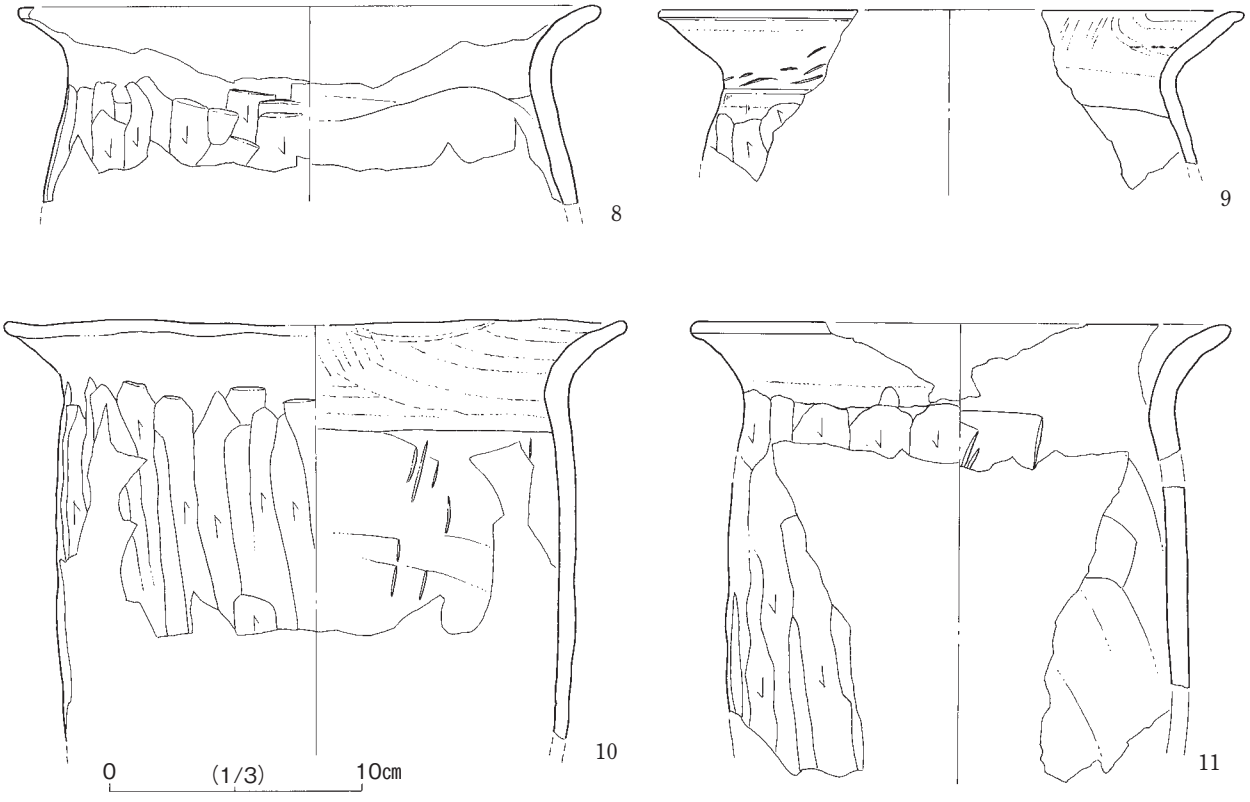
27号住居址　覆土
1　暗褐色土　黒色スコリア多い。
2　暗褐色土
3　暗褐色土　焼土粒、炭化粒やや多い。黒色スコリア多い。
4　黒褐色土　黒色スコリア多い。基本第Ⅳ層由来。
5　黒褐色土　黒色スコリア多い。
6　暗褐色土　締まり弱い。
7　褐色土　　締まり強い。貼り床。
8　暗褐色土　黒色スコリアやや多い。掘り方覆土。

27号住居址　ピット
1　暗褐色土　締まり弱い。黒色スコリア（5㎜以下）やや多い。褐色土粒を少量含む。
2　黒褐色土　締まり弱い。黒色スコリアを少量含む。
3　暗褐色土　締まりやや強い。
4　褐色土　　締まり弱い。
5　暗褐色土　締まりない。炭化材（2㎝以下）多い。P4柱痕。

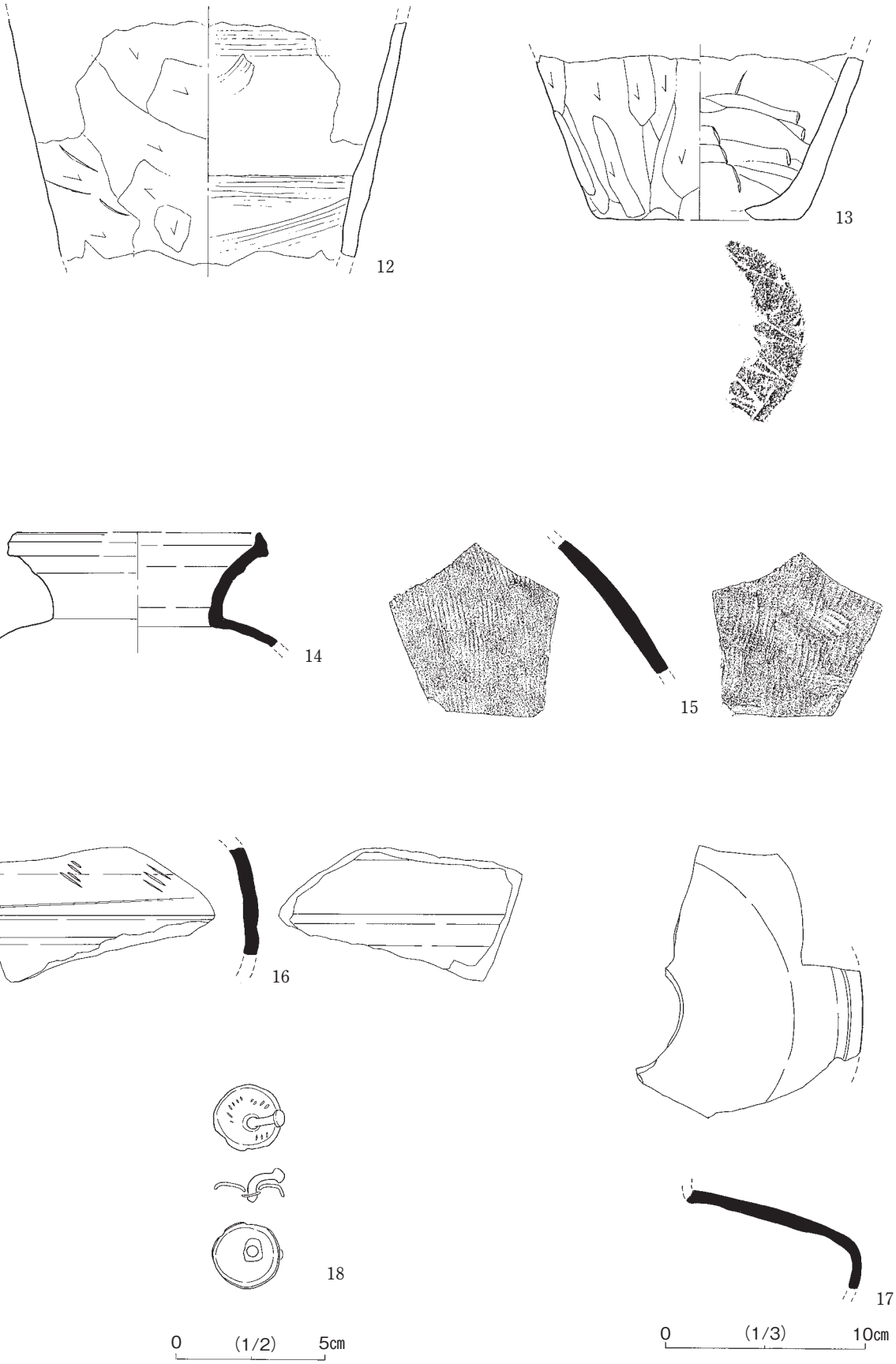
第168－1図　27号住居址

第 169 図　27 号住居址　遺物分布図、出土遺物（1）





第 170 図　27 号住居址　出土遺物（2）



第 171 図　27 号住居址　出土遺物（3）

28 号住居址（第 172 ～ 173 図、図版 31・32・65）

第Ⅲ次調査で検出し、旧名称はⅠ－ 10 号住居址である。

Ｊ－ 13 区に位置し、確認面は第Ⅸ層上面である。平面は方形と考えられ、東壁 330㎝を測る。カマドを持つ。壁高は斜面下方に向けて低くなり、西壁は失われている。東壁高は 20㎝を測る。主軸方位Ｎ－ 40°－Ｅ。遺存状況は悪い。床は第Ⅸ層中に構築され、硬化面や貼り床は認められなかった。覆土は第Ⅳ層由来の黒褐色土を主体とする。柱穴、周溝はない。カマドは北壁にあり、白色粘土を使った袖の一部が遺存する。煙道部の形状は不明である。火床部は床面を 10㎝掘り込んで構築される。

遺物は床面で土師器の盤状坏（1・2）、長胴甕（3）が出土した。坏は口径 15.5㎝で、底部手持ちヘラ削り後に内外が丁寧に磨かれる。1 は口唇部内面に沈線が巡る。甕は堀之内原タイプと呼ばれる在地土器に相当し、口縁がゆがみ、接合痕が明瞭に残るなど粗雑な作りである。

時期は遺物から奈良時代（8 世紀前半）と考えられる。

29 号住居址（第 174 図、図版 32・65）

第Ⅲ次調査で検出し、旧名称はⅠ－ 11 号住居址である。

Ｊ－ 29･30 区に位置し、確認面は第Ⅸ層上面である。平面は不整方形で、長軸 290㎝･短軸 150㎝を測る。遺跡内の住居で最小規模である。南東隅にカマドを持つ。壁高は斜面下方に向けて低くなり、南東壁で最高 20㎝を測る。長軸方位Ｎ－ 40°－Ｅ。遺存状況は悪い。床は第Ⅸ層中に構築され、硬化面や貼り床は認められなかった。覆土は第Ⅳ層由来の黒褐色土や暗褐色土を主体とする。柱穴、周溝はない。カマドは南東隅の壁を 100㎝掘り込んで構築され、白色粘土を使った袖の一部が遺存する。煙道部の形状は不明である。火床部は床面を 15㎝掘り込む。

遺物は床面で「大」字が墨書された土師器坏（1）と小形甕（2）が出土し、いずれも甲斐型で甲斐Ⅺ期に比定される。時期は遺物から平安時代（10 世紀前半）と考えられる。

30 号住居址（第 175 ～ 178 図、図版 32・65・66）

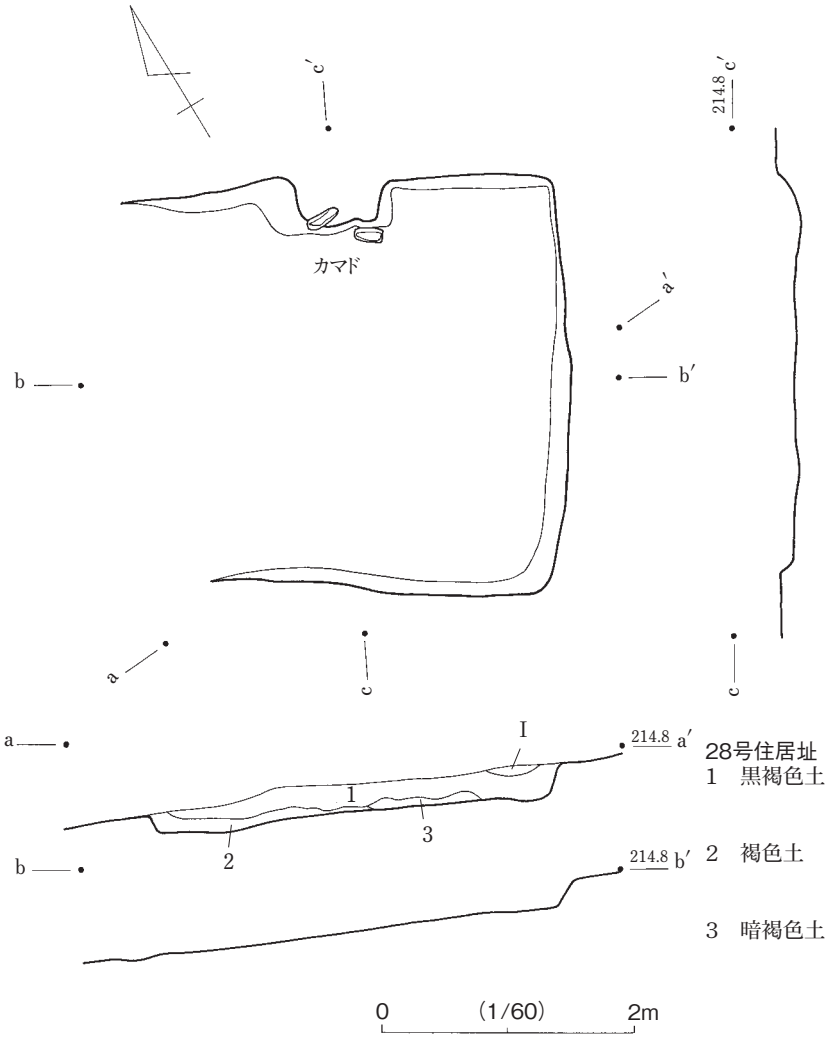
第Ⅲ次調査で検出し、旧名称はⅠ－ 12 号住居址である。

Ｗ・Ｘ－ 21・22 区に位置し、63 ～ 65 号土坑に切られる。確認面は第Ⅴ層上面である。平面は方形で、一辺 670㎝、壁高 65㎝を測る。カマドを持つ。主軸方位Ｎ－ 30°－Ｅ。遺存状況は良い。床は第Ⅶ層中に構築され、硬化面が中央部から南西壁際にかけて確認された。全般に貼り床が認められた。掘り方は竪穴中央部を残して掘り込まれる。覆土は暗褐色土中に第Ⅳ層由来の黒褐色土が流入する。

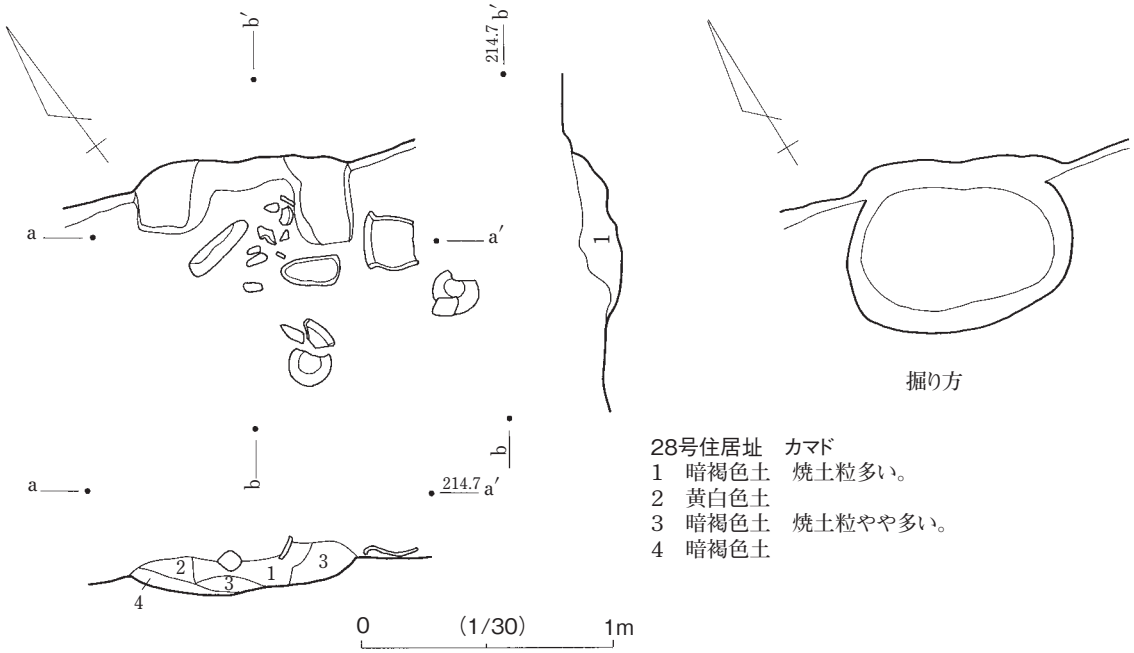
主柱穴と考えられるピット 4 基（Ｐ 1 ～ 4）が検出された。直径 30㎝～ 80㎝前後で、深さは 50㎝～ 60㎝である。周溝はカマド部分を除いて全周し、幅 20㎝～ 25㎝、深さ 10㎝～ 15㎝である。カマドは北東壁の北寄りにあり、周囲の床面に礫や黄白色粘土が散在する。煙道部は壁を 140㎝掘り込み、火床部は床面を 15㎝掘り込む。カマド左右の貼り床直下で黄白色土を含むピット（Ｐ 5 ～Ｐ 7）が検出された。Ｐ 5・6 は長軸 80㎝～ 110㎝・深さ 20㎝を測り、覆土中で炭化種実（アカザ科・ヒユ科など）が検出された（付編 1 参照）。Ｐ 7 は直径 30㎝・深さ 15㎝を測る。

遺物は覆土から床面に分布する。土師器は半球形の坏（1･2）、甕（5 ～ 12）、須恵器は坏蓋（3）、坏（4）、長頸瓶（13）、甕（14）がある。須恵器坏蓋・坏は湖西窯編年第Ⅲ期第 2 小期後に相当する。他に研磨痕が残る台石（15）、腸抉柳葉式の鉄鏃（16）がある。編物石が覆土中に広く散在する。

時期は遺物から古墳時代後期（7 世紀後半）と考えられる。

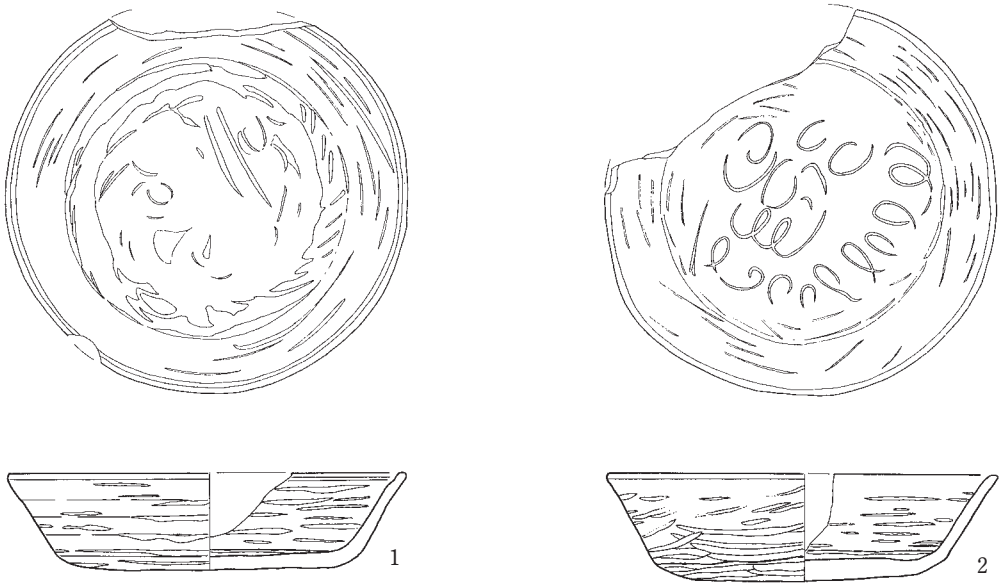


28号住居址　覆土
1　黒褐色土　粘性、締まり弱い。黒色スコリア(8㎜以下)、橙色スコリア(2㎜以下)、炭化粒多い。
2　褐色土　粘性やや強く、締まり弱い。黒色・橙色スコリア、炭化粒を少量含む。
3　暗褐色土　粘性やや強く、締まり弱い。褐色土混じる。炭化粒を少量含む。

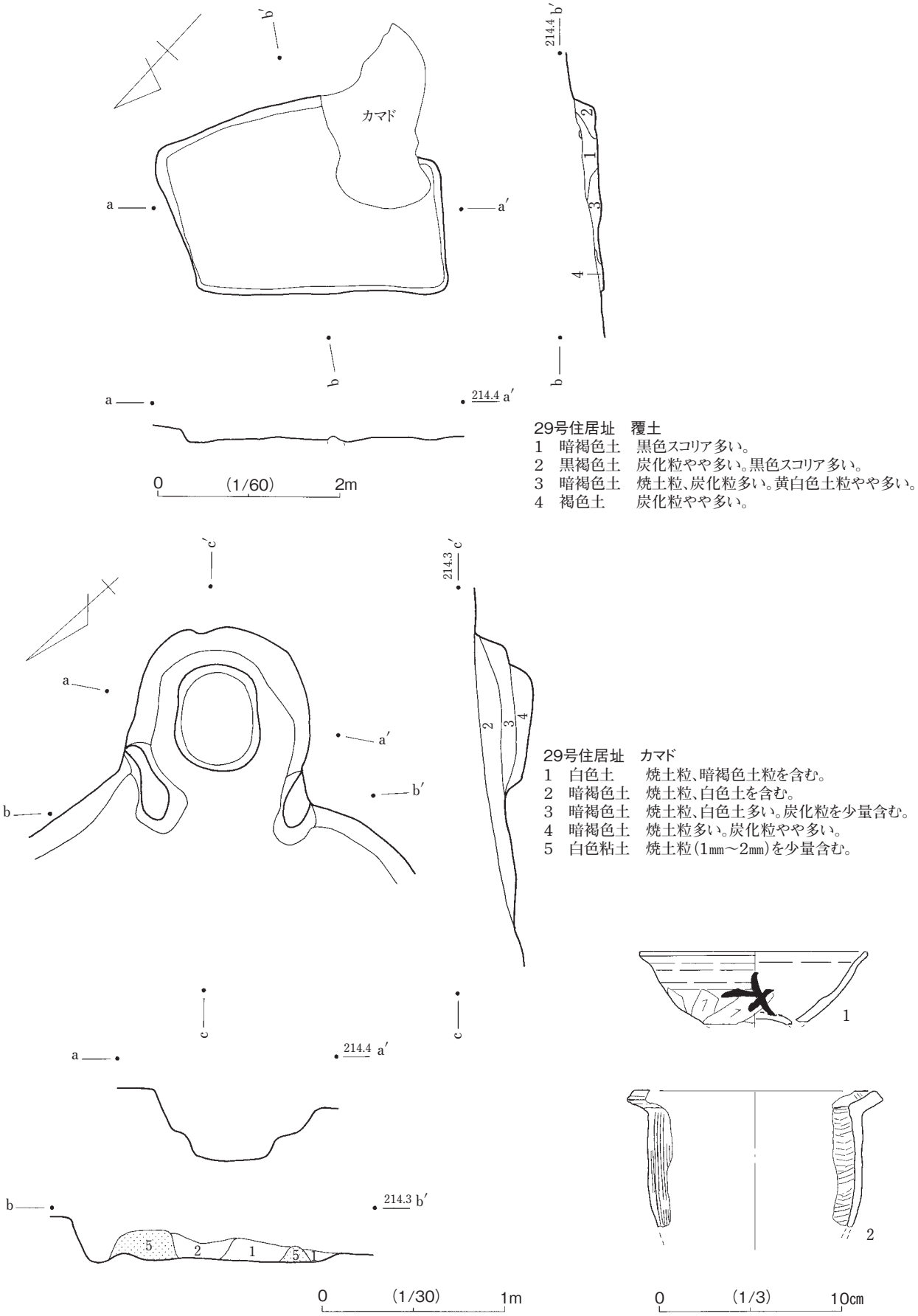


28号住居址　カマド
1　暗褐色土　焼土粒多い。
2　黄白色土
3　暗褐色土　焼土粒やや多い。
4　暗褐色土

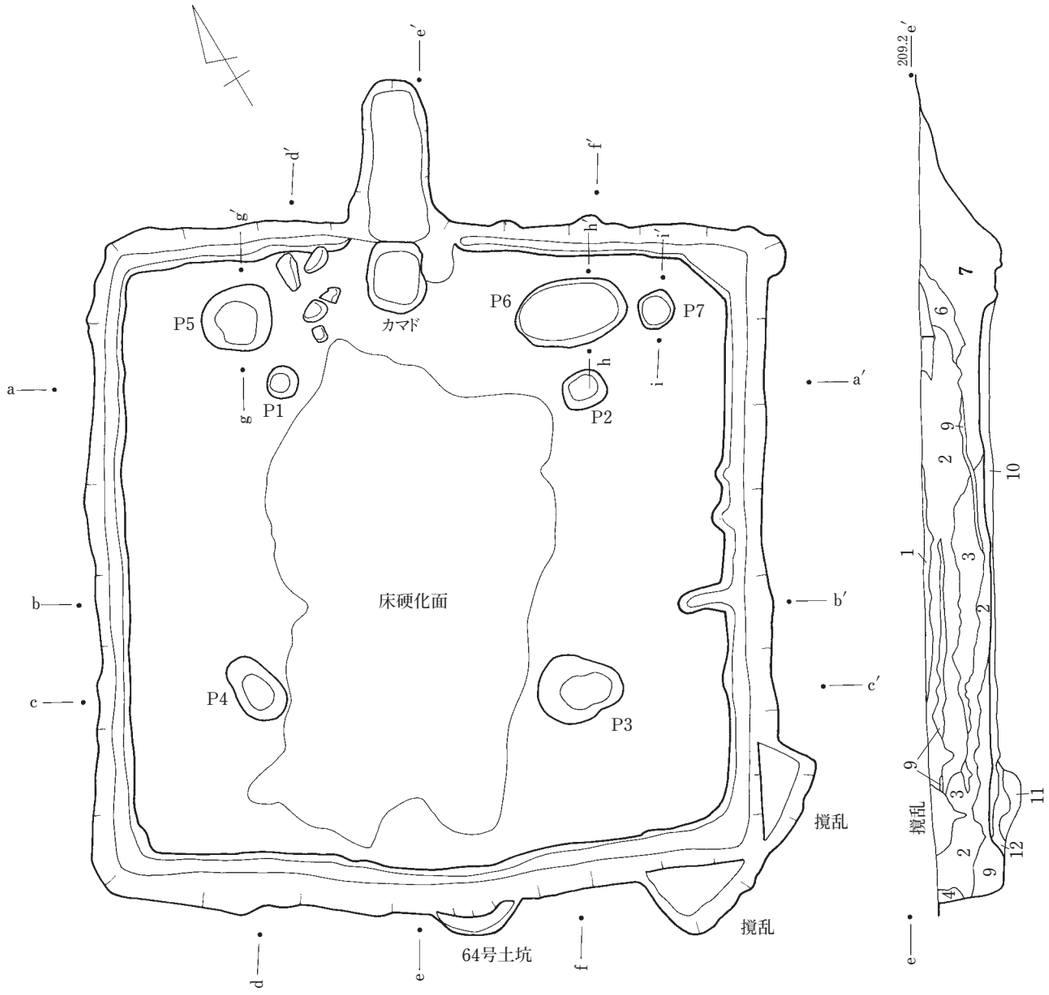
第172図　28号住居址、カマド

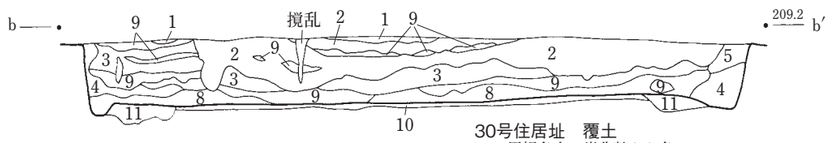


第 173 図　28 号住居址　出土遺物



第 174 図　29 号住居址、カマド、出土遺物

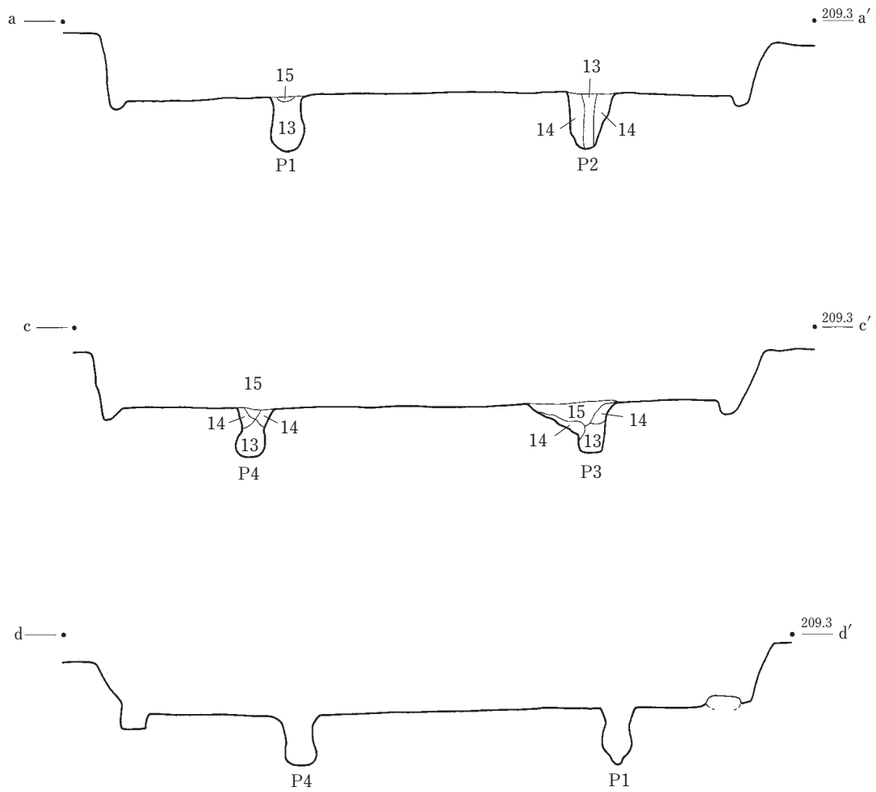


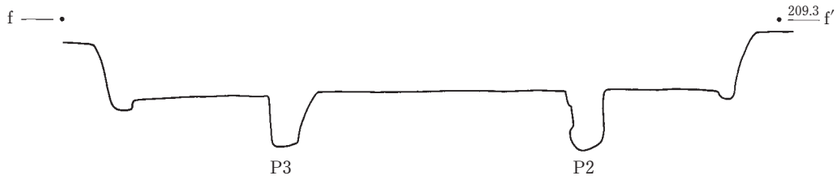


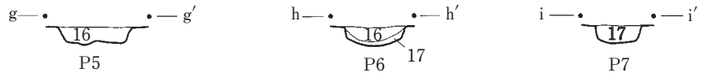
30号住居址　覆土

1	黒褐色土	炭化粒やや多い。
2	暗褐色土	黒褐色土・褐色土(5㎜～3㎝)やや多い。焼土粒を少量含む。
3	暗褐色土	黒色味強い。黒褐色土(5㎜～3㎝)多い。
4	暗褐色土	
5	黒褐色土	黒色スコリアやや多い。
6	暗褐色土	焼土粒、黄白色土粒、黒色スコリアやや多い。
7	カマド覆土	
8	暗褐色土	黒褐色土・褐色土(5㎜～1㎝)やや多い。
9	黒褐色土	黒色スコリア、褐色土(2㎝以下)やや多い。基本第Ⅳ層由来。
10	貼り床	
11	暗褐色土	締まりやや弱い。地山ローム塊多い。
12	褐色土	やや締まり強い。
13	褐色土	締まりなくパサパサ。暗褐色土が多く混じる。ピット覆土。
14	褐色土	ピット覆土。
15	暗褐色土	黒色スコリア、黒褐色土・褐色土(2㎝以下)やや多い。ピット覆土。
16	黄白色土	焼土粒、炭化粒やや多い。ピット覆土。
17	黄白色土	焼土粒、炭化粒多い。暗褐色土を含む。ピット覆土。

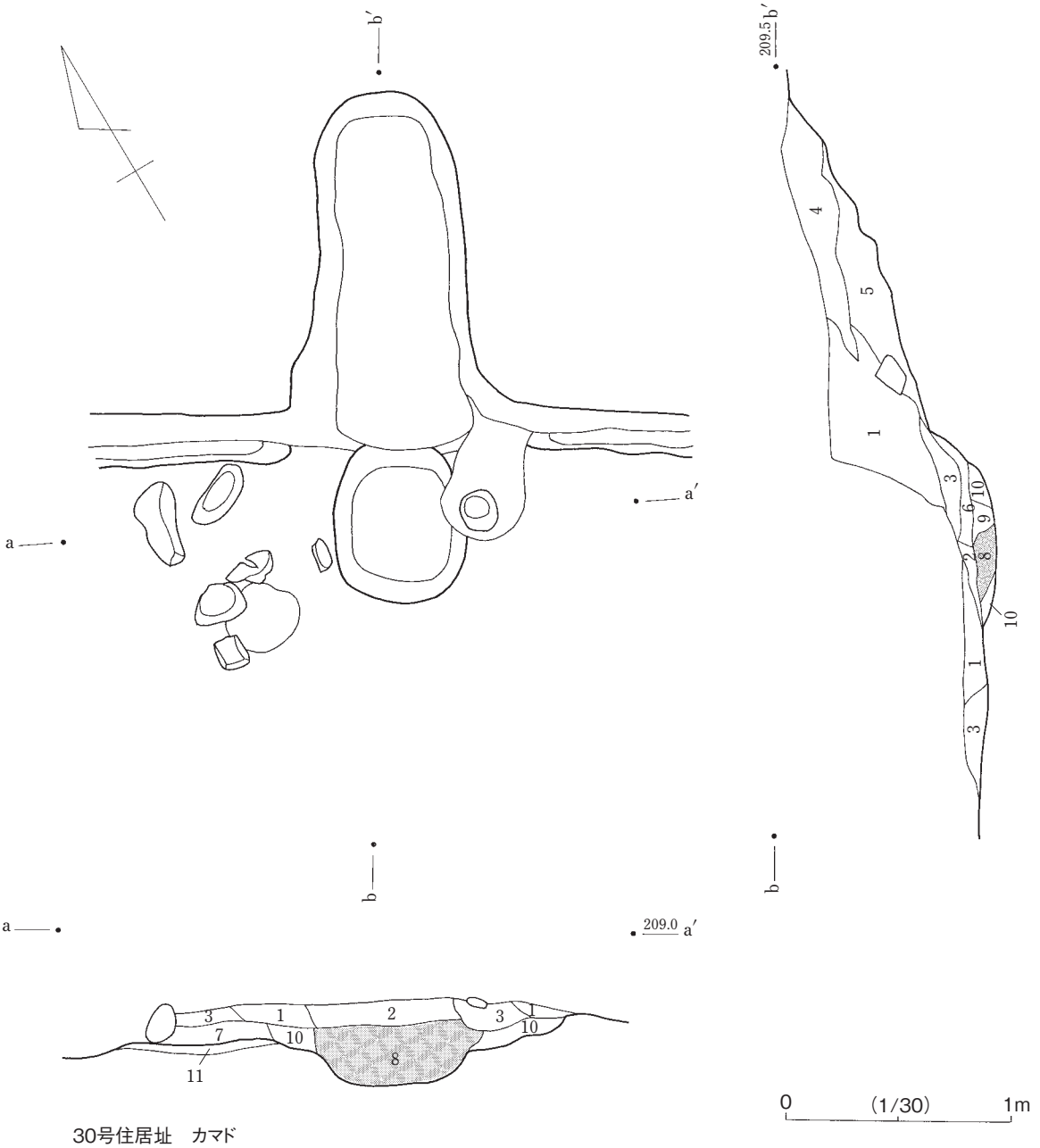
第 175 図　30 号住居址







0　(1/60)　2m

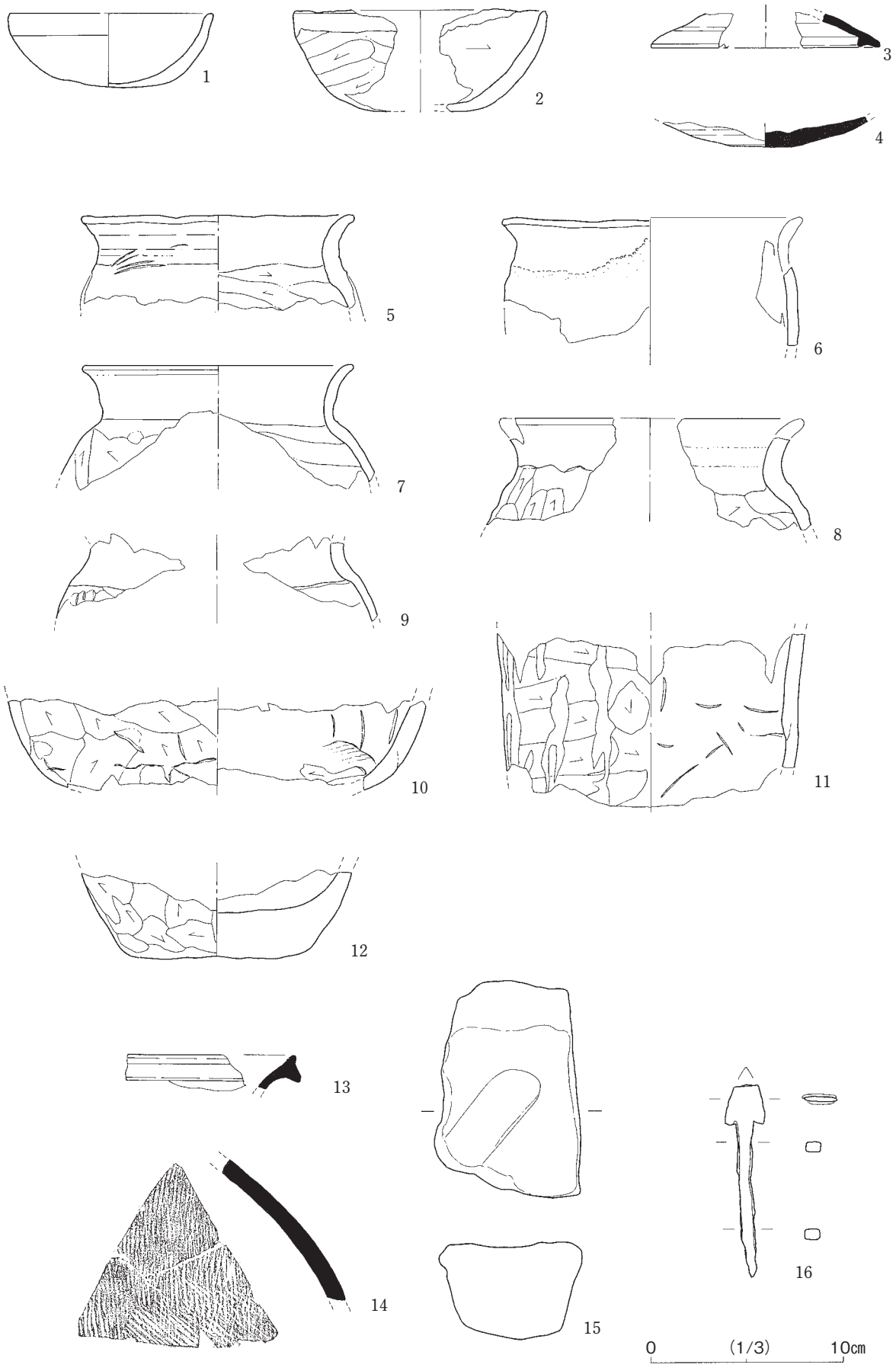


30号住居址　カマド

1　暗褐色土　焼土粒、黒褐色土(5㎜～3㎝)やや多い。黄白色土(1㎝以下)、黒色スコリア多い。
2　橙色土　焼土粒、暗褐色土、黄白色土多い。
3　黄白色土　焼土粒、炭化粒やや多い。
4　黄白色土　黒褐色土(3㎝以下)やや多い。
5　暗褐色土　焼土粒やや多い。黄白色土(2㎝以下)、黒色スコリア多い。
6　暗褐色土
7　褐色土　焼土粒、白色土粒やや多い。
8　橙色土　やわらかい焼土純層。
9　橙色土　白色粘土やや多い。黒褐色土(1㎝以下)を少量含む。
10　褐色土　焼土(3㎝以下)多い。黒褐色土(5㎜～1㎝)やや多い。
11　黒褐色土　締まり強い。貼り床。

第176図　30号住居址　カマド

第 177 図　30 号住居址　遺物分布図



第 178 図　30 号住居址　出土遺物

31 号住居址（第 179 ～ 181 図、図版 33・66）

第Ⅲ次調査で検出し、旧名称はⅠ－ 13 号住居址である。

２Ｃ・２Ｄ－ 19 区に位置し、確認面は第Ⅶ層上面である。新旧 2 軒が重複する。

31 号住居址（旧） 平面は方形と考えられ､南壁にカマドを持つ。竪穴は西壁 350㎝､壁高 15㎝を測る。主軸方位Ｎ－ 13°－Ｗ。大半を新規の住居に切られ、一部を掘り過ぎ遺存状況は悪い。覆土は暗褐色土である。柱穴、周溝はない。カマドは南壁を 75㎝掘り込んで構築され、天井石と袖石の一部が遺存する。煙道部の形状は不明である。火床部は床面を 10㎝掘り込む。火床覆土中に微細な白色繊維の塊が含まれ、分析によりススキやタケの灰に由来する可能性が指摘されている。火床面では炭化材（コナラ）が検出された（付編 1 参照)。遺物は土師器坏（1）が床面で出土し、形状から南多摩窯御殿山 25 号窯式の須恵器模倣坏であろう。時期は遺物から平安時代（9 世紀末から 10 世紀前半）と考えられる。

31 号住居址（新） 平面は不整方形で、南東隅にカマドを持つ。竪穴は一辺 300㎝、壁高 25㎝を測る。遺存状況は悪い。貼り床が一部に施される。覆土は暗褐色土を主体とし、壁際から床面に焼土層や炭化材が分布する。柱穴、周溝はない。カマドは南東隅の壁を 20㎝掘り込んで構築され、天井石と袖石の一部が遺存する。煙道部の形状は不明である。火床部は床面を 20㎝掘り込む。遺物は須恵器の大形甕(2･3)、鉄製刀子（4）が出土した。時期は平安時代（9 世紀末から 10 世紀前半）と考えられる。

32 号住居址（第 182 ～ 186 図、図版 34・66）

第Ⅳ次調査で検出し、旧名称はⅠ－ 14 号住居址である。

Ｚ－ 23・24 区に位置し、17 号ピットと重複する。確認面は第Ⅶ層中である。平面は方形で、カマドを持つ。竪穴は一辺 320㎝、壁高 35㎝を測る。主軸方位Ｎ－ 60°－Ｅ。遺存状況は良い。床はカマド側の半分が軟弱で、下位に掘り方を持つ。覆土は暗褐色土を主体とする。柱穴、周溝はない。

カマドは北東壁の北寄りにあり、煙道の側石と袖石が遺存する。煙道部の先端は掘り過ぎる。両袖部の最大幅 80㎝、焚き口の幅は約 50㎝である。煙道部は壁を少なくとも 65㎝掘り込み、火床部は床面を 5㎝掘り込む。火床面で炭化種実を検出したが、遺存状況が悪く同定不能であった（付編 1 参照)。

遺物は覆土から床面にかけて分布し、隣接する 2 号土器集中部と濃密な接合関係が認められる。

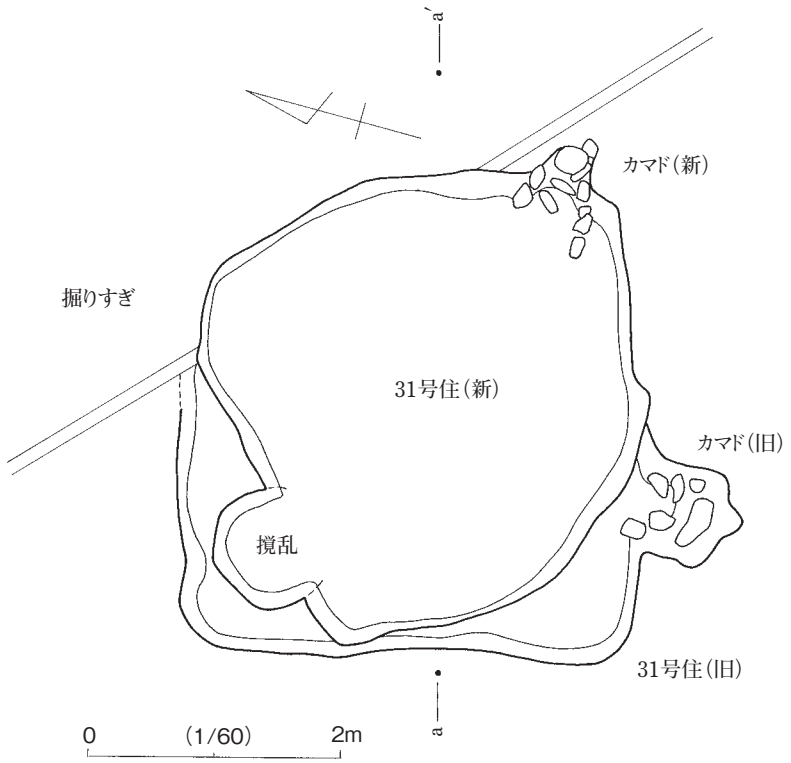
土師器は坏（1)、小型甕（6)、甕（7 ～ 9、11)、鉢（10)、台付甕（12）がある。12 が相模型で、他はハケ調整の甲斐型である。このうち甕（7）と鉢（10）はカマド火床から煙道部でまとまって出土した。甲斐型土器は甲斐Ⅺ期に相当する。

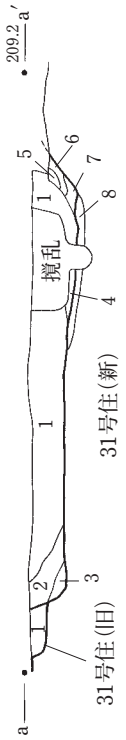
須恵器は坏（2)、甕（13、14）がある。坏は底径 5.2㎝で、南多摩窯御殿山 5 号窯式に比定される。甕は肩部に最大径がある長胴形（13)、胴部の丸みが強い平底（14）がある。

灰釉陶器は高台付皿（3)、高台付埦（4・5）がある。3 は体部内面のみ施釉され、底部回転糸切り痕が残る。高台は低い。4 は体部内外面に施釉され、底部は回転糸切り後に周囲をヘラ削りする。高台は三角形でやや高い。5 はカマド左側の床面で出土し、ほぼ完形に復元された。体部内外面に施釉され、体部下端から底部は回転ヘラ削り調整である。高台は三日月形である。3・4 は猿投窯の折戸 53 号窯式、5 は黒笹 90 号窯 2 型式に比定される。

鉄製品は焼印（15)、釘（16）がある。焼印はカマド右側の床面で出土し、「山」字の印面を持つ。完形で全長 20㎝。印面は 3 本の柱状鉄の先端を扁平に延ばした板で構成される。印面は縦 3.0㎝、横 3.5㎝である。柄は断面四角形で、末端は尖鋭に加工されている。

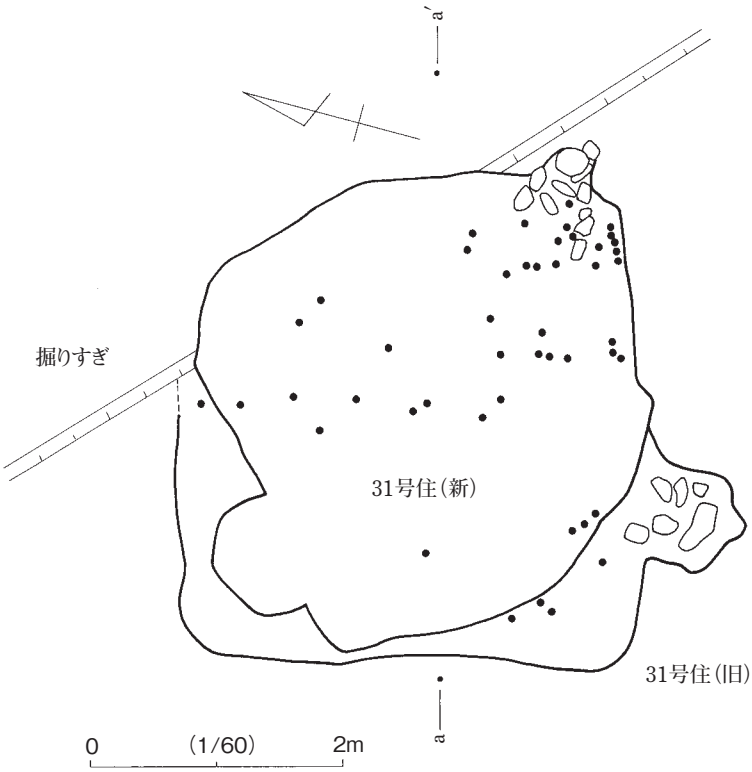
時期は遺物から平安時代（9 世紀末～ 10 世紀前半）と考えられる。



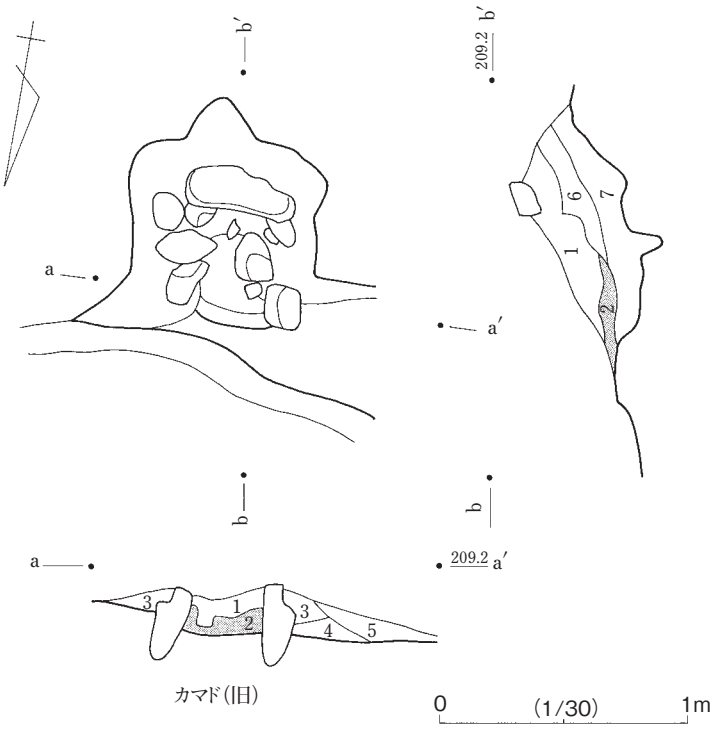


31号住居址(新)覆土
1　暗褐色土　炭化粒、黒色スコリアを含む。
2　暗褐色土　褐色味強い。
3　暗褐色土　褐色土粒多い。炭化粒、黒色スコリアを含む。
4　橙色土　焼土塊、炭化材多い。
5　暗褐色土　焼土粒やや多い。
6　暗褐色土　炭化粒を少量含む。
7　暗褐色土　締まりやや強い。
8　貼り床　締まり強い。

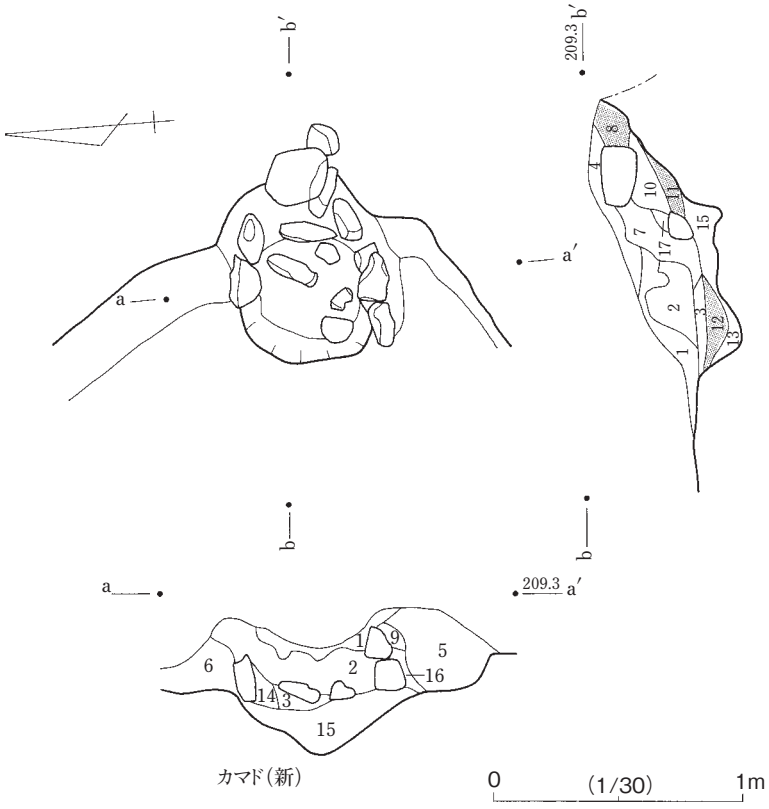
31号住居址(旧)覆土
1　暗褐色土　炭化粒、黒色スコリアを含む。



第179図　31号住居址、遺物分布図

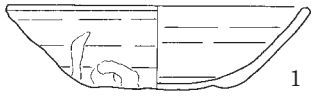


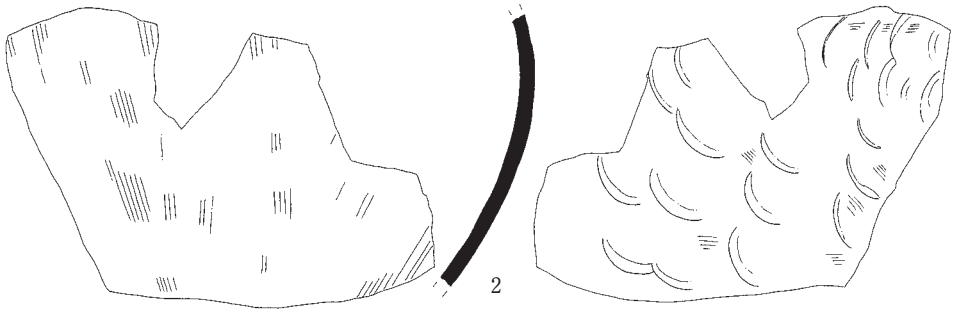
31号住居址　カマド(旧)
1　暗褐色土　焼土粒を少量含む。黒色スコリアやや多い。
2　橙色土　焼土粒多い。炭化粒、暗褐色土、黒色スコリアやや多い。
3　にぶい褐色土　締まり弱い。暗褐色土を含む。
4　褐色土　締まりやや弱い。
5　暗褐色土　黒色スコリアやや多い。
6　暗褐色土　締まりなし。焼土粒多い。黒色スコリアやや多い。
7　褐色土　焼土粒やや多い。

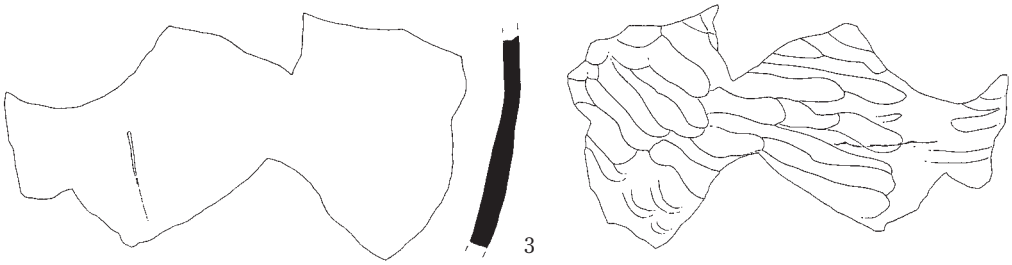


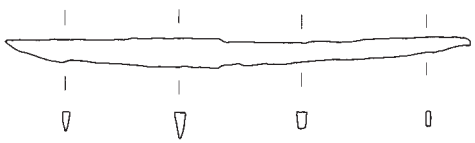
31号住居址　カマド(新)
1　暗褐色土　焼土粒、白色土粒やや多い。
2　にぶい褐色土　焼土粒・塊(3㎝以下)、炭化粒やや多い。暗褐色土、白色土粒・塊(2㎝以下)多い。
3　にぶい橙色土　焼土粒多い。炭化粒・材(1㎝)やや多い。
4　暗褐色土
5　暗褐色土　白色土粒・塊(1㎝～2㎝)を含む。
6　暗褐色土　締まり弱い。白色土粒を少量含む。
7　白色土　焼土粒(5㎜)、暗褐色土(2㎝以下)多い。炭化粒を少量含む。
8　橙色土　やわらかい焼土。白色土が焼土化。
9　にぶい橙色土　焼土多い。
10　にぶい褐色土　焼土粒、白色土、黒褐色土多い。
11　焼土　白色土粒、黒褐色土粒混じる。
12　焼土純層　火床
13　黒褐色土
14　黒褐色土　焼土粒、白色土粒多い。
15　暗褐色土　焼土粒、白色土粒やや多い。

第180図　31号住居址　カマド

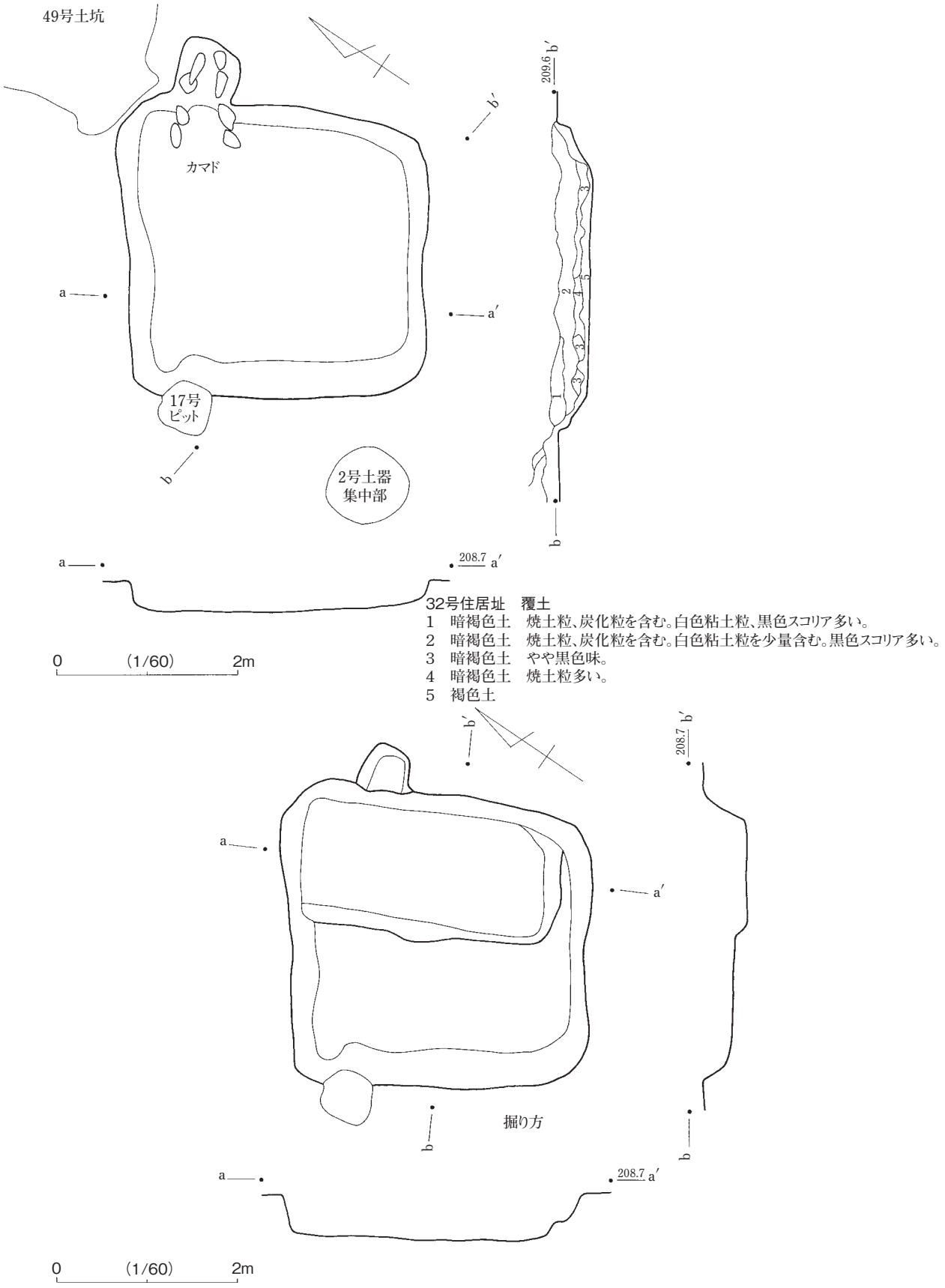




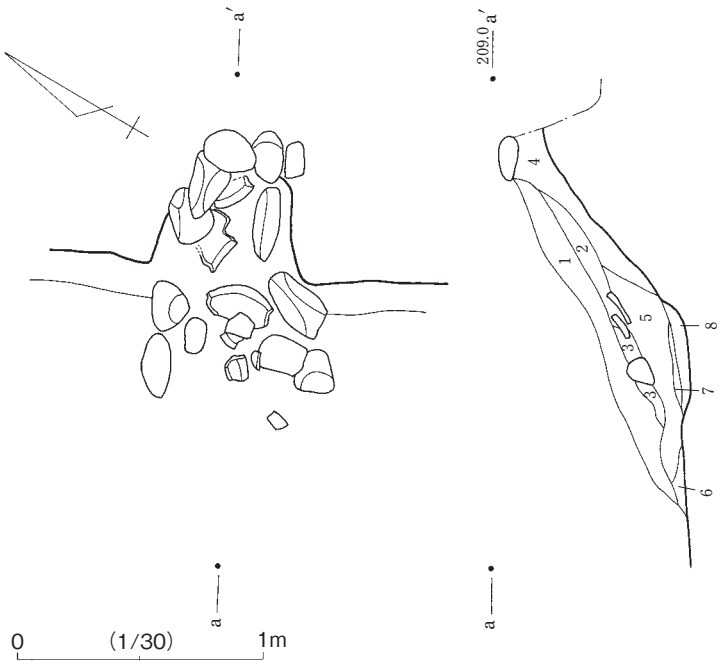




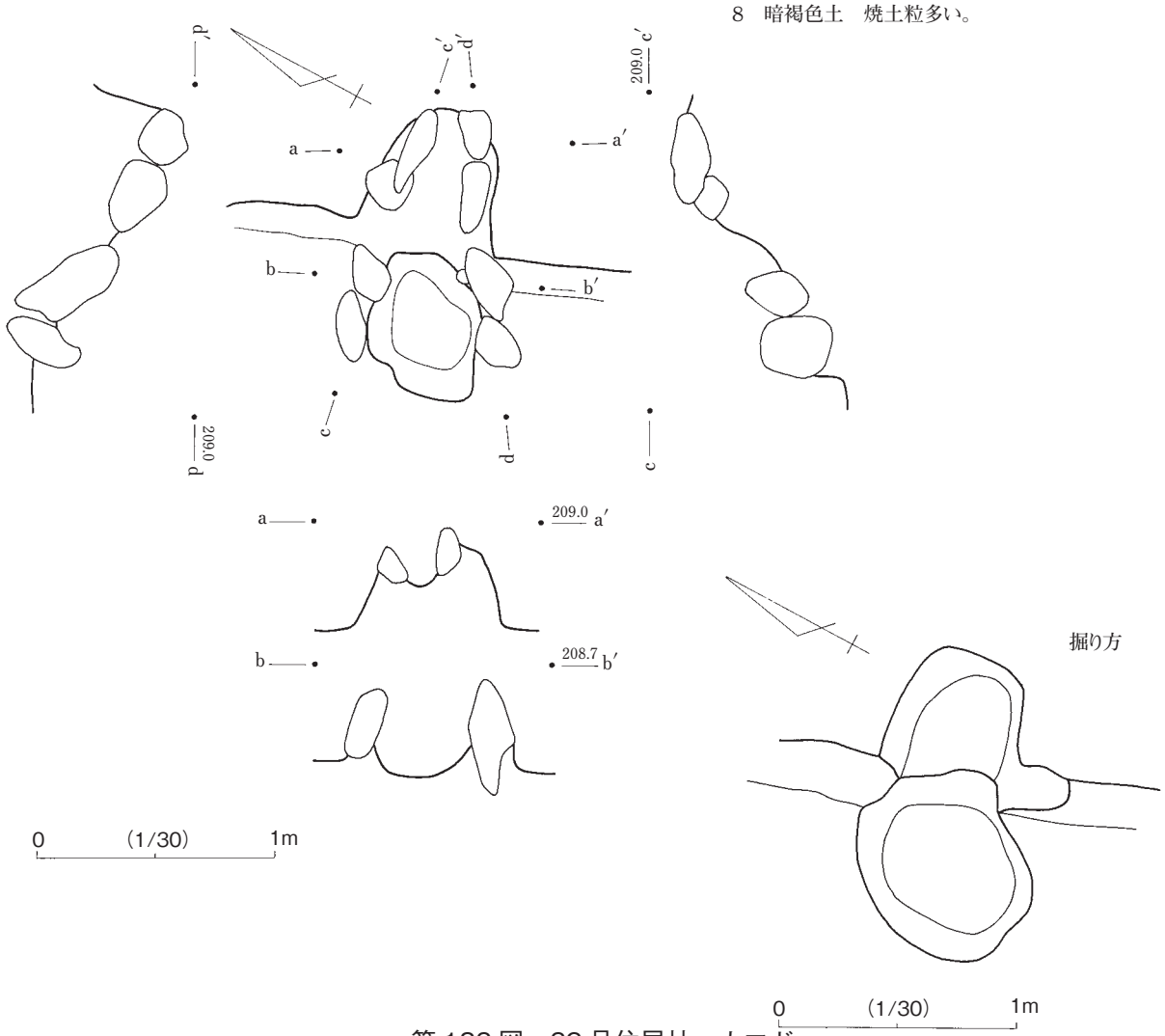
第 181 図　31 号住居址　出土遺物



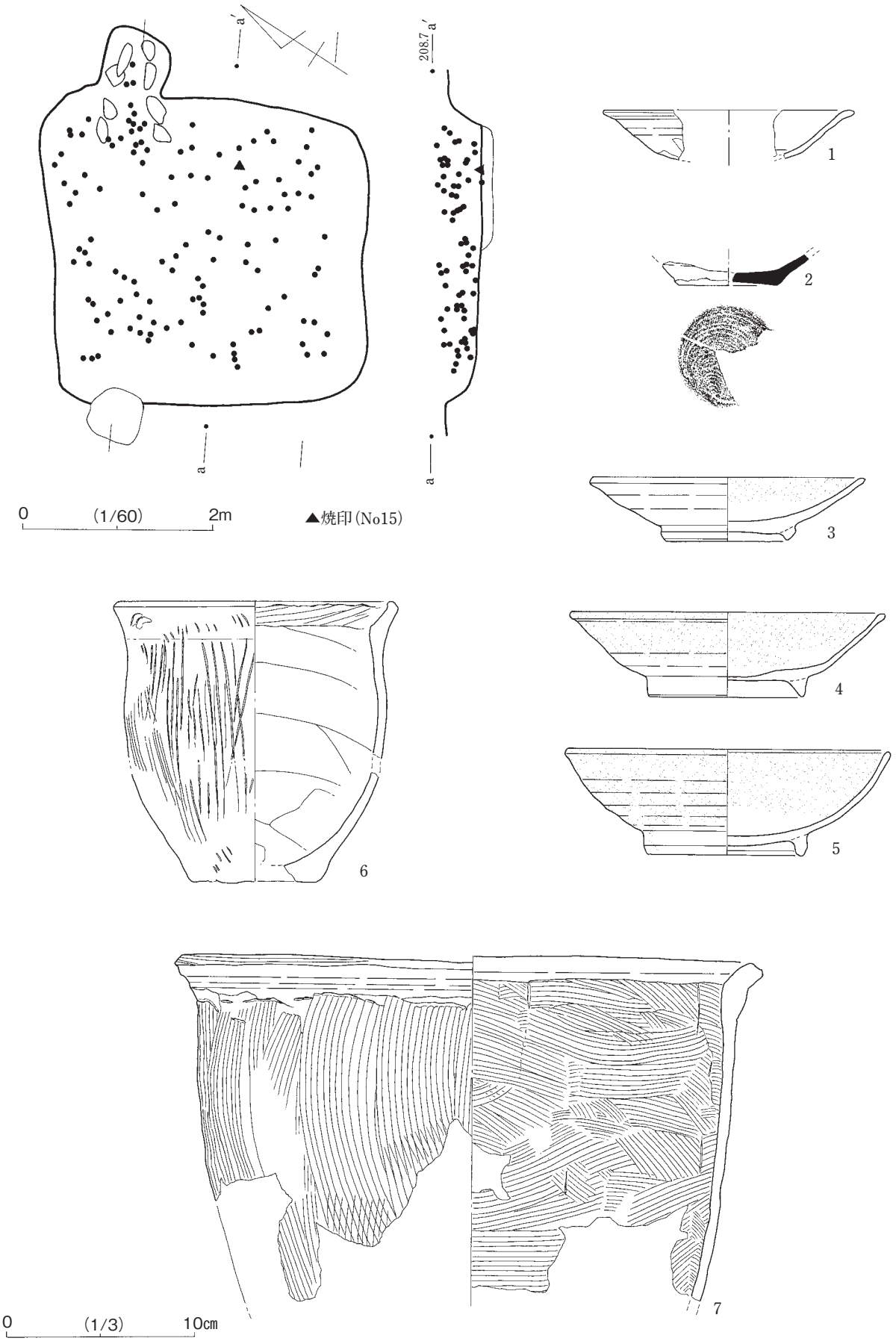
第 182 図　32 号住居址、掘り方



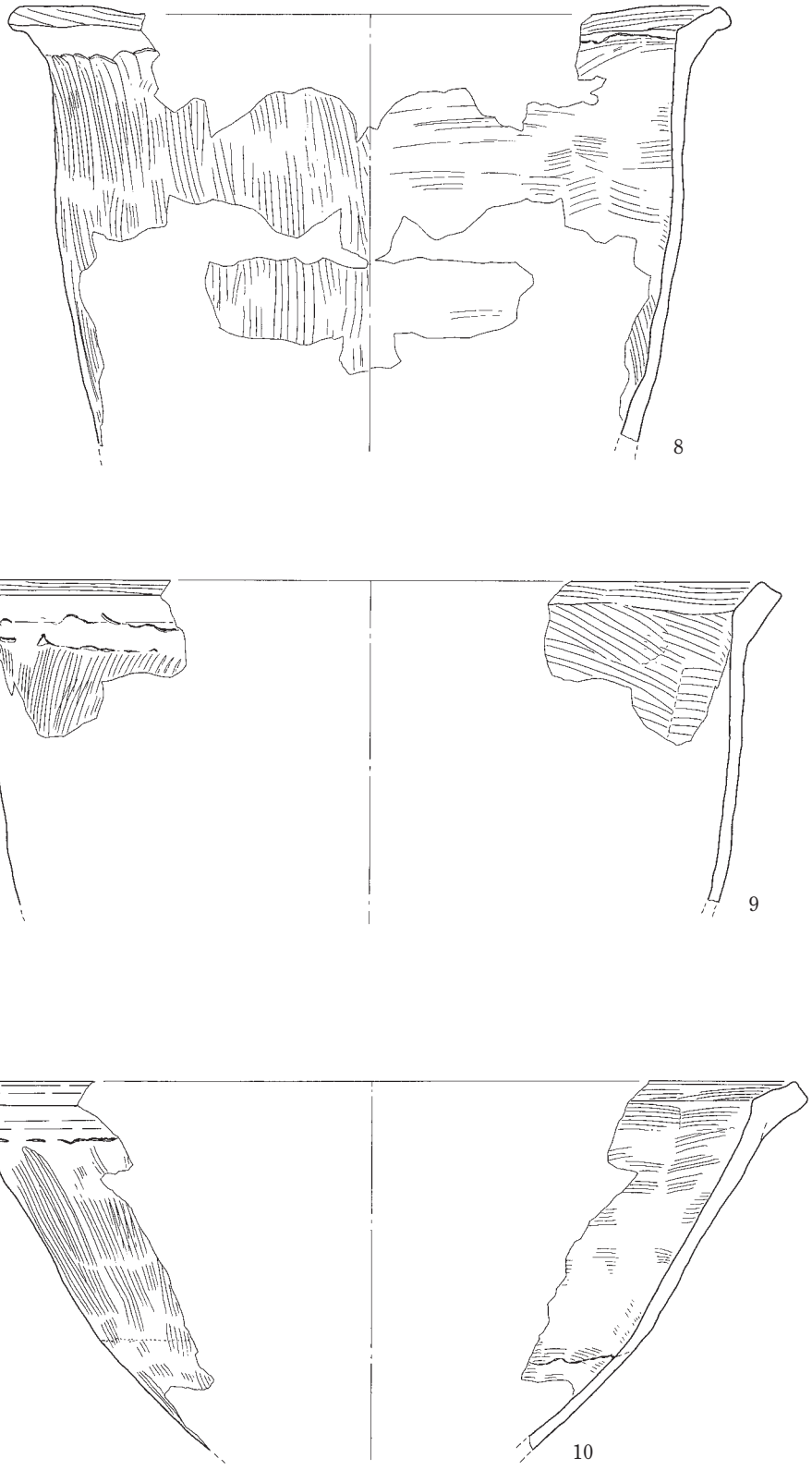
32号住居址　カマド
1　暗褐色土　焼土粒、炭化粒、白色土粒やや多い。
2　暗褐色土　焼土粒多い。炭化粒、白色土粒やや多い。
3　黄白色土　白色土粒多い。焼土粒、暗褐色土を含む。
4　暗褐色土　焼土粒、白色土粒を含む。
5　暗褐色土　焼土粒、白色土粒多い。
6　焼土塊
7　やわらかい焼土層　火床
8　暗褐色土　焼土粒多い。



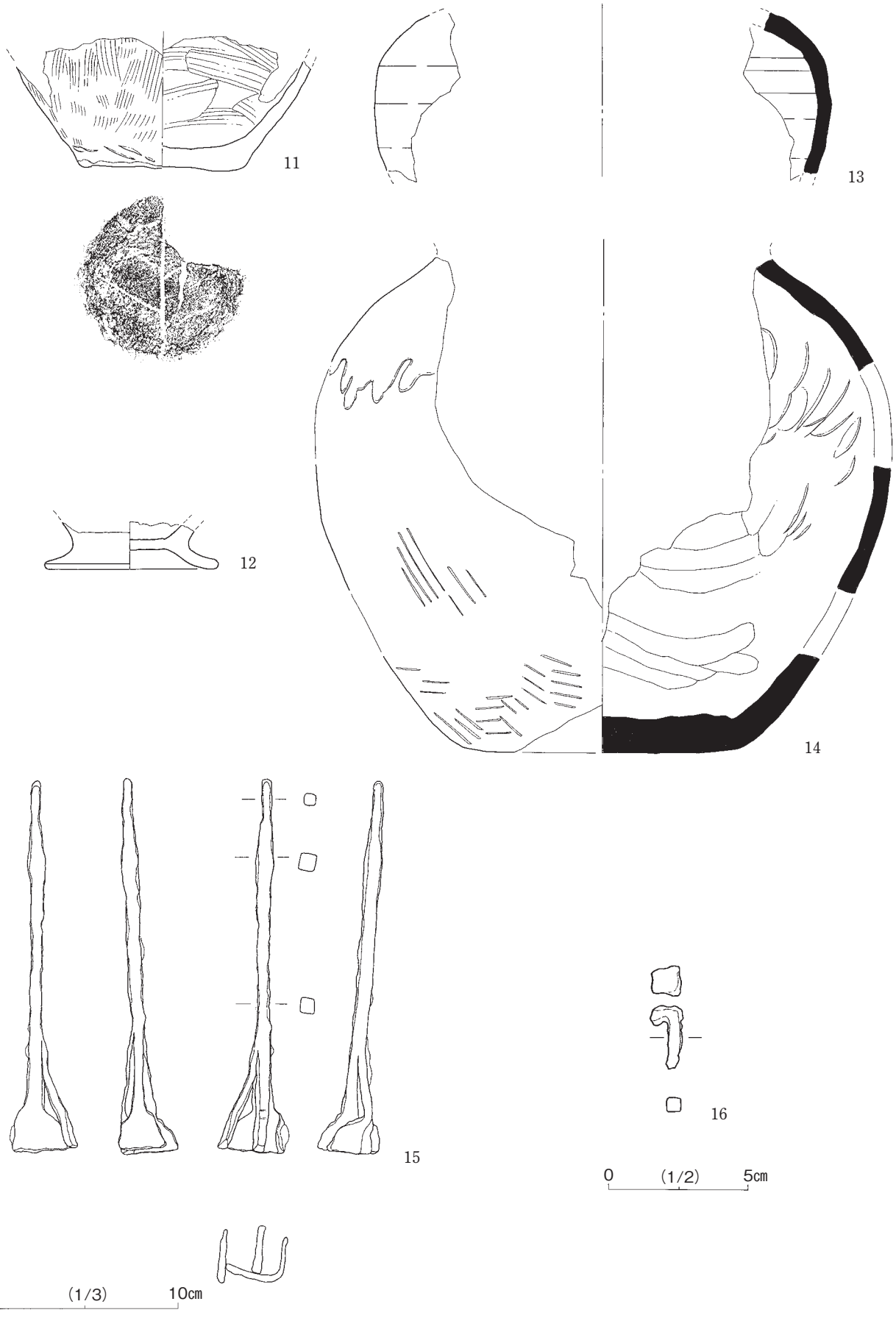
第183図　32号住居址　カマド



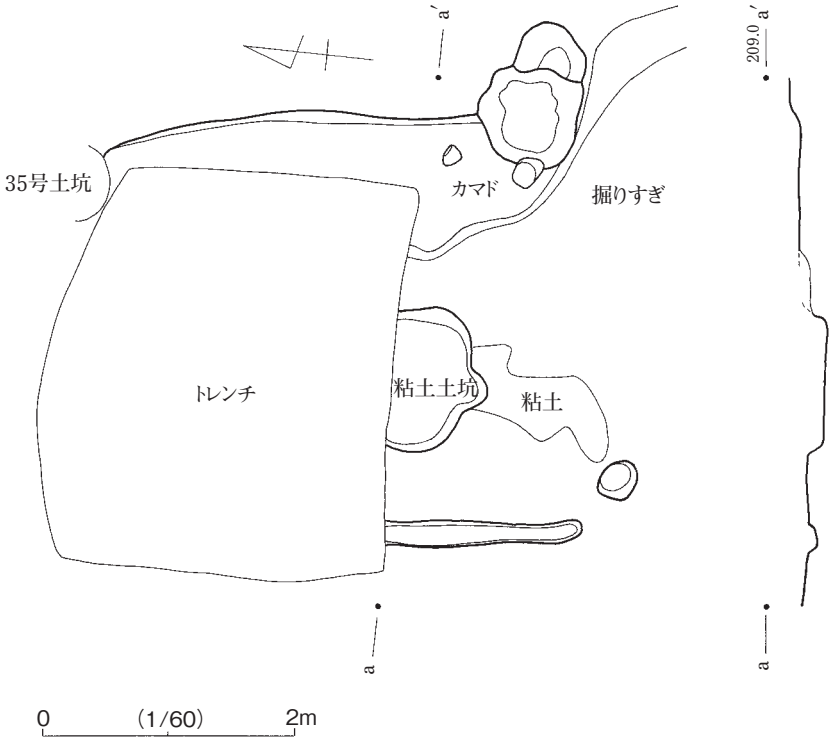
第 184 図　32 号住居址　遺物分布図、出土遺物（1）

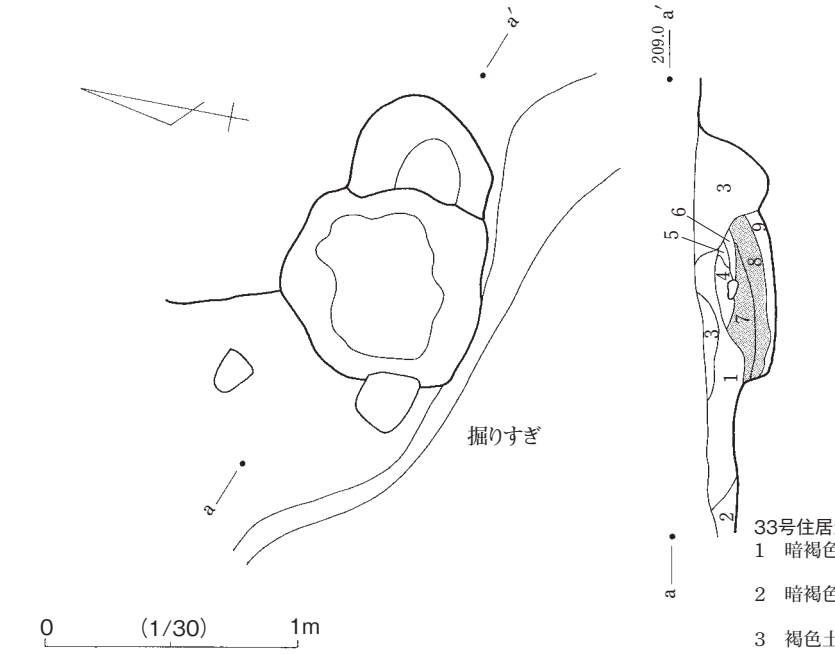


第 185 図　32 号住居址　出土遺物（2）



第 186 図　32 号住居址　出土遺物（3）





33号住居址　カマド

1	暗褐色土	焼土粒、炭化粒、白色粘土粒多い。
2	暗褐色土	焼土粒、白色粘土粒やや多い。
3	褐色土	締まりなく、やわらかい。焼土粒、白色粘土粒やや多い。
4	白色粘土	焼土粒、暗褐色土を含む。
5	焼土塊	
6	暗褐色土	焼土粒、白色土粒を含む。
7	橙色土	焼土粒多い。
8	橙色土	サラサラの焼土純層
9	暗褐色土	やわらかい。焼土塊(1㎝)多い。

第187図　33号住居址、カマド

33 号住居址（第 187 図）

第Ⅳ次調査で検出し、旧名称はⅠ－ 15 号住居址である。

２Ｃ－ 21 区に位置し、35 号土坑と重複する。確認面は第Ⅶ層上面である。大半を掘り過ぎ、遺存状況は悪い。平面は方形と考えられ、カマドを持つ。東壁の確認長 290㎝、壁高 10㎝を測る。床は第Ⅶ層中に構築され、比較的硬い。覆土は暗褐色土を主体とする。柱穴はない。周溝は西壁沿いに確認され、幅 20㎝・深さ 8㎝を測る。カマドは東壁の南寄りにあり、壁を 70㎝掘り込み構築される。煙道部の形状は不明である。火床部は床面を 15㎝掘り込む。円形土坑１基が竪穴中央付近にあり、内部に白色粘土を含む。土坑は直径 110㎝、深さ約 10㎝である。遺物はなく、時期は不明である。

(2) 掘立柱建物址

大半が未調査区にかかり、全体を調査できたのは７号掘立柱建物址のみである。建物の分布は、段丘下段の中央部に総柱式を含む大型建物４棟（1 ～ 3・6 号）と小型建物２棟（4・5 号）がまとまり、上段では側柱式を含む小型建物４棟（7 号～ 10 号）が不規則に分布する。建物はいずれも梁行２間で、主軸方位は北東方向でほぼ一致する。建物の造営時期は出土遺物が少ないため不明確であるが、大半は古墳時代後期から奈良時代の間に想定される。

１号掘立柱建物址（第 188 図、図版 35）

第Ⅲ次調査で検出し、旧名称はⅠ－５号掘立である。

Ｓ・Ｔ－ 26・27 区に位置し、北東側が未調査区にかかる。56・100 ～ 104・106 号土坑に切られる。確認面は第Ⅵ層から第Ⅶ層上面、掘り込み面は土層観察から第Ⅳ層上面である。建物址は２間×３間と推定される総柱式である。規模は 5.3 ｍ× 6.5 ｍで、遺跡内の掘立柱建物では最大規模である。柱心間は梁行 2.6 ｍ～ 2.7 ｍ、桁行 2.0 ｍ～ 2.4 ｍを測る。主軸方位Ｎ－ 39°－Ｅ。柱穴は平面で円形と方形基調に大別され、長軸は円形 55㎝～ 70㎝、方形 80㎝～ 110㎝である。Ｐ１は掘り込み面からの深さが 78㎝を測る。底面は第Ⅶ層から第Ⅷ層中に達する。柱穴覆土は第Ⅳ層由来の黒褐色土を主体とし、Ｐ３で柱痕と思われる土層（幅 15㎝）を確認した。遺物は柱穴内から古墳時代後期の土師器片がわずかに出土した。

時期は、柱穴の掘り込み面が７世紀後半の 25 号住居址より新しいことや出土遺物から、古墳時代後期から奈良時代までの間に想定される。

２号掘立柱建物址（第 189 図、図版 35）

第Ⅲ次調査で検出し、旧名称はⅠ－７号掘立である。

Ｕ－ 25 区に位置し、大半が未調査区にかかる。67・68 号土坑、4・5・6・15 号ピットと重複する。確認面は第Ⅵ層から第Ⅶ層上面、掘り込み面は土層観察から第Ⅳ層上面である。建物址は梁行２間、桁行２間かそれ以上の側柱式と思われ、規模は梁行 5.0 ｍである。柱心間は梁行 2.5 ｍ、桁行 2.0 ｍを測る。主軸方位Ｎ－ 46°－Ｅ。柱穴は平面不整方形だが、建物隅のＰ５はＬ字形となる。Ｐ３は柱穴列の軸に対し斜めに配置される。柱穴は長軸 85㎝～ 100㎝で、Ｐ１・Ｐ２は掘り込み面からの深さが 70㎝～ 75㎝を測る。底面は第Ⅶ層から第Ⅷ層中に達する。柱穴覆土は第Ⅳ層由来の黒褐色土を主体とし、柱痕は確認されなかった。遺物はＰ２内から古墳時代後期の土師器胴張甕（第 210 図 1）が出土した。

時期は、１号掘立柱建物址と同じく古墳時代後期から奈良時代までの間に想定される。

3号掘立柱建物址（第190図、図版36）

第Ⅲ次調査で検出し、旧名称はⅠ－8号掘立である。

Ｙ・Ｚ－20区に位置し、大半が未調査区にかかる。同規模の柱穴3基が並列するため建物の一部と推定した。90号土坑と重複する。確認面は第Ⅵ層から第Ⅶ層中で、確認が遅れて一部掘り過ぎている。建物址は梁行2間、5.3ｍである。柱心間はＰ1・Ｐ2間2.8ｍ、Ｐ2・Ｐ3間2.5ｍを測る。梁行の軸方位はＮ－42°－Ｗで、1号・2号掘立柱建物址とほぼ同じである。Ｐ1・Ｐ2は掘り過ぎているが、平面円形で長軸70㎝～80㎝・深さ約50㎝、Ｐ3は平面不整楕円形で長軸110㎝・深さ85㎝である。柱穴覆土は第Ⅳ層由来の黒褐色土を主体とし、柱痕は確認されなかった。遺物はＰ2内から古墳時代後期の土師器坏（第210図2）が出土した。

時期は、1号掘立柱建物址と同じく古墳時代後期から奈良時代までの間に想定される。

4号掘立柱建物址（第191図、図版36）

第Ⅱ次調査で検出し、旧名称はⅠ－1号掘立である。

Ｖ・Ｗ－14区に位置し、大半が未調査区にかかる。同規模の柱穴が並列するため建物の一部と推定した。確認面は第Ⅳ層直下である。建物址は梁行2間3.8ｍで、柱心間はＰ1・Ｐ2間2.0ｍ、Ｐ2・Ｐ3間1.8ｍを測る。梁行の軸方位はＮ－42°－Ｗである。柱穴は平面円形で、直径55㎝・深さ39㎝～54㎝である。柱穴覆土は第Ⅳ層由来の黒褐色土を主体とし、柱痕は確認されなかった。出土遺物はない。

時期は、他の掘立柱建物址との位置関係から古墳時代後期から奈良時代までの間に想定される。

5号掘立柱建物址（第191図、図版36）

第Ⅱ次調査で検出し、旧名称はⅠ－2号掘立である。

Ｔ－17区に位置し、大半が未調査区にかかる。115号土坑と重複する。確認面は第Ⅳ層直下である。建物址は梁行2間、桁行2間かそれ以上の側柱式で、規模は梁行3.7ｍである。柱心間は梁行1.8ｍ、桁行1.5ｍ～1.6ｍを測る。柱穴配置はやや不揃いである。主軸方位Ｎ－40°－Ｅ。柱穴は平面不整円形・楕円形で、長軸50㎝～70㎝・深さ30㎝～60㎝である。建物隅のＰ1・Ｐ3は柱穴列の軸に対し斜めに配置される。柱穴覆土は第Ⅳ層由来の黒褐色土を主体とし、柱痕は確認されなかった。出土遺物はない。

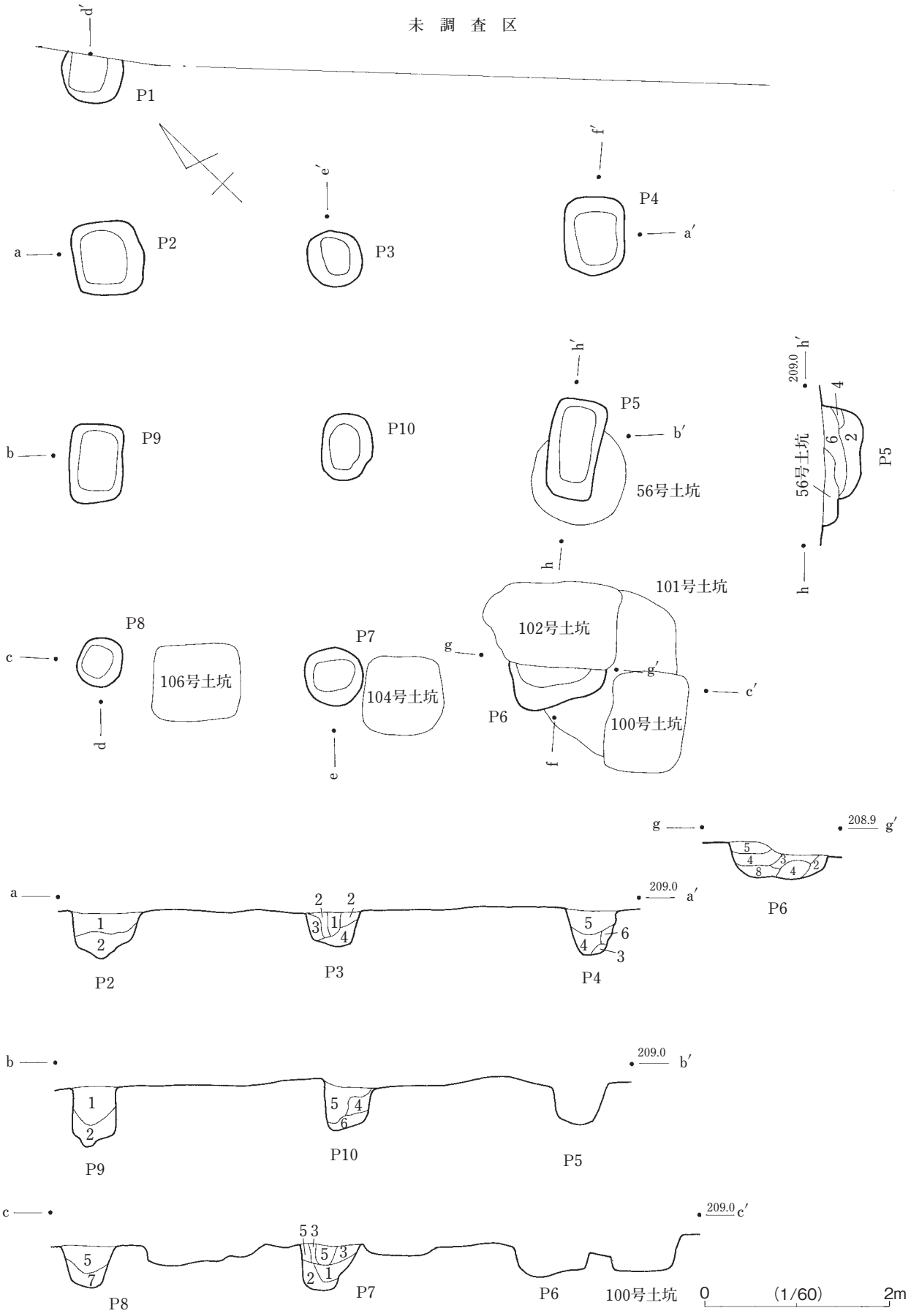
時期は、古墳時代後期から奈良時代までの間に想定される。

6号掘立柱建物址（第192図、図版37）

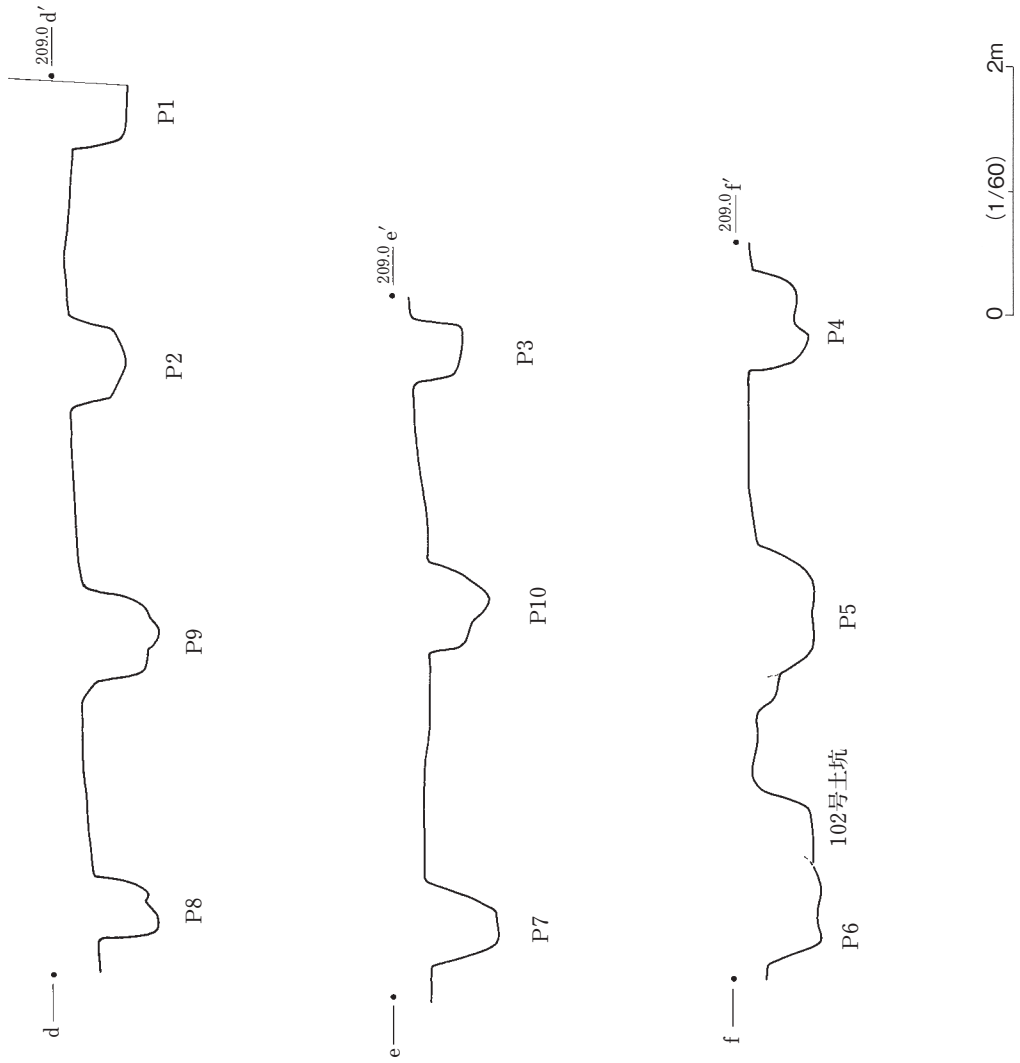
第Ⅱ次調査で検出し、旧名称はⅠ－3号掘立である。

Ｓ・Ｔ－18区に位置し、大半が未調査区にかかる。確認面は第Ⅳ層直下だが、掘り込み面は土層観察から第Ⅳ層上面である。建物址は梁行2間、桁行2間かそれ以上の側柱式と思われ、規模は梁行5.0ｍである。柱心間はＰ1・Ｐ2間2.7ｍ、Ｐ2・Ｐ3間2.4ｍ、Ｐ3・Ｐ4間2.0ｍを測る。梁行の軸方位はＮ－50°－Ｗである。柱穴は平面不整円形・楕円形で、長軸55㎝～70㎝である。確認面からの深さは40㎝前後だが、Ｐ4は掘り込み面からの深さが75㎝を測る。底面は第Ⅶ層中に達する。柱穴覆土は第Ⅳ層由来の黒褐色土を主体とし、Ｐ1で柱痕と思われる土層（幅15㎝）を確認した。出土遺物はない。

時期は、隣接する10世紀前半の23号住居址より古く、並列する掘立柱建物址と同じく古墳時代後期から奈良時代までの間に想定される。



第 188 図　1 号掘立柱建物址



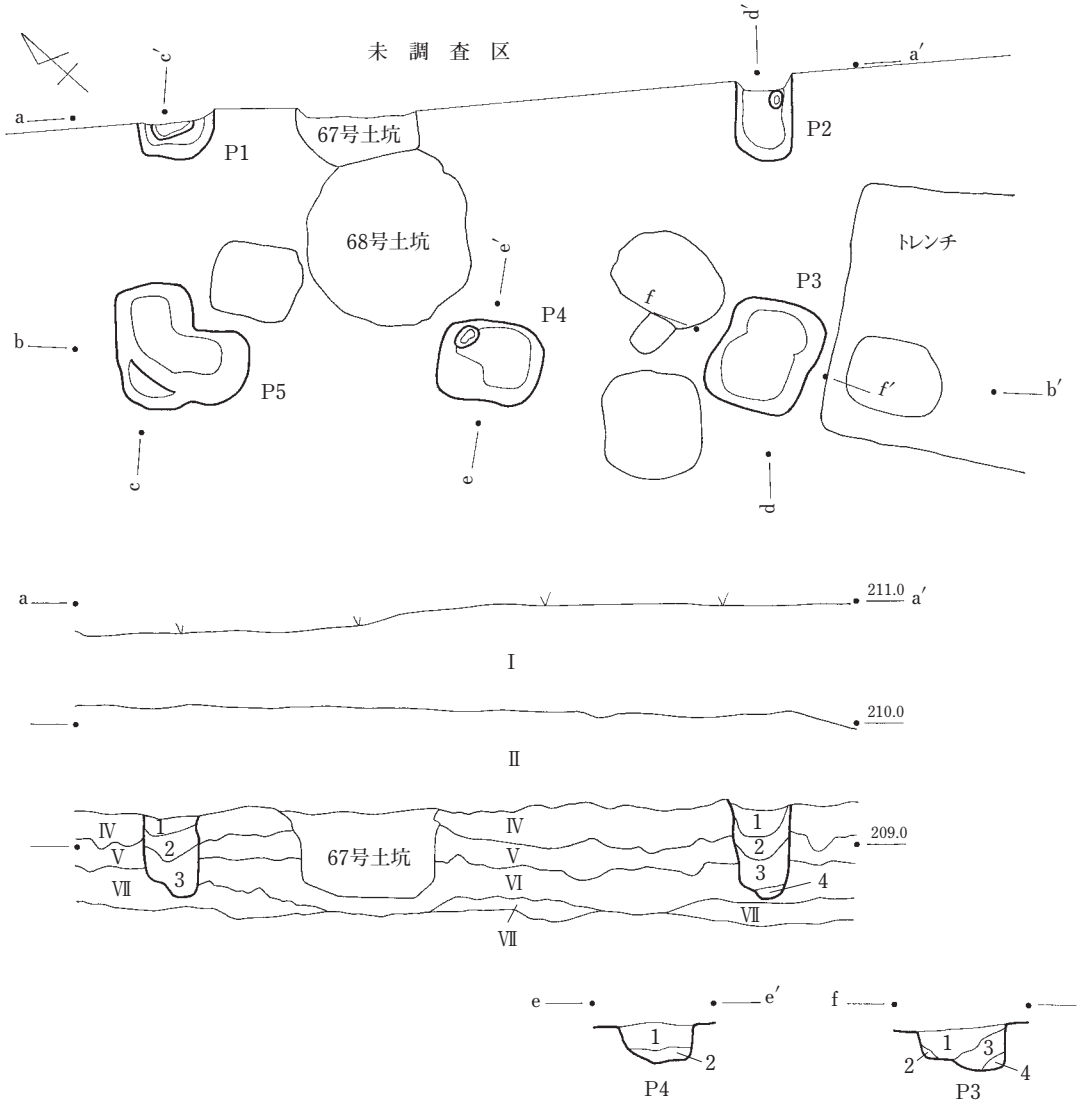
1号掘立柱建物址

P2
1　黒褐色土　黒色スコリア多い。
2　黒褐色土　黒色スコリアやや多い。褐色土粒多い。

P9
1　黒褐色土　黒色スコリア多い。褐色土塊(8㎝)含む。
2　黒褐色土　黒色スコリアやや多い。褐色土粒多い。

P3～8、10
1　暗褐色土　締まりなくパサパサ。橙色・黒色スコリアやや多い。
2　暗褐色土　橙色・黒色スコリアやや多い。褐色土粒多い。
3　褐色土　褐色土粒多い。
4　黒褐色土　黒色スコリア多い。
5　暗褐色土　黒色スコリア多い。褐色土粒少量。
6　黒褐色土　褐色味が強い。黒色スコリア多い。褐色土粒多い。
7　黒褐色土　粘性やや強く、締まりない。黒色スコリアやや多い。
8　暗褐色土　橙色・黒色スコリアやや多い。褐色土塊(2㎝～5㎝)多い。
9　黒褐色土　黒色スコリアやや多い。

第188－1図　1号掘立柱建物址



2号掘立柱建物址

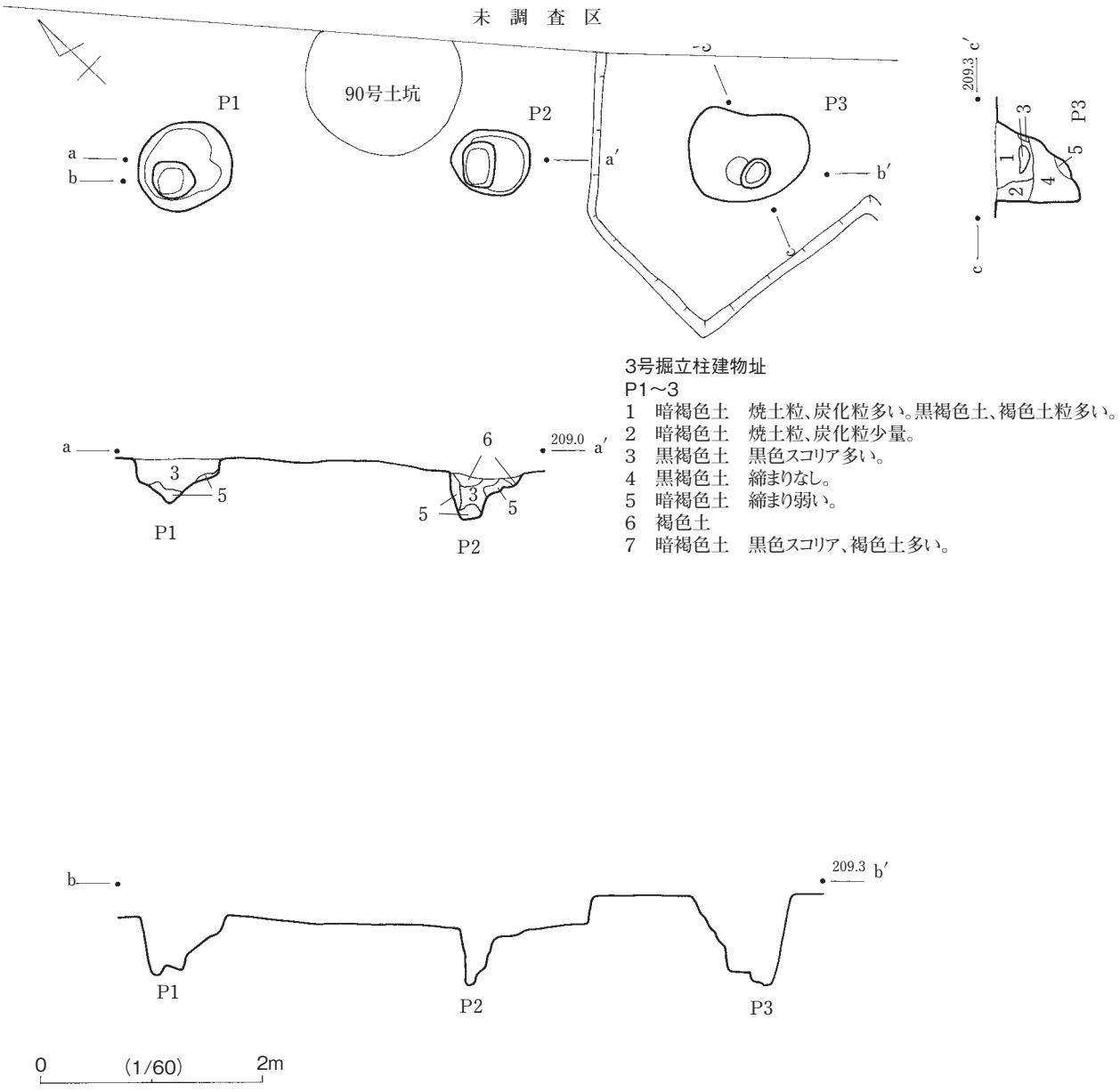
P1～2

1　暗褐色土　基本第Ⅱ層に似るが、黒色味が強く、締まりに欠ける。炭化粒少量。
2　暗褐色土　締まり強い。基本第Ⅳ層の土が混じる。
3　黒褐色土　基本第Ⅳ層に似るが、締まりに欠ける。やわらかい褐色土(1㎝～2㎝)含む。
4　黒褐色土　締まり強い。地山ローム塊(1㎝)含む。

P3～4

1　黒褐色土　黒色スコリア、褐色土粒多い。
2　暗褐色土　黒色スコリア、褐色土粒多い。
3　黒褐色土　黒色スコリアやや多い。褐色土粒多い。
4　暗褐色土　褐色土(1㎝)多い。

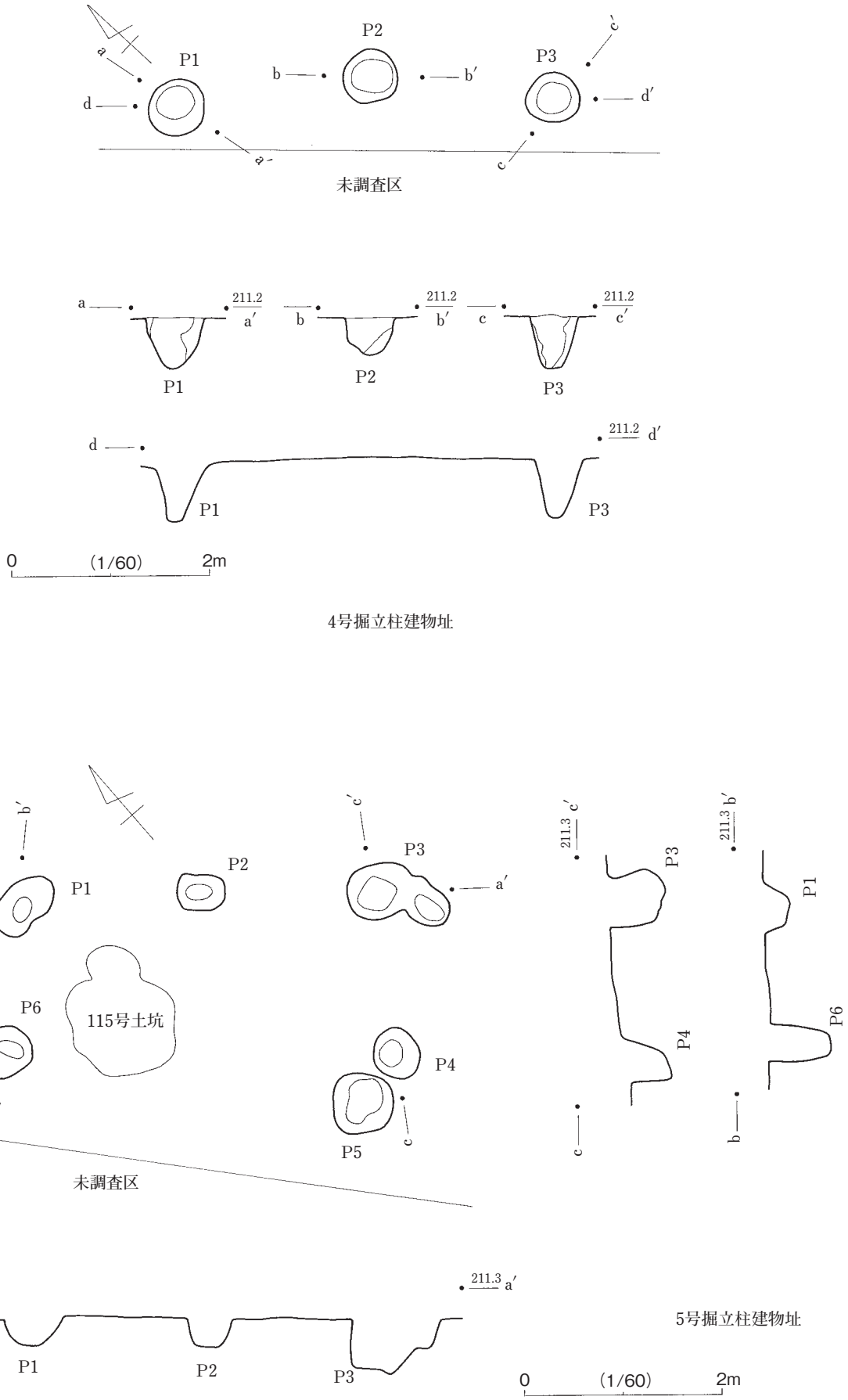
第189図　2号掘立柱建物址



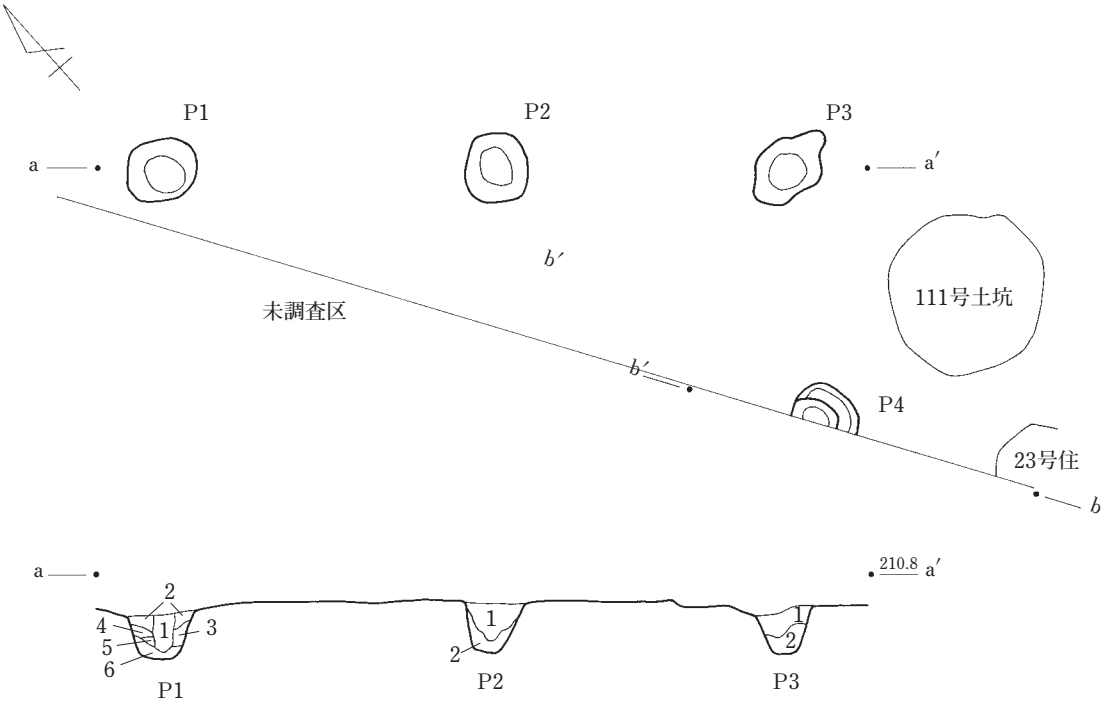
3号掘立柱建物址
P1～3
1　暗褐色土　焼土粒、炭化粒多い。黒褐色土、褐色土粒多い。
2　暗褐色土　焼土粒、炭化粒少量。
3　黒褐色土　黒色スコリア多い。
4　黒褐色土　締まりなし。
5　暗褐色土　締まり弱い。
6　褐色土
7　暗褐色土　黒色スコリア、褐色土多い。

0　(1/60)　2m

第 190 図　3 号掘立柱建物址



第 191 図　4 号・5 号掘立柱建物址



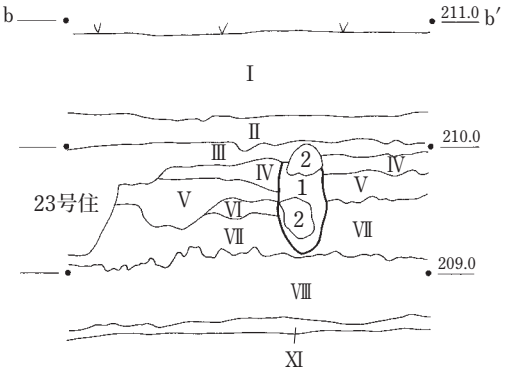
6号掘立柱建物址

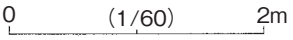
P1
1　暗褐色土　黒色味が強い。締まりなくパサパサ。
2　暗褐色土
3　暗褐色土
4　黒褐色土　黒色スコリア多い。
5　暗褐色土
6　暗褐色土

P2
1　暗褐色土　黒色スコリア多い。
2　黒褐色土

P3
1　黒褐色土　黒色スコリア、褐色土(2㎝以下)多い。
2　暗褐色土　褐色土(1㎝以下)多い。

P4
1　黒褐色土　基本第Ⅳ層に似るが、黒色味が強い。黒色スコリア多い。
2　褐色土　粘性、締まりなくパサパサ。黒色スコリアやや多い。





第 192 図　6 号掘立柱建物址

7 号掘立柱建物址（第 193 図、図版 37）

第Ⅰ次調査で検出し、旧名称は 1 号掘立である。

Ｐ・Ｑ－ 10・11 区に位置する。確認面は第Ⅶ層上面で、試掘坑によって一部攪乱されている。建物址は 2 間× 2 間の側柱式（3.5 ｍ四方）で、柱心間は約 1.7 ｍを測る。主軸方位Ｎ－ 43°－Ｅ。柱穴は平面不整円形で、直径 50㎝～ 75㎝（Ｐ 5 は直径 100㎝）・深さ 25㎝～ 48㎝である。覆土は第Ⅳ層由来の黒褐色土を主体とし、柱痕は確認されなかった。Ｐ 5 は多数の自然礫（拳大から最大 50㎝）が集積される。出土遺物はない。

規模や位置関係から 14 号住居址（8 世紀中頃）に付随する可能性がある。

8 号掘立柱建物址（第 194 図）

第Ⅱ次調査で検出し、旧名称は 2 号掘立である。

Ｓ－ 5 区に位置する。確認面は第Ⅶ層上面である。大半が 12 号住居址と重複し、さらに耕作溝で攪乱されているため全体を明らかにできなかったが、柱穴が直交する形で配置されていることから建物址と推定した。柱心間はＰ 1・Ｐ 2 間 2.0 ｍ、Ｐ 3・Ｐ 4 間 2.2 ｍを測る。主軸方位Ｎ－ 35°－Ｅ。柱穴は平面不整楕円形で、直径 70㎝前後・深さ 40㎝～ 50㎝である。柱穴覆土は暗褐色土を主体とし、柱痕は確認されなかった。出土遺物はない。

時期は、他の掘立柱建物址と同じく古墳時代後期から奈良時代までの間に想定される。

9 号掘立柱建物址（第 195 図、図版 37）

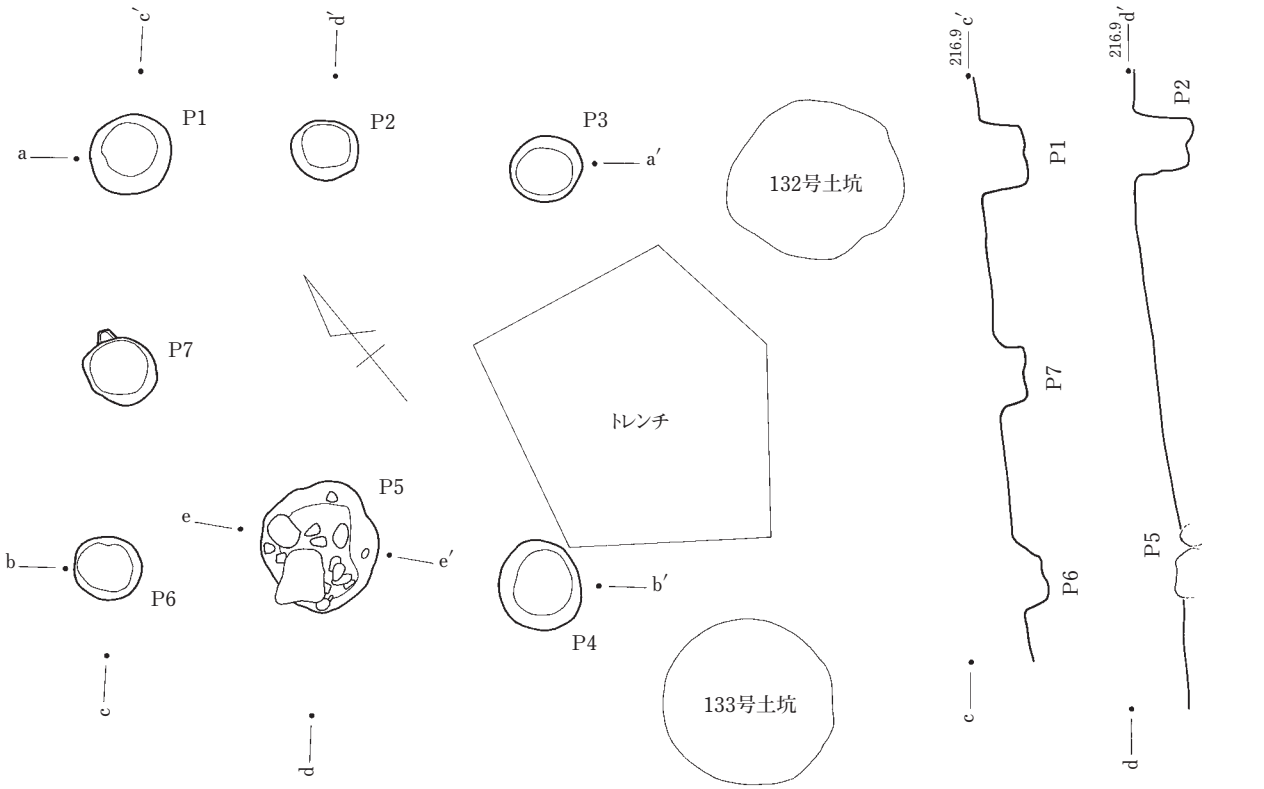
第Ⅴ次調査で検出し、旧名称は第Ⅴ次 2 号掘立である。

Ｘ－ 60 区に位置し、北東側が未調査区にかかる。10 号掘立柱建物址と重複する。確認面は第Ⅶ層上面である。建物址は梁行 2 間、桁行 2 間かそれ以上の側柱式で、規模は梁行 3.5 ｍ、桁行の検出長 3.5 ｍである。柱穴の軸方向は梁行と桁行で直角とならない。柱心間は 1.5 ｍ～ 1.7 ｍを測る。主軸方位Ｎ－ 30°－Ｅ。柱穴は平面不整円形・楕円形で、長軸 40㎝～ 70㎝・深さ 25㎝～ 42㎝である。建物内に位置するＰ 3 は深さ 8㎝と規模が小さく、床束に相当するものと思われる。柱穴覆土は第Ⅳ層由来の黒褐色土を主体とし、柱痕は確認されなかった。出土遺物はなく、時期は不明である。

10 号掘立柱建物址（第 196 図、図版 37）

第Ⅴ次調査で検出し、旧名称は第Ⅴ次 3 号掘立である。

Ｘ・Ｗ－ 60 区に位置し、北東側が未調査区にかかる。9 号掘立柱建物址や 159 号土坑と重複し、160 号土坑に切られる。確認面は第Ⅶ層上面である。建物址は梁行 2 間、桁行 2 間かそれ以上の側柱式で、規模は梁行 3.8 ｍ、桁行の検出長 3.4 ｍである。柱穴の軸方向は梁行と桁行で直角とならない。柱心間は 1.8 ｍ～ 2.0 ｍを測る。主軸方位Ｎ－ 36°－Ｅ。柱穴は平面不整円形･楕円形で､長軸 50㎝～ 75㎝･深さ 30㎝～ 50㎝である。柱穴覆土は第Ⅳ層由来の黒褐色土を主体とし、柱痕は確認されなかった。出土遺物はなく、時期は不明である。

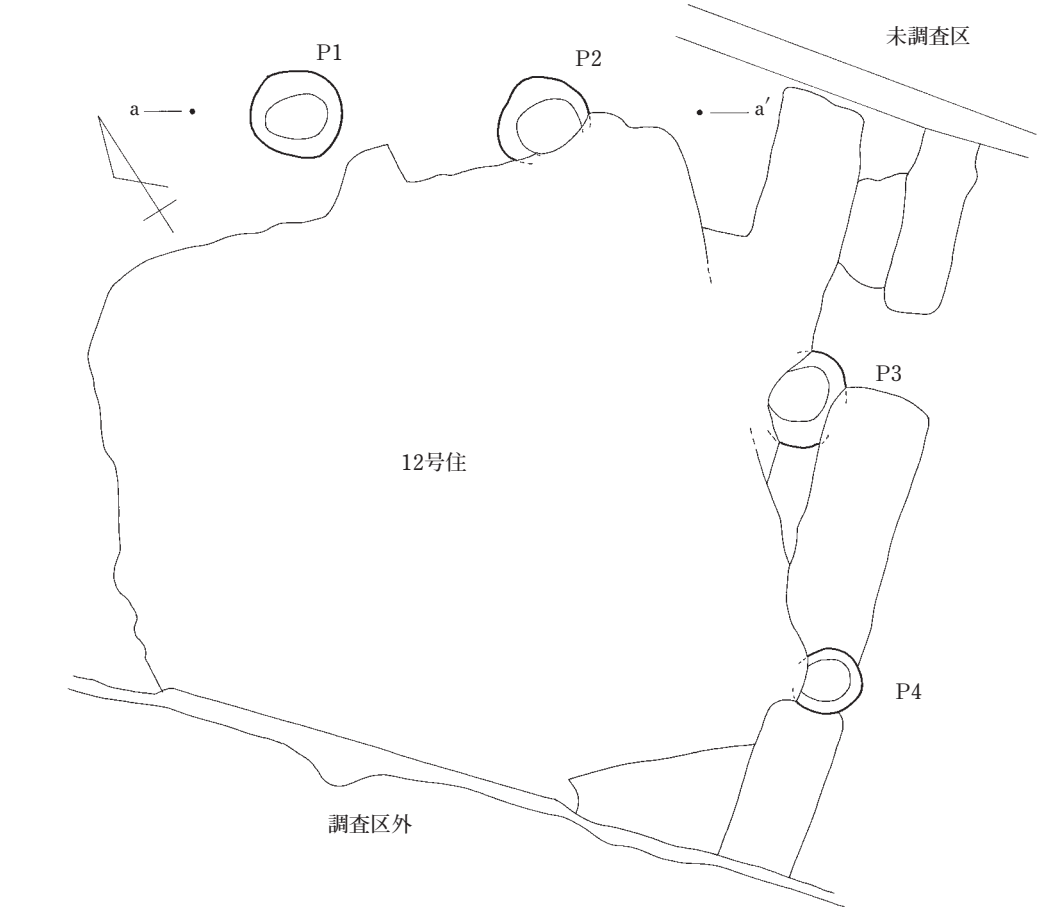


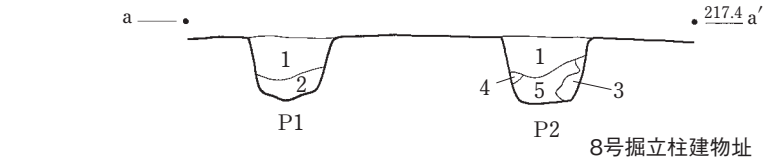
7号掘立柱建物址

1　暗褐色土
2　黒褐色土　黒色スコリア(1㎜～5㎜)を含む。基本第Ⅳ層由来。
3　暗褐色土　地山ローム粒を含む。
4　暗褐色土
5　第2層と第6層の混合層
6　暗褐色土
7　褐色土
8　暗褐色土　地山ローム塊多い。
9　暗褐色土　地山ローム粒多い。
10　黒褐色土　炭化粒、黒色スコリアを少量含む。
11　暗褐色土　炭化粒、橙色スコリアを少量含む。地山軟質ローム粒やや多い。

0　(1/60)　2m

第193図　7号掘立柱建物址

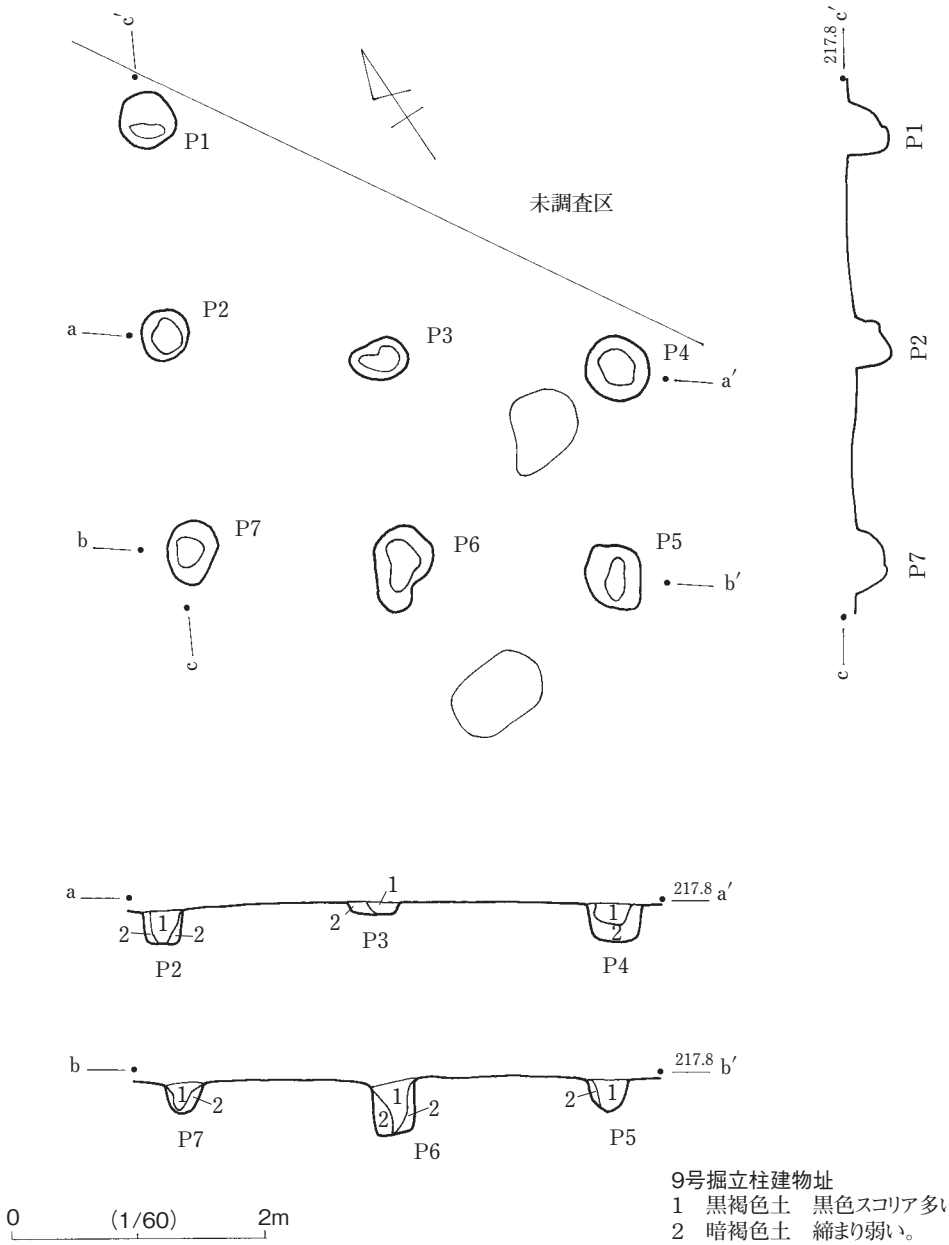




0 (1/60) 2m

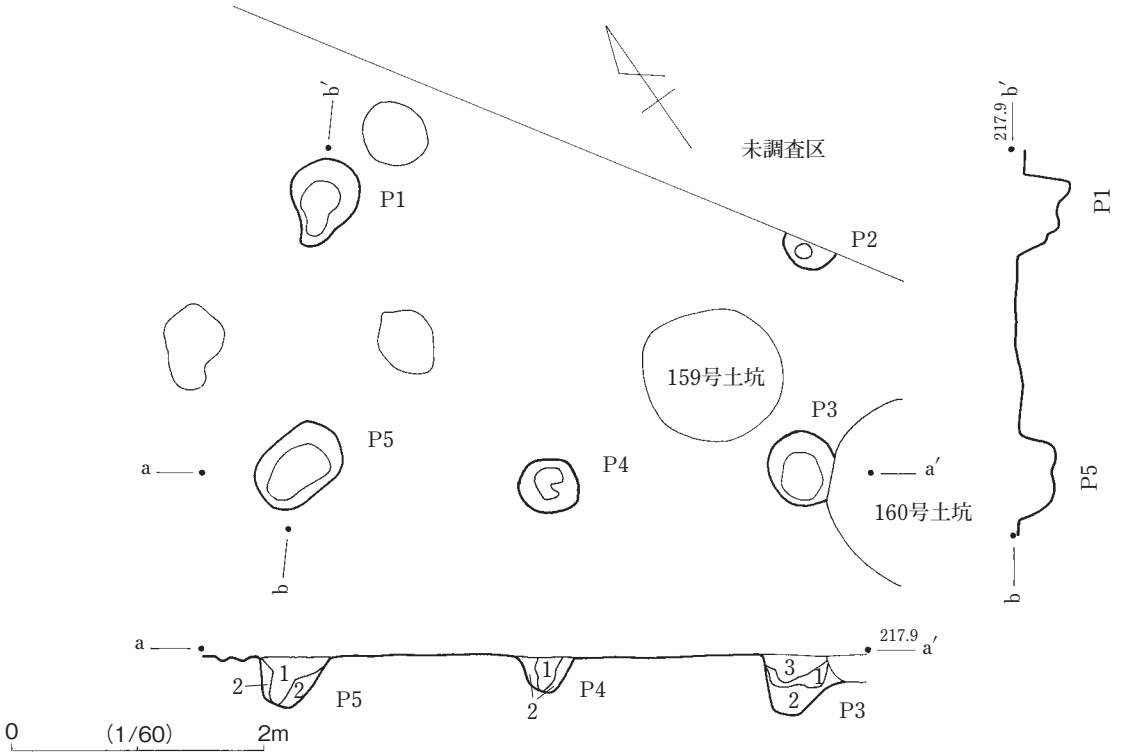
8号掘立柱建物址
1　暗褐色土　黒色スコリア多い。
2　暗褐色土　第1層に似るが黒色味薄く、スコリア少ない。
3　にぶい褐色土　褐色土粒・塊(2㎝以下)多い。
4　暗褐色土　褐色土粒・塊(2㎝以下)多い。
5　暗褐色土　黒色スコリアやや多い。

第194図　8号掘立柱建物址



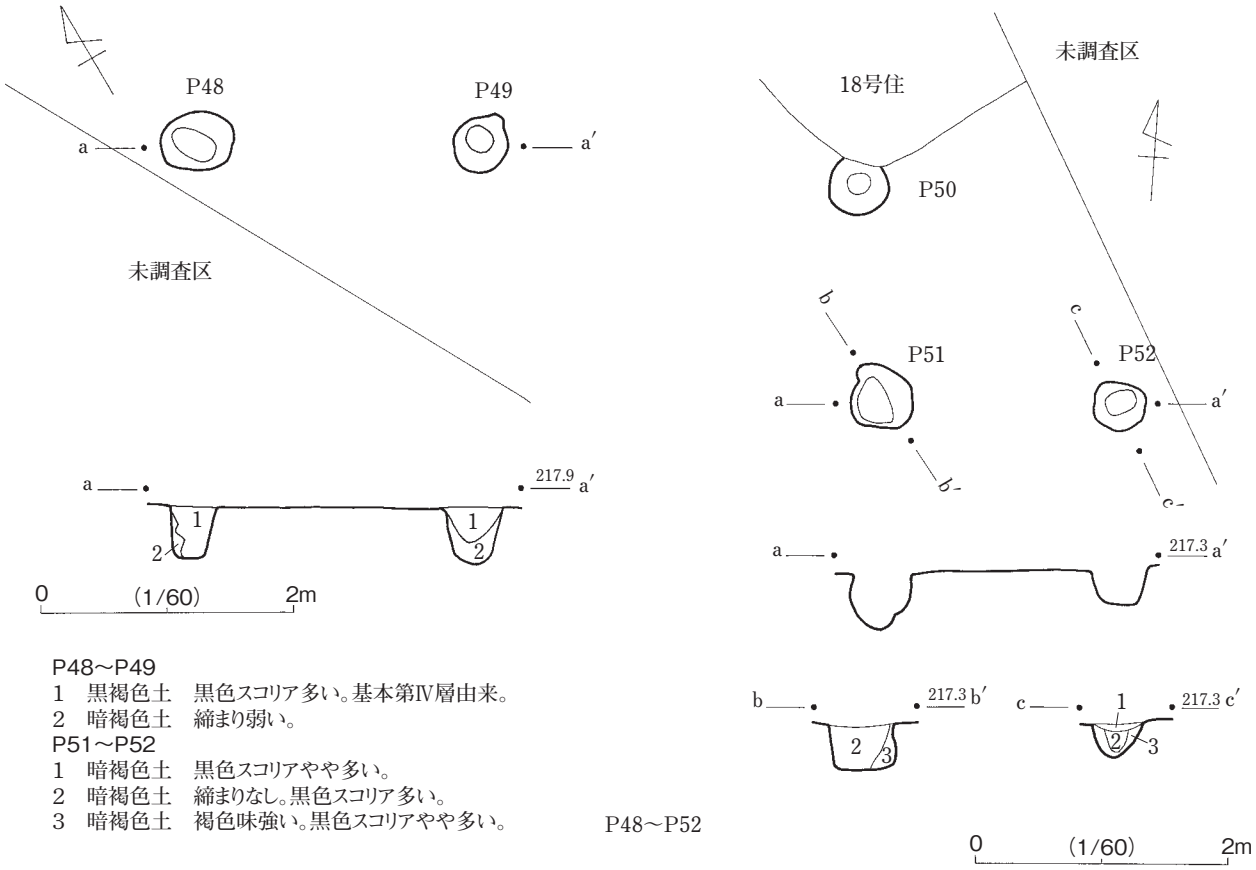
9号掘立柱建物址
1　黒褐色土　黒色スコリア多い。基本第Ⅳ層由来。
2　暗褐色土　締まり弱い。

第 195 図　9 号掘立柱建物址



10号掘立柱建物址
1　黒褐色土　黒色スコリア多い。基本第Ⅳ層由来。　2　暗褐色土　締まり弱い。　3　黒褐色土　黒色スコリア多い。

10号掘立柱建物址



P48～P49
1　黒褐色土　黒色スコリア多い。基本第Ⅳ層由来。
2　暗褐色土　締まり弱い。
P51～P52
1　暗褐色土　黒色スコリアやや多い。
2　暗褐色土　締まりなし。黒色スコリア多い。
3　暗褐色土　褐色味強い。黒色スコリアやや多い。

P48～P52

第 196 図　10 号掘立柱建物址、ピット（1）

(3) ピット

52 基を検出した。概ね同規模のピットがまとまって検出されたことから、3 ヵ所に大別して報告する。

P 1 ～P 14（第 197 図・図版 35）

第Ⅲ次調査で検出した。T－26 区、U－25・26 区、V－25 区に位置し、P 5 ～P 7 は 2 号掘立柱建物址と重複する。確認面は第Ⅶ層上面である。平面は不整楕円形・方形で、長軸 70㎝～ 90㎝（P 11 は 140㎝）を測る。確認面からの深さは 10㎝～ 55㎝である。覆土は第Ⅳ層由来の黒褐色土を主体とし、柱痕は確認されなかった。

出土遺物はない。時期は、位置関係や形状・規模等の類似から 1 号・2 号掘立柱建物址と同時期、あるいは近い時期に想定される。

P 15 ～P 29（第 198 図・図版 38）

第Ⅳ次調査で検出し、Z－23・24 区に位置する。P 20、P 21 は 49 号土坑、P 17 は 32 号住居址とそれぞれ重複する。確認面は第Ⅶ層中である。大形ピットが 3.8 m × 3.4 mの四辺上に並び、小形ピットが付随するように分布することから、すべてのピットが一体で建物を構成していた可能性も考えられる。

大形ピット（P 15 ～P 19）は平面不整方形・円形で、長軸 60㎝～ 85㎝、確認面からの深さは 15㎝～ 45㎝である。柱の当たりと思われる硬質面（直径約 15㎝）がP 15・16 の底面で確認された。

小形ピット（P 20 ～P 29）は平面円形基調で、直径 35㎝～ 40㎝、確認面からの深さは 10㎝～ 58㎝である。柱の当たりと思われる硬質面（直径約 8㎝）がP 23 の底面で確認された。

覆土はすべて第Ⅳ層由来の黒褐色土・暗褐色土を主体とする。

出土遺物がなく、時期は不明である。

P 48 ～P 52（第 196 図）

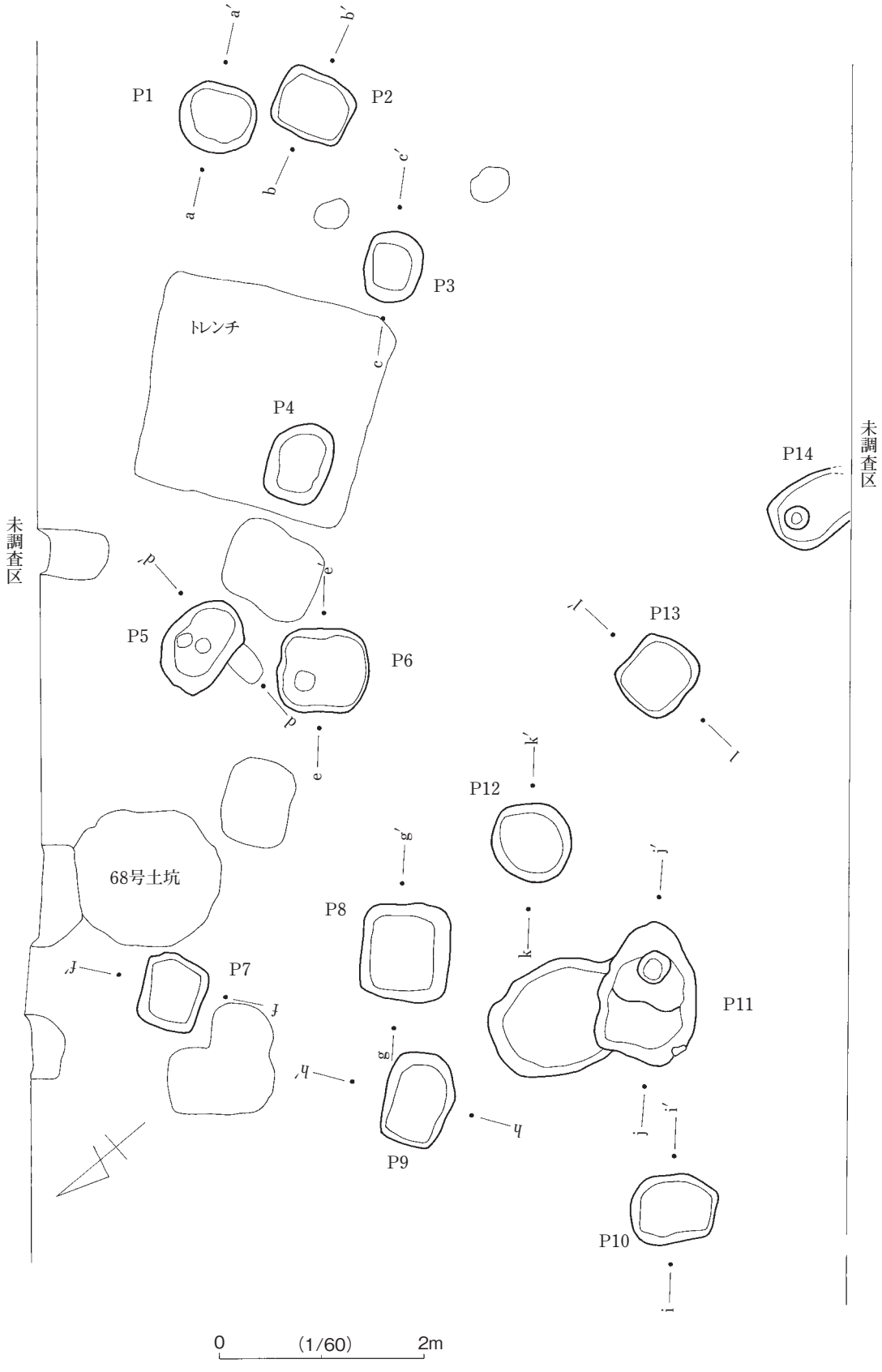
第Ⅴ次調査で検出した。確認面は第Ⅶ層中である。

P 48・49 はX－0 区に位置し、ピット間は 2.2 mである。P 50 ～P 52 はZ－58 区に位置し、P 50 は 18 号住居址と重複する。ピット間はP 50・51 で 1.7 m、P 51・52 で 2.0 mを測る。平面は不整円形・楕円形で、長軸 40㎝～ 60㎝、確認面からの深さ 30㎝～ 47㎝である。覆土は第Ⅳ層由来の黒褐色土を主体とし、明瞭な柱痕は確認されなかった。ただし、柱の当たりと思われる硬質面（直径約 15㎝）がP 52 の底面で確認された。

出土遺物はない。時期は、位置関係や形状・規模等の類似から 9 号・10 号掘立柱建物址と同時期、あるいは近い時期に想定される。

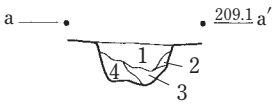
(4) 土坑（第 199 ～ 210 図・第 3 表・図版 38 ～ 40）

149 基を検出した。平面円形でタライ状の土坑が多い。他に方形、長楕円形あるいは長方形がある。方形土坑の多くはS－27 区付近で列状に群集する。長楕円形あるいは長方形の土坑は主軸が概ね北東方向に揃う。出土遺物は全般に少ない。大半の土坑は周囲からの流れ込みと思われる土器片や礫をわずかに含む程度だが、115 号土坑で壁際に土師器坏と皿が重ねられ、56 号や 111 号土坑で覆土中に多数の礫が集積される。75 号土坑ではクリ子葉と思われる炭化種実の破片が多数検出された。土坑の時期は不明確だが、竪穴住居や掘立柱建物と同時期か以降に推定される。

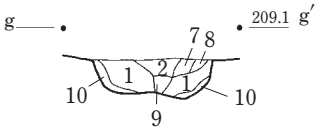

P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
トレンチ
68号土坑
未調査区
未調査区
0
(1/60)
2m

第197図　ピット（2）

P7



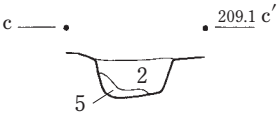
P1



P8

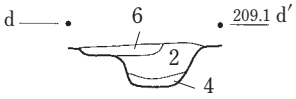
P2

P9



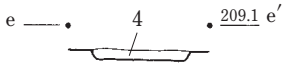
P3

P10

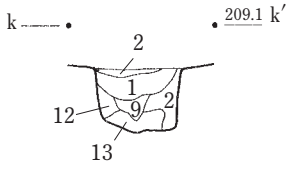


P5

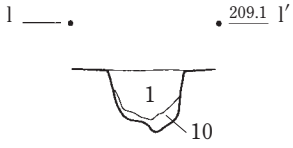
P11



P6



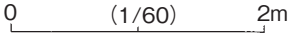
P12



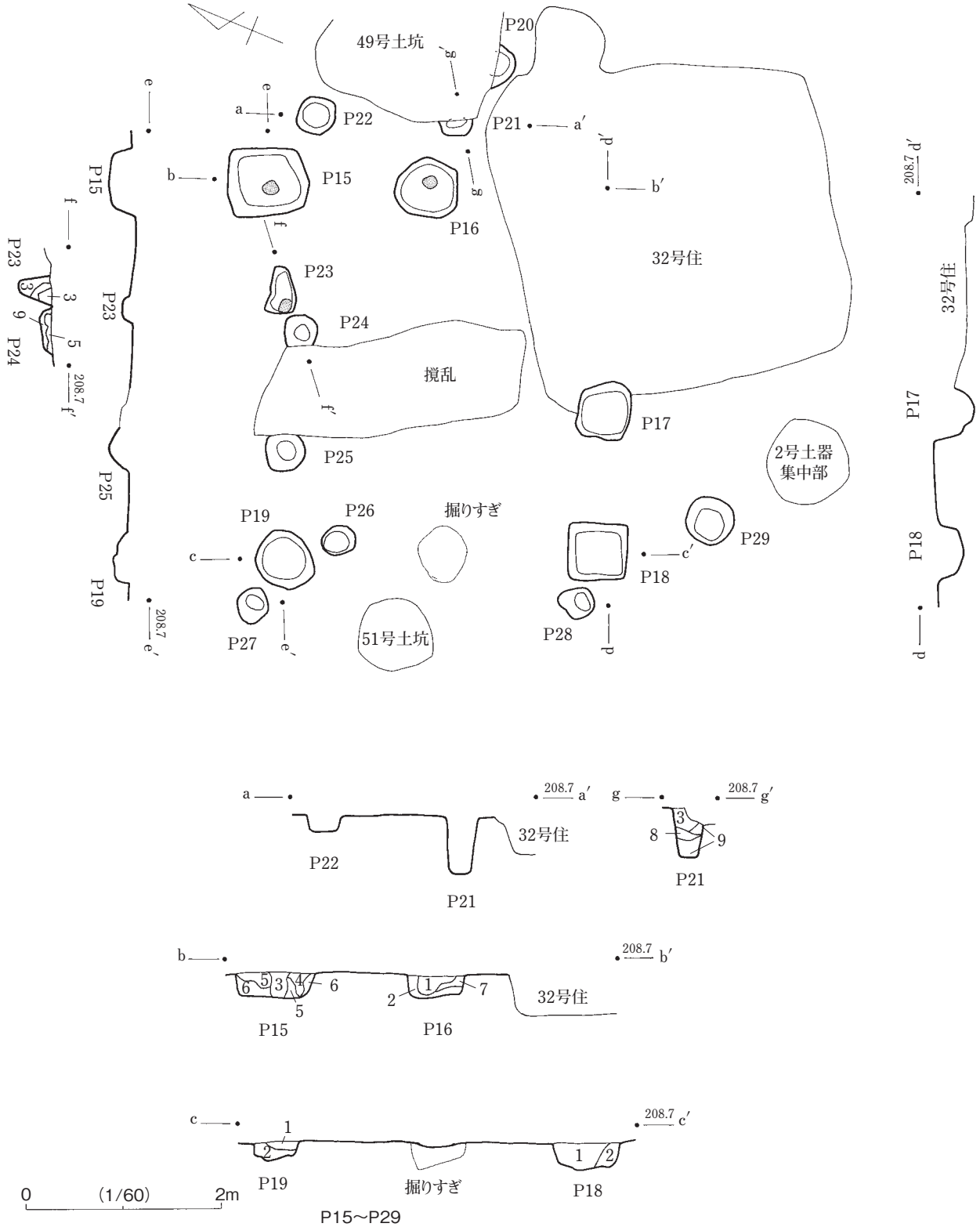
P13

P1～P13

1	黒褐色土	黒色スコリア多い。
2	黒褐色土	粘性やや強く、締まり弱い。
3	黒褐色土	粘性やや強い。褐色土粒多い。
4	暗褐色土	粘性やや強い。褐色土粒多い。黒色スコリアやや多い。
5	黒褐色土	粘性弱く、締まりやや強い。褐色土粒多い。黒色スコリアやや多い。
6	暗褐色土	粘性、締まり弱い。黒色スコリア多い。
7	暗褐色土	褐色土塊(1cm～3cm)を含む。
8	暗褐色土	第7層に似るが、褐色土粒少ない。
9	暗褐色土	締まり弱い。黒色スコリアを少量含む。
10	暗褐色土	褐色土(1cm)多い。
11	黒褐色土	第1層中に褐色土(1cm～2cm)多い。
12	黒褐色土	第1層に似るが、締まり弱い。
13	黒褐色土	第1層に似るが、褐色土粒やや多い。



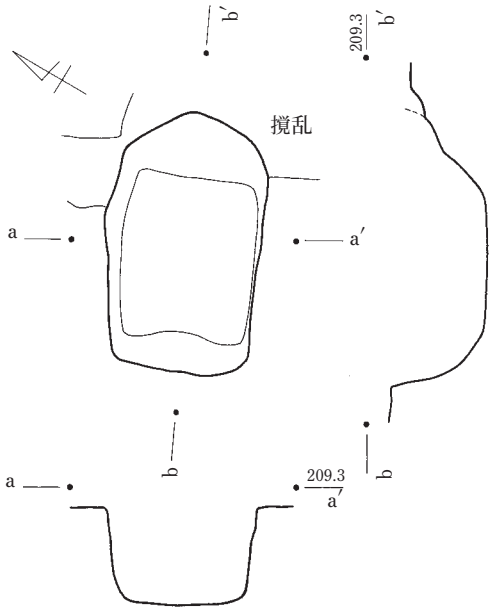
第197－1図　ピット（2）



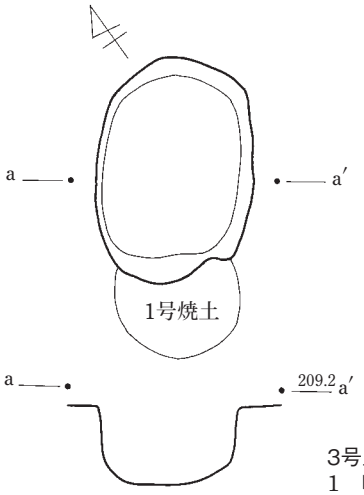
P15～P29

1　黒褐色土　褐色土、黒色スコリア多い。
2　暗褐色土　褐色土、黒色スコリア多い。
3　暗褐色土　黒色スコリア多い。
4　暗褐色土　褐色土粒(1㎜以下)を含む。黒色スコリア多い。
5　暗褐色土　締まりやや強い。褐色土粒、黒色スコリア多い。
6　褐色土　褐色土粒多い。
7　黒褐色土　黒色味強い。
8　暗褐色土　黒色味強い。
9　褐色土　締まりない。

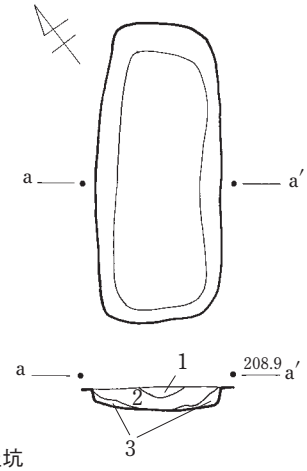
第198図　ピット（3）



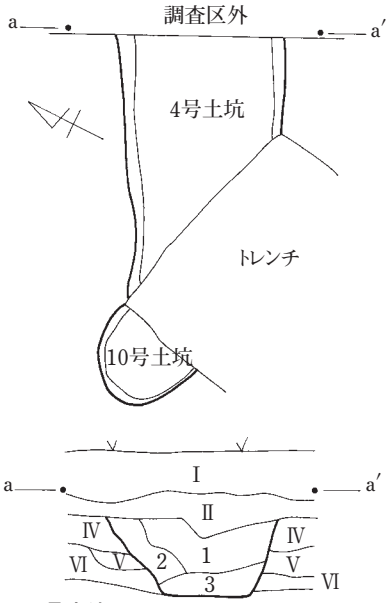
1号土坑



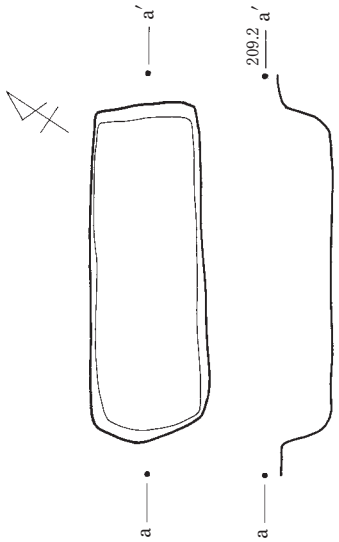
2号土坑



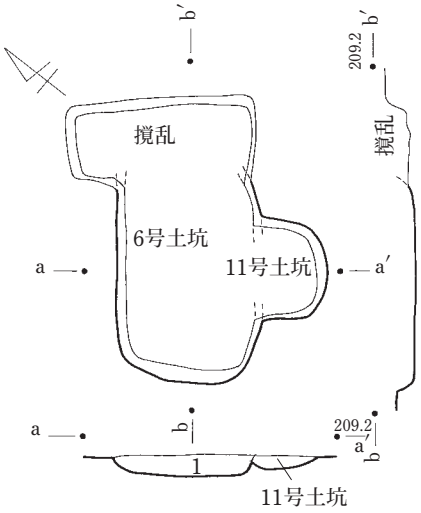
3号土坑
1　暗褐色土　褐色土・地山ソフトローム(1㎝以下)含む。
2　暗褐色土　地山ソフトローム多い。
3　暗褐色土　褐色土・地山ソフトローム(1㎝以下)含む



4号土坑
全般に黒色スコリア、褐色土を多く含む。
1　暗褐色土　暗褐色土粒を少量含む。
2　黒褐色土　基本第Ⅳ層に類似する。
3　黒褐色土



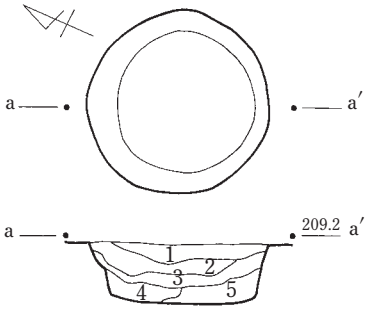
5号土坑



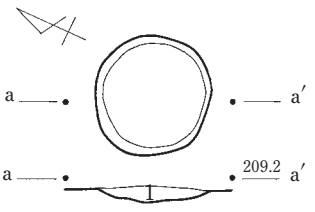
6号土坑
1　黒褐色土　黒色スコリア多い。

11号土坑

7号土坑
全般に黒色スコリア(1㎜以下)多い。
1　暗褐色土
2　黒褐色土　褐色土、暗褐色土を含む。
3　黒褐色土　褐色土、暗褐色土を多く含む。
4　暗褐色土
5　黒褐色土



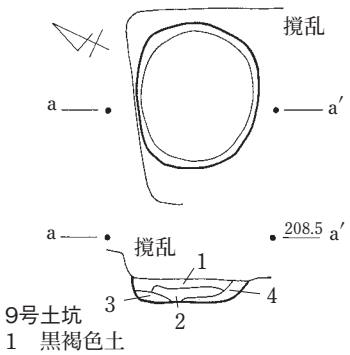
7号土坑



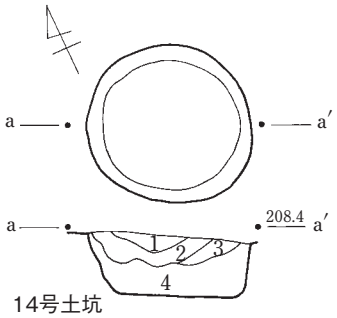
8号土坑
1　黒褐色土　暗褐色土粒を少量含む。

0　(1/60)　2m

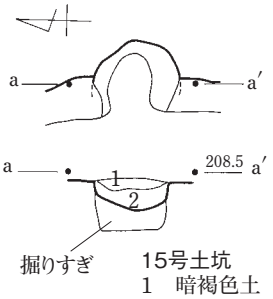
第199図　土坑（1）



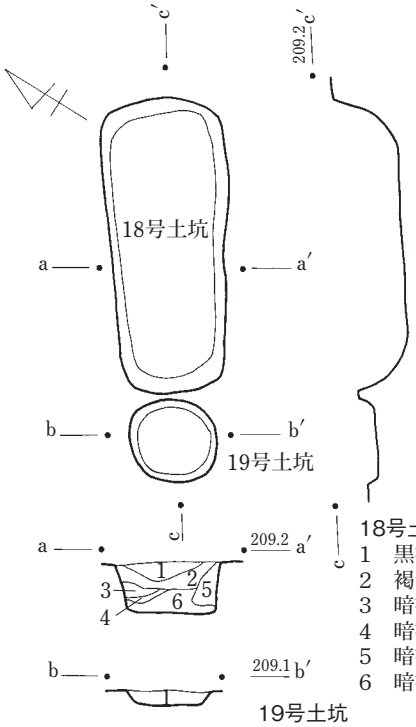
9号土坑
1　黒褐色土
2　黒褐色土　黒色味が強い。
3　黒褐色土
4　黒褐色土　褐色土、暗褐色土粒をやや多く含む。



14号土坑
全般に黒色スコリア多い。
1　黒褐色土　褐色土・暗褐色土(1cm以下)含む。
2　黒褐色土　褐色土・暗褐色土(1cm～1.5cm)多い。
3　黒褐色土　褐色土・暗褐色土(1cm以下)少量。
4　黒褐色土　褐色土・暗褐色土(1cm以下)含む。

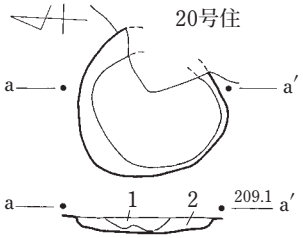


15号土坑
1　暗褐色土
2　黒褐色土

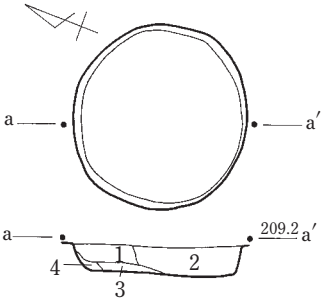


18号土坑
1　黒褐色土　黒色スコリア多い。
2　褐色土
3　暗褐色土
4　暗褐色土　地山ローム粒多い。
5　暗褐色土　地山ローム粒多い。
6　暗褐色土

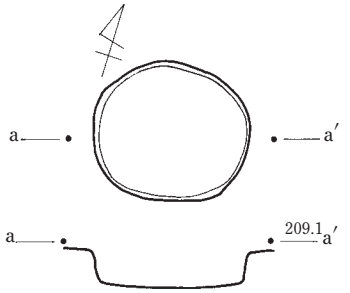
19号土坑
1　暗褐色土　黒色スコリア、褐色土粒多い。



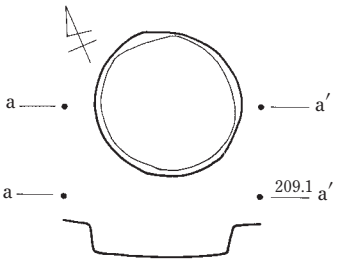
20号土坑
1　暗褐色土　黒色スコリア少量、炭化粒(1mm以下)含む。
2　褐色土　炭化材(1.5cm以下)やや多く含む。地山ローム粒多い。



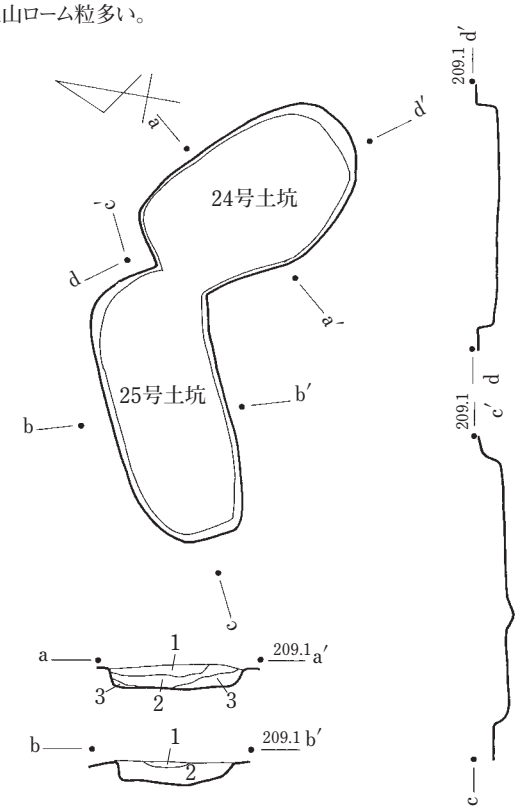
21号土坑
1～3　黒褐色土　褐色土粒多い
4　褐色土



22号土坑



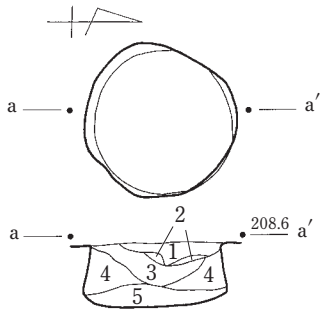
23号土坑



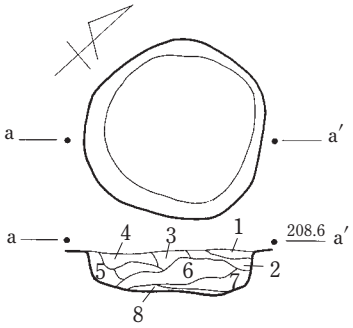
24号・25号土坑
1　黒褐色土　地山ローム粒多い。
2～3　黒褐色土　黒色スコリア、地山ローム粒含む。

0　(1/60)　2m

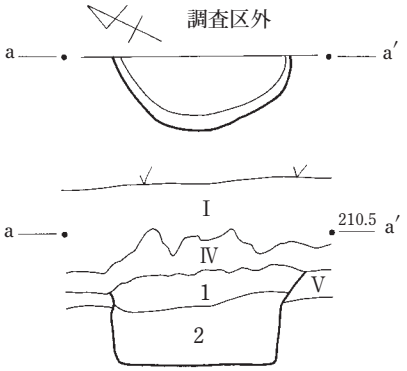
第200図　土坑(2)



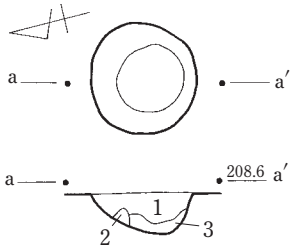
26号土坑
全般に黒色スコリアを含み、褐色土(1㎜～1.5㎝)多い。
1　暗褐色土
2　黒褐色土
3　黒褐色土　褐色味が強い。
4　黒褐色土
5　黒褐色土　黒色味が強い。



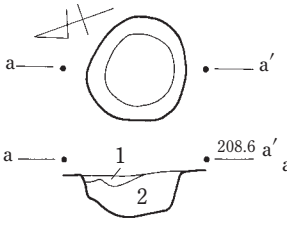
27号土坑
1　暗褐色土　黒褐色土を含む。
2　黒褐色土　褐色土(1㎝以下)含む。
3　暗褐色土　黒色味が強い。褐色土(1㎝以下)含む。
4　暗褐色土　褐色土(1㎝以下)含む。
5　黒褐色土　褐色土塊(5㎝以下)含む。
6　暗褐色土　褐色土粒(5㎜以下)多い。
7　暗褐色土
8　黒褐色土



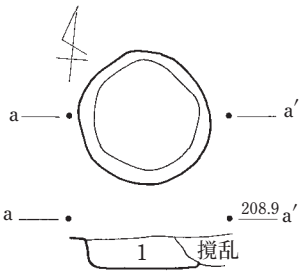
28号土坑



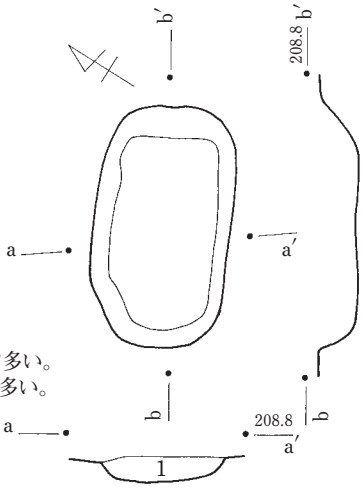
29号土坑
1　黒褐色土　黒色スコリア多い。
2　暗褐色土　橙色・黒色スコリア、地山ローム粒含む。
3　黒褐色土　地山ローム塊(2㎝以下)多い。



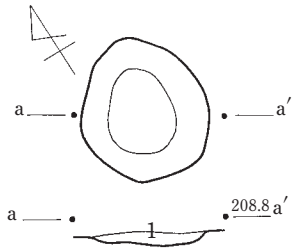
30号土坑
1　黒褐色土　黒色スコリア多い。
2　暗褐色土　橙色スコリア(1㎜以下)多い。



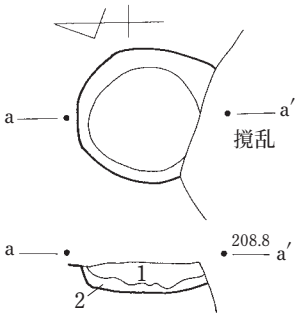
32号土坑
1　黒褐色土　黒色スコリア多い。褐色土やや多い。



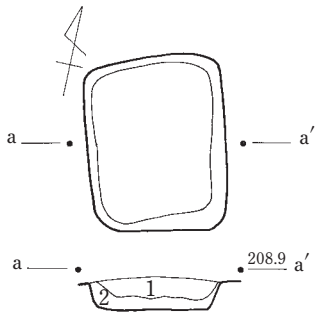
33号土坑
1　黒褐色土　黒色スコリア多い。褐色土やや多い。



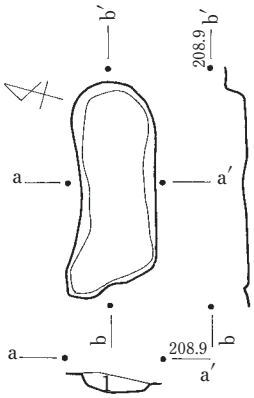
34号土坑
1　黒褐色土　黒色スコリア多い。褐色土やや多い。



35号土坑
1　黒褐色土　黒色スコリア多い。褐色土やや多い。
2　暗褐色土　締まりあり。黒色スコリアやや多い。



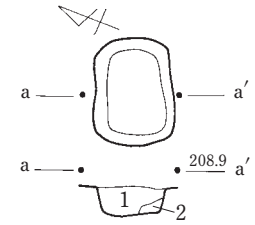
36号土坑
1　黒褐色土　黒色スコリア多い。褐色土やや多い。
2　暗褐色土　締まりあり。黒色スコリアやや多い。



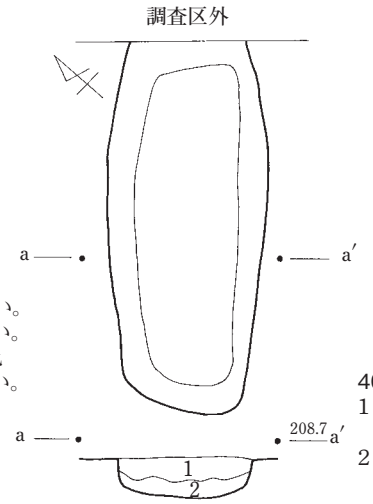
37号土坑
1　黒褐色土　黒色スコリア多い。褐色土やや多い。

0　(1/60)　2m

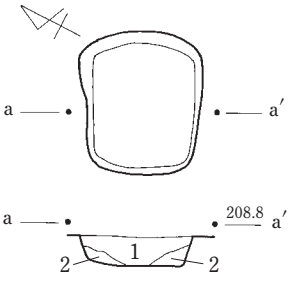
第201図　土坑(3)



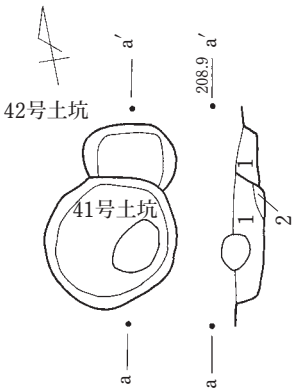
38号土坑
1　黒褐色土　黒色スコリア多い。褐色土やや多い。
2　暗褐色土　締まりあり。黒色スコリアやや多い。



39号土坑
1　黒褐色土　黒色スコリア多い。褐色土多い。
2　黒褐色土　黒色スコリア多い。褐色土多い。

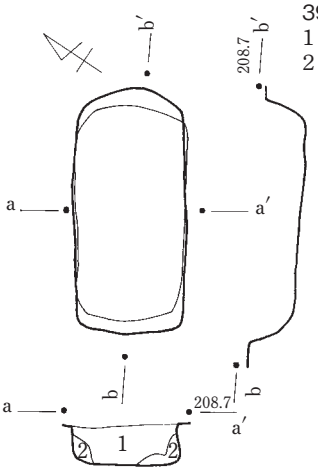


40号土坑
1　黒褐色土　黒色スコリア多い。褐色土多い。
2　黒褐色土　黒色スコリア、褐色土やや多い。

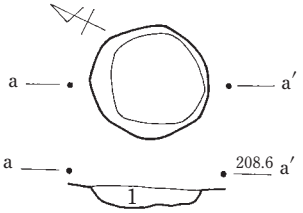


41号土坑
1　黒褐色土　黒色スコリア多い。褐色土を少量含む。
2　褐色土

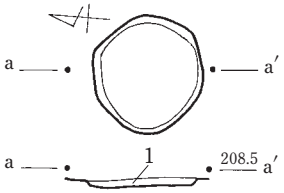
42号土坑
1　黒褐色土　黒色スコリア、褐色土やや多い。



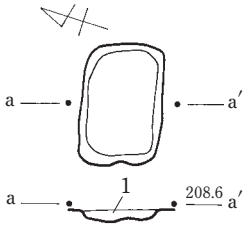
43号土坑
1　暗褐色土　黒色スコリア多い。
2　暗褐色土　黒色スコリア多い。黒褐色土混じる。



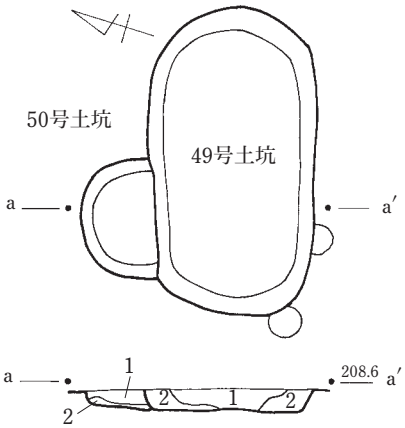
44号土坑
1　黒褐色土　黒色スコリア多い。



45号土坑
1　黒褐色土　黒色スコリア多い。

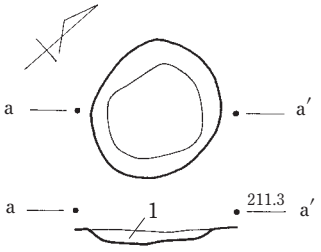


47号土坑
1　黒褐色土　黒色スコリア多い。

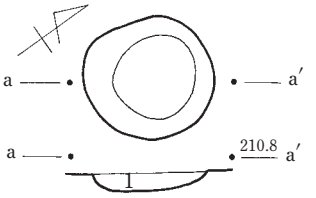


49号土坑
1　暗褐色土　黒色スコリア多い。褐色土多い。
2　暗褐色土　黒色味が強い。黒色スコリア多い。

50号土坑
1　暗褐色土　黒色スコリア多い。
2　褐色土



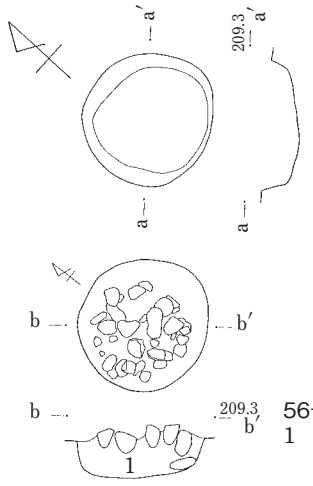
54号土坑
1　黒褐色土　黒色スコリア多い。褐色土粒やや多い。



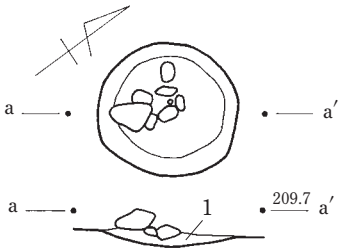
55号土坑
1　黒褐色土　黒色スコリア多い。褐色土粒やや多い。

0　(1/60)　2m

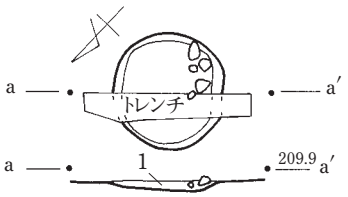
第202図　土坑（4）



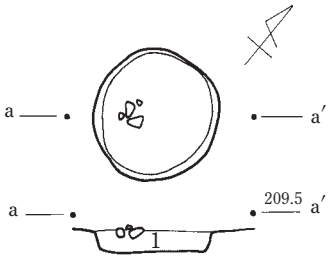
56号土坑
1　暗褐色土　基本Ⅱ～Ⅲ層に似る。黒色スコリア多い。炭化粒を少量含む。



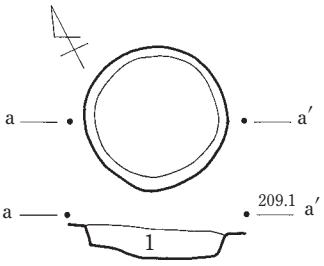
57号土坑
1　暗褐色土



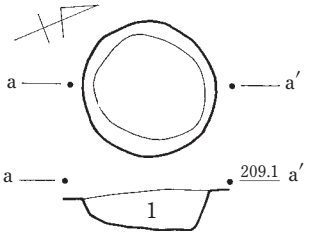
58号土坑
1　暗褐色土



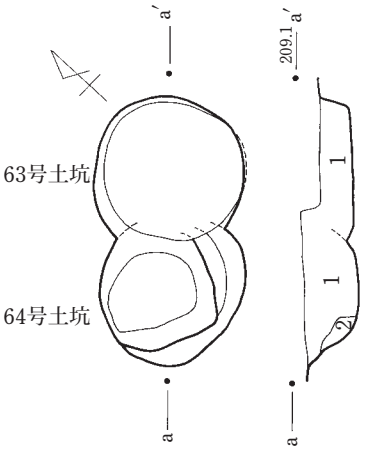
59号土坑
1　暗褐色土　黒色スコリアやや多い。白色粘土粒を少量含む。



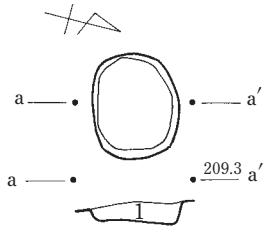
60号土坑
1　暗褐色土　黒色スコリア多い。褐色土粒やや多い。



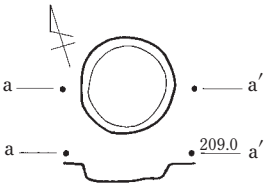
61号土坑
1　暗褐色土　黒色スコリア多い。褐色土粒やや多い。



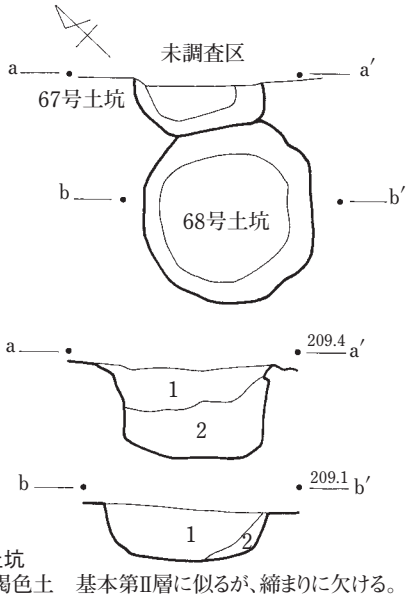
63号土坑
1　暗褐色土　黒色スコリア多い。褐色土粒やや多い。
64号土坑
1　暗褐色土　黒色スコリア多い。褐色土粒やや多い。
2　褐色土



65号土坑
1　暗褐色土　黒色スコリア多い。褐色土粒やや多い。



66号土坑

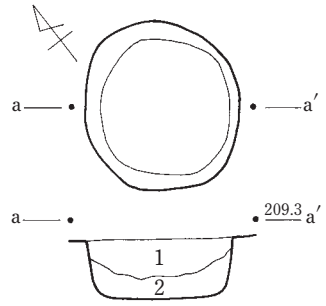


67号土坑
1　暗褐色土　基本第Ⅱ層に似るが、締まりに欠ける。炭化粒微量。
2　暗褐色土　基本第Ⅲ層に似るが、締まりに欠ける。やわらかい褐色土（1㎝～2㎝）含む。炭化粒微量。

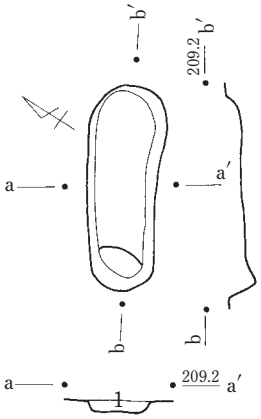
68号土坑
1　黒褐色土　黒色スコリア多い。
2　黒褐色土　締まり弱い。

0　(1/60)　2m

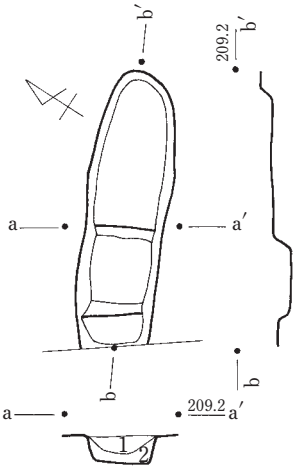
第203図　土坑（5）



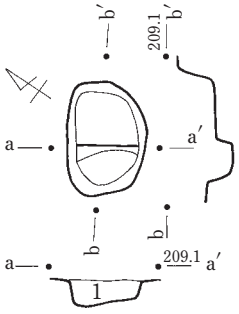
69号土坑
1　暗褐色土　締まりやや強い。黒色スコリア、褐色土やや多い。
2　暗褐色土　締まり弱い。黒色スコリアやや多い。褐色土を少量含む。



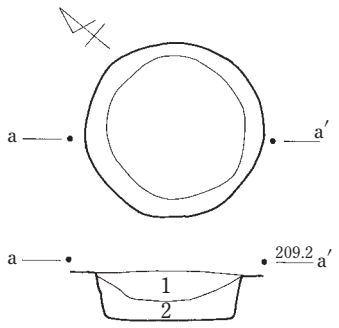
70号土坑
1　暗褐色土　橙色・黒色スコリア、炭化粒を少量含む。



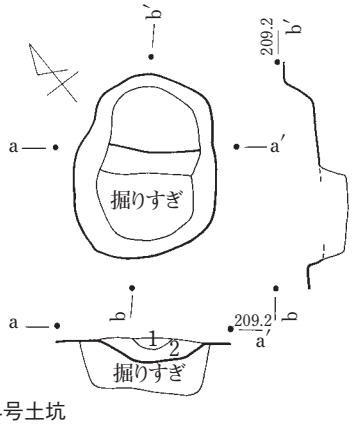
71号土坑
1　暗褐色土　橙色・黒色スコリア、炭化粒を少量含む。
2　褐色土　第1層土が混じる。



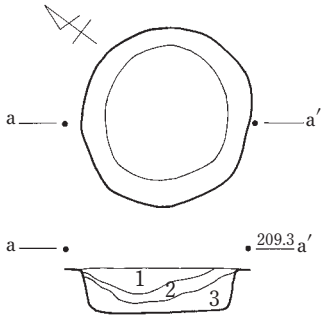
72号土坑
1　暗褐色土　橙色・黒色スコリア、炭化粒少量。



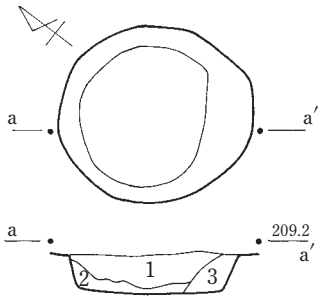
73号土坑
1　暗褐色土　黒色スコリア、褐色土多い。
2　暗褐色土　黒色味が強い。黒色スコリアやや多い。褐色土を少量含む。



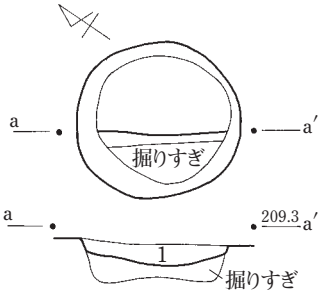
74号土坑
1　褐色土
2　暗褐色土　橙色(1㎜以下)・黒色スコリア多い。炭化粒を少量含む。



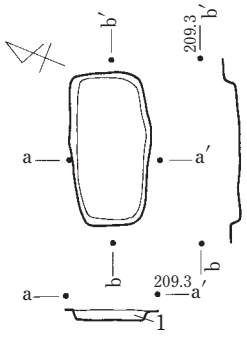
75号土坑
1　暗褐色土　黒色スコリア、褐色土多い。
2　暗褐色土　黒色スコリア、褐色土やや多い。
3　暗褐色土　黒色味が強い。黒色スコリアやや多い。褐色土を少量含む。



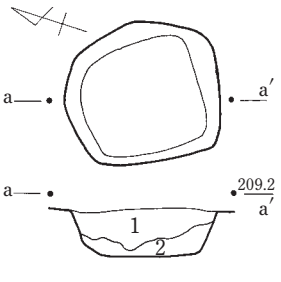
76号土坑
1　暗褐色土　黒色スコリア、褐色土やや多い。
2　暗褐色土　黒色味が強い。黒色スコリアやや多い。褐色土少量。
3　暗褐色土　褐色土塊(3㎝)含む。



77号土坑
1　暗褐色土　黒色スコリア多い。褐色土やや多い。



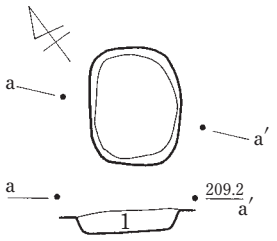
78号土坑
1　暗褐色土　黒色スコリアやや多い。



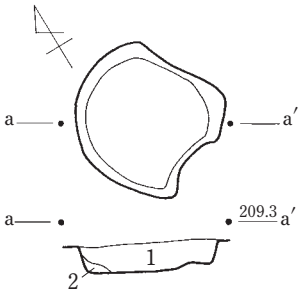
79号土坑
1　暗褐色土　黒色スコリア、褐色土多い。
2　暗褐色土　黒色味が強い。黒色スコリアやや多い。褐色土を少量含む。

0　(1/60)　2m

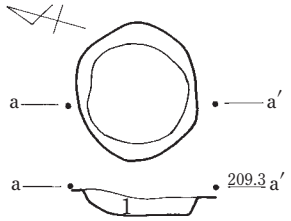
第204図　土坑（6）



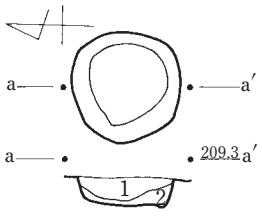
80号土坑
1　暗褐色土　黒色スコリアやや多い。橙色スコリア(2㎜以下)、褐色土多い。



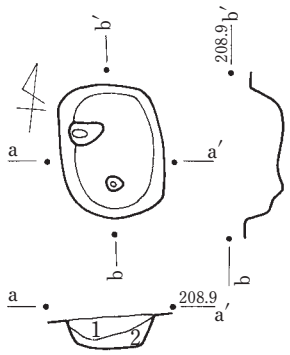
81号土坑
1　暗褐色土　締まり強い。黒色スコリア、褐色土やや多い。
2　暗褐色土　褐色土塊を含む。



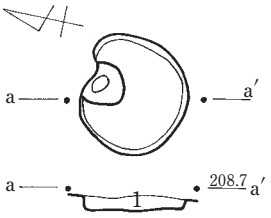
82号土坑
1　暗褐色土　橙色(1㎜以下)・黒色スコリア多い。褐色土やや多い。炭化粒少量。



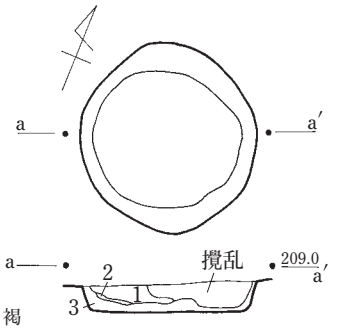
83号土坑
1　暗褐色土　橙色(1㎜以下)・黒色スコリア多い。炭化粒を少量含む。
2　暗褐色土　黒色味が強い。黒色スコリアやや多い。褐色土を少量含む。



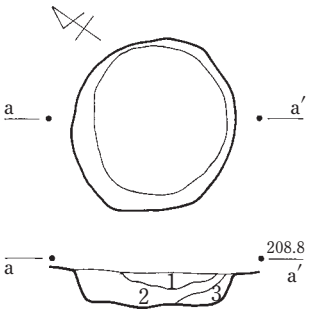
84号土坑
1　暗褐色土　黒色スコリア、褐色土多い。
2　暗褐色土　黒色味が強い。黒色スコリアやや多い。褐色土を少量含む。



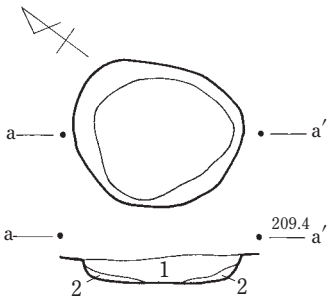
85号土坑
1　黒褐色土　黒色スコリア少量。褐色土塊(1cm～5cm)含む。



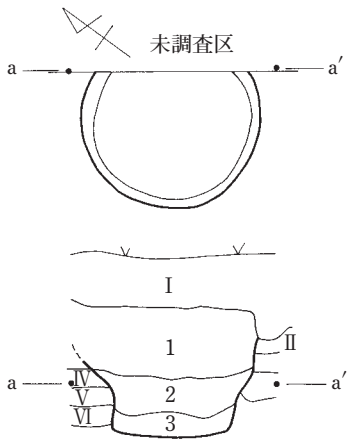
87号土坑
1　暗褐色土　黒色スコリア、褐色土粒多い。焼土粒少量。
2　焼土
3　暗褐色土　黒色味が強い。黒色スコリア、褐色土粒多い。焼土粒を少量含む。



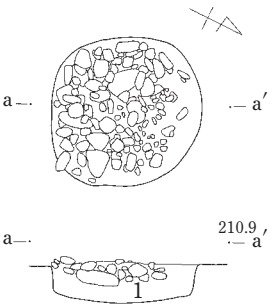
88号土坑
1　暗褐色土　黒色スコリア(5㎜以下)多い。
2～3　暗褐色土



89号土坑
1　暗褐色土　橙色・黒色スコリア(5㎜以下)多い。炭化粒やや多い。
2　褐色土



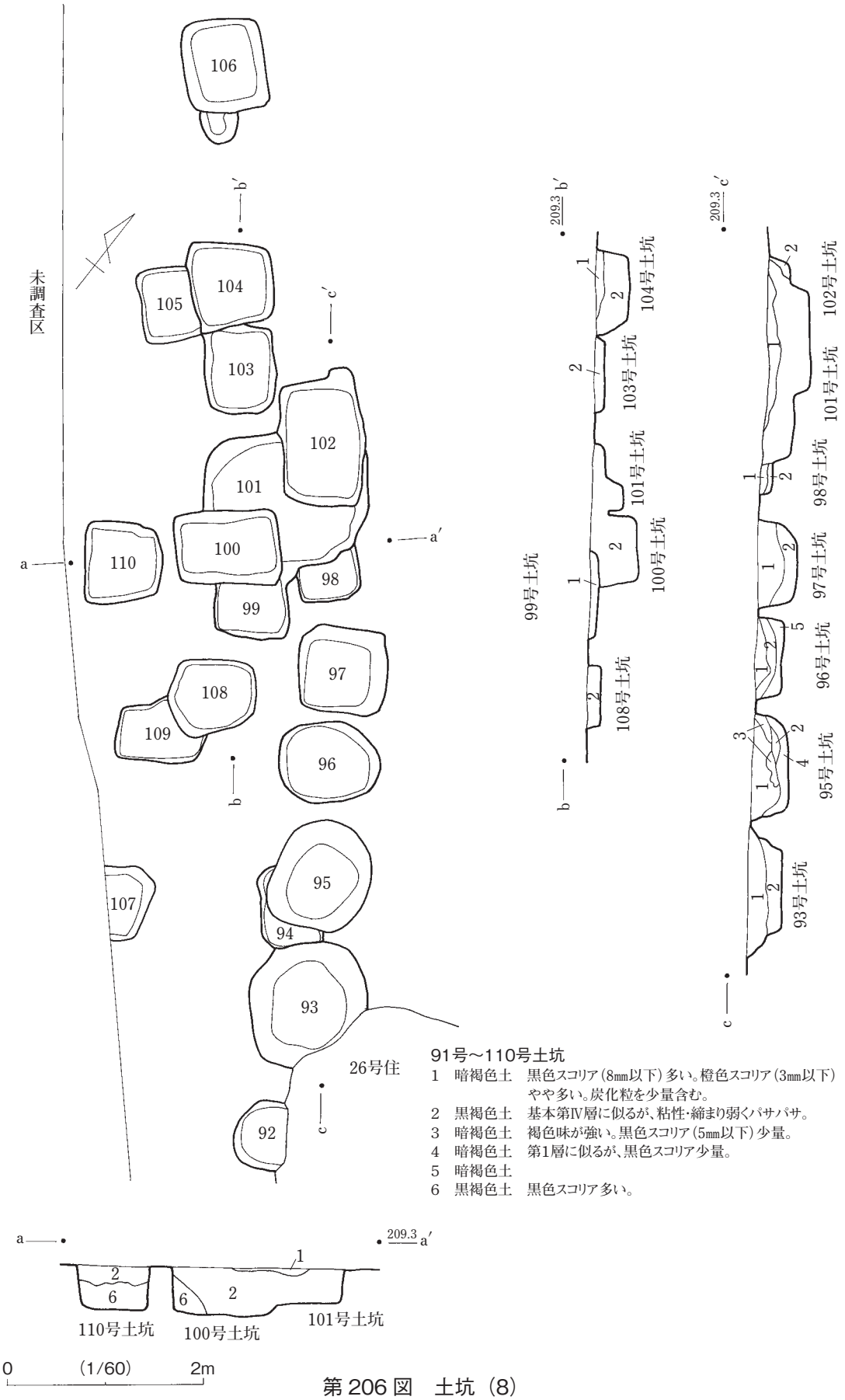
90号土坑
1　暗褐色土　基本第Ⅱ層由来。
2　暗褐色土　焼土粒、炭化粒やや多い。
3　黒褐色土　基本第Ⅳ層由来。



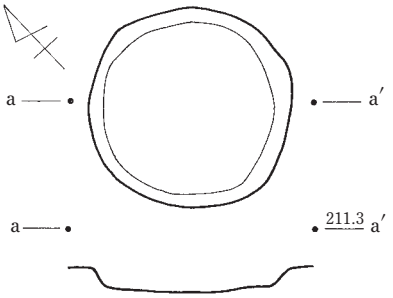
111号土坑
1　黒褐色土　黒色スコリア(8㎜以下)、橙色スコリア(2㎜以下)多い。

0　(1/60)　2m

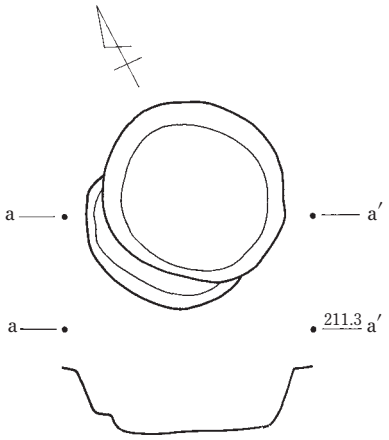
第205図　土坑（7）


未調査区
106
104
105
103
102
101
100
110
98
99
97
108
109
96
95
94
107
93
92
26号住
a
a′
b
b′
c
c′
209.3 b′
209.3 c′
99号土坑
108号土坑
100号土坑
101号土坑
103号土坑
104号土坑
93号土坑
95号土坑
96号土坑
97号土坑
98号土坑
101号土坑
102号土坑
91号～110号土坑
1 暗褐色土 黒色スコリア(8㎜以下)多い。橙色スコリア(3㎜以下)やや多い。炭化粒を少量含む。
2 黒褐色土 基本第Ⅳ層に似るが、粘性・締まり弱くパサパサ。
3 暗褐色土 褐色味が強い。黒色スコリア(5㎜以下)少量。
4 暗褐色土 第1層に似るが、黒色スコリア少量。
5 暗褐色土
6 黒褐色土 黒色スコリア多い。
209.3 a′
110号土坑
100号土坑
101号土坑
0 (1/60) 2m

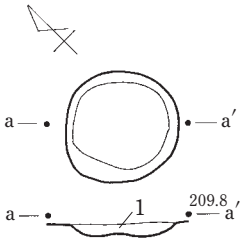
第 206 図　土坑（8）



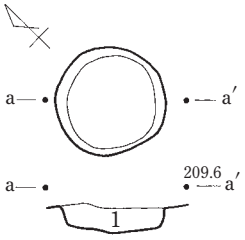
113号土坑



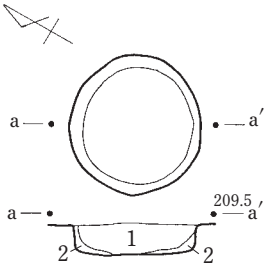
114号土坑



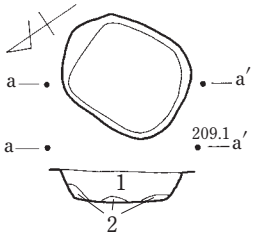
116号土坑
1　黒褐色土　黒色スコリア(8㎜以下)多い。褐色土(1㎝以下)やや多い。



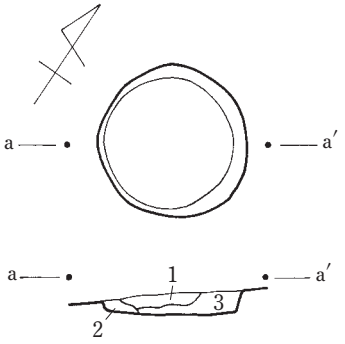
117号土坑
1　黒褐色土　黒色スコリア(8㎜以下)多い。褐色土(1㎝以下)やや多い。



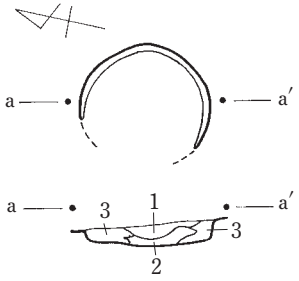
118号土坑
1　黒褐色土　黒色スコリア(8㎜以下)多い。褐色土(1㎝以下)やや多い。
2　暗褐色土　褐色土粒やや多い。



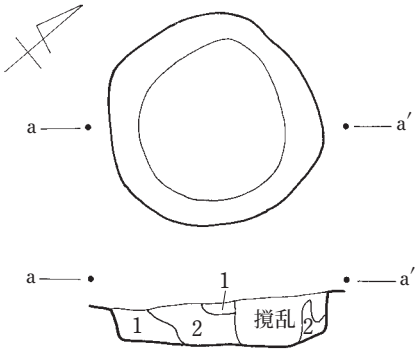
119号土坑
1　黒褐色土　黒色スコリア(8㎜以下)多い。褐色土(1㎝以下)やや多い。
2　暗褐色土　褐色土粒やや多い。



122号土坑
1　黒褐色土
2　褐色土
3　暗褐色土　褐色土を斑状に含む。



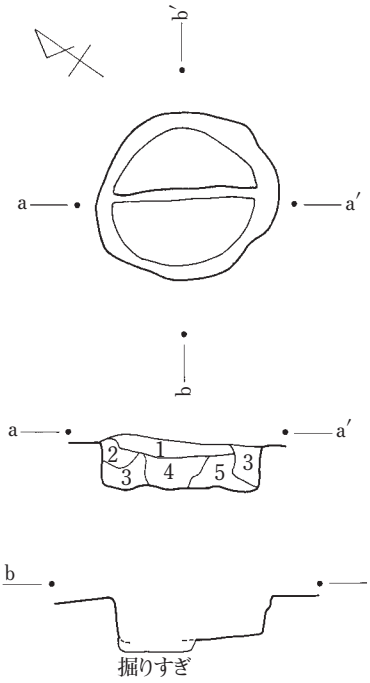
124号土坑
1　暗褐色土　褐色土(1㎝～4㎝)含む。
2　黒褐色土
3　暗褐色土　褐色土(1㎝以下)含む。



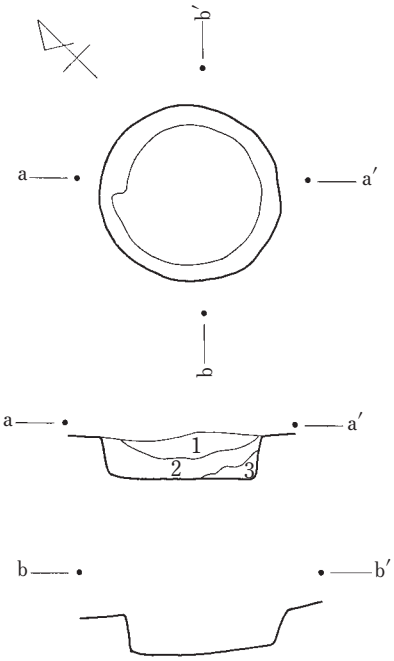
127号土坑
1　黒褐色土　地山ローム土(1㎝～5㎝)多い。
2　黒褐色土　地山ローム土(1㎝以下)やや多い。

0　(1/60)　2m

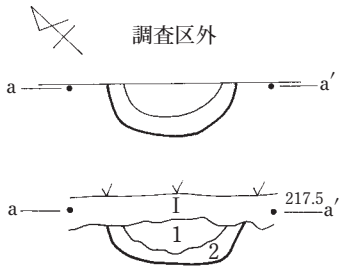
第207図　土坑（9）



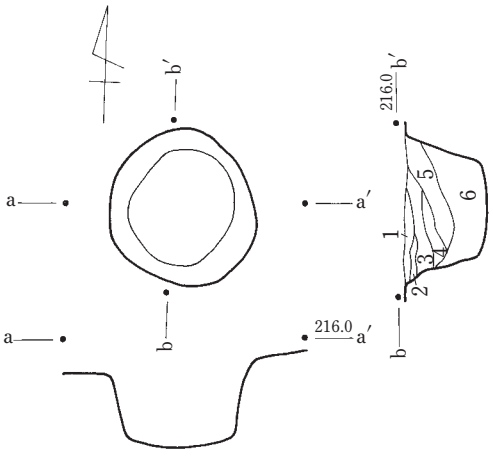
132号土坑
1　黒褐色土　黒色スコリア（1㎜～5㎜）、地山ローム粒・塊（1㎜～1.5㎝）多い。
2　暗褐色土
3　暗褐色土　地山ローム粒を含む。
4～5　暗褐色土



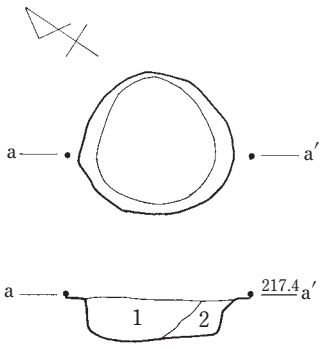
133号土坑
1～3　黒褐色土　黒色スコリア（1㎜～5㎜）、地山ローム粒・塊（1㎜～1.5㎝）多い。下層へ黒色味強くなる。



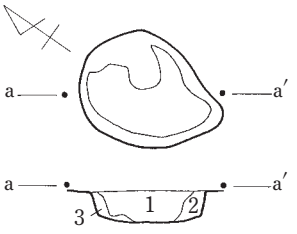
134号土坑



144号土坑
全般に黒色スコリア、地山ローム粒を含む。
1　暗褐色土
2　褐色土
3　暗褐色土
4　褐色土　地山ローム塊多い。
5　暗褐色土
6　暗褐色土



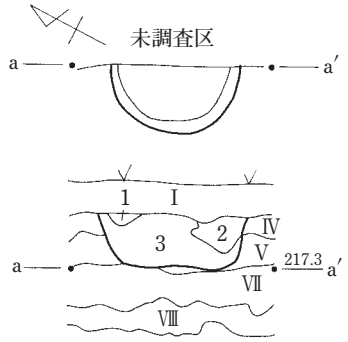
149号土坑
1　黒褐色土　黒色スコリア（1㎜～8㎜）多い。やわらかい褐色土塊（2㎝以下）含む。
2　黒褐色土　第1層に似るが、褐色土を含まない。



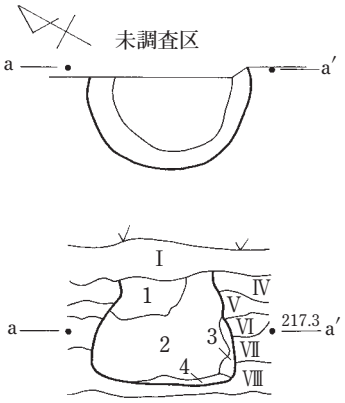
150号土坑
1　黒褐色土　黒色スコリア（1㎜～8㎜）多い。やわらかい褐色土塊（2㎝以下）含む。
2　暗褐色土　黒色スコリア微量。
3　暗褐色土　第1層を塊状（2㎝～5㎝）に含む。

0　（1/60）　2m

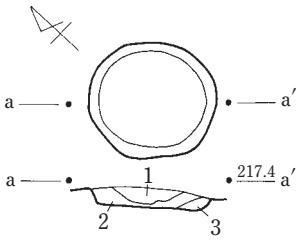
第208図　土坑（10）



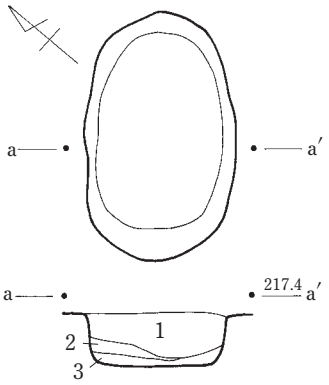
152号土坑
1　暗褐色土　黒色スコリア(6㎜以下)、橙色スコリア(2㎜以下)やや多い。
2　黒褐色土　褐色味が強い。黒色スコリア(6㎜以下)多い。橙色スコリアやや多い。炭化粒少量。
3　黒褐色土　黒色スコリア(6㎜以下)多い。橙色スコリアやや多い。炭化粒を少量含む。



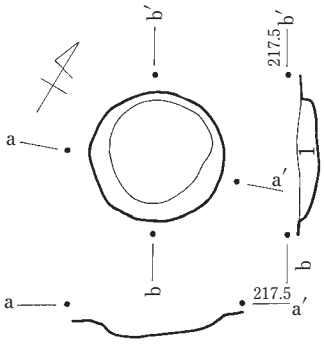
154号土坑
1　暗褐色土　黒色スコリア(6㎜以下)、橙色スコリア(2㎜以下)やや多い。
2　黒褐色土　黒色スコリア(6㎜以下)多い。橙色スコリアやや多い。炭化粒を少量含む。
3　褐色土
4　暗褐色土　粘性なく、締まりやや強い。



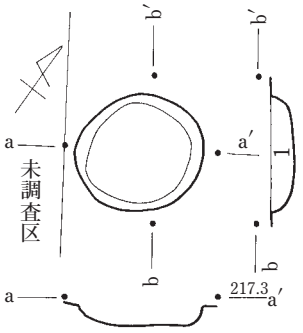
155号土坑
1　黒褐色土　黒色スコリア多い。
2　黒褐色土　黒色スコリアやや多い。
3　暗褐色土



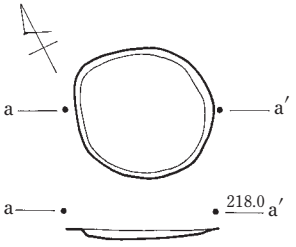
156号土坑
1　暗褐色土　黒色スコリア多い。
2　にぶい褐色土　褐色土塊(2㎝以下)多い。
3　暗褐色土　黒色スコリア少量。



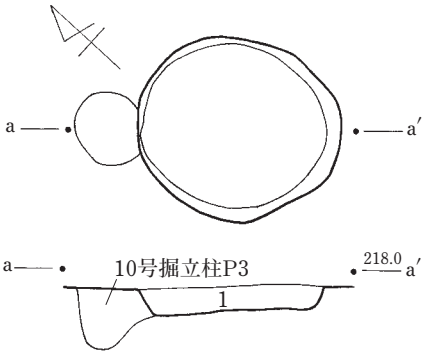
157号土坑
1　黒褐色土　黒色スコリア多い。



158号土坑
1　黒褐色土　黒色スコリア多い。



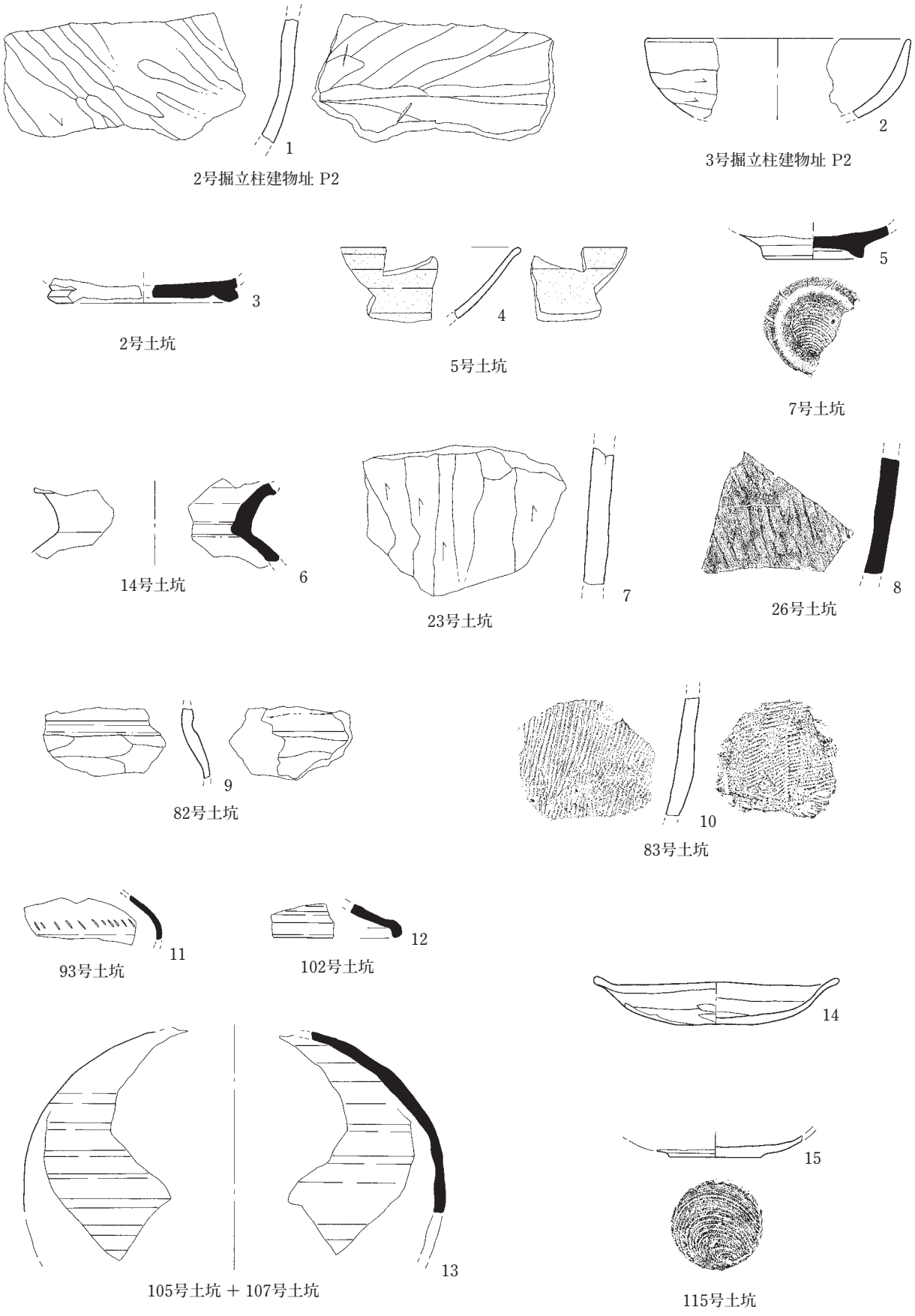
159号土坑
1　暗褐色土　基本第Ⅱ層に似る。黒色スコリア多い。



160号土坑
1　暗褐色土　基本第Ⅱ層に似る。黒色スコリア多い。

0　(1/60)　2m

第209図　土坑（11）



第 210 図　掘立柱建物址、土坑　出土遺物

(5) 竪穴状遺構（第 211 図、図版 40）

第Ⅴ次調査で 1 基検出した。T・U－ 3 区に位置し、近接して 157 号土坑、北西 4 ｍに硬化面がある。確認面は第Ⅶ層上面である。竪穴は平面長方形で、長軸 245㎝・短軸 155㎝、主軸方位Ｎ－ 43°－Ｗ。壁高 10㎝～ 20㎝である。北西壁の中央部が奥行 70㎝・最大幅 45㎝掘り込まれる。竪穴は一部攪乱を受けるが、遺存状況は良い。床面は全般に硬く、張り出し部側に向かって緩く傾斜している。覆土は黒褐色土を主体とする。ピットが竪穴の三隅で検出され、床面からの深さは 10㎝～ 20㎝である。出土遺物はなく、時期は不明である。

(6) 焼土址（第 211 図）

第Ⅰ次調査で 1 基検出した。2 D－ 23 区に位置し、20 号住居址や 2 号土坑と重複する。やわらかい焼土が円形の掘り込み（直径約 90㎝、深さ 18㎝）内に堆積する。出土遺物はなく、時期は不明である。

(7) 土器集中部

1 号土器集中部（第 211 図）

第Ⅲ次調査で検出し、旧名称はＳ－ 29 区土器集中部である。

Ｒ－ 29 区に位置し、北西側 2.7 ｍに 26 号住居址、北側 4.2 ｍに 27 号住居址がある。確認面は第Ⅳ層上面である。多数の土器片が掘り込み内に含まれる。掘り込みは平面が東西に長い不整形で、長軸 160㎝・短軸 60㎝、深さ 25㎝を測る。覆土中に焼土や焼石、炭化材・炭化種実（モモなど）が多く含まれる。種実は遺存状況が悪く大半が同定不能であった（付編 1 参照）。

遺物は土師器坏（211 図 1）や 27 号住居址と接合する土師器甕（169 図 6､171 図 12）､須恵器坏（169 図 3）が出土した。

時期は遺物から 27 号住居址と同じく古墳時代後期（7 世紀）と考えられる。

2 号土器集中部（第 212 図、図版 66）

第Ⅳ次調査で検出し、旧名称はＺ－ 24 区遺物集中部である。

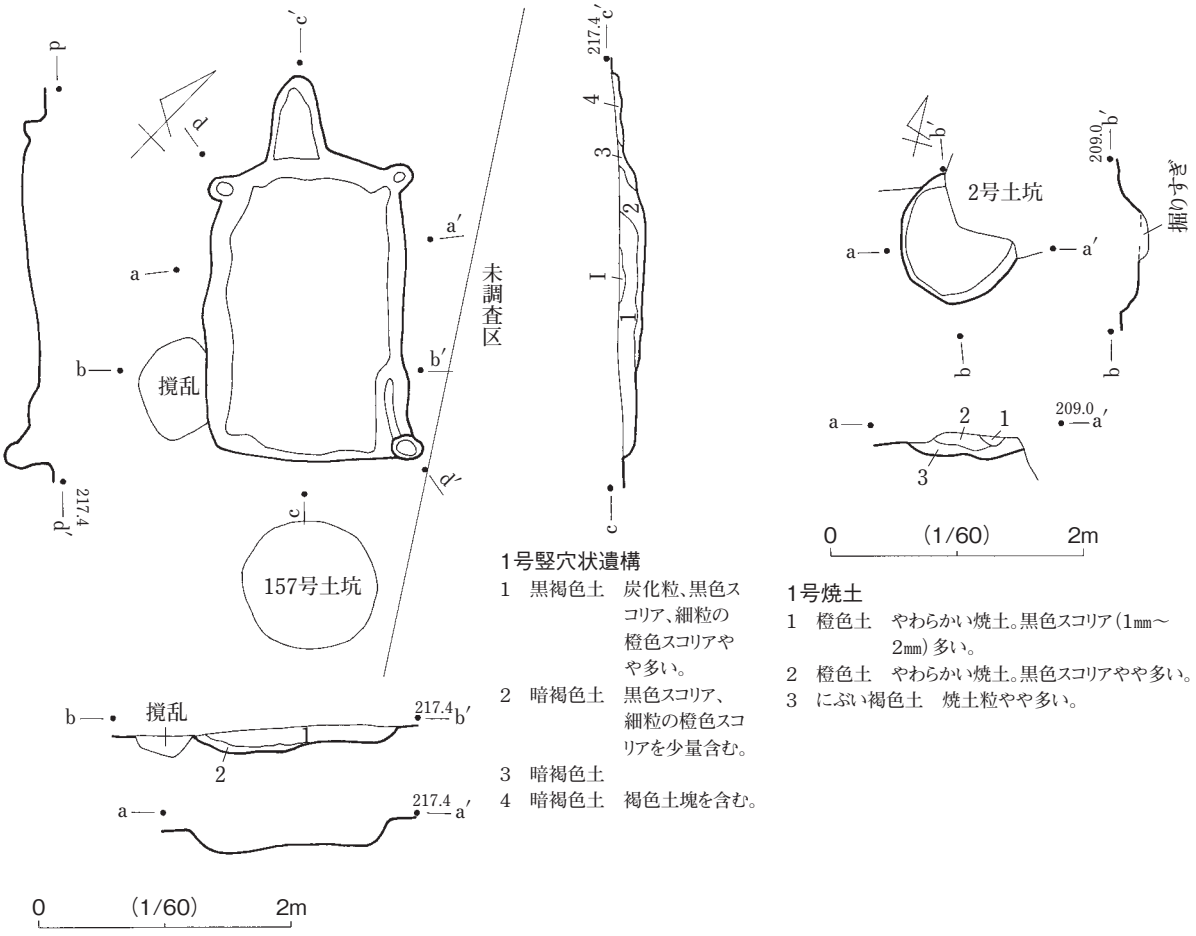
Ｚ－ 24 区に位置し、北東側 50㎝に 32 号住居址がある。確認面は第Ⅳ層中である。多数の土器片が土坑内に含まれる。土坑は平面円形で、長軸 78㎝・短軸 65㎝、深さ 35㎝を測る。覆土中に焼土や炭化材、白色粘土粒が多く含まれ、炭化種実（モモ）を検出した。炭化材はエノキ属ニレ科に同定され、放射線炭素年代測定に暦年較正した結果で cal ＡＤ 649 ～ 769 となった（付編 1 参照）。

遺物は土師器坏（1）・甕（4 ～ 6）・鉢（7）、須恵器坏（3）、灰釉陶器埦（2）や、32 号住居址と接合関係を持つ土器が多く出土した。土師器坏と甕類は甲斐型が主体を占め、須恵器坏は南多摩窯御殿山 5 号窯式に比定される。

時期は出土土器から 32 号住居址と同じく平安時代（10 世紀前半）と考えられるが、炭化材の年代測定値とは大きく異なる。

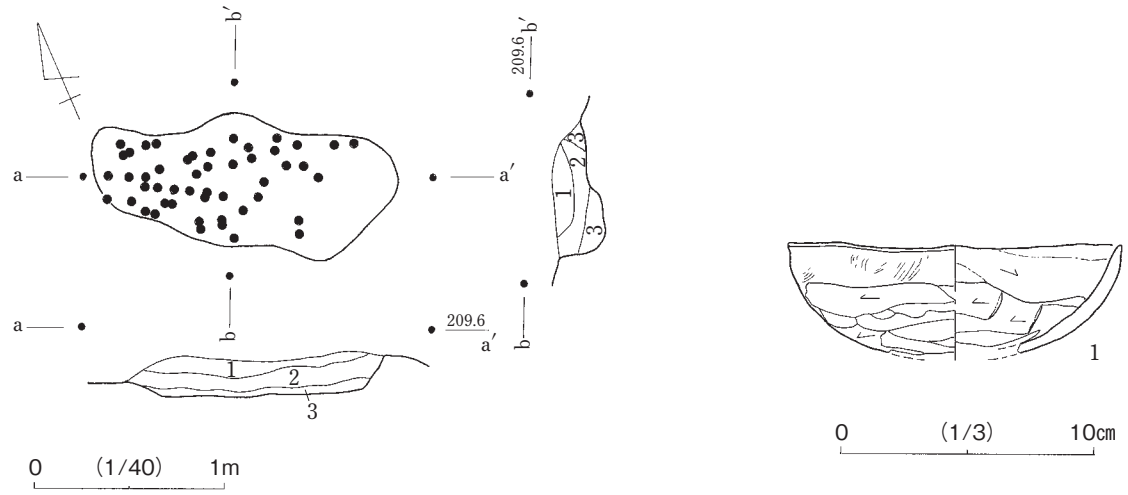
(8) 硬化面（図版 40）

第Ⅴ次調査で 1 ヶ所検出した。U・Ⅴ－ 1・2 区に位置し、近接して 47 号ピット、南東 4 ｍに 1 号竪穴状遺構がある。第Ⅶ層上面の平坦部で南北方向に長い硬化面が認められ、北側は調査区外に続く。検出した長さは 3 ｍ、幅 1.8 ｍ～ 1.9 ｍである。出土遺物はなく、時期は不明である。



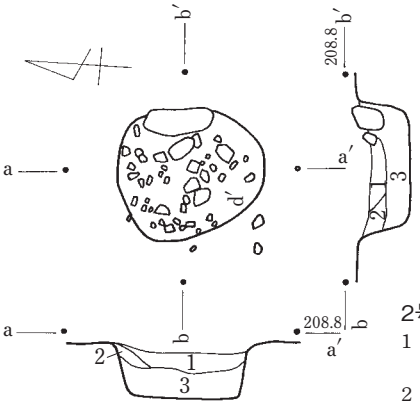
1号竪穴状遺構
1 黒褐色土 炭化粒、黒色スコリア、細粒の橙色スコリアやや多い。
2 暗褐色土 黒色スコリア、細粒の橙色スコリアを少量含む。
3 暗褐色土
4 暗褐色土 褐色土塊を含む。

1号焼土
1 橙色土 やわらかい焼土。黒色スコリア(1㎜～2㎜)多い。
2 橙色土 やわらかい焼土。黒色スコリアやや多い。
3 にぶい褐色土 焼土粒やや多い。



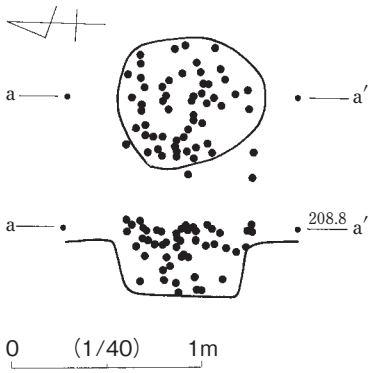
1号土器集中部
1 暗褐色土 焼土粒、炭化粒やや多い。
2 橙色土 焼土粒、炭化粒多い。
3 黒褐色土 黒色スコリア多い。炭化粒・炭化材(2㎝以下)やや多い。焼土粒少量。

第211図 竪穴状遺構、焼土址、土器集中部

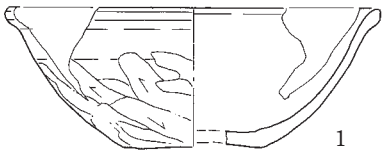


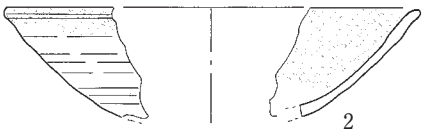
2号土器集中部

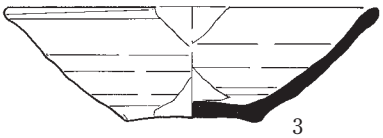
1　暗褐色土　褐色味強い。焼土粒、炭化粒、白色粘土粒多い。
2　黒褐色土　焼土粒、白色粘土粒を少量含む。
3　暗褐色土　焼土粒、炭化粒、白色粘土粒を少量含む。黄色粘土塊(3㎝以下)を含む。

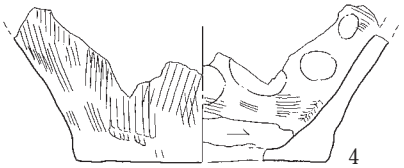


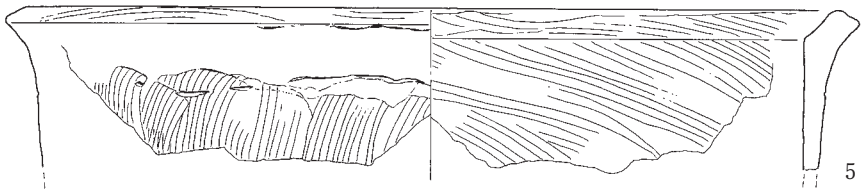
0　(1/40)　1m

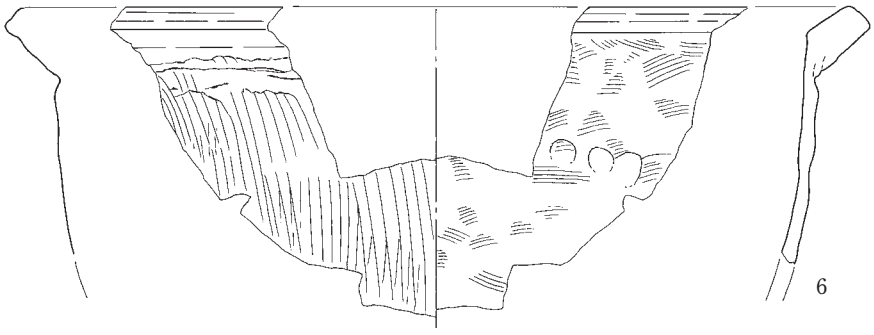


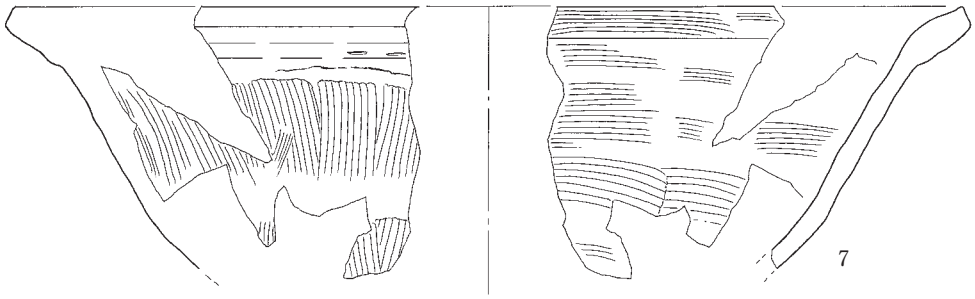












0　(1/3)　10㎝

第212図　2号土器集中部

(9) 遺構外出土遺物（第 213 ～ 216 図、図版 66）

第Ⅲ層・第Ⅳ層を中心に出土した多数の遺物のうち、図示可能なものを報告する。

土師器には坏、甕、台付甕、羽釜、置きカマドがある。このうち外面にヘラ削り調整を施す坏（1･2）や甕（25 ～ 27）は古墳時代後期から奈良時代前半、須恵器模倣坏（3）や甲斐型土器（4・30 ～ 33）、武蔵型土器（28・29）は平安時代に位置付けられる。

須恵器には坏蓋、坏、皿、甕、鉢、ハソウがある。坏蓋（6）、高台付坏（18・19）、甕（36・41）、ハソウ（44）は、胎土が緻密で白っぽいことから湖西窯等の東海産と思われ、7 世紀後半から 8 世紀前半に比定される。一方、須恵器坏蓋（5）や厚ぼったい甕（40・42）は不良品 (1) であり、7 世紀後半の可能性がある。底部回転糸切りの坏は南多摩窯御殿山 25 号窯式から御殿山 5 号窯式（9 世紀末から 10 世紀前半）に比定され、「大」の墨書土器（9）や酸化焔焼成の土器が若干含まれる。24 は灰釉陶器埦。

45 ～ 54 は鉄製品、55 は鉄滓である。45 ～ 49 は 27 号住居址周囲の第Ⅲ層を中心に出土し、45・46 は刀子、47 ～ 49 は鉄鏃である。鉄鏃は片刃箭（47）、弱い腸抉を持つ五角形（48）、発達した腸抉を持ち鏃身部が丸くなるもの（49）がある。50・51 は釘、52 は器種不明の断片である。53 も器種不明で、筒状に丸めた薄い鉄板（長さ 6㎝程度・幅 2.8㎝・厚さ 1㎜以下）を潰したような状態となっている。板は波状に加工され、一部が山形につまみ上げられている。32 号住居址近くで出土した。54 は鎖状の連結金具で、25 号住居址近くで出土した。用途は不明である。以上の鉄製遺物は古墳時代後期から平安時代の間で捉えられるが、詳細な時期比定には至っていない。

ワラジムシ圧痕土器

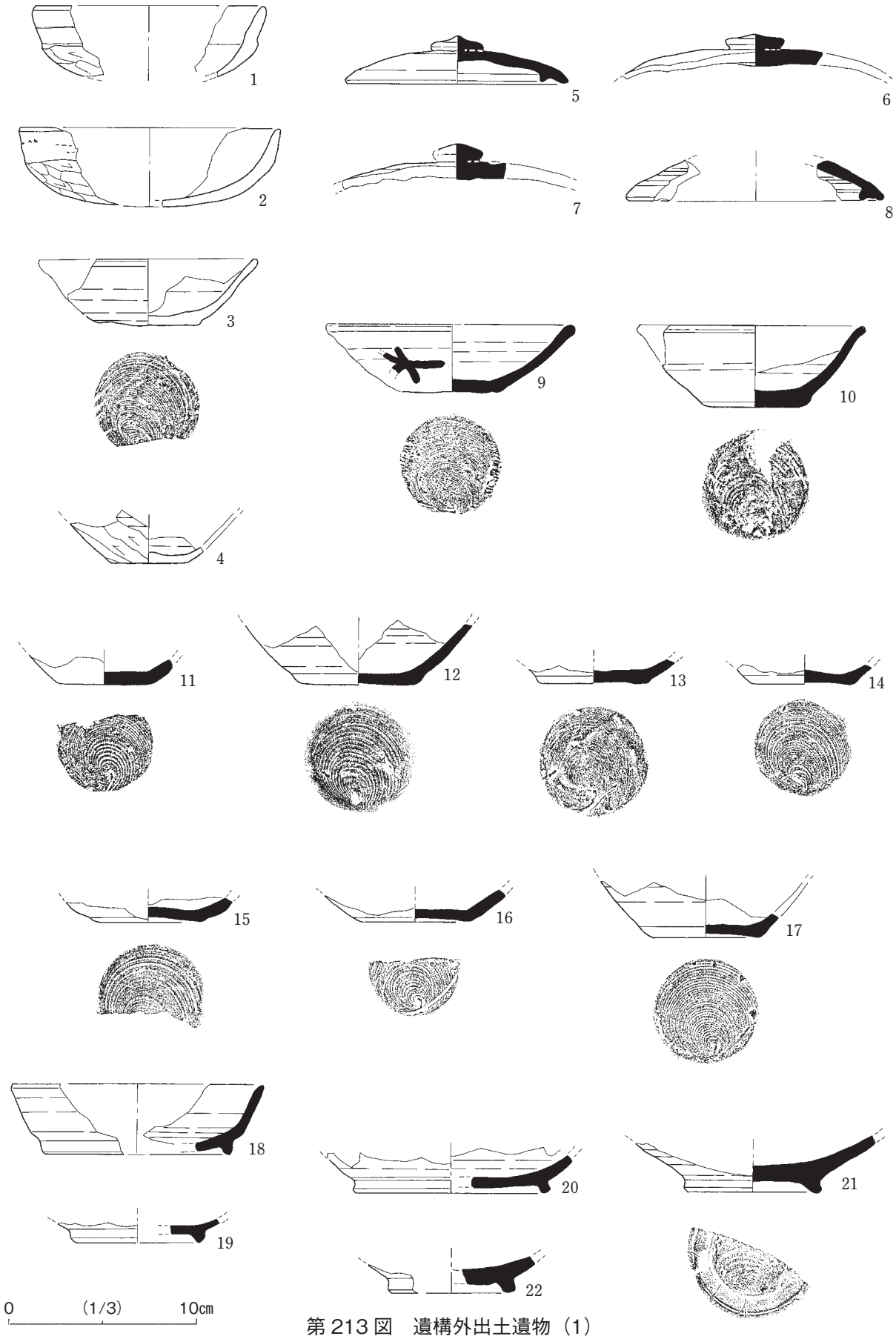
須恵器甕の胴部片（41）にワラジムシ 1 匹の圧痕が見つかった (2)。この土器はU－ 21 区の遺物包含層で出土し、内面と割れ口の一部に墨痕状の染みがあり、部分的に磨滅していることから転用硯であろう。土器の製作時期は不明確だが、胎土から東海産と思われるため 7 世紀後半から 8 世紀前半の可能性がある。ワラジムシの圧痕は土器内面（硯面）に認められ、同心円状の当て具痕が重なる。体長 1㎝で、頭部の触覚や胸部の肢痕が明瞭に残されている。ワラジムシは節足動物甲殻類に属す小動物で、ゴミ捨て場や床下、植木鉢などの物陰に住み、腐りかけた植物片を食べる。このような人の身近に生息する虫が土器圧痕として検出される例は多く (3)、本例の場合も土器製作場所の近くに生息していたものが偶然に混入し、器面調整時に押し潰され焼かれてしまったのであろう。ワラジムシの圧痕を持つ土器片をあえて硯に転用した理由は不明だが、圧痕が微細なため意図的に用いた可能性は低いものと思われる (4)。

註１　ここで言う不良品とは、素地中に含まれた多数の気泡が焼成時に膨張あるいは破裂し、あばた状に剥落した土器を指す。25 号住居址でも特徴的に認められ在地産の可能性もある。時期は坏蓋や坏が湖西窯編年第Ⅲ期第 2 小期に相当することから 7 世紀後半に限定されるものと思われる。

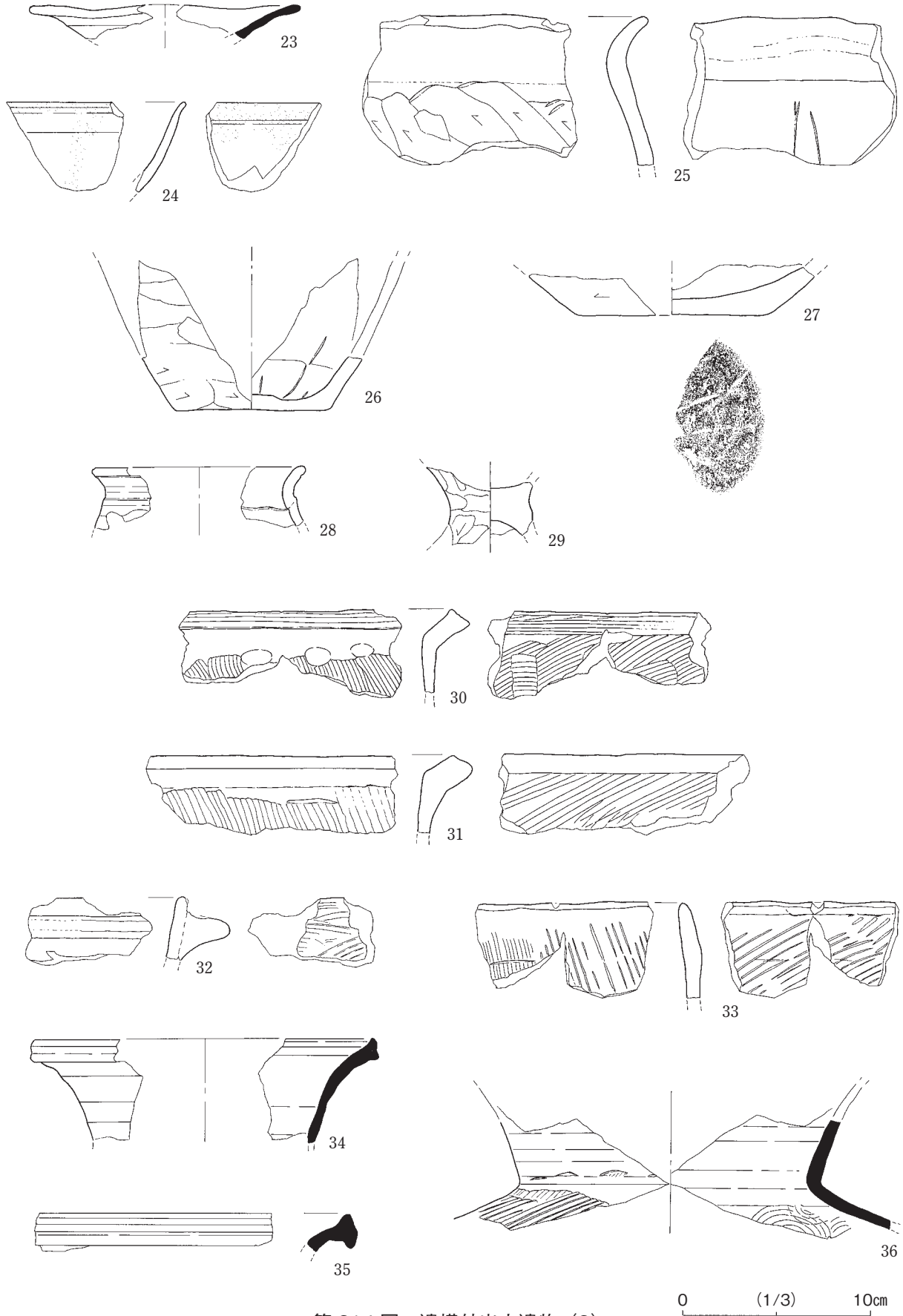
註２　森勇一氏（金城学院大学）に資料を実見し、ご教示いただいた。

註３　昆虫などの小動物が土器圧痕として検出された例は、縄文土器などから全国各地で発見されている。その多くは、ダニ、ヤスデ、クモ、カツオブシムシなど家屋内や周辺に生息していた家屋害虫と呼ばれるもので、人との関わりの深い生活環をもつ生物群であると指摘されている（小畑他 2014）。

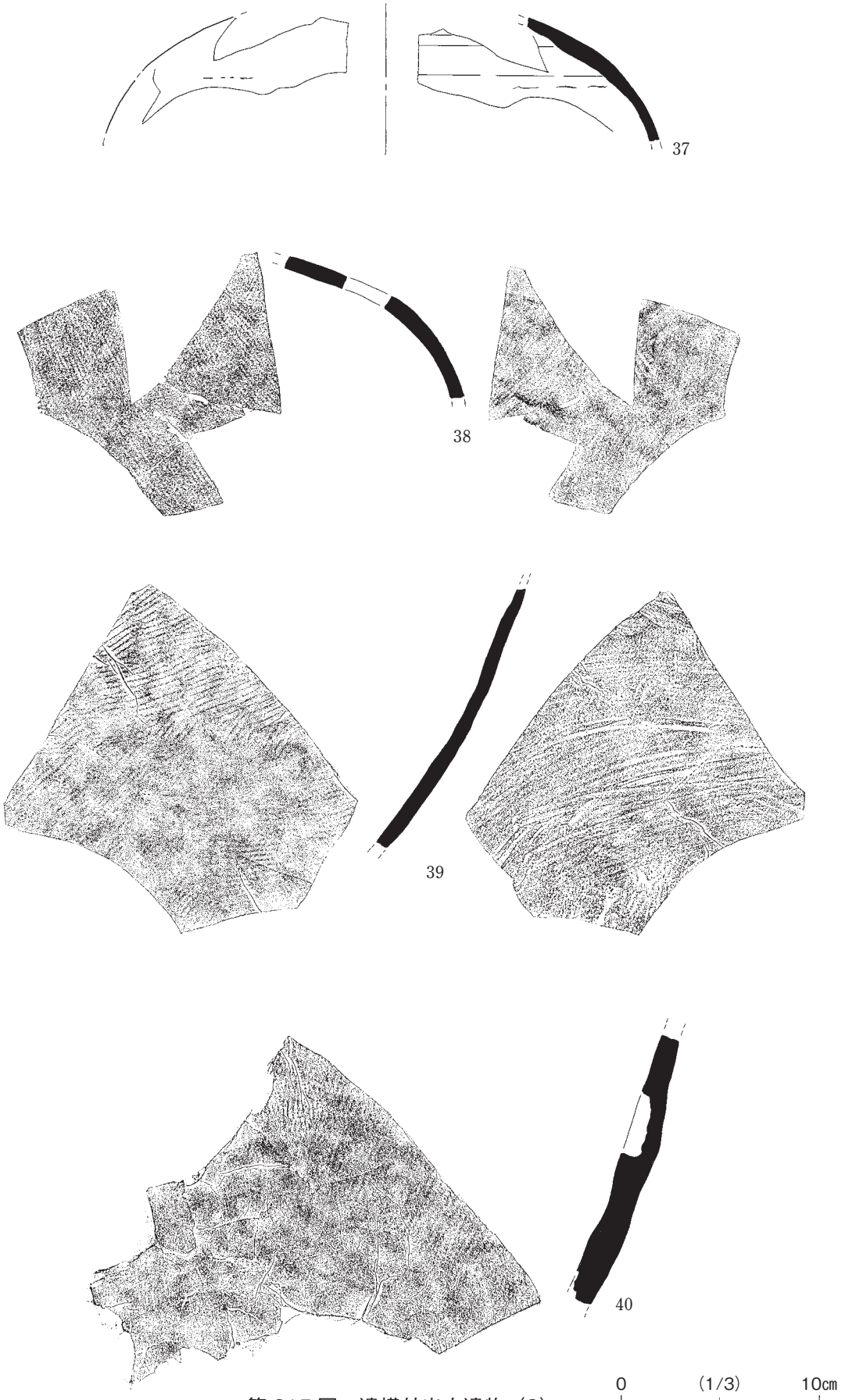
註４　転用硯に虫の圧痕が検出された例として群馬県高崎市中尾遺跡がある。平安時代の須恵器甕を転用したもので、土器内面（硯面）にヨツボシカミキリ 1 匹の圧痕が残される。群馬県埋蔵文化財調査事業団 2012「ミニ展　古代の土器に眠る昆虫～鮮明に残る 1200 年前の昆虫圧痕　開催」『発掘情報館だより』〈www.gunmaibun.org/excavation_info/tayori/2012/20120319〉



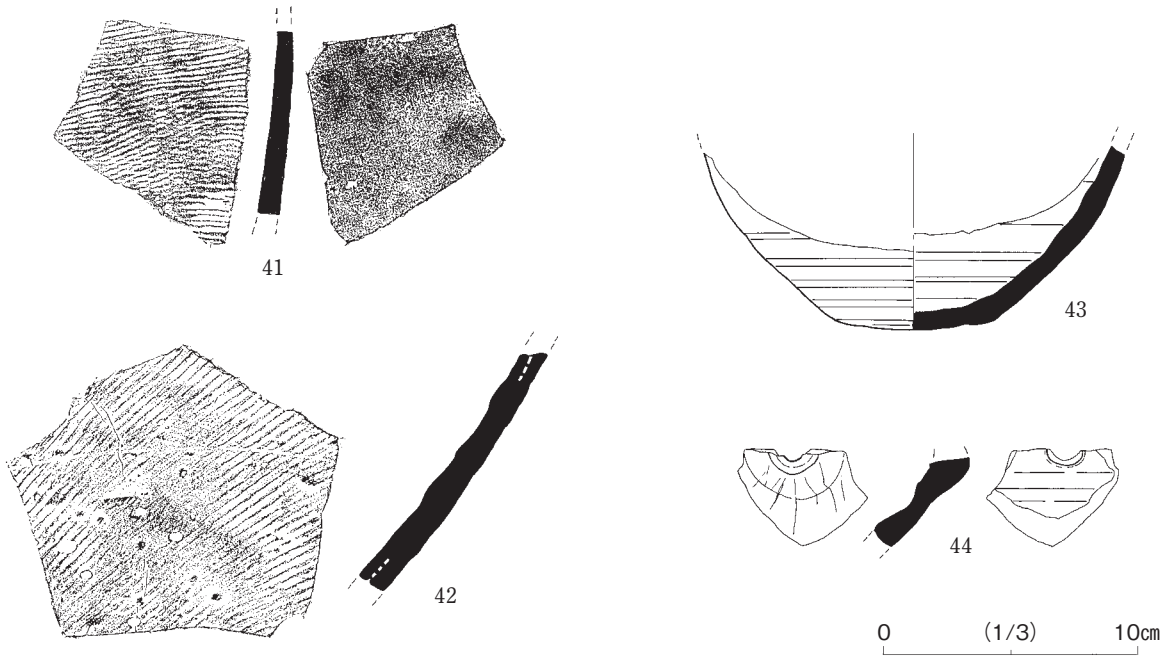
第 213 図　遺構外出土遺物（1）

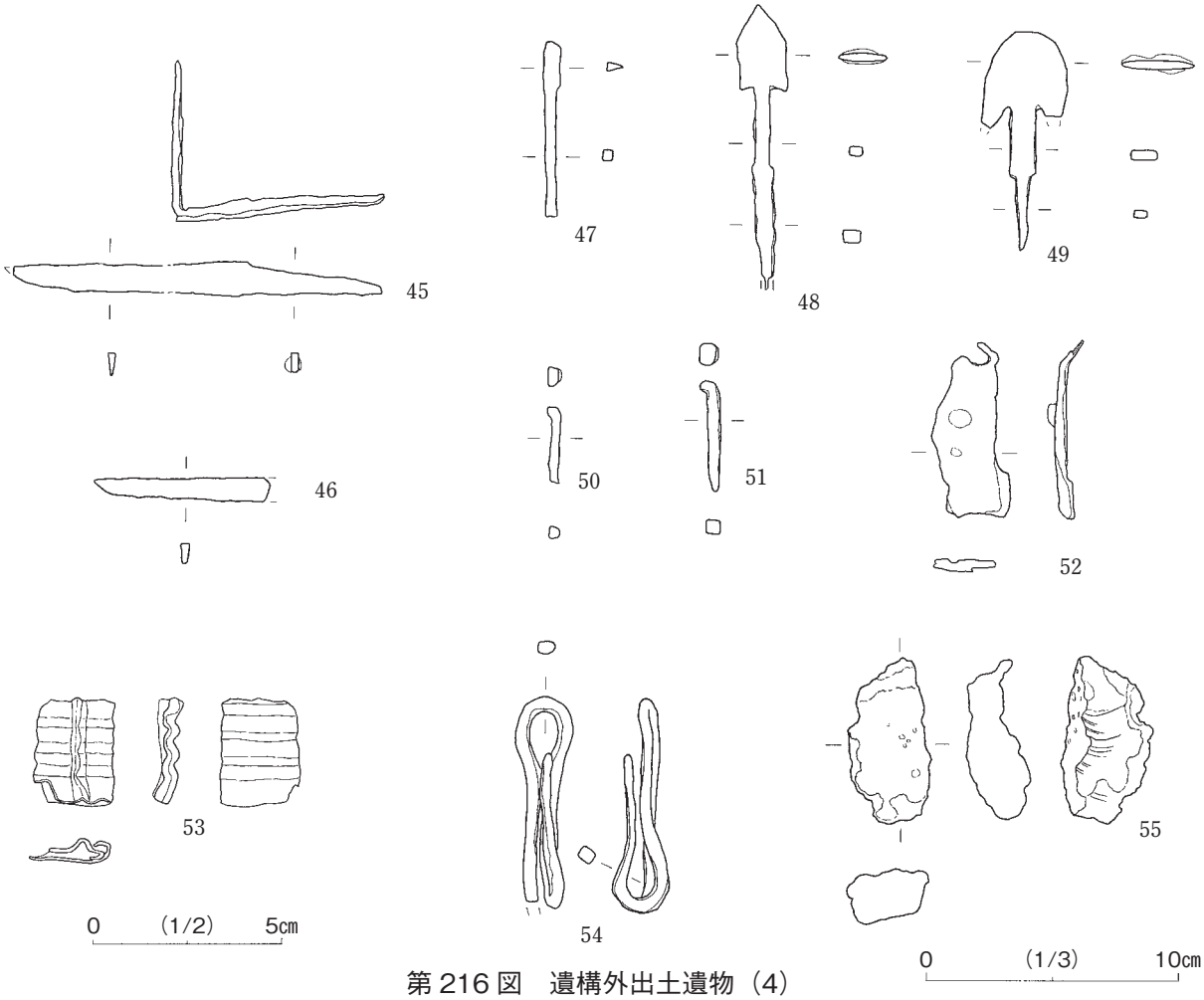


第 214 図　遺構外出土遺物（2）



第 215 図　遺構外出土遺物（3）





第 216 図　遺構外出土遺物（4）

第２表　石器観察表

図No.	出土位置	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考
第９図６	５号住居　床面	磨製石斧	(12.3)	4.4	2.4	206	凝灰岩	
第９図７	５号住居　床面	剥片	3.4	2.3	1.3	8.2	黒曜石	
第９図８	５号住居　床面	楔形石器	2.6	1.3	0.9	2.6	黒曜石	
第９図９	５号住居　床面	楔形石器	2.4	1.6	0.8	2.5	黒曜石	
第９図10	５号住居　床面	二次加工剥片	1.4	1.3	0.4	0.7	黒曜石	
第９図11	５号住居　床面	二次加工剥片	2.3	1.1	0.5	1.1	黒曜石	
第17図51	６号住居 床面	楔形石器	2.2	1.1	0.8	2.6	黒曜石	
第17図52	６号住居　覆土	石核	3.4	5.1	1.1	18.3	チャート	
第18図53	６号住居　覆土	打製石斧	(5.0)	3.3	0.8	14	ホルンフェルス	
第18図54	６号住居	打製石斧	11.3	3.7	1.4	68	ホルンフェルス	
第18図55	６号住居　覆土	打製石斧	(9.0)	6.7	1.9	108	ホルンフェルス	
第18図56	６号住居　覆土	打製石斧	9.2	7.8	2.4	185	ホルンフェルス	
第18図57	６号住居　覆土	打製石斧	9.0	5.4	0.8	35	ホルンフェルス	
第18図58	６号住居	打製石斧	(9.0)	6.7	2.4	166	ホルンフェルス	
第18図59	６号住居　覆土	礫器	11.7	7.8	4.6	540	ホルンフェルス	両刃
第18図60	６号住居	礫器	10.1	12.7	3.9	490	ホルンフェルス	片刃
第18図61	６号住居 奥壁ピット	磨製石斧	7.7	4.1	1.4	55	凝灰岩	
第18図62	６号住居　床面	磨石	6.3	5.4	4.2	203	砂岩	
第18図63	６号住居　覆土	磨石	11.8	6.0	2.5	270	砂岩	
第18図64	６号住居　覆土	磨石	17.0	9.5	6.0	1415	閃緑岩	
第24図30	７号住居　覆土	打製石斧	(8.5)	4.9	2.2	103	ホルンフェルス	
第24図31	７号住居　覆土	打製石斧	(13.5)	4.7	1.8	120	ホルンフェルス	
第24図32	７号住居　覆土	打製石斧	9.3	5.4	2.4	150	ホルンフェルス (砂岩)	
第24図33	７号住居　覆土	打製石斧	(10.2)	5.0	1.0	65	ホルンフェルス	
第24図34	７号住居	打製石斧	(17.0)	8.3	3.2	410	ホルンフェルス	
第24図35	７号住居　覆土	打製石斧	(11.5)	7.0	1.8	200	ホルンフェルス	
第24図36	７号住居　覆土	打製石斧	12.0	7.5	1.6	160	ホルンフェルス	
第24図37	７号住居　覆土	礫器	11.0	9.4	4.0	573	ホルンフェルス	両刃
第24図38	７号住居　覆土	礫器	11.8	13.5	6.2	1275	安山岩	両刃
第24図39	７号住居	礫器	(18.0)	8.0	4.0	723	安山岩	片側に磨面
第24図40	７号住居　覆土	磨製石斧 (未成品)	(7.7)	3.4	2.4	100	凝灰岩	
第24図41	７号住居　覆土	台石	(9.0)	(8.0)	4.5	420	閃緑岩	
第24図42	７号住居　覆土	石錘	5.0	3.7	1.1	24	粘板岩	
第31図42	８号住居　覆土	打製石斧	(8.5)	6.5	2.3	190	泥岩	
第31図43	８号住居	横刃形石器	13.0	8.6	2.4	312	ホルンフェルス	

図No.	出土位置	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考
第 31 図 44	8 号住居　覆土	敲石	13.8	7.6	4.3	635	凝灰岩	
第 31 図 45	8 号住居　覆土	凹石	(10.0)	(7.5)	3.7	390	安山岩	
第 31 図 46	8 号住居　覆土	磨石類	12.8	6.0	4.7	550	多孔質安山岩	両面に凹み
第 31 図 47	8 号住居　覆土	磨石類	(11.3)	6.0	5.0	460	閃緑岩	敲打痕
第 43 図 49	17 号住居　覆土	石鏃	1.7	1.7	0.5	1.2	黒曜石	凹基無茎
第 43 図 50	17 号住居　覆土	石鏃	1.8	1.5	0.3	0.8	黒曜石	凹基無茎
第 43 図 51	17 号住居　覆土	剥片	1.9	1.6	0.5	0.7	黒曜石	
第 43 図 52	17 号住居　覆土	二次加工剥片	1.5	0.9	0.2	0.2	黒曜石	一部に連続剥離
第 43 図 53	17 号住居　覆土	二次加工剥片	1.3	0.7	0.4	0.3	黒曜石	
第 43 図 54	17 号住居　覆土	二次加工剥片	1.5	1.0	0.2	0.2	黒曜石	
第 43 図 55	17 号住居　覆土	二次加工剥片	2.2	1.2	0.5	1.2	黒曜石	一部に連続剥離
第 43 図 56	17 号住居　覆土	剥片	1.5	1.9	0.3	0.5	黒曜石	
第 43 図 57	17 号住居 炉辺覆土下層	二次加工剥片	1.3	1.4	0.3	0.4	黒曜石	
第 43 図 58	17 号住居 炉辺覆土下層	石錐	2.9	1.7	0.6	3.0	チャート	
第 43 図 59	17 号住居　覆土	石核	1.6	2.4	1.2	3.8	黒曜石	
第 43 図 60	17 号住居　覆土	石核	2.0	2.0	1.5	4.3	黒曜石	
第 44 図 61	17 号住居　覆土	石核	2.2	3.7	1.2	6.1	黒曜石	
第 44 図 62	17 号住居　覆土	剥片	2.2	3.7	1.2	8.4	黒曜石	
第 44 図 63	17 号住居　覆土	剥片	3.7	4.4	1.1	17.9	チャート	
第 45 図 64	17 号住居　覆土	打製石斧	(9.0)	4.8	2.0	106	ホルンフェルス	
第 45 図 65	17 号住居　覆土	打製石斧	10.4	5.2	1.3	70	ホルンフェルス	
第 45 図 66	17 号住居　覆土	打製石斧	11.8	5.0	2.1	135	砂岩	刃部摩耗
第 45 図 67	17 号住居　覆土	打製石斧	12.6	5.2	2.0	205	ホルンフェルス	
第 45 図 68	17 号住居　覆土	打製石斧	9.6	2.5	1.2	35	泥岩	
第 45 図 69	17 号住居　覆土	打製石斧	9.5	6.5	1.4	86	ホルンフェルス	
第 45 図 70	17 号住居　覆土	打製石斧	(8.5)	5.8	1.9	105	ホルンフェルス	
第 45 図 71	17 号住居　覆土	打製石斧	(6.5)	4.1	1.4	50	ホルンフェルス	
第 45 図 72	17 号住居　覆土	打製石斧	(5.2)	5.0	1.3	50	ホルンフェルス	
第 45 図 73	17 号住居　覆土	打製石斧	(7.2)	4.2	1.8	63	ホルンフェルス	
第 45 図 74	17 号住居　覆土	打製石斧	(5.2)	5.0	0.8	30	ホルンフェルス	
第 45 図 75	17 号住居　覆土	打製石斧	(7.0)	4.0	1.7	69	ホルンフェルス	
第 45 図 76	17 号住居　覆土	打製石斧	(5.5)	4.5	2.4	70	ホルンフェルス	
第 45 図 77	17 号住居　覆土	打製石斧	(9.1)	4.7	1.7	78	ホルンフェルス	
第 45 図 78	17 号住居　覆土	打製石斧	9.8	4.3	2.1	95	ホルンフェルス	
第 45 図 79	17 号住居　覆土	打製石斧	(10.0)	5.5	1.1	80	ホルンフェルス	
第 45 図 80	17 号住居　覆土	打製石斧	(8.3)	4.4	1.7	80	砂岩	

図No.	出土位置	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考
第 45 図 81	17 号住居　覆土	打製石斧	(10.0)	5.4	1.4	85	ホルンフェルス	
第 45 図 82	17 号住居　覆土	打製石斧	(6.5)	5.5	2.2	90	ホルンフェルス	
第 45 図 83	17 号住居　覆土	打製石斧	10.0	6.0	1.8	124	ホルンフェルス	
第 45 図 84	17 号住居　覆土	打製石斧	(8.6)	6.0	2.3	110	ホルンフェルス	
第 45 図 85	17 号住居　覆土	打製石斧	12.7	6.1	2.2	160	ホルンフェルス	
第 45 図 86	17 号住居　覆土	打製石斧	(5.5)	8.3	2.9	175	ホルンフェルス（砂岩）	
第 46 図 87	17 号住居　覆土	礫器	12.5	9.5	4.2	577	ホルンフェルス	両刃
第 46 図 88	17 号住居　覆土	礫器	9.4	8.7	3.5	345	ホルンフェルス	
第 46 図 89	17 号住居　覆土	礫器	9.5	13.6	4.0	700	砂岩	両刃
第 46 図 90	17 号住居　覆土	横刃形石器	11.0	5.5	1.5	145	凝灰岩	
第 46 図 91	17 号住居　覆土	石匙	11.5	6.1	1.1	90	ホルンフェルス	
第 46 図 92	17 号住居　覆土	スクレイパー	8.6	12.0	1.5	173	ホルンフェルス	
第 46 図 93	17 号住居　覆土	スクレイパー	7.3	8.0	2.5	115	砂岩	
第 47 図 94	17 号住居　覆土	磨石類	10.6	6.2	3.9	349	砂岩	両端に敲打痕
第 47 図 95	17 号住居　覆土	磨石類	13.2	6.6	4.6	660	閃緑岩	
第 47 図 96	17 号住居　覆土	磨石類	10.7	10.4	4.3	700	安山岩	
第 47 図 97	17 号住居　覆土	磨石類	14.3	9.7	4.9	1085	花崗斑岩	片面に凹み
第 47 図 98	17 号住居　覆土	磨石類	11.2	8.0	4.1	665	閃緑岩	両面に凹み
第 47 図 99	17 号住居　床面	凹石	12.5	9.0	4.1	600	多孔質安山岩	両面に凹み
第 47 図 100	17 号住居　覆土	凹石	(8.5)	8.5	5.5	545	閃緑岩	両面に凹み。端部に敲打痕
第 47 図 101	17 号住居　覆土	磨石類	14.0	9.5	4.2	860	砂岩	片面に点状打痕。端部に敲打痕
第 47 図 102	17 号住居ピット	磨製石斧	(8.5)	4.2	3.1	170	凝灰岩	
第 47 図 103	17 号住居　覆土	磨製石斧（未成品）	(14.0)	7.5	3.5	705	凝灰岩	
第 47 図 104	17 号住居　覆土	磨製石斧（未成品）	(15.0)	8.8	4.7	850	角礫凝灰岩	
第 51 図 19	敷石住居　覆土	石鏃（未成品）	2.0	1.7	0.5	1.1	黒曜石	
第 51 図 20	敷石住居　敷石	打製石斧	24.3	8.6	3.8	660	ホルンフェルス	
第 52 図 21	敷石住居　覆土	横刃形石器	10.5	4.7	1.1	60	ホルンフェルス	
第 52 図 22	敷石住居　覆土	横刃形石器	9.7	6.5	2.2	135	ホルンフェルス	
第 70 図 2	51 号集石	打製石斧	7.7	6.6	1.9	83	ホルンフェルス	
第 78 図 1	65 号集石	打製石斧	13.0	9.0	3.5	455	ホルンフェルス	
第 78 図 2	65 号集石	横刃形石器	17.4	9.5	2.3	330	ホルンフェルス	
第 95 図 1	－	石鏃	2.4	1.4	0.2	0.5	黒曜石	凹基無茎
第 95 図 2	Z-23 区	石鏃	2.6	1.1	0.3	0.8	チャート	凹基無茎
第 95 図 3	2C-26 区	石鏃	3.5	2.1	0.3	1.2	黒曜石	凹基無茎
第 95 図 4	－	石鏃（未成品）	1.5	1.0	0.3	0.4	黒曜石	
第 95 図 5	9 トレンチ	石鏃	2.6	1.5	0.3	1.1	チャート	凹基無茎

図No.	出土位置	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考
第 95 図 6	Z -23 区	石鏃	2.9	1.4	0.4	1.6	チャート	平基無茎
第 95 図 7	-	石鏃	2.0	0.9	0.4	0.6	黒曜石	有茎
第 95 図 8	9 トレンチ	石匙	4.6	5.3	0.7	13.0	頁岩	
第 96 図 9	60 ライン以北 第Ⅶ層下位	石核	2.1	3.3	0.9	5.8	黒曜石	
第 96 図 10	2B-19 区	石核	5.1	3.2	2.6	43.7	黒曜石	
第 97 図 11	23 号住居　覆土	石核	3.9	3.2	1.4	16.3	黒曜石	
第 97 図 12	-	二次加工剥片	1.8	2.0	0.5	1.2	黒曜石	
第 97 図 13	C -22 区	原石	5.5	2.6	2.1	36.7	黒曜石	
第 98 図 14	Z -25 区 第Ⅶ層上位	打製石斧	(6.0)	4.2	1.1	40	ホルンフェルス	
第 98 図 15	2A-22 区	打製石斧	(7.0)	3.9	1.8	60	ホルンフェルス	
第 98 図 16	56 トレンチ	打製石斧	(8.5)	4.2	1.4	70	ホルンフェルス （泥質片岩）	
第 98 図 17	2D-17 区 第Ⅶ層	打製石斧	(8.2)	4.2	1.5	70	ホルンフェルス	
第 98 図 18	2D-24 区	打製石斧	(10.0)	5.0	2.3	120	ホルンフェルス	
第 98 図 19	2C-24 区	打製石斧	(8.2)	5.5	1.5	80	ホルンフェルス	
第 98 図 20	2B-23 区	打製石斧	(8.0)	5.6	1.5	100	ホルンフェルス	
第 98 図 21	26 トレンチ 第Ⅶ層上面	打製石斧	(9.7)	5.0	1.7	100	ホルンフェルス	
第 98 図 22	2A-22 区	打製石斧	(10.4)	5.2	1.7	95	ホルンフェルス	
第 98 図 23	-	打製石斧	(11.5)	5.8	1.0	116	ホルンフェルス	
第 98 図 24	-	打製石斧	(8.6)	4.3	1.3	50	ホルンフェルス	
第 98 図 25	2A-21 区 第Ⅷ層	打製石斧	8.0	4.9	1.2	56	ホルンフェルス	
第 98 図 26	7 トレンチ 第Ⅷ層	打製石斧	(10.0)	5.0	1.2	66	ホルンフェルス	
第 98 図 27	2C-23 区	打製石斧	(6.0)	5.6	1.1	51	ホルンフェルス	
第 98 図 28	-	打製石斧	(7.4)	6.0	1.9	94	ホルンフェルス	
第 98 図 29	2C-26 区	打製石斧	9.4	4.5	1.0	64	ホルンフェルス	
第 99 図 30	2C-24 区	打製石斧	11.5	4.3	1.1	70	砂岩	
第 99 図 31	2C-24 区	打製石斧	12.8	5.3	1.5	110	砂岩	刃部摩耗
第 99 図 32	U -3 区付近 第Ⅶ層	打製石斧	12.4	5.6	2.0	140	ホルンフェルス	
第 99 図 33	2D-26 区	打製石斧	12.7	4.5	1.5	104	ホルンフェルス	
第 99 図 34	2E-14 区 第Ⅶ層	打製石斧	13.5	4.1	2.0	130	ホルンフェルス	刃部摩耗
第 99 図 35	T -5 区	打製石斧	11.6	5.0	1.3	95	凝灰岩	刃部破損
第 99 図 36	2D-25 区	打製石斧	14.0	5.5	1.7	165	ホルンフェルス	
第 99 図 37	2D-25 区	打製石斧	14.5	4.0	1.8	130	砂岩	
第 99 図 38	2C-25 区	打製石斧	9.8	4.3	1.1	55	ホルンフェルス	
第 99 図 39	U・V -2 区 第Ⅷ層	打製石斧	11.4	4.2	1.3	75	泥岩	
第 99 図 40	2C-23 区	打製石斧	12.0	4.5	1.5	100	ホルンフェルス	刃部摩耗
第 99 図 41	第Ⅶ層	打製石斧	16.8	6.1	1.8	205	ホルンフェルス	

図No.	出土位置	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考
第 99 図 42	2D-21 区 第Ⅶ層	打製石斧	(10.0)	6.5	1.8	169	ホルンフェルス	
第 99 図 43	P -28 区 第Ⅶ層	打製石斧	(11.0)	6.5	3.5	300	ホルンフェルス	
第 99 図 44	2B-26 区 第Ⅷ層	打製石斧	(11.0)	6.0	1.9	140	砂岩	
第 100 図 45	O -9 区	打製石斧	(10.2)	5.4	1.5	100	ホルンフェルス	
第 100 図 46	O -9 区	打製石斧	(10.0)	5.4	1.4	110	ホルンフェルス	
第 100 図 47	U -25 区 第Ⅷ層	打製石斧	(10.7)	5.9	1.2	106	ホルンフェルス	
第 100 図 48	2B-24 区 第Ⅶ層	打製石斧	(12.5)	4.9	1.5	125	ホルンフェルス	
第 100 図 49	2B-23 区 第Ⅷ層	打製石斧	11.6	4.2	1.5	75	ホルンフェルス	
第 100 図 50	T -26 区周辺 第Ⅶ層	打製石斧	12.0	5.1	0.9	60	ホルンフェルス	
第 100 図 51	2B-21 区 第Ⅶ層	打製石斧	(11.3)	4.9	1.7	139	ホルンフェルス	
第 100 図 52	2D-21 区 第Ⅶ層	打製石斧	(11.0)	4.1	1.5	89	ホルンフェルス	
第 100 図 53	2D-17 区	打製石斧	(4.8)	5.1	2.0	70	ホルンフェルス	
第 100 図 54	54 トレンチ	打製石斧	(11.6)	5.2	1.8	140	ホルンフェルス (泥岩)	
第 100 図 55	2D-27 区	打製石斧	11.0	4.0	1.2	60	ホルンフェルス	
第 100 図 56	2C-22 区	打製石斧	(12.2)	5.0	1.5	120	ホルンフェルス	
第 100 図 57	2C-24 区	打製石斧	14.3	5.2	1.9	181	ホルンフェルス	
第 100 図 58	-	打製石斧	(12.0)	5.0	1.1	89	ホルンフェルス	
第 100 図 59	9 トレンチ 表土	打製石斧	(9.8)	6.0	2.7	175	泥岩	
第 100 図 60	表採	打製石斧	(11.0)	6.8	1.6	170	ホルンフェルス	
第 101 図 61	第Ⅶ層下位 ～第Ⅷ層	打製石斧	14.2	6.5	1.9	235	ホルンフェルス	
第 101 図 62	H -30 区 第Ⅶ層	打製石斧	12.7	8.1	4.0	459	泥岩	
第 101 図 63	K -30 区 第Ⅷ層	打製石斧	13.7	8.6	4.3	629	ホルンフェルス	
第 101 図 64	O -9 区	打製石斧	(10.7)	8.6	2.0	285	ホルンフェルス	
第 101 図 65	18 ～ 23 トレンチ間　第Ⅶ層	打製石斧	(10.5)	9.0	3.0	260	ホルンフェルス	
第 101 図 66	-	打製石斧	(9.5)	9.1	2.7	235	閃緑岩	刃部摩耗
第 101 図 67	2C-24 区	打製石斧	14.5	8.6	2.5	375	ホルンフェルス	
第 101 図 68	Z -25 区 第Ⅶ層上位	打製石斧	8.0	5.2	1.7	95	凝灰岩	
第 101 図 69	O -9 区	打製石斧	8.5	4.1	0.9	36	ホルンフェルス	偏刃
第 101 図 70	15 トレンチ	打製石斧	10.0	5.0	1.0	52	ホルンフェルス (泥岩)	
第 101 図 71	O -9 区	打製石斧	10.3	8.0	1.5	131	ホルンフェルス	
第 101 図 72	T -26 区周辺 第Ⅶ層	打製石斧	(9.6)	8.7	2.9	245	ホルンフェルス	
第 102 図 73	2E-14 区 第Ⅶ層	打製石斧	9.7	8.7	2.1	182	ホルンフェルス	
第 102 図 74	P -28 区 第Ⅶ層	打製石斧	11.0	8.0	2.4	214	ホルンフェルス	
第 102 図 75	2B-25 区 第Ⅶ層	打製石斧	12.5	7.0	1.9	200	砂岩	
第 102 図 76	U・V -2 区 第Ⅷ層	打製石斧	15.3	8.0	1.7	309	ホルンフェルス	
第 102 図 77	2B-22 区 第Ⅶ層	打製石斧	(9.0)	7.9	1.7	150	ホルンフェルス	

図No.	出土位置	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考
第 102 図 78	U・V -2 区 第Ⅷ層	打製石斧	(7.8)	7.6	2.7	240	ホルンフェルス	
第 102 図 79	17 トレンチ	打製石斧	(10.5)	11.4	2.6	448	ホルンフェルス	
第 102 図 80	J-31 区　第Ⅷ層	打製石斧	15.1	9.8	3.5	549	ホルンフェルス	
第 102 図 81	Z-25 区　第Ⅷ層	礫器	7.7	9.0	4.0	315	ホルンフェルス	片刃
第 102 図 82	2D-25 区 第Ⅶ層	礫器	9.5	12.2	3.8	410	ホルンフェルス	両刃
第 103 図 83	2D-17 区 第Ⅶ層	礫器	15.5	8.5	4.0	530	ホルンフェルス	片刃
第 103 図 84	Y -22 区 第Ⅶ層	礫器	18.0	12.5	6.5	1225	ホルンフェルス	片刃
第 103 図 85	-	礫器	11.5	9.0	4.0	515	ホルンフェルス (砂岩)	両刃
第 103 図 86	2D-27 区 第Ⅶ層	礫器	10.4	12.5	4.7	585	ホルンフェルス	片刃
第 103 図 87	N -30 区 第Ⅶ層	礫器	11.5	9.0	3.0	385	ホルンフェルス	片刃
第 103 図 88	H -30 区 第Ⅶ層	礫器	14.2	13.4	5.0	1185	ホルンフェルス	片刃
第 104 図 89	2D-24 区	礫器	13.5	13.5	4.0	730	凝灰岩	両刃
第 104 図 90	Z -25 区	礫器	8.5	9.5	5.0	362	ホルンフェルス	片刃
第 104 図 91	2A-21 区	礫器	8.5	11.5	3.7	445	ホルンフェルス	両刃
第 104 図 92	I -30 区 第Ⅷ層	礫器	15.5	12.5	3.8	770	ホルンフェルス	全周に両刃加工
第 104 図 93	-	礫器	14.0	10.2	5.3	890	ホルンフェルス	片刃
第 104 図 94	Z -25 区	礫器	19.0	13.0	3.8	865	ホルンフェルス	
第 105 図 95	50 トレンチ	礫器	6.2	14.7	3.5	325	ホルンフェルス	片刃
第 105 図 96	2C-23 区	礫器	10.0	10.0	4.0	405	凝灰岩	両刃
第 105 図 97	N -15 区	礫器	26.5	22.0	5.0	3700	ホルンフェルス	片刃
第 105 図 98	-	石匙	8.2	6.0	1.5	55	ホルンフェルス	
第 105 図 99	S -27 区 第Ⅲ層	石匙	11.5	5.9	1.0	55	ホルンフェルス	
第 105 図 100	U -25 区 第Ⅶ層	石匙	13.2	7.5	2.2	216	ホルンフェルス	
第 105 図 101	2E-15 区	石匙	9.0	14.5	2.7	230	ホルンフェルス	
第 105 図 102	J -31 区	石匙	6.5	8.5	2.0	94	ホルンフェルス	
第 105 図 103	Z -25 区	石匙	9.8	4.8	1.4	65	ホルンフェルス (泥質片岩)	
第 105 図 104	-	石匙	14.0	4.6	1.5	115	ホルンフェルス	
第 106 図 105	T・U -25 区	横刃形石器	12.3	7.2	1.9	210	砂岩	
第 106 図 106	2A-19 区 第Ⅶ層	横刃形石器	18.0	7.0	3.0	420	ホルンフェルス	両刃
第 106 図 107	2C-24 区 第Ⅶ層	横刃形石器	13.0	9.5	2.7	440	砂岩	両刃
第 106 図 108	2D-25 区	横刃形石器	9.5	7.6	1.7	120	ホルンフェルス	
第 106 図 109	2B-23 区 第Ⅶ層	横刃形石器	(8.5)	6.1	1.3	70	砂岩	
第 106 図 110	2D-25 区	磨石類	12.0	6.5	3.0	360	砂岩	被熱赤化、吸炭
第 106 図 111	Z -25 区	磨石類	10.3	6.0	3.0	295	閃緑岩	
第 106 図 112	T -27 区 第Ⅷ層	磨石類	11.8	8.5	3.5	550	粗粒砂岩	
第 106 図 113	2A-21 区 第Ⅶ層	磨石類	12.2	9.0	5.0	910	閃緑岩	

図No.	出土位置	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考
第 106 図 114	2D-17 区 第Ⅶ層	磨石類	9.0	9.0	4.5	564	粗粒砂岩	
第 106 図 115	2D-26 区	磨石類	8.2	7.7	5.0	505	砂岩	
第 106 図 116	S -26 区 第Ⅶ層	磨石類	11.0	9.0	4.0	480	玄武岩	
第 106 図 117	2C-23 区	磨石類	(9.6)	(7.0)	3.6	320	砂岩	
第 107 図 118	S -26 区 第Ⅶ層	磨石類	9.5	7.6	4.5	480	玄武岩	
第 107 図 119	2E-22 区 第Ⅶ層	磨石類	(10.4)	9.2	6.0	904	砂岩	
第 107 図 120	2E-20・21 区 第Ⅶ層	磨石類	13.2	7.0	6.0	759	安山岩	
第 107 図 121	2C-25 区	磨石類	13.9	8.7	6.0	930	玄武岩	
第 107 図 122	S -27 区	磨石類	12.0	9.7	4.5	676	砂岩	被熱赤化
第 107 図 123	S -27 区 第Ⅷ層	磨石類	13.0	8.4	4.8	726	砂岩	被熱赤化
第 107 図 124	U -3 区付近 第Ⅶ層	磨石類	8.5	7.3	4.5	362	砂岩	
第 107 図 125	V -2 区 第Ⅶ層上面	磨石類	8.0	7.5	3.7	371	砂岩	
第 107 図 126	T -26 区	磨石類	(10.3)	(5.6)	3.0	326	砂岩	
第 107 図 127	V -21 区 第Ⅶ層～第Ⅷ層	磨石類	12.1	4.6	4.0	391	砂岩	
第 107 図 128	Z -22 区 第Ⅸ層直上	磨石類	10.0	4.0	4.5	362	砂岩	
第 107 図 129	2C-20 区 第Ⅶ層	磨石類	(7.5)	3.2	3.2	124	安山岩	
第 108 図 130	2C-18 区 第Ⅷ層	磨石類	6.6	6.0	4.3	276	砂岩	磨面に点状打痕。端部に敲打痕
第 108 図 131	2E-14 区 第Ⅷ層	磨石類	10.1	6.8	3.7	384	閃緑岩	磨面に点状打痕
第 108 図 132	U -17 区	磨石類	11.0	7.3	4.5	504	粗粒砂岩	磨面に敲打痕
第 108 図 133	V -2 区 第Ⅶ層上面	磨石類	12.8	7.5	3.0	445	花崗岩	磨面に敲打痕
第 108 図 134	2A-22 区 第Ⅶ層	磨石類	11.0	8.5	4.0	620	閃緑岩	磨面に敲打痕
第 108 図 135	2C-24 区	磨石類	(10.1)	7.7	4.7	625	閃緑岩	磨面に敲打痕
第 108 図 136	2D-17 区 第Ⅶ層	磨石類	13.0	10.2	3.7	860	閃緑岩	側面に敲打痕
第 108 図 137	2A-22 区 第Ⅷ層	磨石類	11.0	7.0	4.9	630	砂岩	片面に敲打痕。側面に磨面
第 108 図 138	2B-23 区 第Ⅷ層	凹石	8.5	8.7	3.0	265	閃緑岩	吸炭
第 108 図 139	V -2 区 第Ⅶ層上面	凹石	(6.7)	10.0	5.6	539	砂岩	
第 108 図 140	2B-23 区 第Ⅷ層	凹石	13.5	9.5	4.2	815	安山岩	
第 108 図 141	-	多孔石	17.0	15.0	9.5	2850	玄武岩	
第 109 図 142	G・H -25 区	台石	15.8	12.0	6.8	1800	礫岩	
第 109 図 143	2C-24 区 第Ⅶ層	台石	19.5	15.4	4.0	1800	閃緑岩	
第 109 図 144	I -30 区 第Ⅷ層	台石	18.4	15.5	4.9	2410	閃緑岩	
第 109 図 145	S -27 区	台石	(11.0)	(10.6)	3.4	445	玄武岩	
第 109 図 146	S -27 区 第Ⅷ層	台石	(9.0)	(11.0)	3.8	575	砂岩	被熱赤化
第 109 図 147	2A-21 区	台石	(16.5)	(9.2)	3.8	815	閃緑岩	
第 109 図 148	V -21 区 第Ⅶ層	台石	(15.5)	(7.5)	5.1	900	砂岩	
第 109 図 149	2A-19 区 第Ⅷ層	台石	(19.7)	11.0	8.0	2420	砂岩	

図No.	出土位置	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考
第 110 図 150	2D-17 区 第Ⅶ層	台石	29.5	19.0	9.0	6200	閃緑岩	
第 110 図 151	H -25 区 第Ⅳ層	台石	28.0	29.0	10.5	10200	安山岩	
第 110 図 152	2B-25 区 第Ⅶ層	石皿	(32.5)	(14.5)	9.0	5650	多孔質安山岩	
第 111 図 153	Y -22 区	石皿	(13.5)	(10.5)	5.5	860	砂岩	
第 111 図 154	2B-25 区 第Ⅶ層	石皿	(17.5)	(9.0)	4.0	1050	安山岩	
第 111 図 155	-	磨製石斧	(10.2)	5.2	3.7	305	凝灰岩	
第 111 図 156	2A-21 区 第Ⅶ層	磨製石斧	(7.0)	5.5	2.8	153	凝灰岩	
第 111 図 157	-	磨製石斧	(15.0)	5.0	3.6	400	ホルンフェルス	
第 111 図 158	-	磨製石斧 （未成品）	(14.0)	7.3	4.0	675	凝灰岩	
第 111 図 159	V -2 区 第Ⅶ層上面	磨製石斧 （未成品）	10.4	4.0	2.3	169	凝灰岩	
第 111 図 160	2C-25 区	加工痕ある剥片	5.0	7.2	1.6	44	ホルンフェルス	
第 111 図 161	S -27 区 第Ⅷ層	加工痕ある剥片	8.0	6.0	1.4	85	ホルンフェルス	
第 112 図 162	Q -28 区 第Ⅶ層	加工痕ある剥片	8.9	11.2	2.4	265	凝灰岩	
第 112 図 163	-	加工痕ある剥片	9.5	10.5	2.0	240	ホルンフェルス	
第 112 図 164	Z -25 区 第Ⅷ層	加工痕ある剥片	8.2	6.5	1.5	93	砂岩	
第 112 図 165	Z -25 区	石核	8.8	6.6	6.0	350	ホルンフェルス	
第 112 図 166	U -26 区 第Ⅷ層	石核	11.0	9.5	4.7	494	ホルンフェルス	
第 112 図 167	2E-20 区	石核	9.6	9.7	4.9	461	ホルンフェルス	
第 112 図 168	-	石核	15.0	12.6	5.8	1250	ホルンフェルス	
第 112 図 169	S -27 区 第Ⅷ層	石核	15.0	10.4	4.5	825	ホルンフェルス	

第3表　土坑一覧表

No.	出土区	遺構挿図	規模（cm）			長軸方位	平面形	備考		
			長軸	短軸	深さ			調査年次	発掘時の名称	特徴、遺物挿図No.
1	2C-22区	第199図	205	125	75	N 58° E	長方形	第Ⅰ次	Ⅰ-1土坑	北東側は攪乱
2	2D-23区	第199図	180	120	60	N 50° E	楕円形	第Ⅰ次	Ⅰ-2土坑	20号住居・1号焼土と重複。第210図3
3	2E-23区	第199図	235	100	18	N 40° E	長方形	第Ⅰ次	Ⅰ-3土坑	
4	2B-23区	第199図	(200)	130	60	N 52° E	長方形	第Ⅰ次	Ⅰ-4土坑	一部未調査。試掘坑で攪乱
5	2C-23区	第199図	265	90	45	N 50° E	長方形	第Ⅰ次	Ⅰ-5土坑	第210図4
6	2D-24区	第199図	(160)	(115)	15	N 50° E	長方形	第Ⅰ次	Ⅰ-6土坑	北東側は攪乱。11号土坑と重複
7	2C-21区	第199図	143	143	47		円形	第Ⅰ次	Ⅰ-7土坑	第210図5
8	2C-22区	第199図	95	90	13		円形	第Ⅰ次	Ⅰ-8土坑	
9	2C-22区	第200図	115	95	18		円形	第Ⅰ次	Ⅰ-9土坑	上部は攪乱
10	2C-23区	第199図	(60)	80	-		円形	第Ⅰ次	Ⅰ-10土坑	
11	2C-24区	第199図	80	(60)	10		円形	第Ⅰ次	Ⅰ-11土坑	6号土坑と重複
12	2B-25区		-	-	-			第Ⅰ次	Ⅰ-12土坑	
13	2C-27区		-	-	-			第Ⅰ次	Ⅰ-13土坑	
14	2B-26区	第200図	135	125	50		円形	第Ⅰ次	Ⅰ-14土坑	第210図6
15	2B-27区	第200図	70	(50)	25		円形	第Ⅰ次	Ⅰ-15土坑	半分掘り過ぎ
16	2B-26区	第148図	140	(90)	10		円形	第Ⅰ次	Ⅰ-16土坑	22号住居と重複
17	2A-24区		90	(50)	-		円形	第Ⅰ次	Ⅰ-17土坑	
18	2C-25区	第200図	230	95	50	N 50° E	長方形	第Ⅰ次	Ⅰ-18土坑	19号土坑に近接
19	2C-25区	第200図	75	65	12		円形	第Ⅰ次	Ⅰ-19土坑	18号土坑に近接
20	2E-22区	第200図	120	-	10		円形	第Ⅰ次	Ⅰ-21土坑	20号住居と重複
21	2D-21区	第200図	150	140	23		円形	第Ⅰ次	Ⅰ-22土坑	
22	2E-20区	第200図	123	110	30		円形	第Ⅰ次	Ⅰ-23土坑	
23	2E-19区	第200図	117	110	25		円形	第Ⅰ次	Ⅰ-24土坑	第210図7
24	2D-20区	第200図	180	110	16	N 60° W	長楕円形	第Ⅰ次	Ⅰ-25土坑	25号土坑と重複
25	2E-20区	第200図	215	93	15	N 55° E	長楕円形	第Ⅰ次	Ⅰ-26土坑	24号土坑と重複
26	2B-23区	第201図	120	120	50		円形	第Ⅰ次	Ⅰ-28土坑	長軸壁オーバーハング。第210図8
27	2B-23区	第201図	150	140	42		円形	第Ⅰ次	Ⅰ-29土坑	
28	2A-25区	第201図	(140)	(60)	75		円形	第Ⅰ次	Ⅰ-30土坑	半分未調査。21号住居に近接
29	2A-25区	第201図	90	90	34		円形	第Ⅰ次	Ⅰ-31土坑	
30	2A-26区	第201図	85	80	35		円形	第Ⅰ次	Ⅰ-32土坑	
31	Z-26区		(110)	(60)	-		円形	第Ⅰ次	Ⅰ-34土坑	大半未調査
32	2A-23区	第201図	105	100	25		円形	第Ⅳ次	Ⅰ-80土坑	第Ⅳ次。Ⅰ-80土坑。34号住居と重複
33	2D-18区	第201図	128	70	28	N 52° E	長方形	第Ⅳ次	Ⅰ-81土坑	
34	2D-20区	第201図	75	65	10		円形	第Ⅳ次	Ⅰ-82土坑	
35	2C-20区	第201図	(100)	105	25		円形	第Ⅳ次	Ⅰ-83土坑	南側を試掘坑で攪乱
36	2B-20･21区	第201図	140	110	25		方形	第Ⅳ次	Ⅰ-84土坑	
37	2B-21区	第201図	160	56	15	N 62° E	不整長方形	第Ⅳ次	Ⅰ-85土坑	
38	2A-21区	第202図	88	63	25		方形	第Ⅳ次	Ⅰ-86土坑	
39	Y-22･23区	第202図	(300)	130	30	N 46° E	長方形	第Ⅳ次	Ⅰ-87土坑	北東端は未調査
40	Z ･2A-21区	第202図	115	90	25		方形	第Ⅳ次	Ⅰ-87土坑	

No.	出土区	遺構挿図	規模（cm）			長軸方位	平面形	備考		
			長軸	短軸	深さ			調査年次	発掘時の名称	特徴、遺物挿図No.
41	Z-22 区	第 202 図	110	105	25		円形	第Ⅳ次	Ⅰ-89 土坑	34 号住居・42 号土坑を切る。
42	Z-22 区	第 202 図	75	(50)	18		円形	第Ⅳ次	Ⅰ-90 土坑	34 号住居を切る。41 号土坑に切られる。
43	2A-22 区	第 202 図	195	90	25	N 50° E	長方形	第Ⅳ次	Ⅰ-91 土坑	34 号住居を切る。壁オーバーハング
44	2B-22 区	第 202 図	95	90	15		円形	第Ⅳ次	Ⅰ-92 土坑	
45	2A-23 区	第 202 図	95	90	5		円形	第Ⅳ次	Ⅰ-93 土坑	
46	2A-24 区		-	-	-		円形？	第Ⅳ次	Ⅰ-94 土坑	半分未調査
47	2C-20 区	第 202 図	95	65	10		方形	第Ⅳ次	Ⅰ-95 土坑	
48	Z-22 区		-	-	-		方形	第Ⅳ次	Ⅰ-96 土坑	38 号土坑と同規模
49	Z-23 区	第 202 図	250	135	15	N 64° E	長楕円形	第Ⅳ次	Ⅰ-97 土坑	50 号土坑を切る。20・21 号ピット重複
50	Z-23 区	第 202 図	100	(60)	15		円形	第Ⅳ次	Ⅰ-98 土坑	49 号土坑に切られる。
51	2A-23 区		-	-	-		円形？	第Ⅳ次	Ⅰ-99 土坑	
52										欠番
53	2C-20 区		-	-	-		円形	第Ⅳ次		大半が未調査
54	O-30 区	第 202 図	110	100	10		円形	第Ⅲ次	O-30 区土坑	
55	P-30 区	第 202 図	100	100	15		円形	第Ⅲ次	P-30 区土坑	
56	T-26 区	第 203 図	111	100	33		円形	第Ⅲ次	T-26 集石	1 号掘立柱建物を切る。覆土に礫集積
57	R-27 区	第 203 図	113	105	20		円形	第Ⅲ次	R-27 土坑	覆土に礫集積
58	Q-28 区	第 203 図	90	90	8		円形	第Ⅲ次	Q-28 土坑	覆土に礫集積
59	V-23 区	第 203 図	100	100	15		円形	第Ⅲ次	Ⅰ-7 住集石	25 号住居を切る。覆土に礫集積
60	W-23 区	第 203 図	115	110	23		円形	第Ⅲ次	Ⅰ-52 土坑	25 号住居を切る。
61	V-24 区	第 203 図	110	105	32		円形	第Ⅲ次	Ⅰ-53 土坑	25 号住居を切る。
62	V-23 区		127	120	16		円形	第Ⅲ次	Ⅰ-54 土坑	25 号住居を切る。
63	X-23 区	第 203 図	120	120	40		円形	第Ⅲ次	Ⅰ-55 土坑	30 号住居を切る。64 号土坑に切られる。
64	X-23 区	第 203 図	120	113	42		円形	第Ⅲ次	Ⅰ-56 土坑	30 号住居・63 号土坑を切る。
65	X-22 区	第 203 図	85	65	18		楕円形	第Ⅲ次	Ⅰ-57 土坑	30 号住居を切る。
66	V-24 区	第 203 図	75	75	13		円形	第Ⅲ次	Ⅰ-58 土坑	25 号住居を切る。
67	U-24 区	第 203 図	100	(40)	70		円形？	第Ⅲ次		一部未調査。2 号掘立柱・68 号土坑と重複
68	U-24 区	第 203 図	148	135	40		円形	第Ⅲ次		2 号掘立柱建物・67 号土坑と重複
69	Y-21 区	第 204 図	135	123	47		円形	第Ⅲ次	Ⅰ-59 土坑	
70	Z-21･22 区	第 204 図	165	55	10	N 57° E	溝状	第Ⅲ次	Ⅰ-60 土坑	
71	Z-21 区	第 204 図	(220)	60	20	N 57° E	溝状	第Ⅲ次	Ⅰ-61 土坑	一部未調査
72	Z-21 区	第 204 図	90	65	20		不整楕円形	第Ⅲ次	Ⅰ-62 土坑	
73	Z-20 区	第 204 図	140	140	39		円形	第Ⅲ次	Ⅰ-63 土坑	
74	Z-21 区	第 204 図	148	114	18		不整楕円形	第Ⅲ次	Ⅰ-64 土坑	
75	Z ･2A-19 区	第 204 図	145	135	35		円形	第Ⅲ次	Ⅰ-65 土坑	炭化種実を多数検出
76	2A-20 区	第 204 図	158	138	30		円形	第Ⅲ次	Ⅰ-66 土坑	
77	2B-19 区	第 204 図	130	127	15		円形	第Ⅲ次	Ⅰ-67 土坑	
78	2C-18 区	第 204 図	123	65	10	N 60° E	長方形	第Ⅲ次	Ⅰ-68 土坑	
79	2D-17 区	第 204 図	123	113	40		円形	第Ⅲ次	Ⅰ-69 土坑	
80	2C-16 区	第 205 図	95	72	20		楕円形	第Ⅲ次	Ⅰ-70 土坑	
81	2C-16 区	第 205 図	125	115	30		円形	第Ⅲ次	Ⅰ-71 土坑	

No.	出土区	遺構挿図	規模（cm）			長軸方位	平面形	備考		
			長軸	短軸	深さ			調査年次	発掘時の名称	特徴、遺物挿図No.
82	2C-15 区	第 205 図	110	95	25		円形	第Ⅲ次	Ⅰ-72 土坑	第 210 図 9
83	2D-15 区	第 205 図	85	85	25		円形	第Ⅲ次	Ⅰ-73 土坑	第 210 図 10
84	2E-14 区	第 205 図	105	80	26		方形	第Ⅲ次	Ⅰ-74 土坑	
85	2F-13 区	第 205 図	98	90	14		円形	第Ⅲ次	Ⅰ-75 土坑	
86	2F-12 区		(145)	50	-	N 72° E	溝状	第Ⅲ次	Ⅰ-76 土坑	一部未調査
87	2B-18 区	第 205 図	150	140	23		円形	第Ⅲ次	Ⅰ-77 土坑	
88	2E-15 区	第 205 図	145	130	25		円形	第Ⅲ次	Ⅰ-78 土坑	
89	2A-20 区	第 205 図	135	110	25		不整円形	第Ⅲ次	Ⅰ-79 土坑	
90	Y-20 区	第 205 図	140	140	75		円形	第Ⅲ次	Y-20 区土坑	一部未調査
91	S-28 区	第 206 図	95	68	20		方形	第Ⅲ次		26 号住居に近接
92	S-28 区	第 206 図	65	65	24		方形	第Ⅲ次		26 号住居を切る。
93	S-28 区	第 206 図	140	120	33		円形	第Ⅲ次	方形土坑No. 1	26 号住居を切る。94 号土坑重複。第 210 図 11
94	S-28 区	第 206 図	(85)	65	4		方形	第Ⅲ次		93・95 号土坑に切られる。
95	S-28 区	第 206 図	115	100	38		円形	第Ⅲ次	方形土坑No. 2	94 号土坑を切る。
96	S-27 区	第 206 図	105	85	29		楕円形	第Ⅲ次	方形土坑No. 3	
97	S-27 区	第 206 図	93	85	42		方形	第Ⅲ次	方形土坑No. 4	
98	S-27 区	第 206 図	63	(55)	18		方形？	第Ⅲ次		101 号土坑に切られる。
99	S-27 区	第 206 図	75	(55)	10		方形？	第Ⅲ次		100 号土坑に切られる。
100	T-27 区	第 206 図	105	75	47		長方形	第Ⅲ次	方形土坑No. 5	1 号掘立柱建物を切る。99 号土坑に切られる。101 号土坑重複
101	S・T-27 区	第 206 図	170	140	30		不明	第Ⅲ次		1 号掘立柱建物・98 号土坑を切る。101・102 号土坑と重複
102	T-27 区	第 206 図	(130)	85	50		長方形	第Ⅲ次	方形土坑No. 6	1 号掘立柱建物を切る。101 号土坑重複。第 210 図 12
103	T-27 区	第 206 図	(92)	70	13		方形	第Ⅲ次		1 号掘立柱建物を切る。104・105 号土坑重複
104	T-27 区	第 206 図	(90)	(80)	35		方形	第Ⅲ次	方形土坑No. 7	1 号掘立柱建物を切る。103･105 号土坑重複
105	T-27 区	第 206 図	75	(60)	15		方形	第Ⅲ次		103・104 号土坑重複。第 210 図 13
106	T-27 区	第 206 図	90	80	24		方形	第Ⅲ次		1 号掘立柱建物と重複
107	S-28 区	第 206 図	75	(50)	17		方形	第Ⅲ次	方形土坑No. 10	一部未調査。第 210 図 13
108	S-27･28 区	第 206 図	90	75	17		方形	第Ⅲ次	方形土坑No. 9	109 号土坑と重複
109	S-28 区	第 206 図	90	60	13		方形	第Ⅲ次		108 号土坑と重複
110	T-27 区	第 206 図	85	75	45		方形	第Ⅲ次		
111	S -18 区	第 205 図	130	130	32		円形	第Ⅱ次	Ⅰ -5 住集石	覆土に礫集積
112	R-18 区		110	110	50		円形	第Ⅱ次	Ⅰ -8 土坑	
113	U-16 区	第 207 図	160	160	20		円形	第Ⅱ次	Ⅰ -9 土坑	
114	U-16 区	第 207 図	165	150	53		円形	第Ⅱ次	Ⅰ -10 土坑	
115	U-17 区		130	110	33		不整円形	第Ⅱ次		第 210 図 14･15
116	U-21 区	第 207 図	90	90	10		円形	第Ⅱ次		
117	U-21 区	第 207 図	90	85	20		円形	第Ⅱ次		
118	V-21 区	第 207 図	110	105	23		円形	第Ⅱ次		
119	Y-24 区	第 207 図	100	90	25		楕円形	第Ⅱ次		
120	S -19 区	第 151 図	145	115	30		不整方形	第Ⅱ次		23 号住居を切る。
121	S -19 区	第 151 図	90	75	45		楕円形	第Ⅱ次		23 号住居を切る。
122	T-5･6 区	第 207 図	120	120	15		円形	第Ⅰ次	1 号土坑	

No.	出土区	遺構挿図	規模（cm）			長軸方位	平面形	備考		
			長軸	短軸	深さ			調査年次	発掘時の名称	特徴、遺物挿図No.
123	S -6 区		135	130	17		円形	第Ⅰ次	3 号土坑	
124	S -7 区	第 207 図	100	(100)	15		円形	第Ⅰ次	8 号土坑	
125	R -8 区		80	80	-		円形	第Ⅰ次	9 号土坑	
126	T -8 区		115	115	-		円形	第Ⅰ次	10 号土坑	
127	U -9 区	第 207 図	170	170	40		円形	第Ⅰ次	11 号土坑	
128	W -8 区		170	160	-		円形	第Ⅰ次	13 号土坑	
129	V・W -7 区		110	100	-		円形	第Ⅰ次	14 号土坑	
130	S -9 区		140	(125)	-		円形	第Ⅰ次	18 号土坑	
131	S -10 区		140	140	-		円形	第Ⅰ次	19 号土坑	
132	O -10 区	第 208 図	145	130	40		円形	第Ⅰ次	20 号土坑	
133	P -11 区	第 208 図	140	140	40		円形	第Ⅰ次	21 号土坑	
134	P -9 区	第 208 図	100	(40)	30		円形	第Ⅰ次	6 号住北土坑	一部未調査
135	R -10 区		200	110	-	N 45° E	長楕円形	第Ⅰ次		
136	Q -12 区		110	100	-		円形	第Ⅰ次		
137	P -13 区		110	100	-		円形	第Ⅰ次		
138	P -13 区		100	85	-		円形	第Ⅰ次		
139	P -13 区		80	80	16		円形	第Ⅰ次		
140	P -13･14 区		100	100	-		円形	第Ⅰ次		
141	O -13･14 区		140	100	-		楕円形	第Ⅰ次		
142	O -14 区		100	90	-		円形	第Ⅰ次		
143	O・P -14 区		130	130	-		円形	第Ⅰ次		耕作溝で攪乱
144	N -16 区	第 208 図	120	120	65		円形	第Ⅰ次	26 号土坑	
145	L -16 区		90	(50)	-		円形	第Ⅰ次		一部未調査
146	I -12 区		125	125	23		円形	第Ⅱ次		
147	O・P -10 区		170	155	-		円形	第Ⅱ次		
148	P -9 区		95	90	-		円形	第Ⅱ次		
149	P -9 区	第 208 図	120	110	35		円形	第Ⅱ次		
150	P -9 区	第 208 図	120	90	25		不整円形	第Ⅱ次		
151	Q - 8 区		100	100	-		円形	第Ⅱ次		13 号住居と重複
152	P -8 区	第 209 図	120	(55)	40		円形	第Ⅱ次		一部未調査。153 号土坑に近接
153	P -8 区		80	75	-		円形	第Ⅱ次		152 号土坑に近接
154	P -8 区	第 209 図	120	(70)	75		円形	第Ⅱ次		壁オーバーハング
155	Q -7 区	第 209 図	120	100	15		円形	第Ⅱ次		
156	S・T -5 区	第 209 図	195	120	42	N 48° E	楕円形	第Ⅱ次		
157	T -3 区	第 209 図	105	105	15		円形	第Ⅴ次		
158	V -2 区	第 209 図	100	95	18		円形	第Ⅴ次		
159	X -59 区	第 209 図	115	100	8		円形	第Ⅴ次		10 号掘立柱建物と重複
160	W -60 区	第 209 図	160	145	18		円形	第Ⅴ次		10 号掘立柱建物を切る。

第 4 表　出土遺物観察表

1 号住居址

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
119	1	覆土	土師器坏	口径（11.6）器高 4.3	橙色	金雲母、赤色粒子、砂粒	口縁横ナデ。体部外面ヘラ削り	1/2 残
119	2	床面	土師器甕		にぶい橙色	雲母、砂粒	口縁横ナデ。胴部外面ヘラ削り	
119	3	床面	土師器甕		にぶい橙色	砂粒	胴部外面ヘラ削り	
119	4	床面	土師器甕		にぶい橙色	砂粒、小石	胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	
120	5	床面	土師器甕		にぶい橙色	雲母、赤色粒子、砂粒、小石	胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	
120	6	覆土	土師器高坏	底径（12.0）	にぶい黄橙色	砂粒	脚部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	
120	7	覆土	土師器鉢	口径 19.6　器高 9.7 底径 7.6	にぶい橙色	赤色粒子、砂粒、小石	胴部・底部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	甕を転用
120	8	床面	編物石	長さ 16.8　幅 6.2　厚さ 3.3　重さ 525 g				
121	9	床面	編物石	長さ 13.7　幅 7.0　厚さ 3.1　重さ 415 g				
121	10	床面	編物石	長さ 15.1　幅 5.6　厚さ 4.0　重さ 500 g				
121	11	床面	編物石	長さ 11.7　幅 5.7　厚さ 5.2　重さ 580 g				
121	12	床面	編物石	長さ 15.7　幅 7.1　厚さ 4.7　重さ 705 g				
121	13	床面	編物石	長さ 12.5　幅 5.5　厚さ 4.7　重さ 495 g				
121	14	床面	編物石	長さ 14.9　幅 6.1　厚さ 4.2　重さ 640 g				
121	15	床面	編物石	長さ 13.8　幅 6.4　厚さ 5.5　重さ 585 g				
121	16	床面	編物石	長さ 16.0　幅 5.8　厚さ 4.0　重さ 525 g				
121	17	床面	編物石	長さ 13.4　幅 5.8　厚さ 4.5　重さ 455 g				
121	18	床面	編物石	長さ 13.5　幅 5.7　厚さ 4.7　重さ 520 g				
121	19	床面	編物石	長さ 16.5　幅 4.8　厚さ 5.2　重さ 465 g				
121	20	床面	編物石	長さ 13.2　幅 6.0　厚さ 4.8　重さ 615 g				
121	21	床面	編物石	長さ 16.3　幅 6.1　厚さ 4.6　重さ 745 g				
121	22	床面	編物石	長さ 13.1　幅 6.1　厚さ 4.5　重さ 535 g				
121	23	床面	編物石	長さ 17.5　幅 6.7　厚さ 3.7　重さ 580 g				

2 号住居址

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
122	1	覆土	土師器坏	口径（13.3）器高 4.8	にぶい橙色	金雲母、砂粒	口縁横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	
122	2	覆土	土師器坏	口径（13.3）器高（4.8）	橙色	金雲母、赤色粒子、砂粒	口縁横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	
122	3	覆土	土師器坏	器高（3.9）	明赤褐色	微細な雲母	体部内面に放射状暗文	内外面に赤彩
122	4	覆土	土師器甕	底径（10.5）	にぶい橙色	赤色粒子、砂粒	胴部外面ヘラ削り（横）、内面ヘラナデ	底部に木葉痕
122	5	覆土	須恵器坏蓋	口径（15.3）器高 3.3	灰白色	白色粒子	天井部回転ヘラ削り	天井部に釉。14 号住と接合
122	6	覆土	須恵器坏	口径（12.8）器高 3.9	灰白色	白色粒子	底部回転ヘラ削り	14・16 号住と接合
122	7	－	鉄製品 器種不明	残存長 4.8 幅 3.3 厚さ 0.3 重さ 7.9 g				

3 号住居址

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
124	1	覆土	土師器坏		橙色	砂粒、小石	器面荒れ、調整不明	
124	2	カマド覆土	土師器坏	口径（11.7）	にぶい褐色	目立つ含有物なし	体部内面に放射状暗文	
124	3	覆土	土師器坏	底径（6.5）	にぶい褐色	目立つ含有物なし	内面に放射状暗文。底部回転糸切り後に手持ちヘラ削り	
124	4	覆土	土師器鉢	口径（17.9）器高 8.1		金雲母、赤色粒子、砂粒	口縁横ナデ。体部・底部外面ヘラ削り、内面ナデ	2 号住と接合
124	5	覆土	土師器鉢	口径（19.0）器高 8.2 底径（7.0）	橙色	砂粒、小石	口縁横ナデ。体部・底部外面ヘラ削り、内面ナデ	4 号住と接合
124	6	カマド覆土	土師器甕		にぶい橙色	金雲母、砂粒	胴部外面ナデ、内面ヘラナデ	相模型
124	7	－	砥石	残存長 5.8 幅 8.9 厚さ 4.2 重さ 203 g				
124	8	－	石槌	長さ 7.5　幅 5.9　厚さ 3.7　重さ 200 g　全面にあばた状の敲打痕				

4 号住居址

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
125	1	覆土	土師器坏		橙色	雲母、砂粒	口縁横ナデ、体部外面ヘラ削り	
125	2	覆土	土師器坏	器高（4.2）	明赤褐色	白色粒子、石英、砂粒	体部内面に放射状暗文	内外面に赤彩
125	3	覆土	土師器甕		橙色	赤色粒子、砂粒	胴部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ	

12 号住居址

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
128	1	覆土	土師器坏	口径（12.3）	橙色	砂粒	口縁横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ナデ	
128	2	覆土	土師器坏	口径（14.0）器高 4.3	にぶい橙色	金雲母、赤色粒子、砂粒	口縁横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ナデ	
128	3	覆土	土師器甕	口径（14.0）	にぶい橙色	雲母、砂粒	口縁横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	
128	4	覆土	土師器甕	胴最大径 17.4 底径 6.6	橙色	砂粒、小石	胴部・底部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	
128	5	覆土	打製石斧	長さ 15.4　最大幅 7.9　厚さ 3.3　重さ 378 g				
128	6	覆土	加工痕ある石器	残存長 6.7　最大幅 2.6　厚さ 1.9　重さ 45 g				

13 号住居址

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
131	1	覆土	土師器坏	口径（12.0）器高 3.2	橙色	砂粒	口縁横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ナデ	
131	2	覆土	土師器坏	器高（3.9）	浅黄橙色	金雲母、砂粒	口縁横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ナデ	
131	3	覆土	土師器坏		浅黄橙色	雲母、砂粒	器面荒れ、調整不明	相模型？
131	4	覆土	土師器坏	口径 15.1 器高 3.8	橙色	雲母、砂粒	体部ナデ、下端～底部外面ヘラ削り	体部の一部欠く。相模型
131	5	覆土	土師器坏		赤色	微量の砂粒	体部内外面に横ヘラ磨き	内外面に赤彩
131	6	覆土	土師器坏	口径（13.6）器高 3.4 底径 9.2	赤色	雲母、白色粒子	ロクロなで。底部外面ヘラ削り	口唇部内面に沈線。内外面に赤彩
131	7	覆土	土師器坏	口径（15.2）器高 3.8 底径（10.8）	赤色	金雲母、砂粒	ロクロなで。底部外面ヘラ削り	口唇部内面に沈線。内外面に赤彩
131	8	覆土	土師器坏	口径 16.0　器高 3.8 底径 11.5	赤色	砂粒	ロクロなで。体部下端～底部外面ヘラ削り	口唇部内面に沈線。内外面に赤彩
132	9	覆土	土師器坏	底径（11.5）	赤色	雲母、砂粒	ロクロなで。底部外面ヘラ削り	内外面に赤彩
132	10	覆土	土師器坏	底径（11.2）	赤色	白色粒子	ロクロなで。底部外面ヘラ削り	内外面に赤彩
132	11	覆土	土師器坏	底径（11.0）	明赤褐色	白色粒子、砂粒	器面荒れ、調整不明	内外面に赤彩

132	12	覆土	土師器坏	底径（11.0）	赤色	金雲母、砂粒	ロクロなで。底部外面ヘラ削り	内外面に赤彩
132	13	覆土	土師器坏	底径（10.0）	－	－	見込みにラセン状暗文	内外面に赤彩
132	14	覆土	土師器坏	口径（13.2）　器高 3.6 底径（8.0）	赤色	砂粒	体部外面磨き。底部削り。内面暗文（放射状、ラセン状）	口唇内面に沈線。内外面に赤彩
132	15	覆土	土師器坏	口径（16.0）　器高 3.4 底径（11.0）	赤色	雲母、白色粒子、砂粒	体部外面ヘラ磨き、内面に放射状暗文。底部外面ヘラ削り	内外面に赤彩
132	16	覆土	土師器坏	口径（15.0）	にぶい橙色	雲母	内面に暗文（体部に放射状、見込みにラセン状）	内外面に赤彩
132	17	覆土	須恵器坏蓋		灰色	白色粒子	天井部回転ヘラ削り	
132	18	覆土	須恵器坏蓋	口径（16.5）	灰色	白色粒子	天井部回転ヘラ削り	
132	19	覆土	須恵器 高台付坏	口径（16.0）　器高 3.8 底径（10.3）	灰白色	微量の雲母	底部回転ヘラ削り	底部が突出気味
132	20	覆土	須恵器坏	口径（14.0）　器高（5.0）	灰色	雲母		
132	21	覆土	須恵器 高台付坏	高台径（10.0）	灰色	白色粒子	底部回転ヘラ削り	底部が突出
133	22	覆土	土師器甕	口径（12.5）	にぶい橙色	雲母、砂粒	口縁横ナデ。胴部外面ヘラ削り	
133	23	覆土	土師器甕	口径（16.0）	にぶい褐色	金雲母、白色粒子、砂粒	口縁横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	
133	24	覆土	土師器甕	口径（22.7）	橙色	金・黒雲母、砂粒、小石	口縁横ナデ。胴部外面ヘラ削り	
133	25	覆土	土師器甕	口径（23.8）	橙色	砂粒、小石	口縁横ナデ。胴部外面ヘラ削り	
133	26	覆土	土師器甕	口径（23.0）	にぶい橙色	金雲母、砂粒	口縁横ナデ。胴部外面ヘラ削り	
133	27	覆土	土師器甕	口径（21.8） 胴最大径（21.5）	橙色	雲母、白色粒子、砂粒	口縁横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ナデ	
133	28	覆土	土師器甕		にぶい橙色	赤色粒子、砂粒	胴部外面ヘラ削り（縦・斜め）後、ヘラ磨き。内面ナデ	
133	29	覆土	土師器甕		にぶい橙色	砂粒	胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	
133	30	覆土	土師器甕	底径 6.5	にぶい橙色	砂粒	胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	底部に木葉痕
134	31	覆土	土師器甕	口径（17.0）	にぶい橙色	砂粒	口縁横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	31・32 同一個体？
134	32	覆土	土師器甕	胴最大径 23.0	にぶい橙色	砂粒	胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	
134	33	覆土	土師器甕	胴最大径 16.5 底径（8.4）	にぶい褐色	赤色粒子、砂粒、小石	胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	底部に木葉痕
134	34	覆土	土師器甕		にぶい橙色	金雲母、赤色粒子、砂粒	胴部外面ナデ、内面ヘラナデ	堀之内原タイプ
134	35	覆土	土師器甕	胴最大径 13.0 底径（12.5）	明褐灰色	金雲母、赤色粒子、砂粒	胴部内外面ナデ	底部に木葉痕。堀之内原タイプ
134	36	覆土	石斧未成品	長さ 13.9　幅 5.7　厚さ 3.7　重さ 360 g　　全面にあばた状の敲打痕				
134	37	覆土	鉄鏃	残存長 9.8　鏃身幅 3.7　鏃身厚 0.3　重さ 18 g				

14 号住居址

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
137	1	覆土	土師器坏	口径（14.7）	橙色	赤色粒子、微細な雲母	ロクロなで。体部外面下端磨き	
137	2	覆土下層焼土面	土師器坏	底径（11.2）	橙色	微細な雲母、砂粒	体部下端磨き。底部回転ヘラ削り	
137	3	覆土	土師器坏	底径（11.5）	橙色	微細な雲母、砂粒	体部下端磨き。底部回転ヘラ削り	
137	4	覆土下層焼土面	土師器坏	残存高 7.0	にぶい赤褐色	白色粒子、微細な雲母	体部内外面ヘラ磨き（外面横、内面縦）	
137	5	カマド覆土	土師器甕	口径（24.5） 胴最大径（20.0）	橙色	砂粒	口縁横ナデ。胴部内外面ナデ	相模型
137	6	覆土下層焼土面	土師器甕		にぶい褐色	金・黒雲母	口縁横ナデ。胴部内外面ナデ	相模型
137	7	覆土下層焼土面	土師器甕		橙色	金・黒雲母、砂粒	胴部内外面ナデ	相模型
137	8	床面上のカマド粘土中	土師器甕	口径（21.8） 胴最大径（20.0）	にぶい褐色	金雲母、砂粒	口縁横ナデ。胴上部外面ヘラ削り、内面ナデ	外面に粘土付着
137	9	床面上のカマド粘土中	土師器甕	口径（20.2）	橙色	雲母	口縁横ナデ。胴部外面ナデ、内面ヘラナデ	9･10　同一個体か？相模型

137	10	カマド覆土	土師器甕		橙色	雲母、赤色粒子、砂粒	胴部内外面ナデ	相模型
138	11	床面	土師器甕	底径 9.0	灰黄褐色	金雲母、砂粒	胴部内外面ナデ。外面に粘土、底部内面にタール状付着物	底部に木葉痕。相模型
138	12	床面	土師器甕	底径 7.9	にぶい橙色	雲母、赤色粒子、砂粒	胴部内外面ナデ	底部に木葉痕。相模型
138	13	覆土	土師器甕	口径（18.0）	にぶい橙色	金雲母、砂粒、小石	口縁横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	
138	14	覆土下層焼土中	土師器甕	器高（8.5）底径（8.0）	にぶい褐色	白色粒子、砂粒	胴部外面ヘラ削り、内面ナデ	外面に粘土付着
138	15	床面	石製紡錘車	上面幅 3.1 × 2.9　下面幅 4.0 × 3.5　厚さ 1.4　重さ 35.1 g　　側面に山形状の線刻				
138	16	床面	石製紡錘車	上面幅 3.0　下面幅 4.5　厚さ 2.1　重さ 70.8 g　　下面に十字、菱型状の線刻				

15 号住居址

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
140	1	覆土	土師器坏		橙色	雲母、赤色粒子、砂粒	口縁横ナデ。体部外面ヘラ削り	
140	2	床面	土師器埦	口径 16.5 器高 6.9	橙色	雲母、赤色粒子、砂粒	口縁横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	
140	3	床面	須恵器高台付坏	口径（14.0）　器高 3.9 底径 9.2	灰白色	白色粒子		底部突出気味
141	4	覆土	土師器甕	口径 19.0	にぶい橙色	雲母、砂粒	口縁横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	
141	5	床面	土師器甕	胴最大径（29.3） 底径（9.0）	橙色	赤色粒子、砂粒	胴部外面ヘラ削り後、ヘラ磨き。内面ヘラナデ	25 号住居と接合。口縁内面に籾圧痕
141	6	覆土	土師器甕		橙色	砂粒、小石	胴部外面ヘラ削り	
141	7	覆土	土師器甕	底径 6.4	にぶい褐色	雲母、砂粒、小石	胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	底部に木葉痕
141	8	覆土	土師器高坏	底径（10.8） 現存高 3.8	橙色	雲母、砂粒	脚外面ヘラ削り、裾部横ナデ	
141	9	覆土	打製石斧	長さ 9.5　最大幅 4.9 厚さ 1.6　重さ 85 g				

16 号住居址

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
142	1	覆土	土師器甕	口径（17.6）	にぶい橙色	金雲母、赤色粒子、砂粒	口縁横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ナデ	
142	2	覆土	土師器甕	底径（6.7）	にぶい橙色	微細な金雲母	胴部外面ヘラ削り（横・斜め）、内面ナデ。底部ヘラ削り	
142	3	覆土	土師器甑		橙色	雲母、砂粒、小石		底部に複数孔、木葉痕
142	4	覆土	土師器甕	現存高 17.0	橙色	赤色粒子、砂粒、小石	胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	

18 号住居址

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
143	1	覆土	土師器坏	底径（11.7）	にぶい橙色	雲母、赤色・白色粒子	体部ロクロなで。底部回転ヘラ削り	
143	2	覆土	土師器甕	底径 8.0	褐灰色	金雲母、砂粒	胴部内外面ナデ	底部に木葉痕。相模型

19 号住居址

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
144	1	覆土	土師器坏	口径 14.2 器高（5.4）	橙色	砂粒、小石	口縁横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	底部欠損

20 号住居址

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
114	1	床面	壺		橙色	砂粒、小石	複合口縁。羽状・結節縄文地に縦の棒状浮文	
114	2	床面	高坏	口径 15.4 器高 8.4 底径 13.7	明赤褐色	砂粒、微細な雲母	坏内外磨き（外面縦、内面放射状）。脚外面縦磨き、内面ナデ	脚の一部を欠く

21 号住居址

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
147	1	覆土	須恵器坏蓋	口径（15.7）	灰白色	砂粒	天井部回転ヘラ削り	32 号住居と接合
147	2	覆土	須恵器坏蓋	口径（16.5）	灰色	砂粒	天井部回転ヘラ削り	
147	3	覆土	須恵器坏	底径 5.9	灰白色	砂粒	底部回転糸切り	内面黒色
147	4	覆土	須恵器鉢	底径（13.5）	灰白色	砂粒	底部回転ヘラ削り	
147	5	覆土	土師器甕		灰褐色	金･黒雲母、石英、砂粒	口縁横ナデ、横ハケ。胴部ハケ（外面縦、内面横）	甲斐型
147	6	カマド火床焼土	土師器甕		にぶい赤褐色	金・黒雲母、砂粒	胴部ハケ（外面縦、内面横）	甲斐型
147	7	床面	須恵器甕		灰色	砂粒	外面叩き	
147	8	カマド火床焼土	須恵器甕		黄灰色	砂粒	外面叩き	
147	9	覆土下層	須恵器瓶		灰白色	白色粒子		
147	10	覆土下層	灰釉陶器瓶		灰白色	白色粒子	外面に施釉（オリーブ色）	
147	11	覆土下層	灰釉陶器瓶		灰白色	白色粒子、砂粒	外面に施釉（オリーブ色）	
147	12	覆土	鉄滓	長さ 5.4　幅 4.7　厚さ 1.5　重さ 51.5 g				

22 号住居址

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
149	1	カマド火床	土師器坏	口径（12.9）器高（4.6）底径（3.8）	明赤褐色	赤色粒子、砂粒	体部外面、底部ヘラ削り	甲斐型
149	2	床面	土師器坏	口径（12.6）器高（4.2）底径（5.1）	明赤褐色	赤色粒子、雲母	体部外面ヘラ削り	甲斐型
149	3	床面、カマド覆土	土師器坏	底径（5.8）	明赤褐色	赤色粒子、雲母、砂粒	体部外面ヘラ削り。底部回転糸切り後、周囲を手持ちヘラ削り	甲斐型
150	4	カマド火床	須恵器坏	口径 13.6　器高 4.3 底径 5.8	にぶい黄橙色	赤色粒子、砂粒、小石	底部回転糸切り	ほぼ完形。支脚にかぶさる
150	5	床面	須恵器坏	口径 12.6　器高 4.7 底径 4.9	灰色	黒色粒子、雲母、砂粒、小石	底部回転糸切り	口縁の一部を欠く
150	6	ピット内	須恵器坏	底径 5.5	灰色	砂粒、小石	底部回転糸切り	
150	7	覆土、床面	須恵器坏		灰色	砂粒、小石		
150	8	床面	須恵器坏		灰色	砂粒		
150	9	床面	須恵器坏	口径（14.5）	灰色	砂粒、小石		19 号住居と接合
150	10	覆土	須恵器高台付瓶	底径 10.0	灰白色	砂粒		底部内面に釉（暗オリーブ色）
150	11	-	灰釉陶器高台付埦	口径 14.6　器高 4.2 底径 6.5	灰白色	砂粒	口縁内外面に施釉。底部回転糸切り	ほぼ完形
150	12	カマド覆土	土師器甕	口径 29.3　胴最大径 25.0	にぶい赤褐色	金･黒雲母、石英、砂粒	口縁横ナデ、横ハケ。胴部ハケ（外面縦、内面横）	胴部外面に粘土付着。甲斐型
150	13	カマド火床	土師器甕	底径 8.9	にぶい赤褐色	金・黒雲母、赤色粒子、石英、砂粒	胴部ハケ（外面縦、内面横）	底部に木葉痕。甲斐型。支脚にかぶさる
150	14	カマド覆土	土師器甕	器高（5.0）底径（9.2）	灰褐色	金・黒雲母、赤色粒子、石英、砂粒	胴部ハケ（外面縦、内面横）	底部に木葉痕。白色粘土付着。甲斐型
150	15	カマド覆土、床面	土師器甕	底径（9.1）	赤褐色	金･黒雲母、石英、砂粒	胴部ハケ（外面縦、内面横・斜め）	白色粘土付着。甲斐型
150	16	カマド覆土	土師器甕	底径 7.1	にぶい黄橙色	砂粒	胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	
150	17	床面	須恵器甕		灰色	砂粒、小石	外面叩き	
150	18	覆土	鉄滓	長さ 6.5　幅 4.8　厚さ 2.4　重さ 74.5 g				

23 号住居址

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
153	1	覆土	土師器坏		橙色	赤色粒子、砂粒	口縁横ナデ。体部外面指頭押圧	内面黒色。南武蔵型

153	2	覆土上層	須恵器坏蓋	口径 11.4　器高（2.3）	灰色	白色粒子	天井部回転ヘラ削り	遺構外と接合
153	3	覆土上層	須恵器坏		灰色	砂粒		
153	4	覆土	須恵器高台付埦	口径 15.5 器高 6.2 底径 6.0	灰色	雲母、石英、砂粒、小石	底部回転糸切り	南多摩窯・Ｇ５窯式
153	5	カマド覆土	灰釉陶器高台付皿	口径 14.0　器高 3.2 底径 6.8	灰白色	砂粒	体部内外に施釉（オリーブ黄色）。底部回転糸切り後ナデ	猿投窯・折戸 53 号２型式
153	6	カマド脇覆土	緑釉陶器埦		素地：灰白色	目立つ含有物なし	内外面に施釉（緑色）	
154	7	覆土上層	土師器甕		灰褐色	金・黒雲母、赤色粒子、砂粒	口縁横ナデ、横ハケ。胴部ハケ（外面縦、内面横）	甲斐型
154	8	覆土	土師器甕		灰褐色	金雲母、石英、砂粒	口縁横ナデ、横ハケ。胴部ハケ（外面縦、内面横）	甲斐型
154	9	カマド右袖内	土師器甕				口縁横ナデ、横ハケ。胴部ハケ（外面縦、内面横）	甲斐型
154	10	カマド火床焼土、覆土	土師器甕		赤褐色	金･黒雲母、石英、砂粒	口縁横ナデ、横ハケ。胴部ハケ（外面縦、内面横）	甲斐型
154	11	覆土	土師器羽釜		赤褐色	金･黒雲母、砂粒、小石	外面縦ハケ。鍔横ナデ。胴ハケ（外面縦、内面横）	甲斐型
154	12	覆土	土師器置きカマド		にぶい赤褐色	金・黒雲母、砂粒	胴部ハケ（外面縦、内面横）	甲斐型
155	13	カマド火床焼土	土師器甕	口径（23.1）	にぶい黄橙色	雲母、石英、砂粒	胴部外面ヘラ削り（上半横・斜め、下半縦）。内面ヘラナデ	
155	14	カマド脇覆土	土師器甕	口径 10.5	灰黄褐色	雲母、白色粒子	胴部外面ヘラ削り（上半横、下半縦）。内面ヘラナデ	内面黒色
155	15	覆土上層	土師器台付甕		橙色	砂粒	脚部外面ヘラ削り、内面ナデ	
155	16	覆土	須恵器甕		外面灰黄色内面灰色	雲母、白色粒子	外面叩き	
155	17	覆土上層	須恵器甕		にぶい赤褐色	白色粒子、砂粒	外面叩き。内面ナデ	酸化焔焼成
155	18	覆土	須恵器甕		外面灰黄色内面灰色	砂粒	外面叩き	内面磨滅。割れ口一様に朱墨状の染み
155	19	覆土	砥石	最厚 0.8　幅 4.4				
155	20	覆土	鉄製釘	残存長 3.9　幅 0.5　重さ 2.3 ｇ				
155	21	覆土	鉄製鎹	長さ 2.5　幅 0.6　重さ 2.5 ｇ				
155	22	覆土	鉄滓	片面は比較的平滑で、粒状滓が付着する。長さ 4.4　幅 4.8　厚さ 2.4　重さ 27.6 ｇ				

24 号住居址

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
157	1	覆土	土師器坏	口径（13.0）	にぶい橙色	金雲母、赤色粒子、砂粒	口縁横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ナデ	
157	2	覆土	土師器甕		にぶい橙色	雲母、砂粒	口縁横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	
157	3	覆土	土師器甕	底径 7.8	にぶい橙色	金雲母、砂粒、小石	胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	底部に木葉痕
157	4	覆土	土師器甕	底径 7.8	橙色	金・黒雲母、砂粒	胴部内外面ナデ	底部に木葉痕。相模型
157	5	覆土	須恵器瓶		灰白色	目立つ含有物なし		肩部
157	6	覆土、遺構外	須恵器甕	頸部径（15.0）	赤褐色	雲母、砂粒	外面叩き。内面ナデ（上半縦、下半横）	肩部に釉。酸化焔焼成

25 号住居址

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
162	1	覆土	土師器坏	口径 11.8　器高 4.9	橙色	砂粒、小石	口縁横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	1/2 残
162	2	覆土	土師器坏	口径（14.4）器高 4.4	橙色	赤色粒子、砂粒	口縁横ナデ。体部外面ヘラ削り	
162	3	覆土	土師器坏	口径（14.0）	橙色	雲母、赤色粒子、砂粒	口縁横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ヘラ磨き	
162	4	－	土師器坏	口径 13.0 器高 5.0	橙色	金雲母、砂粒、小石	口縁横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	

162	5	カマド覆土	土師器坏	口径（12.0）	にぶい橙色	赤色粒子、砂粒	口縁横ナデ。体部内面ヘラナデ	
162	6	カマド火床、床面	土師器坏	口径 12.0 器高 4.2	にぶい橙色	金雲母、赤色粒子、砂粒	口縁横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	
162	7	周溝覆土	土師器坏	口径（12.6）器高 3.6	にぶい橙色	金雲母、砂粒	口縁横ナデ。体部内面ナデ	
162	8	覆土	土師器坏	口径（11.0）器高 2.3	橙色	雲母、砂粒	口縁横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	
162	9	覆土	土師器坏	口径 11.6　器高 3.3	にぶい橙色	雲母、赤色粒子、砂粒	口縁横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ナデ	口縁内外、体部内面に赤彩。比企型坏
162	10	覆土、遺構外	須恵器坏蓋	口径 12.0　器高 3.0	灰色	白色粒子	天井部回転ヘラ削り	素地の気泡が膨れ、器形ゆがむ
162	11	覆土、遺構外	須恵器坏蓋	口径 13.8　器高 3.3	灰白色	白色粒子、砂粒	天井部回転ヘラ削り	
162	12	覆土	須恵器坏蓋		灰色	白色粒子		
162	13	覆土	須恵器坏蓋	口径 12.0　器高 2.9	灰色	白色粒子	天井部回転ヘラ削り	素地の気泡が膨れ、器形ゆがむ
162	14	壁際覆土	須恵器坏蓋	口径 10.6　器高 3.9	灰色	白色粒子、砂粒		素地の気泡が膨れ、器形ゆがむ。完形
162	15	覆土、遺構外	須恵器坏	口径（11.0）器高 3.4	灰色	白色粒子		素地の気泡が膨れ、器形ゆがむ
162	16	覆土	須恵器坏	口径 11.0　器高 3.5	灰色	白色粒子、砂粒		素地の気泡が破裂し、あばた状に剥落
162	17	覆土	須恵器坏	口径 11.5　器高 3.5	灰色	白色粒子、砂粒		素地の気泡が破裂し、あばた状に剥落
162	18	覆土	須恵器坏	口径（11.0）器高 3.5	灰色	白色粒子、砂粒		素地の気泡が破裂し、あばた状に剥落
162	19	覆土、遺構外	須恵器坏	口径 13.3　器高 4.0	灰白色	白色粒子、砂粒		口縁 1/2 欠損
162	20	－	須恵器坏		灰白色	白色粒子		
162	21	カマド火床焼土	土師器鉢		橙色	砂粒	口縁横ナデ。体部外面ヘラ削り	
162	22	覆土	土師器鉢		浅黄橙色	赤色粒子、砂粒	口縁横ナデ。体部外面ヘラ削り	
163	23	カマド火床焼土	土師器甕	口径（23.3）胴最大径（20.9）底径 8.0	橙色	金雲母、赤色粒子、砂粒	口縁横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	底部に木葉痕
163	24	覆土	土師器甕	口径 16.9	橙色	金・黒雲母	口縁横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	
163	25	－	土師器甕	底径 7.8	橙色	金・黒雲母、砂粒	胴部・底部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	
163	26	－	土師器甕	底径（8.0）	にぶい橙色	金雲母、赤色粒子、砂粒、小石	胴部外面ヘラ削り（横）、内面ヘラナデ	
164	27	覆土	土師器甕	口径 21.0 胴最大径（25.0）	橙色	赤色粒子、砂粒、小石	口縁横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	
164	28	覆土	土師器鉢	体部最大径（17.0） 底部 6.0	にぶい橙色	金雲母、赤色粒子、砂粒	口縁横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	
164	29	覆土	須恵器甕		灰白色	砂粒	外面叩き。内面同心円状の当て具痕	
164	30	カマド煙道覆土	須恵器甕		にぶい赤褐色	雲母、白色粒子、砂粒		底部。酸化焔焼成。混入の可能性あり
164	31	床面	鉄製刀子	長さ 14.7　刃部幅 1.1　刃部厚 0.5　重さ 14.1 g			茎部に木質残る。完形	
164	32	覆土上層	鉄製刀子	残存長 9.7　刃部幅 1.2　刃部厚 0.3　重さ 10.9 g				

26 号住居址

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
167	1	覆土上層 焼土上面	須恵器坏蓋	口径（15.5）	灰白色	白色粒子		
167	2	覆土上層 焼土上面	須恵器 高台付坏	底径（9.0）	灰白色	白色粒子		
167	3	カマド覆土	土師器甕	口径 18.3 胴最大径（19.8）	にぶい黄橙色	金雲母、赤色粒子、砂粒	口縁横ナデ。胴部外面ナデ、内面弱いハケ目	相模型
167	4	カマド煙道底面	土師器甕	口径 21.7	橙色	金雲母、赤色粒子、砂粒	口縁横ナデ。胴部内外面ナデ	相模型
167	5	覆土	土師器甕		にぶい橙色	白色粒子、砂粒	胴部内外面に細かなハケ目（外面縦、内面横）	
167	6	カマド覆土	土師器甕		灰黄褐	金・黒雲母、赤色粒子、砂粒	胴部内外面ナデ	底部に木葉痕。相模型
167	7	カマド煙道底面	土師器甕	底径 8.4	にぶい橙色	金雲母、赤色・白色粒子、砂粒	胴部内外面ナデ	底部に木葉痕。相模型

167	8	カマド煙道底面	土師器甕	底径 8.0	灰黄褐色	金雲母、砂粒、小石	胴部内外面ナデ	底部に木葉痕。相模型
167	9	覆土	土師器甕		灰黄褐色	金雲母、砂粒	胴部内外面ナデ	底部に木葉痕。相模型
167	10	覆土上層焼土上面	土師器甕	底径 9.0	にぶい橙色	金雲母、砂粒、小石	胴部内外面ナデ	底部に木葉痕。相模型
167	11	覆土上層	須恵器甕		灰白色	白色粒子、砂粒		

27 号住居址

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
169	1	覆土、遺構外	須恵器坏蓋	口径（15.5）	灰白色	白色粒子		外面に釉
169	2	覆土	須恵器坏	口径（13.0）	灰色	白色粒子		
169	3	カマド覆土	須恵器坏	口径（13.9）	灰色	白色粒子		1 号土器集中部と接合
169	4	覆土	須恵器高台付坏	底径 10.3	灰色	白色粒子	底部回転ヘラ削り	底部突出
169	5	床面焼土	土師器埦		橙色	雲母、赤色粒子、砂粒		
169	6	覆土	土師器甕	口径（16.8）	橙色	金・黒雲母、白色粒子、砂粒	口縁横ナデ。胴部外面ヘラ削り後、ヘラ磨き。内面ヘラナデ	1 号土器集中部と接合
170	7	覆土、遺構外	土師器甕	口径（19.4）胴径 27.0 器高 32.4 底径 9.0	橙色	赤色粒子、砂粒、小石	口縁横ナデ。胴部外面ヘラ削り後、ヘラ磨き。内面ナデ	
170	8	覆土	土師器甕	口径（23.0）	橙色	雲母、白色粒子、砂粒	口縁横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ナデ	
170	9	覆土	土師器甕		にぶい黄橙色	雲母、白色・赤色粒子、砂粒	口縁横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ナデ	
170	10	覆土	土師器甕	口径 24.6 胴最大径 20.5	橙色	金雲母、白色粒子、砂粒	口縁横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	
170	11	覆土	土師器甕	口径（21.2）	にぶい褐色	赤色粒子、砂粒、小石	口縁横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	
171	12	覆土、遺構外	土師器甕		にぶい褐色	赤色・白色粒子	胴部外面ヘラ削り（斜め）、内面ヘラナデ	
171	13	覆土	土師器甕	底径 10.0	にぶい褐色	金雲母、赤色粒子、砂粒	胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	底部に木葉痕
171	14	覆土	須恵器甕	口径（12.2）	灰色	白色粒子		口頸・肩部に釉
171	15	覆土	須恵器甕		灰色	白色粒子	外面叩き。内面同心円状の当て具痕	外面に釉
171	16	覆土	須恵器瓶		灰色	白色粒子		
171	17	覆土、遺構外	須恵器瓶		灰色	白色粒子		
171	18	覆土	銅製飾金具	直径 2.2　重さ 2.8 g				

28 号住居址

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
173	1	床面	土師器坏	口径 15.5　器高 3.9 底径 11.8	にぶい橙色	雲母、赤色・白色粒子、砂粒	体部内外ヘラ磨き。底部外面ヘラ削り後に磨き、内面磨き	口縁一部を欠く。口唇内面に沈線
173	2	床面	土師器坏	口径 15.5 器高 4.1 底径 11.5	にぶい橙色	雲母、白色粒子、砂粒	1 と同じ。内面ラセン状磨き	口縁～体部の一部を欠く
173	3	床面、カマド火床	土師器甕	口径 19.0 胴径 16.5 器高 24.5 底径 8.6	にぶい橙色	金雲母、赤色・白色粒子、砂粒	口縁横ナデ。胴内外に弱いハケ目（外面縦、内面横・斜め）	底部に木葉痕。堀之内原タイプ

29 号住居址

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
174	1	床面	土師器坏	口径 12.3	にぶい橙色	赤色・白色粒子	体部外面ヘラ削り	墨書「大」
174	2	カマド覆土	土師器甕		赤褐色	金・黒雲母、砂粒	口縁横ナデ、横ハケ。胴部ハケ（外面縦、内面横）	

30 号住居址

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
178	1	覆土上層	土師器坏	口径 10.5　器高 3.9	橙色	赤色粒子、砂粒	口縁横ナデ。体部外面ヘラ削り後磨き、内面ナデ	1/2 残
178	2	覆土、カマド火床	土師器坏	口径（13.6）器高 5.2	橙色	雲母、赤色粒子、砂粒、小石	口縁横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ナデ	
178	4	覆土上層	須恵器坏蓋		灰色	白色粒子		
178	3	覆土	須恵器坏		灰黄色	白色粒子、砂粒	底部回転ヘラ削り	
178	5	覆土上層	土師器甕	口径（14.2）	橙色	金雲母、赤色粒子、砂粒	口縁横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	
178	6	覆土	土師器甕	口径 15.8	にぶい黄橙色	雲母、赤色粒子、砂粒	口縁横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	
178	7	覆土	土師器甕	口径（14.0）	灰黄褐色	雲母、砂粒	口縁横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	
178	8	覆土	土師器甕	口径（14.0）	橙色	金雲母、赤色粒子、砂粒	口縁横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ナデ	
178	9	覆土	土師器甕		にぶい橙色	雲母、赤色粒子、砂粒	口縁横ナデ。胴部外面ヘラ削り	
178	10	覆土	土師器甕		橙色	砂粒、小石	胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	
178	11	床面、カマド火床・袖	土師器甕		にぶい橙色	雲母、砂粒、小石	胴部外面ヘラ削り（横）、内面ヘラナデ	
178	12	覆土	土師器甕	底径 9.0	にぶい橙色	金・黒雲母、赤色粒子、砂粒	胴部外面ヘラ削り、内面ナデ	
178	13	覆土	須恵器瓶		灰色	白色粒子		内外面に釉
178	14	覆土	須恵器甕		灰白色	白色粒子	外面叩き。内面同心円状の当て具痕	
178	15	－	台石	片面に研磨痕が残る。長さ 11.2　幅 6.1　厚 4.0　重さ 335 g				
178	16	－	鉄鏃	残存長 10.0　鏃身幅 2.0　鏃身厚 0.3　重さ 11.2 g				

31 号住居址

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
181	1	（旧）床面	土師器坏	口径 12.0 器高 3.2 底径（6.0）	橙色	雲母、赤色粒子	ロクロナデ。底部回転糸切り	口縁上端の一部にタール状付着物
181	2	（新）カマド覆土	須恵器甕		灰色	白色粒子、砂粒、小石	外面叩き。内面半円状の当て具痕	外面から割れ口に墨痕状の染み
181	3	（新）覆土	須恵器甕		暗灰色	白色粒子、石英、砂粒、小石	内面ナデ	
181	4	（新）床面	鉄製刀子	完形。長さ 18.3　刃部幅 1.1　最厚 0.4　重さ 17.1g				

32 号住居址

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
184	1	覆土	土師器坏		にぶい褐色	雲母、赤色粒子	ロクロなで。体部外面ヘラ削り	甲斐型
184	2	覆土、遺構外	須恵器坏	底径 5.2	褐灰色	雲母、白色粒子、砂粒	底部回転糸切り	酸化焔焼成
184	3	覆土	灰釉陶器高台付皿	口径 15.0 器高 3.4 底径 6.4	灰白色	白色粒子	体部内面に施釉。底部回転糸切り	釉（灰オリーブ色）
184	4	覆土	灰釉陶器高台付坏	口径（16.5）器高 4.5 底径 8.0	灰白色	白色粒子	体部内外面に施釉。底部回転糸切り後、周囲を回転ヘラ削り	釉（灰オリーブ色）
184	5	床面	灰釉陶器高台付埦	口径 17.0　器高 5.5 底径 8.0	灰白色	白色粒子	体部内外面に施釉（灰白色）。体部下端～底部回転ヘラ削り	口縁一部を欠く。猿投窯・黒笹 90 号窯式
184	6	覆土、遺構外	土師器甕	口径（15.1）器高 14.8　底径 6.7	にぶい赤褐色	金雲母、石英、砂粒	口縁横ナデ、横ハケ。胴部外面ハケ、内面ヘラナデ	底部に木葉痕。甲斐型
184	7	カマド煙道～火床覆土	土師器甕	口径（31.1）	にぶい赤褐色	金・黒雲母、石英、砂粒	口縁横ナデ、横ハケ。胴部ハケ（外面縦、内面横）	2 号土器集中部と接合。甲斐型
185	8	覆土、床面	土師器甕	口径（30.9）	灰褐色	金・黒雲母、赤色粒子、石英、砂粒	口縁横ナデ、横ハケ。胴部ハケ（外面縦、内面横）	2 号土器集中部と接合。甲斐型
185	9	覆土、遺構外	土師器甕	口径（34.9）	灰褐色	金・黒雲母、石英、砂粒	口縁横ナデ、横ハケ。胴部ハケ（外面縦、内面横）	2 号土器集中部と接合。甲斐型
185	10	カマド火床覆土	土師器鉢	口径（37.2）	にぶい赤褐色	金・黒雲母、石英、砂粒	口縁横ナデ、横ハケ。胴部ハケ（外面縦、内面横）	甲斐型
186	11	覆土、遺構外	土師器甕	底径 8.4	にぶい赤褐色	金・黒雲母、石英、砂粒、小石	胴部ハケ（外面縦、内面横）	2 号土器集中部と接合。木葉痕。甲斐型

186	12	覆土、遺構外	土師器台付甕	底径 9.3	橙色	雲母、砂粒	脚部横ナデ	2 号土器集中部と接合。相模型
186	13	覆土、遺構外	須恵器甕		灰色	白色粒子、石英、砂粒、小石		肩部に釉
186	14	覆土、遺構外	須恵器甕	残存高 26.5 底径 (14.0)	暗灰色、灰色	白色粒子、小石	外面叩き。内面上半に当て具痕、下半ナデ	肩部に釉
186	15	床面	鉄製焼印	完存。「山」銘。　全長 20cm　印面は縦 3.0cm、横 3.5cm、重さ 95 g				
186	16	床下覆土	鉄製釘	残存長 2.1cm 幅 0.4cm 重さ 2.4g				

34 号住居址

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
116	1	床面	土師器小形鉢	口径 (10.3) 器高 7.3 底径 6.0	にぶい橙色	砂粒	口縁横ナデ。胴外面ハケ目、内面ヘラナデ。底部未調整	1/3 残存
116	2	覆土壁際	土師器壷	残存高 3.5 胴残存径 14.2	にぶい橙色	小石、砂粒	胴外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ	
116	3	床面	石槌	長さ 11.5 幅 9.0 厚さ 7.0 重さ 950g				

2 号掘立柱建物址

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
210	1	ピット（P2）覆土	土師器甕		にぶい橙色	砂粒	胴部外面ヘラ削り後に磨き、内面ヘラナデ	

3 号掘立柱建物址

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
210	2	ピット（P2）覆土	土師器坏	口径 (13.8)	にぶい橙色	金雲母、赤色粒子、砂粒	口縁横ナデ。体部外面ヘラ削り	

2 号土坑

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
210	3	覆土	須恵器高台付坏		灰色	砂粒		

5 号土坑

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
210	4	覆土、遺構外	灰釉陶器埦		灰白色	白色粒子、砂粒	体部内外面に施釉（灰白色）	

7 号土坑

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
210	5	覆土	須恵器高台付坏	底径 5.2	灰色、にぶい黄橙色	白色・赤色粒子	底部回転糸切り	

14 号土坑

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
210	6	覆土	須恵器甕		灰色	目立つ含有物なし		外面に釉

23 号土坑

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
210	7	覆土	土師器甕		にぶい褐色	雲母、砂粒	胴部外面ヘラ削り	

26 号土坑

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
210	8	覆土	須恵器甕		灰色	白色粒子	外面叩き	

82 号土坑

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
210	9	覆土	土師器甕		にぶい黄橙色	赤色・白色粒子、微細な雲母	胴部外面ヘラ削り（横）、内面ナデ	

83 号土坑

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
210	10	覆土	土師器甕		にぶい赤褐色	金・黒雲母、砂粒	胴部ハケ（外面縦、内面横）	甲斐型

93 号土坑

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
210	11	覆土、遺構外	須恵器瓶		灰色	微量の白色粒子		外面に釉

102 号土坑

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
210	12	覆土	須恵器蓋		灰白色	目立つ含有物なし		

105 号土坑

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
210	13	覆土、遺構外	須恵器瓶		灰色	微量の白色粒子		107 号土坑と接合

115 号土坑

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
210	14	壁際覆土	土師器皿	口径（12.9）器高 2.5 底径 4.2	橙色	雲母、赤色粒子、砂粒	底部回転糸切り後に手持ちヘラ削り	内面に 15 が重なって出土
210	15	壁際覆土	土師器坏	底径 4.8	橙色	雲母、赤色粒子、砂粒	底部回転糸切り	

1 号土器集中部

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
211	1	覆土	土師器坏	口径（13.2）器高 4.4	橙色	雲母、白色粒子	口縁横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	

2 号土器集中部

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
212	1	覆土	土師器坏	口径（14.8）器高 5.5 底径（5.4）	橙色	雲母、石英、赤色粒子	体部・底部外面手持ちヘラ削り	内面黒色。甲斐型
212	2	覆土	灰釉陶器埦		灰白色	白色粒子、砂粒	体部内外面に施釉（灰白色）	
212	3	覆土	須恵器坏	口径（14.8）器高 4.7 底径 5.2	灰色、にぶい橙色	雲母、白色粒子、砂粒	底部回転糸切り	酸化焔焼成気味。内面タール状付着物。32 号住と接合
212	4	覆土	土師器甕	底径（9.9）	にぶい赤褐色	金・黒雲母、石英、砂粒	胴部ハケ（外面縦、内面横）	底部に木葉痕。甲斐型
212	5	覆土	土師器甕	口径（33.6）	灰褐色	金・黒雲母、石英、砂粒	口縁横ナデ、横ハケ。胴部ハケ（外面縦、内面横）	甲斐型
212	6	覆土	土師器甕		にぶい赤褐色	金・黒雲母、石英、砂粒	口縁横ナデ、横ハケ。胴部ハケ（外面縦、内面横）	甲斐型
212	7	覆土	土師器甕		にぶい赤褐色	金雲母、石英、砂粒	口縁横ナデ、横ハケ。胴部ハケ（外面縦、内面横）	甲斐型

遺構外出土遺物

図	No.	出土位置	種別	法量（cm）	色調	胎土	調整	備考
213	1	T -26 区 Ⅲ層	土師器坏	口径 (11.3) 現存高 3.7	橙色	砂粒	口縁横ナデ。体部外面ヘラ削り	
213	2	-	土師器坏	口径 (13.9) 現存高 4.2		金雲母、砂粒	口縁横ナデ。体部外面ヘラ削り	
213	3	2 D -19 区	土師器坏	口径 (11.7) 器高 3.5 底径 5.4		微細な雲母、赤色粒子	ロクロ横ナデ。底部回転糸切り	
213	4	S -28 区	土師器坏	底径 4.1		微細な雲母、赤色粒子	体部下半・底部手持ちヘラ削り	甲斐型
213	5	U -24 区	須恵器坏蓋	口径 (12.0) 器高 2.5	灰色	白色粒子	天井部回転ヘラ削り	素地の気泡が膨張・破裂し、あばた状に剥落
213	6	U -25 区 Ⅲ層	須恵器坏蓋		灰白色	白色粒子	天井部回転ヘラ削り	外面に釉（灰オリーブ色）
213	7	-	須恵器坏蓋		灰色	白色粒子	天井部回転ヘラ削り	
213	8	-	須恵器坏蓋		灰色	白色粒子	天井部回転ヘラ削り	外面一部に釉
213	9	45 号 トレンチ	須恵器坏	口径 13.0 器高 3.7 底径 5.0	灰色	白色粒子、砂粒	底部回転糸切り	体部外面に墨書「大」
213	10	V -16 区	須恵器坏	口径 (12.2) 器高 4.3 底径 5.3	灰白色	白色粒子、砂粒	底部回転糸切り	
213	11	Z -23 区	須恵器坏	底径 5.2	にぶい赤褐色	白色粒子、砂粒	底部回転糸切り	酸化焔焼成
213	12	-	須恵器坏	底径 6.0	灰黄褐色	白色粒子、砂粒	底部回転糸切り	
213	13	-	須恵器坏	底径 5.7	灰色	白色粒子、砂粒	底部回転糸切り	
213	14	U -21 区	須恵器坏	底径 5.2	灰白色	白色粒子、砂粒	底部回転糸切り	
213	15	-	須恵器坏	底径 5.5	灰褐色	雲母、白色・赤色粒子、砂粒	底部回転糸切り	酸化焔焼成気味
213	16	28 ライン 以北	須恵器坏	底径 5.5	灰色	白色粒子、砂粒、小石	底部回転糸切り	
213	17	-	須恵器坏	底径 5.5	灰色	雲母、白色粒子、砂粒	底部回転糸切り	
213	18	U -26 区 Ⅲ層	須恵器 高台付坏	口径 (13.4) 器高 3.6 底径 (9.8)	灰色	目立つ含有物なし		
213	19	2 C -21 区	須恵器 高台付坏	底径 (6.5)	灰白色	目立つ含有物なし		
213	20	S -29 区	須恵器 高台付坏	底径 (10.0)	灰黄褐色	白色粒子、砂粒	底部回転ヘラ削り	
213	21	-	須恵器 高台付埦	底径 7.1	灰色	白色粒子、砂粒	底部回転糸切り	
213	22	Z -23 区	須恵器 高台付坏	底径 (6.6)	灰色	白色粒子、雲母		
214	23	U -26 区 Ⅲ層	須恵器皿	口径 (14.4)	灰色	白色粒子		
214	24	-	灰釉陶器埦		灰白色	目立つ含有物なし	体部内外面に施釉（灰白色）	
214	25	U -25 区	土師器甕		橙色	砂粒	口縁横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	
214	26	T -5 区	土師器甕	底径 (8.4)	にぶい橙色	金雲母、砂粒	胴部・底部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	
214	27	T -5 区	土師器甕	底径 (10.0)	橙色	雲母、砂粒	胴部外面ヘラ削り	内面あばた状に剥落。底部に木葉痕
214	28	Z -23 区	土師器甕		にぶい橙色	黒雲母、砂粒、小石	口縁横ナデ。体部外面ヘラ削り	
214	29	W -23・24 区	土師器 台付甕		にぶい橙色	砂粒	脚部外面ヘラ削り	
214	30	S -28 区 Ⅳ層	土師器甕		にぶい赤褐色	金雲母、石英、砂粒	口縁横ナデ、横ハケ。胴部ハケ（外面縦、内面横・斜め）	甲斐型
214	31	Z -23 区	土師器甕		灰褐色	金雲母、石英、砂粒	口縁横ナデ、横ハケ。胴部ハケ（外面縦、内面斜め）	甲斐型
214	32	2 B -23 区	土師器羽釜		灰褐色	金・黒雲母、石英、砂粒	鍔部横ナデ。胴部内面横ハケ	甲斐型
214	33	W -23・24 区 U -26 区Ⅳ層	土師器 置きカマド		にぶい赤褐色	金雲母、石英、砂粒	胴部ハケ（外面縦、内面斜め）	甲斐型
214	34	第Ⅴ次調査 第Ⅳ層	須恵器甕		灰色	微量の白色粒子		
214	35	2 A -22 区	須恵器甕		灰色	白色粒子		外面に釉
214	36	T -26 区Ⅳ層 T -27 区Ⅲ層	須恵器甕	頸部径 (16.0)	灰白色	微量の白色粒子	肩部外面叩き、内面同心円状の当て具痕	

215	37	T −27 区 Ⅲ層	須恵器甕		暗灰色	白色粒子		肩部に釉
215	38	R −29 区 S −29 区	須恵器甕		灰色	白色粒子	肩部外面叩き、内面同心円状の当て具痕	肩部に釉
215	39	J −30 区	須恵器甕		灰色	微量の白色粒子	胴部外面叩き。内面上部同心円状の当て具痕、下部ヘラナデ	
215	40	Q −28 区Ⅲ層 R −28 区	須恵器甕		灰白色	目立つ含有物なし	胴部外面叩き	素地の気泡が膨張・破裂し、あばた状に剥落
216	41	U−21 区	須恵器甕		灰色	微量の砂粒	胴部外面叩き。内面同心円状の当て具痕	ワラジムシ圧痕。転用硯
216	42	25 号住居 周辺	須恵器甕		灰色	目立つ含有物なし	胴部外面叩き	素地の気泡が膨張・破裂し、あばた状に剥落
216	43	S −25 区	須恵器鉢	底径（6.5）	灰色	白色粒子	体部下半・底部回転ヘラ削り	
216	44	R −27 区 Ⅳ層	須恵器 ハソウ		灰白色	目立つ含有物なし		
216	45	T −27 区 Ⅳ層	鉄製刀子	直角に折れ曲がり、刃先が欠損。残存長 14.7　刃部幅 1.3　刃部厚 0.3　重さ 13.5 g				
216	46	R −29 区 Ⅲ層	鉄製刀子	刃部。残存長 7.0　刃部幅 0.9　刃部厚 0.3　重さ 5.4 g				
216	47	R −27 区 Ⅲ層	鉄鏃	残存長 7.0　鏃身幅 0.7　鏃身厚 0.3　重さ 4.5 g				
216	48	Q −29 区 Ⅲ層	鉄鏃	残存長 11.1　鏃身幅 2.0　鏃身厚 0.3　重さ 13.3 g				
216	49	Q −30 区 Ⅲ層	鉄鏃	長さ 8.6　鏃身幅 3.3　鏃身厚 0.3　重さ 14.9 g				
216	50	2 B −18 区 Ⅳ層	鉄製釘	残存長 3.0　幅 0.4　重さ 1.6 g				
216	51	−	鉄製釘	長さ 4.4　幅 0.5　重さ 3.8 g				
216	52	2 A −22 区 Ⅳ層	鉄製品 器種不明	薄い板状で、一端が屈折する。長さ 6.9　幅 2.5　厚さ 0.5　重さ 13.5 g				
216	53	Z −23 区 Ⅳ層	鉄製品 器種不明	長さ 2.8　幅 2.1　重さ 3.8 g				
216	54	W −23・24 区Ⅳ層	鉄製品 連結金具	長さ 8.4　幅 0.6　重さ 23.9 g				
216	55	Q −29 区	鉄滓	片面は波状を呈する。長さ 6.4　幅 3.5　厚さ 2.4　重さ 56.3 g				

第Ⅳ章　まとめ

狐原遺跡で実施した一連の本調査によって、縄文時代、弥生時代後期から古墳時代前期、古墳時代後期から奈良・平安時代の遺構や遺物が検出された。各時代の成果を概述し、本書のまとめとしたい。

第１節　縄文時代

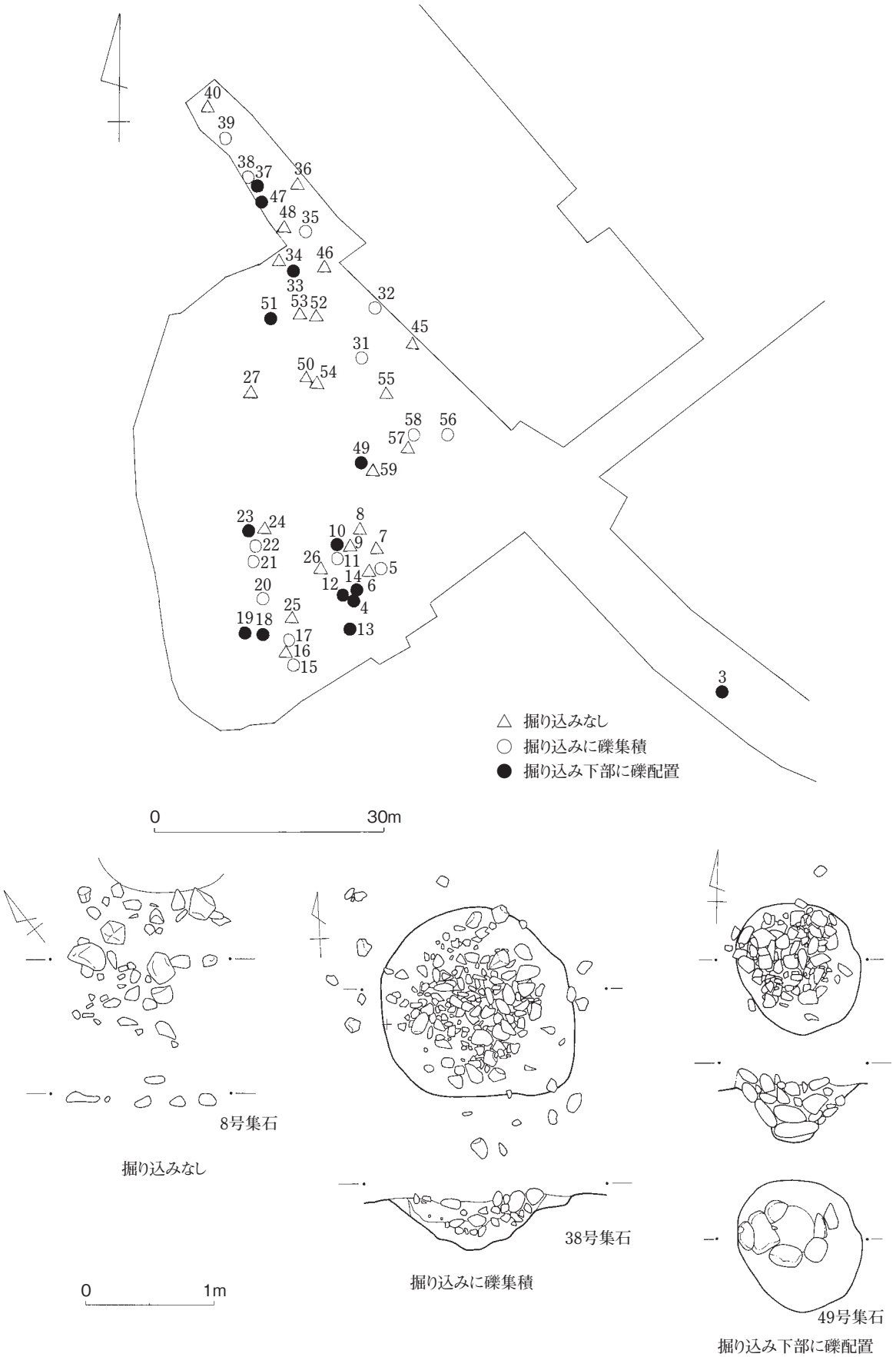
狐原遺跡では昭和 48 年分布調査や平成 6 年試掘調査で縄文中期の集落址が推測されていたが、本調査の結果、上段で中期後半の竪穴住居址 8 軒がまとまって検出され、下段で中期末の敷石住居址 1 軒や、早期から中期中葉の間で捉えられる集石群が広範囲に検出された。

竪穴住居址は概ね曽利Ⅱ式期からⅢ式期に位置付けられる。住居には主軸方向や埋甕位置に共通性が見られる一方、竪穴規模に大小があり、大きな住居には、炉の奥に石柱・石壇を設けた 6 号住居址や、出入口部の埋甕に立石を伴う 17 号住居址など特有の付属施設が見られた。遺構内の遺物は覆土を中心に多く、17 号住居址覆土上層に見られた配石状の礫分布と併せて、廃絶後の竪穴を意識した土地利用が継続して行われていたことが推測されるとともに、さらに多くの住居が未調査区に存在する可能性が強い。炉と奥壁の間を利用した事例として、黒曜石製の楔型石器や剥片がまとまって出土した 5 号住居址や石柱・石壇を設けた 6 号住居址などがあり、いずれも磨製石斧を伴う点は興味深い。

敷石住居址は曽利Ⅴ式期に位置付けられる。竪穴住居群とは段丘崖を隔てた低い位置にあるが、主軸方向の同一性や時期的な関係から竪穴住居群との関連が考えられる。敷石住居の平面は柄鏡形を基調とし、柄部先端に門柱状と階段状の石を備え、前庭部に扇形の敷石が付属する特徴を持つ。遺構の確認時には柄部から主体部との接続部に敷石材と異なる礫岩が隙間なく詰められていたことや、主体部床面に集積された炭化材や非実用的な遺物（小形鉢・大形石斧）の存在から、住居廃絶に関わった火入れや封鎖等の儀礼的な行為が想像される。

集石は住居分布と異なる範囲で多数検出された。上段では段丘背後から東側の緩斜面地に 9 基が分布し、大半が掘り込みを持たない。下段の平坦地では 49 基がまとまって分布し、多種多様な形態が混在していた（第 217 図）。掘り込みを持つ集石は 27 基で、このうち壁面下部に比較的大きな礫を花弁状に配置したもの及び類するものは 13 基になる。47 号集石では花弁状配置に付随して帯状の礫分布が見られた。集石を構成する礫の多くが被熱・破損し、掘り込み覆土に炭化物や焼土を多く含んだ集石は 4 基あった。隣接する複数の集石間で濃密な接合関係が見られたことから（56・57・58 号）、集石が相互に関連性を持って機能していたケースも推定される。

土坑は上段で 4 基検出され、いずれも落し穴に分類される。1 号・2 号土坑は主軸方位を異にして隣接するため造営時期に差があるものと考えられる。3 号・4 号土坑は緩斜面に位置し、集石群の分布範囲と重なる。土坑の時期は不明だが、分布から曽利期の住居群に先行して造営されたものと推測される。遺物は遺構の分布域を中心に多数出土した。土器は早期中葉から後期前半に属し、とくに早期沈線文系・条痕文系、前期関山式・黒浜式・諸磯式、中期中葉（新道式・藤内式・井戸尻式期）、中期後葉から末葉（曽利式・加曽利Ｅ式）の土器が多数出土した。遺構外の土器分布は中期後半を除いて下段の集石群と概ね重なっており、早期条痕文系土器は下段の集石群と上段東側の緩斜面地（65 号集石の周辺）に二分された分布を示す。中期後半の土器は住居址とその周辺に分布域が移る傾向が見られた。石器は打製石斧・磨石類・礫器が多く出土した他、打製石斧や礫器の未成品と思われる礫も目立った。



第 217 図　縄文時代集石分布図（下段）

第 2 節　弥生時代後期から古墳時代前期

調査面積に比べて遺構や遺物は少なく、下段の平坦地に竪穴住居址 2 軒が偏在する。住居は古墳時代前期に比定され、数軒が散在する程度の小規模な集落を構成していたものと思われる。竪穴はいずれも同規模で隅丸方形を基調とする。34 号住居址では炉・柱穴の定型的な配置や床の硬化など、住居として長期間使用された様子がうかがえるが、20 号住居址は柱穴が不揃いで炉も不明瞭であり、床の硬化も見られない。このことから、両遺構には使用形態や期間に差異があった可能性が考えられる。

遺物はすべて住居出土だが、数は少なかった。古相を示す土器に弥生時代後期の南関東地方に分布する羽状縄文系土器（第 114 図 1）がある。他に、形状から甕形の可能性がある丸底壺（第 116 図 2）や半球状の坏部を持つ高坏、ハケ調整の小型鉢が出土した。

第 3 節　古墳時代後期から奈良・平安時代

(1) 遺構の概要

縄文時代と並び本遺跡の主体をなす時期である。遺構は竪穴住居址 24 軒、掘立柱建物址 10 棟、土坑 149 基、ピット 52 基、竪穴状遺構 1 基、焼土址 1 基、土器集中部 2 ヶ所、硬化面 1 ヶ所が発見された。遺構は調査区のほぼ全域に分布するが、段丘東側の緩斜面地は希薄となる。

竪穴住居址は出土遺物から 7 世紀から 10 世紀前半の間に位置付けられる。7 世紀代の住居址は 10 軒で、1 辺 5 ｍ～ 7 ｍ前後の大型住居が上・下段の平坦地にまとまって分布する。大型住居のカマド位置や主軸方位は北北東から北東方向の範囲に収まる傾向が見られる。出土遺物に銅製飾金具や鉄鏃・鉄製刀子があり、編物石と呼ばれる棒状の自然石が特徴的に出土した。8 世紀から 9 世紀前半の住居址は 7 軒で、上段と下段に散漫な分布を示す。竪穴規模は 1 辺 3 ｍ前後、4 ｍ前後、5 ｍ代に分けられ、カマドの位置や主軸方位は北東方向で一致する傾向が見られる。出土遺物に石製紡錘車や砥石がある。9 世紀末から 10 世紀前半の住居址は 6 軒で、下段の広範囲に分布する。竪穴規模は 1 辺 3 ｍ前後と 4 ｍ代に分けられ、カマドの位置や主軸方位は不定傾向である。出土遺物に「大」字の墨書土器、灰釉陶器、緑釉陶器、鉄製品（刀子・「山」字の焼印・釘・鎹）、鉄滓、砥石がある。

掘立柱建物址は竪穴住居址と同じ範囲に分布する。段丘下段の中央部では総柱式を含む大型建物 3 棟が古墳時代後期の大型竪穴住居に隣接して配置され、さらに背後の段丘崖に沿って大型建物 1 棟と小型建物 2 棟が並列する。段丘上段では小型建物 4 棟が不規則に分布し、相互に重複する例も見られる。これらの建物はすべて梁行 2 間で、主軸方位が北東方向でほぼ一致する傾向が見られる。建物群の成立時期は、柱穴の掘り込み面が 7 世紀後半の 25 号住居址より新しいこと及び 1 号～ 3 号掘立柱建物址の出土土器、さらに大型竪穴住居と主軸方位が異なることから、大型竪穴住居造営後の 7 世紀後半以降に求められる。建物の存続時期は、主軸方位や位置関係において奈良時代の竪穴住居との関連が考えられることから 8 世紀代までの間で捉えられる。

ピットは掘立柱建物址に近接あるいは重複して検出されており、建物址との関連がうかがえる。

土坑は調査区の広範囲で多数検出されたが、とくに上・下段の平坦部に集中する傾向が見られる。形態は平面円形でタライ状を呈するものと長楕円形や長方形を呈するものが多い。造営時期は竪穴住居址や掘立柱建物址と重なるものが多いと思われるが、円形土坑では平安時代の竪穴住居を切って構築されているものも多く、土坑の造営が長期間に渡って繰り返されたものと思われる。

(2) 出土土器

古墳時代後期から奈良・平安時代の土器を 4 時期に大別した（第 218・219 図）。

第Ⅰ期　7 世紀代

土師器はいわゆる鬼高式土器で、1・15・25・27 号住居址などに出土例がある。

土師器は坏・埦・鉢・高坏・甕・甑があり、ヘラ削りが多用される。坏は半球形や口縁が外反するものが多く、口縁と体部の境に稜を持つ坏は少ない。坏の口径は 10.5㎝～ 13㎝程までばらつきがある。最終段階の比企型坏（25 住 9）も見られる。埦は口径 16.5㎝の大型品（15 住 2）、鉢はヘルメット状（3 住 4）や平底（3 住 5、25 住 28）があり甕の転用も見られる（1 住 7）。高坏は半球形の坏部（19 住 1）や短く外反する脚部（1 住 6、15 住 8）が出土した。甕は長胴・胴張・球胴形及び小型甕があり、胴部外面は削り後にヘラ磨き調整が加えられるものがある（15 住 5、27 住 7）。

須恵器坏蓋は擬宝珠状つまみを持ち、かえりが付くものと付かないものがある。25 号住居址では共に出土した坏身と組み合う可能性があり、いずれも良品と不良品の違いが見られる。白色系の良品（2 住 6､25 住 11･19）は東海地方の湖西窯等からの搬入品と考えられるが､暗色系で発泡著しい不良品（25 住 13・16・17）は遠方から搬入したものと考えにくく在地産の可能性がある。ただし市内を含め近隣に須恵器窯は確認されていない。

本段階は小型甕や鉢の存在から概ね 7 世紀代に推定したが、25 号住居址の須恵器坏類が湖西窯編年第Ⅲ期第 2 小期から第 3 小期（後藤 1998）に相当することから、7 世紀中葉から後葉が本段階の時期を示す指標となる。

第Ⅱ期　8 世紀前葉～中葉

土師器に相模や南武蔵の影響が強く見られ、13・14・26・28 号住居址などに出土例がある。

土師器坏は盤状形態が主体となる。底部が弧状を呈するものは内外面にヘラ磨きが施され、赤色塗彩されたもの（13 住 5）や甲斐型坏の祖形と考えられるもの（14 住 4）がある。平底のものには南武蔵で見られる赤色塗彩の盤状坏（13 住 6 ～ 14）や体部外面下端をヘラ磨きして底部回転ヘラ削りを施したもの（14 住 1・2）、内外面にヘラ磨きを施し、みこみ部に螺旋状暗文を施したもの（28 住 1・2）、体部外面に周転状のヘラ削りを施した成立期の相模型坏（13 住 4）がある。口縁と体部の境に稜を持つ平底気味の坏（13 住 1・2）は赤色塗彩の盤状坏に伴うものと考えられ、相模に出土例がある（國平 1981）。

土師器甕は長胴・胴張・球胴形及び小型甕があり、ヘラ削りを多用するもの（13 住 23・27、14 住 8）とナデ・ハケ調整を施したものに大別される。後者は相模型が主体を占め（14 住 5、26 住 3・4）、「堀之内原タイプ」と呼ばれる都留郡独自の甕（28 住 3）も見られる。

須恵器坏蓋は小さなかえりを持つもの（26 住 1）と持たないもの（13 住 18）がある。坏は丸い底部を持つもの（13 住 20）や底部が突出気味となる高台付坏がある（13 住 19・21）。須恵器は東海地方からの搬入品と考えられ、坏類は湖西窯編年第Ⅳ期第 1 小期に相当する。

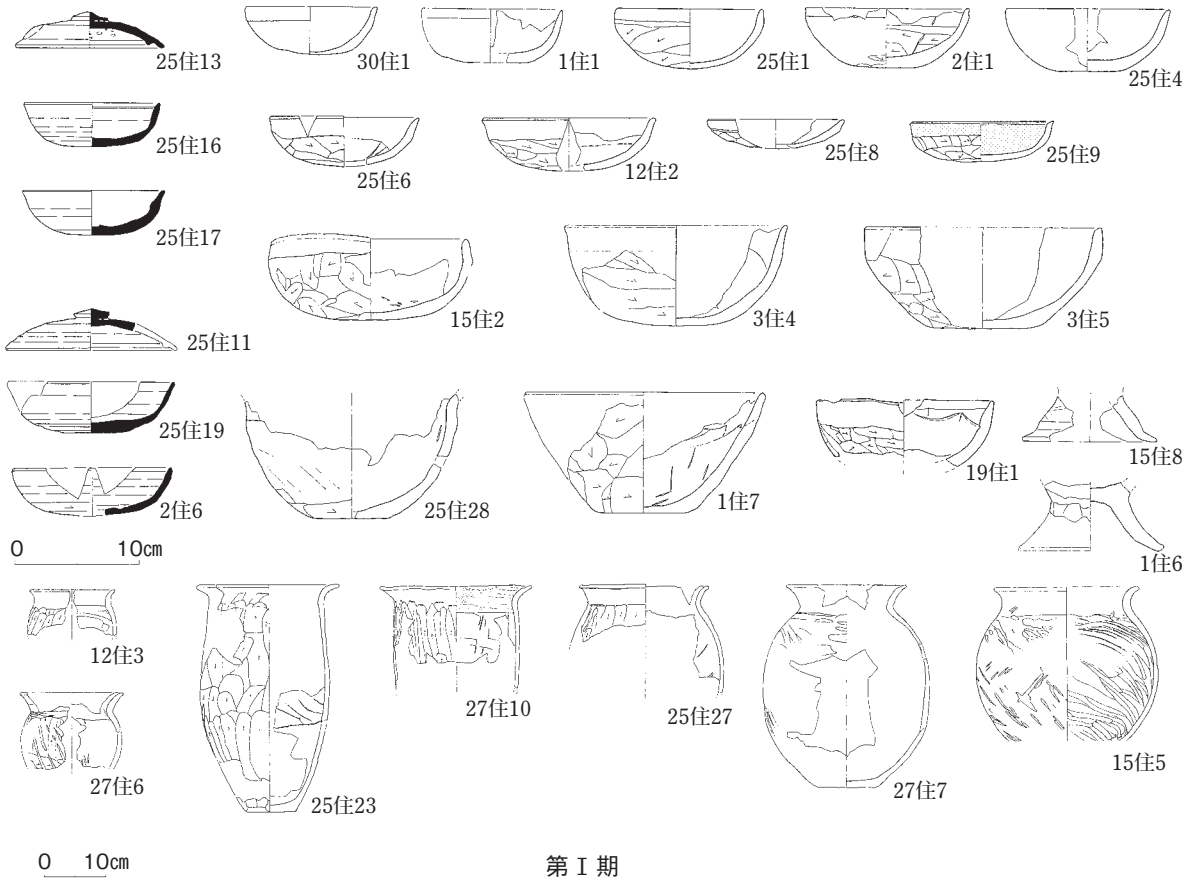
第Ⅲ期　8 世紀後葉～ 9 世紀前葉

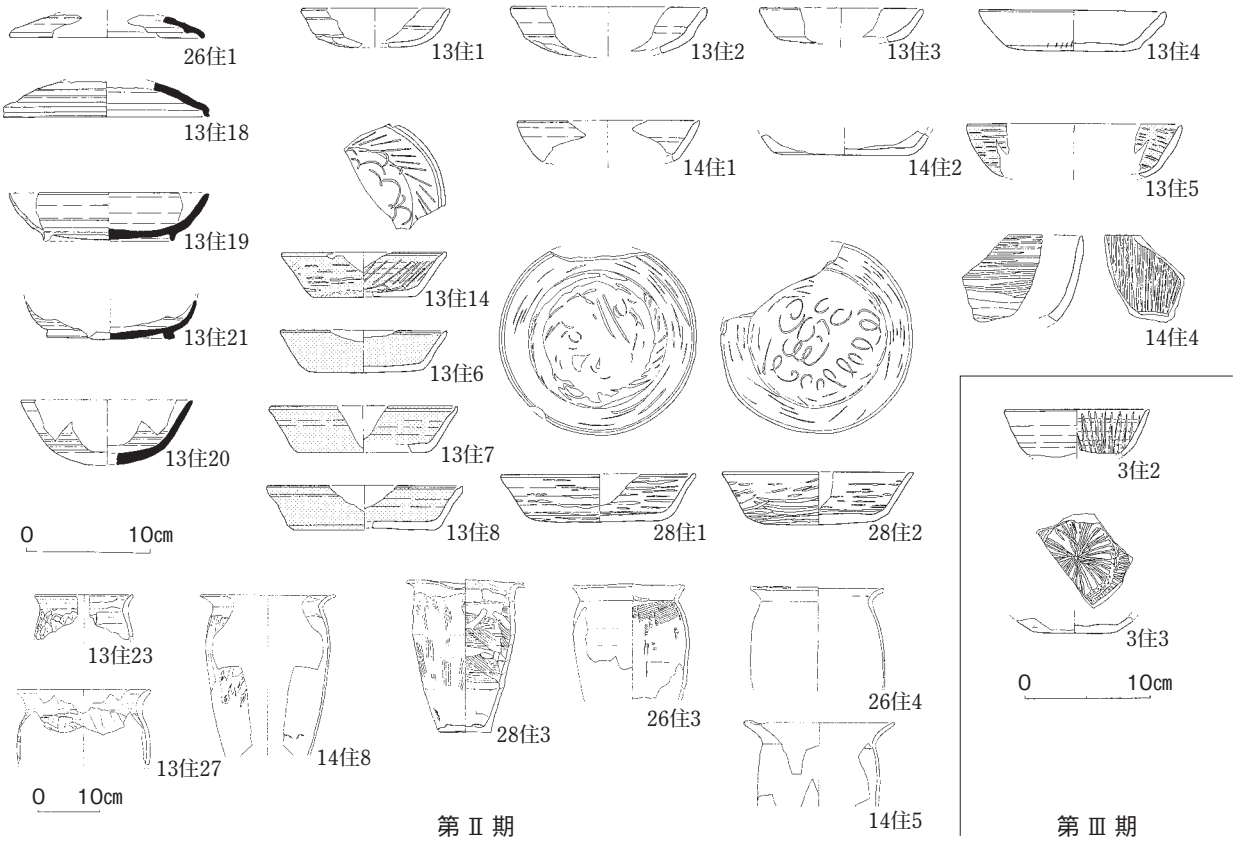
3 号住居址で出土した土師器の甲斐型坏（2・3）から本段階を設定した。坏は口径 12㎝程で、体部内面やみこみ部に放射状暗文が施され甲斐Ⅶ期に比定される。相模型の長胴甕が出土している。

第Ⅳ期　9 世紀末葉～ 10 世紀前葉

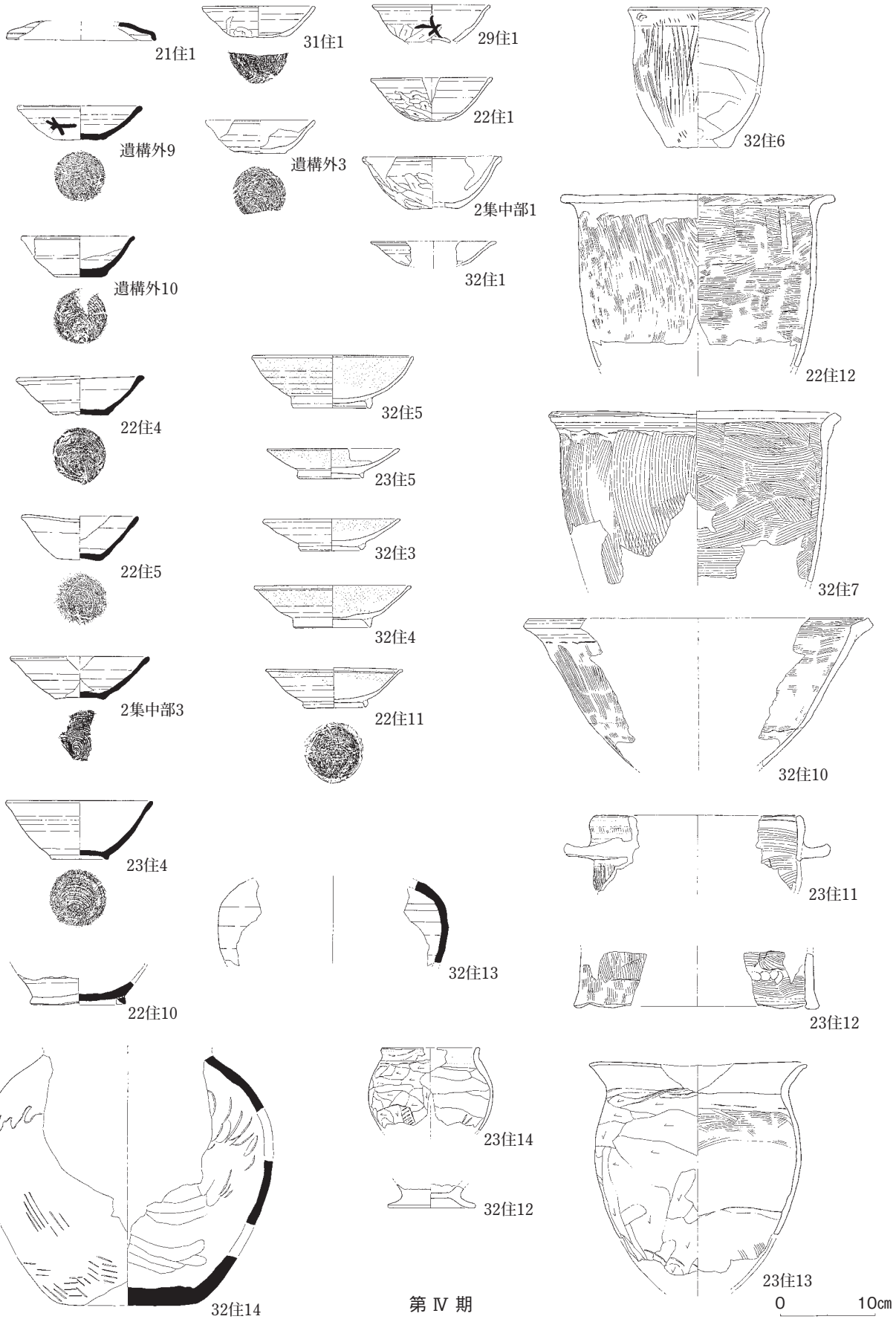
土師器に甲斐の影響が強く見られ、須恵器や灰釉･緑釉陶器が出土する。「大」の墨書土器が見られる。本段階の土器は 21・22・23・29・31・32 号住居址に出土例がある。

土師器は甲斐型が主体を占め、坏・小型甕・甕・鉢・羽釜・置きカマドがある。坏は体部下半から





第 218 図　狐原遺跡出土土器（古墳時代後期以降）集成図



第 219 図　狐原遺跡出土土器（古墳時代後期以降）集成図

底部にヘラ削り調整を施し、口径は13㎝程（22住1、29住1）や15㎝程（2集中部1）のものがある。甕類は内外面にハケ調整が多用される。甕は口径30㎝代の大型品で、肥厚した口縁部を持つものが多い（22住12、32住7）。これらの甲斐型土器は甲斐Ⅹ期からⅪ期に比定される。体部に指頭押圧を残す南武蔵型坏（23住1）や胴部外面に横位ヘラ削り調整を施した武蔵型甕（23住13・14）、ナデ調整を施した相模型の台付甕（32住12）も見られる。

須恵器は口縁端部が屈折する坏蓋（21住1）、坏、埦、甕（32住14）、瓶（22住10）等がある。坏や埦は底部回転糸切り無調整で、坏の口径は12㎝代～14㎝代まで見られる。埦は高台付で、口径15.5㎝である(23住4)。須恵器は南多摩窯御殿山25号窯式から御殿山5号窯式に比定され､須恵器模倣坏(31住1、遺構外3）も見られる。

灰釉陶器は高台付の埦や皿があり、東海地方からの搬入品と考えられる。このうち32号住居址出土の埦は猿投窯黒笹90号窯2型式、23号住居址出土の皿は折戸53号窯2型式に比定される。

緑釉陶器は埦の細片が23号住居址で出土した。

(3) 竪穴住居址

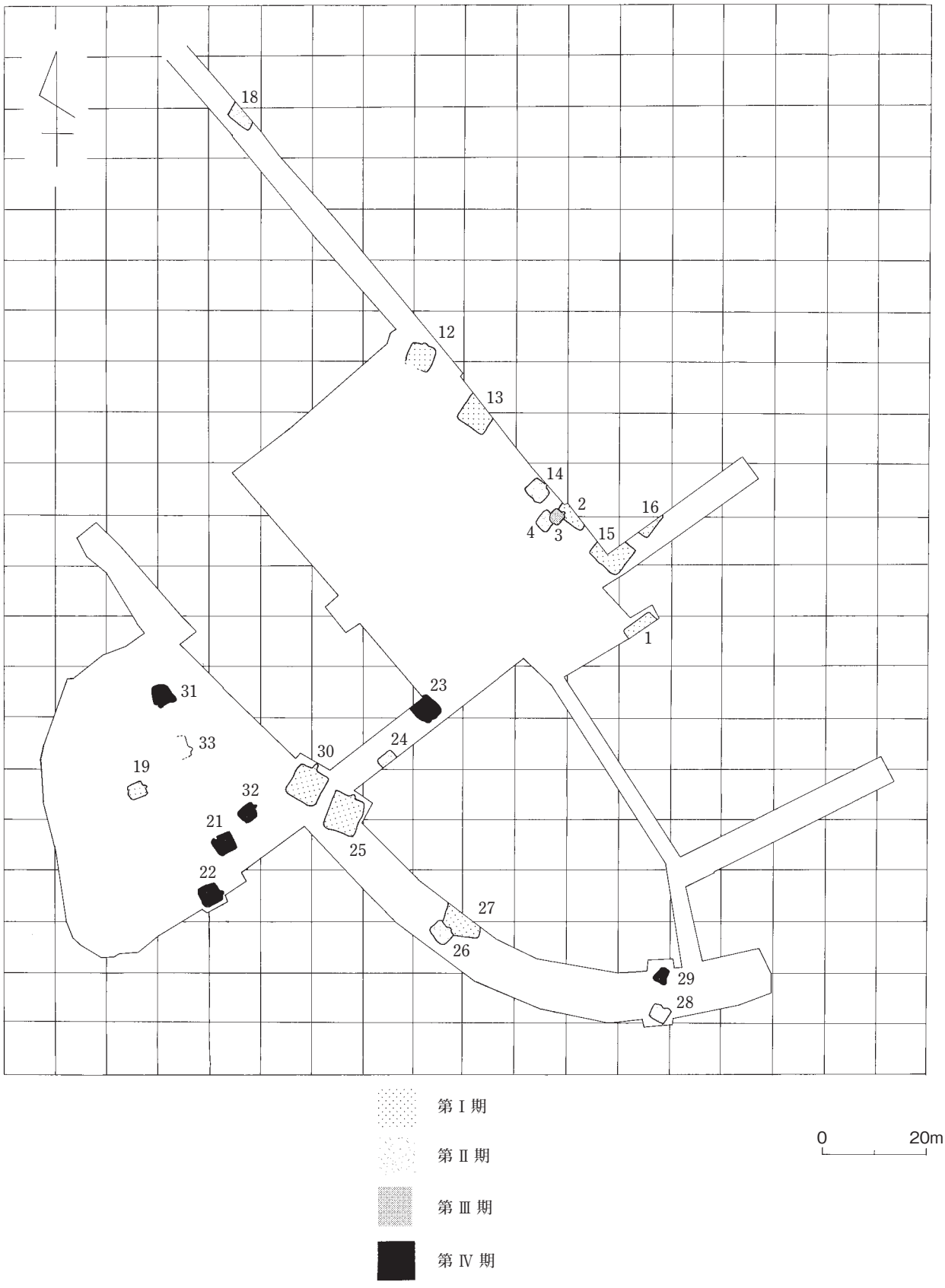
竪穴住居址を土器の段階設定に当てはめ、特徴と変遷をつぎのようにまとめた（第220図)。ただし時期不明の33号住居址は除いた。

第Ⅰ期　住居址は10軒で、1・2・12・13・15・16・19・25・27・30号住居址が該当する。このうち1辺3ｍの小型住居は1軒（19号）で、他は1辺5ｍ～7ｍ前後の大型住居である。大型住居は上段と下段の平坦地にまとまって分布し、北カマドで4本の主柱穴を持つものが多いと思われる。住居の主軸方位は北北東から北東方向の範囲に収まるが、1号・19号住居址は東方向に振れる。1辺6ｍ以上の住居では床の硬化が見られた。カマドの調査例は少ないが、25号住居址は石組みのカマドであった。カマド煙道部の長さは90㎝（25号)、140㎝（30号）を測る。粘土を溜めた土坑あるいはピットを、カマド左右の貼り床直下に持つ大型住居がある（25・30号)。覆土に第Ⅱ期の遺物が混在する住居址が多く、13号住居址は覆土中に第Ⅱ期の土器を多量に包含する。

第Ⅱ期　住居址は6軒で、4・14・18・24・26・28号住居址が該当する。上段と下段の広範囲に散漫な分布を示し、第Ⅰ期の住居を切って構築されたものが1軒ある。竪穴規模は1辺3ｍ前後3軒、4ｍ前後2軒、5ｍ代1軒であった。北カマドで、主軸方位は北東方向で一致する。明瞭な柱穴が見られない住居が多い。カマドは粘土造りで、煙道部の長さは110㎝（14号)、170㎝（26号）を測る。粘土を溜めた土坑をカマド周囲の床面に持つ住居がある（14・26号)。

第Ⅲ期　住居址は1軒（3号）で、上段の第Ⅰ期及び第Ⅱ期の住居址（2・4号）を切って構築される。竪穴規模は1辺2.7ｍの小型である。カマド位置や主軸方位は前段階の住居址と同じで、柱穴も見られない。カマドは粘土や暗褐色土で築かれ、煙道部の長さは40㎝を測る。

第Ⅳ期　住居址は6軒で、21・22・23・29・31・32号住居址が該当する。下段の広範囲に分布する。建て替えによると思われる重複が見られる（31号)。竪穴規模は1辺3ｍ前後3軒、4ｍ代3軒であり、カマド位置や主軸方位は不定傾向で柱穴は見られない。カマドは粘土を主体として袖に礫を用いたもの(22・23号)、石組み主体のもの（21・31・32号）がある。煙道部の長さは50㎝～60㎝程度の他、壁をわずかに掘り込む程度のものもある。石製支脚が火床部に残された例があり、22号住居址では支脚先端に土師器甕の底部と須恵器坏を重ねた状況であった。粘土を溜めた土坑を住居中央の床面に持つ住居があり（21・23号)、粘土が焼土化した例も見られる。

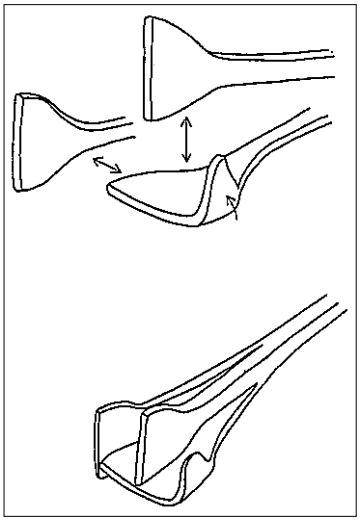


第 220 図　竪穴住居址分布図

(4) 特筆遺物

飾り金具　銅製飾り金具1点が27号住居址の覆土下層で出土した（171図18)。類例に山梨県笛吹市御崎古墳や甲斐市竜王2号墳の副葬品がある。本金具は馬の革帯等に装着された装飾品と考えられ、7世紀代に用いられたものと推定される。大型住居の居住者や集落の統率者に関わる威信財の一部として注目される。

焼印　鉄製焼印1点が32号住居址（旧名称Ⅰ－14号住）床面で出土した（186図15)。時期は9世紀末から10世紀前葉で捉えられる。印文は「山」字が左右逆に表現され、二画目の筆入れが曲線的で、三画目が下に抜けるなど繊細な筆運びが忠実に再現されている。印面は柄の先端を扁平に敲き延ばして縦一画目とし、これに二画目と三画目の部材を接合している（第221図)。



第221図　焼印部材構成図

32号住居址はカマドを持つ竪穴構造であり、平面形状は同時期の住居と共通する。一方、カマド側と対面の壁が緩やかな傾斜となり、土坑状の大きな掘り方を持つ点で特異な構造となっている。出土遺物は各種の土器が比較的豊富で、隣接する2号土器集中部と接合関係を持つものが多い。この土器集中部では焼土・炭化材・モモ核・白色粘土が検出され、住居で排出された物資の集積場所の観を呈している。本竪穴は便宜上住居として扱ったが、特異な出土遺物や遺構の構造から居住以外の用途に使われた可能性が考えられる。さらに住居西側のピット群の存在も気になる所である。ピット群と本住居との関連は不明だが、位置関係から両者が一体となって機能していた可能性も考慮する必要があろう

一般に焼印は牛馬に押される畜産印や木器などへの押印に用いられたと考えられている（高島1992)。本遺跡で畜産に関する明確な資料は見られない。一方、東京都八王子市多摩ニュータウンNo.107遺跡で1寸四方の焼印が押された木製品が出土しており、豊富な山林資源を背景に木材や木工品等を産出した上野原市域の歴史を考え合わせれば、小振りで繊細な筆運びが再現された本焼印が木器等に用いられた可能性も指摘できる。いずれにせよ本焼印の用途は、出土した遺構の機能や遺跡の性格と併せて今後の研究課題である。

第4節　結語

今回報告した発掘調査成果は、狐原遺跡全体から見れば部分的に過ぎない。不明な点や研究課題は多いが、複数の時代にわたる多数の遺構や遺物及び先学諸氏の研究成果を援用して、狐原遺跡で展開された人々の歴史を次のような形にまとめて結語とする。

相模川（桂川）を眼下に望む狐原に残された人類最古の足跡は、縄文時代早期中葉の土器に遡る。その後、中期に至るまで多数の焼石を集めた集石遺構や獲物となる獣を捕獲する落とし穴が広い野原に作られ、中期後半には一段高い平坦地に竪穴住居からなる集落が出現する。一際大きな住居には炉の奥に石の祭壇が設けられ、縄文人が祈りを捧げたものと思われる。この集落は長く続かず、大型の河原石を用いた敷石住居の造営を最後に人々の足跡は数千年間途絶えてしまう。

古墳時代前期に小規模な集落が、かつて縄文時代の集石遺構が設けられた野原に出現する。しかし長くは続かず、人々は住居の片隅に精緻な作りの高坏形土器を残して姿を消してしまう。

それから数百年後、ヤマト政権による国造りが進む中、狐原では7世紀に大型竪穴住居群が営まれ、7世紀後半から8世紀には大型倉庫を含む掘立柱建物が造営され相模川上流域（桂川）の拠点的集落に発展する。この背景には豊富な山林資源を求めて流域に進出した地方豪族の存在が考えられ、その首長や一族墓が狐原周辺に位置する塚場古墳群や古墳伝承地（第Ⅰ章第2節参照）に想定される。また、狐原で出土した7世紀後半の製作不良な須恵器は、首長層が当地域に須恵器生産体制を導入した可能性を示す遺物とも考えられ、今後周辺で未知の須恵器窯が発見されることを期待したい。

地方豪族による支配は都留評の成立と続く都留郡の展開へ進化し、古代律令制による中央支配が強化されていった。この過程では甲斐と相模との間で国境をめぐる紛争が発生し、延暦16年（797）に甲斐・相模国境論争が裁定される。狐原では9世紀に遺構分布が希薄となるが、9世紀末から10世紀前半に再び多数の竪穴住居群が形成され、この頃までには甲斐国の影響下に入ったことが出土土器から知ることができる。武蔵や相模の土師器、南多摩窯産の須恵器、東海地方の灰釉陶器など周辺諸国の産物も多い。その後、狐原では耕作物の貯蔵穴と考えられる土坑が広範囲に点在することから主に畑地として利用されたものと思われ、人々は高台へ上がって現在の諏訪から塚場、あるいは川沿いに降りて新田へ居住地を求めたのかもしれない。

平安時代末期、律令制の崩壊により全国各地で武士団が台頭する中、八王子市域に展開した武蔵七党の一つ横山党が相模川上流域にも勢力を拡大し、狐原を含む上野原地域は同一族の「古郡（ふるごおり）氏」により支配されることになる。

参考文献
上野原町 1975『上野原町誌』下巻
大隅清陽 2004「第五章　律令制と甲斐国の成立　第一節　甲斐の勇者」『山梨県史』通史編1　原始・古代　山梨県
小畑弘己他 2014「三内丸山遺跡北盛土出土土器の圧痕調査の成果と意義」『特別史跡三内丸山遺跡　年報17』青森県教育委員会
甲斐型土器研究グループ 1992『甲斐型土器－その編年と年代－』山梨県考古学協会
神奈川考古同人会 1980『シンポジウム縄文時代中期後半の諸問題　土器資料集成図集』神奈川考古第10号
國平健三 1981「上浜田遺跡を中心とした奈良時代土器群の様相と年代」『シンポジウム盤状坏－奈良時代土器の様相－』東洋大学未来考古学研究会、相武古代研究会
後藤健一 1998「須恵器の編年　5東海　B静岡」『古墳時代の研究6　土師器と須恵器』雄山閣
斎藤孝正 2000『日本の美術6　越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器』№409　至文堂
坂詰秀一他 2001『南多摩窯跡群Ⅳ－八王子みなみ野シティ内における古代窯跡の発掘調査報告－』八王子南部地区遺跡調査会
田尾誠敏 2001「Ⅶ　相武国の様相（2）」『相武国の古墳－相模川流域の古墳時代－』平塚市博物館
高島英之 1992「古代の焼印についての覚書」『古代史研究』第11号　古代史研究会
竹花宏之他 1999『多摩ニュータウン遺跡　№107遺跡古代編』東京都埋蔵文化財センター
田中広明他 1997『上里町中堀遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査報告書第190集　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
鶴間正昭 1996「小山窯（多摩ニュータウン№342遺跡1号窯）の成立をめぐって」『研究論集ⅩⅤ』東京都埋蔵文化財センター
鶴間正昭 2001「関東出土の東海産須恵器」『須恵器生産の出現から消滅』第5分冊　東海土器研究会
奈良泰史 1980『中央自動車道富士吉田線四車線化工事に伴う堀之内原遺跡発掘調査報告書』都留市教育委員会
仁科義男 1935「甲斐の先史並原史時代の調査」『甲斐志料集成』12巻　甲斐志料刊行会
長谷川厚 1992「相模地域の鬼高式土器」『月刊考古学ジャーナル』№342　㈱ニューサイエンス社
服部敬史 1995「第二編　古代」『藤野町史』通史編　藤野町
服部敬史他 2011「南多摩窯跡群須恵器編年の暦年代検討」『八王子市史研究』創刊号
比田井克仁 1985「7世紀における多摩地方の土器様相」『研究論集Ⅲ』東京都埋蔵文化財センター
森勇一 2012「焼けたワラジムシ」『ムシの考古学』雄山閣
山梨県 1999『山梨県史』資料編2　原始・古代2

付編１　狐原遺跡における自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

狐原遺跡では、縄文時代～平安時代の集落跡が検出されている。このうち、縄文時代中期と古墳時代前期～平安時代の遺構内からは、炭化材や種実遺体等が出土している。これらの炭化材は、住居構築材や燃料材、種実遺体は植物食糧や燃料材などに由来していると考えられる。

本報告では、基本層序のテフラ分析を行って層序を対比すると共に、植物珪酸体分析を行って周辺植生に関する資料を得る。また、遺構内から出土した炭化材について、放射性炭素年代測定を行い、遺構の構築時期を確認する。さらに、これらの炭化材や種実遺体の同定を行い、植物利用などに関する資料を得る。

なお、本報告は、一度 1999 年度に成果品として提出したものであり、今回入稿するにあたり、加筆・修正を加えたものである。

Ⅰ．基本層序に関する分析

1. 試料

基本層序は、上位からⅠ～Ⅸ層に分層されており、Ⅳ層堆積後に古墳時代後期～平安時代の遺構が構築されている。これらの基本層序は、Ⅱ層からⅧ層までが、層位方向の長さ 20㎝の柱状試料で連続に採取されている。これを室内でさらに 5㎝間隔で連続的に 32 点採取し、上位から試料番号 1 ～ 32 の通し番号を付した。

テフラ分析試料は、採取した 32 点の試料から 1 点おきに偶数番号の 16 点を選択した。また、植物珪酸体分析は、Ⅲ層、Ⅳ層、Ⅴ層、Ⅷ層から各 1 点（試料番号 4, 8, 12, 26）、Ⅶ層から 2 点（試料番号 15, 20）を選択した。

2. テフラ分析

(1) 分析方法

試料約 20 ｇを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象として観察し、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスが細粒で他の砂分と識別しにくい場合には、偏光顕微鏡下で観察する。その形態によりバブル型と中間型、軽石型の 3 つの型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるＹ字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く延びた繊維束状のものとする。

(2) 結果

結果を表 1 に示す。全ての試料にスコリアと火山ガラスが認められたが、軽石はどの試料にも認められなかった。

スコリアは、粒径約 1㎜以上の粗粒のスコリアと、1㎜以下の細粒のスコリアとに分けて観察したところ、含有量や特徴に違いがみられる。粗粒のスコリアは、試料番号 6 で多量、試料番号 2･4･8･10 で中量含まれ、試料番号 12 ～ 20 で少量、試料番号 22 ～ 32 で微量含まれる。上位の試料ほど多く含まれる傾向があるが、Ⅱ層・Ⅲ層の試料よりもⅢ層最上部の試料番号 6 に特に多く認められる。これに対し、細粒のスコリアは、試料番号 2 ～ 16 で多量含まれ、試料番号 18 ～ 22 で少量、試料番号 24 ～ 32 で微量含まれている。粗粒のものと同様に、上位の試料ほど多く含まれているが、Ⅱ層～Ⅶ層上部まで多量のスコリアが含まれているという点で粗粒のものと異なる。スコリアの特徴については、粗粒のものは色調や発泡度、形態などの特徴が

異なるいくつかのスコリアが一つの試料の中に混在しており、層位的にみるとこの組成が漸移的に変化している。また、風化しているスコリアが多く、全体的に脱色または赤色化したものが多い。細粒のスコリアは、上位の試料で黒色を呈し発泡が不良の新鮮なスコリアが多く認められ、下位の試料では黒色で発泡の良好なものが微量認められる。

火山ガラスは、試料番号 8 ～ 16・22 ～ 32 で微量、試料番号 2 ～ 6・18・20 ではごくわずかに含まれている。全ての試料に無色透明の軽石型火山ガラスが認められるが、上位の試料は発泡のよいものが多い。試料番号 14 ～ 32 では無色透明のバブル型火山ガラスが認められ、試料番号 14 ～ 28 では褐色を呈するバブル型火山ガラスも認められる。試料番号 30・32 では、中間型火山ガラスが認められる。

表 1. テフラ分析結果

層名	試料番号	スコリア					火山ガラス		軽石
		粗粒			細粒				
		量	色調・発泡度	最大粒径	量	色調・発泡度	量	色調・形態	量
Ⅱ	2	＋＋＋	B･sb,GBr･sb,Br･sb	7.0	＋＋＋＋	B･b,Br･sb	(＋)	cl･pm	－
Ⅲ	4	＋＋＋	G･sb,GBr･sb,Br･sb	9.0	＋＋＋＋	B･b,Br･sb	(＋)	cl･pm	－
Ⅳ	6	＋＋＋＋	GBr･sb,G･sb,Br･sb	9.0	＋＋＋＋	B･b,Br･sb	(＋)	cl･pm	－
	8	＋＋＋	Br･sb,G･sb,B･sg	7.0	＋＋＋＋	B･b,Br･sb	＋	cl･pm	－
	10	＋＋＋	GBr･b,Br･sb	9.5	＋＋＋＋	B･b,Br･sb,G･sg	＋	cl･pm	－
Ⅴ	12	＋＋	GBr･b,Br･sb	8.0	＋＋＋＋	B･b,GB･sg	＋	cl･pm	－
Ⅶ	14	＋＋	GBr･b,Br･sb,G･sb ～ b	4.5	＋＋＋＋	B･b,GB･sg	＋	cl･pm ＞ cl･bw	－
	16	＋＋	G･sb ～ b,Br･sb,B･sg	5.5	＋＋＋＋	B･b,GB･sg	＋	cl･pm ＞ cl･bw	－
	18	＋＋	G･sg ～ sb,Br･sb	4.5	＋＋	B･b,B･sg	(＋)	cl･pm,cl･bw	－
	20	＋＋	G･b,GBr･sg ～ sb,Br･sb	7.0	＋＋	B･b	(＋)	cl･pm,cl･bw	－
Ⅷ	22	＋	G･sb,GBr･sg ～ sb,Br･sb	5.0	＋＋	B･b	＋	cl･bw,cl･pm	－
	24	＋	G･sb,Br･sb	3.5	＋	B･sb	＋	cl･bw,br･bw,cl･pm	－
	26	＋	Br･sb,G･sg	3.0	＋	B･sb	＋	cl･bw,br･bw,cl･pm	－
	28	＋	G･b,G･sg,Br･sg	4.0	＋	B･sg	＋	cl･pm,cl･bw,br･bw	－
	30	＋	Br･sg ～ sb	6.0	＋	B･sg	＋	cl･pm,cl･md,cl･bw	－
	32	＋	Br･sb,B･sg	8.0	＋	B･sg	＋	cl･pm,cl･md,cl･bw	－

凡例　－：含まれない．(＋)：きわめて微量．＋：微量．＋＋：少量．＋＋＋：中量．＋＋＋＋：多量．
B：黒色．G：灰色．Br：褐色．GB：灰黒色．GBr：灰褐色．
g：良好．sg：やや良好．sb：やや不良．b：不良．最大粒径は㎜．
cl：無色透明．br：褐色．bw：バブル型．md：中間型．pm：軽石型．
注）粒径約 1㎜以上を粗粒、1㎜以下を細粒としている。

(3) 考察

Ⅳ層中部～Ⅶ層上部で比較的多く認められた軽石型火山ガラスは、特徴と産出する層位、遺跡の地理的位置を考慮すると、天城山カワゴ平火口から噴出した天城カワゴ平テフラ（Ｋｇ：町田ほか，1984）に由来する可能性がある。Ｋｇは神奈川県全域、山梨県南部、静岡県全域に分布しており（町田・新井，2003)、その噴出年代は、暦年代で 3，100 年前とされている（嶋田，2000)。本地点では、認められた火山ガラスが微量であり、Ⅱ層～Ⅶ層まで拡散し、濃集部が明瞭には認められない。そのため、降灰層準を特定することはできないが、比較的多く認められたⅣ層中部～Ⅶ層上部の範囲にＫｇの降灰層準があるといえる。

Ⅷ層に認められた褐色を呈するバブル型火山ガラスは、特徴と産出する層準から、鬼界－アカホヤ火山灰（Ｋ－Ａｈ；町田・新井，1978）に由来するものと考えられる。また、産出層準から、無色透明のバブル型火山ガラスもその多くはＫ－Ａｈに由来すると考えられる。Ｋ－Ａｈは、暦年代で約 7,300 年前に九州地方の鬼界カルデラから噴出した広域テフラである（町田・新井，2003)。本地点における含有量は微量であり、最濃集部が明瞭には認められないが、試料番号 24 ～ 28 付近で比較的粒径が大きめのものが含まれていることから、降灰層準はⅧ層中部である可能性がある。なお、これまでの分析例から、ローム層中に降灰層準のある姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ；町田・新井，1976）に由来する火山ガラスも混在している可能性がある。

Ⅷ層下部で比較的多く認められた軽石型火山ガラスと中間型火山ガラスは、特徴と産出する層準と遺跡の

地理的位置から、立川ローム層最上部ガラス質火山灰（ＵＧ：山崎，1978）に由来するものと考えられる。ＵＧは浅間火山の軽石流期のテフラの細粒部であると考えられており、浅間火山の軽石流期のテフラの噴出年代が暦年代で1.5～1.6万年前とされている（町田・新井，2003）ことから、これがＵＧの噴出年代ともなる。これまでの当社による分析例では、ＵＧの降灰層準は、武蔵野台地では立川ローム層標準層序のⅢ層上限、相模野台地ではＬ１Ｓ層下部～Ｂ０層上部に認められることが多い。このため本地点で認められたＵＧの火山ガラスは、ＩＸ層以下の土層に堆積していると推定されるテフラ層からの再堆積であると考えられる。

スコリアは、遺跡の地理的な位置を考慮すると、いずれも富士火山の完新世の活動により噴出した新期富士テフラに由来すると考えられる。新期富士テフラは、上杉（1990）による記載では、富士黒土層中のＳ-0から宝永スコリアのＳ-25まで記載されており、さらにこの中のテフラによっては、細分されているものもあることから、50枚近くのテフラにより構成されている。ただし、給源から離れた神奈川県東部や東京都の低地の調査例では、検出される新期富士テフラの枚数は極端に少なくなり、縄文時代後期から晩期のテフラであるＳ-10・11（湯船第一スコリア（Ｙｕ-1））、Ｓ-13（砂沢スコリア（Ｚｕ））、弥生時代中期頃のＳ-22（湯船第二スコリア（Ｙｕ-2））、古墳時代のテフラとされるＳ-24-1～5、平安時代延暦年間の西暦800～802年の噴火で多量のスコリアを噴出したとされているＳ-24-7、さらには江戸時代の宝永4年（1707年）に噴出した宝永スコリア（Ｆ-Ｈｏ）などにほぼ限定される。当社では、これまでにも神奈川県東部や東京都の低地の調査例により、上述した各テフラの試料を得ており、それらの観察から、各テフラにはスコリアの粒径や色調および発泡度や斑晶の包有状況などの異なるスコリアが複数種混在しており、それら複数種のスコリアの中でどのスコリアが主体を占め、どのスコリアが供伴し、どのスコリアが微量含まれるかといった混在の度合いが異なることで各テフラの特徴を把握している。しかし、これらのテフラが混交している場合は、混交の状況から元のテフラを推定することは難しい。今回の試料では各テフラ層が混合しており、粗粒のスコリアでは風化が進んだものが多く認められるため、各試料のスコリアの産状から特定のテフラに対比することはできない。

ところで、相模野台地から武蔵野台地にかけて広く分布する黒ボク土層では、一般に上半部に比較的スコリアが多く含まれ、粗粒で砂質な様相を呈し、下半部では粗粒のスコリアはほとんど含まれないことが多い。これは、富士山の完新世の火山活動の時期的な差異が反映されていることによると考えられる。新期富士テフラを噴出した新富士火山の活動については、宮地（2011）に詳しい。その記載に従えば、ステージ1からステージ2までの17,000年前から5,600年前（暦年代、以下同）までは溶岩の噴出が主体であり、溶岩の及ばない山麓部では富士黒土層（ＦＢ）の形成が続いたとされている。5,600～3,500年前のステージ3になると比較的規模の大きな爆発的噴火の時期となり、さらに3,500～2,200年前のステージ4では、爆発的噴火が顕著となり大～中規模テフラが連続して噴出したとされている。前述した新期富士テフラのうち、Ｓ-10・11、Ｓ-13、Ｓ-22はいずれもこの時期のテフラに相当する。ここで、相模野台地から武蔵野台地の黒ボク土層のスコリアの産状に戻ると、スコリアのほとんど含まれない下半部は、おそらく山麓でＦＢが形成されていた時期に相当し、スコリアの多量に含まれる上半部は、ステージ4の時期に相当すると考えられる。上半部と下半部の漸移的な層位がステージ3の時期に相当するのかも知れない。前述したように武蔵野台地の黒ボク土層中に降下堆積層としてのテフラは認められないことから、おそらく黒ボク土層の上半部でも下半部でもその漸移する層位でも、新期富士テフラの複数のテフラが混交しているものと考えられる。

本遺跡は、相模野台地よりもさらに富士山に近い位置にあるが、今回の各層におけるスコリアの産状は、上述した黒ボク土層にほぼ類似する。すなわち、本遺跡におけるスコリアの産状も、新期富士テフラの活動が反映されている可能性が高い。その場合、粗粒のスコリアを比較的多く含むⅣ層以上の土層が、3,500～

2,200 年前のステージ 4 以降に形成された黒ボク土層に対比され、その下位の粗粒スコリアが少量含まれるⅤ層とⅦ層は 5,600 ～ 3,500 年前のステージ 3 に対比される。Ⅳ層とⅤ層の境界付近の年代は、この付近で認められているＫｇの噴出年代とも整合している。さらに下位のスコリアが微量しか含まれないⅧ層は、本地点の黒ボク土層の中でも色調が暗いことと、Ⅷ層内で確認されたＫ－Ａｈの降灰年代を考慮すると、ＦＢの形成された 5,600 年前以前のステージ 2 および 1 に対比される可能性がある。

3. 植物珪酸体分析

(1) 分析方法

試料中の植物珪酸体は、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70 W，250 ＫＨｚ，1 分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステイト，比重 2．4）の順に物理・化学処理を行って分離・濃集する。これを検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、プリュウラックスで封入しプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

(2) 結果

結果を表 2 と図 1 に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態の悪いものが多く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

試料番号 26（Ⅷ層）～ 4（Ⅲ層）にかけて、タケ亜科の産出が目立ち、ウシクサ族（ススキ属を含む）やイチゴツナギ亜科なども認められる。タケ亜科にはクマザサ属とネザサ節が認められ、クマザサ属は稀に検出され、ネザサ節は上位で出現率が増加する。

表 2. 基本層序の植物珪酸体分析結果

種　類	試料番号					
	4	8	12	15	20	26
イネ科葉部短細胞珪酸体						
タケ亜科クマザサ属	2	1	－	1	－	－
タケ亜科ネザサ節	12	4	5	4	7	－
タケ亜科	136	125	129	157	172	139
ウシクサ族ススキ属	20	26	32	8	7	59
イチゴツナギ亜科	1	2	2	1	1	2
不明キビ型	45	32	30	15	13	24
不明ヒゲシバ型	31	48	42	19	26	28
不明ダンチク型	25	13	12	11	15	15
イネ科葉身機動細胞珪酸体						
タケ亜科クマザサ属	2	－	－	－		－
タケ亜科ネザサ節	11	14	3	9	8	2
タケ亜科	34	59	64	74	76	69
ウシクサ族	38	40	28	25	31	49
不明	48	49	36	32	53	33
合　計						
イネ科葉部短細胞珪酸体	272	251	252	216	241	267
イネ科葉身機動細胞珪酸体	133	162	131	140	169	153
総　計	405	413	383	356	410	420
珪化組織片						
ススキ属短細胞列	1	1	－	－	－	－
ウシクサ族機動細胞列	2	－	－	－	－	－

また、試料番号 26 でタケ亜科とともに産出が目立つウシクサ族が試料番号 20・15（Ⅶ層）で減少するものの、上位の試料では再び増加する。

(3) 考察

基本層序での植物珪酸体の産状から、Ⅷ層～Ⅲ層が形成された頃には少なくともタケ亜科やウシクサ族の生育がうかがえる。このうち、タケ亜科では次第にネザサ節の割合が高くなったことがうかがえる。ネザサ節は比較的開けた場所に生育する（室井，1960）ことから、これらの土層が形成された時期に、周辺に開けた場所があり、ネザサ節が生育していたことが推定される。

また、淡色黒ボク土層とされるⅦ層ではススキ属を含むウシクサ族の生育する割合が低下したことがうかがえる。黒ボク土の炭素（腐植）含量は植物珪酸体含量と正の相関関係があり、植物珪酸体群集の中で産出が目立つタケ亜科（ササ類）やススキ属は黒ボク土の主な腐植給源である（加藤，1960）。そのため、本層での淡色化はススキ属の減少による可能性がある。今後さらに土壌理化学分析を含めた検討を行いたい。

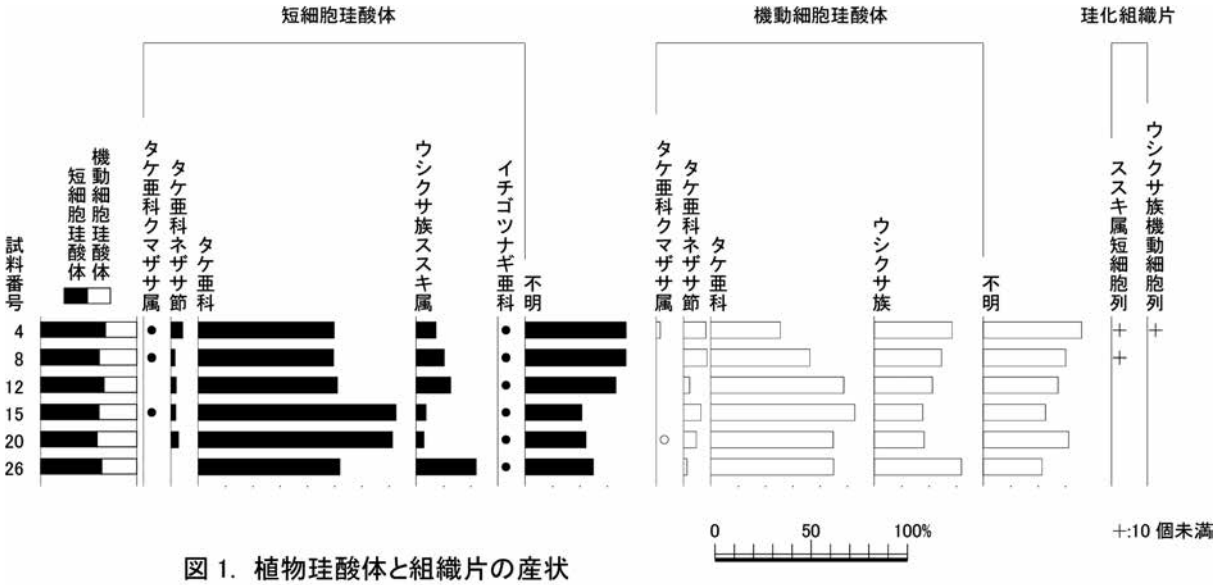


図 1. 植物珪酸体と組織片の産状

出現率はイネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、○●は1%未満、＋は 100 個未満の種類を示す。また、組織片の産状を検出個数により、＋の記号で表す。

Ⅱ. 遺構・遺物に関する分析

1. 放射性炭素年代測定

(1) 試料

試料は、古墳時代後期の住居跡、および平安時代の遺物集中部から出土した炭化材 2 点（試料番号 49,52）と、縄文時代中期の敷石住居跡から出土した炭化材 1 点（試料番号 57）である。

(2) 方法

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室がβ線計数法で実施した。

(3) 結果

測定結果を表 3 に示す。古墳時代後期～平安時代の炭化材（資料番号 49,52）は 1,420 ± 50yBP と 1,320 ± 70yBP、縄文時代中期の炭化材（資料番号 57）は 4,290 ± 60yBP であった。

表 3. 放射性炭素年代測定結果

番号	遺構名	試料名	時代・時期	$\delta^{13}C$	補正年代	Codo No.
49	13 号住	床面	古墳時代後期	-17.5‰	1420 ± 50BP	GaK-20286
52	2 号土器集中部	覆土	平安時代	-25.4‰	1320 ± 70BP	GaK-20287
57	敷石住居	主体部 A	縄文時代中期	-29.6‰	4290 ± 60BP	GaK-20288

1) 測定は、β線係数法による。
2) 年代値の算出には、Libby の半減期 5570 年を使用した。
3) 補正年代は、δ13C の値を基に同位体効果の補正を実施した値である。
4)BP 年代値は、1950 年を基準として何年前であるかを示す。
5) 付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の 68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

(4) 考察

古墳時代後期とされる 13 号住から出土した炭化材の補正年代は 1,420 ± 50yBP であった。一桁目を丸める前の値が無いが、参考までに得られた補正年代を最新の暦年較正プログラムで暦年較正すると、calAD596～658 となる。この結果は、遺物からの推定年代と矛盾しない。

平安時代と考えられる 2 号土器集中部の炭化材は、補正年代が 1,320 ± 70yBP であり、13 号住の炭化材と同じ条件で暦年較正すると、calAD649 ～ 769 の値が得られる。この値は、推定年代よりも古い年代を示している。炭化材の放射性炭素年代測定値は、その年輪が形成された年代を示しており、樹皮に近い年輪ほど枯死あるいは伐採年代に近い値を示し、樹芯部に近い年輪ほど実際の伐採・使用年代との間に年代差が生じることになる。本試料についても、年輪形成の時期差を反映している可能性がある。

縄文時代中期とされる敷石住居の主体部 A から出土した炭化材は、補正年代が 4,290 ± 60yBP であった。本試料についても参考までに一桁目を丸めた値で暦年較正を実施した。その結果は、calBC3,011 ～ 2,876（calBP4,825 ～ 4,960）であった。この値は、小林（2008）の縄文時代中期の年代幅に収まっており、調査所見とも矛盾しない。

2. 種実の同定

(1) 試料

試料は、古墳時代前期～平安時代および縄文時代中期の遺構内部から検出された炭化物片 51 点である。ほとんどが古墳時代前期～平安時代のもので、試料番号 56 のみ縄文時代中期である。試料の詳細は結果と合わせて表 4 に示す。

(2) 方法

双眼実体顕微鏡にて、その形態的特徴から種類を同定する。

(3) 結果

結果を表 4 に示す。以下に検出された種類の形態的特徴を記す。

・モモ（Prunus parsica Batsch） バラ科サクラ属

核（内果皮）が検出された。褐色～黒褐色で大きさは 3cm 程度。核の形は楕円形でやや偏平である。基部は丸く大きな臍点がありへこんでおり、先端部はやや尖る。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。表面は、不規則な線状のくぼみがあり、全体としてあらいしわ状に見える。

・トチノキ（Aesculus turbinata Blume） トチノキ科トチノキ属

種子の破片が検出された。種皮は薄く堅い。表面には黒く艶のある部分と、黒褐色でざらつく部分とがある。

・コムギ（Triticum aestivum L.） イネ科コムギ属

胚乳が検出された。炭化しており、大きさは 4mm 程度。楕円形で全体的に丸みを帯びている。片側には 1 本の深い溝があり、その反対側胚の痕跡がある。

表 4. 種実同定結果

番号	遺構名	試料名	時代・時期	種類名
1	3 号住	カマド覆土 7 層	奈良時代	不能
2	3 号住	カマド覆土 7 層	奈良時代	不能
3	3 号住	カマド覆土 12 層	奈良時代	不能
4	3 号住	カマド覆土 9 層	奈良時代	コムギ
5	13 号住	焼土	古墳時代後期	不能
6	13 号住	焼土	古墳時代後期	不能
7	13 号住	焼土	古墳時代後期	不能
8	13 号住	焼土	古墳時代後期	不能
9	13 号住	焼土	古墳時代後期	不能
10	14 号住	周溝	奈良時代	不能
11	14 号住	周溝	奈良時代	不能
12	14 号住	周溝	奈良時代	不能
13	14 号住	周溝	奈良時代	不能
14	14 号住	周溝	奈良時代	不能
15	14 号住	周溝	奈良時代	不能
16	14 号住	周溝	奈良時代	不能
17	14 号住	周溝	奈良時代	不能
18	14 号住	周溝	奈良時代	不能
19	25 号住	覆土	古墳時代後期	モモ
20	25 号住	カマド火床部	古墳時代後期	不能
21	25 号住	カマド火床部	古墳時代後期	不能
22	25 号住	カマド火床部	古墳時代後期	トチノキ
23	27 号住	P4 覆土	古墳時代後期	モモ
24	30 号住	P5 覆土	古墳時代後期	不能
25	30 号住	P6 覆土	古墳時代後期	不能
26	30 号住	P6 覆土	古墳時代後期	不能
27	30 号住	P6 覆土	古墳時代後期	不能
28	30 号住	P6 覆土	古墳時代後期	不能
29	30 号住	P6 覆土	古墳時代後期	アカザ科 - ヒユ科
30	32 号住	カマド火床部	平安時代	不能
31	32 号住	カマド火床部	平安時代	不能
32	32 号住	カマド火床部	平安時代	不能
33	32 号住	カマド火床部	平安時代	不能
34	34 号住	床（灰）	古墳時代後期～奈良時代	不能
35	34 号住	床（灰）	古墳時代後期～奈良時代	不能
36	34 号住	床（灰）	古墳時代後期～奈良時代	不能
37	34 号住	床（灰）	古墳時代後期～奈良時代	不能
38	34 号住	焼土	古墳時代後期～奈良時代	不能
39	1 号土器集中部	焼土	古墳時代後期～奈良時代	不能
40	1 号土器集中部	焼土	古墳時代後期～奈良時代	不能
41	1 号土器集中部	焼土	古墳時代後期～奈良時代	不能
42	1 号土器集中部	焼土	古墳時代後期～奈良時代	不能
43	1 号土器集中部	焼土	古墳時代後期～奈良時代	不能
44	1 号土器集中部	焼土	古墳時代後期～奈良時代	不能
45	1 号土器集中部	焼土	古墳時代後期～奈良時代	不能
46	1 号土器集中部	焼土	古墳時代後期～奈良時代	不能
47	1 号土器集中部	焼土	古墳時代後期～奈良時代	不能
48	2 号土器集中部	覆土、実測No. 32	平安時代	モモ
56	敷石住居	炉 2 層	縄文時代	エノキグサ近似種
64	1 号土器集中部	焼土	古墳時代後期～奈良時代	不能
65	1 号土器集中部	焼土	古墳時代後期～奈良時代	モモ

・アカザ科－ヒユ科（Chenopodiaceae - Amaranthaceae sp.）

種子が検出された。黒色。側面観は円形で、上面観は凸レンズ形を呈している。大きさは 1mm 程度。側面に「へそ」がある。表面は細胞が亀甲状に配列している構造がみられる。

・エノキグサ近似種（Acalypha cf.australis L.） トウダイグサ科エノキグサ属

種子が検出された。卵型で大きさは 1mm 程度。先端部はやや尖る。表面は薄くて堅く、細かな窪みが配列し、ざらつく。

(4) 考察

古墳時代前期～平安時代の遺構から検出された種実遺体は 4 種類である。このうち、モモ、コムギ、トチノキは可食植物で、遺跡での利用が推測される。特にモモとコムギは渡来種であることから、周辺での栽培が考えられる。また、アカザ科－ヒユ科は当時の周辺植生に由来すると推測される。一方、縄文時代中期の試料はエノキグサ近似種に同定された。エノキグサは人里などに普通にみられる種類であり、当時の周辺植生に由来していると考えられる。

3. 炭化材の樹種同定

(1) 試料

試料は、古墳時代後期～平安時代の遺構から出土した炭化材 6 点（試料番号 49 ～ 54）と、縄文時代中期の遺構から出土した炭化材 7 点（試料番号 57 ～ 63）である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表 5 に記した。

(2) 方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(3) 結果

樹種同定結果を表 5 に示す。炭化材は、針葉樹 2 種類（マツ属複維管束亜属・モミ属）、広葉樹 7 種類（ブナ属・コナラ属コナラ属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・エノキ属・ヤマグワ・トチノキ）とイネ科タケ亜科に同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・マツ属複維管束亜属（Pinus subgen. Diploxylon） マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。分野壁孔は窓状となり、放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1 ～ 15 細胞高。

・モミ属（Abies） マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部は不明瞭。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、じゅず状末端壁が認められる。放射組織は単列、1 ～ 20 細胞高。

・ブナ属（Fagus） ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に 2 ～ 3 個が複合して散在し、分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織は同性～異性 III 型、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris） ブナ科

環孔材で、孔圏部は 1 ～ 2 列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1 ～ 20 細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Prinus）　ブナ科

環孔材で孔圏部は 1 ～ 3 列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1 ～ 20 細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

試料は節を含む小片。環孔材で、孔圏部は 3 列以上、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1 ～ 15 細胞高。

・エノキ属（Celtis）　ニレ科

環孔材で、孔圏部は 1 ～ 3 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性 III 型、1 ～ 15 細胞幅、1 ～ 50 細胞高で鞘細胞が認められる。

・ヤマグワ（Morus australis Poiret）　クワ科クワ属

環孔材で、孔圏部は 1 ～ 5 列、晩材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性 II ～ III 型、1 ～ 6 細胞幅、1 ～ 50 細胞高で、しばしば結晶を含む。

・トチノキ（Aesculus turbinata Blume）　トチノキ科トチノキ属

散孔材で管壁は厚く、単独または 2 ～ 3 個が主として放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1 ～ 15 細胞高。

・イネ科タケ亜科（Gramineae subfam. Bambusoideae）

維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱が認められ、放射組織は認められない。タケ亜科は、タケ・ササ類であるが解剖学的特徴では区別できない。

表 5.　樹種同定結果

番号	遺構名	採取地点	時代・時期	用途など	樹種
49	13 号住	床面	古墳時代後期	住居構築材	イネ科タケ亜科
50	25 号住	カマド火床面	古墳時代後期	燃料材	モミ属
51	31 号住	旧カマド火床面	平安時代	燃料材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
52	2 号土器集中部	覆土	平安時代		エノキ属
53	43 号土坑	底面	古墳時代後期～平安時代	燃料材？	イネ科タケ亜科
54	3 号住	カマド覆土 9 層	奈良時代	燃料材	ヤマグワ
57	敷石住居	主体部 A	縄文時代中期	住居構築材	ブナ属 コナラ属コナラ亜属クヌギ節
58	敷石住居	主体部 B	縄文時代中期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
59	敷石住居	主体部 C	縄文時代中期	住居構築材	ヤマグワ
60	敷石住居	主体部 D	縄文時代中期	住居構築材	マツ属複雑管束亜属
61	敷石住居	主体部 E	縄文時代中期	住居構築材	クリ トチノキ
62	敷石住居	主体部 F	縄文時代中期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
63	Q-8 区配石	覆土	縄文時代中期		広葉樹

(4) 考察

樹種同定を実施した試料は、縄文時代中期の住居跡から出土した構築材と考えられる炭化材、縄文時代中期の配石から出土した炭化材、古墳時代後期の住居跡から出土した構築材や燃料材と考えられる炭化材、奈良時代の住居跡カマド覆土から出土した燃料材と考えられる炭化材、平安時代の住居跡から出土した燃料材と考えられる炭化材、平安時代の 2 号土器集中部から出土した炭化材、古墳時代後期～平安時代の土坑から

出土した炭化材とがある。これらの炭化材には、合計 10 種類が認められた。

同定された各種類の材質などをみると、針葉樹のマツ属複維管束亜属は、二次林などに生育する常緑高木である。木材は軽軟であるが、強度と保存性は比較的高い。モミ属は、山地等に生育する常緑高木である。木材は軽軟で強度と保存性は低い。広葉樹のブナ属は、山地に生育する落葉高木である。木材は、比較的重硬で強度も高いが、保存性は低い。クヌギ節、コナラ節、クリは、二次林などに生育する落葉高木である。木材は、いずれも重硬で強度が高く、クリでは耐朽性も高い。エノキ属、ヤマグワ、トチノキは、河畔や渓谷等に生育する落葉高木である。エノキ属の木材は、やや重硬な部類に入る。ヤマグワは、重硬で強度と耐朽性が高い。トチノキは、軽軟で強度と保存性は低い。タケ亜科は、小径のササ類等に由来する可能性がある。ササ類は、一般に強度と靭性が比較的高い。

時期別にみると、縄文時代中期の住居跡から出土した炭化材は、マツ属複維管束亜属、ブナ属、クヌギ節、コナラ節、クリ、ヤマグワ、トチノキであり、強度の高い木材を中心に雑多な種類構成となっている。この結果から、周囲に生育している様々な樹木を構築材として利用したことが推定される。縄文時代中期にはクリの利用が多いとされ（千野 ,1983,1991）、郡内地域でも大月遺跡（大月市）で縄文時代中期の住居跡から出土した炭化材 5 点がクリ 4 点と種類不明の広葉樹 1 点に同定されている（伊東・山田 ,2012）。今回の結果ではクリは利用されているが、僅かに 1 点であり、大月遺跡とは異なる木材利用が推定される。この背景には、周囲の植生等が考えられるが、詳細は不明である。今後、同時期の住居構築材の木材利用に関する資料をさらに蓄積する中で検証するべき課題である。同じ縄文時代中期の配石から出土した炭化材は、種類不明の広葉樹であった。

古墳時代後期の 13 号住から出土した構築材と考えられる炭化材はタケ亜科に同定された。タケ亜科の材質を考慮すれば、垂木などの部材は考えにくく、屋根の萱材や床の敷物等の可能性が考えられる。一方、25 号住のカマド火床部から出土した炭化材は、モミ属であった。一般に軽軟な木材は燃えやすいことから、燃料材に使いやすい木材を周囲から集めた可能性がある。

奈良時代の 3 号住カマド覆土 9 層から出土した炭化材は、ヤマグワであった。重硬な木材は、一般に燃えにくいことから、他に燃えやすい木材や草本などと併せて利用したことが推定される。

平安時代の 31 号住旧カマド火床部から出土した炭化材は、コナラ節に同定された。コナラ節は二次林の構成種として人里周辺に広く分布する種類であり、周辺に生育していた樹木を燃料材として利用したことが推定される。また、コナラ節も硬いことから燃えにくいが、後述するように本遺構の灰像分析ではススキ属やタケ亜科の組織片が確認されており、そうした草本類と共に利用したことが推定される。一方、2 号土器集中部から出土した炭化材は、炭化していることから、何らかの人間活動で火を受けたことが推定されるが、詳細は不明である。同定されたエノキ属は、周囲の河畔などに生育していたことが推定される。

古墳時代後期～平安時代の 43 号土坑から出土した炭化材は、タケ亜科であった。底面から出土しており、状況から燃料材の可能性が考えられている。周囲に生育していたタケ亜科を利用したことが推定される。

4. 不明物質の灰像分析

(1) 試料

試料は、平安時代の 31 号住の旧カマド火床部から採取された 1 点（試料番号 55）である。

(2) 分析方法

観察の際に支障となる有機物がほとんど消失していたので、試料の一部を採取し、400 倍の光学顕微鏡下で観察した。イネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を含む珪化組織片を、近藤・佐

瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

(3) 結果

試料中には、ススキ属やタケ亜科の短細胞列や機動細胞列など珪化組織片が数多く認められる。

(4) 考察

不明物質の灰像分析結果では、ススキ属やタケ亜科の珪化組織片が認められた。また、珪化組織片が認められた結果は、不明物質中にススキ属やタケ亜科の葉が含まれていた可能性を示唆する。不明物質は、31 号住の旧カマド火床部から出土しており、ススキ属やタケ亜科などの葉を燃料材として使用した残りの灰などに由来する可能性がある。

引用文献

千野裕道（1983）縄文時代のクリと集落周辺植生－南関東地方を中心に－. 東京都埋蔵文化財センター研究論集 , Ⅱ ,p.25-42.

千野裕道（1991）縄文時代に二次林はあったか－遺跡出土の植物性遺物からの検討－. 東京都埋蔵文化財センター研究論集 ,X,p.215-249.

伊東隆夫・山田昌久（編）（2012）木の考古学　出土木製品用材データベース . 海青社 ,449p.

泉　浩二・木越邦彦・上杉　陽・遠藤邦彦・原田昌一・小島泰江・菊原和子（1977）富士山東麓の沖積世ローム層 . 第四紀研究 ,16,p.84-87.

加藤芳朗（1960）「黒ボク土」土壌中の植物起源粒子について（予報）. 土壌肥料学会誌 ,30,p.549-552.

粉川昭平（1983）縄文人の主な植物食糧 . 加藤晋平・小林達雄・藤本　強編「縄文文化の研究 2　生業」, 雄山閣出版株式会社 ,p.42-49.

近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析 , その特性と応用 . 第四紀研究 ,25,p.31-64.

町田　洋･新井房夫（1976）広域に分布する火山灰－姶良 Tn 火山灰の発見とその意義－. 科学 ,46,p.339-347.

町田　洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山灰 . 第四紀研究 ,17,p.143-163.

町田　洋・新井房夫（2003）新編　火山灰アトラス . 東京大学出版会 ,336p.

町田　洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦（1984）テフラと日本考古学－考古学研究と関連するテフラのカタログ－. 渡辺直径編「古文化財に関する保存科学と人文･自然科学－総括報告書－」,p.865-928.

宮地直道（2011）過去 1 万 1000 年間の富士火山の噴火史と噴出率 , 噴火規模の推移 . 荒牧重雄・藤井敏嗣・中田節也・宮地直道編　富士火山 , 日本火山学会 ,p.79-95.

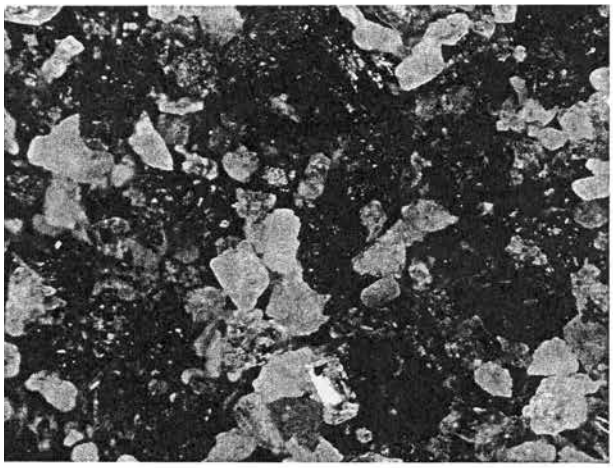
室井　綽（1960）竹笹の生態を中心とした分布 . 富士竹類植物園報告 ,p.103-122.

嶋田　繁（2000）伊豆半島､天城カワゴ平火山の噴火と縄文時代後～晩期の古環境 . 第四紀研究 ,39,p.151-164.

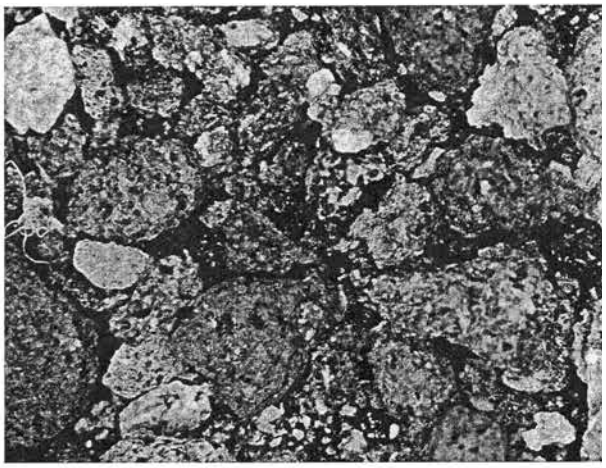
上杉　陽（1990）富士火山東方地域のテフラ標準柱状図－その 1：Ｓ -25 ～Ｙ -114 －. 関東の四紀 ,16,p.3-28.

山崎晴雄（1978）立川断層とその第四紀後期の運動 . 第四紀研究 ,16,p.231-246.

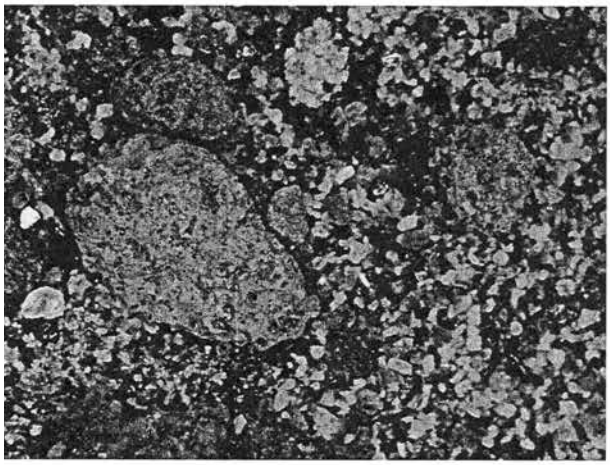
図版１　スコリア・火山ガラス・砂分の状況



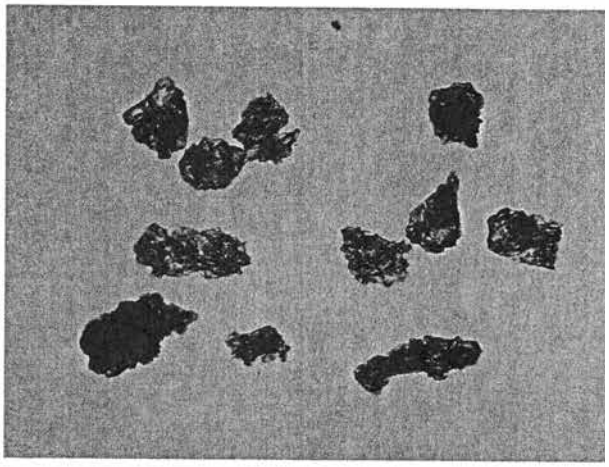
1. 細粒のスコリア（土壌資料；2）



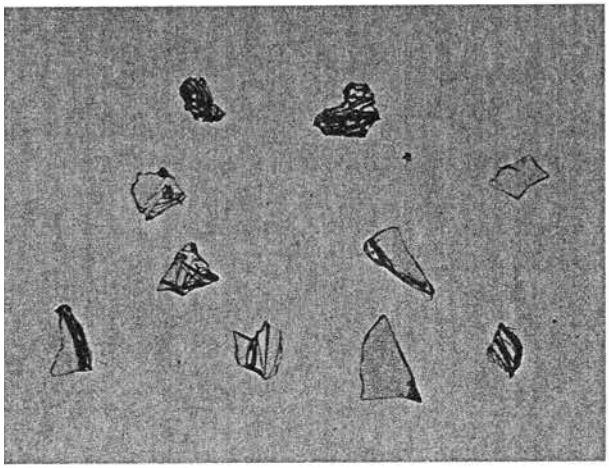
2. 粗粒のスコリア（土壌資料；6）



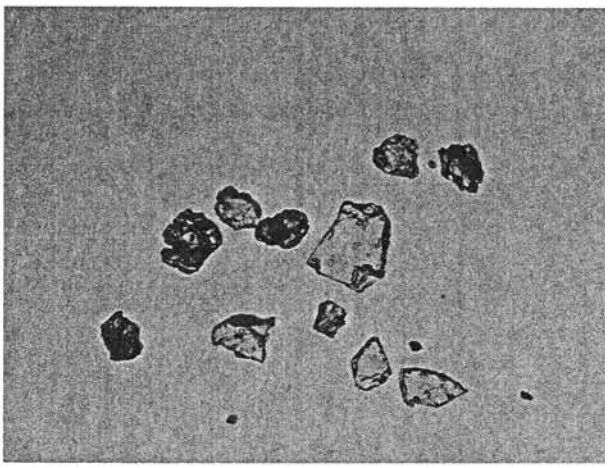
3. 砂分の状況（土壌資料；28）



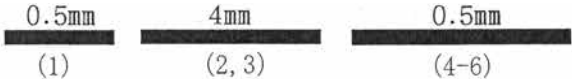
4. Kg の火山ガラス（土壌資料；12）



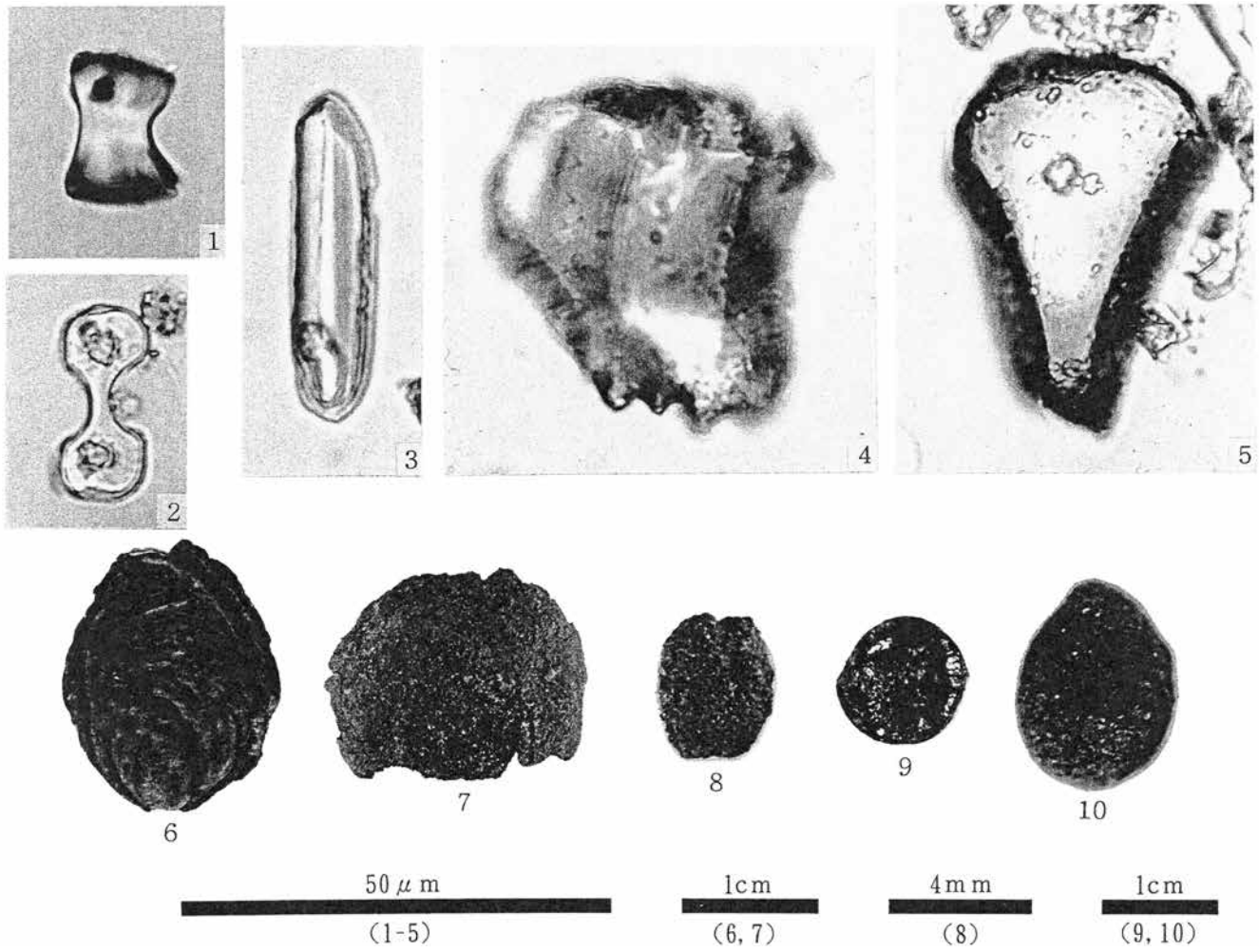
5. K-Ah の火山ガラス（土壌資料；26）



6. UG の火山ガラス（土壌資料；32）

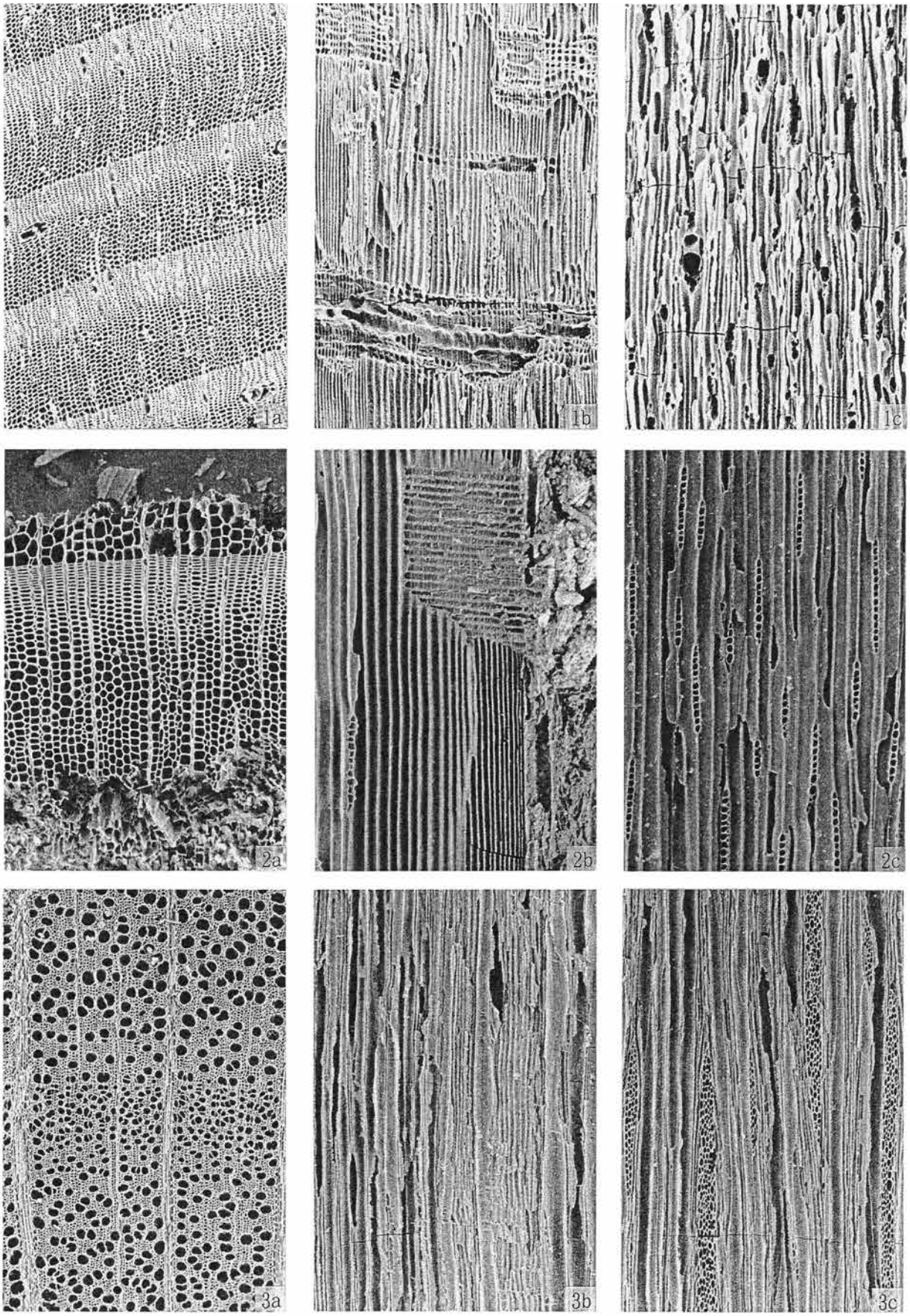


図版 2　植物珪酸体・種実



1. ネザサ節短細胞珪酸体（土壌資料；12）
2. ススキ属短細胞珪酸体（土壌資料；12）
3. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体（土壌資料；26）
4. ネザサ節機動細胞珪酸体（土壌資料；12）
5. ウシクサ族機動細胞珪酸体（土壌資料；26）
6. モモ（資料番号 48）
7. トチノキ（資料番号 22）
8. コムギ（資料番号 4）
9. アカザ科ーヒユ科（資料番号 29）
10. エノキグサ近似種（資料番号 56）

図版３　炭化材（1）



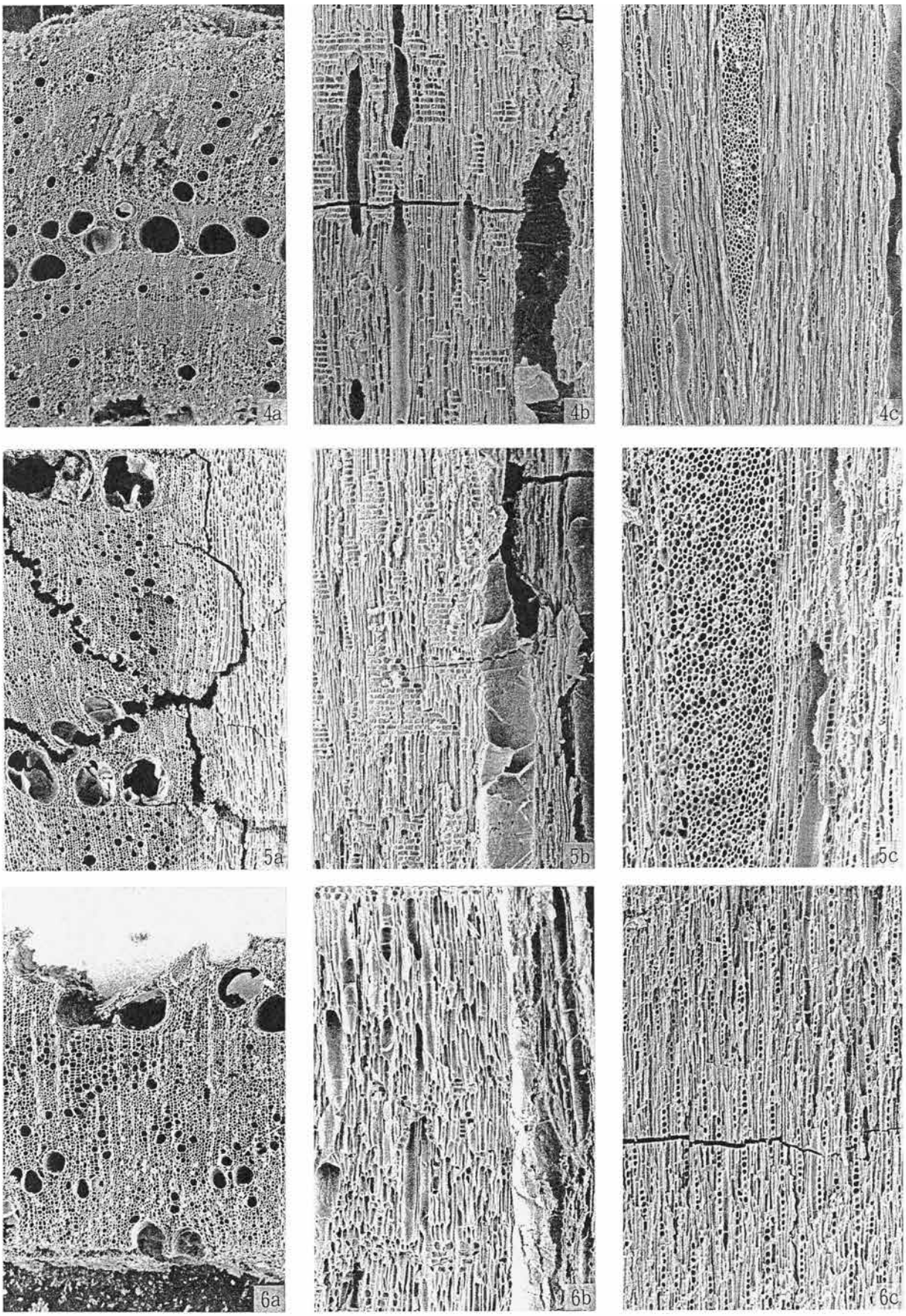
1. マツ属複維管束亜属（資料番号 60）

2. モミ属（資料番号 50）

3. ブナ属（資料番号 57）

a：木口，b：柾目，c：板目

図版 4　炭化材（2）



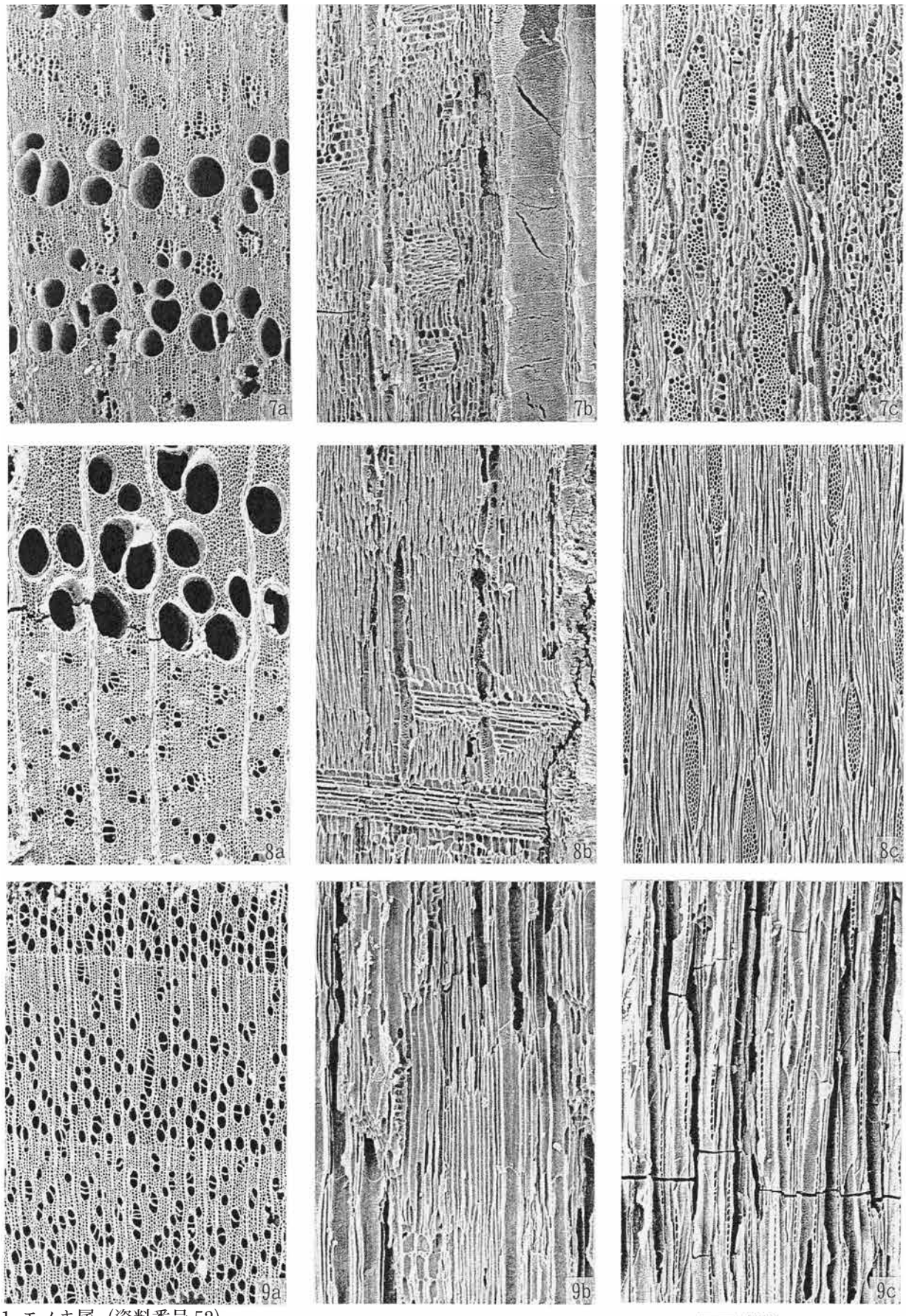
4. コナラ属コナラ亜属クヌギ節（資料番号 57）

5. コナラ属コナラ亜属コナラ節（資料番号 62）

6. クリ（資料番号 61）

a：木口，b：柾目，c：板目

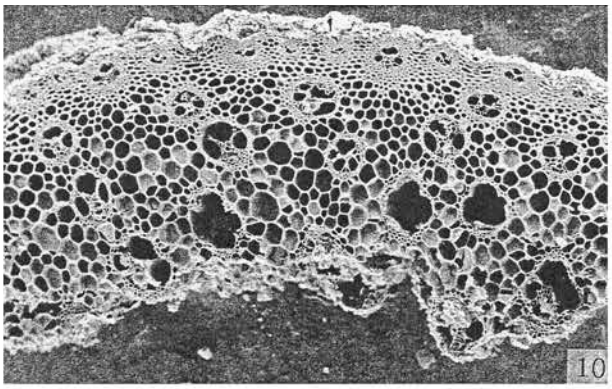
図版５　炭化材（3）

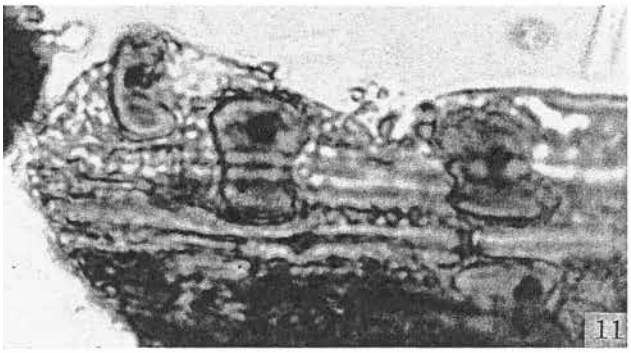


1. エノキ属（資料番号 52）
2. ヤマグワ（資料番号 59）
3. トチノキ（資料番号 61）

a：木口，b：柾目，c：板目

図版 6　炭化材（4）・組織片





10. イネ科タケ亜科（資料番号 49）　横断面

11. タケ亜科短細胞列（資料番号 55）

12. ススキ属短細胞列（資料番号 55）

付編２　狐原遺跡から出土した動物遺体

植月　学

1. 概要

上野原市狐原Ⅰ遺跡の古墳時代後期の住居跡（25 号住）カマドより動物遺体が検出された。資料はいずれも強く被熱し、白色化した焼骨片である。おおむね 15 点程度のまとまりで収納されているが、さらに細片化しているものもある。

2. 同定結果（表）

表には部位をある程度推測できた 6 点について所見を示した。いずれも哺乳類の可能性が高い。その他の標本も哺乳類のようだが、部位が判然としないため除外した。

6 点のうち種まで同定できたのはニホンザルの腸骨（No.1）と腓骨（No.2）の 2 点のみであった。その他の 4 点もシカやイノシシほど大きくはなく、ニホンザルやタヌキ、ノウサギなどの中～小型獣の可能性が高い。

No.	種	部位	左右	位置	備考
1	ニホンザル	寛骨	左	腸骨	
2	ニホンザル	腓骨	右	近位端	
3	中型獣	肋骨	?	骨幹部	タヌキより大、サルより小
4	中型獣	四肢骨？	?	骨幹部	
5	中型獣	四肢骨？	?	骨幹部	
6	中型獣	四肢骨？	?	骨幹部	脛骨に似るが、一致する標本はなし。

※すべて焼骨。全体で最低 15 点ほどの焼骨が存在する。

3. 考察

少数の資料ではあるが、今回の同定結果により、古墳時代の上野原市域において中型の哺乳類が食用とされていた可能性が高いことは言える。ニホンザルの報告はおそらく県内遺跡では初めてである。ニホンザルの報告自体は縄文時代以降、珍しいものではない。山梨県内でも早川町に伝わる江戸時代の文献史料にニホンザルの肉や皮を江戸から催促されたものがある（山梨県立博物館 2008）。

古墳時代や古代のカマドからの動物遺体出土例は以下のような事例が知られる。

・笛吹市車居遺跡（古墳時代後期・植月 2007）　カエル、シカ？、哺乳類

・大月市御所遺跡　（奈良～平安時代・小林 1998）マイワシ、鳥類？、哺乳類？

・都留市九鬼Ⅱ遺跡　（平安時代・パリノ・サーヴェイ株式会社 1996）　鳥類、ウサギ、シカ

いずれの例も焼骨であるが、調理による被熱の程度を超えている。解体、消費後に骨が何らかの理由によってカマド内に混入（投入）され、被熱したと推測される。

カマド内から動植物遺体が出土する背景について、小林ら（1991）は「竈神」や「物送り」のような祭祀的行為、あるいは食事や調理後の食物残滓が廃棄された可能性を論じている。いずれの解釈が妥当であるかの判断は困難だが、小林らが指摘するように、カマドから出土する少量の動物遺体は長期的な生業活動の反映というよりは、ごく短期的な消費活動の結果とみなすのが妥当である。したがって、本遺跡や上記 3 遺跡

において小型魚から大型獣まで組成にばらつきが見られる点も時期差や地域差と即断することはできない。

貝塚や低湿地遺跡など動物遺体の豊富な遺跡に乏しい内陸部においては、たとえ短期的であってもこうした動物資源利用の証拠を積み重ねて食生活を復元していく作業が重要であり、今後も事例の蓄積に努めていきたい。

末筆ながら貴重な資料を分析する機会を与えていただいた上野原市教育委員会の小西直樹氏に感謝申し上げる次第である。

引用文献

植月　学　2007 「車居遺跡第 2 次調査出土の動植物遺体」『今宮遺跡・車居遺跡』 笛吹市教育委員会　216 - 218 頁

小林公治・吉川純子・樋泉岳二　1991 「三ツ俣遺跡出土の動植物遺体とその考古学的コンテクスト」『神奈川考古』27　141 ― 158 頁

小林公治ほか　1998 『大月市御所遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター

パリノ・サーヴェイ株式会社　1996 「九鬼Ⅱ遺跡出土の自然化学分析」『九鬼Ⅱ遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター　76 ― 79 頁

山梨県立博物館　2008 『甲州食べもの紀行』

1．ニホンザル　寛骨（左）腸骨、2．ニホンザル　腓骨（右）、3．中型獣　肋骨・骨幹部、4．中型獣　四肢骨？　骨幹部、5．中型獣　四肢骨？　骨幹部、6．6 中型獣　四肢骨？骨幹部

スケールは 1㎝

7．No.1 とニホンザル腸骨現生標本、8．No.2 とニホンザル腓骨現生標本

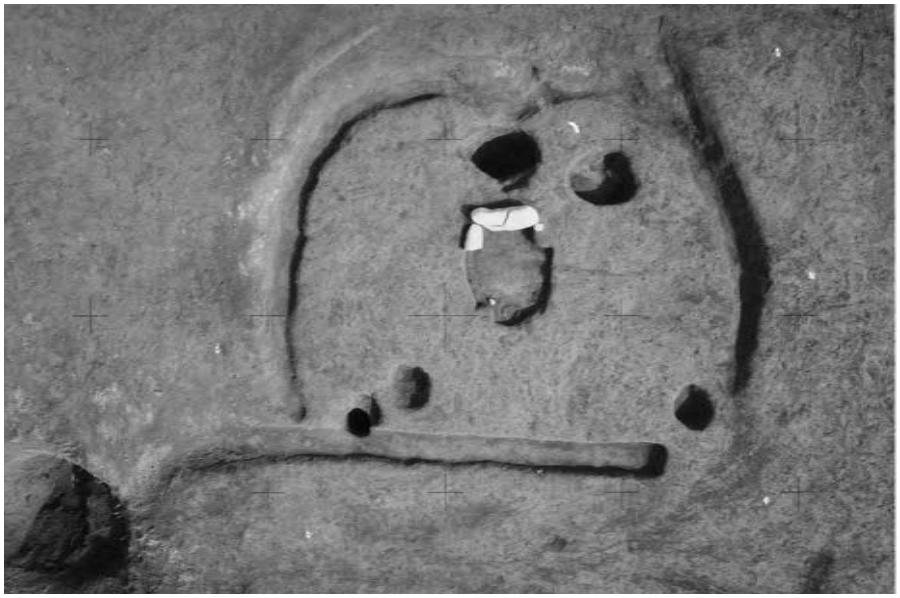
写 真 図 版

図版 1

狐原遺跡航空写真

図版 2

縄文時代住居址群
（垂直写真）



5 号住居址（垂直写真）

5 号住居址　遺物出土状況

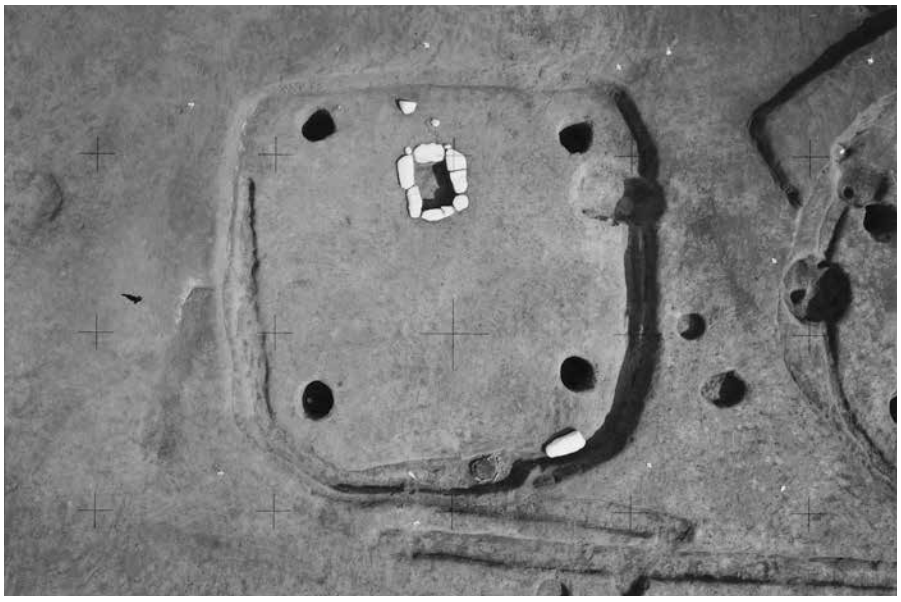
図版 3

6 号住居址（垂直写真）

6 号住居址　石柱・石壇

6 号住居址　埋甕

図版 4



7 号住居址（垂直写真）

7 号住居址　埋甕

7 号住居址　土器出土状況

図版 5

8 号住居址（垂直写真）

8 号住居址　埋甕

9 号住居址（垂直写真）

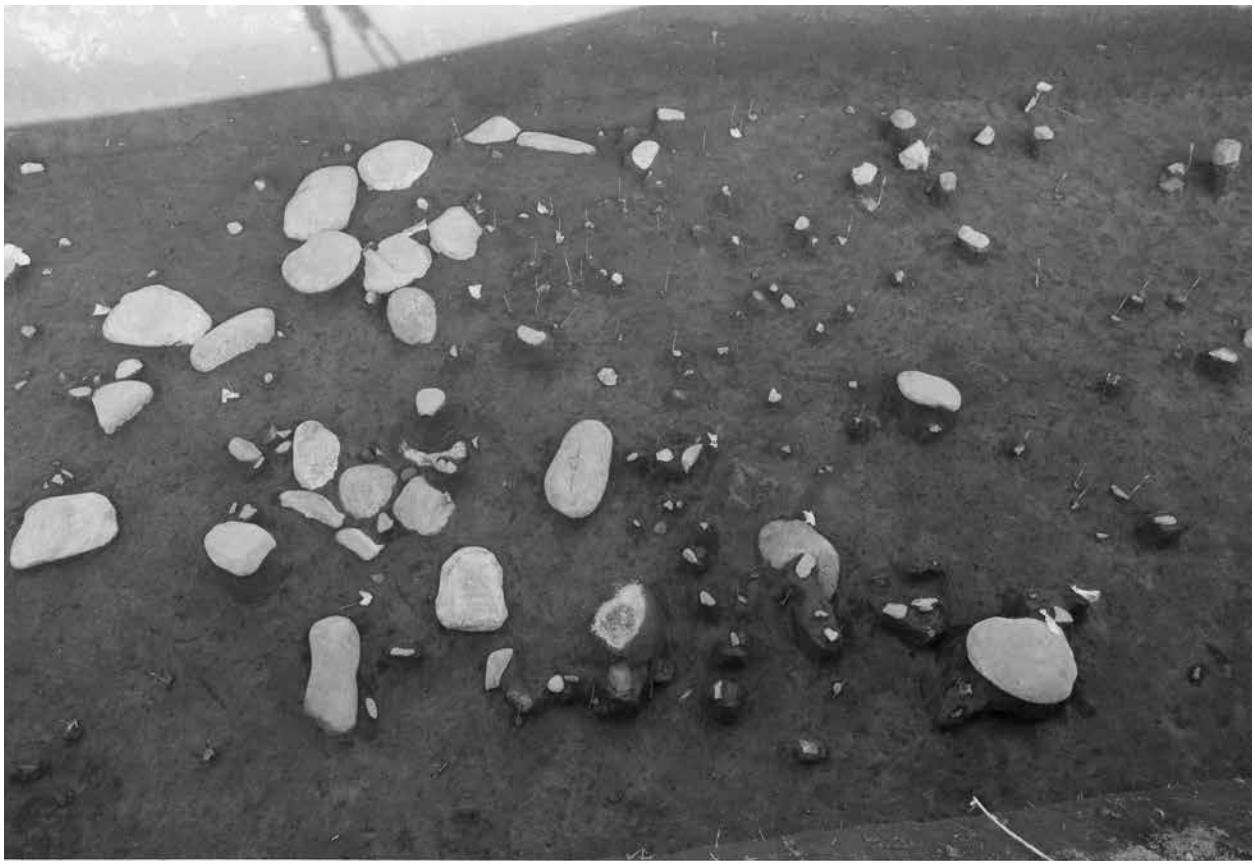
図版 6

10 号住居址（北から）

11 号住居址（垂直写真）

17 号住居址調査区
（北西から）

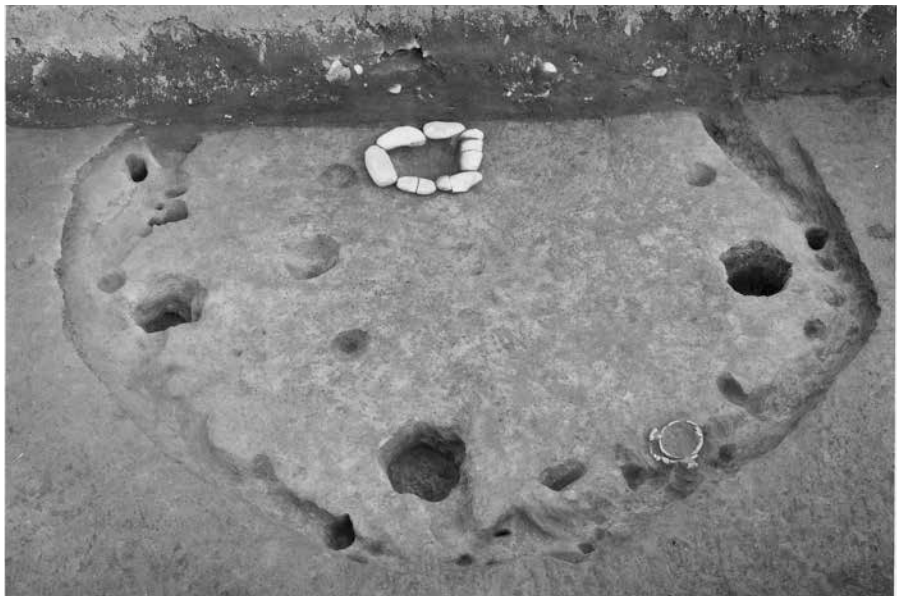
図版 7



17 号住居址　覆土上層　遺物出土状況

17 号住居址　床面　遺物出土状況

図版 8



17 号住居址（西から）

17 号住居址　立石

17 号住居址　埋甕

図版 9

敷石住居址

図版 10

敷石住居址　張出部

敷石住居址　炉

敷石住居址　張出部　末端

敷石住居址　土器出土状況

敷石住居址　石斧出土状況

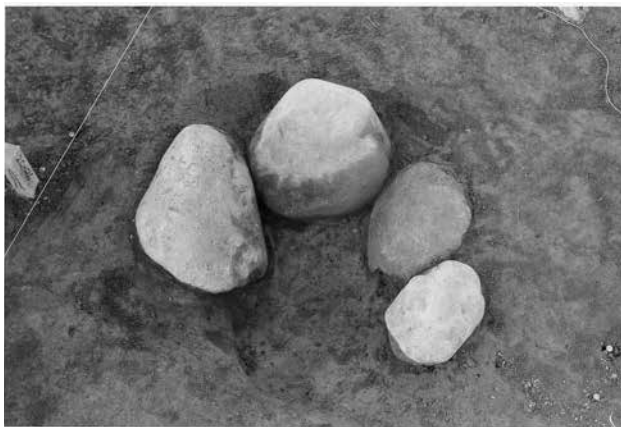
図版 11

集石群検出状況（北東から）

3 号集石

10 号集石　下部

4 号集石　上部

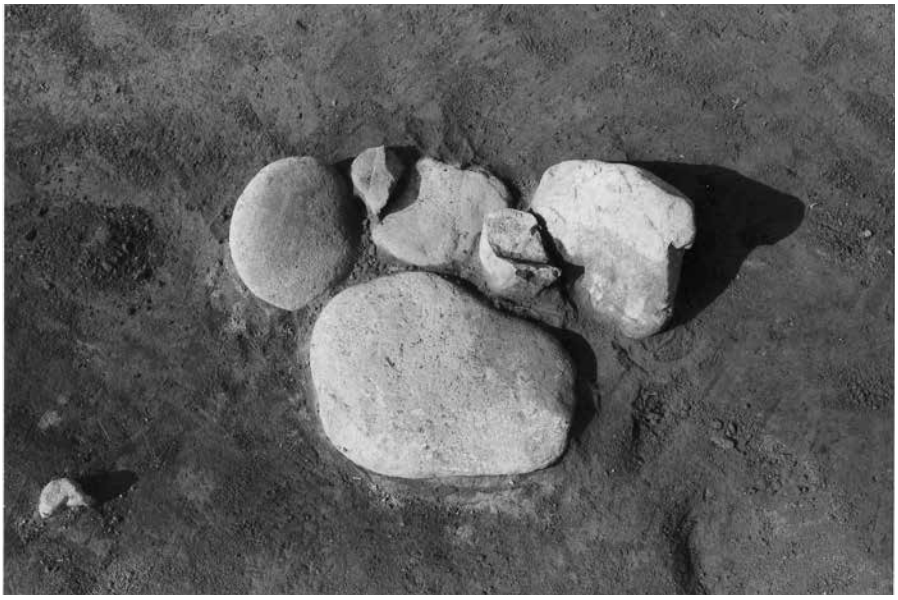


4 号集石　下部

図版 12

11 号集石

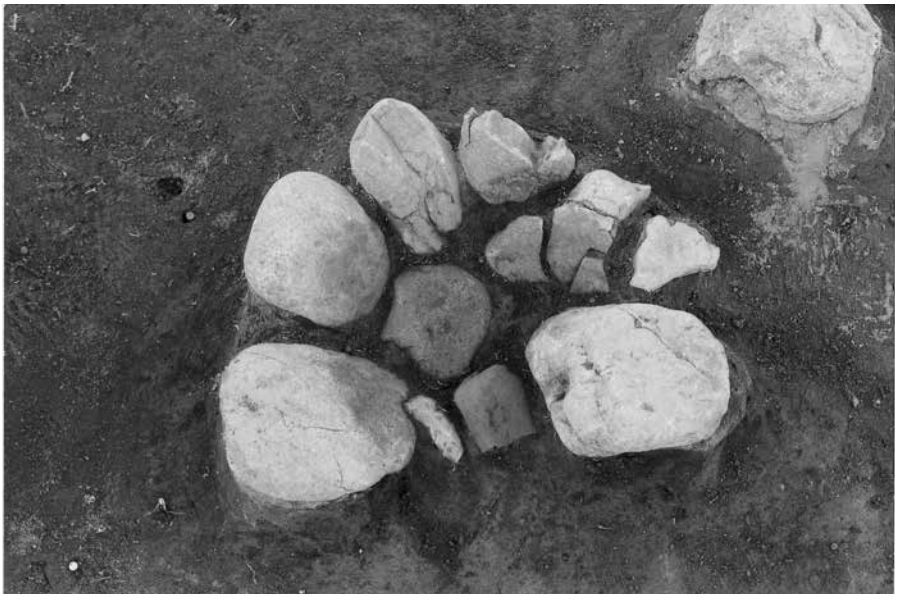
12 号集石



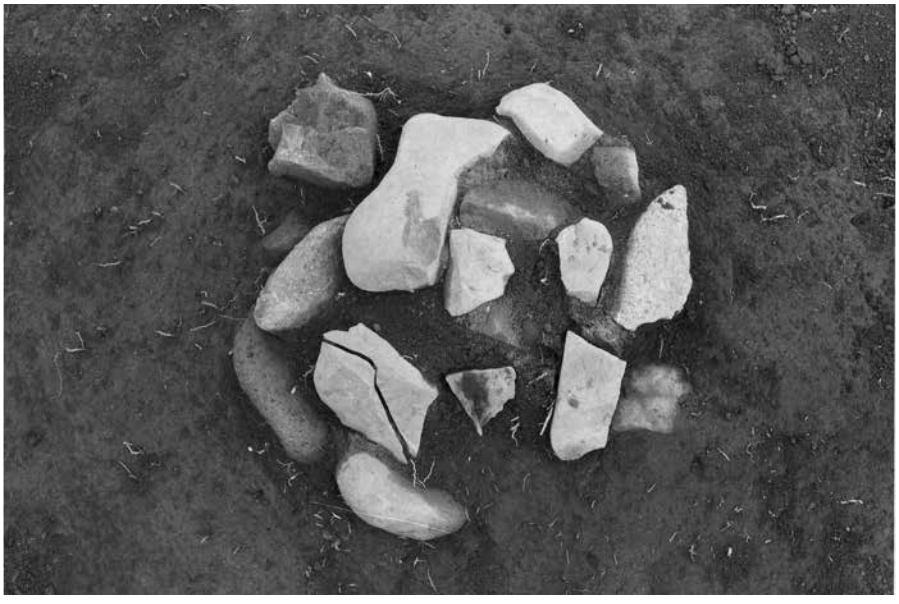
13 号集石

図版 13

14 号集石

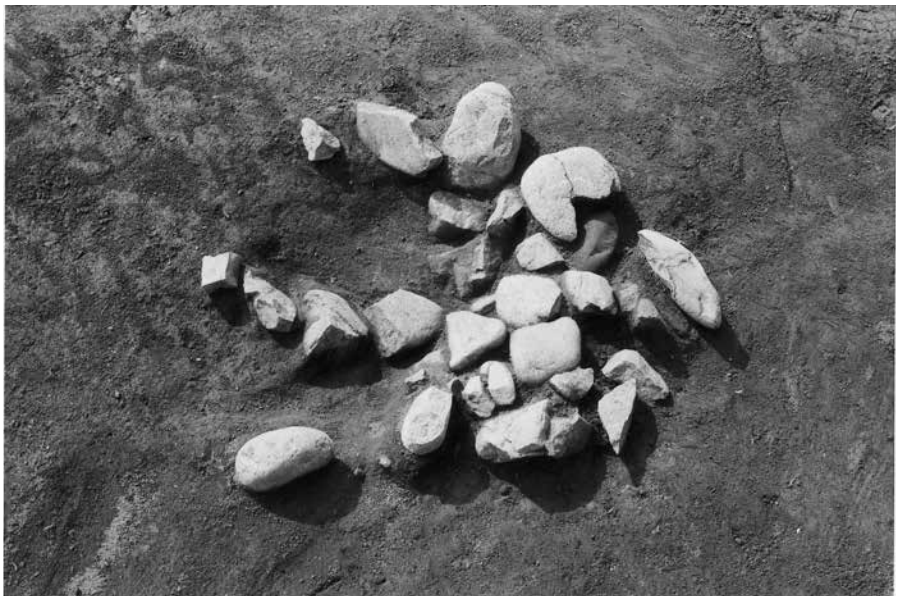


18 号集石　下部

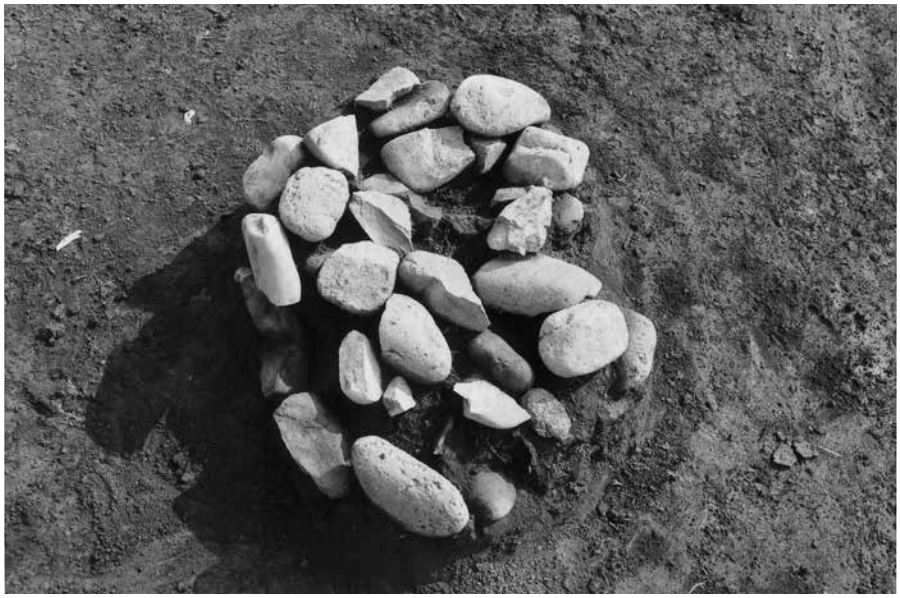


19 号集石

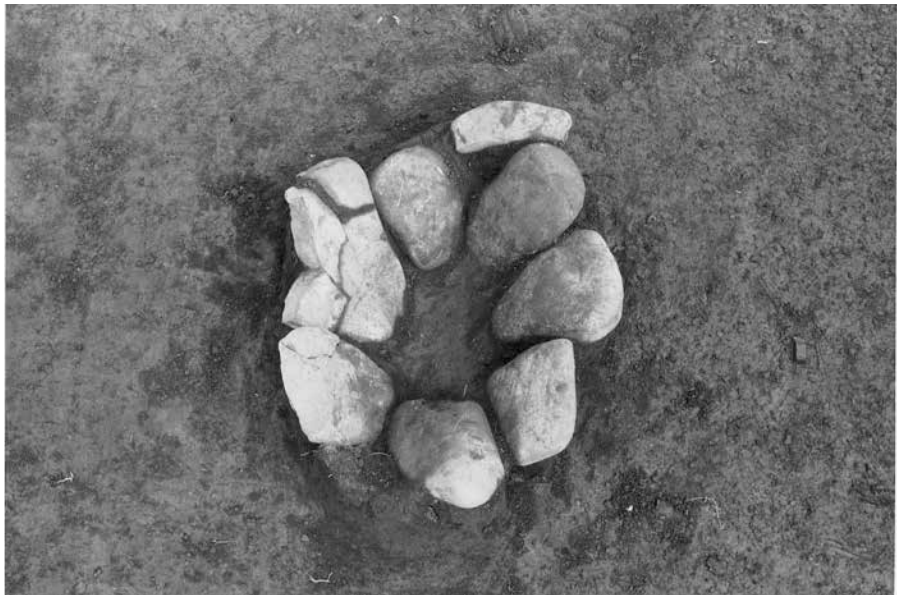
図版 14



21 号集石



23 号集石　上部



23 号集石　下部

図版 15

31 号集石　断面

35 号集石

37 号集石

図版 16

38 号集石

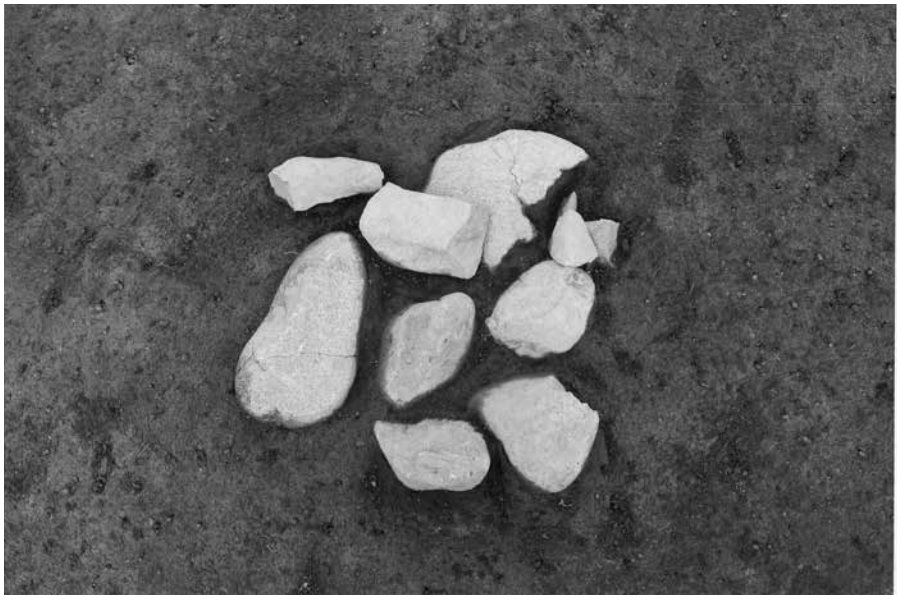
38 号集石　断面

40 号集石

図版 17

41 号集石

45 号集石



46 号集石

図版 18

47 号集石　全景

47 号集石　下部

49 号集石　上部

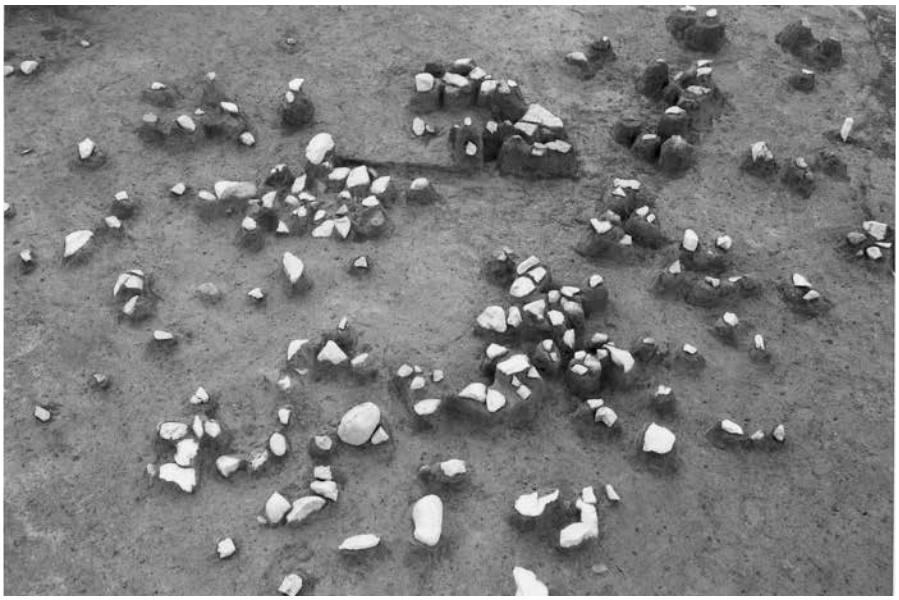
図版 19

49 号集石　下部

50 号集石

51 号集石

図版 20



54 号集石

56 号（右）～ 58 号集石

57 号（右）・58 号集石

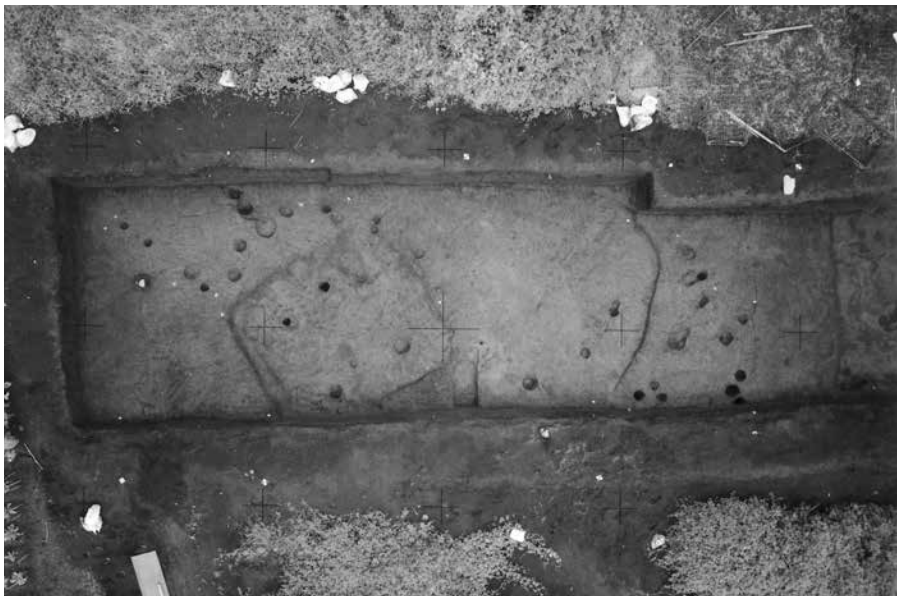
図版 21

1 号・2 号土坑

3 号土坑

4 号土坑

図版 22



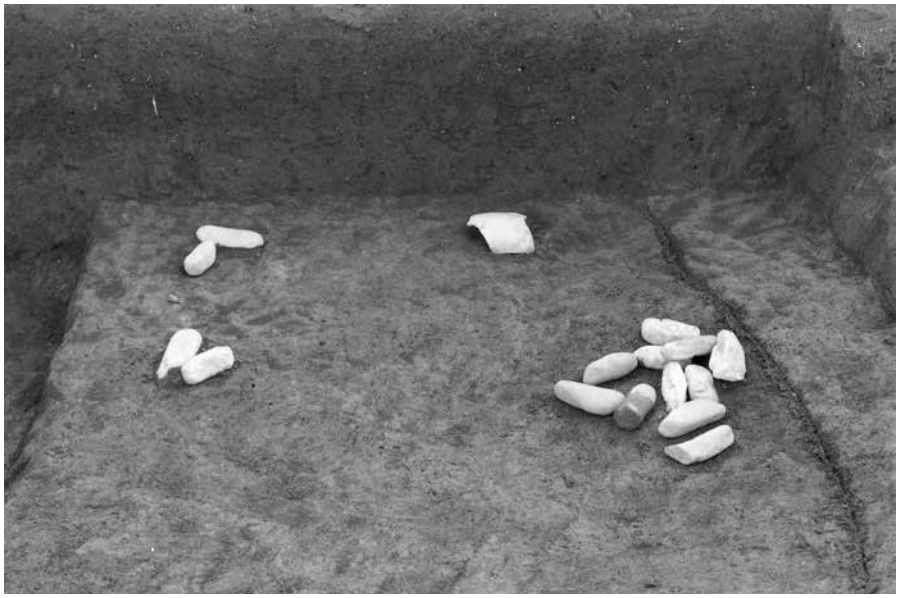
1 号・2 号ピット群
（垂直写真）

1 号埋設土器

2 号埋設土器

図版 23

1 号住居址　掘り方



1 号住居址　編物石

2 号住居址　掘り方

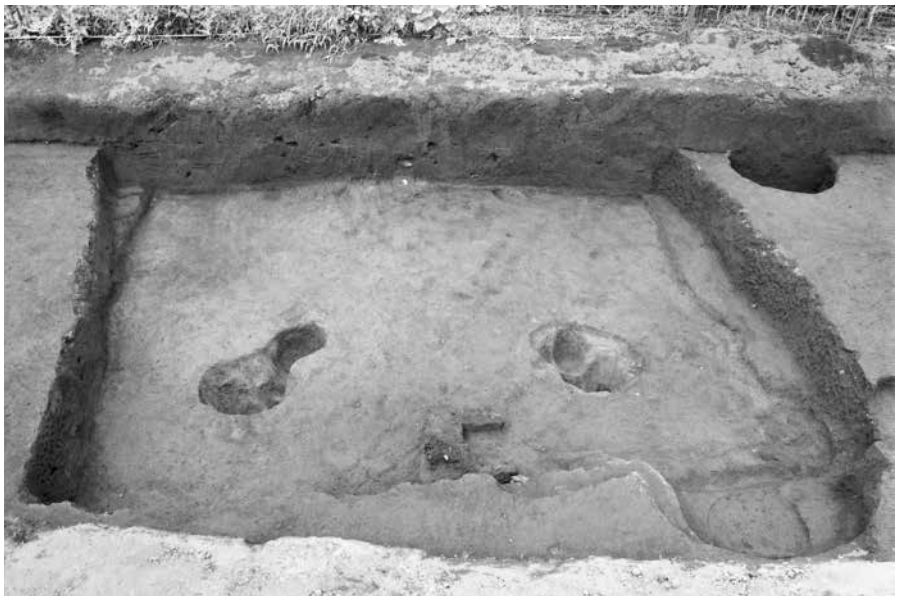
図版 24

3 号住居址

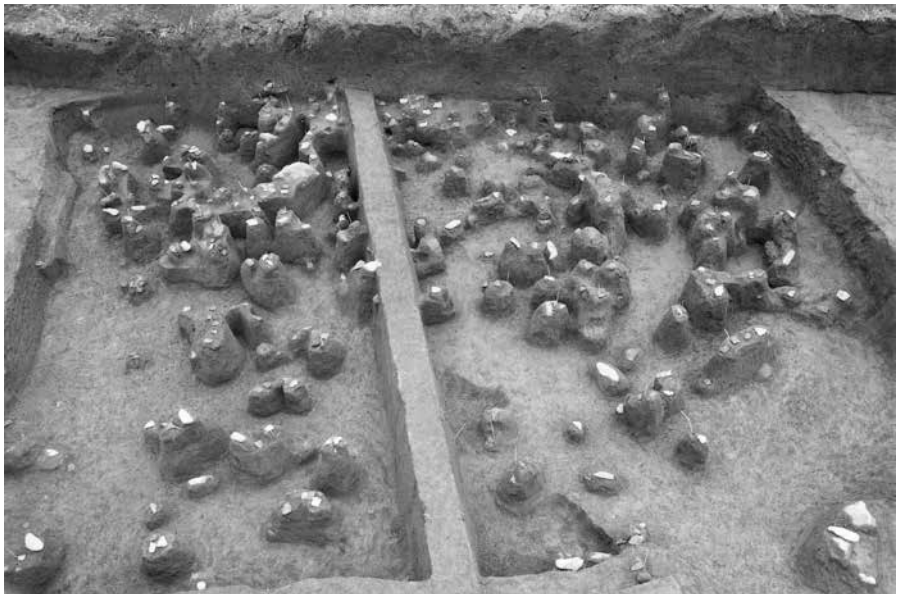
4 号住居址（手前）

12 号住居址

図版 25



13 号住居址



13 号住居址　遺物出土状況

13 号住居址　鉄鏃出土状況

図版 26

14 号住居址

14 号住居址　カマド

14 号住居址　紡錘車出土状況

図版 27

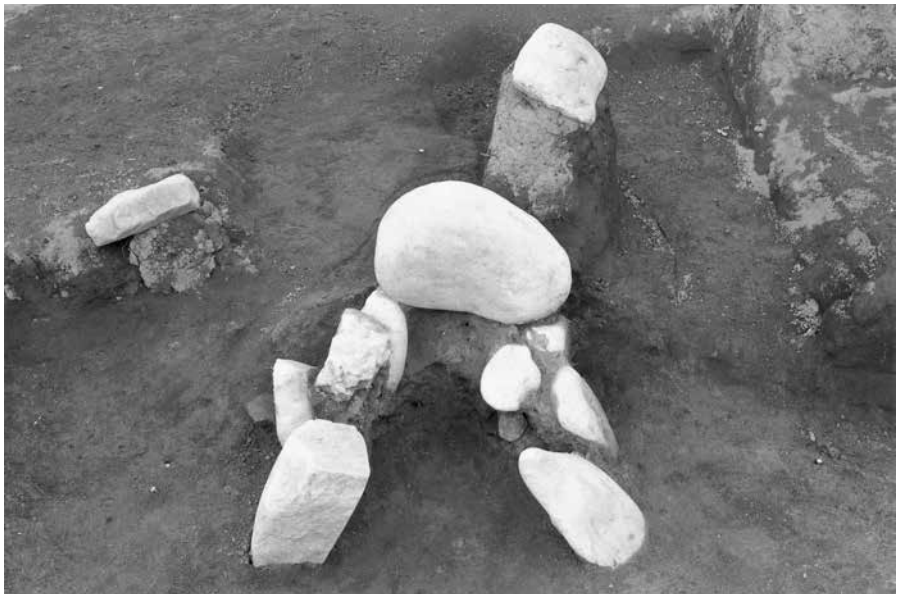
15 号住居址

19 号・20 号住居址

20 号住居址　土器出土状況

図版 28

21 号住居址

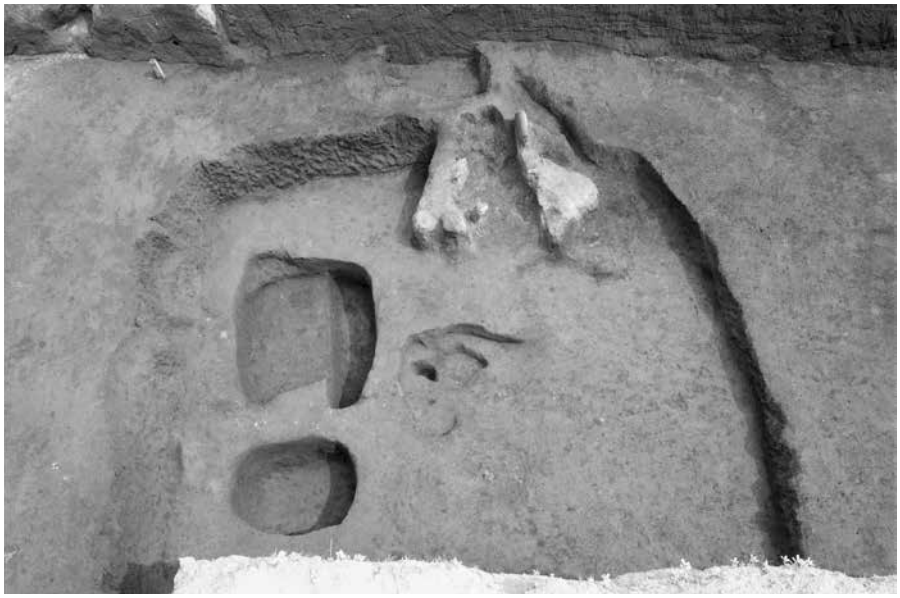


21 号住居址　カマド

22 号住居址

図版 29

22 号住居址　カマド



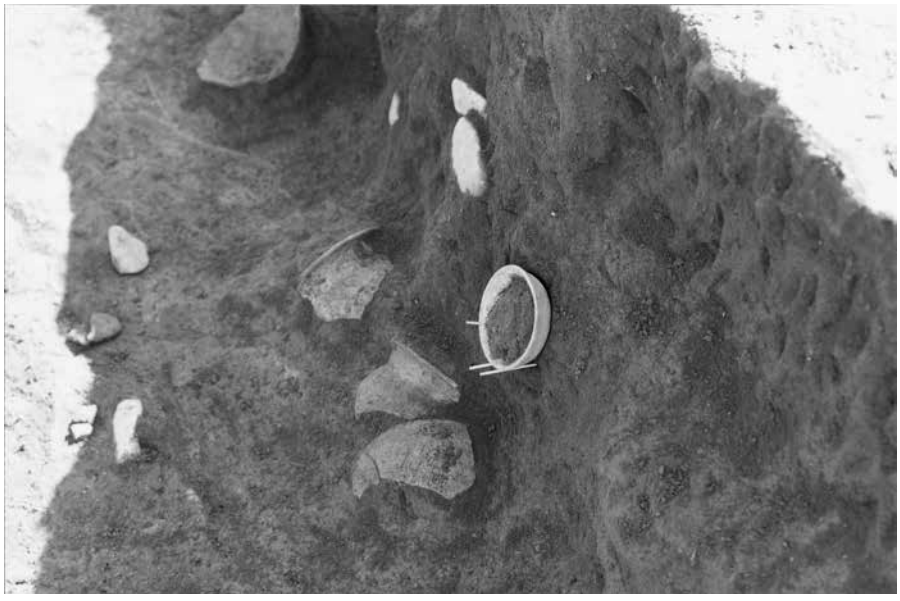
23 号住居址

25 号（手前）・30 号住居址

図版 30

25 号住居址

25 号住居址　カマド



25 号住居址　土器出土状況

図版 31

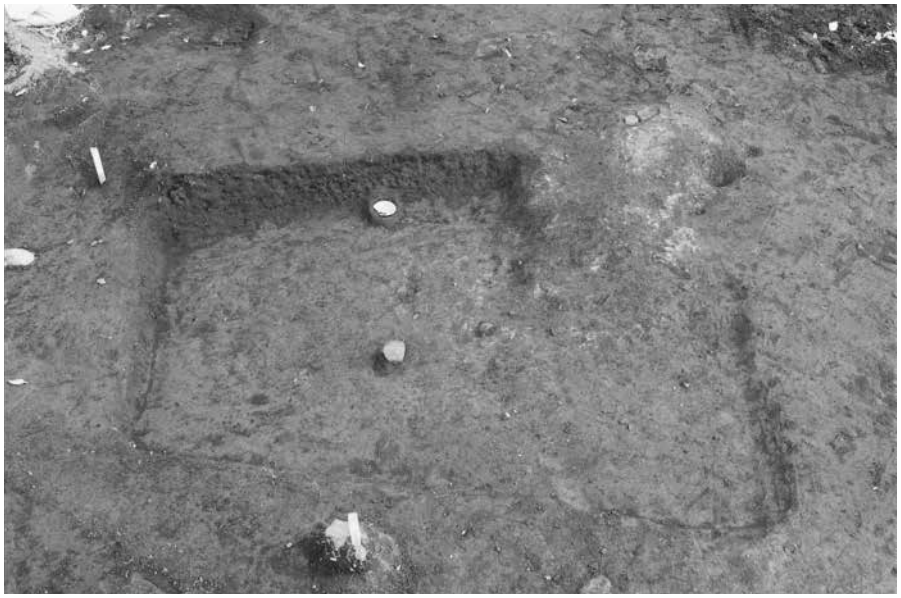
26 号住居址

27 号住居址

28 号住居址

図版 32

28 号住居址　土器出土状況

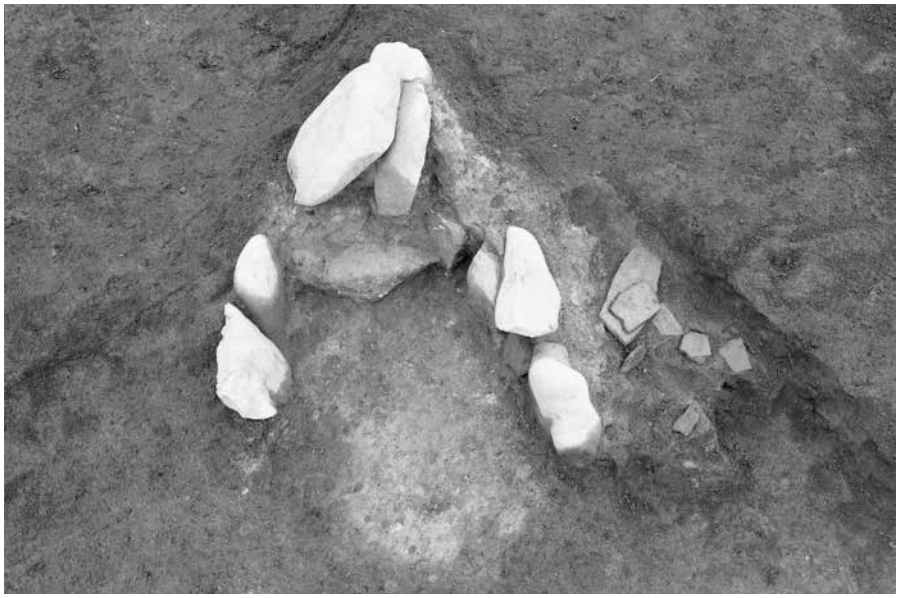


29 号住居址

30 号住居址

図版 33

31 号住居址



31 号住居址　新カマド

31 号住居址　旧カマド

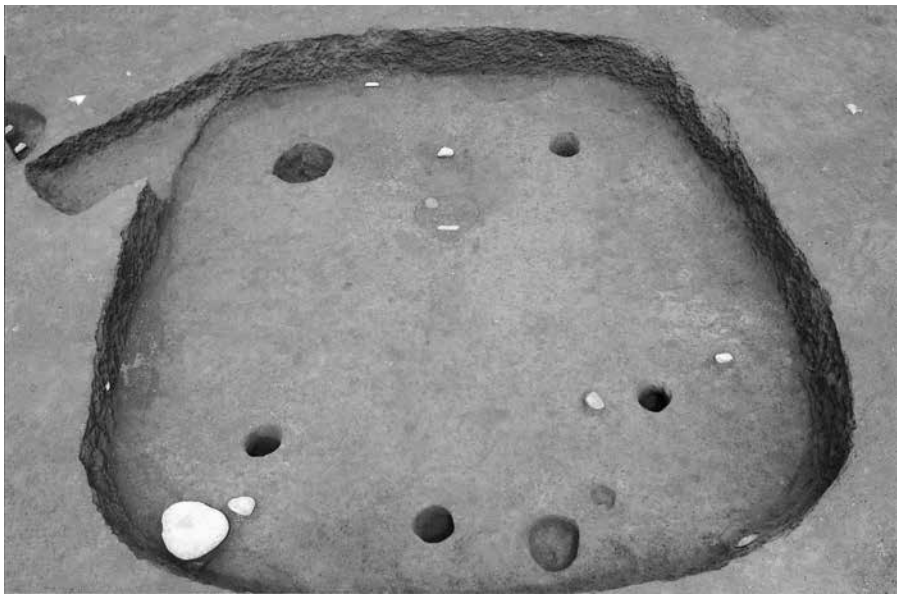
図版 34

32 号住居址

32 号住居址　カマド

32 号住居址　焼印出土状況

図版 35



34 号住居址

34 号住居址　炉

2 号堀立柱建物址（垂直写真）

1 号堀立柱建物址（垂直写真）

図版 36

3 号堀立柱建物址

4 号堀立柱建物址

5 号堀立柱建物址

図版 37

6 号堀立柱建物址

7 号堀立柱建物址

9 号・10 号堀立柱建物址

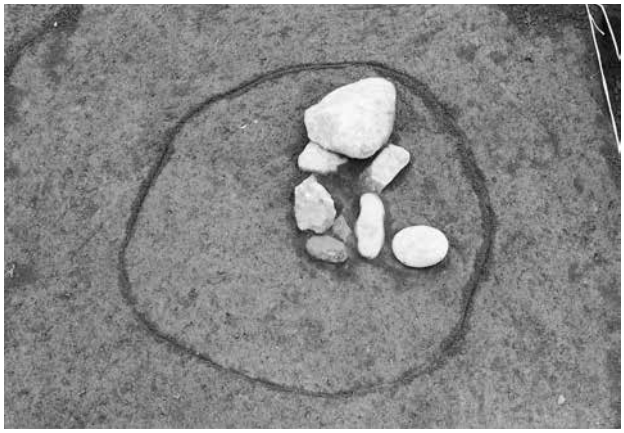
図版 38

ピット群（P15 ～P 29）右側は 32 号住居址

43 号土坑

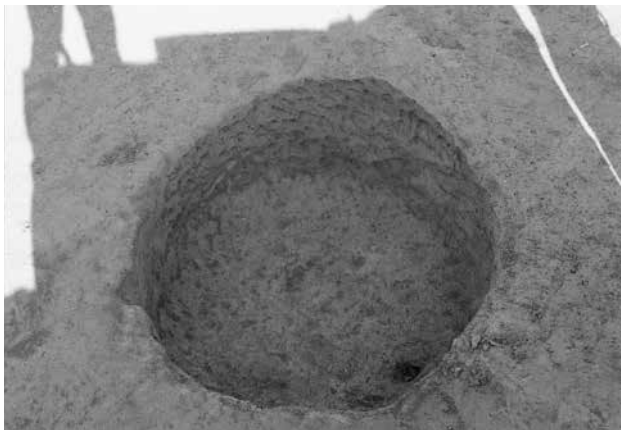
44 号土坑

56 号土坑

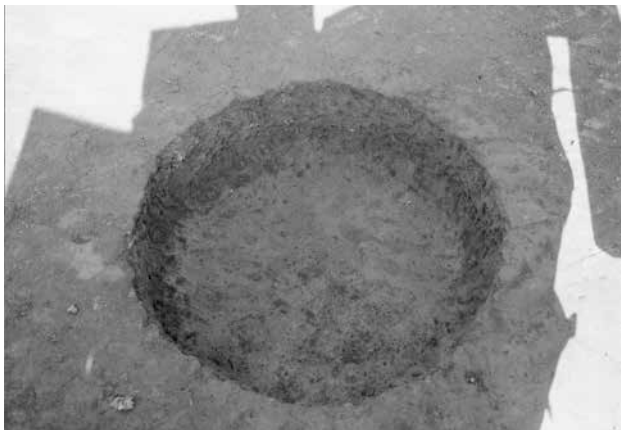


57 号土坑

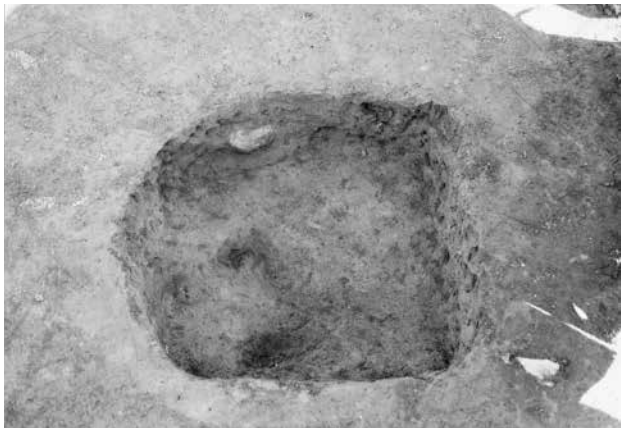
図版 39



69 号土坑

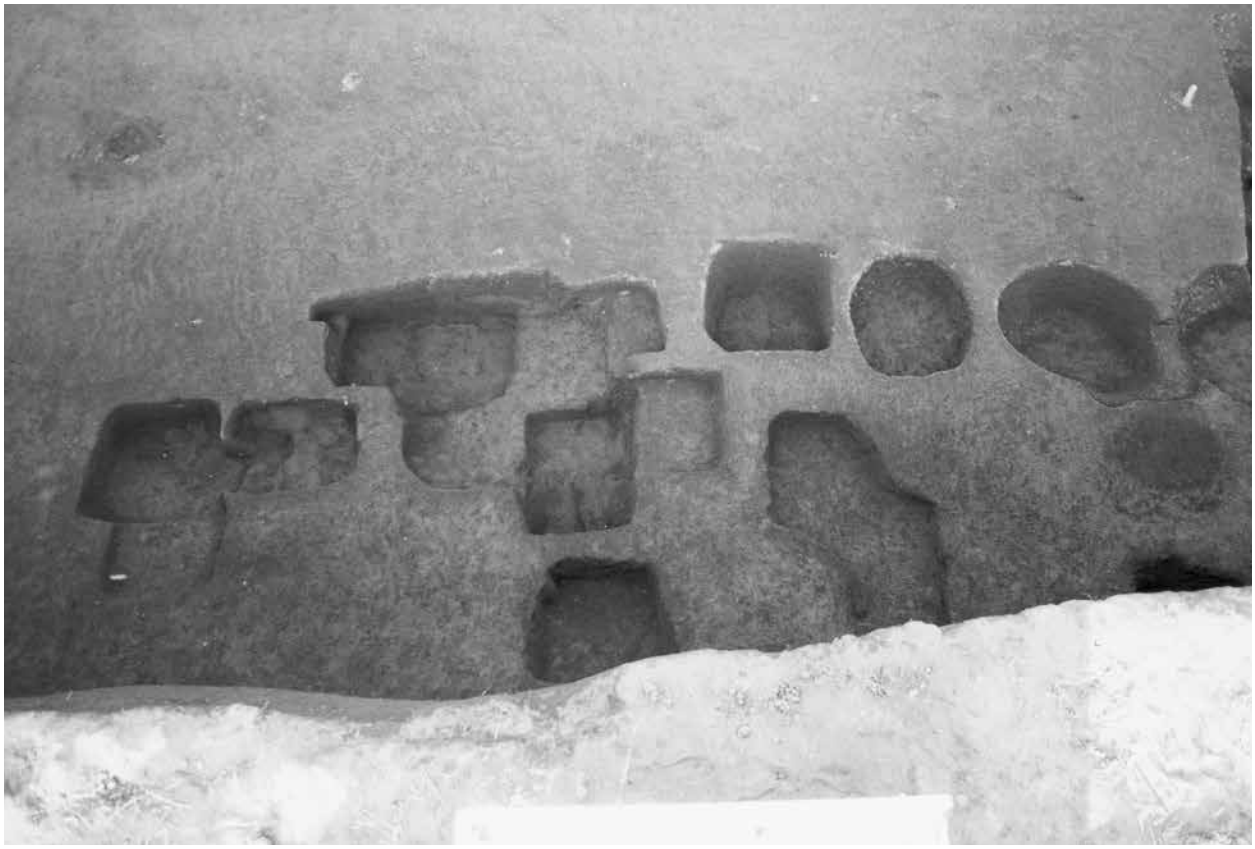


73 号土坑



79 号土坑

87 号土坑

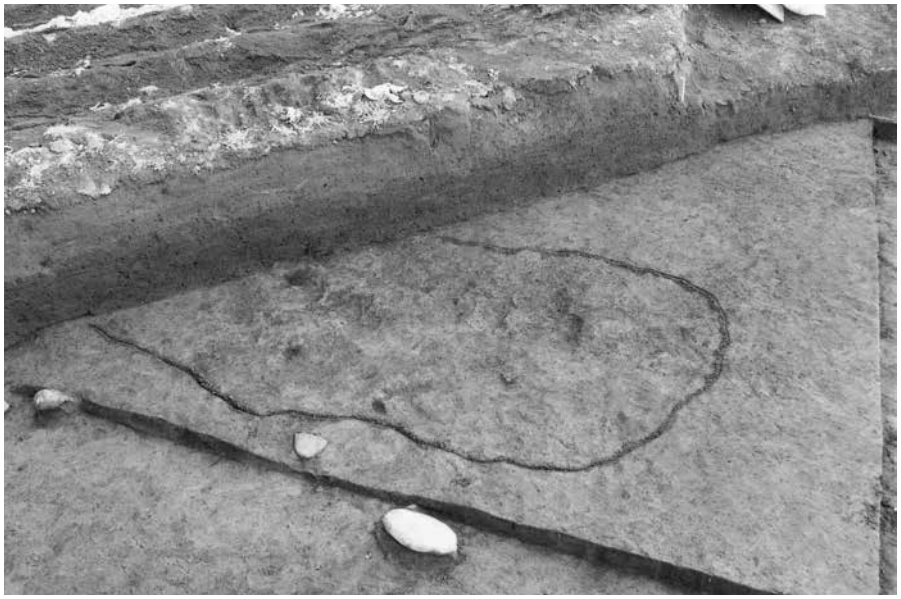


S － 28 区周辺の土坑群

図版 40

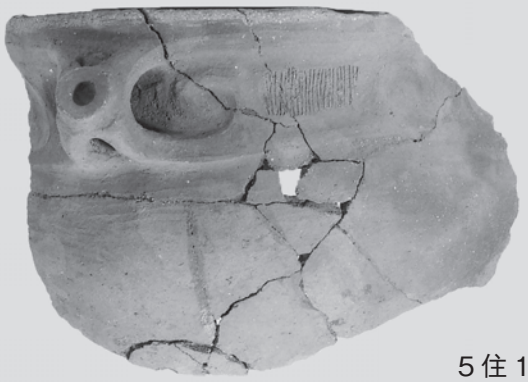
115 号土坑

1 号竪穴状遺構、157 号土坑（右）



硬化面

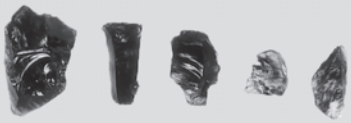
図版 41



5住1

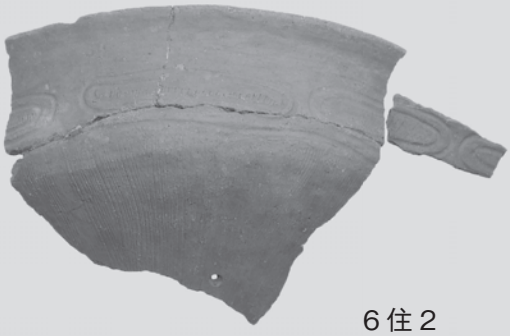
5住2

5住6



5住7～11

6住1



6住2

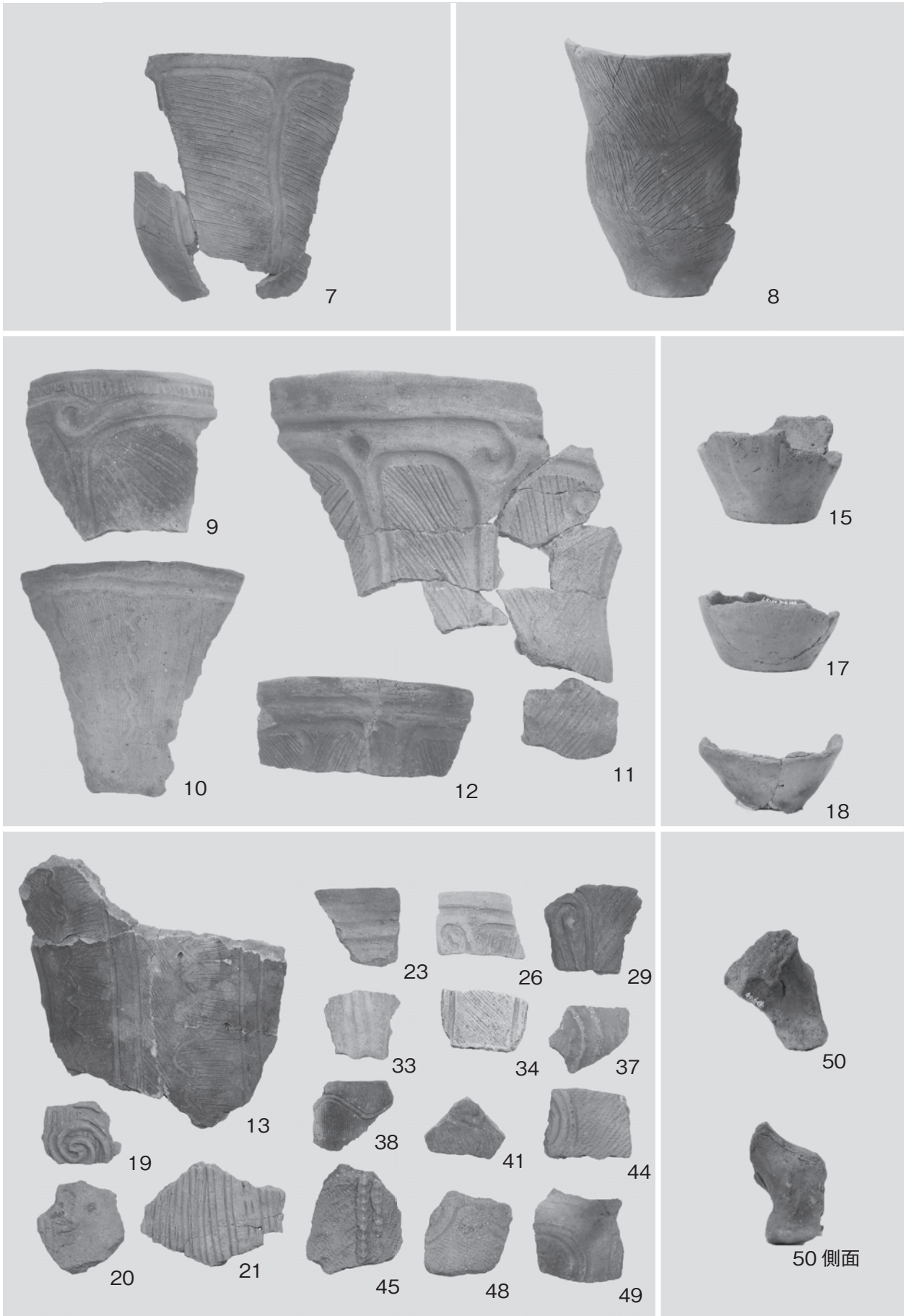
6住3

6住4

6住6

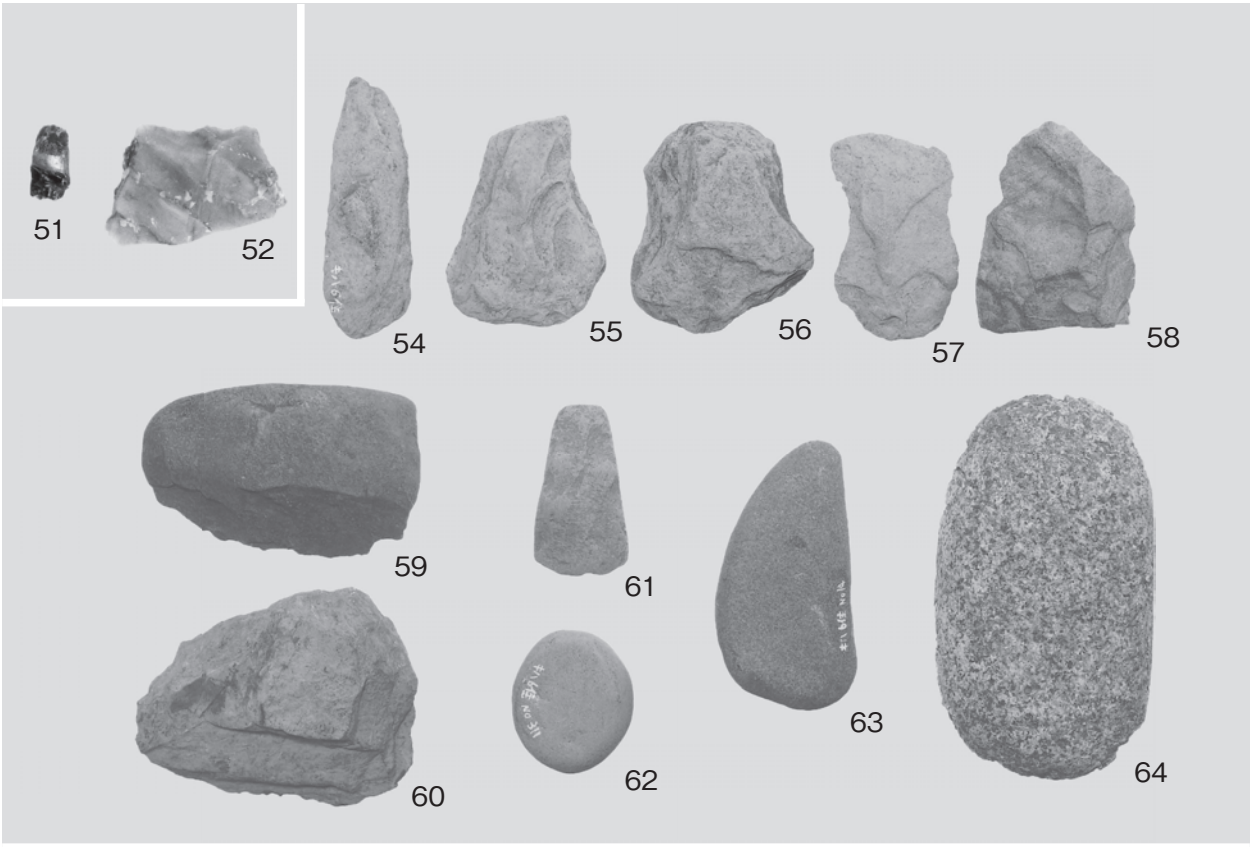
5号住居址　土器・石器、6号住居址　土器

図版 42



6 号住居址　土器・土製品

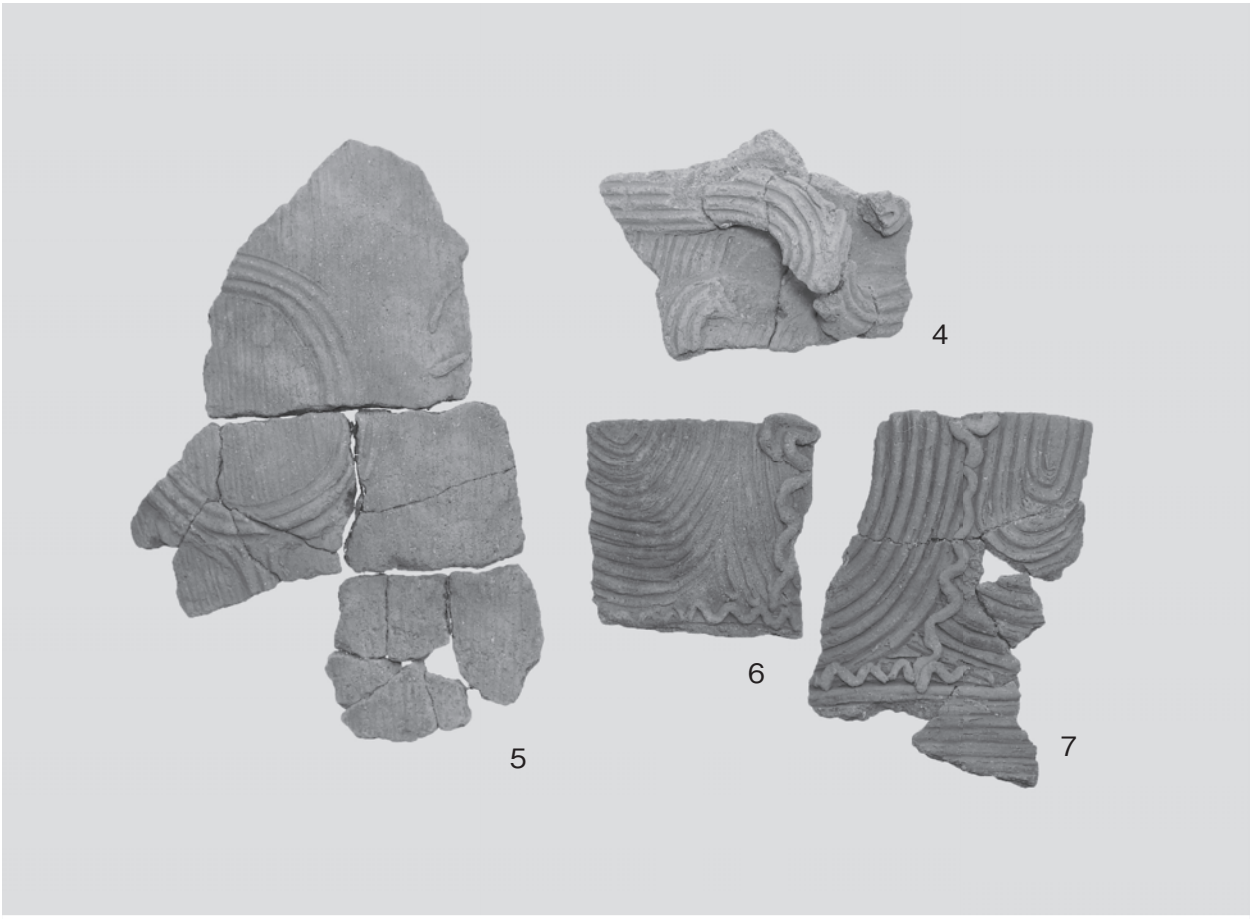
図版 43

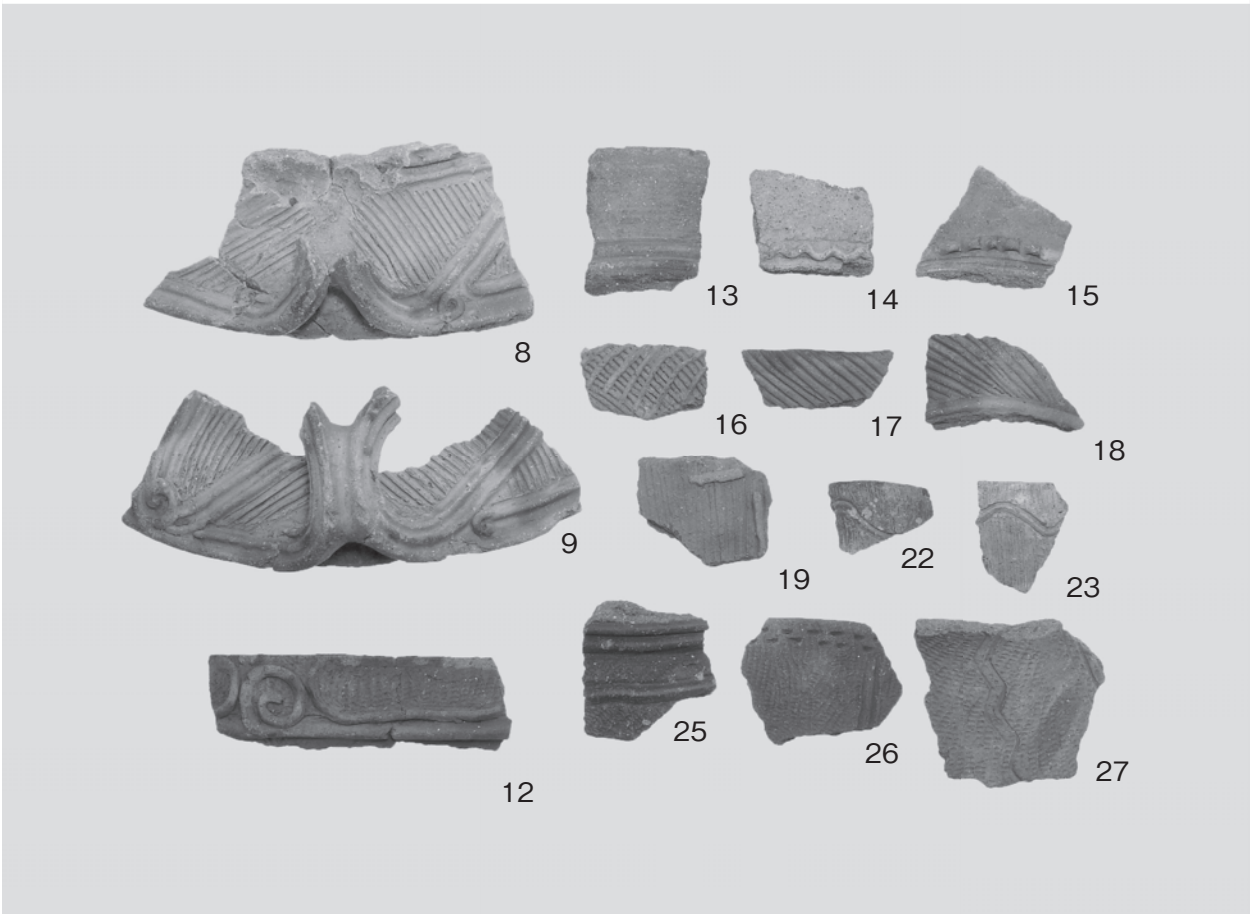


6 号住居址　石器

7 号住居址　土器

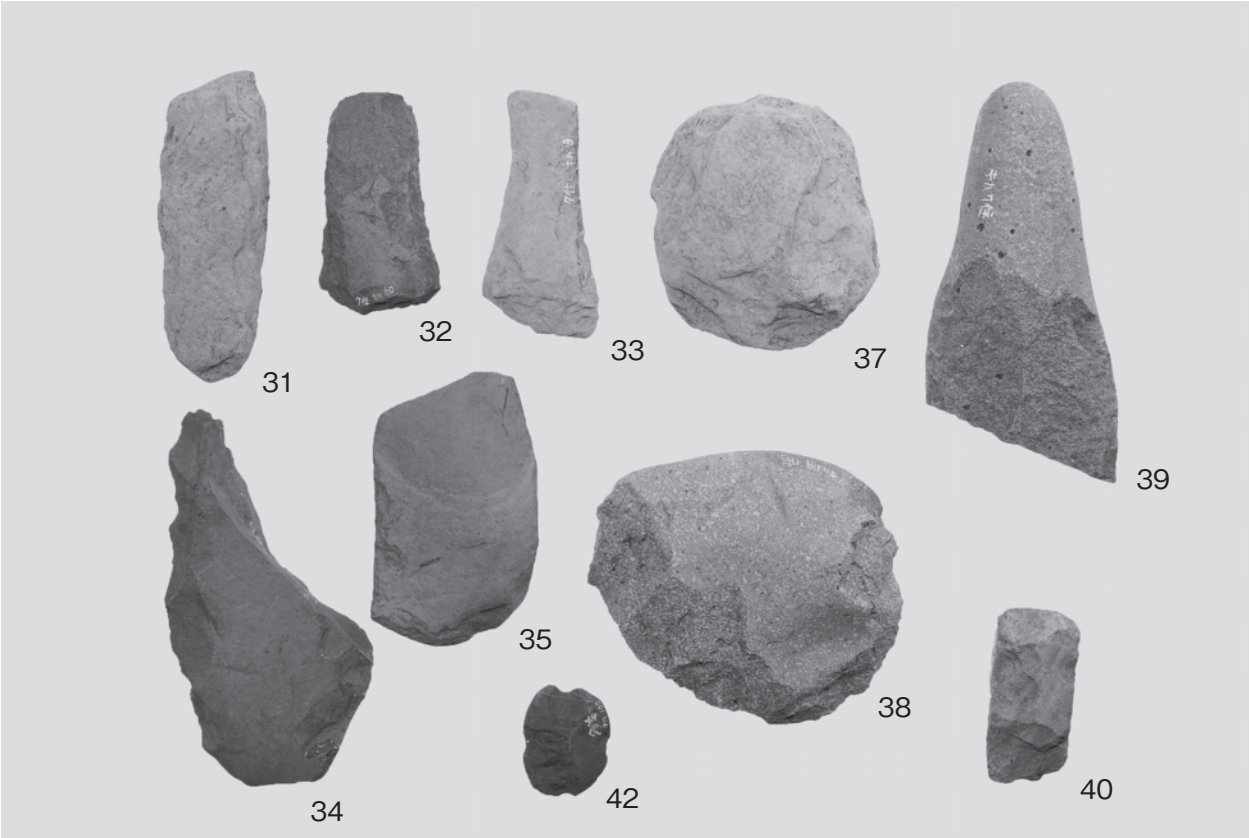
図版 44



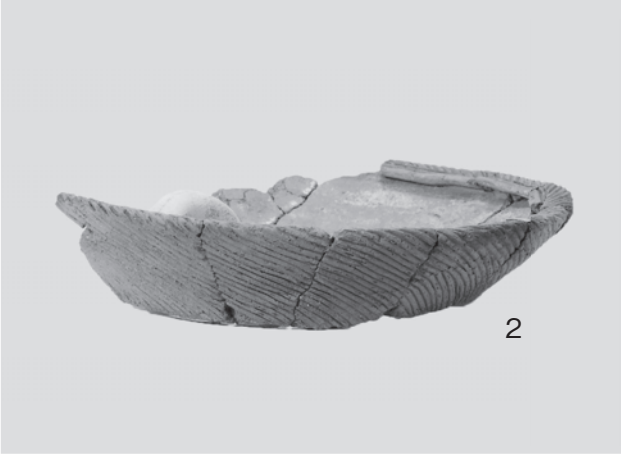


7 号住居址　土器

図版 45

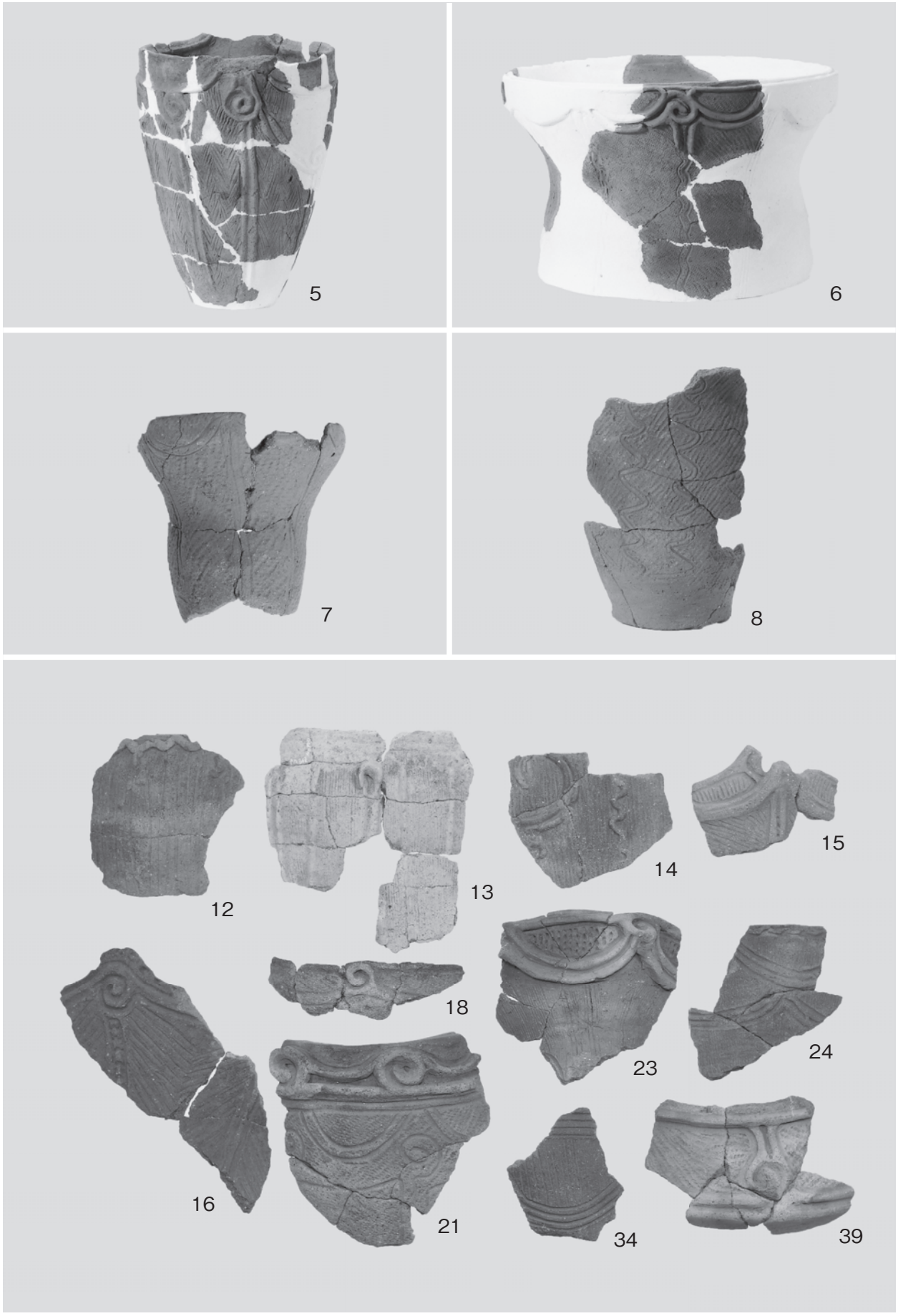


7 号住居址　石器



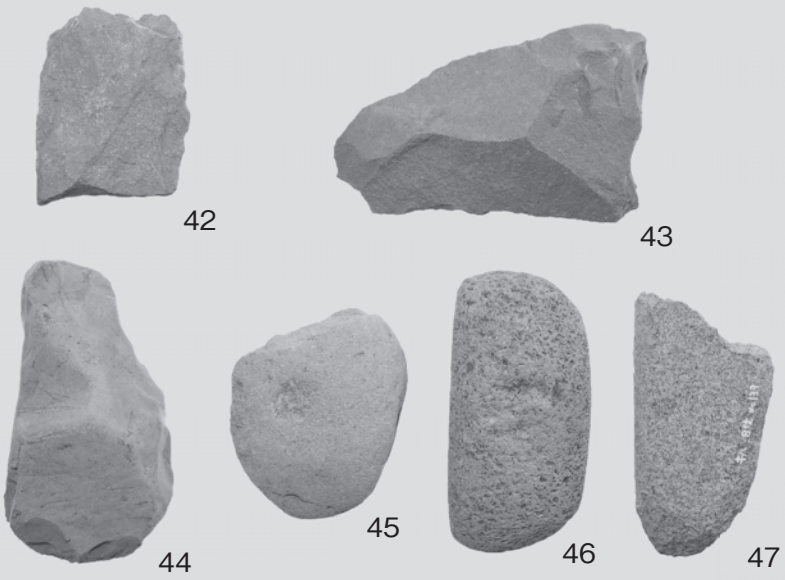
8 号住居址　土器

図版 46

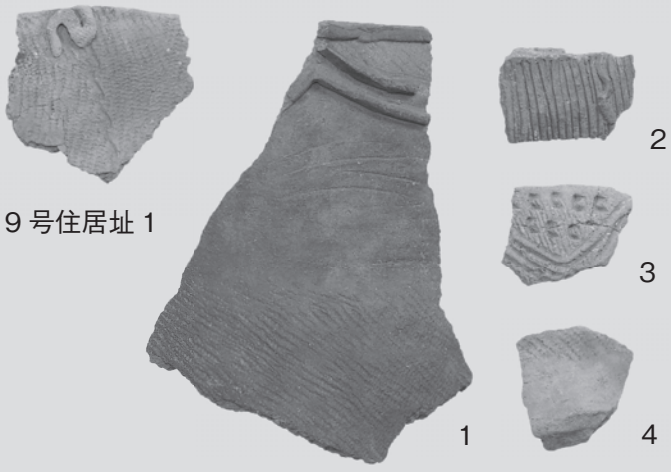


8 号住居址　土器

図版 47

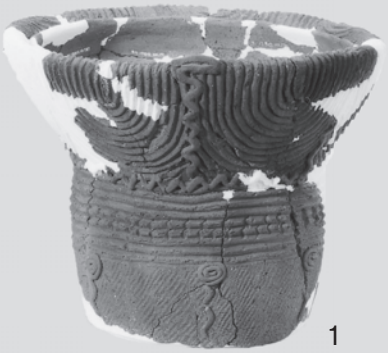


8 号住居址　石器

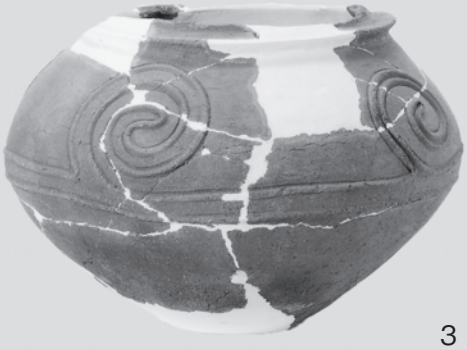


11 号住居址

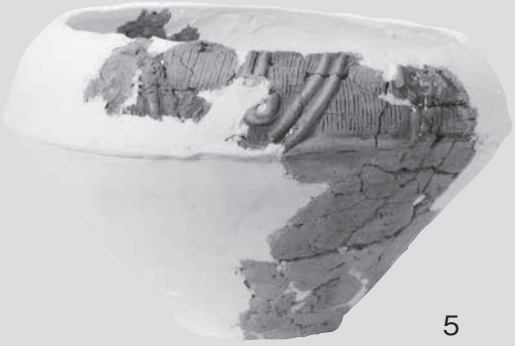
図版 48

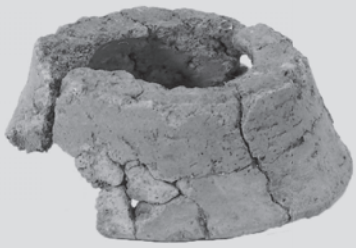

1

2


3

4


5

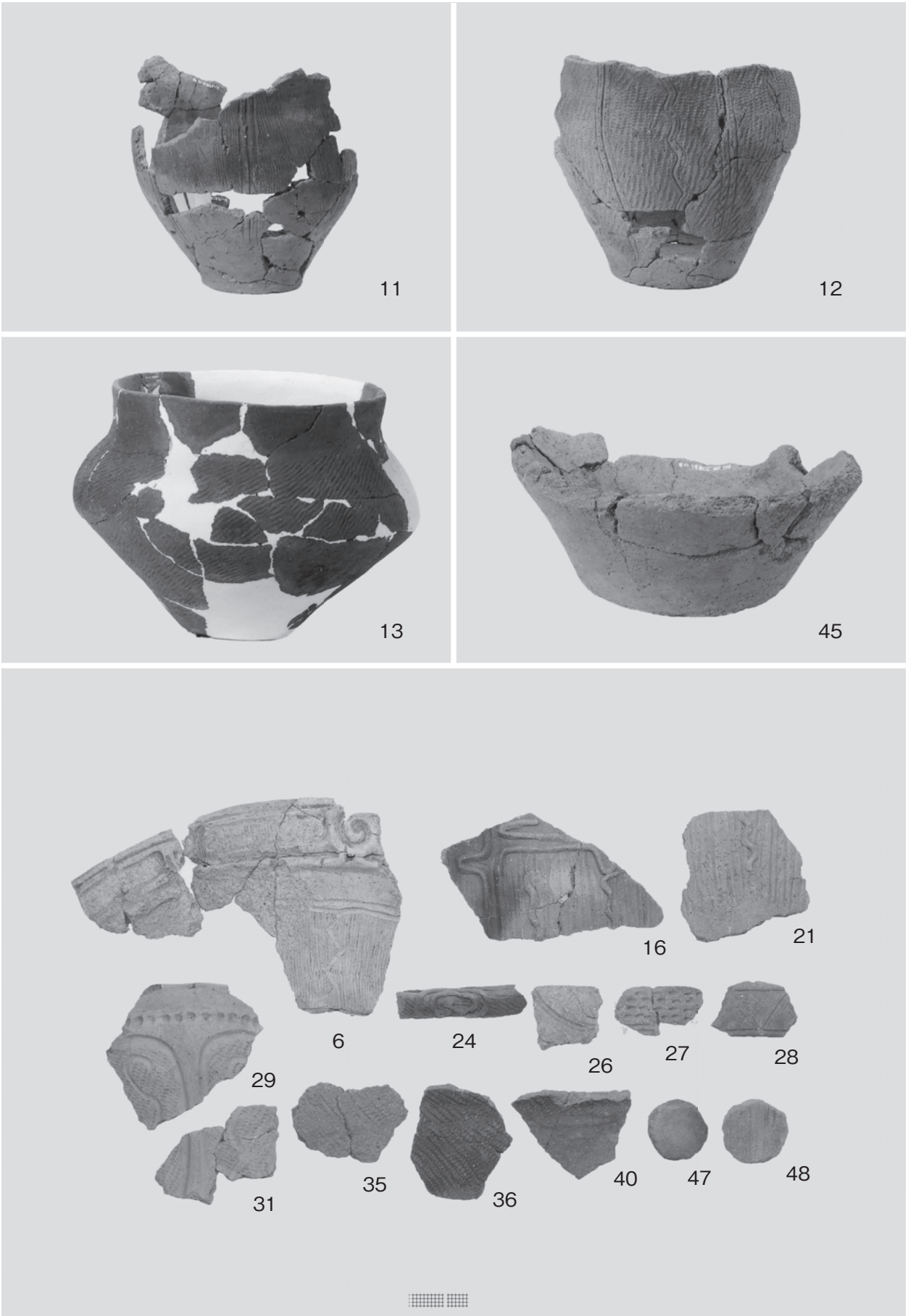

7

9

10

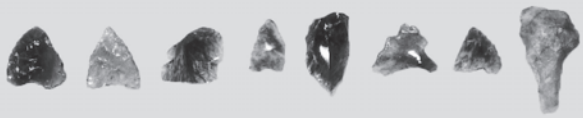
17 号住居址　土器

図版 49

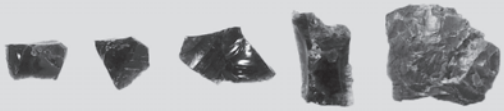


17 号住居址　土器・土製品

図版 50

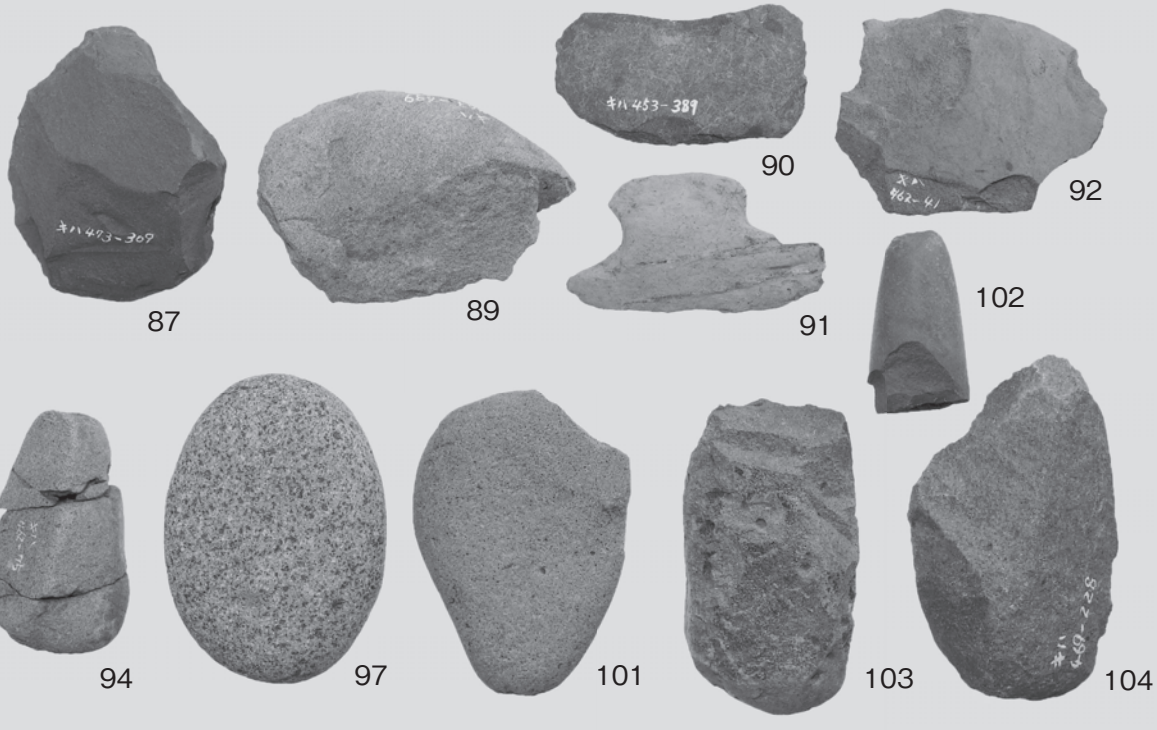


49 ～ 58



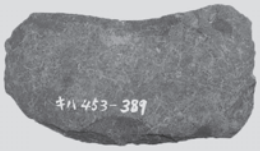
59 ～ 63

64 ～ 86



87

89



90

91

92

102

94

97

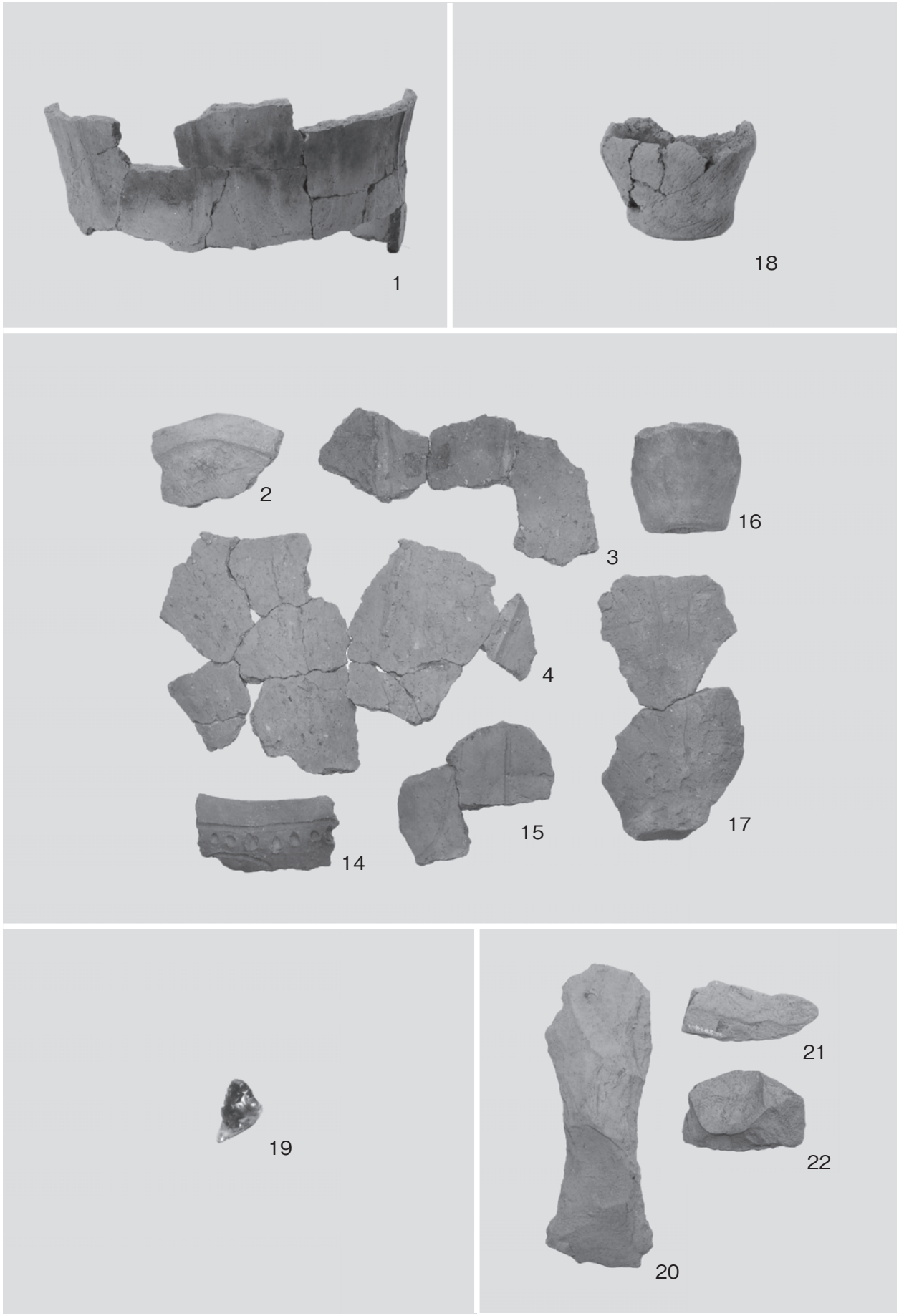
101

103

104

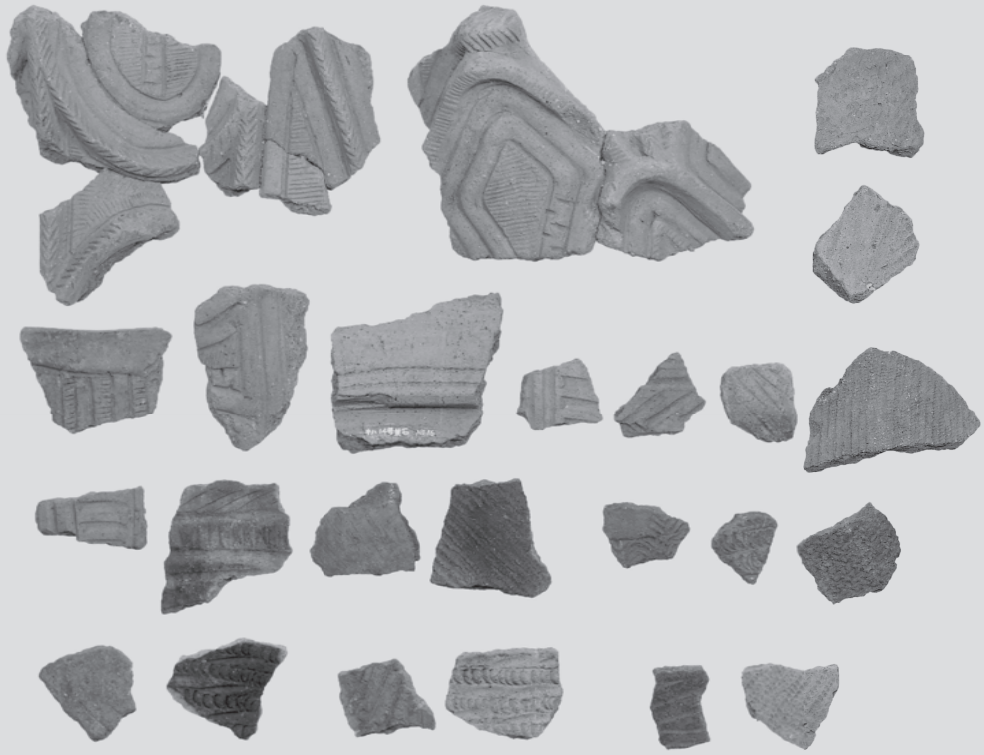
17 号住居址　石器

図版 51



敷石住居址　土器・石器

図版 52



集石土器

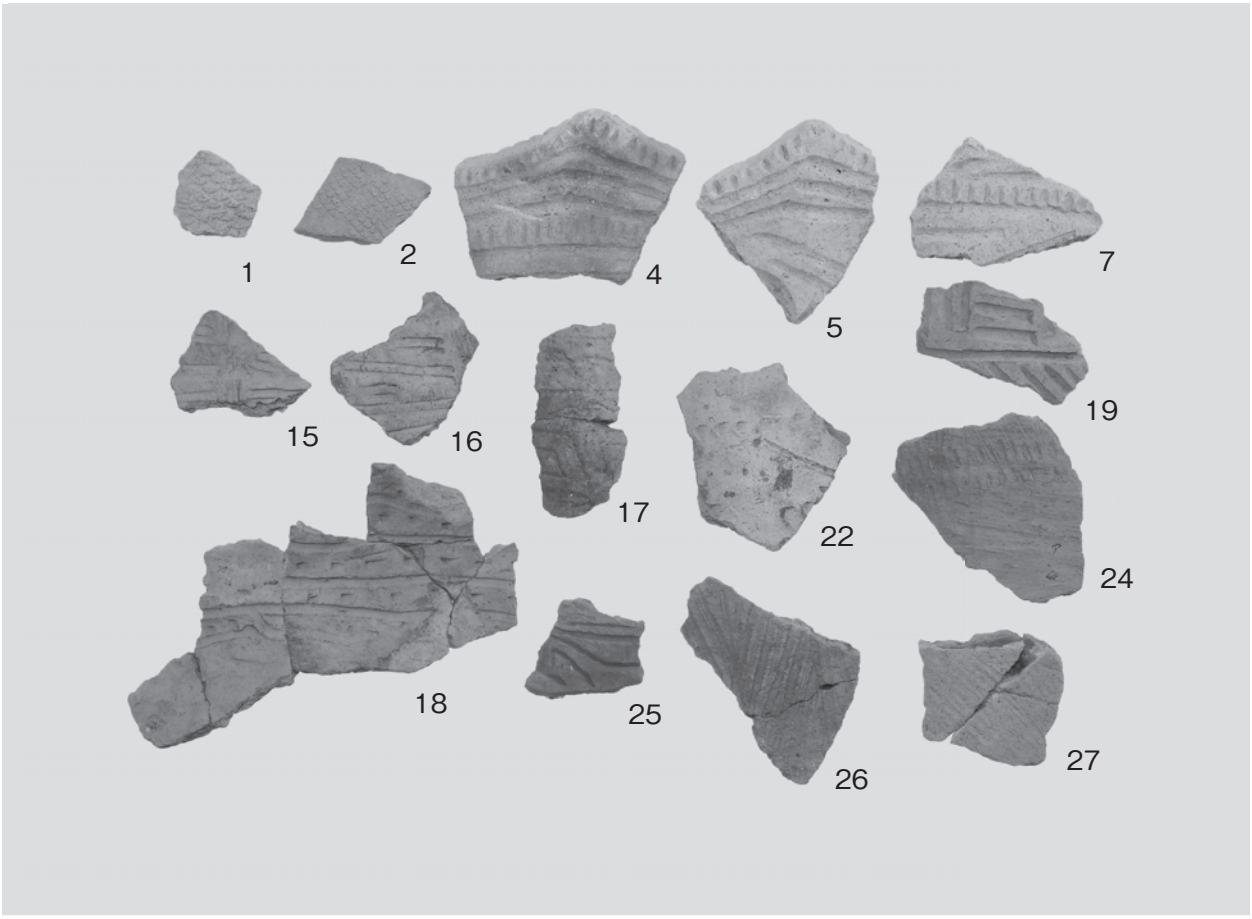
65 号集石　石器

1 号埋設土器 1

1 号埋設土器 2

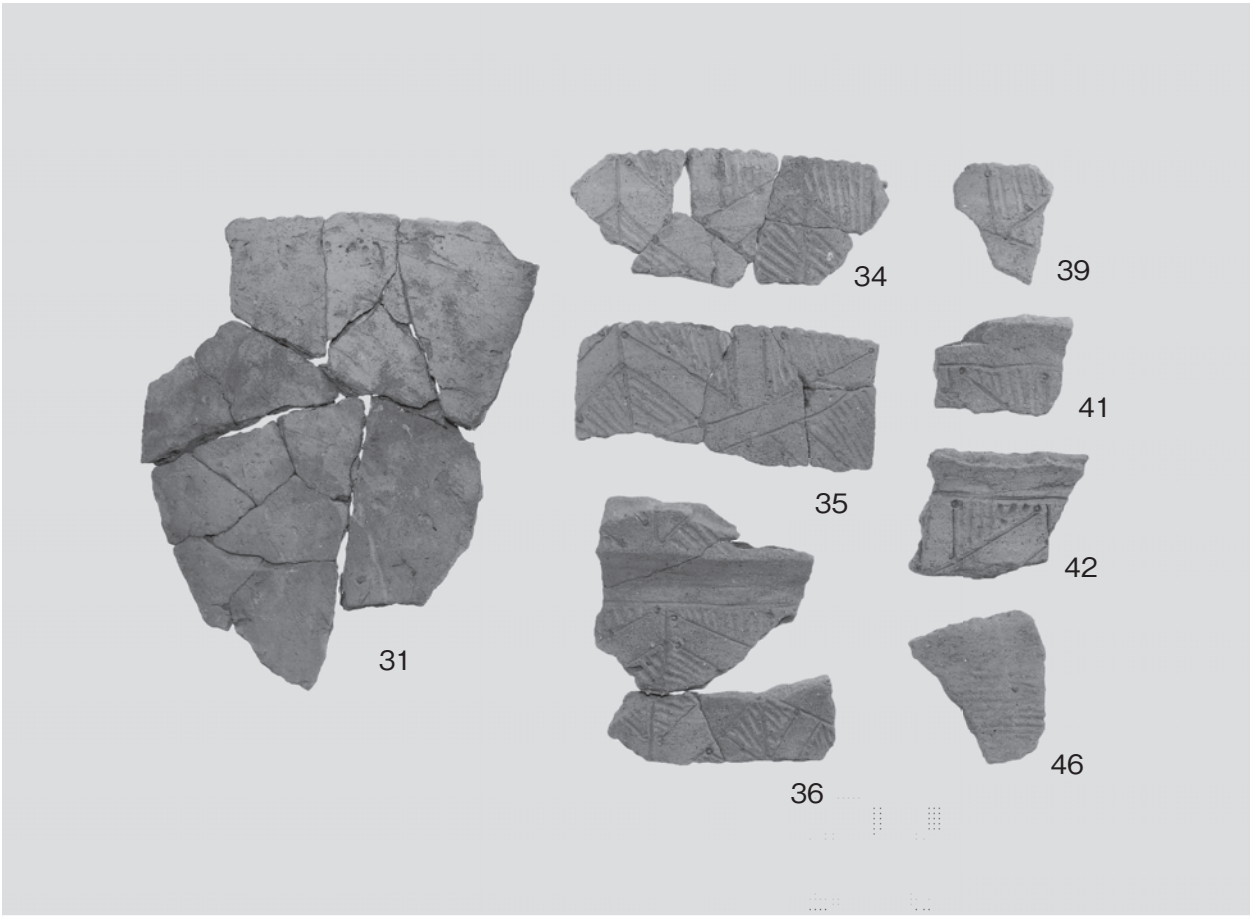
2 号埋設土器

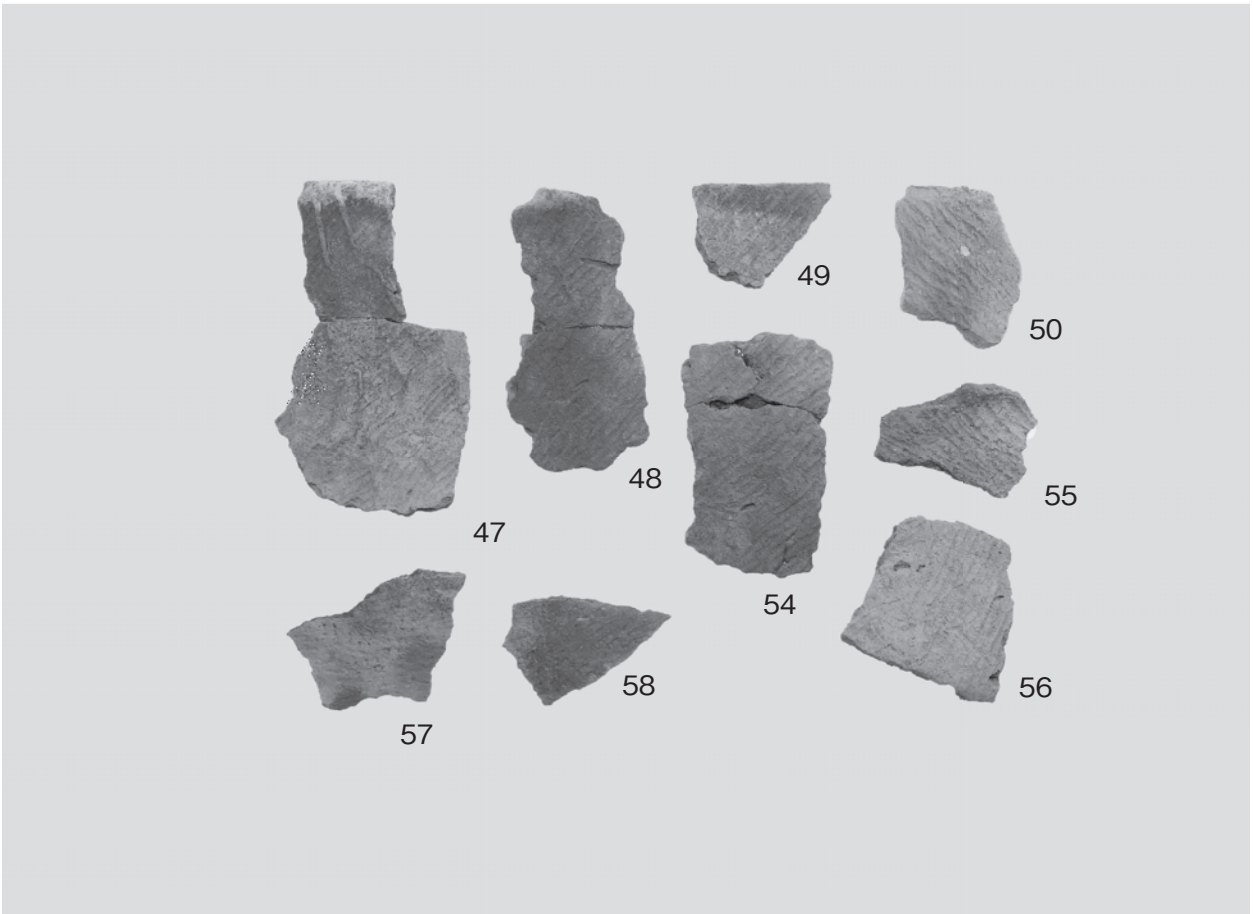
図版 53



遺構外出土土器

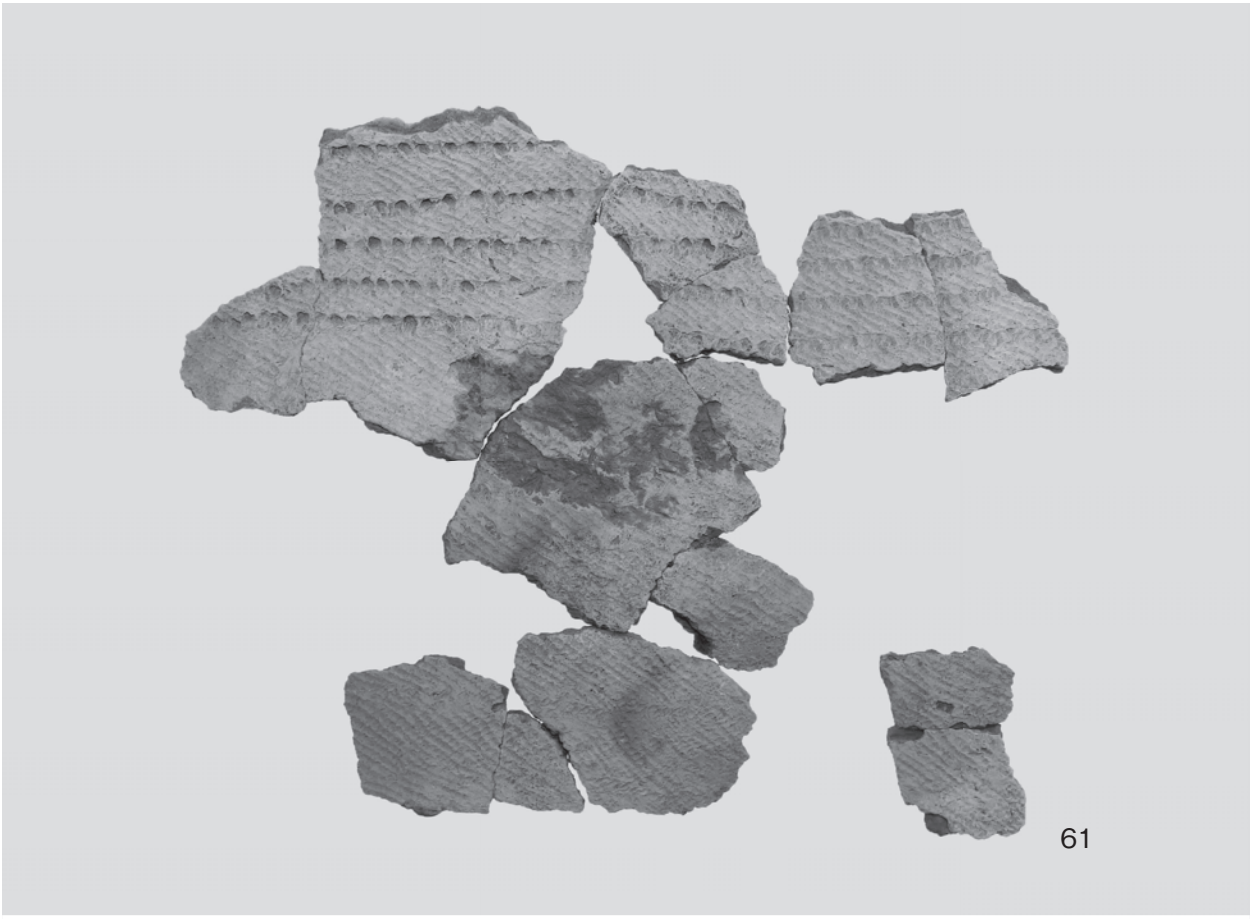
図版 54

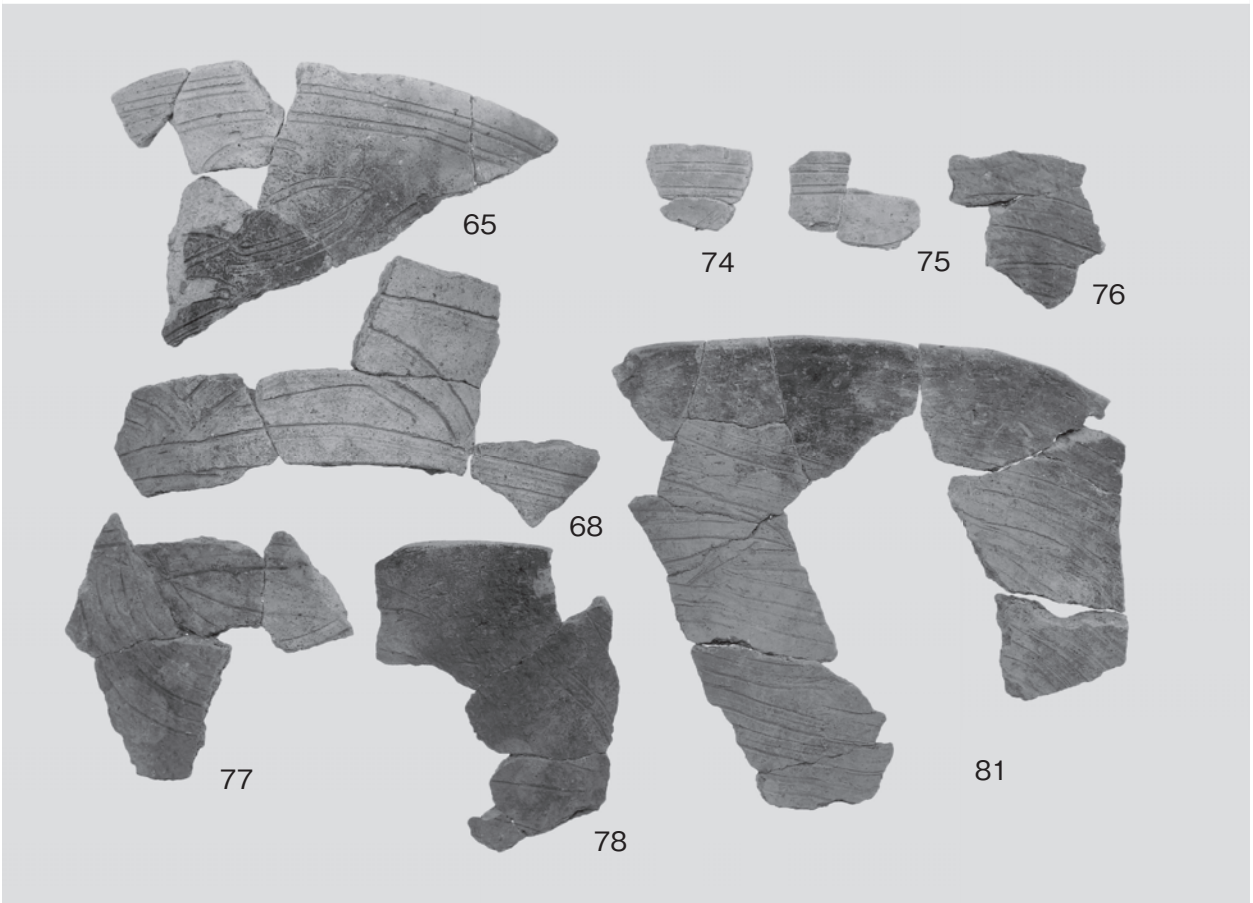




遺構外出土土器

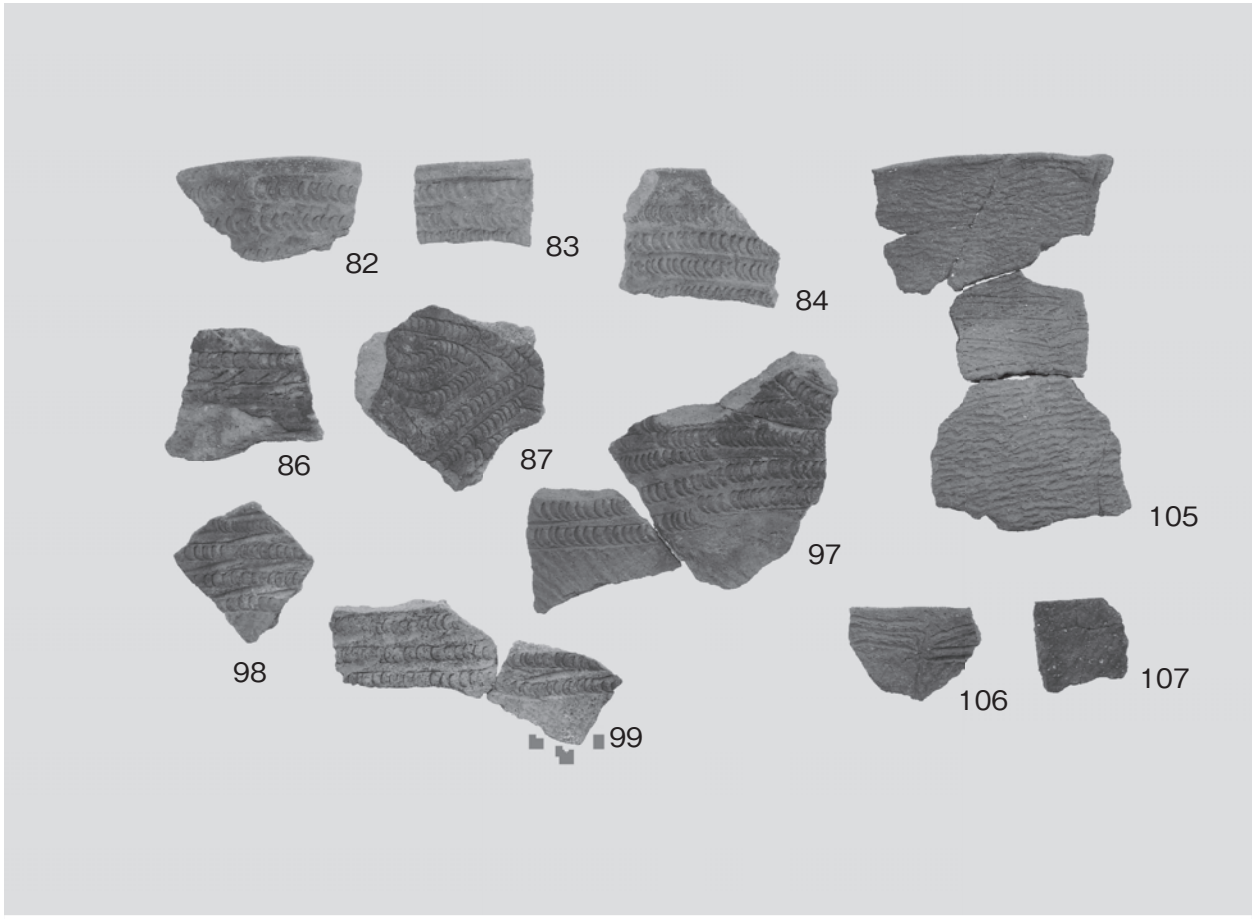
図版 55

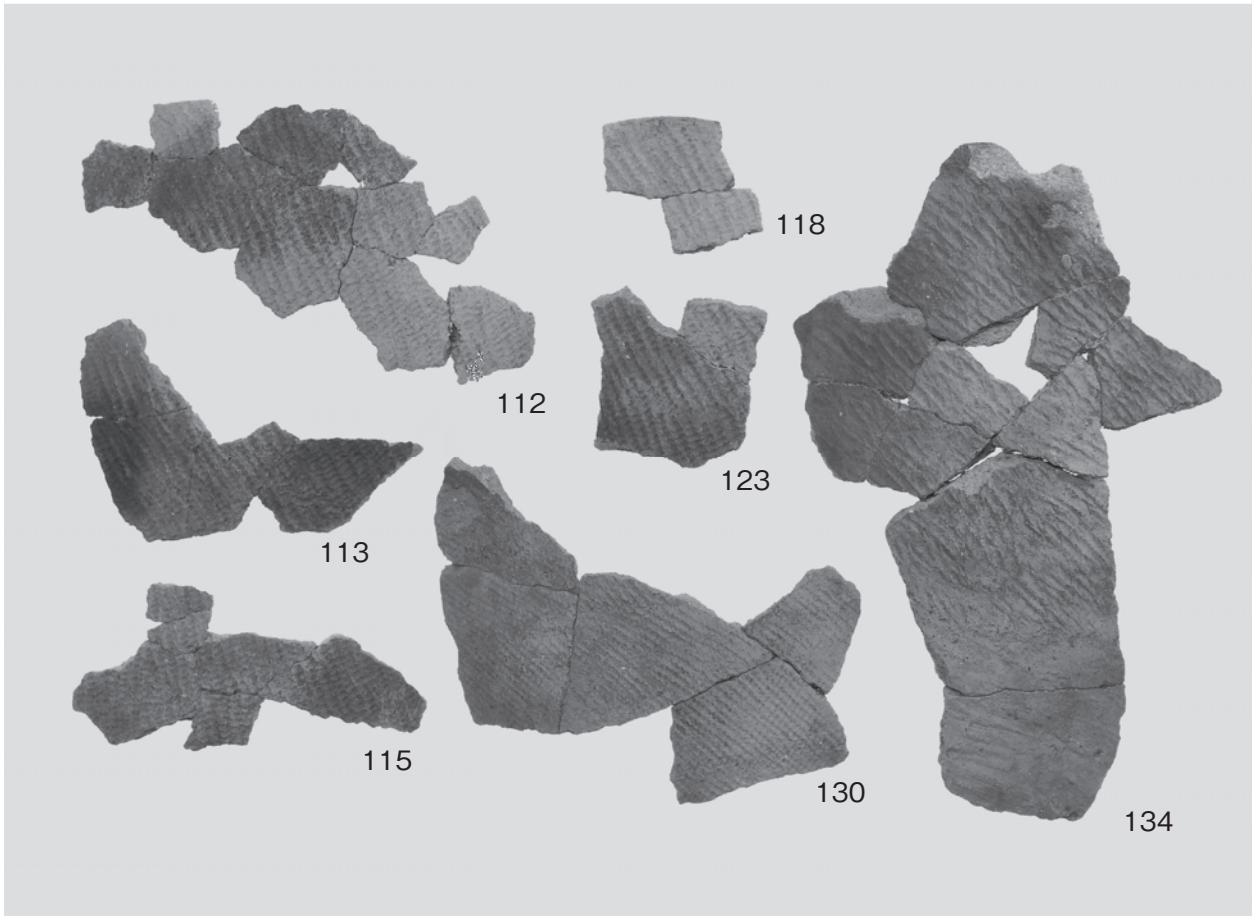




遺構外出土土器

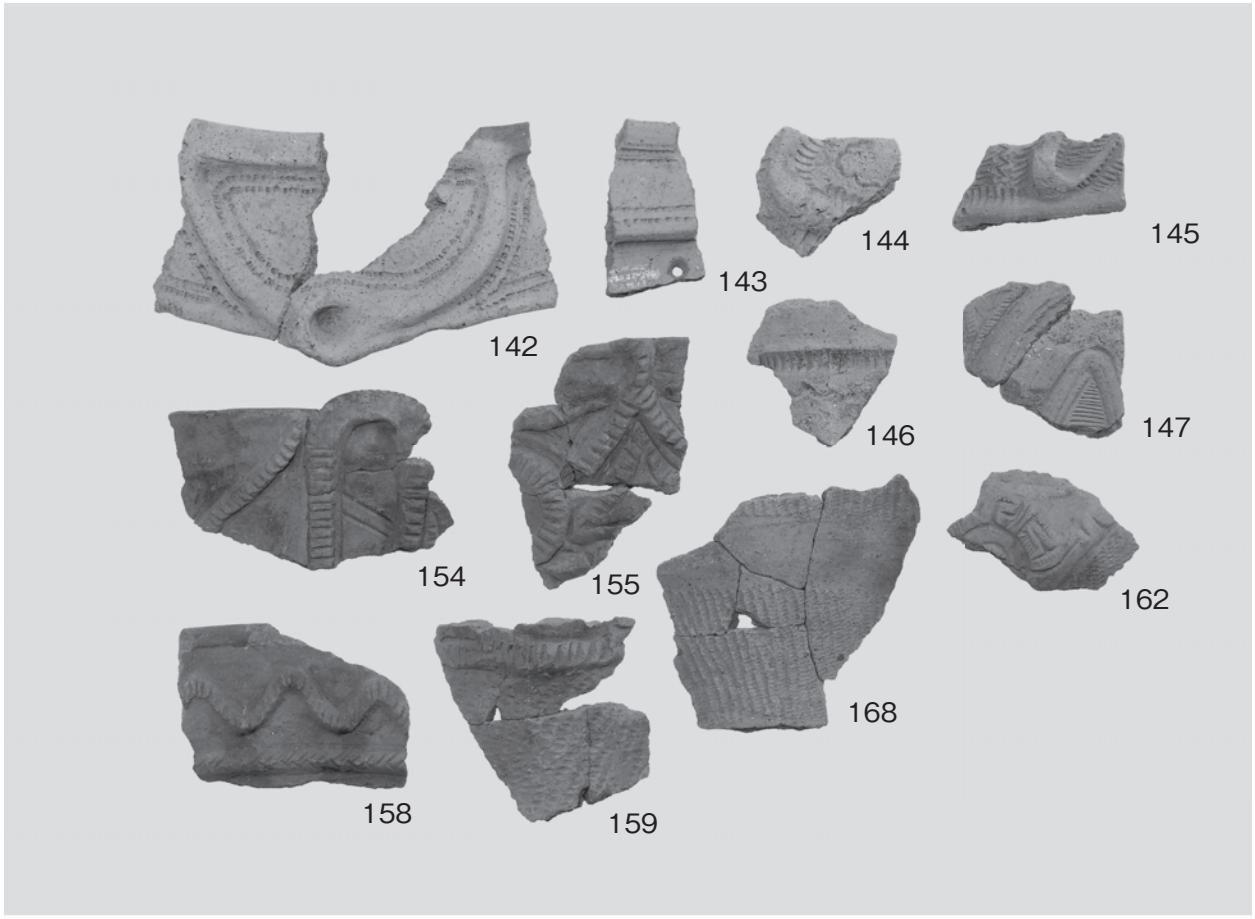
図版 56

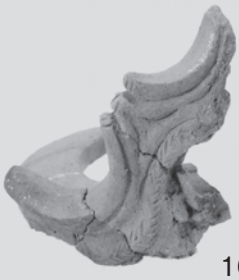


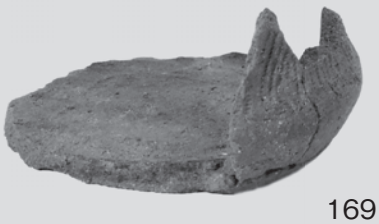


遺構外出土土器

図版 57

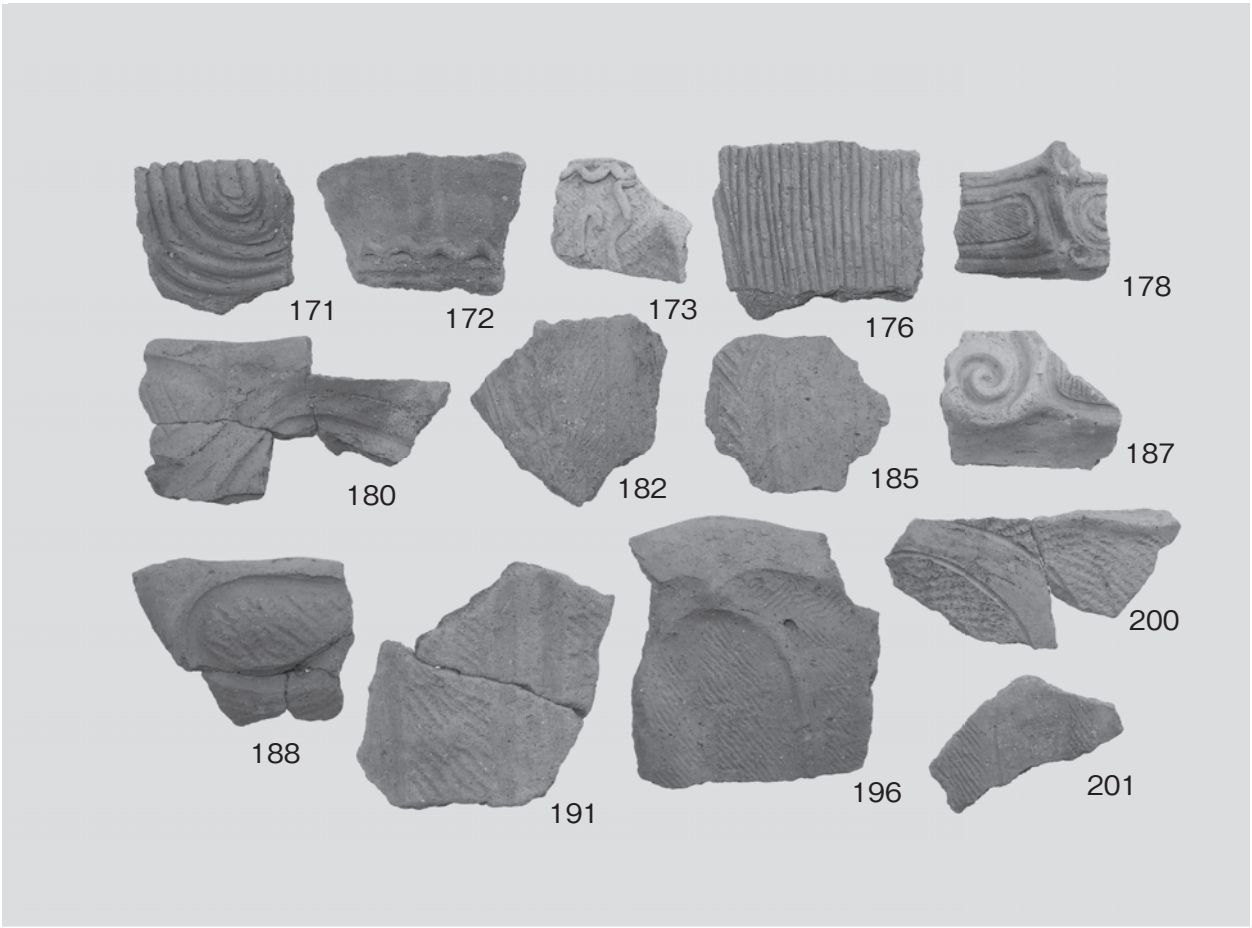






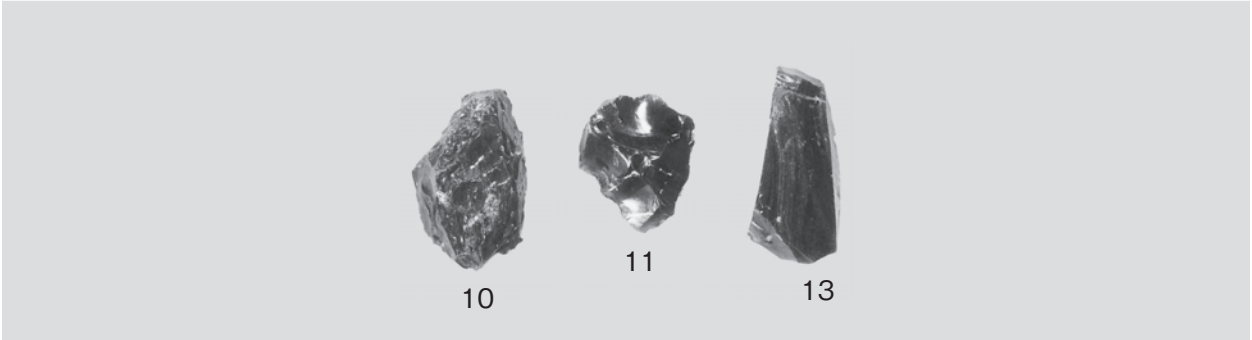
遺構外出土土器

図版 58



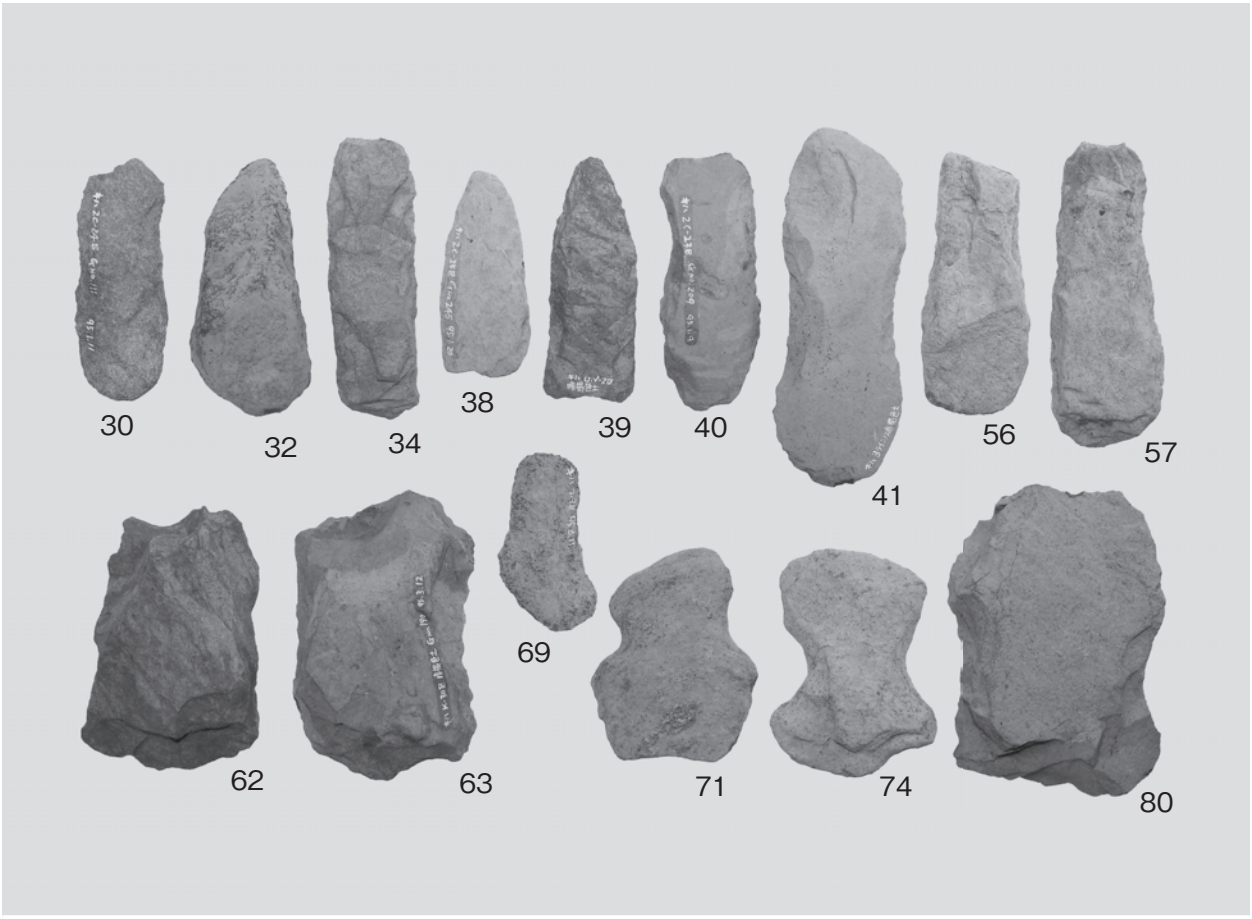
遺構外出土土器

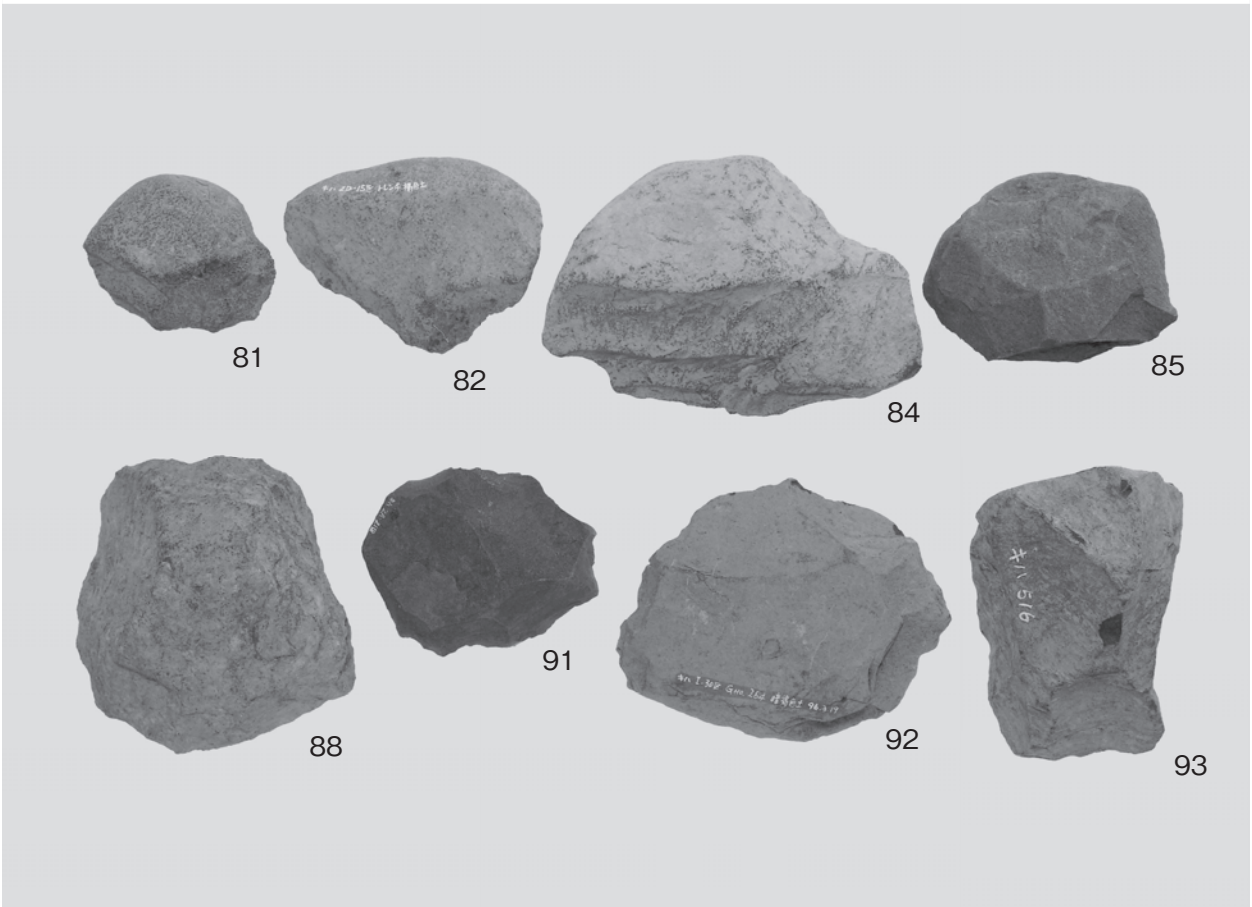
1 ～ 9



遺構外出土石器

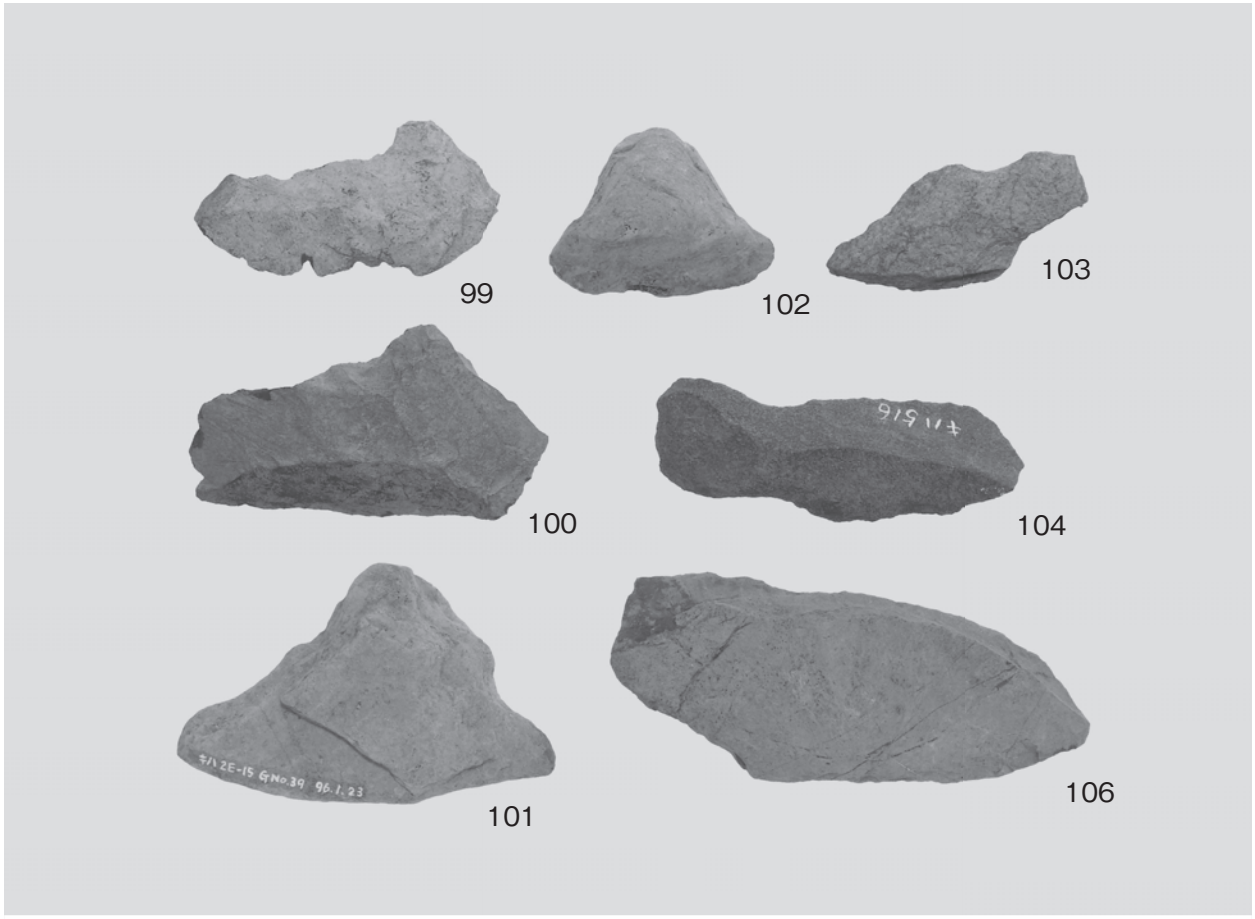
図版 59

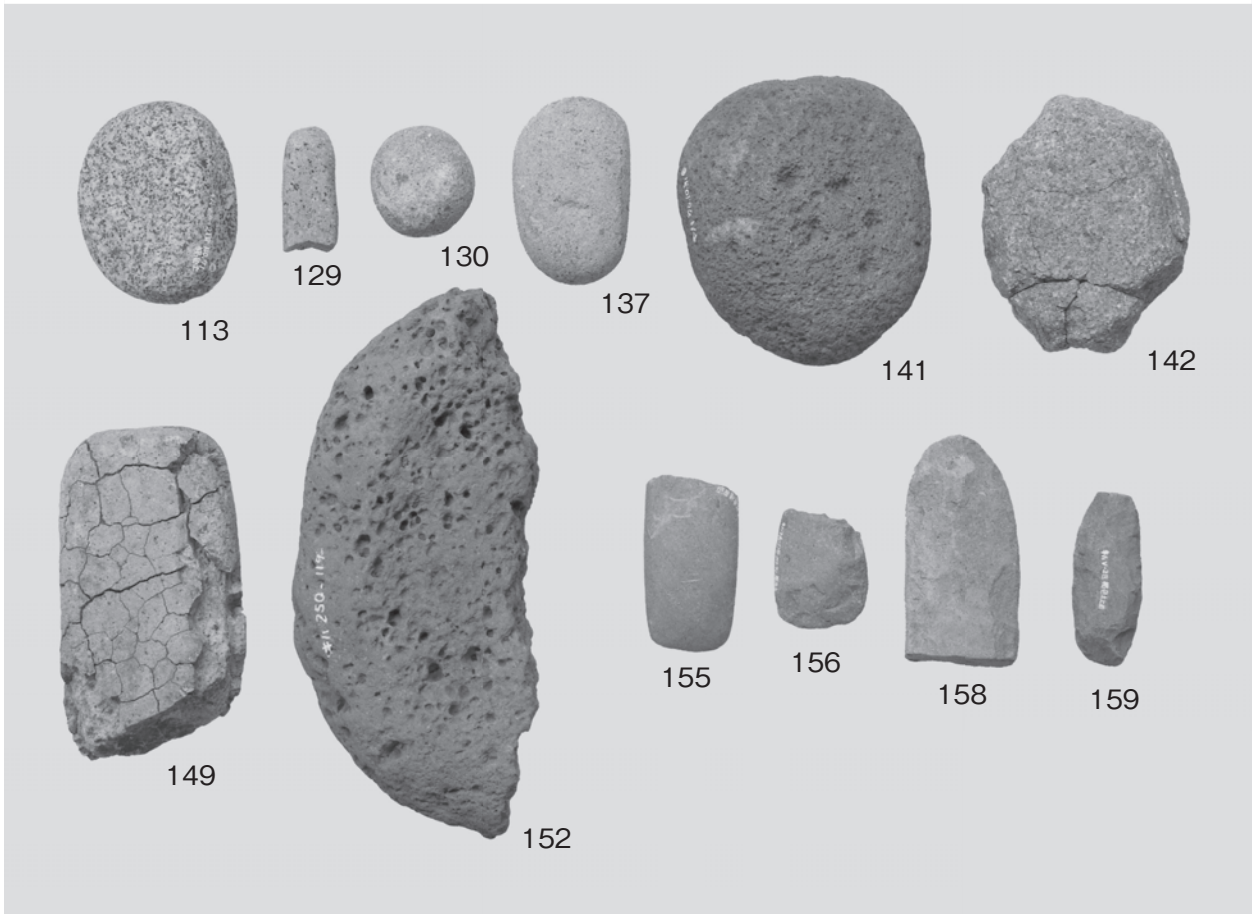




遺構外出土石器

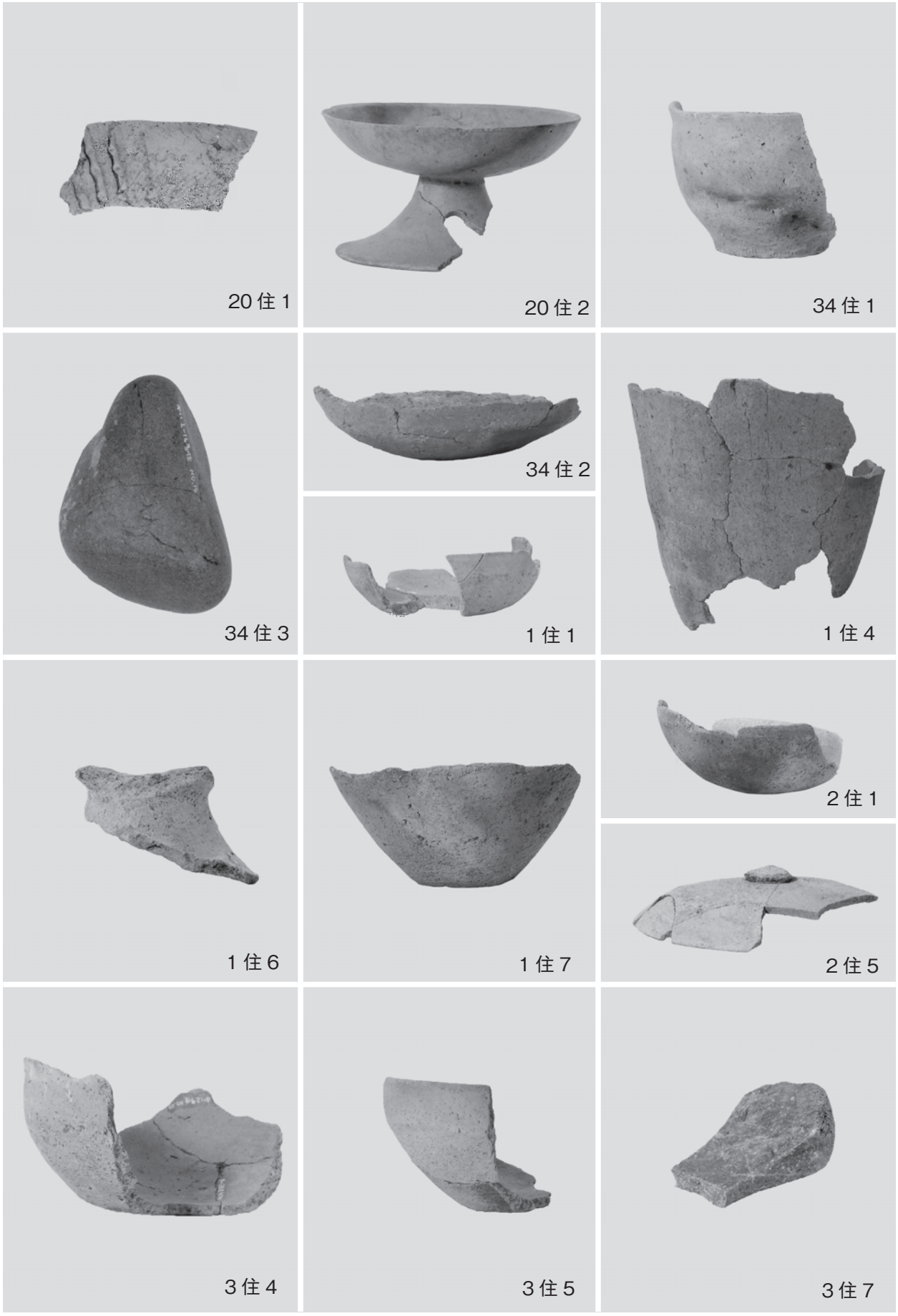
図版 60





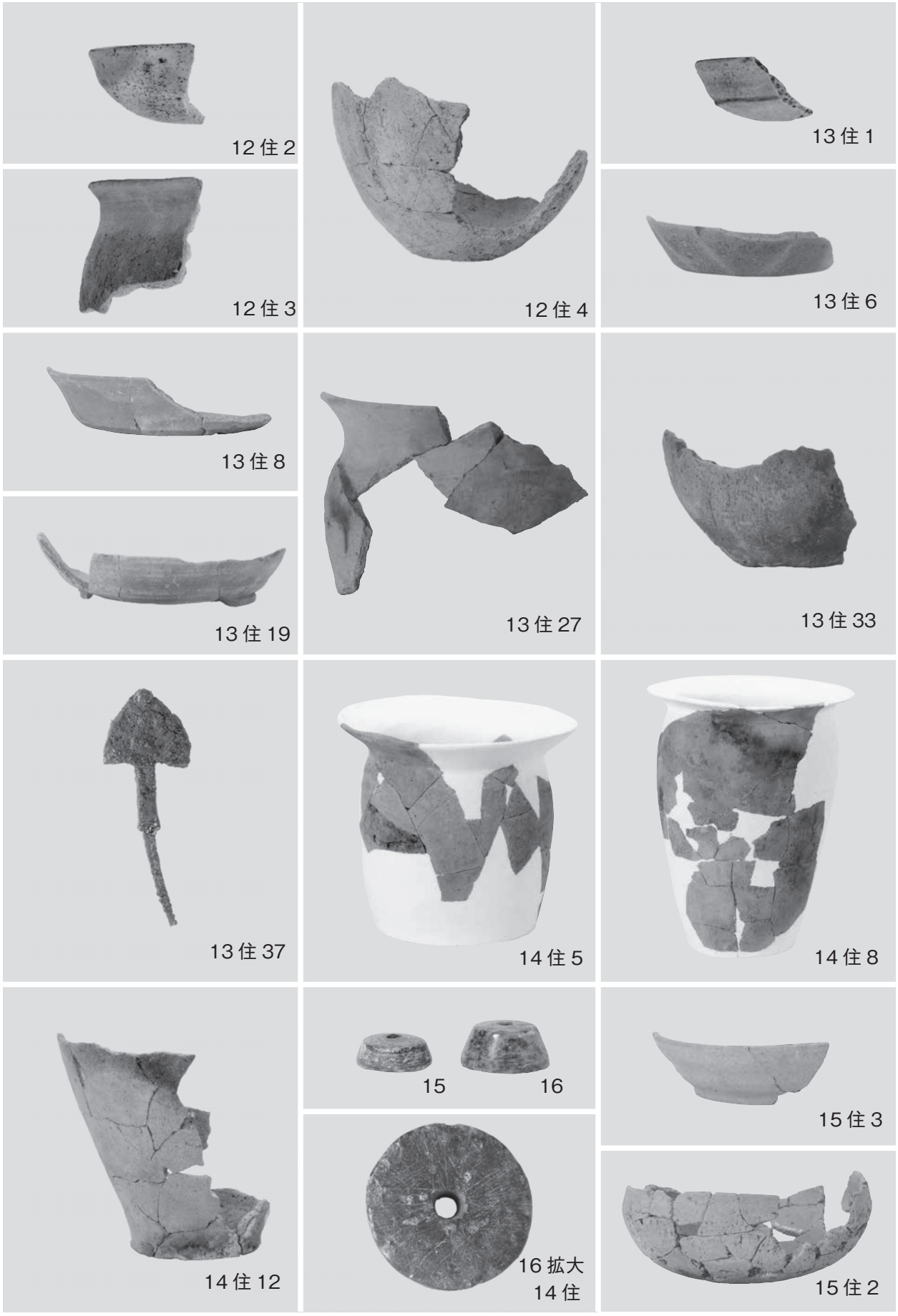
遺構外出土石器

図版 61



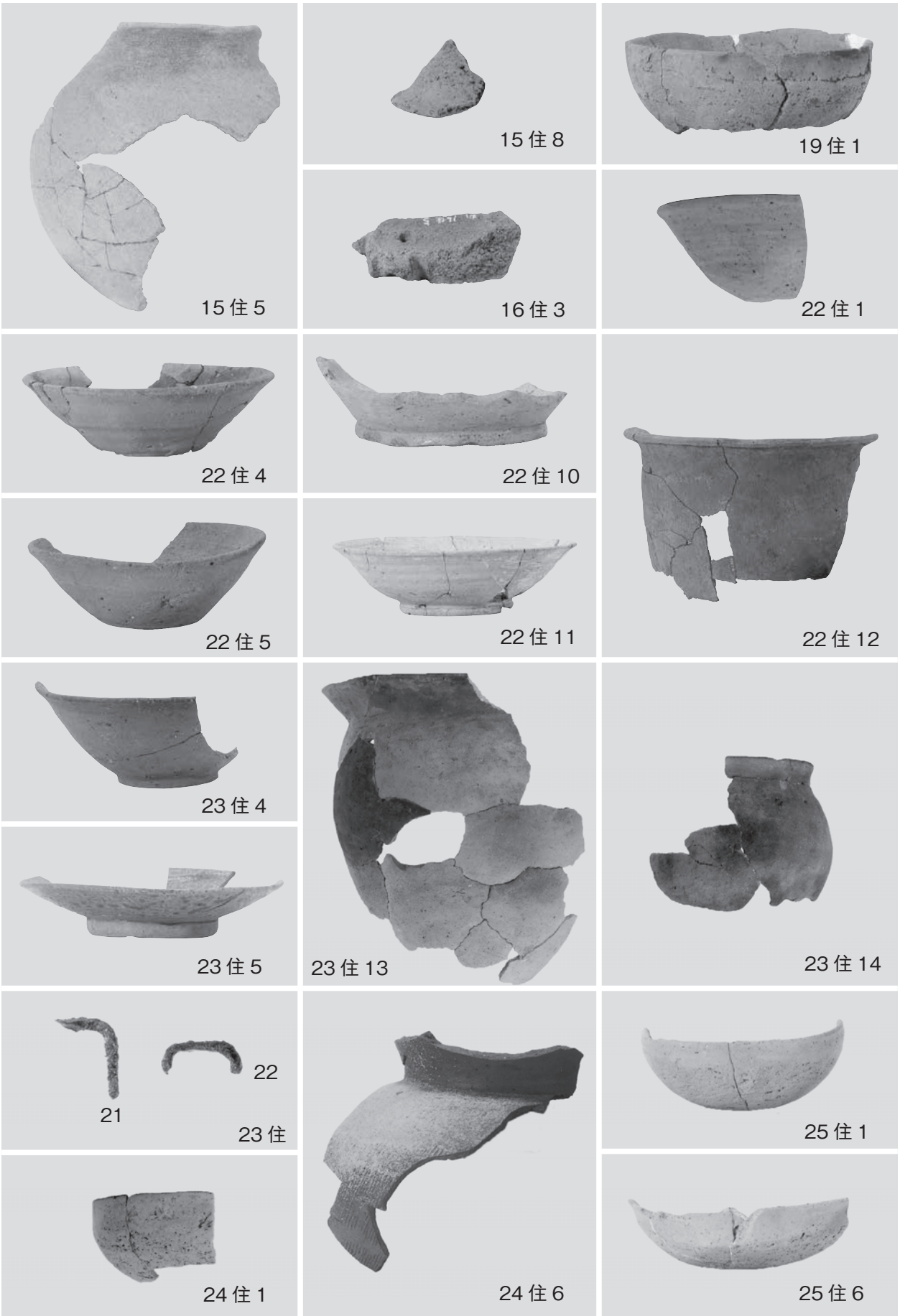
20 号・34 号、1 号～ 3 号住居址出土遺物

図版 62



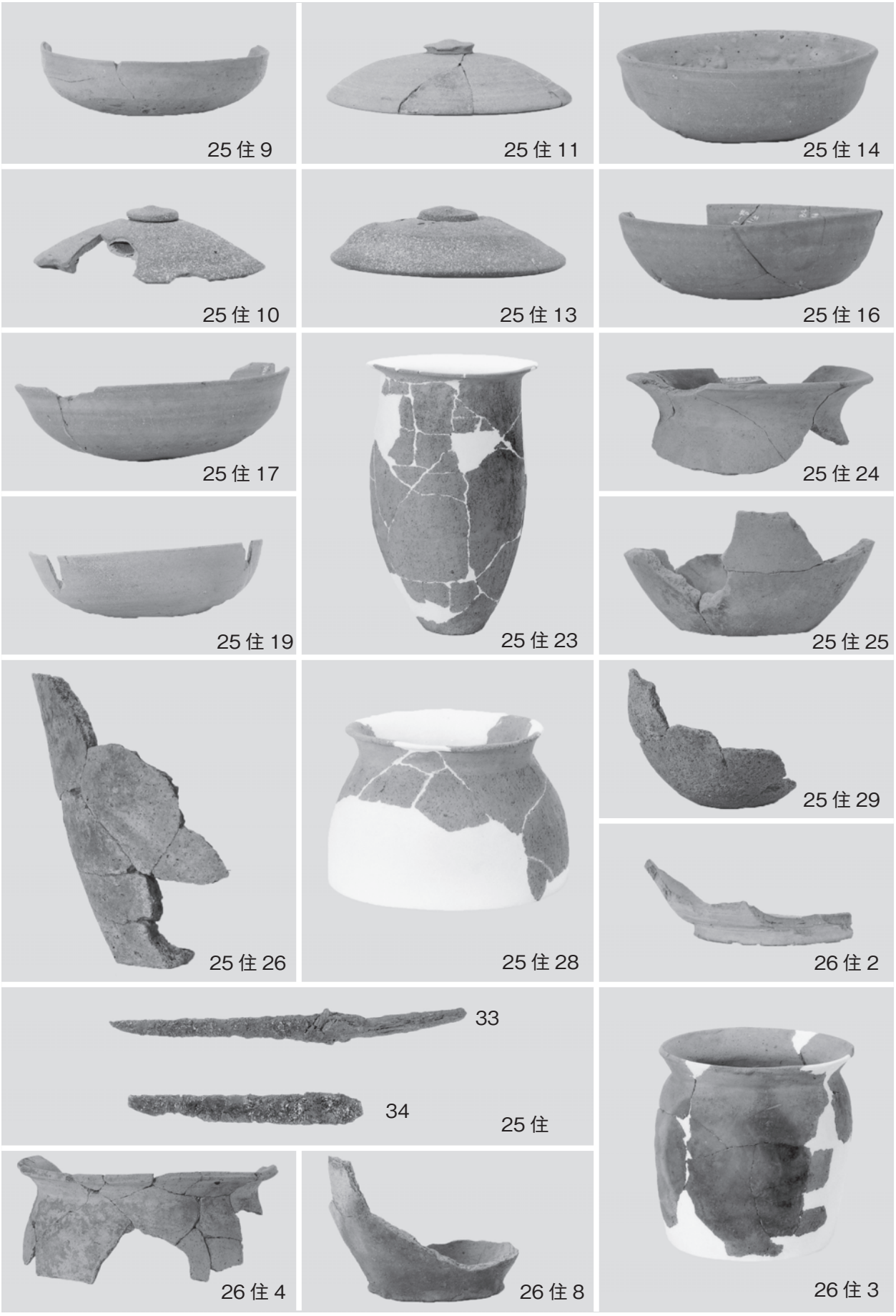
12 号～ 15 号住居址出土遺物

図版 63



15 号～ 25 号住居址出土遺物

図版 64

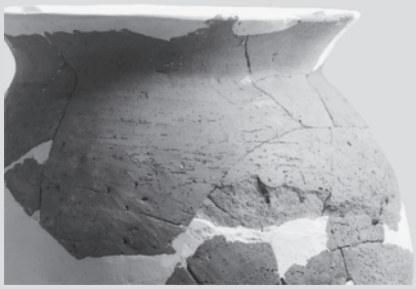


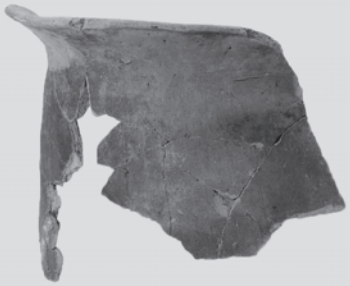
25 号～ 26 号住居址出土遺物

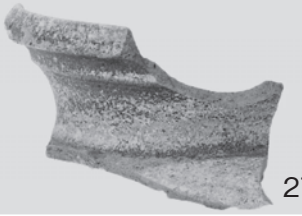
図版 65

27 住 6

27 住 7


27 住 7 拡大


27 住 10


27 住 14

27 住 17

27 住 18

28 住 1

28 住 2

28 住 3

28 住 3 拡大

29 住 1

30 住 2

30 住 15

30 住 1

30 住 6

27 号～ 30 号住居址出土遺物

図版 66

30 号～ 32 号住居址出土遺物、遺構外出土鉄製品

図版 67

ワラジムシ圧痕土器　　写真は山梨日々新聞社提供

報告書抄録

ふりがな	きつねはらいせき
書名	狐原遺跡
副書名	町道造成等に伴う狐原Ⅰ遺跡、狐原Ⅱ遺跡における埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	上野原市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第7集
編著者名	小西直樹
編集機関	上野原市教育委員会
所在地	〒409-0192　山梨県上野原市上野原3832　電話0554-62-3409
発行年月日	2015年3月25日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
きつねはら1いせき 狐原Ⅰ遺跡	やまなしけん 山梨県 うえのはらしあらた 上野原市新田	192121	5-1	35° 36′ 54″	139° 7′ 38″	19941012 ～ 19961031	4,200	記録保存調査
きつねはら2いせき 狐原Ⅱ遺跡	やまなしけん 山梨県 うえのはらしあらた 上野原市新田	192121	5-2	35° 36′ 57″	139° 7′ 40″	19941012 ～ 19960327 19961204 ～ 19970224	2,800	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
狐原Ⅰ遺跡 狐原Ⅱ遺跡	集落 散布地	縄文時代	竪穴住居址8 敷石住居址1 集石62　他	縄文土器、土製品、石器	縄文時代中期後半の竪穴住居址で石柱・石壇を検出
		弥生後期 ～ 古墳前期	竪穴住居址2	土器、石器	市内における該期の遺構は初例
		古代	竪穴住居址24 掘立柱建物址10 土坑149　他	土師器、須恵器、灰釉・緑釉陶器、石製品、金属製品	古墳時代後期の大型竪穴住居址や銅製飾り金具、平安時代の鉄製焼印を検出

要約

狐原Ⅰ遺跡及び狐原Ⅱ遺跡は山梨県最東端の遺跡で、相模川（桂川）沿いの河岸段丘に位置する。町道造成等に伴う5回の発掘調査によって多数の遺構・遺物が検出され、上野原市内で発掘された遺跡としては質量ともに豊富である。縄文時代では中期後半の集落や柄鏡形敷石住居址、早期から中期に推定される多数の集石遺構が検出された。周辺では類例が少ない古墳時代前期の竪穴住居址や古墳時代後期から奈良・平安時代の大規模な集落が明らかとなり、周辺地域が相模川上流域における開発拠点であったことを裏付けるものといえる。また、周辺に位置する塚場古墳群との関連や古代律令期における甲斐・相模国境域の様相を知るうえでも興味深く、周辺地域の土器編年等を考えるうえでも重要な成果が得られた。

上野原市埋蔵文化財調査報告書　第７集

狐　原　遺　跡

町道造成等に伴う狐原Ⅰ遺跡、狐原Ⅱ遺跡における埋蔵文化財発掘調査報告書

2015 年 3 月 25 日発行

編集発行　山梨県上野原市上野原 3832

上野原市教育委員会

印刷　カヤヌマ印刷